外塚遺跡

Tonozuka

下館市教育委員会

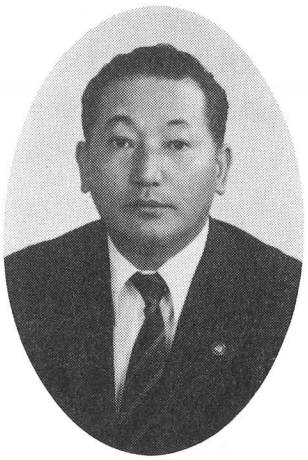
外塚遺跡

Tonozuka

下館市教育委員会

発刊によせて

下館市長
濱野　正



下館市は、ほぼ関東平野の中央に位置し、栃木県二宮町を起点として南に延びる舌状台地の突端にあります。この地方は、河川の流域地帯と台地の交錯する地点で古くからひらけ、鬼怒川をはじめ、小貝、五行、大谷の各河川台地には縄文、弥生の遺跡をはじめ数多くの出土品がみられます。

特に鬼怒川左岸台地女方地域一帯は縄文から弥生文化に至る考古学上の一大宝庫で、考古学界の注目の遺跡となり「女方式」と名づけられたほど有名な遺跡でもあります。

しかしながら最近の急激にすすむ各種の開発に伴い、なかには未調査のまま破壊されてゆく貴重な遺跡が数多くあると聞いております。遺跡は私達の祖先の生活や文化の正しい理解のために欠くことのできない貴重な遺産であり、将来の文化創造の基礎をなす重要なもので、かけがえのない国民的財産ということができます。このため、現存する遺跡を保護し、保存し、活用をはかることはもちろん、これを正しく後世に伝えることは私達の重大な責務であると思います。

このたび発掘調査の行われた「外塚遺跡」は、神明地区土地区画整理事業の工事中発見されたもので、未確認の遺跡でありましたので遺跡の実態をつかむべく、緊急調査を実施して記録の保存を図ったものであります。

ここに、この発掘調査の結果をまとめ、外塚遺跡発掘調査報告書として発刊の運びとなりました。

これもひとえに関係者各位のご協力の賜物と心から深く感謝の意を表します。

この報告書によって、下館市及び周辺の縄文時代の研究に光をあて、郷土の歴史の一端が理解されると同時に、地域の豊かな歴史的、自然的環境をまもるため十分活用されますことをご期待申し上げます。

序

外塚遺跡発掘調査会会長
下館市教育委員会教育長
塚越喜一郎

昭和56年8月、外塚遺跡の発掘調査を行いました。予想を非常に大きく上まわる多数の出土品がありました。恐らく他の地域の調査でも、こんなに多く出土したのは珍しいのではないかと思います。そのうえその出土品が非常に細かく割れた破片が多く、また異なる時代のものが複雑に重なり合っていました。とうぜん発掘調査は限られた期間の中で、限られた人員によって進めなければなりませんので、調査員の先生方やその協力者の皆さん方には大変なお骨おりをおかけしました。また出土品が多数でしかも複雑であったため、その整理や拓本とり、写真撮影などに相当長期の日月が必要でした。そしてようやく原稿や図版も出来上り、報告書刊行の運びとなったわけであります。

この間に，この事業の推進役であり、その中心となってお骨おりいただいた主任調査員の長岡芳氏が、とつぜん病魔におかされ、御逝去なさるという不幸に直面いたしました。長岡芳氏の御逝去は措しみてもなお余りあり、本市にとっても誠に残念なことであり、謹しんで御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

こうした不幸があったにもかかわらず、今橋浩一、川崎純徳、宮内良隆、鈴木加律子並びに高橋伸子の諸先生方には緊密な連繋のもとに真剣な御努力を続けて、みごとに完成していただいたわけであります。心から厚く御礼申し上げます。

この発掘調査の目的は、外塚遺跡の保存と活用にあるわけですが、その一つはこの報告書による記録の保存と出土品そのものの保存であり、二つにはこれらを研究資料として当地方の歴史を解明することであり、その三つはこれらを教育資料として活用することであります。何れも文化的福祉都市を標ぼうする本市にとって極めて重要なことであります。幸いこの報告書も先生方のお骨おりによって、充分な検討のうえ、相当詳細に述べられておりますし、また質量ともに豊富な出土品も市教育委員会で保管しておりますので充分活用していただきたいと思います。

最後に改めてお骨おりいただいた先生方始め御協力をいただいた方にお厚くお礼申し上げます。

例　　言

1. 本書は、下館市都市計画部による外塚神明地区都市計画事業の工事中、故長岡芳氏によって発見された外塚遺跡の調査報告である。
2. 調査は、下館市教育委員会が外塚遺跡調査会に委託して実施された。発掘調査は昭和56年8月9日から8月26日までの18日間、遺物整理は土器の洗浄作業を昭和57年4月1日から5月29日、注記・拓本・土器の復元作業は昭和57年6月15日から7月31日。これらの作業期間、多くの下館市民の奉仕・協力をいただいた。
3. 本報告書の図版作成及び執筆は、以下の通り分担して行われた。

Ⅰ	遺跡論	今橋浩一
Ⅱ	縄文時代中期末葉・後期前葉の土器	今橋浩一
Ⅲ	縄文時代後期中葉の土器	宮内良隆
Ⅳ	縄文時代後期後葉の土器	長岡　芳
Ⅴ	縄文時代晩期の土器	鈴木加津子
Ⅵ	土製品	川崎純徳
Ⅶ	石　器	高橋伸子
Ⅷ	総　括	今橋浩一

なお、縄文文化についての考え方や用語の使い方に関しては、各執筆者の意思を尊重して統一を控え、図版の構成や縮尺なども執筆者に委ねた。

4. 本書には、下館市教育委員会が下記の研究者に執筆を依頼し、その成果を委託研究として収録している。

先史地理学……立命館大学大学院地理学専攻　大西智文　（昭和59年12月受理）

5. 昭和59年11月2日に逝去された長岡芳氏の原稿は、長岡氏の入院中春子夫人によって整理され、下館市教育委員会に届けられた。縄文後期後葉の土器に関する論考は、真壁町史編さん委員会の好意により、真壁町史「考古資料Ⅱ」（長岡芳著）より転載させていただいた。
6. 発掘調査並びに本報告書の作成にあたっては，下記の機関や多くの方々に協力や助言を賜わった。茨城県教育庁文化課、川上博義、斉藤弘道（茨城県歴史館）、西村正衛、金子浩昌（早稲田大学）、早川智明（埼玉県文化財保護課）、井上肇（埼玉県立博物館）、宮田毅（群馬県太田市教育委員会）、渡辺明（那珂町史編さん委員）、大野薫（大阪文化財センター）、土橋理子（橿原考古学研究所付属博物館）、阿部嗣治（東大阪市教育委員会）、大塚達朗（東京大学大学院）、鴨志田篤二、（勝田市教育委員会）、柳沢清一、高橋龍三郎、車崎正彦（早稲田大学考古学会）、鈴木正博、長岐勉、寺島和秀、今橋真理子（貝塚文化研究会）、宮内照夫（竜ヶ崎市川原代小学校）
7. 外塚遺跡より出土した遺物は、遺物整理終了後下館市教育委員会によって管理されている。

目　　次

発刊によせて……下館市長　濱　野　　正……　i
序……下館市教育長　塚　越　喜　一　郎……　ii
例　　言……　iii

Ⅰ　遺跡論……　1
1　調査への経緯……　1
2　遺跡周辺の地勢……　3
3　発掘調査の概況……　4

Ⅱ　縄文時代中期末葉・後期初頭の土器……　19
1　中期末葉の土器……　19
2　後期初頭の土器……　22

Ⅲ　縄文時代後期中葉の土器……　81

Ⅳ　縄文時代後期後葉の土器……121

Ⅴ　縄文時代晩期の土器……221
1　出土層位の概要……221
2　出土土器の概要……221
3　出土土器の解説……222
4　まとめ……260

Ⅵ　土製品および土偶・土版……263

Ⅶ　石器……273

Ⅷ　総括……309

委託研究—外塚遺跡の地理的環境の復原—……大　西　智　文……311
後記……317
調査会の組織……318
写真図版……321

挿図および図版目次

挿　　図

第 1 挿　A区調査以前の近景…… 1
第 2 挿　A区調査開始…… 1
第 3 挿　A区d-4グリッド…… 2
第 4 挿　B区の水没状態…… 2
第 5 挿　C区調査中の湧水状態…… 2
第 6 挿　A区表土除去作業風景…… 4
第 7 挿　晩期注口土器出土状態…… 5
第 8 挿　器台部出土状態…… 5
第 9 挿　粗製土器出土状態…… 5
第10挿　安行Ⅰ式土器出土状態…… 8
第11挿　新地式注口土器出土状態…… 8
第12挿　新地式注口土器出土状態…… 9
第13挿　粗製土器出土状態…… 9
第14挿　加曾利B1式土器出土状態 …… 9
第15挿　d-4グリッド土器出土状態…… 10
第16挿　加曾利B1式土器出土状態 …… 10
第17挿　加曾利B1式並行土器出土状態 … 10
第18挿　加曾利B1式粗製土器出土状態 … 11
第19挿　加曾利B1式粗製土器出土状態 … 11
第20挿　堀之内1式土器出土状態…… 11
第21挿　堀之内1式土器出土状態…… 12
第22挿　土製品の出土状態…… 12
第23挿　石器・石製品の出土状態…… 12
第24挿　A区の土器出土状態…… 13
第25挿　C区の層序と土壙…… 14
第26挿　C区の晩期土器出土状態…… 17
第27挿　C区の土器出土状態…… 17
第28挿　人骨の出土状態…… 17
第29挿　堀之内1式土器出土状態…… 27
第30挿　堀之内1式土器出土状態…… 50
第31挿　三角形区画文(1)…… 70
第32挿　三角形区画文(2)…… 70
第33挿　三角形区画文(3)…… 71
第34挿　三角形区画文(4)…… 71
第35挿　櫛掛け文…… 71
第36挿　菱形区画文…… 72
第37挿　同心円文…… 72
第38挿　懸垂文…… 73
第39挿　長方形区画文…… 73
第40挿　渦巻文…… 73
第41挿　入組文・渦状文…… 74
第42挿　楕円文…… 74
第43挿　弧状文…… 75
第44挿　刻目隆線…… 75
第45挿　C区土器出土状況……222
第46挿　A区d-2グリッドの注口土器出土状態……252
第47挿　C区土器出土状態……253
第Ⅰ-1図　外塚遺跡の位置…… 3
第Ⅰ-2図　外塚遺跡調査地点位置図…… 4
第Ⅰ-3図　A区グリッド配置図…… 5
第Ⅰ-4図　A区土層断面図…… 6
第Ⅰ-5図　A区各土層出土土器概観…… 7
第Ⅰ-6図　A区出土縄文前期土器片…… 8
第Ⅰ-7図　C区グリッド配置図…… 14
第Ⅰ-8図　C区土壙覆土内出土土器…… 15
第Ⅰ-9図　C区基本土層断面図…… 16
第Ⅱ-1図　中期末葉の土器…… 20
第Ⅱ-2図　中期末葉の土器…… 21
第Ⅱ-3図　称名寺1式土器…… 23
第Ⅱ-4図　称名寺1式土器…… 24
第Ⅱ-5図　称名寺2式土器…… 25

図　版

第Ⅱ- 6図　称名寺2式土器…… 26
第Ⅱ- 7図　堀之内1式土器…… 28
第Ⅱ- 8図　堀之内1式土器…… 29
第Ⅱ- 9図　堀之内1式土器…… 31
第Ⅱ-10図　堀之内1式土器…… 32
第Ⅱ-11図　堀之内1式土器…… 34
第Ⅱ-12図　堀之内1式土器…… 35
第Ⅱ-13図　堀之内1式土器…… 37
第Ⅱ-14図　堀之内1式土器…… 38
第Ⅱ-15図　堀之内1式土器…… 40
第Ⅱ-16図　堀之内1式土器…… 41
第Ⅱ-17図　堀之内1式土器…… 43
第Ⅱ-18図　堀之内1式土器…… 44
第Ⅱ-19図　堀之内1式土器…… 45
第Ⅱ-20図　堀之内1式土器…… 47
第Ⅱ-21図　堀之内1式土器…… 49
第Ⅱ-22図　堀之内1式土器…… 51
第Ⅱ-23図　堀之内1式土器…… 52
第Ⅱ-24図　堀之内1式土器…… 53
第Ⅱ-25図　堀之内1式土器…… 55
第Ⅱ-26図　堀之内1式土器…… 56
第Ⅱ-27図　堀之内1式土器…… 57
第Ⅱ-28図　堀之内1式土器…… 59
第Ⅱ-29図　堀之内1式土器…… 60
第Ⅱ-30図　堀之内1式土器…… 61
第Ⅱ-31図　堀之内1式土器…… 63
第Ⅱ-32図　堀之内1式土器…… 64
第Ⅱ-33図　之堀内1式土器…… 65
第Ⅱ-34図　堀之内1式土器…… 66
第Ⅱ-35図　堀之内1式土器…… 67
第Ⅱ-36図　外塚遺跡出土の主な堀之内1式土器……68
第Ⅱ-37図　堀之内2式土器…… 78
第Ⅱ-38図　堀之内1.2式土器…… 79
第Ⅲ- 1図　加曾利B式粗製土器……102
第Ⅲ- 2図　加曾利B1式土器……103
第Ⅲ- 3図　外塚遺跡出土加曾利B1式土器……104
第Ⅲ- 4図　加曾利B1～B3式土器……105
第Ⅲ- 5図　加曾利B1式(新)土器……106
第Ⅲ- 6図　加曾利B式外塚遺跡の地域的特性……107
第Ⅲ- 7図　加曾利B1～B2式土器……108
第Ⅲ- 8図　加曾利B1～B3式土器……109
第Ⅲ- 9図　加曾利B2式(古)土器……110
第Ⅲ-10図　加曾利B2式(古)土器……111
第Ⅲ-11図　加曾利B2式土器……112
第Ⅲ-12図　外塚遺跡出土加曾利B2式土器……113
第Ⅲ-13図　外塚遺跡出土加曾利B2～B3式粗製土器……114
第Ⅲ-14図　加曾利B2式(新)～B3式土器……115
第Ⅲ-15図　加曾利B3式土器……116
第Ⅲ-16図　加曾利B3式土器……117
第Ⅲ-17図　加曾利B3式土器……118
第Ⅲ-18図　加曾利B1～B3式土器……119
第Ⅳ- 1図　外塚遺跡出土曾谷式土器……122
第Ⅳ- 2図　外塚遺跡出土曾谷式土器・高井東東式・安行Ⅰ式土器……124
第Ⅳ- 3図　外塚遺跡出土安行Ⅰ式土器……126
第Ⅳ- 4図　外塚遺跡出土安行Ⅰ式土器……128
第Ⅳ- 5図　外塚遺跡出土高井東式・安行Ⅰ式・南奥系土器……131
第Ⅳ- 6図　外塚遺跡出土安行Ⅰ式土器……133
第Ⅳ- 7図　曾谷式(前半)土器……169

第Ⅳ- 8図　曾谷式土器……170
第Ⅳ- 9図　安行1式土器……171
第Ⅳ-10図　安行1a式（上段）・1b式(下段）土器……172
第Ⅳ-11図　安行1b式（上段）・1c式(下段）土器……173
第Ⅳ-12図　安行1c式（上段）・安行1式(前半)瓢型土器……174
第Ⅳ-13図　安行1式瓢型・台付土器……175
第Ⅳ-14図　安行1-2式平縁深鉢土器……176
第Ⅳ-15図　安行1-2式平縁深鉢土器……177
第Ⅳ-16図　安行1-2式平縁深鉢土器……178
第Ⅳ-17図　安行1-2式平縁深鉢土器……179
第Ⅳ-18図　安行1-2式平縁深鉢(上段)・瓢型(下段)土器……180
第Ⅳ-19図　安行1-2式瓢型土器……181
第Ⅳ-20図　安行1-2式瓢型土器……182
第Ⅳ-21図　安行1-2式瓢型(上段)・台付(下段)土器……183
第Ⅳ-22図　安行1-2式台付土器……184
第Ⅳ-23図　安行1-2a式波状口縁土器……185
第Ⅳ-24図　安行1-2a式波状口縁(上段)・安行1-2b式波状口縁(下段)土器……186
第Ⅳ-25図　安行1-2式波状口縁土器……187
第Ⅳ-26図　安行1-2式波状口縁土器……188
第Ⅳ-27図　安行1-2式波状口縁土器……189
第Ⅳ-28図　安行1-2式波状口縁土器……190
第Ⅳ-29図　安行1-2式波状口縁土器……191
第Ⅳ-30図　安行1-2式波状口縁(上段)・鉢型(下段)土器……192
第Ⅳ-31図　安行1-2式鉢型土器……193
第Ⅳ-32図　安行1-2式鉢型土器……194
第Ⅳ-33図　安行1-2式鉢型土器……195
第Ⅳ-34図　安行1-2式平縁胴張リ深鉢土器……196
第Ⅳ-35図　異系統土器……197
第Ⅳ-36図　異系統土器……198
第Ⅳ-37図　異系統(上段)・安行1式無文(下段)土器……199
第Ⅳ-38図　安行1式(前半)粗製土器……200
第Ⅳ-39図　安行1式(前半)粗製土器……201
第Ⅳ-40図　安行1式(後半)粗製土器……202
第Ⅳ-41図　安行1式(後半)粗製土器……203
第Ⅳ-42図　安行1式(後半)粗製土器……204
第Ⅳ-43図　安行1-2式粗製土器……205
第Ⅳ-44図　安行1-2式粗製土器……206
第Ⅳ-45図　安行1-2式粗製土器……207
第Ⅳ-46図　安行1-2式粗製土器……208
第Ⅳ-47図　安行1-2式粗製土器……209
第Ⅳ-48図　安行1-2式粗製土器……210
第Ⅳ-49図　安行1-2式粗製土器……211
第Ⅳ-50図　安行2式土器……212
第Ⅳ-51図　安行2式土器……213
第Ⅳ-52図　安行2式土器……214
第Ⅳ-53図　安行2式土器……215
第Ⅳ-54図　安行2式粗製土器……216
第Ⅳ-55図　安行2式粗製土器……217
第Ⅳ-56図　安行2式粗製土器……218
第Ⅳ-57図　安行2式粗製土器……219
第Ⅳ-58図　安行2式粗製土器……220
第Ⅴ- 1図　A区a-2グリッド出土土器……223
第Ⅴ- 2図　A区a-3グリッド出土土器……223
第Ⅴ- 3図　A区a-4グリッド出土土器(1)…225
第Ⅴ- 4図　A区a-4グリッド出土土器(2)…226
第Ⅴ- 5図　A区a-5グリッド出土土器……227
第Ⅴ- 6図　A区b-4グリッド出土土器(1)…228
第Ⅴ- 7図　A区b-4グリッド出土土器(2)…229
第Ⅴ- 8図　A区b-4グリッド出土土器(3)…230
第Ⅴ- 9図　A区b-5グリッド出土土器……232

第Ⅴ-10図 A区c-4グリッド出土土器(1)…233
第Ⅴ-11図 A区c-4グリッド出土土器(2)…234
第Ⅴ-12図 A区c-4グリッド出土土器(3)…235
第Ⅴ-13図 A区c-5グリッド出土土器……237
第Ⅴ-14図 A区b-2グリッド出土土器(1)…238
第Ⅴ-15図 A区b-2グリッド出土土器(2)…239
第Ⅴ-16図 A区c-2グリッド出土土器(1)…240
第Ⅴ-17図 A区c-2グリッド出土土器(2)…241
第Ⅴ-18図 A区c-2グリッド出土土器(3)…242
第Ⅴ-19図 A区d-2グリッド出土土器(1)…244
第Ⅴ-20図 A区d-2グリッド出土土器(2)…245
第Ⅴ-21図 A区d-3グリッド出土土器……247
第Ⅴ-22図 A区d-4グリッド出土土器……248
第Ⅴ-23図 A区d-5グリッド出土土器……248
第Ⅴ-24図 A区c-4グリッド出土土器……249
第Ⅴ-25図 A区a-2, a-4グリッド出土土器……250
第Ⅴ-26図 A区a-2, a-4, b-4, d-2各グリッド出土土器……251
第Ⅴ-27図 第Ⅴ-26図1注口付土器拓本図……251
第Ⅴ-28図 A区a-2, b-4, c-4各グリッド出土土器……252
第Ⅴ-29図 A区c-2, d-2各グリッド出土土器……253
第Ⅴ-30図 A区b-2, c-2各グリッド出土土器……254
第Ⅴ-31図 A区d-2グリッド出土土器……255
第Ⅴ-32図 C区出土土器(1)……256
第Ⅴ-33図 C区出土土器(2)……257
第Ⅴ-34図 C区出土土器(3)……258
第Ⅴ-35図 C区出土土器(4)……259
第Ⅵ- 1図 腕輪・土錘・耳栓・円板系土製品……270
第Ⅵ- 2図 土版・土偶・その他の土製品…271
第Ⅶ- 1図 磨製石斧・独鈷石・打製石斧…297
第Ⅶ- 2図 打製石斧……298
第Ⅶ- 3図 磨石・敲石・凹石……299
第Ⅶ- 4図 磨石・敲石・凹石……300
第Ⅶ- 5図 磨石・敲石・凹石……301
第Ⅶ- 6図 磨石・敲石・その他の石製品…302
第Ⅶ- 7図 石皿……303
第Ⅶ- 8図 石皿……304
第Ⅶ- 9図 石錘……305
第Ⅶ-10図 石錘……306
第Ⅶ-11図 石鏃・剝片石匙・石棒・石剣・小玉……307

写真図版

第 1 縄文時代後期前葉の土器(1)
第 2 縄文時代後期前葉の土器(2)
第 3 縄文時代後期前葉の土器(3)
第 4 縄文時代後期中葉の土器(1)
第 5 縄文時代後期中葉の土器(2)
第 6 縄文時代後期後葉の土器(1)
第 7 縄文時代後期後葉の土器(2)
第 8 縄文時代後期後葉の土器(3)
第 9 縄文時代後期後葉の土器(4)
第10 縄文時代後期後葉の土器(5)
第11 縄文時代後期後葉の土器(6)
第12 A区出土寺脇系土器・A区出土晩期寺脇系土器
第13 A区出土晩期寺脇系土器
第14 A区出土晩期安行系土器
第15 A区d-2グリッド出土晩期寺脇系土器・

A区 d-2 グリッド出土晩期安行系土器・A区出土大洞系土器・A区出土晩期安行系土器
第16　A区出土晩期安行系土器
第17　A区 a-4 グリッド出土晩期安行系土器
第18　A区出土晩期安行系土器
第19　A区出土晩期安行系土器
第20　A区出土大洞系土器
第21　A区出土大洞系土器
第22　A区出土晩期安行系土器
第23　A区出土大洞系土器
第24　A区出土晩期安行系土器
第25　A区 c-4 グリッド出土製塩土器・A区出土晩期粗製土器・A区出土晩期安行系土器
第26　A区出土晩期安行系粗製土器・A区出土安行系粗製土器・C区出土晩期無文粗製土器
第27　C区出土晩期安行系土器
第28　C区出土晩期土器
第29　A区出土晩期安行系土器
第30　A区出土晩期無文粗製土器
第31　A区出土晩期無文土器および粗製土器・C区出土晩期粗製土器
第32　土版・土偶・その他の土製品
第33　耳栓と腕輪
第34　石錘と土製品
第35　磨製石斧・独鈷石・打製石斧・磨石・敲石・凹石
第36　磨石・敲石・凹石・石皿・石製品
第37　石錘・石鏃・剝片・石匙・石棒・石剣・小玉

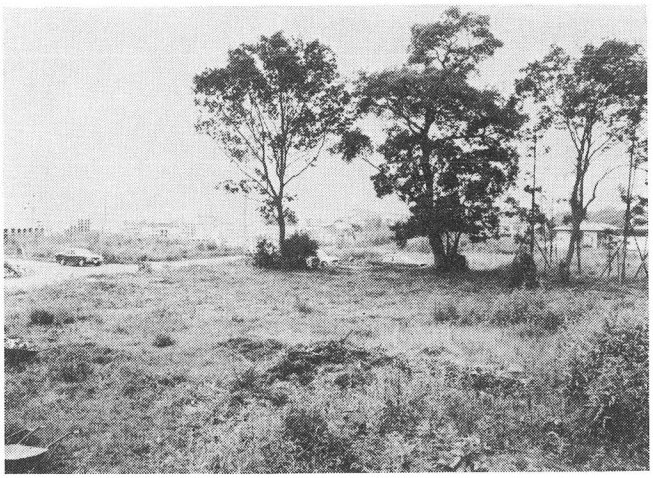
題字　下館市教育長 塚越喜一郎

I　遺跡論

第1節　調査への経緯

下館市は、昭和53年～同62年にかけて神明地区の都市計画事業を進めていた。外塚の神明神社付近は、近隣公園に計画されていた。昭和55年7月、公園の周辺に下水溝を埋設する工事中、排土や溝の断面に土器などの遺物が包含されていることを発見したのは、下館市在住の研究者長岡芳氏である。

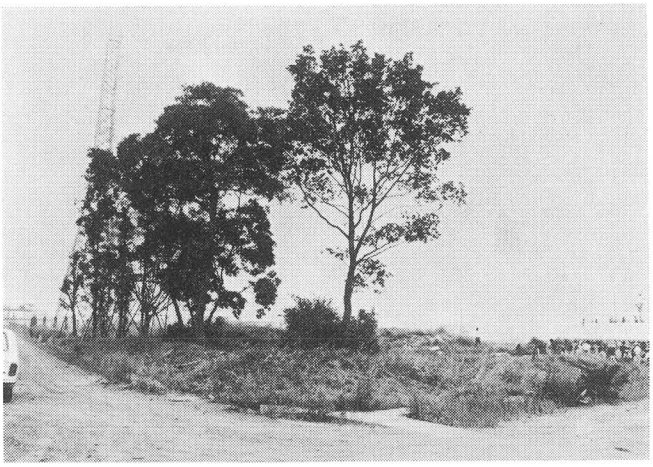
下館市には学史的にも著名な「女方遺跡」があるが、その調査後は特に話題になる出来事もなかった。また、下館市周辺には沖積地が広がり、水田となっているため遺跡の確認の難しいということもあり、都市計画事業の実施にあたって分布調査は行われず、今回調査した『外塚遺跡』は茨城県遺跡地名表に未登載の遺跡であった。



第1挿　A区調査以前の近景（東北方向より）

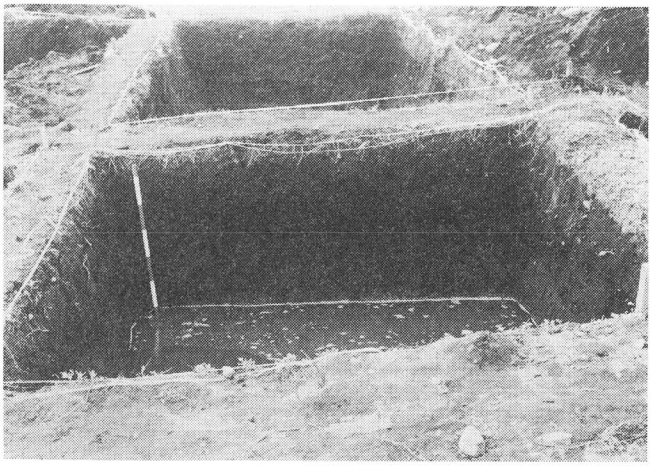
その段階で長岡氏は、縄文後期の土器（称名寺式、堀之内式、加曾利B式、安行式）や石皿、磨石等の石器などを採集し、外塚地内に遺跡の所在することを市教育委員会に通報した。また、県内の研究者に下館来訪を懇請した。茨城県歴史館の川上博義氏、県立水戸農業高等学校の川崎純徳氏らと長岡氏は、採集された遺物や遺跡の現況から、遺跡を保存するのが最良の方策であることを確認し合った。

この旨を教育委員会に伝え、協議した結果、遺跡の現状や近隣公園及び周辺の遺物の散布状態を調べた上で、その後の対策を検討することにした。

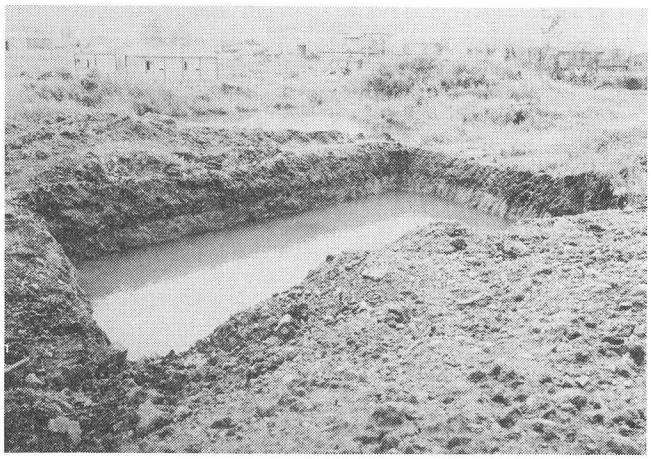


第2挿　A区調査開始（南西方向より）

教育委員会では、その調査を宮内



第3挿　A区d-4グリッド



第4挿　B区の水没状態

第5挿　C区調査中の湧水状態

良隆氏に依頼した。宮内氏は外塚地区の広域にわたって詳細な分布調査を実施した。提出された調査結果をもとに教育委員会は、長岡、川崎、宮内氏らと検討を重ねた。

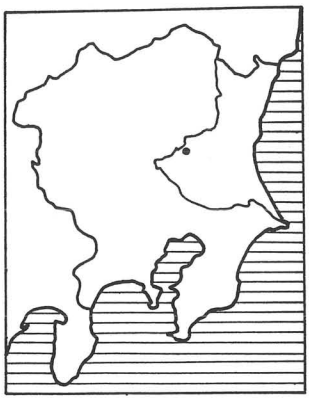
工事を中止することはできない、遺跡の上に大部分盛土するが、一部遊具等の施設を設置するため一層破壊の進む恐れがある、道路や下水溝の工事で既に破壊されている面積はかなり広いもののまだ遺跡の実態はつかめていない等々の理由によって、昭和56年8月に神明神社跡地付近の発掘調査を実施することになった。

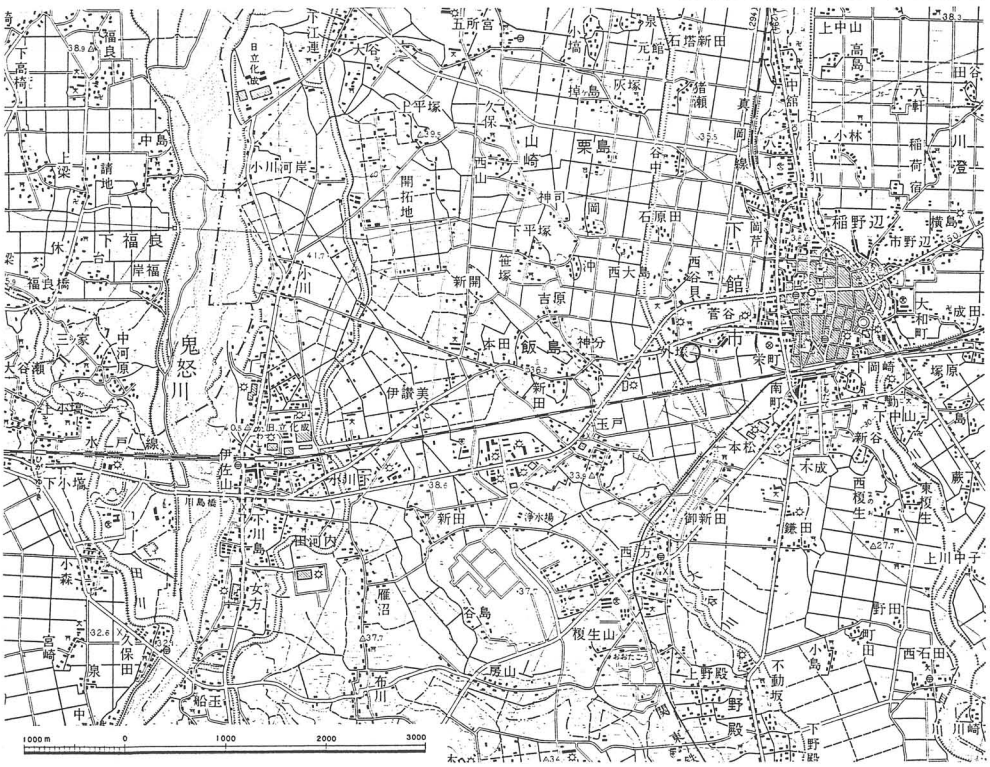
ここ十数年の間に日本国内の埋蔵文化財行政は以前に比べれば進展してきている。とはいうものの、茨城県内でも人知れず破壊されてしまう遺跡は少なくない。こうした中で、外塚遺跡は、下館市在住の研究者長岡芳氏の精力的な奔走と下館市教育委員会の良心的な行為によって救われ、歴史の中にその名をとどめることができたのである。

発掘調査は、昭和56年8月9日から8月26日まで実施された。教育委員会では、社会教育課のみならず委員会総力をあげて取組み、都市計画部も人的労力はもちろん機械的労力も惜しまず提供してくれた。このような協力体制の中で発掘調査は進められた。

第2節 遺跡周辺の地勢

那須、日光の連山の東には広大な丘陵地帯が形成されている。高度の低くなった丘陵地帯の縁辺には、関東平野の北辺を占める台地が広がる。下館市周辺は標高30m前後の台地で、ゆるやかな起伏を見せている。茨城県西部から栃木県東部にかけての台地の特徴は、北から南に貫流する河川によって縦に長く分割されているということである。下館市は、西を鬼怒川、中間に大谷川、五行川、東を小貝川が流れている。鬼怒川と大谷川にはさまれた台地には、両河川に開口する開析谷が樹枝状に入り組んでいる。これに対し、大谷川から小貝川にかけては、整然と区画された平坦な水田地帯が広がっている。下館市街は40m前後、水田地帯の中にある外塚遺跡付近は30m前後である。外塚遺跡は、350mほど隔てた大谷川と深い関係をもっていそうである。神明神社の東には湿地が残されており、微高地の外塚遺跡A地点は、大谷川の自然堤防と考えられている。



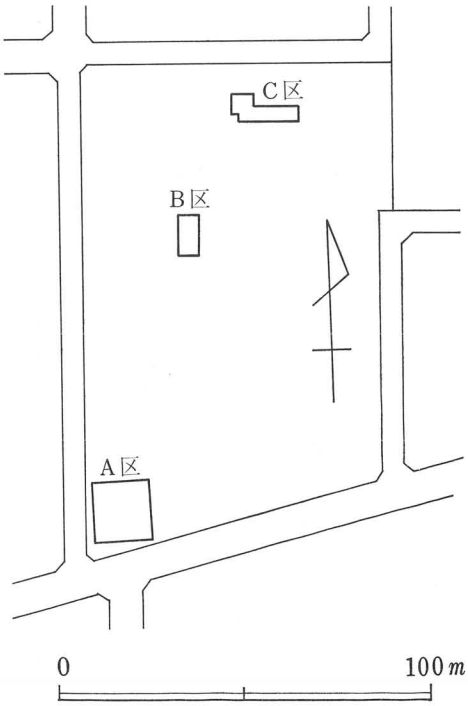


第I-1図 外塚遺跡の位置

第3節　発掘調査の概況

外塚遺跡は下館市大字外塚字羽黒山182、183番地に所在する。

発掘調査は、昭和58年8月9日から同年8月26日までの18日間に集中して実施された。



第I-2図　外塚遺跡調査地点位置図

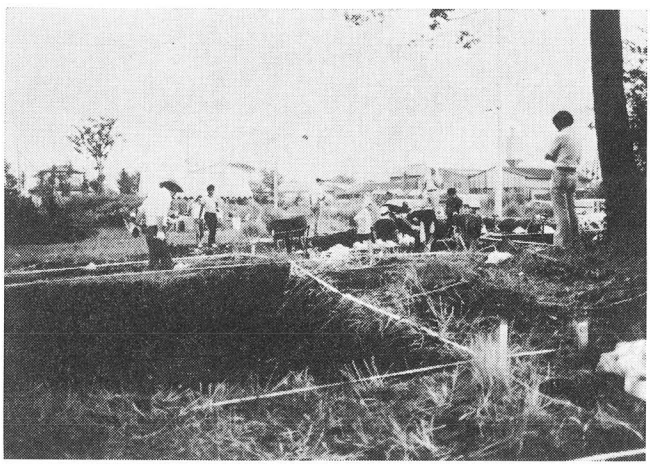
調査は、微高地になっている神明神社の社殿跡をA区、かつては湿地帯であったところをB区、以前長岡氏が遺物などを採集した地点の南側をC区とし、計3地点の調査区を設定した。

A区では、斜面部における遺物の廃棄のようす及び平坦部での遺構の検出を目的とした。B区では、湿地に遺物がどのように流入しているか調べることをめざした。C区においては、遺構の検出と遺物の採集をねらった。これら3地点の中で重点的に調査されたのは、A区とC区である。

B区は、かつては浅い沼の底だったと考えられるところで、調査開始時点で1m50～60cmの盛土の再堆積があった。そこで、埋土をパワーショベルで除去した後、調査を実施した。出土遺物は、表面の磨耗が進み時期判別さえ難しい土器の小破片ばかりであった。B区は最も湧水したところで、排水ポンプを用いても効果が上がらず、雨天の翌日には、湧水が著しくプールのようになってしまい、調査を断念せざるをえなかった。

今回のB区の調査は、水に対する対策不足だったため困難な状態になってしまったが、水への対策を十分立てて実施すれば、意外な成果を上げられるかも知れない。

A区、C区からB区にかけての沼縁を調査すれば、縄文人が食した動植物の残骸、木製の日常雑器類や装身具など、酸性土壌では風化腐蝕してしまう遺物が水に守られて残っている可能性がある。十分な対策を立ててからの調査を期待する。



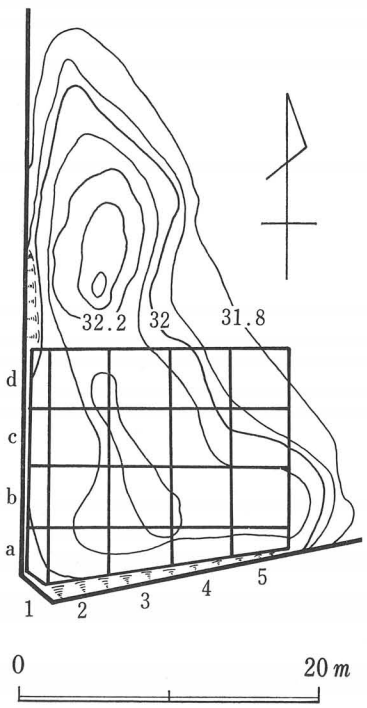
第6挿　A区表土除去作業風景

1 A区の調査の概要

(1) A地点の地形

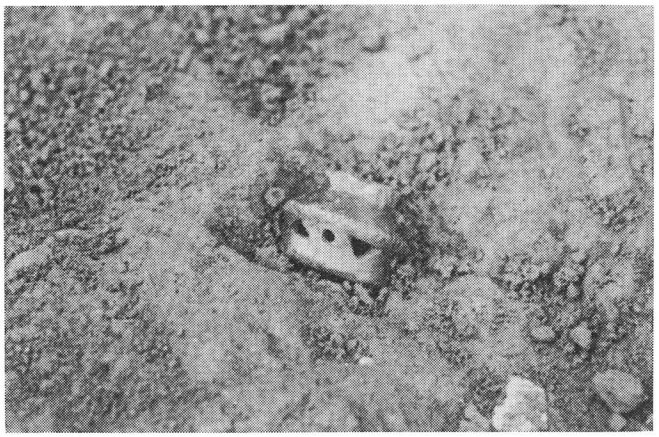
A地点は、神明神社が鎮座していたところである。周辺が標高31.5m前後であるのに、最頂部で32.4mと約1mほど高くなっている。調査開始段階では、周辺を削られたり、埋土があったりして計測するにも困難な面もあったが、現地形から予想して、だいたい南北に細長い舟形をしていたらしい。西、南は側溝や道路を造るために破壊されているが、東、北は旧地形を残している。現在残っている部分は、舟形微高地の北半分にあたり、北及び東に向かってゆるやかな傾斜を見せている。

この微高地は、大谷川の自然提防であるが、残存している他の微高地も研究対象とすべきである。

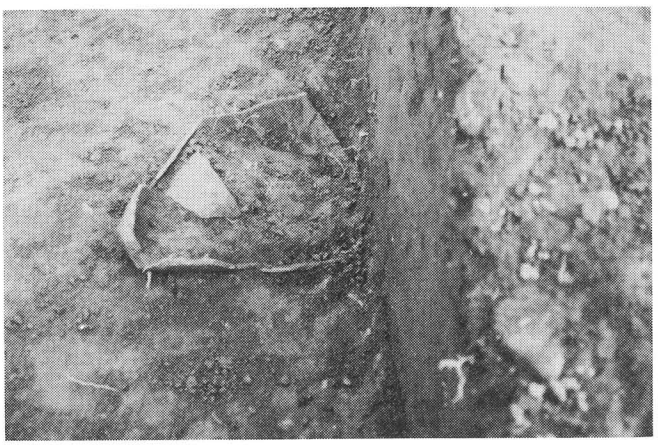


第I-3図 A区グリッド配置図

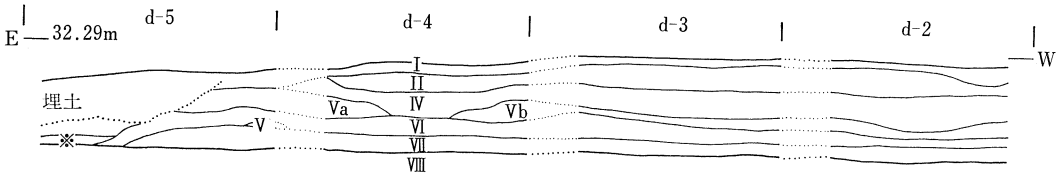
第7挿 晩期注口土器出土状態



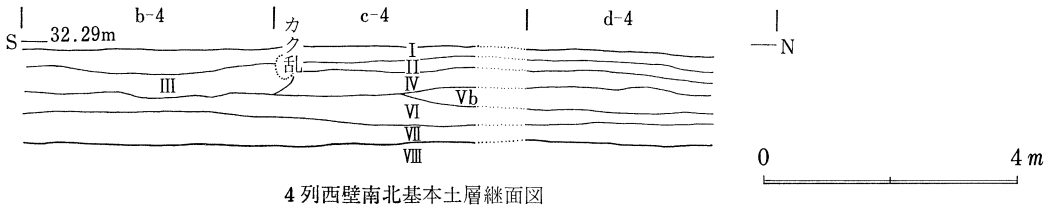
第8挿 器台部出土状態



第9挿 粗製土器出土状態



d列南壁東西基本土層継面図



4列西壁南北基本土層継面図

第I-4図　A区土層断面図

(2)　土層堆積のようす

第Ⅰ層　よく踏み固められた堅い表土層である。植物の根による攪乱はもちろん人為的な攪乱も大分受けている。縄文前期から晩期の土器、江戸時代の古銭（寛永通宝）、現代陶器など種々多様な遺物が出土している。

第Ⅱ層　砂混じりの粘性のある茶褐色の土層である。縄文後期初頭から晩期にかけての土器を出土している。晩期の無文土器がd-2グリッドから出土しており、晩期の遺物包含層と考えられるが、土器の分布には偏りがあり、b・c・dグリッドあたりに集中して見られた。攪乱の著しい層である。

第Ⅲ層　骨片や炭化物の多く含まれた漆黒の土層である。晩期の遺物包含層である。第Ⅱ層との関係は攪乱のためにつかみきれなかった。厚さは一様ではなく、b-4グリッドでも東側は極めて薄く第Ⅳ層が厚くもぐり込んでいる。調査区で最も厚く見られたのはa-4グリッド付近であり、南側に傾斜している。主要部分は、道路建設の際に破壊されているようだ。

第Ⅳ層　しまった感じのする暗褐色土層である。ほぼ調査区全面に広がっているが厚さは場所によって変わる。b-4グリッドでは、断面図には表れていないが一部で厚く堆積し、新地式の注口土器を出土している。c-4グリッドの玉類もこの層である。安行Ⅰ式の包含層である。

第Ⅴ層　黒色の土層である。場所によって厚さは異なる。曾谷式、安行Ⅰ式の包含層と考えられる。

a　黒色味が強く骨片などが多く含まれている。

b　aに比較してやわらかい土質である。

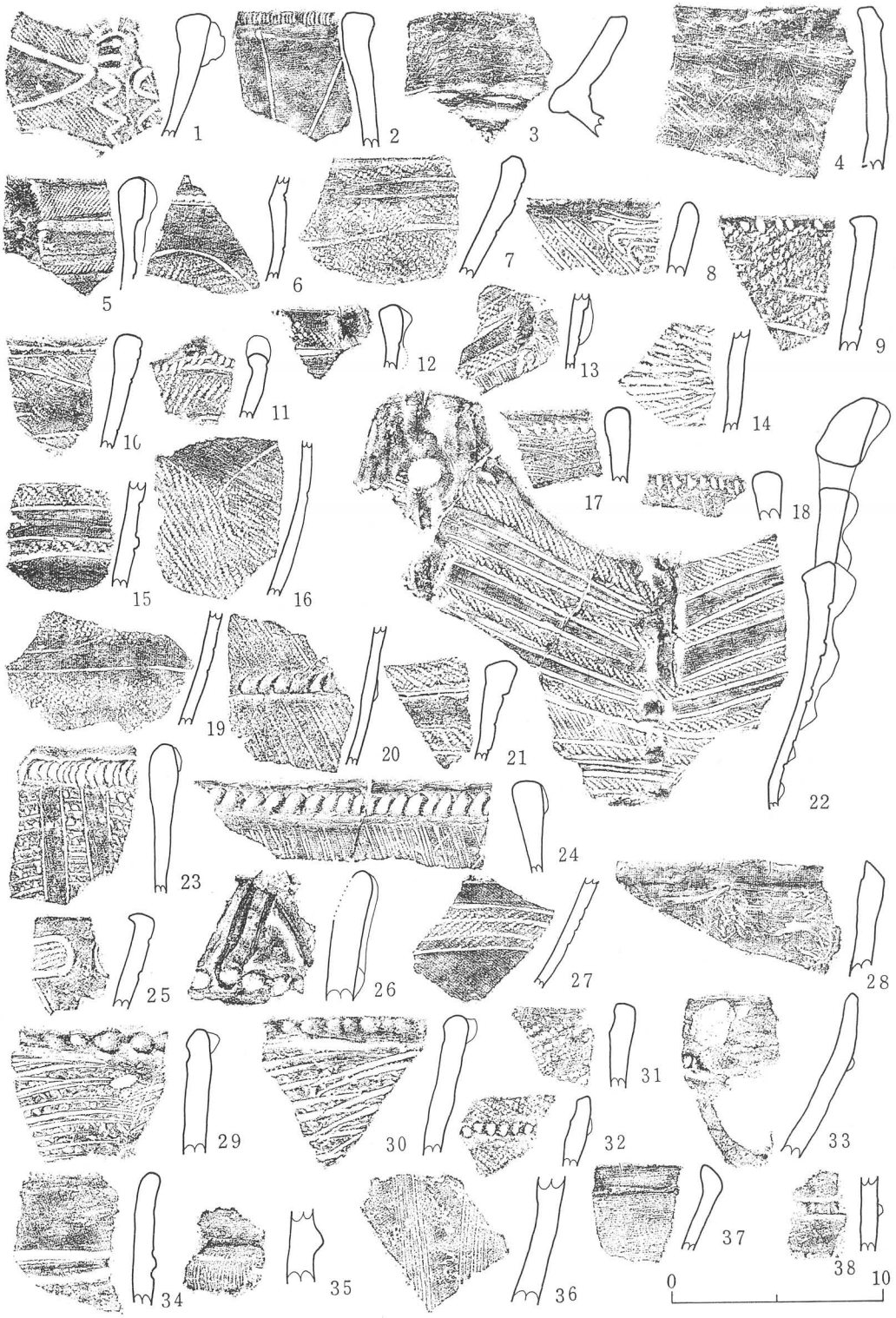
第Ⅵ層　砂の混入は、上部各層より多いようである。粘性も増した黒褐色土層である。Ⅵ'とした部分は周辺に比べて黒色味が強い。加曾利B1式の包含層である。下部及び第Ⅶ層上面には堀之内1式の大形破片が見られた。

第Ⅶ層　砂質で粘性の強い茶褐色土層である。砂の含まれる割合が極めて大きく、第Ⅷ層への漸移的な存在である。堀之内1式の包含層である。調査中にこの層まで掘り下げると湧水が見られた。

第Ⅷ層　黄褐色の砂層である。調査区の基盤層とみられ、上面はほぼ水平である。湧水が著しく、調査終了のグリッドでは20 cmほどまで湧水する。無遺物の砂層である。

※　暗褐色の再堆積土層。

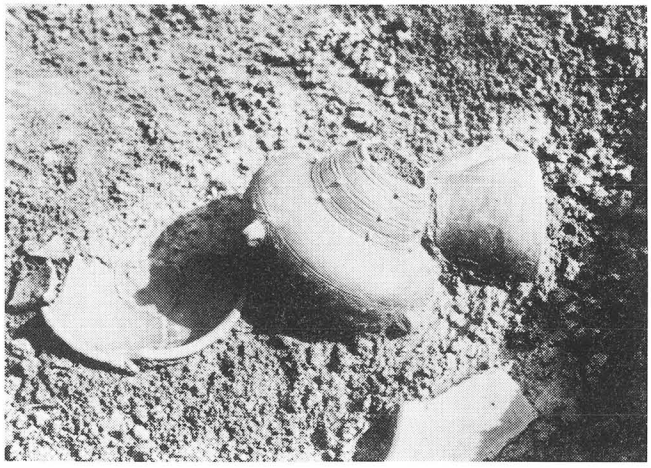
（註）　第Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ章では第Ⅰ層を表土層、第Ⅱ層、第Ⅲ層を一括に第Ⅰ層、第Ⅳ層から第Ⅴ層までを一括して第Ⅱ層として、第Ⅵ、第Ⅶ層を第Ⅲ層とした。



第I-5図 A区各土層出土土器概観

1～3（第Ⅲ層出土）、5・6（第Ⅳ層出土）、4・7～24（第Ⅴ層出土）、25～33（第Ⅵ層出土）、34～38（第Ⅶ層）

第10挿　安行1式土器出土状態



第11挿　新地式注口土器出土状態

出土した土器の時期、量、その他の遺物、出土状態から外塚遺跡A区の環境や生活のようすなどを考えてみたい。

A区で出土した土器で古いのは、関山式、黒浜式などの胎土に繊維を含む土器、東部関東に分布の中心をもつ浮島式などである（第I-6図）。表土以下各層に混じって出土しており、図示したものが全てである。

出土量が増えてくるのは中期加曾利E3、E4式の時期であるが、出土のしかたは後続する後期称名寺式とともに基本的な帰属層をもたない。

A区の基盤は、第Ⅷ層黄褐色砂層である。この層は滞水層である。出土土器の帰属層が明らかに

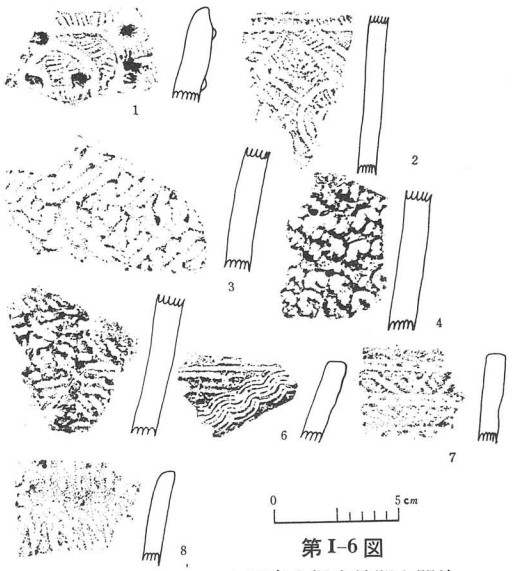
(3)　各種遺物の出土状態

A区は、調査面積が最も広く平面で約230 m^2 ほどである。深さは1.6 m 位まで掘り下げた。調査のために除去した土砂は、約368 m^3 にもなる。

出土した遺物の種類、量ともに多い。A区で出土した土器の型式は、縄文前期関山式、黒浜式、浮島式、中期加曾利E3、E4式、後期称名寺1、2式、堀之内1、2式、加曾利B1、B2、B3式、曾谷式、安行1式、高井東式、新地式、安行2式、晩期安行3a、3b、3c、3d式、大洞BC、C1、C2式などで縄文前期から晩期まで長期にわたる。もちろん土器の器種は様々なものを出土している。

土製品では、土偶、土版、土製円盤などが主なものである。

石器・石製品類も多く、石斧、石鏃をはじめとして、磨石、石皿類が多い。



第I-6図
A区出土縄文前期土器片

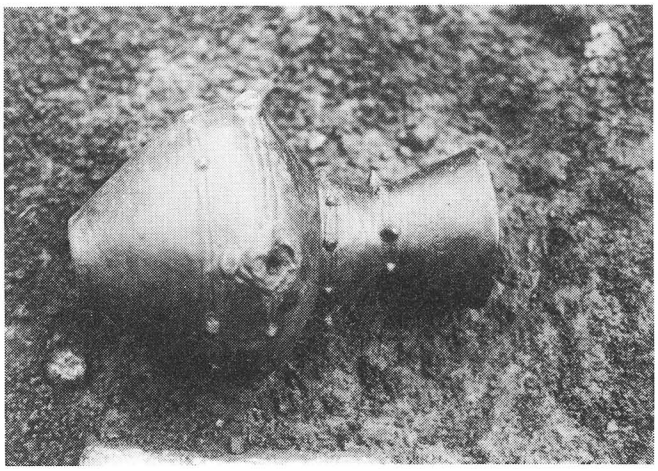
なるのは堀之内1式からである。第Ⅶ層茶褐色土層を中心に堀之内1式土器は出土している。第20挿、第21挿などのほぼ完形に近い土器や大形破片が出土している。これらの大部分は文様も整っており、堀之内1式でもより堀之内2式に近い様相を示した土器が多い。

堀之内2式は帰属する文化層をもたず、第Ⅵ層以上の層から出土している。

加曾利B1式は、第Ⅵ層黒褐色土層を基本的な帰属層としている。完形土器も多く出土している。第15挿はd-4グリッドにおいてまとまって出土した例である。第14挿から第19挿は、第Ⅵ層における加曾利B1式の出土状態である。加曾利B2、B3式の大形破片は少ない。

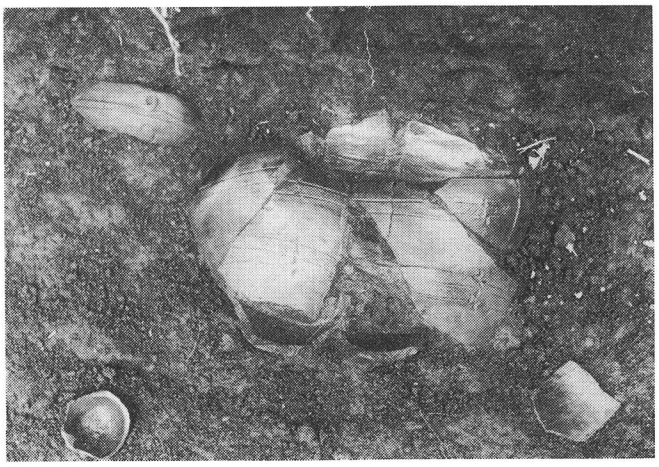
安行1式は、第Ⅴ層黒色土層と第Ⅳ層暗褐色土層の2層にまたがって出土している。第Ⅴ層には曾谷式の小破片も混じっている。第10挿から第13挿は、安行1式の出土状態である。この中でも注目すべきは、第11挿、第12挿の新地式の注口土器が2個体も出土したことである。完形土器やそれに近い土器のほとんどが、上から圧迫されたようにつぶれて出土しているのに、この2個体は、一部破損したままの状態で出土している。安行2式の出土量は少ない。

晩期の時期に形成されたと考えられるのが、第Ⅱ層茶褐色土層と第Ⅲ層黒色土層である。第Ⅱ層は攪乱の多い層で、無文粗製土器が多く出土している。主たる晩期包含層は、第



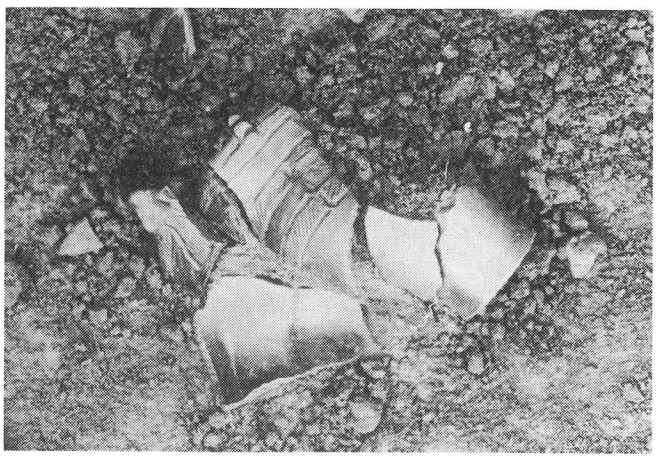
第12挿 新地式注口土器出土状態

第13挿 粗製土器出土状態

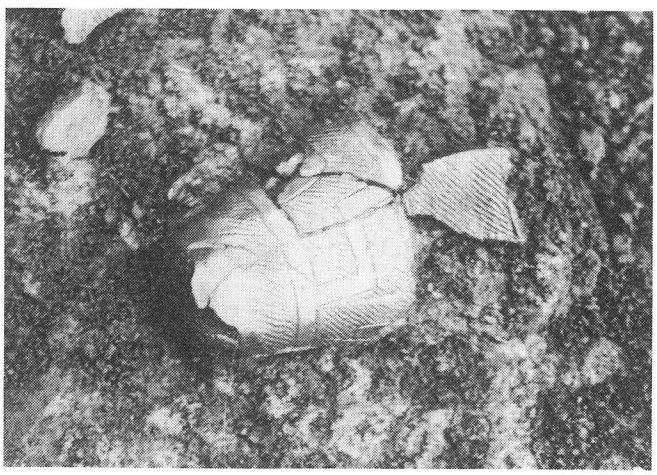


第14挿 加曾利B1式土器出土状態

第15挿　d-4グリッド土器出土状態



第16挿　加曾利B1式土器出土状態



第17挿　加曾利B1式並行期土器出土状態

Ⅲ層である。b-3グリッドあたりから南側に広く分布してる層であったと想定される。第7挿はd-2グリッド第Ⅱ層から出土した注口土器である。

以上述べてきたようにA区で主体となるのは、縄文後期堀之内1式、加曾利B1式、安行1式、晩期安行3b式の段階である。

出土遺物から総合して考えてみると、外塚遺跡及びその周辺に縄文人が居住したのは、縄文前期関山式の頃からであり、A区付近が生活空間として多く利用されたのが、上記の4期とみられる。

今回のA区の調査では称名寺式の大形破片は見られなかったが、長岡氏が昭和55年にC区付近で採集した遺物には、称名寺1・2式の大形破片が見られる。このようなことから、縄文人は外塚付近で縄文時代前期から生活し始めたが、時期によって少しずつ生活の中心となる場が変わっていたと考えることができる。

もし、外塚地内に縄文時代の遺跡の在ることが古くから知られていたならば、都市計画事業以前に大規模な発掘調査が実施されていたであろう。その時、外塚遺跡は茨城県西部並びに関東中央部における縄文時代中・後・晩期の文化を解明する主要な示準遺跡となり得ることを考えると、残念でならない。

A区では、住居址、土壙などといった一般的な遺構は確認されていない。縄文人の生活空間の一部ではあったろうが、いかなる意味をもつ場

所だったのだろうか。土器の出土状態からみて、『貝塚』に近い意味をもつ空間ではなかったかとも考えられる。A区全体が遺構としての機能をもっているとみられる。

掘り込んである遺構ではないが注目したいのは、b-4、C-4グリッドの第4層における遺物の出土状態である。安行1式の大形土器がほぼ同一のレベルで広がり、新地式の注口土器が2個体横転しており、これらの北側に碧玉製の玉が散乱して出土していた。直方体の大石も出土しており、埋葬遺構だった可能性もある。

d-4の第Ⅵ層でも加曾利B1式土器が何個体分も潰れた状態で出土していた（第15挿）。単に投棄、あるいは放置されていただけとも考えられるが、小形の土器（所謂ミニチュア土器）なども共伴しており、単純に片付けられない。

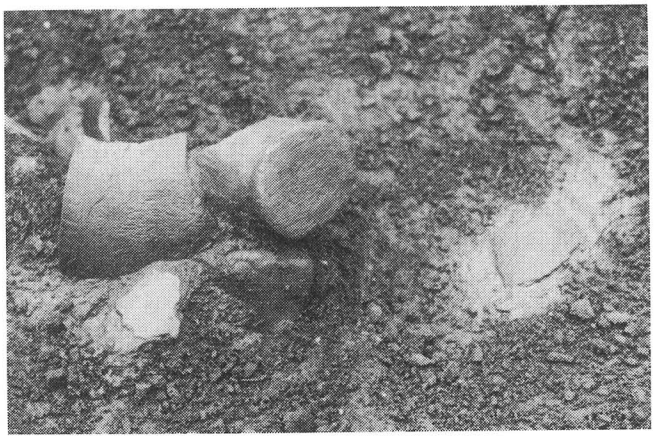
後・晩期を中心とした遺跡なので、土製品の多量の出土が予測されていたが、土器片製円盤以外はそれほどでもなかった。

土偶は、脚部などが多く体部や顔面部の出土は少なかった。第22挿は第Ⅲ層より出土した例である。

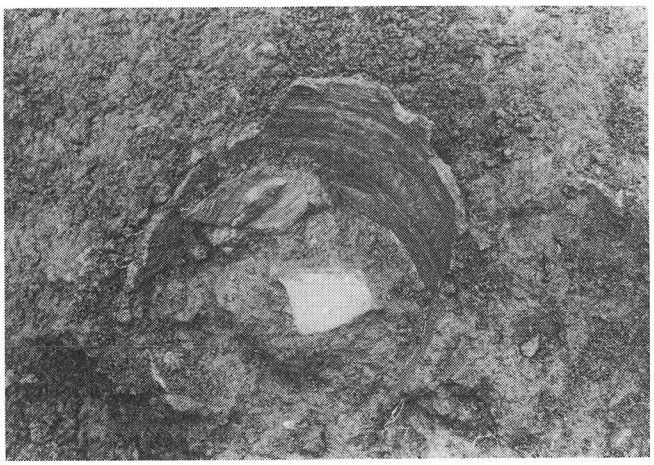
耳飾も晩期になると繊細な彫刻に赤色顔料を塗布された芸術性の高い製品もあるが、A区ではごく一般的な素文の耳飾ばかりであった。

土錘や土器片錘も量的には多くはないが、外塚遺跡の生活環境を支えた自然環境とのかかわりを考える上で多いに参考になる資料である。A区に最も近い河川は、350mほど離

第18挿 加曾利B1式粗製土器出土状態



第19挿 加曾利B1式粗製土器出土状態

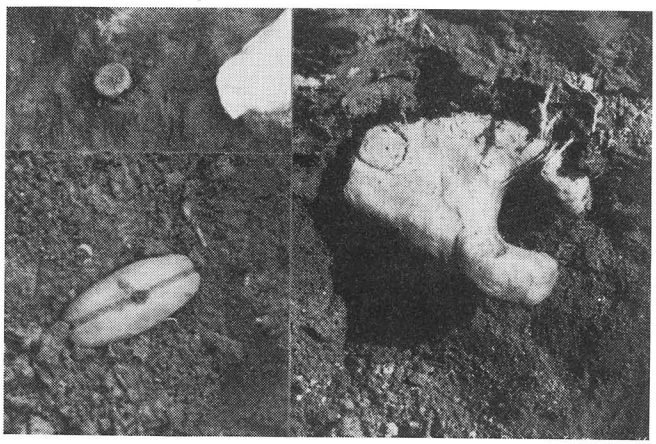


第20挿 堀之内1式土器出土状態

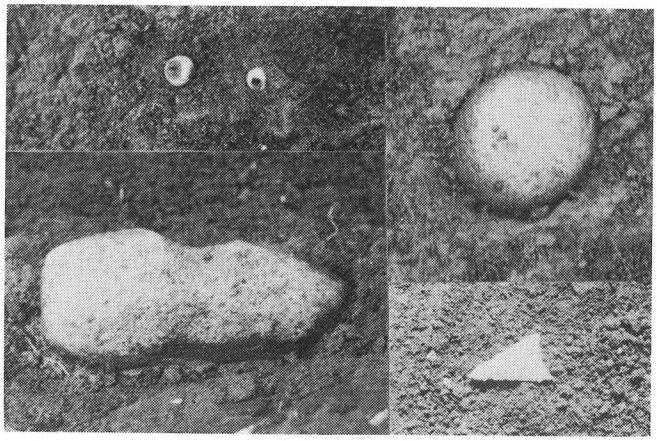
第21挿　堀之内1式土器出土状態

長岡氏の採集した遺物の中にヤマモモやオニグルミ、ヤマグリなどが含まれている。また、今回の調査では、C区の土壙からオニグルミの外にトチらしいものも出土している。凹石と磨石あるいは敲石で堅果を砕き、石皿と磨石（敲石）を用いて磨潰し、製粉してパンなどにして食べていたのではないだろうか。

耳栓
土錘
土偶



第22挿　土製品の出土状態



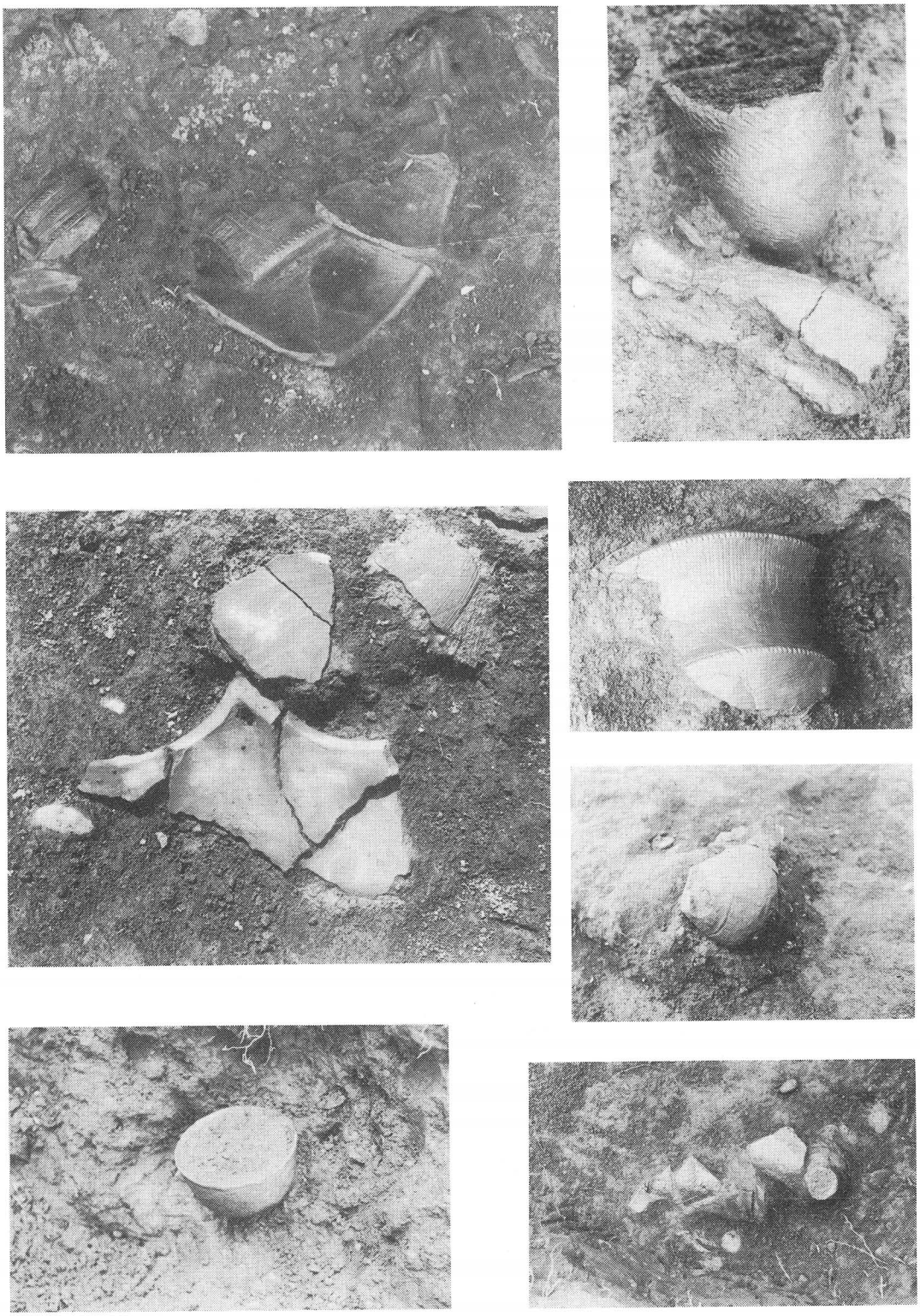
第23挿　石器・石製品の出土状態

れた大谷川である。大谷川、五行川小貝川などによって形成された沖積地の中にある外塚遺跡周辺には、沼沢地がいくつもあり、小規模な漁撈活動が展開されていたのではないだろうか。

石器の出土点数も多い。その中でも磨石、石皿、凹石の類が多い。石鏃が哺乳類を捕獲し、蛋白質や脂肪、毛皮などを確保していたのに対し、これら3種の石器は植物質食料の調理と深いかかわりをもっている。

石製装飾品で出土したのは、碧玉製の玉だけである。b-4、c-4グリット及びC区の土壙から出土している。色彩豊かな装飾品の少ない縄文時代には1個でも目立つが、幾つも連ねていたらさぞや豪華であったろう。高価な護符だったかもしれない。

玉
磨製石斧
磨石
石鏃

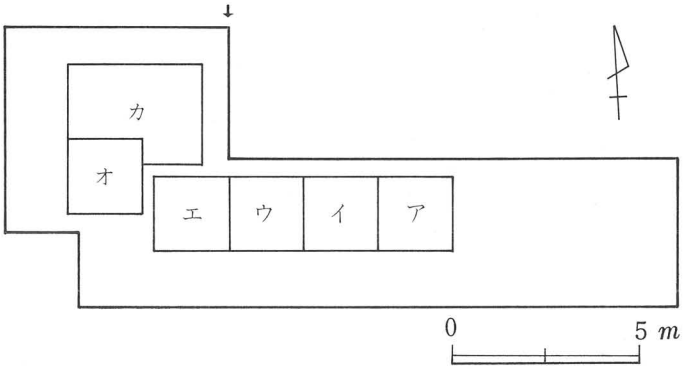


第24挿 A区の土器出土状態

2　C区の調査の概要

C区は、調査以前に1m以上も廃土が盛られていたので、重機を導入して旧地表面まで排出しなければならなかった。旧地表面は水田跡らしく、腐植した稲の株をみることができた。旧地表面を含めて水はけが悪く、掘り下げれば下げるほど湧水が甚だしいため調査中は悩まされ続けた。雨上がりには、調査区の壁面からの漏水が著しく50～60 cmは水没してしまった。調査は、排水ポンプを幾台も稼動させて泥まみれになって進めなければならなかった。

C区は以前長岡氏が一括の土器群を発見した地点に近い所である。この事実から、何らかの遺構があるのではないかという予想を立て、遺構の確認を第一の目的とした。しかし、湧水という思わぬ出来事に会い、グリッド内の平面的な調査では残念ながら遺構を発見することはできなかった。C区で遺構と言えるのは土壙である。C区の土層の堆積状態を調べるために、パワーショベルを利用して地表より3mほど掘り下げたところ、その断面に土壙が発見されたのである。今回の調査で遺構は、この土層断面観察用の試掘溝にかかった土壙が唯一のものであった。



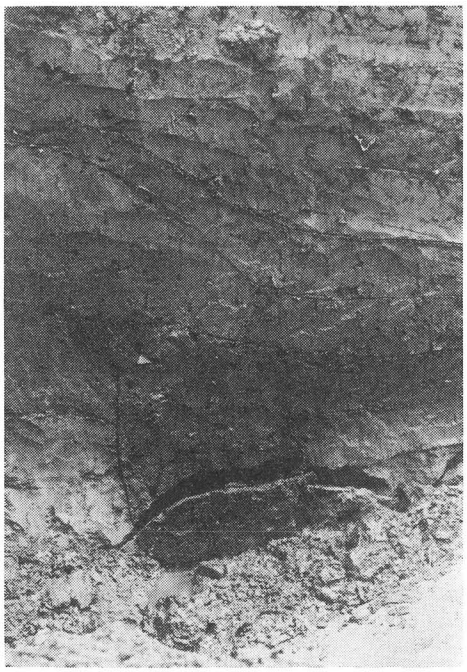
第I-7図　C区グリッド配置図

(1)　土壙の観察

土壙の平面形は、正確には計測できなかったが、横から計測したところ、開口部の径が70～80 cm程度の不整円形をなすようである。

断面は、開口部付近がロート状に広がり、ほぼ垂直に落ちながらも一部フラスコ状を示している。底面は平坦で、径50～60 cmくらいの不整円形である。深さは、約70 cmである。

土壙の下部は、湧水の著しい黄褐色の砂層を掘り込んでいる。そのため土壙内の土壌も水気を多く含み粘性が強い。湧水が著しく、試掘溝は短時間のうちに埋没し、土壙も下部から崩落してしまった（第25挿）。

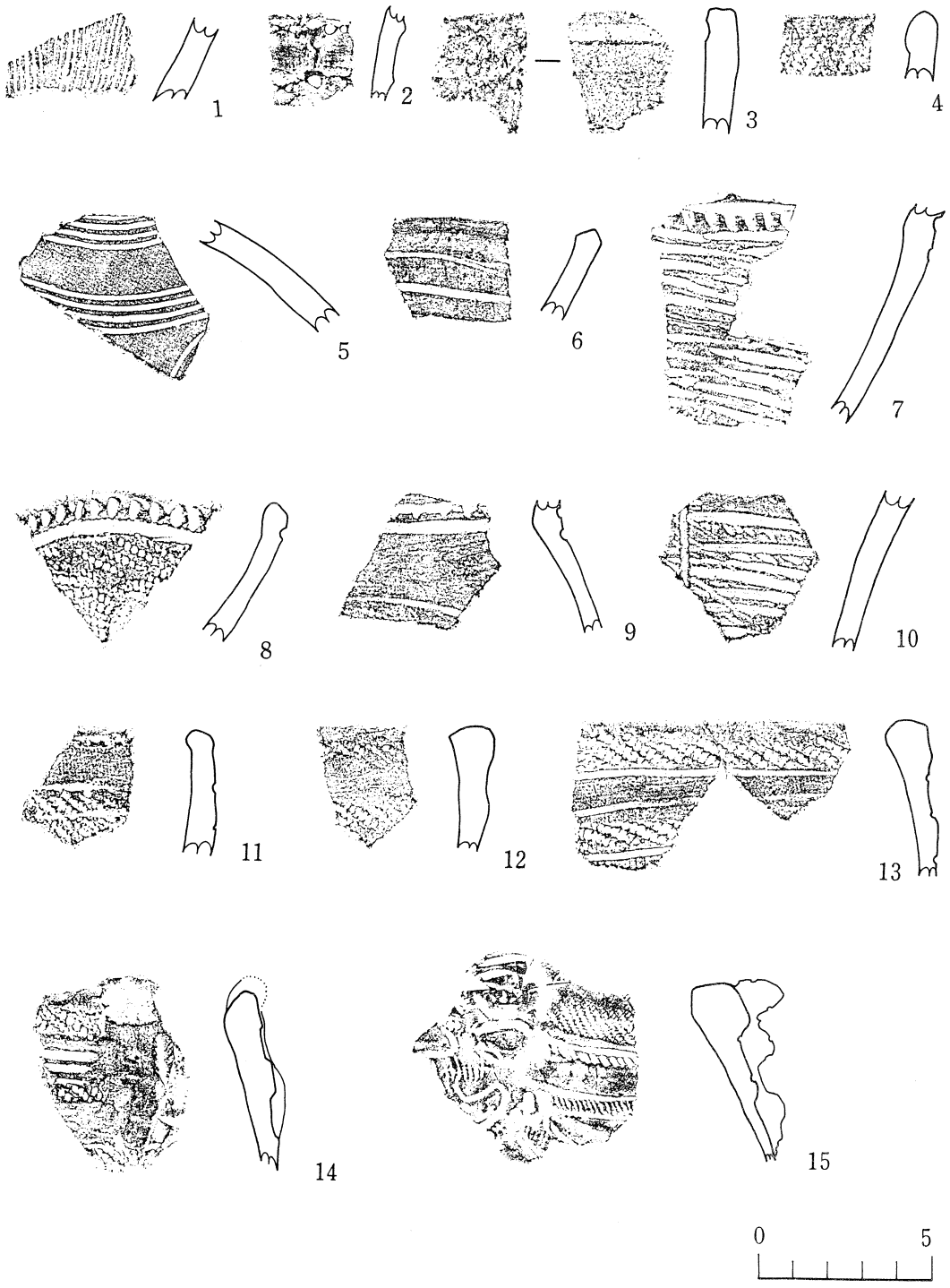


第25挿　C区の層序と土壙

(2)　土壙の出土遺物

土層の断面を計測した後、土壙内の遺物を確認するため、土壙内に残された土壌を全部採取し水洗いすることにした。その土壙の量は、0.07 m^3である。

出土した土器は、拓本をとれる大きさの破片が少なく第I-8図にのせたものがほとんどである。出土した



第I-8図 C区土壙覆土内出土土器

土器の時期は、縄文後期堀之内1式から安行2式までほとんどの時期の土器が認められた。最も新しいのが安行2式であるから、それ以降に造られた土壙と考えてよさそうである。

石製品は、碧玉の中央部に穿孔を伴う玉の完存1、半欠損1だけであった。縄文人にとって玉はどんな意味を持っていたのであろうか。土器が小片ばかりなので、ゴミ捨て穴と考えると玉など大して重要なものではなくなってしまう。また逆に玉は極めて貴重なものと考えれば、土壙は大切なものを埋納する施設、あるいは墓壙として利用したとも考えられる。この程度の土壙ならば150 cmくらいの人間を屈葬にすれば埋葬できる。性格のはっきりしない土壙である。

その他の遺物としては炭化したオニグルミ、ヤマグリ、トチなどの植物遺存体、シカの鹿角や骨片、小魚の椎骨片などである。

(3)　C区の層序

盛土　建築廃材やコンクリートブロックなどが混じった層である。排除するのに人力では難しい。

第Ⅰ層　旧水田の耕作土で稲株が観察できる。暗褐色土層で、遺物は磨耗した土器の細片を含む程度である。

第Ⅱ層　やや粗い砂粒を含む明るい褐色の土層である。調査区まではのびていない。

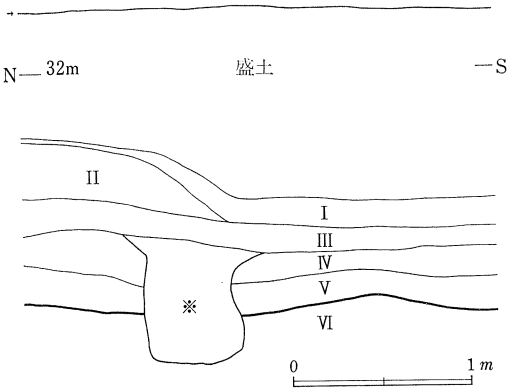
第Ⅲ層　若干粘質のある土層で、第Ⅰ層と類似した褐色の土層である。

第Ⅳ層　遺物包含層である。粘性の強い黒褐色の土層である。

第Ⅴ層　鉄分を含む橙褐色で砂の混入の多い土層でかなり粘性が強い。遺物はほとんど混入していない。

第Ⅵ層　黄褐色の砂層で厚さは、1 m 20 cm位ある。砂粒は細かい。湧水があり、断面調査用の試掘溝も下部より倒壊するようになってしまった。砂層上面の標高は30.66 m位で、A区の砂層土面とほぼ同じレベルである。

※　土壙覆土は漆黒の細砂を含む土層である。

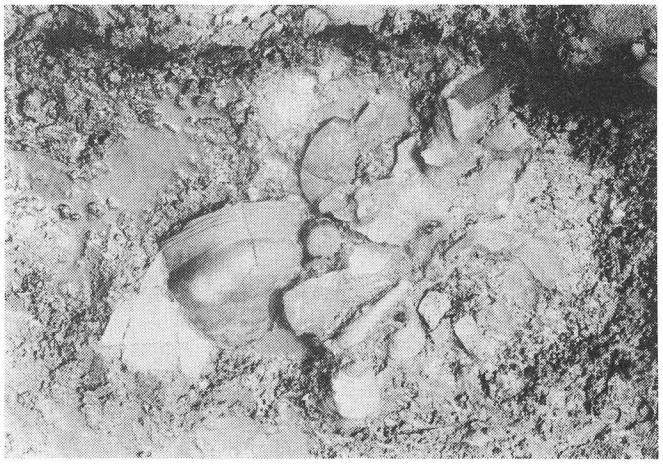


第Ⅰ-9図　C区基本土層断面図

C区で遺物を採集することができたのは、第Ⅰ層暗褐色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層黒褐色土層である。第Ⅰ層は耕作土で遺物は小さい。C区で基本的な包含層は第Ⅲ層、第Ⅳ層である。その厚さは約30 cm程度である。第Ⅴ層は、A区第Ⅶ層に対応するのではないだろうか。第Ⅵ層の上面は、A区の第Ⅷ層の上面とほぼ等しい点、外塚周辺の沖積地の成立を知る手懸になるであろう。砂層は1 m 20 cmあり、その下は礫層である。湧水による泥沼の中での調査は困難を極めた。また粘土質でしまりのある土層なので、移植ごてや竹ベラによる調査は、なかなか進展しなかった。

土壙の覆土は漆黒の土層で、炭化物や骨片をかなり混入していた。覆土は1層からなり、色合いなどからすると、A区第Ⅲ層に近いかもしれない。

C区とA区の層序を比較してみると、基盤層はほぼ同一レベルの砂層という点では一致するが、そ



第26挿 C区の晩期土器出土状態

第27挿 C区の土器出土状態

心な注意をもって調査にあたらなければならないことを痛感させられた。

第28挿は、外塚遺跡A区a-3グリッドで出土した人骨を埋納した甕である。この付近で厚さを増した第Ⅲ層黒色土層を掘り込んでいる。釉のない素焼きの甕は、口縁部を下に底部を上にして発見された。口縁部は地表面から約150 cmほど下がる。人骨並びに甕については、専門家の鑑定を経て改めて報告したい。

（今橋浩一）

の他の点では異なる。外塚遺跡では、地点によって層序が異なり、中心となる文化層が異なるようである。C区では、堀之内1式の文化層を欠く。

(4) C区の遺物の出土状態

A区では、1個体分の土器が土砂によっておし潰されたような出土のようすはみられなかった。

第26挿はカグリッドで発見された晩期安行3b式の一括土器群である。浅鉢形土器が折り重なるように出土している。土砂に水分が多く泥の中の調査だったので、何色の土層か明らかにできなかったが、レベル的には、第Ⅳ層上面から第Ⅲ層下部あたりである。

C区は水浸で難しい調査を強いられたが、平面的に調査を落としていくと、黒味を帯びた丸い斑点(径30～50 cm)をみることができた。深さは10～20 cm程度で第Ⅴ層に少し掘り込んだ程度で止まっている。本来は第Ⅲ層あたりから掘り込んだ柱穴だった可能性がある。泥炭状の湿地の調査では、より高い精度、より細

第28挿 人骨の出土状態

II　縄文時代中期末葉・後期初頭の土器

1　中期末葉の土器

加曾利E3式土器（第II-1図1～8）

加曾利E式でも磨消縄文が盛行する時期の土器である。かつての渦巻文や隆帯による文様が簡素化している。1は、頸部で屈曲する甕形土器である。おそらく4単位の渦巻文が施され、その間は窓枠状の区画文となっているものであろう。2～4は、キャリパー状の器形を示している。既して口縁部隆帯の明瞭なものは体部に懸垂文を有するものが多く、口縁部隆帯が扁平なものには口縁部の文様と体部文様が流れるように描かれているものがあるようである。4は窓枠状の空間を太い沈線で充填したものである。5・6は体部の破片である。5はLRLの複節の縄文原体が用いられている。7は縦位の集合条線によって器面を充填した土器である。器形は鉢形となるであろう。8は半截竹管文によって条線が描かれている。

加曾利E4式土器（第II-1図9～25、第II-2図1～17）

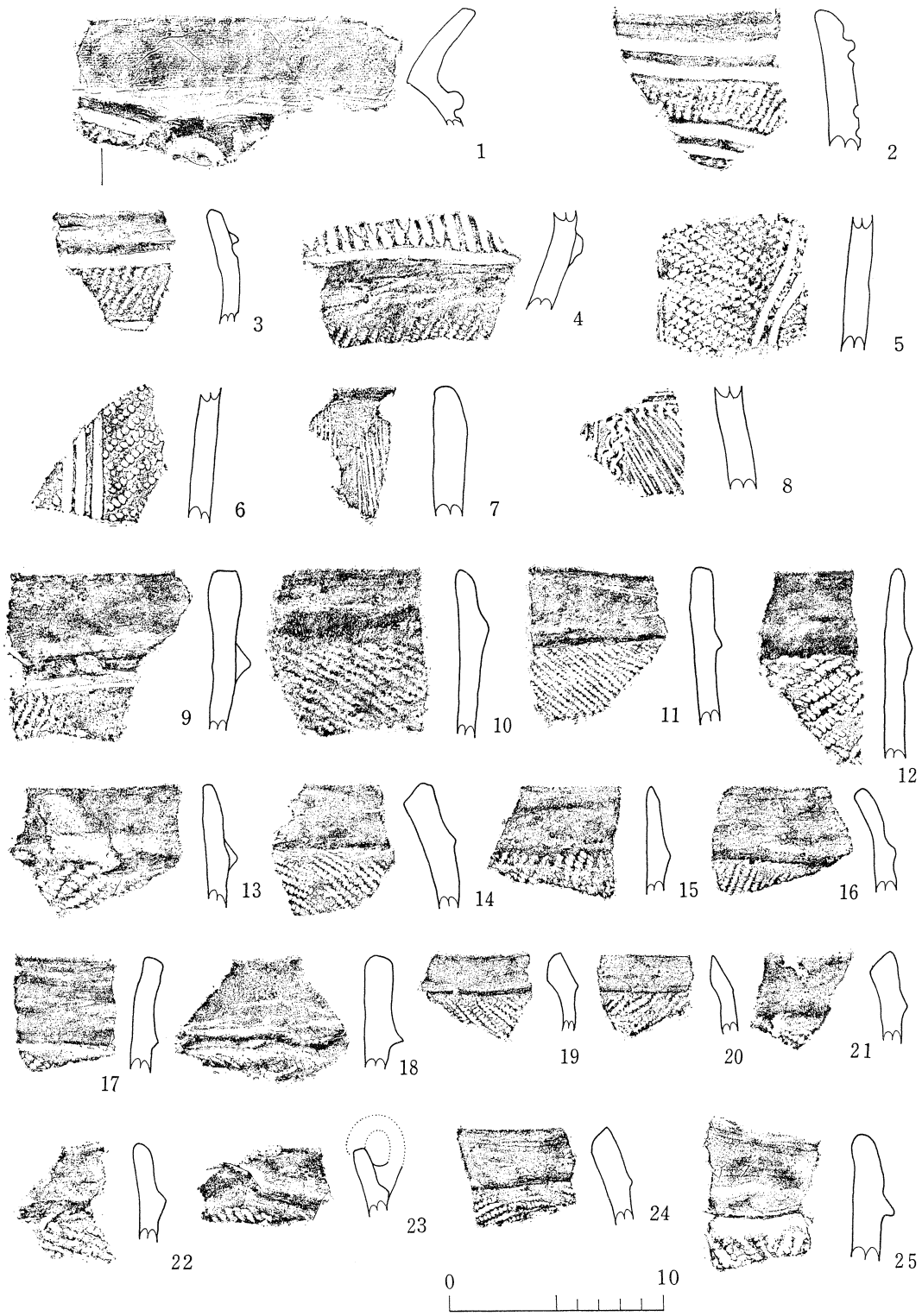
加曾利E3式、同4式とも主体的に出土する層位は見当たらなかった。表土以下各層に混在する状態で出土したに過ぎなかった。出土した土器の器形は、口唇部が肥厚し内側に削がれたような状態を示し口縁部が内彎するキャハパー状の土器と内彎度が弱い或いは直立から外傾に近いものとの2種に大別される。文様は、大半が微隆起線によるもので、沈線によって体部文様の描かれるものはほとんど検出されなかった。

第II-2図5～10は、微隆起線によって口縁部から体部に文様の描かれるものである。同図5・6は器形は異なるものの文様は似ている。5の口縁は低い波状を呈し、上向き、下向きのU字状の微隆起線交互に描かれ、微隆起線内が縄文で充填される土器であろう。6は卵形状の枠状文が体部上半と描かれるものであろう。7は微隆起線によって渦状の文様が描出される土器の体部破片である。9は口縁部のつくりは異なるものの5に近い系統の土器である。8の体部文様は沈線によって曲線的文様が描かれる例である。

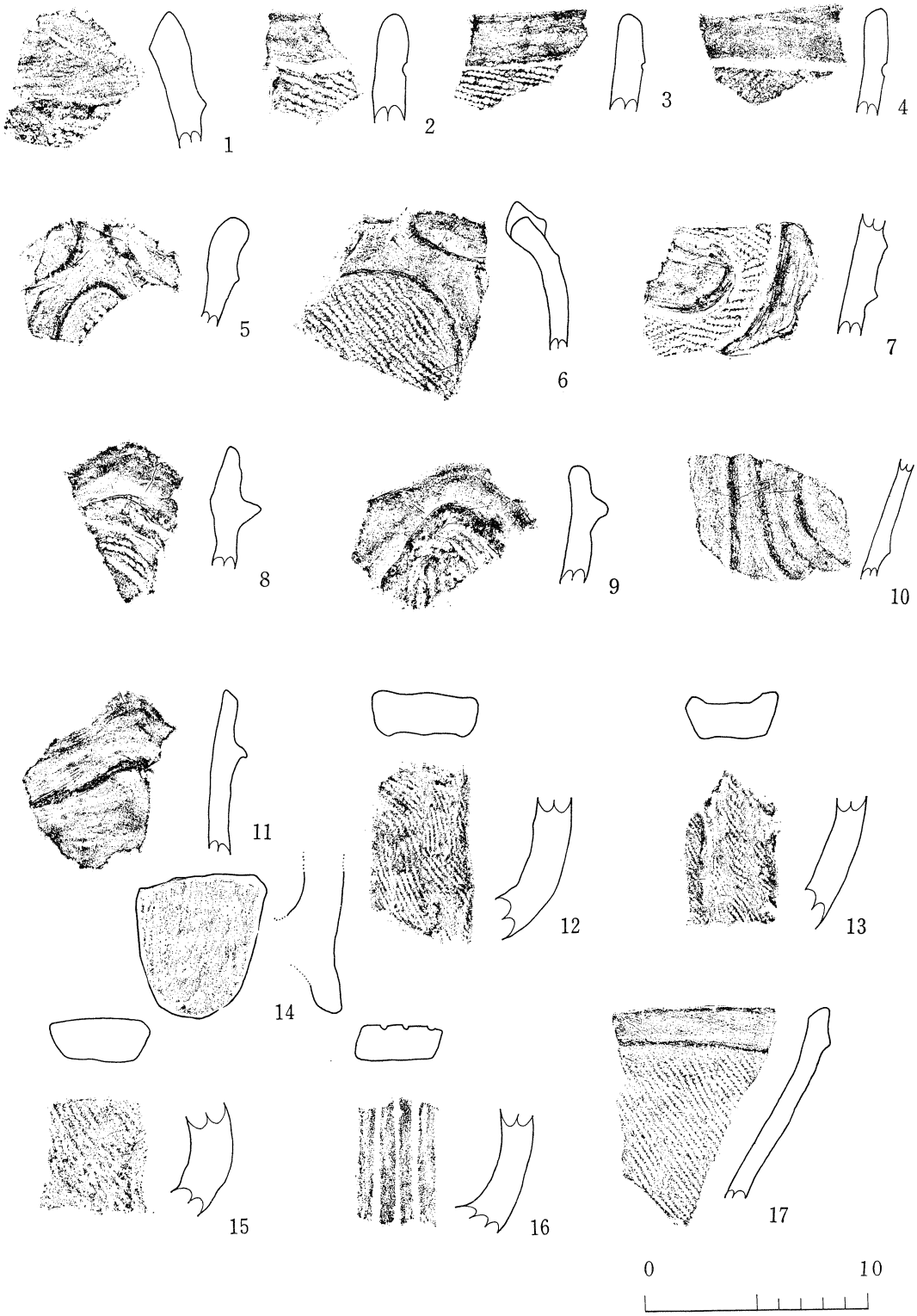
本遺跡の加曾利E4式で最も多いのは、口縁部に横位1条の微隆起線がめぐり体部は斜縄文だけという単純なものである。第II-1図9～25、第II-2図1・17などである。このうち口縁部が内彎し、キャリパー状になるのは、第II-1図14・16・19～24、第II-2図1である。23には、小さな把手を伴う。本来は微隆起線によって体部文様の描かれる土器かもしれない。13は口縁部に貼付文の剝落した痕跡が認められる。

第II-2図2～4は、口縁部下に1条の沈線がめぐり、体部を斜縄文で充填されるものである。本遺跡で出土したのは図示した3点だけである。

第II-2図10・11は無文地に微隆起線の用いられたグループである。10はやや薄手の土器で、体部が球状を呈する器形の土器の下半部のようである。加曾利E4式特有の土器であるが、どこの遺跡で



第II-1図　中期末葉の土器



第 II–2 図　中期末葉の土器

も検出される量は極めて少ない。この種の土器には赤色塗彩物の施されている例が多いが、本例には認められなかった。

第II-2図12〜16は、加曾利E4式に伴う把手を集成したものである。12・13・15は表面に縄文を施されたもの、14は無文、16は3条の沈線を伴う。それぞれ大型の土器に付けられていたものあろう。縄文を施文されている中で13は、中央部がくぼも特異な形状を示している。14は上端、下端が舌状を呈する。

2　後期初頭の土器

称名寺式土器（第II-3図、第II-4図、第II-5図、第II-6図）

本遺跡で出土した土器で所属する層を明確にできるのは、後続する堀之内1式からである。称名寺式は、残念ながら主体なる層を確認できなかった。

称名寺は、1960年吉田格式によって独立した型式として設定され後期初頭に位置付けられた。称名寺式土器が研究者の話題の的になったのは60年代の終わりから70年代初頭である。この時期の特徴は、称名寺式の独自性を否定的に扱う論文が輩出したことである。これに対して、称名寺式の存在を積極的に認めるとともに、その系統、分布、細分をより深く追究しようという動きがでてきたのは70年代後半である。これが、今村哲爾氏の「称名寺式土器の研究」と柳沢清一氏の「称名寺式土器論」である。それぞれ、方法や考え方に相違はあるものの双方とも容認しうる点を十分備えており、いずれかを否定することはできない。現在、称名寺式土器に関して2氏ほど深くかかわっている研究者はいない。この2大研究家の歩み寄った研究が望まれる。

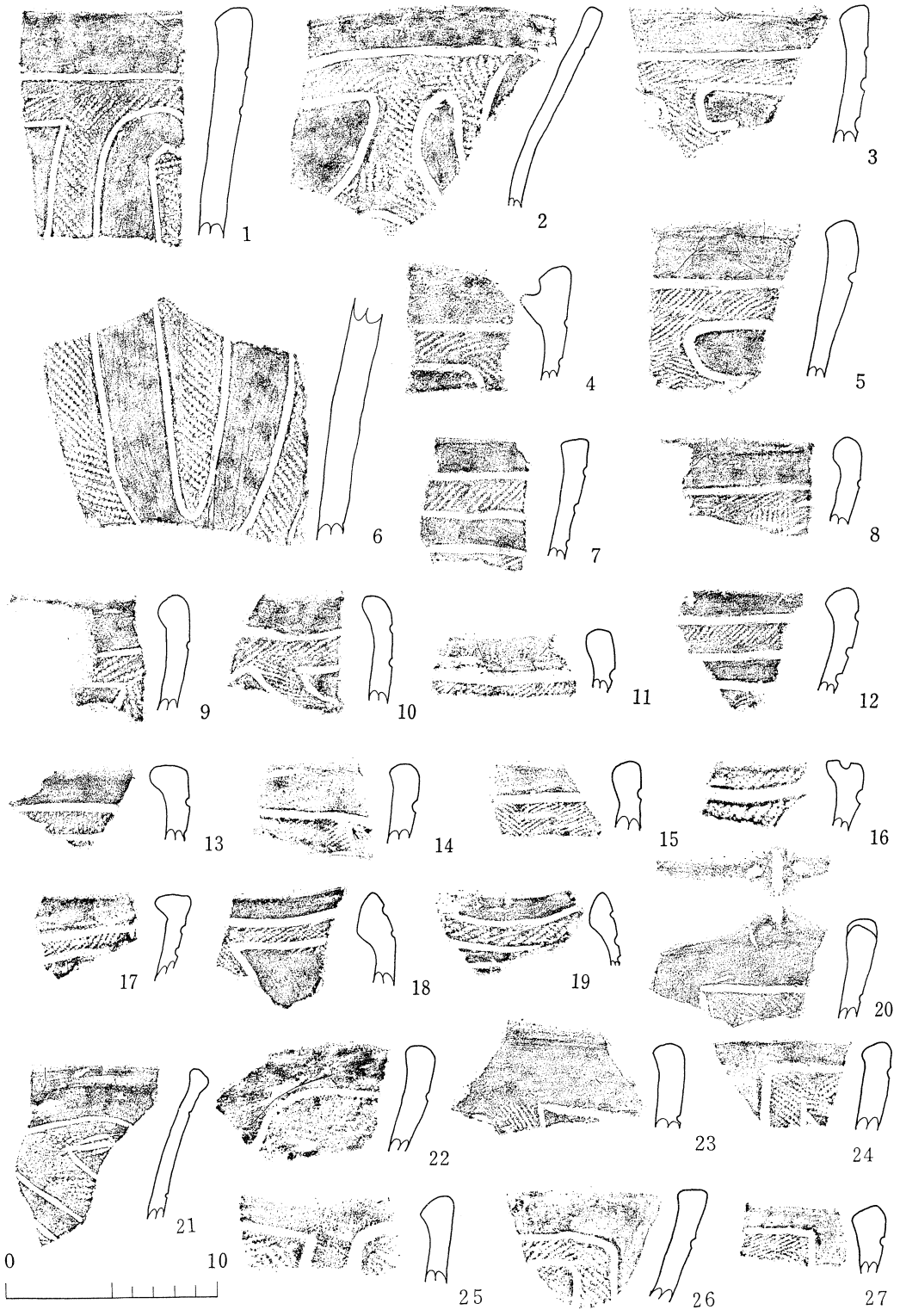
今回出土した称名寺式は、器形や文様を復元できるほどの資料がなく多くを認ることはできない。本遺跡出土の称名寺式に関しては、長岡芳氏によって「真壁町史料　考古資料編II」(1982）に大型破片が紹介されている。今回の調査地点では、小形破片が各層から出土したが、他に称名寺式が主体となる層の存在することが予測される。

以下、出土土器の説明をするが、単純に充填縄文土器と縄文を伴わない土器に大別する程度にする。

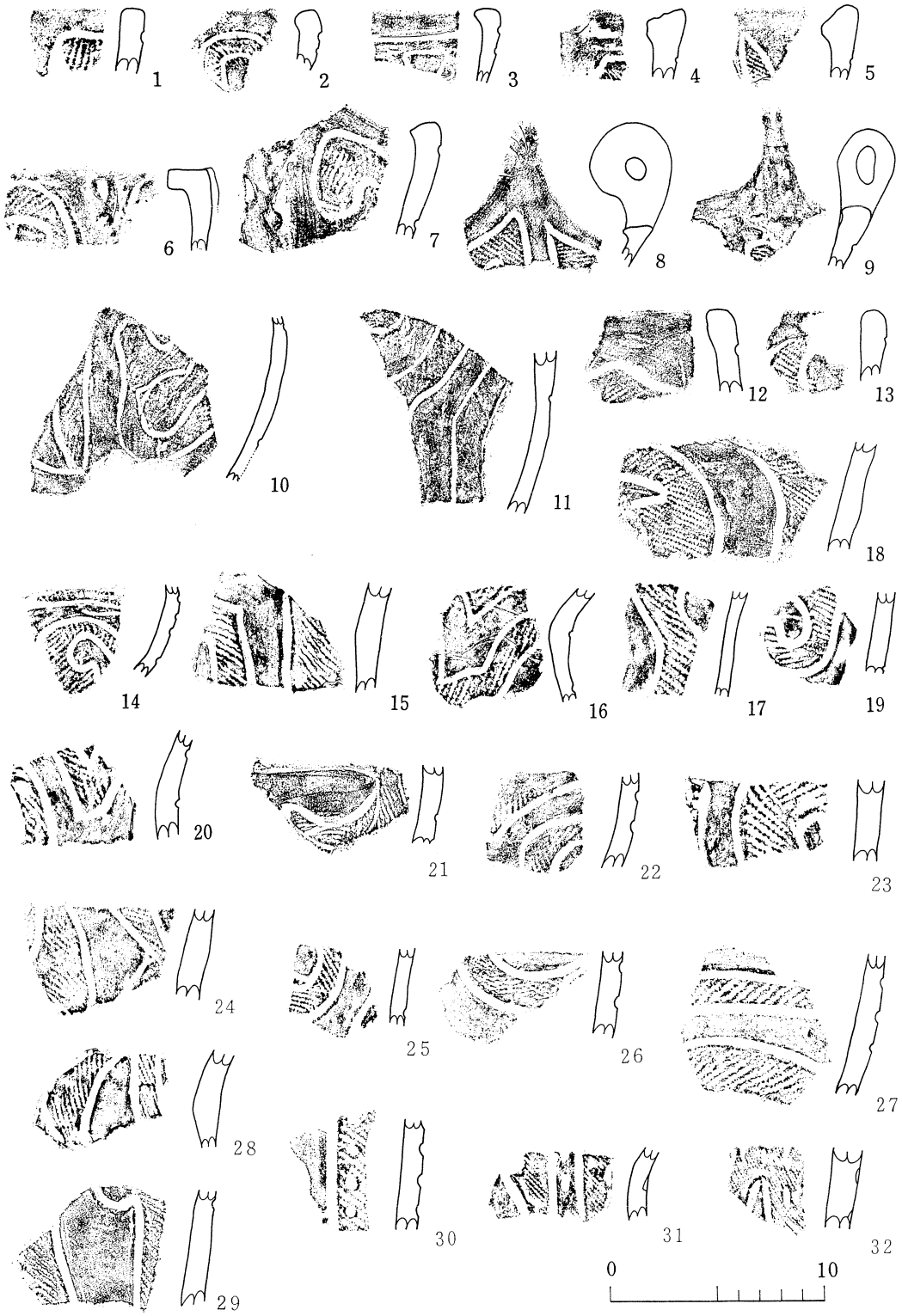
充填縄文の土器（第II-3図、第II-4図）

称名寺式の特徴的な文様としては、J字状文、スペード文、鉤状文、渦状文があげられるが本跡の出土例は、それらが複合したもので特徴的な文様を認定できるものは多くはない。口縁は、平縁が多く、波状口縁（第II-3図20・23、第II-4図4・7）や把手を持つ例（第II-4図8・9）などは少い。器形は、一般的な深鉢が多い。胴部にくびれのほとんどない深鉢（第II-3図1)、口縁部の大きく外彎し胴部のくびれの強くなる深鉢（第II-3図2)、口縁部の内彎が顕著な深鉢（第II-3図18・19）など以外は、口縁部が少し開き気味で胴部のくびれのさほど著しない深鉢で数量的にも多いようである。

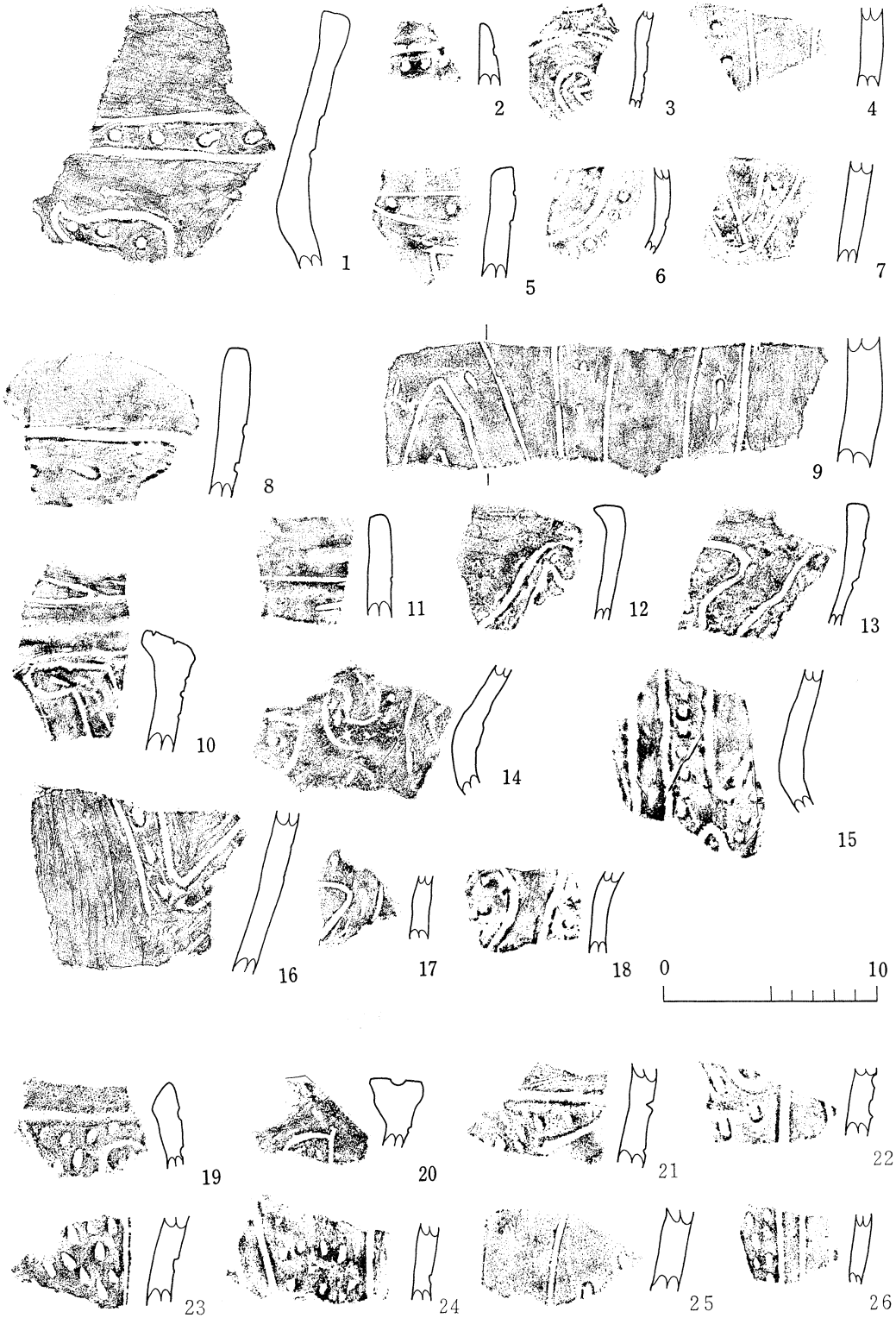
第II-3図1は、同図6と同一個体の破片である。器厚もあり、かなり大形の深鉢になるようである。第II-3図4は、口唇内側に太いなぞりが加えられ特異な断面形態を示す。第II-3図20の波頂部には、刻みが加えられ、その両側に円形の刺突を伴っている。第II-4図6・7は、縦位の隆帯を伴う例であるが、6は縦長の刺突、7は器面に垂直方向から押捺を加えられている。第II-4図30〜32は、刺突文を加えられたグループである。30・32は充填縄文の上に加飾されているのに対し、31は無文



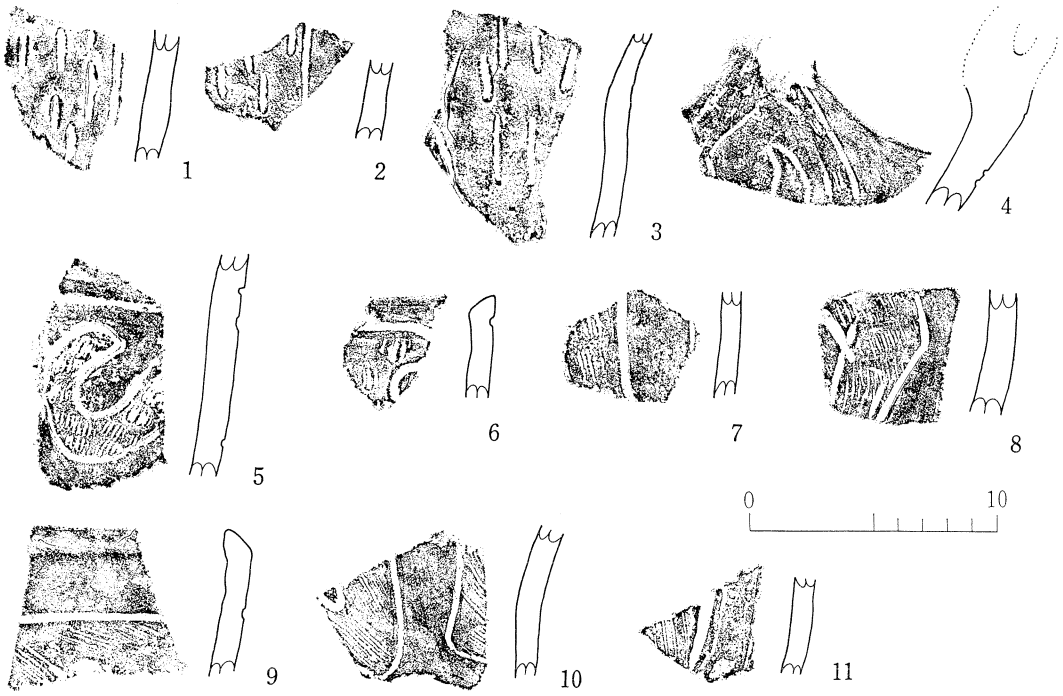
第II-3図　称名寺1式土器



第 II–4 図　称名寺１式土器



第II-5図　称名寺2式土器



第 II-6 図　称名寺 2 式土器

部に加えられている。また、30 は円形に近いが、31・32 は縦長である。第 II-3 図 21 は、文様を描く沈線が浅く、充填される縄文も粗雑であり、他例に比べて新しい趣きがある。

ここに例示したものは、称名寺 1 式の発生期のものは見あたらず、称名寺 1 式の文様が完成してより発展的な展開を見せる時期に相当するものである。

列点文の土器（第 II-5 図）

出土量は、充填縄文の土器に比べると少なかったが、列点文の多様な施文手法を見ることができた。

第 II-5 図 1〜7 は、沈線による区画内に正円形の刺突を 1 列加えたものであ。1 は大形土器であるが、くびれはさほど強くなさそうである。

第 II-5 図 8〜17 は、器面に斜方向からの刺突を加えてできた列点である。10 は口唇部を幅広くとり、沈線による文様を加えた波状口縁の土器である。14 は J 字文がよくわかる例である。12・13 は、基本的な文様がかなり乱れており、次型式への傾斜を十分示している。

第 II-5 図 18〜26 は、沈線による区画内を列点文によって充填した一群である。第 II-6 図 1〜3 は、列点というよりは、むしろ短沈線と呼んだ方がふさわしい。短沈線によって沈線区画内を充填したものでであり、第 II-5 図 18〜26 とは区別すべきものである。堀之内 1 式まで下ると思われるが類例を待ちたい資料である。

櫛歯状施文具による土器（第 II-6 図 4〜11）

第 II-6 図 4〜8 は沈線区画内に施文具で器面を引掻くようにしてできた文様である。4 は波状口縁土器で、波頂部には把手を持つようである。9〜11 は、4〜8 に類似した施文具で器面をなでるようにしたため、沈線区画内が条線化したグループである。

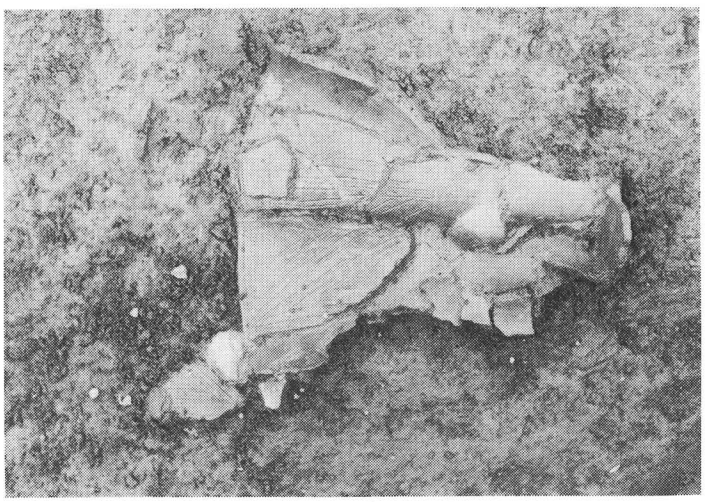
棒状施文具による列点文や櫛歯状施文具による文様は、称名寺２式である。本遺跡の称名寺２式は淡褐色を呈するものが多く、称名寺１式が暗褐色や橙褐色が多かったのに比べるとおもしろい傾向である。称名寺式の文様を描く沈線は、称名寺式たらしめる重要な文様要素であるが、称名寺２式になるとその引き方もやや乱雑な感じである。

堀之内１式

堀之内式土器は、山内清男氏によって千葉県市川市堀之内貝塚出土の土器を示準に設定された。関東地方で堀之内１式を出土する遺跡は、極めて多い。それだけに資料も膨大な量を誇り、中期的様相を残す一方文様や器形の多種多様化の著しい後期土器文化の初頭らしさを見せている。また地域差は指摘されているものの、堀之内１式の分布は近畿から東北まで広範囲に及ぶ。後期中葉の加曾利Ｂ１式土器とともに関東土器文化の拡散期と言えよう。このように縄文式文化の極めて重要な位置を占めているにもかかわらず、あまりにも資料が豊富なためか卓越した堀之内式土器論、堀之内式文化論はいまだに現われていないようである。

(1)　堀之内１式土器の出土地点とその状況

本遺跡で堀之内１式の完形土器や大形破片が出土したのは、主にＡ区である。Ａ区の第Ⅶ層は堀之内１式土器の基本文化層である。第６層茶褐色土層は、第Ⅷ層黄褐色砂層からの水の浸透が著しく、調査中は足ととられるなど調査に困難な土層であった。土器は、全く完形というものはなく、完形といっても復元完形可能なものばかりであった。また、大形が多く出土したのは、b—4・5、c—4・5、d—4・5などのグリッドに多かった。これらのグリッドは、かつての沼沢地により近い所である。土器は横転し上から圧迫されたような感じでつぶれているものが目立った。



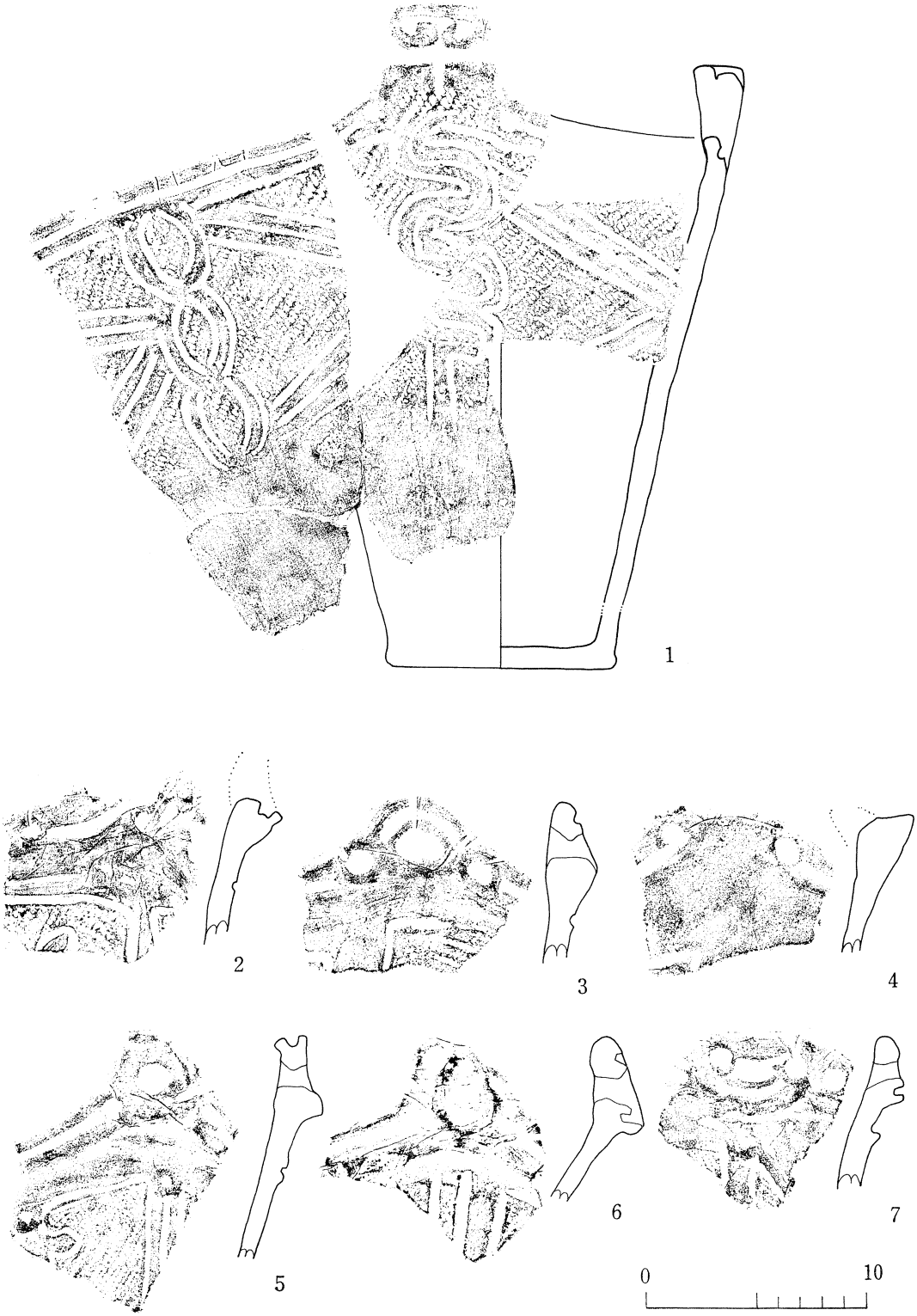
第29挿　堀之内１式土器出土状態

(2)　堀之内式１式土器概観

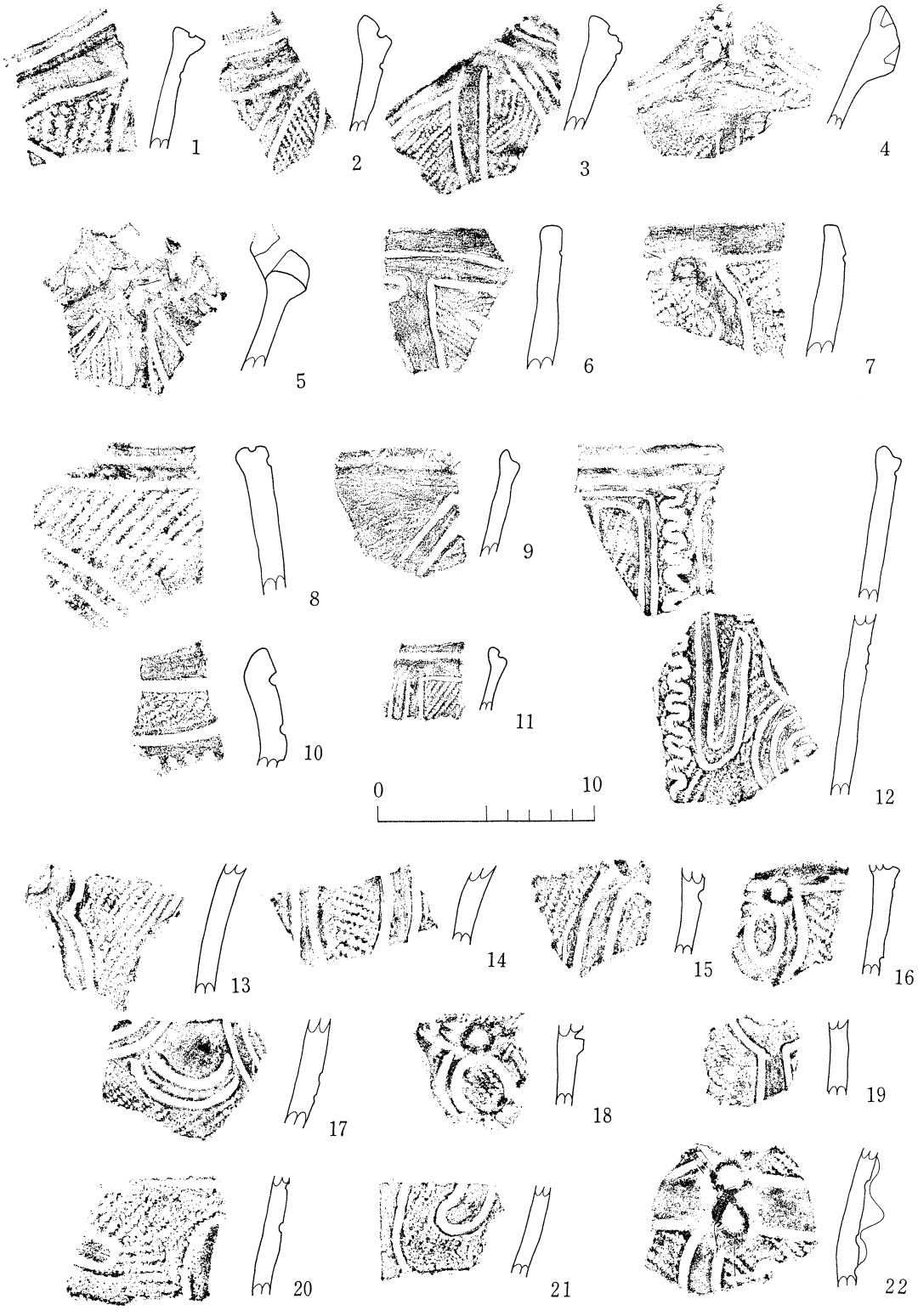
口縁部や体部文様の特徴からいつかに分類し検討する。尚、拓影には、第Ⅶ層以外から出土した土器も含めておいた。

第１類　体部が磨消縄文によって装飾されたものである。

Ａ種ａ　波状口縁土器で、波頂部に突起を有し、称名寺式の体部文様を継承したものである。第II-7図2〜5などがこれである。器形は、体部半ばで少しくびれ体部下半が少しふくらむようである。器厚は厚い。いずれも突起の中央に貫通孔を有し、その両側に円形の盲孔を施し、両側に沈線が引かれている。5と第II-11図6は、体部文様の上辺に円形貼付文が施され、波頂部の下には懸垂する沈線が加えられている。口縁部に連続刺突があり、Ｃ字状沈線のみられる第II-9図10などもＡ種ａに



第 II–7 図　堀之内 1 式土器



第II-8図　堀之内1式土器

含まれよう。

A種b　波状口縁で、A種aに似ているが、文様を区画する沈線が連繋せず、独立した直沈線によって文様が描かれるものである。第II-7図6・7、第II-8図1～3・5などである。第II-8図5には、波頂部から懸垂する押捺を伴った隆線が施されている。A種bの波頂に上がる肩部は三角形状の区画文が形成されやすい。

A種c　波状口縁の波頂部が単純化したした第II-8図4が代表的なものである。4は縦位に1対の円形刺突が加えられている。口縁部には、波頂部の左右1対の円形刺突から延びた沈線とその下の稜には刻目が施されている。口縁外稜の刻目は、第II-8図5に認められる称名寺式からの伝統的な押捺を伴う隆線とは異なる。

A種d　波状口縁土器の中でも洗練された磨消縄文による文様が展開する第II-10図8である。最も大きな特徴は、体部文様の下限が明瞭になったことであろう。波頂部の貫通孔は、中央より右側により、波頂部から隣接する波頂部まで沈線が延びる。また、波頂部からは、刻目隆線が下垂し、体部下半を廻る隆線と交わる。縄文はLRで、無文部にもなごりが残り条の傾斜も一様であり、充填縄文ではないことを明示する。体部文様は、縄文部と無文部が対称的に用いられている。A種a、A種b、A種cのそれぞれの特徴が採り入れられた土器であり、それらが発展的に組織化され、体部文様の下限を設定するなど、堀之内2式への傾斜を見せている好例である。

A種は、大きな波状口縁の外反する深鉢形土器で、体部の屈曲が弱くむしろ底部からゆるいカーブを描きながら開く器形が多い。B種は、平縁やこれに小突起のある口縁部を集めてみた。

B種a　称名寺式土器の文様を直接的に引き継いだ土器である。第II-8図6は、底部から単純に立ち上がる深鉢である。口縁部下に1条の沈線を巡らし、その下に退化した文様がうかがわれる。第II-8図7は、J字状文の系譜をひくものでる。下垂するJ字状文の出発点には円形貼付文が加えられている。後者の器面調整や縄文は前者に比べる粗雑である。

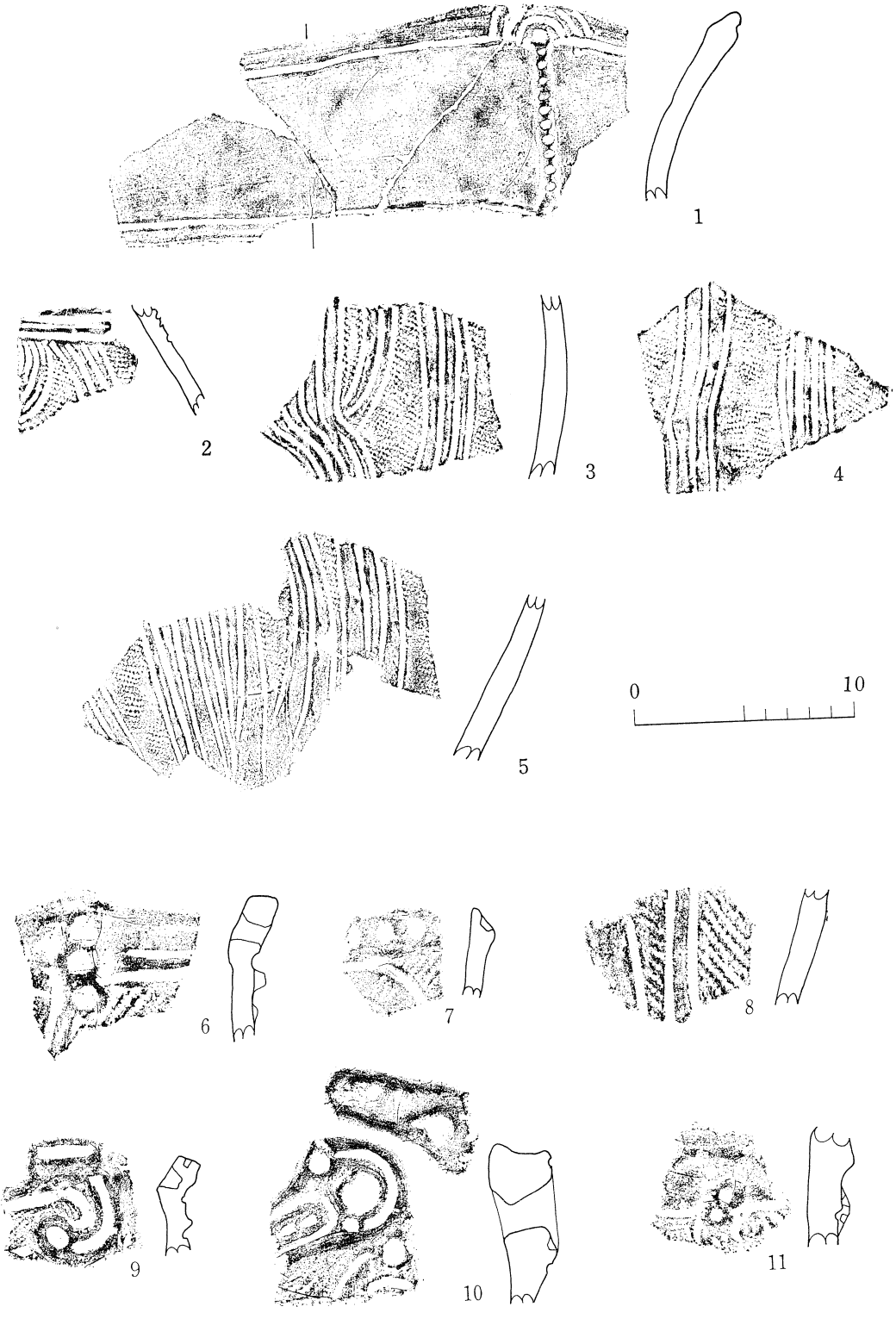
B種b　口縁部に小突起を有し、8字状の貼付文や円形の貼付文が多用さるものである。第II-9図6がそれである。体部文様は、B種aに近似するものである。第II-8図13～21などはB種a・bの体部文様のようである。第II-8図22や第II-9図11などは、波状口縁となりなる土器の頸部かもしれない。

B種c　口縁部に横位の枠状部分が設けられる第II-9図9、第II-11図3などである。器形は口縁部が内彎し体部が脹む第II-11図3に対し、第II-9図9は小突起が付けられ、頸部屈曲を見せずすぼまる土器であろう。第II-8図10は、小波状を呈し、口縁が少し内縁する深鉢形土器であろうが、第2者に比べると大まかな感じがする。

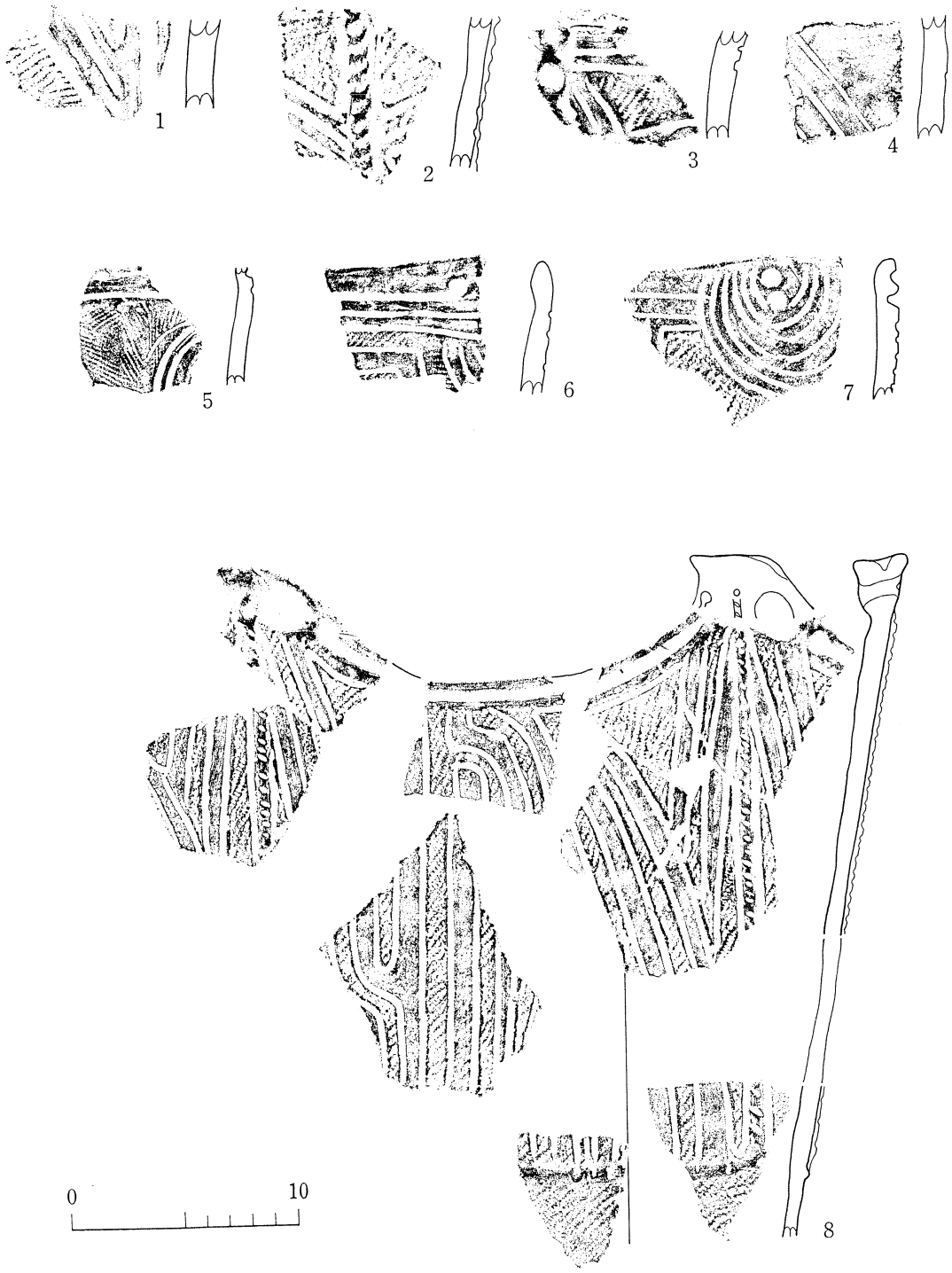
B種d　直線的沈線による文様の土器である。第II-8図9、第II-10図1～4などが含まれよう。A種bに対応するものである。第II-8図9の口縁部断面は堀之内1式特有のものである。

B種e　磨消縄文と沈線が併用される土器である。第II-8図12は、蛇曲沈線と渦状沈線磨消部、C状沈線部が組み合わせられたものである。口縁部も外側に沈線がひかれ、堀之内1式特有のものである。縄文部より沈線や磨消部が目をひく構成になっている。

B種f　同心円文状の沈線が特徴的なものである。第II-10図7は縦位1対の円形刺突を中心に同心円文が描かれている。8字状貼付文の影響であろう。第II-10図6は、小波状の口縁部で、波頂



第II-9図　堀之内1式土器



第 II–10 図　堀之内 1 式土器

部には3つの円形刺突が並ぶもののようである。緻密なLR縄文が充填されている。第II-10図7より後出の土器で堀之内2式に近いものと思われる。

B種g　口縁部が大きく開口する甕鉢土器である。第II-9図1～5は同一個体である。ゆるやかな波状を示し、波頂部には円形貼付文を有し、まわりには同心円文が施されている。円形貼付文からは刻目ある隆線は下垂し、頸部の円形貼付文につながる。頸部下の脹みはじめる体部には口縁部とは逆向きの同心円文が見られる。体部文様は3～4条1組の沈線が縦位に流れ、磨消されている。第II-10図5は、第II-9図1～5を小形化したものであろうか。

第2類　堀之内1式の理解を妨げているのはこの2類、縄文を地文に竹管、半裁竹管、ヘラ状、棒状などの施文具によって沈線文様の土器である。沈線文様は多種多様で、器形も幾種かあり、分類者を悩ませている。今までの分類を見ると器形を優先させて文様を分類したもの、文様の構成要素で分類したもの、施文具を中心に分類したもの、文様を最優先させて分類したものなど様々である。これもこの種の土器の文様、器形、施文具が多様で分類するのが難しいからであろう。ここでは、筆者の困惑したままの私見で分類を試みたいと思う。この第2類は、単一文様が少なくいくつかの文様が複合的に用いられたものが普通であり、この文様で分類するということは難しいが、複合文様の中でも特徴的な文様をとり上げて説明することにする。

A種　蕨手状沈線文が体部に描かれているグループである。

A—a　単一沈線によって蕨手状文が描かれている。第II-11図9は、粗い縄文を地文としている。口縁部には小突起が付けられ、小突起には2個の円形刺突が施され口縁をめぐる沈線が引かれている。第II-11図9よりもていねいに作られているは、同図10である。口縁部には刻目のある隆線がめぐり、太くくっきりとした蕨手状文が描かれている。

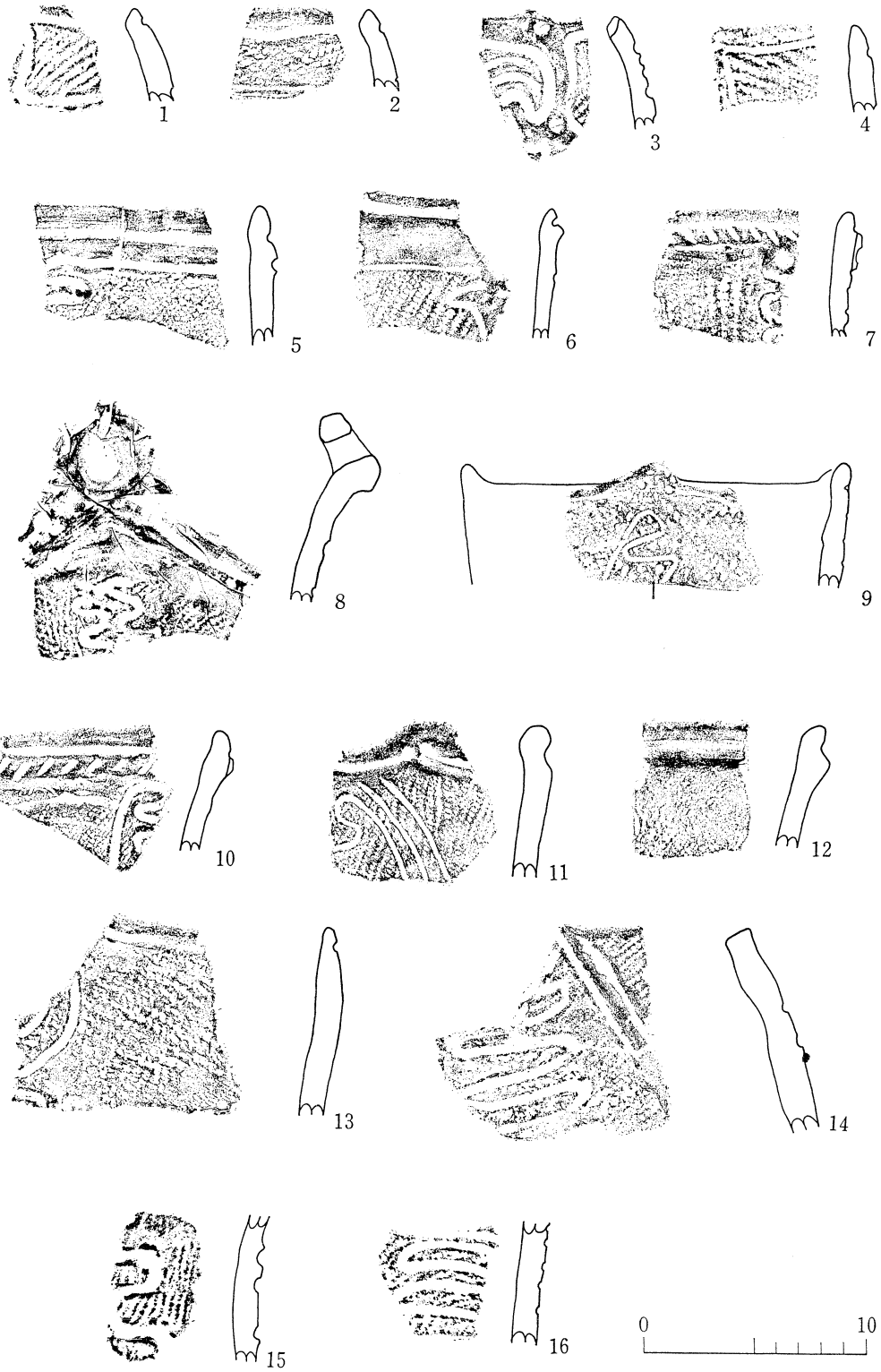
A—b　蕨手文は単一沈線によって描かれているが、2条の弧線によって囲まれているのが第II-11図11である。口縁部には丸味ある小突起が付く。口縁部文様は第II-11図9に似ている。

A—c　多状の沈線によってくずれた蕨手状文が描かれている。第II-12図17・20がこのグループの代表的なものである。17は蕨手というよりはゆるい渦状をなすかもしれない。20は、頸部に3条の沈線を配し、その下に文様が描かれる。蕨手はかなりくずれ、A—bの発展形態を示している。蕨手と蕨手の間には縦位の沈線（弧線？）が配置されている。

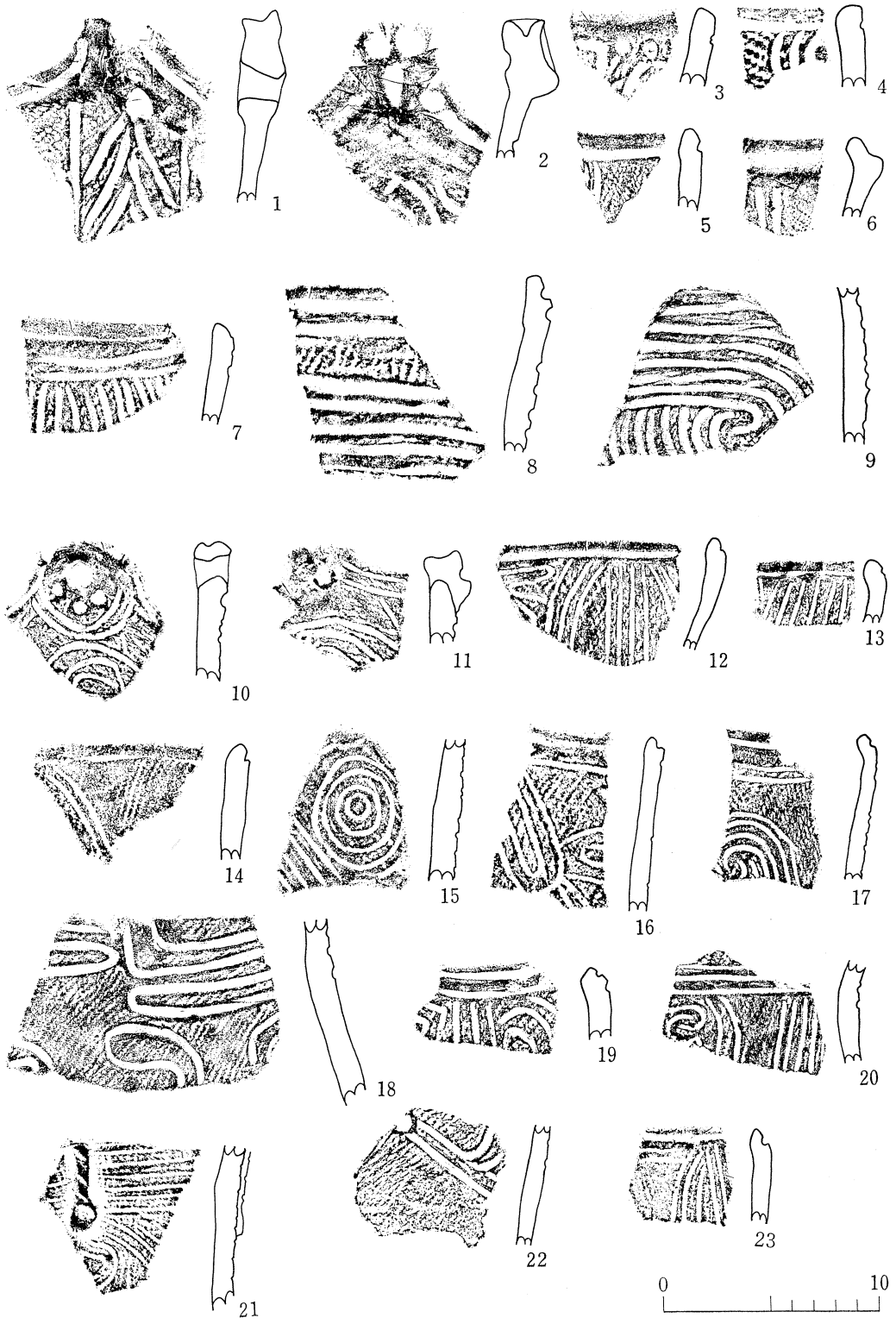
A—d　蕨手の変形で、半截竹管によって文様の描かれているものである。第II-17図1は、ゆるやかな波状口縁の深鉢形土器である。波頂部には2個の円形刺突が加えられ、これを出発点として太い沈線が口縁部をめぐる。波頂部の下にはくずれた変形の蕨手文が描かれ、これをかこむような沈線が下垂する。縦位の変形蕨手どうしは、くの字状に折れ曲がった沈線によって連接させられる。沈線は半截竹管によるもので、1回引くと2条の沈線が表れることになり、単位文様を描く沈線の多条化とみることができる。変形蕨手は、単位文様として両側に囲みをもつものが波頂部の下に、やや簡素化したものがその中間に描かれ、変形蕨手を6本見ることができるが、基本的には3単位である。

B種　蛇行する沈線が特徴的なグループである。

B—a　蛇行する沈線が、単一沈線によって描き出されたものである。第II-11図5・7・8・12がこれである。5・7は平縁、8は波状口縁の深鉢である。5は口縁部に2条沈線をめぐらしている。7は、口縁部に刻目のある隆帯がめぐる。隆帯の下に円形貼付文が施され、そこから蛇行する曲線が下



第 II–11 図　堀之内 1 式土器



第II-12図　堀之１内式土器

垂する。第II-11図12は5・7に近いものであろう。8は、波頂部に貫通孔を有する。波頂部から2条の太い蛇行曲線が下垂する。波底部にも何らかの下垂する文様が施されると推測される。

B—b　蛇行する度合が強く幅広い文様を展開するものである。第II-11図14～16。14は、口縁部の内彎する深鉢である。器厚も他の土器に比べると厚い。蛇行する度合が強いということは、文様の幅を広げるということにつながる。幅が広いということは、器面にその文様の占める割合が大きく単位文様として独立的に見ることができる。

B—c　複合した沈線文様の中で、中央に配置され文様単位の象徴として見ることのできるものである。第II-7図1は、ほとんど平縁をなす口縁の3カ所に突起が設けられている。突起の下に3条の蛇行する沈線が描かれている。文様の中心を成す蛇行する沈線と沈線の間には、2条1単位の向かい合う弧線が3段配置されている。蛇行する沈線文と向かい合う弧線文を逆「く」の字状の3条の沈線が連接する。単純で整理された文様が体部に展開する深鉢である。

B—d　文様の中で中央に配置されるという点ではB—cに共通するが、やや独立性の失われたものである。第II-12図21は、半截竹管によって描かれた沈線である。頸部付近の破片で、口縁部に縦位に貼付された刻目隆線の下にゆるやかに蛇行する曲線が引かれている。両側には弧状の沈線が、これを挟むように施されている。多条化した沈線の中で、蛇行する沈線は目立たなくなる。

蕨手状沈線文と蛇行沈線文は近い関係にある。蛇行沈線に縦位の直線を付加すると蕨手状の文様になる。蕨手状文は、独立的に用いられるが蛇行沈線は堀之内1式の新しい段階になると中核文様の座を譲り、補助的な文様となる。

C種　沈線による円形文が特徴的なものである。

C—a　第II-11図13は、波状口縁の深鉢である。太い沈線によって8字状に描かれる単純な文様が描かれている。

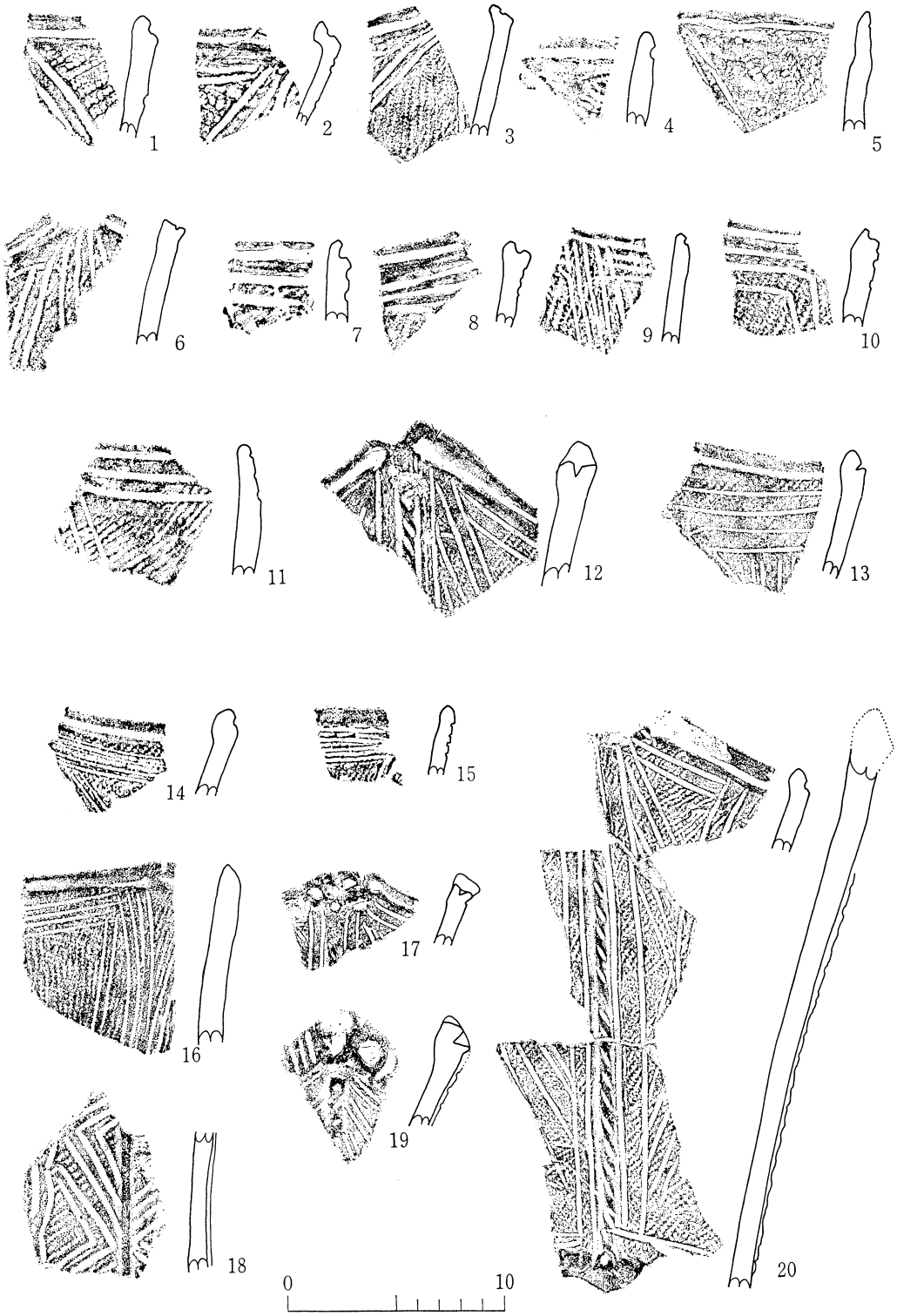
C—b　円形文を描く沈線が多条化している。第II-12図15は、直線との組み合わせにより文様空間を補う文様として同心文状に描かれている。同図10・11は波状口縁部である。10は貫通孔のまわりに3個の円形刺突を加えられている。10・11は、円形文が描かれるのか渦状文になるか判別は難しい。C—a、C—bは同一文様系統下にあるものではないようだ。

C—cは多条化が半截竹管にようものである。第II-16図12は小形の深鉢である。文様は渦状だろうか。

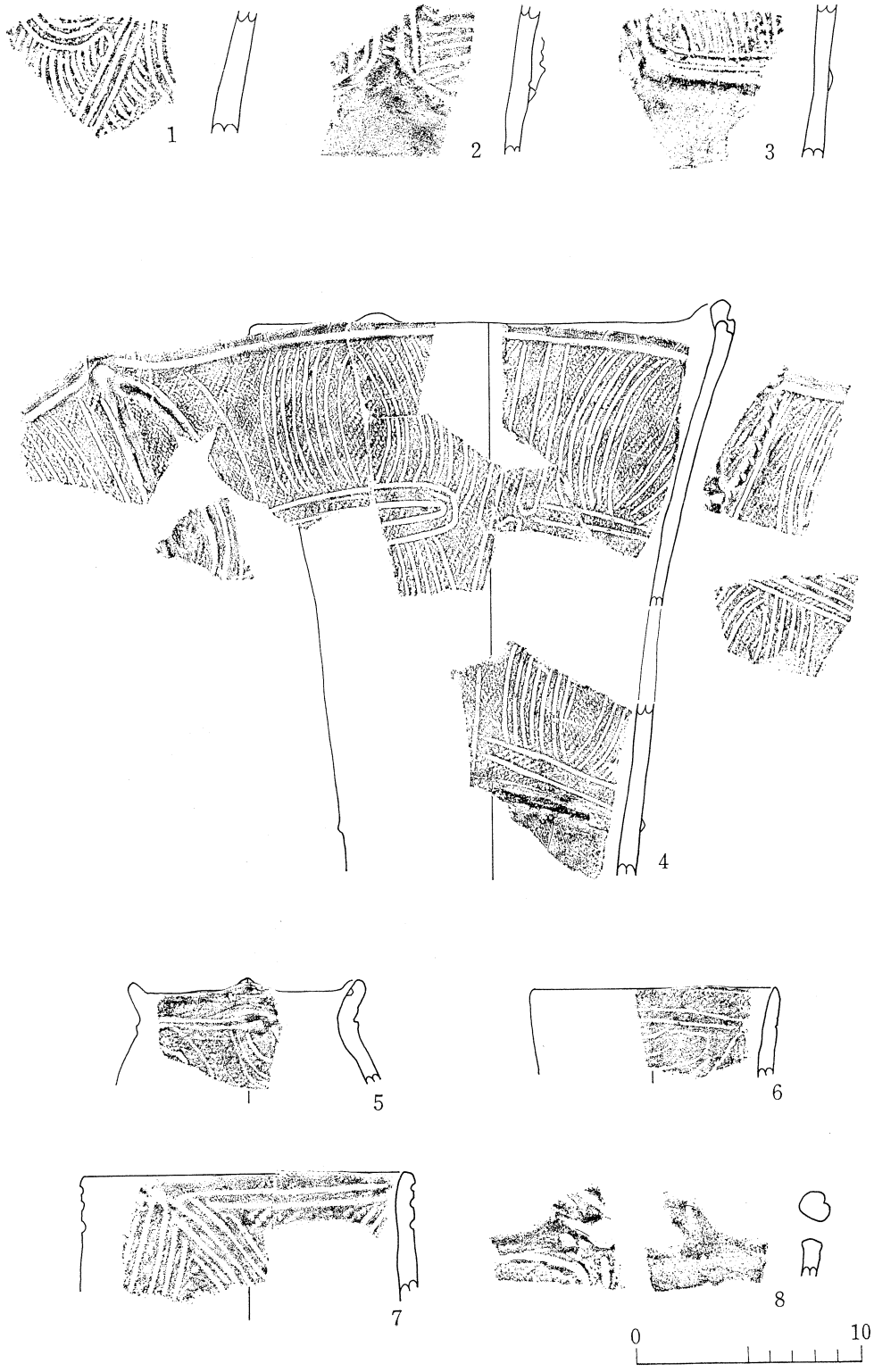
D種　直沈線を組み合わせて三角形を意識した文様が展開されるグループである。拓影にとりあげたものの中には、三角形を描こうとしたものもあるが、単位文様を連接するための沈線も含まれるだろう。

D—a　第II-13図4は、1条の太い沈線によって描かれているが、単位文様を連接したり、空間をうめたりするための沈線ではないだろうか。

D—b　2・3条の沈線によって三角形状の文様が描かれる。中には、単位文様を連接するためあるいは単位文様間を埋めるためのものもあろう。「三角形」という図形をどの程度意識しているのか疑問になるものもある。直沈線の単純な組み合わせで多様化するが一括する。第II-13図3は2条で描かれている。縦位に2条の沈線を垂下させ、それつなぐ斜位の2条の沈線を施すことにによって口縁部側を底辺とする三角形ができる。第II-15図1・3はこの類であろうか。同図2は、波頂部の下



第Ⅱ-13図　堀之内1式土器



第 II–14 図　堀之内 1 式土器

に何かの曲線的な文様が描かれ、それをつなぐために斜めの沈線を描いているものだろうか。概して波状口縁土器では、波頂部から下る口縁ラインを底辺とした下向きの三角形が作られやすい。同図8などはこの類であろう。第II-13図5は、口縁部が薄く他の口縁部より簡素化されている。第II-13図1・7などもこの種に含まれるだろう。

D—c　沈線が多条化しているものである。第II-13図6・9・16、第II-14図7、第II-15図2・5・6などである。棒あるいは竹管による細い沈線あるいはヘラ状施文具による細い沈線によって描かれている。第II-13図6・9、第II-15図6は波状口縁の深鉢であるが、第II-13図6は口縁に沿った沈線が描かれており、「三角形」に対する意識が最も強い。第II-15図6は、先の鋭いヘラ状施文具によって描れている。第II-14図7は、口径の小さい円筒型の深鉢である。第II-13図16、第II-15図5はゆるやかな波状口縁で、半截竹管による縦位と斜位に多条沈線が引かれている。第II-13図16は、口縁に沿った線が引かれているとから、第II-15図5よりも三角形を描く意識が強いようである。

D—d　三角形を描くことを明らかに意図していると思われるグループである。第II-13図11～15・17・18・20、第II-18図1などである。第II-18図1は、底部から直線的に開く深鉢形土器である。縦、横、斜めの沈線を組み合わせている。口縁部には3コの小さく低い突起が設られている。そこに円形刺突を加え、右側に縦長の刻みを並べ、円形刺突と刻みから口縁部をめぐる沈線が引かれている。最も特徴的な点は、三角形が重圏化されていること、体部文様体の下限が決められていることである。器厚も厚くはない。第II-18図1とよく似ているのは、第II-13図20である。第II-13図12・13は20と同一個体である。波状口縁の土器で、波頂部から刻目ある隆線が下垂している。隆線が下垂している。隆線の両端には円形刺突が加えられている。体部文様の下限は低い隆線によって決定されている。沈線により三角形を描く意識はさほど強いとは思われない。この土器は三角形を重圏化するのではなく、三角形の開いた空間を沈線を幾本か引いて埋めている。波頂部の周辺は斜行する沈線、波底部周辺は縦位の沈線が利用されている。

第II-13図18は、基本的にはこれらのグループとは別にすべきものであろう。縦位の隆帯によって体部文様を3分割し、その間に縦位の沈線を施し、縦に区切られた空間を「く」の字状あるいはその逆の沈線で充填している。

第II-13図14・15は半截竹管を用いて多条化させている。14は波状口縁である。

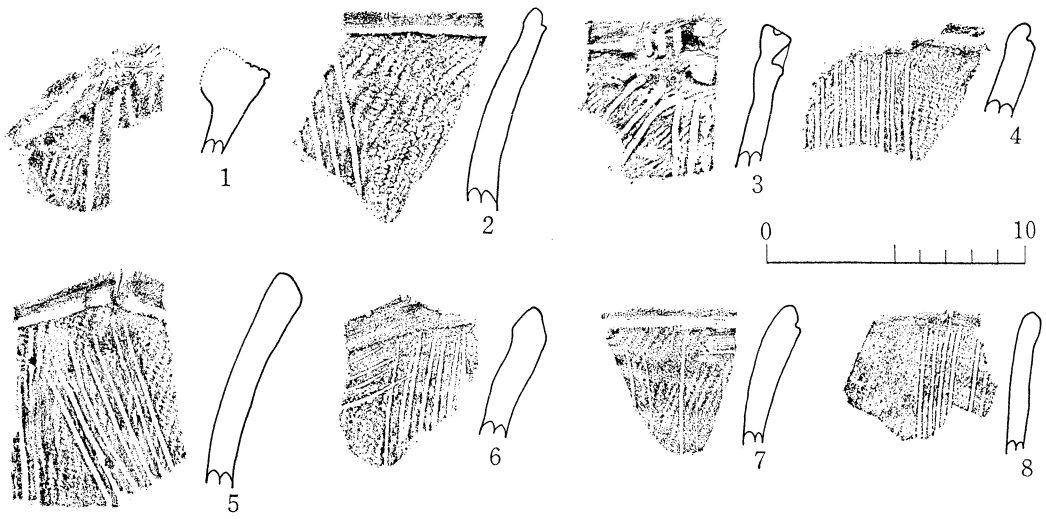
第II-13図17は薄手で小形の波状口縁土器である。2条1組の沈線によって基本的な枠組みが作られる。

E種　方形区画が沈線にって描かれるものである。第II-8図11、第II-11図4、第II-13図10などである。第II-11図4は、口縁部に1条の沈線がめぐり、それに垂直な沈線が底部に向かって垂下する。垂下する沈線は2本かもしれない。第II-8図11は、薄手で小形の土器である。第II-13図10は波状口縁である。果たしてこれらが、堀之内2式の文様区画に影響するものかどうかは疑わい。それ以前に、第II-8図11や第II-13図10は、方形という幾可学的図形を意識しているのだろうということである。むしろ、三角形状の文様やその他の文様の一部分かもしれない。

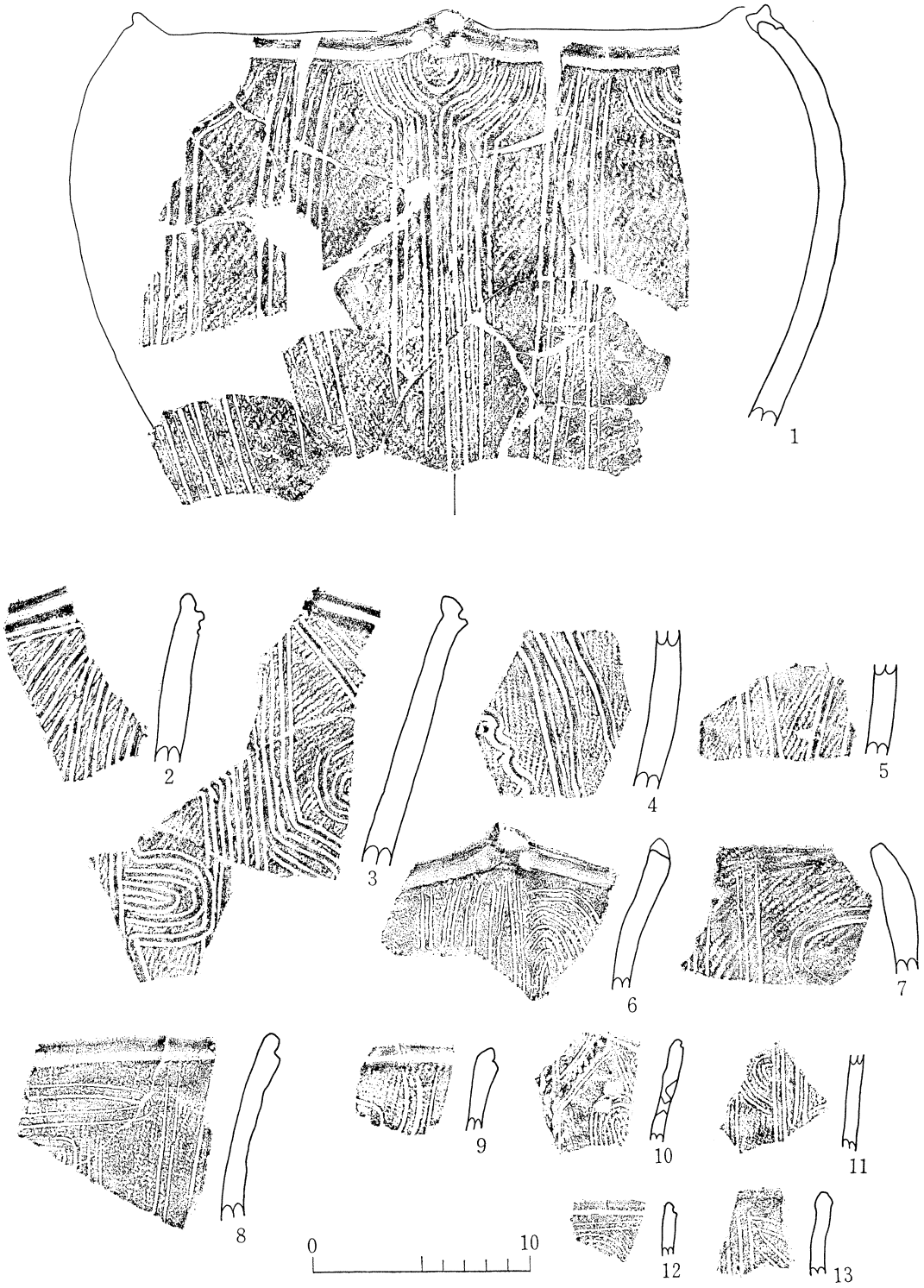
F種　弧線文が体部文様の中で特徴的なものである。

F—a　太い沈線による弧線文が認められるものである。第II-12図4・5などである。

F—b　2条の沈線が対称的に大きく広くものである。もちろん空間が広くなるのでそこには特



第II-15図　堀之内1式土器



第 II-16 図　堀之内 1 式土器

徴的な文様が描かれるはずである。弧線文が補助的に扱われる例である。F—aなどとは口縁部周辺に小さくまとめられているが、F—bは体部下半まで及ぶはずである。第II-12図14。

F—c　集合沈線によって体部下半にまでのびる大きな弧線の描かれる第II-12図7などである。口縁に垂直に下垂する数本の沈線を両側から挟むように弧線が用いられている。同図13なども類似する。同図12は、より発展的に文様が整理され、4条の下垂する沈線を3条の弧線が両側から挟み、これら単位を象徴する文様と文様の間に自由な曲線文様が描かれている。第II-12図23もこのグループであろう。

F—e　F—b・cの発展的なものと考えられる半截竹管により条線化した沈線による文様である。第II-15図9は、平縁の深鉢である。単位文様のポイントは口縁部に付けられた2個の円形刺突である。この下には縦位の条線を挟むように両側に弧線が施される。条線は体部下半にまで及ぶ。

器形は異なるが、第II-17図2などは、このグループと考えてよいだろう。口縁の外彎する深鉢形土器である。口縁は、ゆるやかな波状をなす。波頂部には2個の円形刺突が加えられ縦位の刻目が右側に施される。第II-18図1の口縁と似ている。波頂部の下には3条の半截竹管による条線（計6本）が引かれている。頸部には横位の半截竹管による沈線がめぐる。体部には波頂部から下垂した沈線を延長するかのように4条（条線は8条）引かれている。それを挟むように弧状の条線が見られる。また一部には蛇行する条線なども採用されている。（※拓影の頸部以下は実際とはずらしてある。）

F—f　弧線文が体部文様帯の中で2段に構成され、文様の下限の明瞭なものである。第II-14図4に象徴される。平縁の単純な深鉢形土器である。器厚は薄く焼きは堅い。口縁部には3個の小突起を有し、小突起の下には「P」字状の断面三角形の隆線や「Y」字状の刻目ある隆線が加えられる。体部文様帯の下限は、低い隆線によって決定されている。体部文様は、縦位に3分割され、その間は縦横に4分割され、その$\frac{1}{4}$空間に集合沈線による向かい合う弧線が描かれている。

G種　縦位の直線が特徴的なものである。本来は何らかの文様と複合されて用いられているはずである。縦位の直線と曲線文様の土器と考えた方が良さそうである。

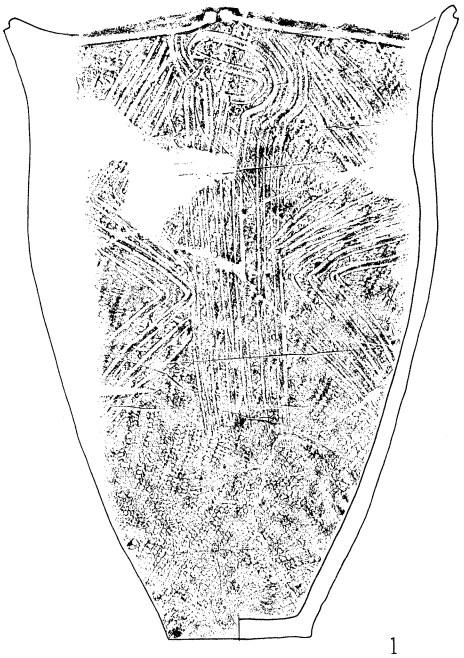
G—a　縦位の沈線が認められるものである。第II-12図6は、口唇が内側に張出した平縁の深鉢である。2条の太い沈線が特徴的である。

G—b　縦位の沈線が半截竹管などによって多条化したもので、第II-15図4・7などがあげられる。

G—c　G—bと文様は同じたが、口縁のつくりが異なる。堀之内1式の「縄文を地文とし沈線によって文様の描かれる土器」では、口縁に1条以上の沈線あるいは指などによるなぞりを加えるのが通例である。第II-15図8は、その沈線を持たない。薄手の焼きの良い土器で、縄文も軽く施されている。G—bよりも後出する土器かもしれない。付加される文様はない可能性がある。

G—e　G種の文様は、基本的にはこのG—eのように縦位の沈線と曲線的な沈線によってつくり出されるものだろう。文様は多様である。第II-12図19は口縁が幾分内彎する深鉢である。縦位の沈線の両側には、直線を組み合わせた文様と曲線的な文様が描かれいる。同図22は本来このグープに含めるべきものではないが、文様の基本的なあり方は類似する。2条の斜行する沈線が交差するところに円形刺突が加えられる。直線と直線を連接するかのように弧状の沈線が用いられている。文様は、19より整然としている。

G—f　文様を描くのに半截竹管が用いられているものである。第II-16図1〜9。大破片の1は

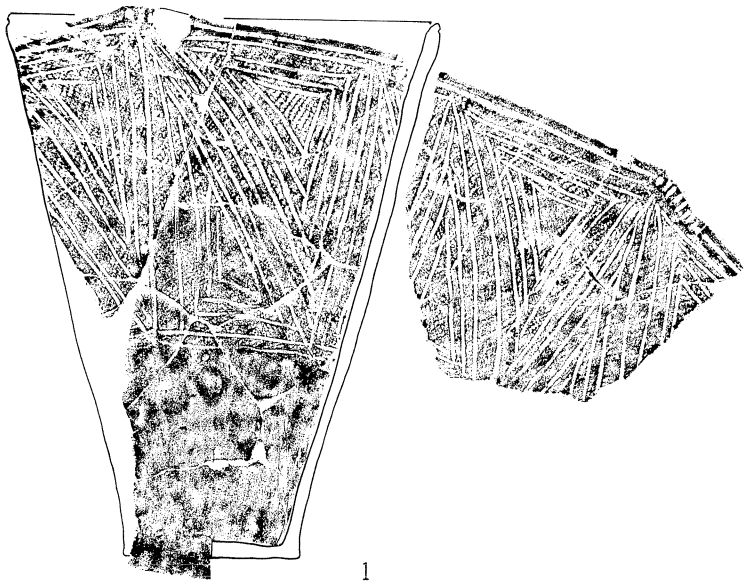


1

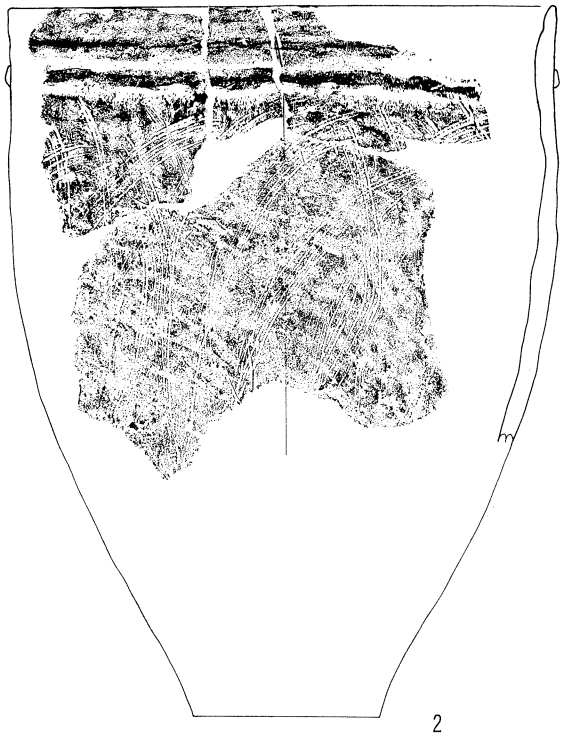
2

0　20cm

第II-17図　堀之内1式土器



1



2

0　　20 cm

第 II–18 図　堀之内 1 式土器

口縁部付近が大きく内彎する深鉢である。半截竹管によって半弧が描かれ、これをつつみこむようにして沈線が下垂する文様が中心である。この文様と文様の間に縦位の沈線が施されている。

2・3・5は同一個体の破片である。半截竹管を十分活用したもので、器面を覆い尽くすかのように同いられている。4もこれに類する。口縁部外側になぞりを加えられた6には長楕円状の文様が縦にみられる。口縁部をめぐる沈線のない7の器形は1と同じである。下垂する沈線は、3本1組に束ねたようなヘラ状施具による。横の楕円状の文様は半截竹管による。8にも横位の楕円状の文様が認められる。

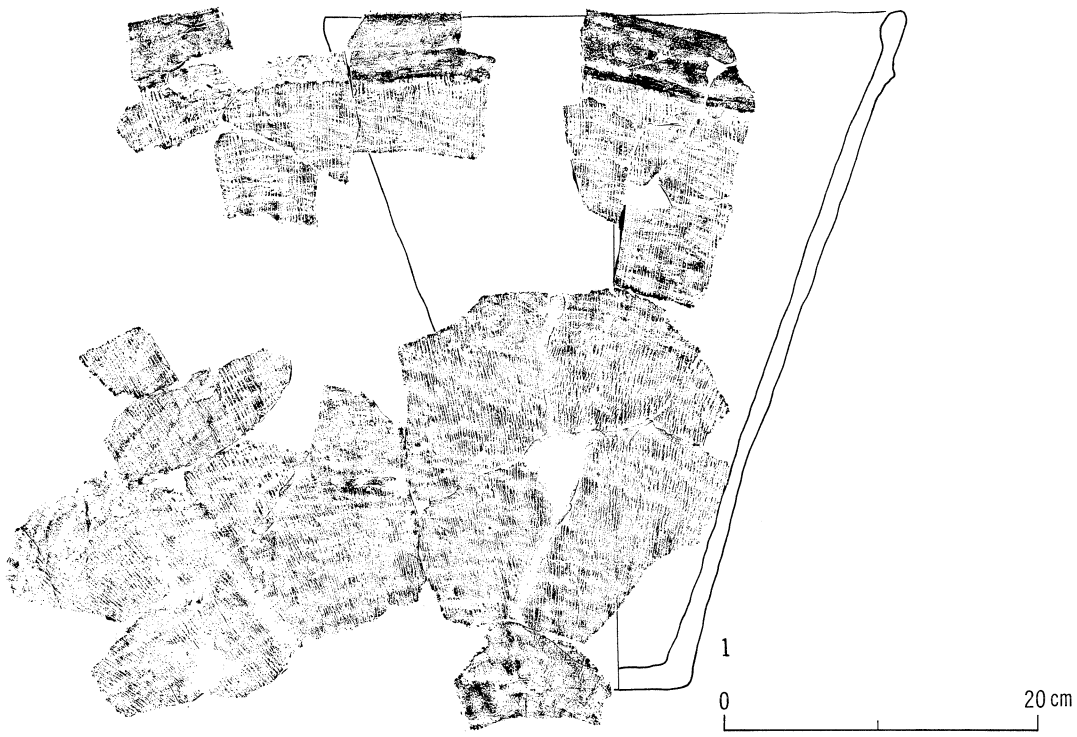
G—g　薄手の小形の深鉢でる。第II-16図10は、波状口縁で第II-14図4に見られるような刻目ある隆線が貼付されている。隆線の両側には、細いシノダケを半截したような施文具で沈線が引かれている。器面には、補修孔と思われる貫通孔がある。11には半弧が見られる。

G—h　G—gに近似するが、口縁部をめぐる沈線がない。第II-16図13。口唇内側に少しふくらむ。口縁部をめぐる沈線のない点は、同図7と同類である。

H種　「ハ」の字状の沈線が特徴的なものである。点数は少ない。

H—a　太い沈線によって描かれている第II-12図1である。波状口縁の沈線で、波頂部よりやや下がったところに貫通孔がある。2条の太い沈線が平行に下垂し、その間に沈線で「ハ」状の文様が描かれている。

H—b　II-13図19は波状口縁土器で、波頂部から刻目ある隆帯が下垂する。隆帯から半截竹管による沈線が両側に対称的に広がる。小破片なので全容をつかめずH種に含めたものである。下向き



第II-19図　堀之内1式土器

の弧線になる可能性もある。

I種　太い沈線によって水平に流れる沈線が特徴的なものである。体部には曲線的な文様が展開されるようである。第II-12図8・9・18などである。8・9は同一個体のようである。沈線は太いが多条化し、文様は横位に展開する。

J種　2条1組の沈線によって「U」字状の文様が形成され、この文様が連接している。第II-12図16は波状口縁の深鉢である。斜位、横位の文様がみられる。

K種　堀之内1式では、口縁部文様といえば沈線、8字状の刺突文、刻目のある隆線などが普通で、ある程度の幅を持つ口縁部文様帯を持つ例は少ない。その少ない例がK種である。第II-11図1～3などである。いずれも口縁が内彎する深鉢形土器である。1・3は、枠状文が採用されている。3には、称名寺式に見られたC字状の貼付文のなごりが認められる。

第3類　器面に沈線によって文様の描かれるものである。描かれる文様は、第2類に描かれるものとほぼ同じである。条線によって装飾されるものも含むが、口縁部に隆線のないものだけにする。第2類の縄文地文に沈線により文様を描いた土器に比べると出土量は少ない。

A種　単一沈線によって蛇行曲線文様の描かれたものである。

A—a　太い沈線によるものである。第II-20図1は、波状口縁である。波頂部には2個、内側には1個の円形刺突が加えられている。波頂部の下にゆったり蛇行する曲線が描かれている。第II-21図4はこれに類する。第2類B種に対応するものだろうか。

A—b　蛇行する曲線が近接しているものである。第II-21図5がその代表的なのである。器厚は薄く、さほど大きな土器ではないようだ。第II-21図2は半截竹管を用いているようだ。第II-21図1には蛇行する沈線の外に縦位に流れる沈線も見られる。

B種　2条一組の沈線によって渦状文などが描かれるものである。第II-20図2・3は口縁の内彎する深鉢である。2は小波状の口縁で、三角形状の文様が構成されそうだ。3は、渦状の文様が横に展開される。第II-20図11には渦状文が認められるが薄手で小形の土器のようだ。

C種　弧線文の描かれるグループである。

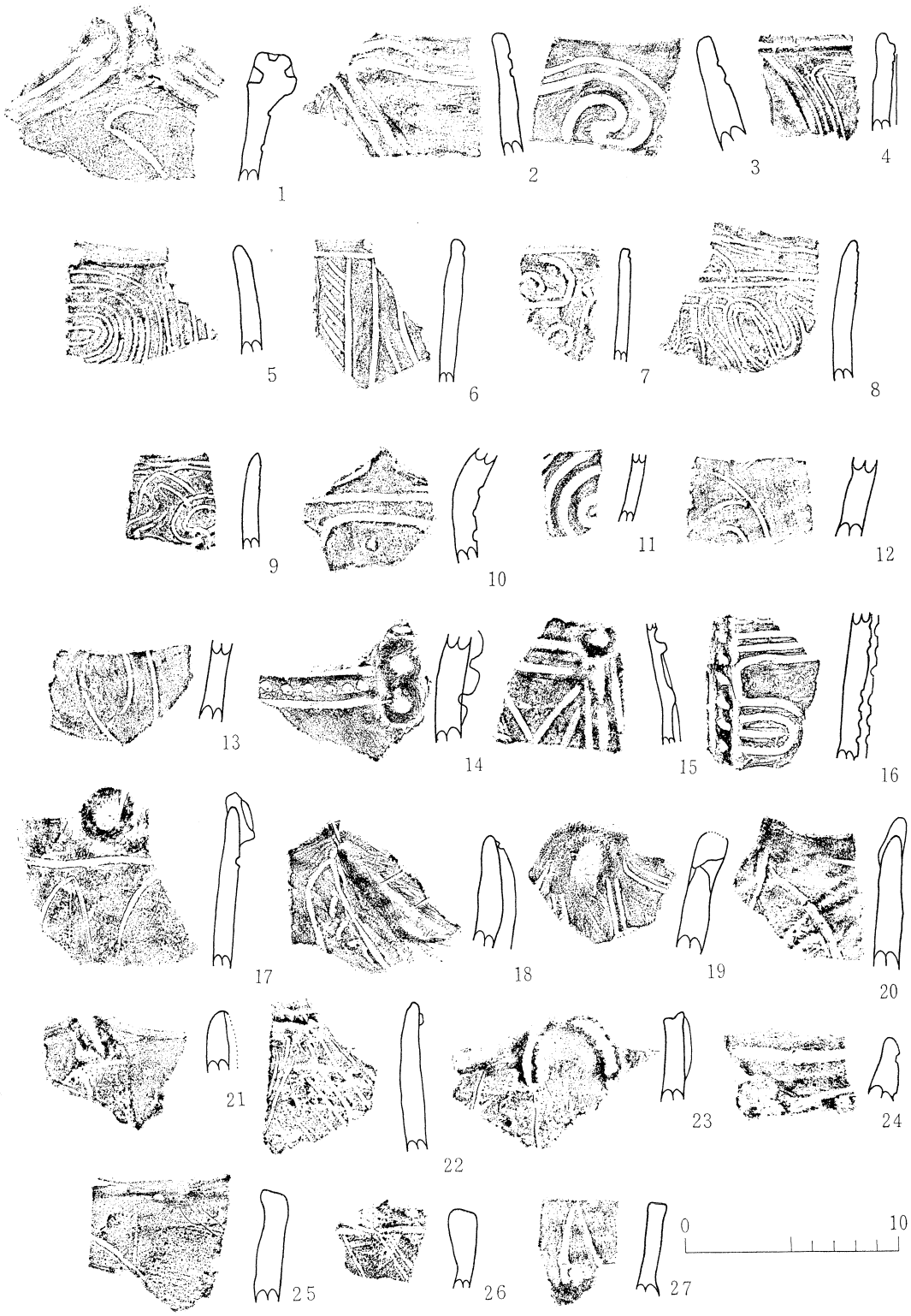
C—a　1条の沈線によるものである。第II-20図17、第II-21図3。第II-20図17は、平縁の深鉢である。口縁には1条の沈線がめぐる。口唇には大きな円形貼付文が加えられ、小突起のような感を与える。器面は、鋭いヘラ状工具によってていねいに整えられている。向かい合う弧線が浅く引かれている。第II-21図3の弧線は、割箸の先端をつぶしたような施文具による。器面の調整や焼成も第II-20図17とは異なり、無文地に沈線で文様を描いた土器にも作り方扱い方にランク付けがあるかのようである。

C—b　2条1組の沈線によって向かい合う弧線が描かれたものである。第II-20図12・13。

C—c　半截竹管などを利用することによって、沈線を多条化したものである。第II-20図4には、弧状の低い隆線が貼付されている。その隆線に沿って弧状の沈線が引かれる。同図5はわずかに内彎する深鉢で、弧線以外に同心円状の文様も描かれている。

D種　幾可学的文様や区画化された文様のみられるものである。

D—a　第II-20図15は、2条の沈線によって器面を区画し、区画内に三角形を描くように沈線を利用してい。器厚は薄い。壺形の器形だろうか。第II-20図10は、少しくびれて口縁の開く深鉢



第 II–20 図　堀之内 1 式土器

である。くびれ部には1条の沈線がめぐり、その上下に区画する沈線が見られる。区画内に刺突が加えられるようだ。第II-20図16は、刻目ある縦位の隆帯が特徴的である。器面は、一度縄文が施されたものを磨り消している。隆帯の間には横位の沈線文が展開する。「8」の字状の貼付文のつけられた第II-20図14には、貼付文から2条の平行沈線を出発させ、沈線間に円形刺突を連続させている。10などと共に称名寺式の影響を受けているようである。第II-28図18は肥厚した口縁の外側に2条の沈線が引かれた波状口縁の土器である。

D—b　区画されているがより洗練された感じを与える第II-20図6である。器面の調整はていねいである。口唇の内側は軽くなぞられている。口縁をめぐる沈線の下に文様が展開する。垂直に2条の沈線が下垂し、その出発点付近から斜めに2条の沈線が下がる。また斜行する短沈線が何段にも重ねられれている。

E種　曲線的な文様が器面全体に描かれるものである。

E—a　単一沈線にる。第II-20図7は、口縁に1条の沈線がめぐり、その下に「6」が倒斜したような沈線やゼンマイ状の縦位の沈線が複合して文様が器面に広がる。薄手の小形の土器である。

E—b　半截竹管による曲線的な文様が展開される。第II-20図8・9などでである。8は、波状口縁である。口縁に沿って1条の沈線をめぐらしている。また水平の半截竹管による沈線がめぐる。蛇行するような文様が展開される。9は平縁で、口縁に半截竹管による沈線がめぐる。体部の沈線は短く弧線や蛇行して組み合わせられている。

F種　沈線や半截竹管による文様が展開するもので、A～Eにふくまれないものを一括した。第II-20図18～27である。

18は波状口縁で、波頂部から高い隆帯が右下がりにのびる。器面はよく磨かれている。

19は波頂部が小山状になる波状口縁土器である。半截竹管による沈線によって描かれる。口縁に沿った沈線は、口唇外側に施す沈線の代用であろうか。

20は平縁に小突起が付けられたものである。沈線によって曲線的な文様が描かれる。

21はゆるやかな波状口縁である。波状部には粘土が貼付され、厚くなっていようである。ヘラ状の施文具によって沈い縦位の刻みが付けられている。23は粘土を貼付して厚くなったところに向かい合う弧状の沈線を施している。波頂部には軽いえぐりが加えられている。

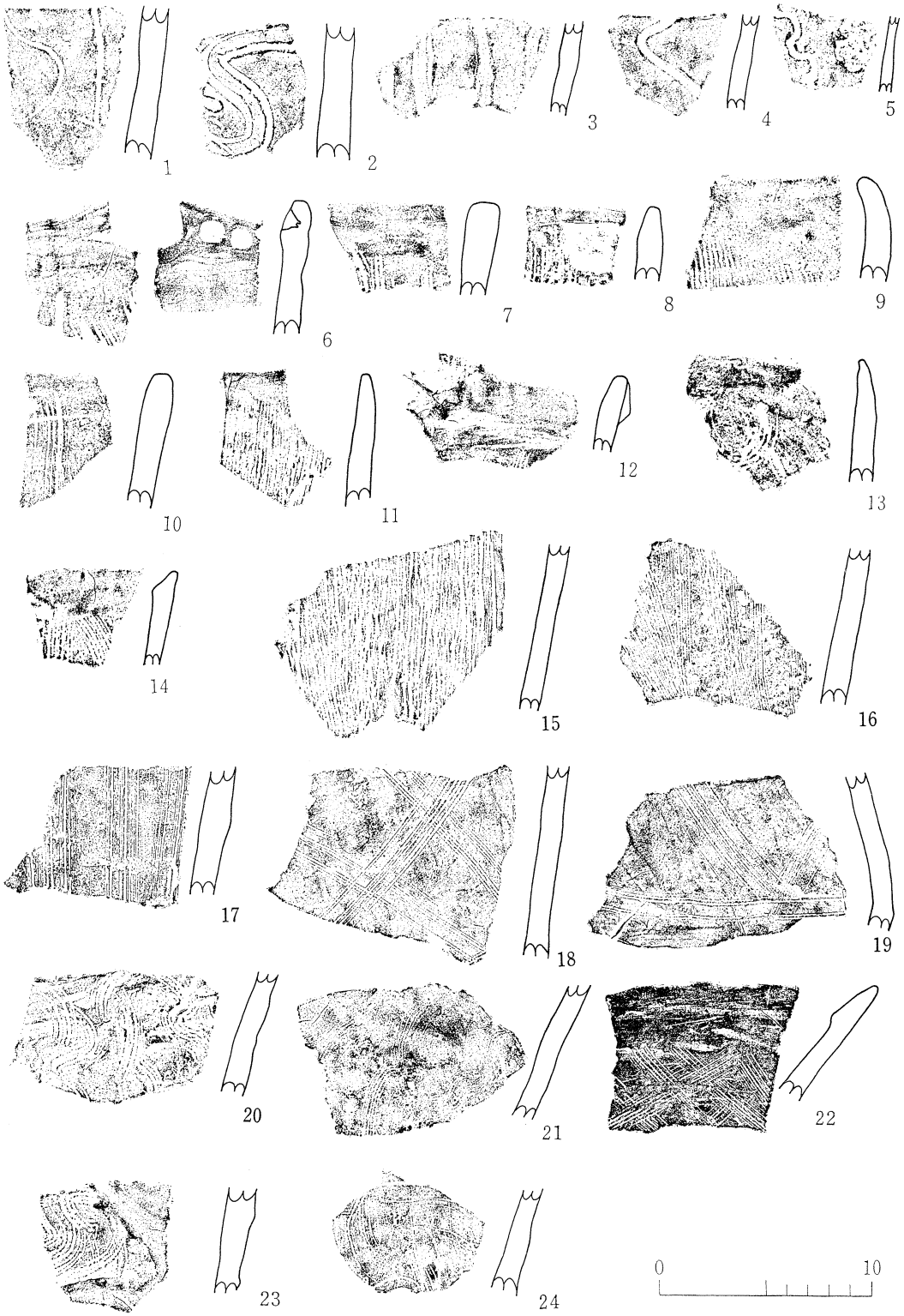
22は、口縁に刻目ある細い隆線がめぐる。口縁内側に軽いなぞりが加えられている。沈線で器面全体を覆っているようである。

24は、横位の沈線が特徴的である。

25は口縁内側に太いなぞりが加えられている。曲線的な沈線が大きく展開される。

26は、口縁に小突起を持つ。口縁を1条の沈線がめぐる。半截竹管による斜行の沈線が体部文様である。

G種　集合沈線によって器面全体を装飾されるものである。第II-38図12、第II-14図1～3などである。第II-38図12は、平縁でさほど大きくない土器である。数条の沈線によって文様が区画され、空間を沈線で充填される。第II-14図1なども文様の描き方は同じであ。第II-14図2・3は体部下半である。縦位の刻目ある隆帯によって体部文様体を分割し、低い隆帯によって体部文様体の下限を決定している。



第 II-21 図　堀之内 1 式土器

F種　口縁部に隆帯のない条線文の土器である。

F—a　沈線と条線が共に用いられているものである。第II-21図6は、波状口縁の内側に円形刺突が幾つか並ぶ。口縁は内側に厚くなっている。

F—b　単純に垂下する条線が特徴的である。第II-21図8・9・11・15・16などである。器面全体が条線でおおわれる。

F—c　条線が帯状に垂下するものである。第II-21図7・10・12・17。12は口縁部外側に粘土の帯が貼付され、肥厚している。

F—d　条線が交差するものである。第II-21図14・18・19・22。14と22の口縁のつくりは似ている。22は、皿に近い器形である。条線の特徴は、14・18・19などのように長く延ばさず、短い条線を組み合わせている点である。

F—e　条線によって曲線的文様の描出されるものである。第II-21図13・20・21・23・24。13は条線を弧を描くように用いている。23は、低い隆線によって区画された中に用いられている。21の条線は浅く、器面をかするように描かれたものであろう。

第4類　縄文以外の装飾文様をほとんど持たないものを集めた。分類する特徴的な文様がないので、器形や口縁部の特徴で分類する。

A種　沈線や隆帯などを持たないグループである。

A—a　波状口縁の土器である。第II-22図1、第II-25図2・3などがあげられる。第II-22図1は、口縁部が肥厚し外彎し、体部中半で少しふくらむような深鉢である。第II-24図2は波状というより突起とみたほうが良いだろうか。内外両面から円形の刺突が加えられている。拓影の右下角に沈線らしきものが見えるので、第2類かもしれない。第II-25図3は、前2者に比べると器厚も薄く、付加条縄文が横位に回転されている。

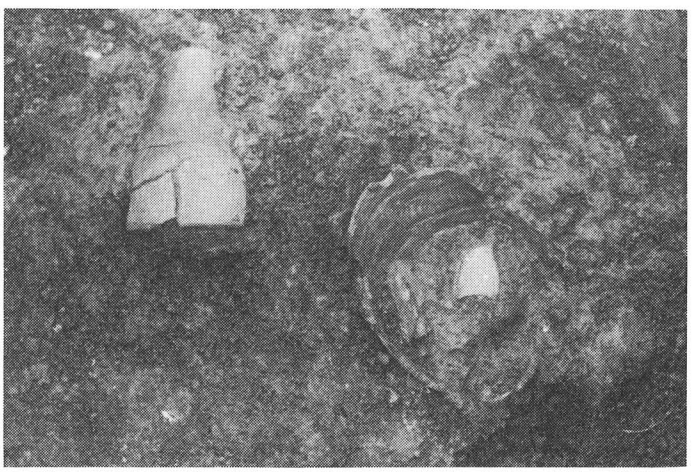
A—b　第II-22図4、第II-25図10のように口唇に稜の形成されたものである。第II-22図4は、指頭によるなぞりが用いられている。

A—c　口縁部が内彎する深鉢形土器である。第II-22図8。

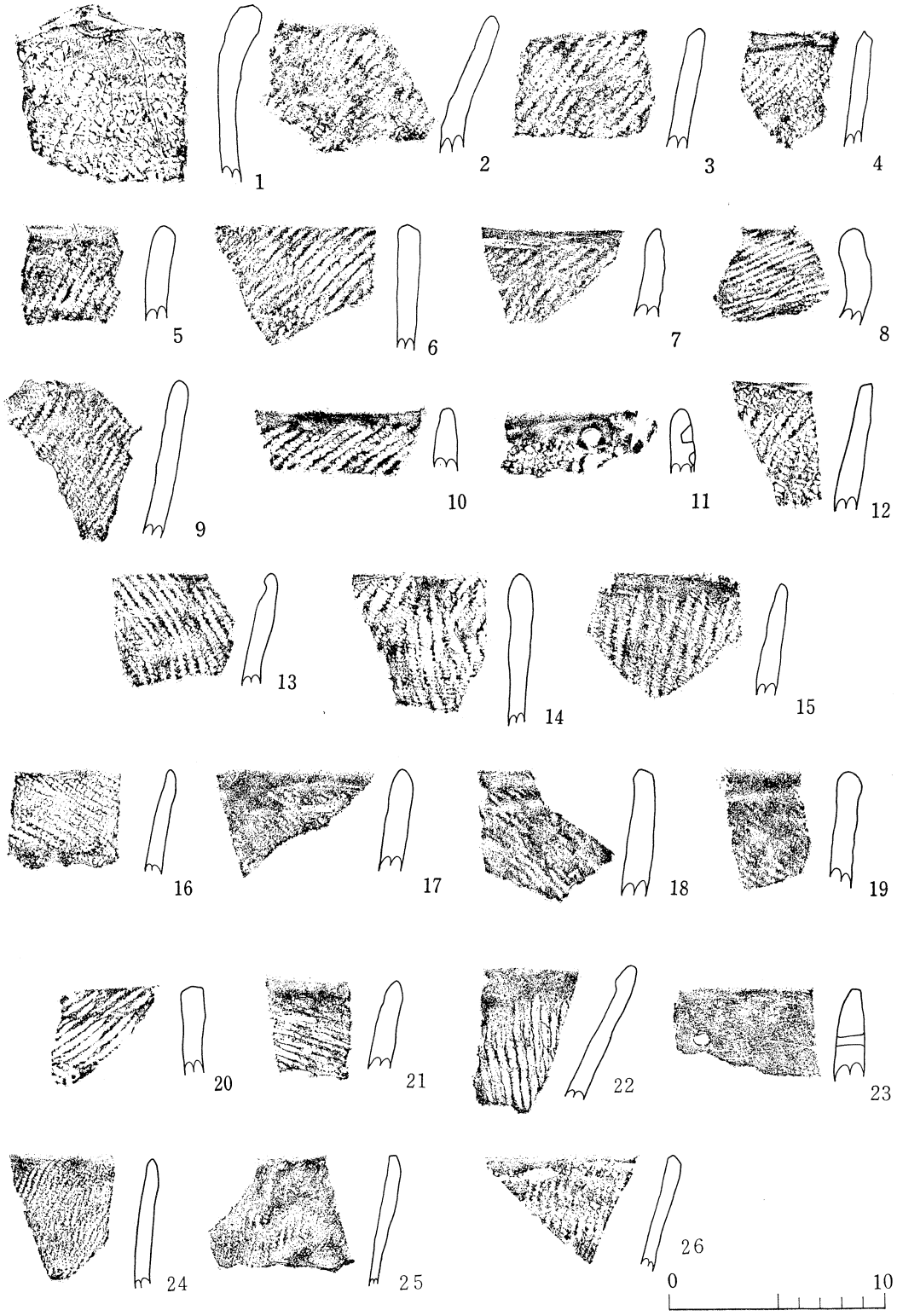
A—d　口唇が粘土をカットするようにして作られた第II-22図25・26。両者とも器厚は薄く、単純な深鉢である。25は口唇を水平にカットされた後、なでている。堀之内2式に含まれるだろうか。

A—e　器厚が体部から口唇だんだん薄くなるものである。第II-22図16・24。

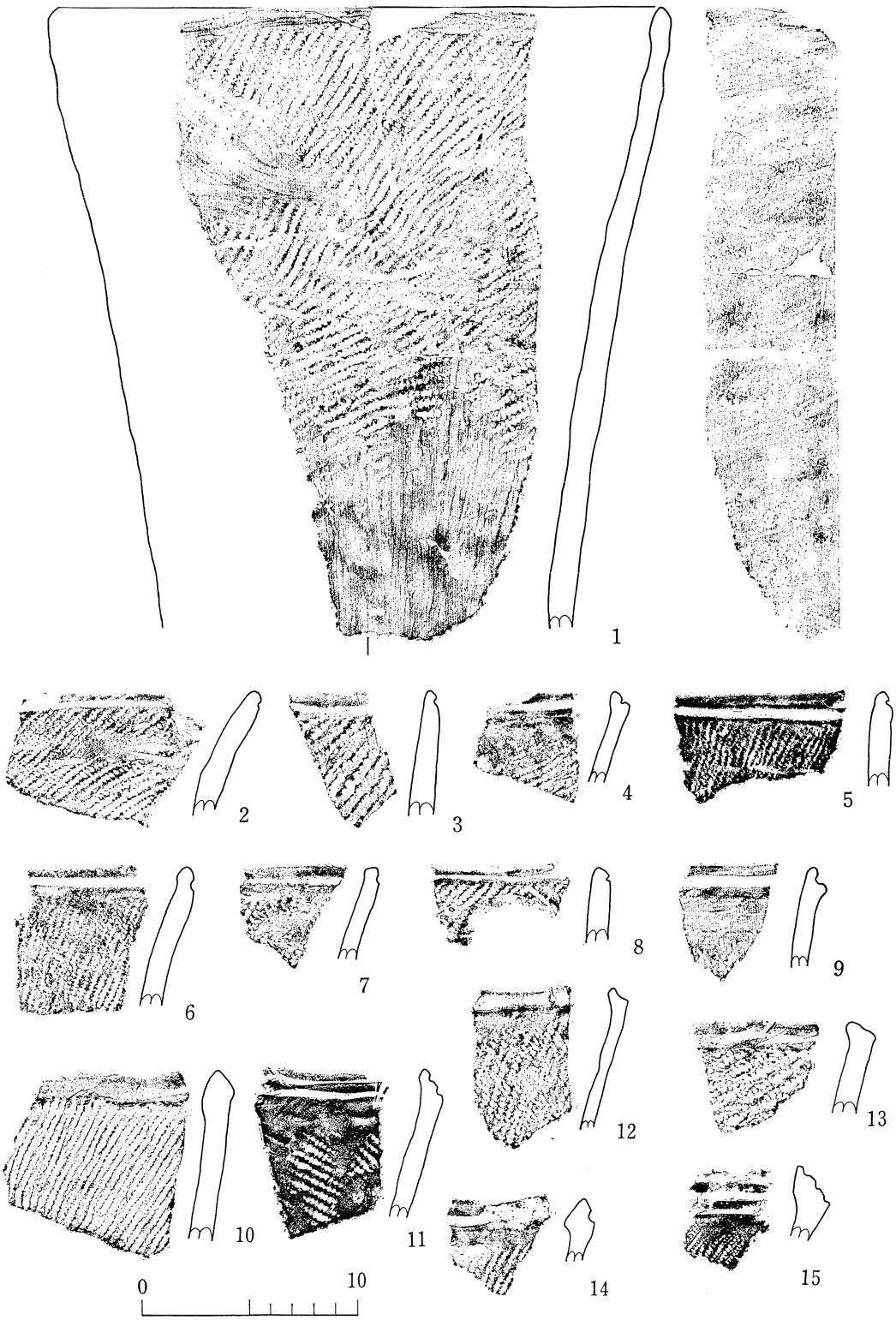
A—f　口唇内側が肥厚するもの、第II-22図22。断面の傾きは、もう少し倒れるかししれない。鉢に近い器形になる。原体を斜め



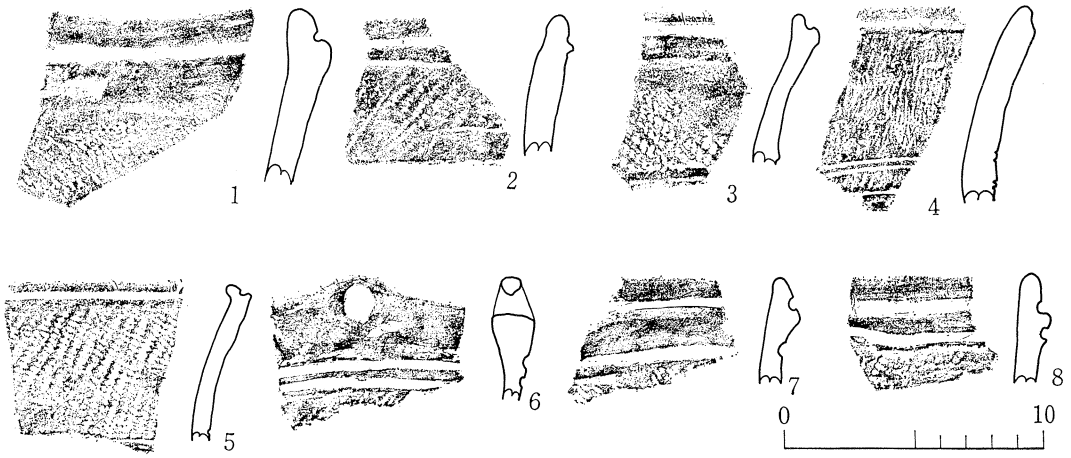
第30挿　堀之内1式土器出土状態



第 II–22 図　堀之内 1 式土器



第 II–23 図　堀之内 1 式土器



第II-24図　堀之内1式土器

らから回転している。

A—g　特に撚りの強い縄文が回転されてる。第II-22図13～15。13は口縁内側になぞりを加えられている。

A—h　第II-22図2・3・5～7・9～12・17～21・23、第II-23図1などごく一般的なものでる。第II-22図2は、大きく外彎する。同図11は上下1対の円形刺突が加えらている。沈線による文様の付けられる土器かもしれない。同図23には、補修孔が付けられている。第II-22図12・23なども口唇をカットされてはいるが、A—dのように器厚が薄くなく、器面調整もよくないので別にした。第II-25図4も口唇は平担であるが、口縁がふくらむ鉢形土器のようなので含めなかった。

第30挿の縄文土器は、第II-23図1である。口縁部に隆帯をめぐらし、条線で体部文様を描く土器と共に第Ⅶ層上面から出土している。LRの縄文が、体部の中半ほどまで施文さている。体部下半は、ヘラ状の調整具によってていねいになでつけられている。縄文の充填されているところに、偶然擦り消されてしまった部分があることから、縄文施文や器面の調整が土器の軟いうちに行われたことが分かる。器内面もていねいになでられている。

A—i　第II-25図1は口縁が「く」の字状に開口する特有の器形である。口唇はカットして作られたようである。

B種　口縁部をめぐる沈線が特徴的なものである。

B—a　ヘラ状施文具による沈線がめぐるものである。第II-23図3・5・8などである。単純な深鉢形土器である。

B—b　口縁が外彎し、体部下半が少しふくらむ深鉢形土器。第II-23図2・6・7である。

B—c　口唇が幅広く準備され、その口唇に沈線が引かれている。第II-23図4・9、第II-24図1・3・5。第II-23図11・15は口唇の幅がより広く準備され、口唇に加えられる沈線が多条化している。

B—d　口唇を肥厚させて、外側の表面積を広くし、沈線を引いたものである。第II-23図14は、波状口縁で、口唇内側に張り出す。第II-24図1は、底部から直線的に口縁部に開く深鉢である。第

II-25図20。

B—e　口縁部に2条の沈線がめぐるものである。第II-24図8は、最も一般的なものである。第II-24図6は、ゆるやかな波状口縁で波頂部に貫通孔をもつ、第II-24図7の口縁は、B—dの肥厚口唇の下側に1条沈線を付加したものである。

B—f　沈線のかわりに、指頭などによるなぞりを口唇に施したものである。第II-23図12・13などである。12の口唇には円形貼付文がつく。

第II-24図3〜5は、くびれ部に横位の沈線がめぐらされている。

B—g　口縁を幅広く準備する点はB—cに類似するが、円形の貼付文を伴い、口唇外稜には刻目のつけられた波状口縁土器。第II-25図18。

C種　口縁部に隆帯がめぐり、隆帯より下に縄文が施文される。

C—a　口縁部の隆帯は高く、突帯といった方がよさそうな第II-25図5である。縄文は粗雑である。

C—b　隆帯には刻目が施される。隆帯の上側には細い沈線がめぐる。第II-25図6。

C—c　隆帯の上にまで縄文が施文されている第II-25図7。口縁部は幅広い無文帯である。

C—d　口縁部無文帯が幅広くとられ、隆帯の上方を沈線がめぐる。第II-25図8。

C—e　口縁部を横位にめぐる隆帯と口縁部無文帯に縦位に加えられた隆帯からなる。第II-25図11は隆帯の上に刺突を加えられている。口縁部無文帯には刺突を伴った逆「ノ」の字状の隆帯が付く。隆帯の両端は円形刺突である。小波状の口縁をもつ深鉢形土器である。

第II-25図12・13は、口縁部無文帯の隆帯と横位の隆帯が垂直に配置されている。縦位の隆帯のもとのところに、12は1個、13は2個の円形刺突が加えられている。また、12・13の隆帯の上方には、沈線が引かれている。12・13は同一個体の可能性がある。

D種　口唇外側に円形の押捺を横位に連続したもので、第II-25図9・10などである。これらが発展して、加曾利B式の隆帯に押捺をくり返す文様になるのであろうか。

E種　押捺が口縁部無文帯と体部縄文帯の境に付けられたもの。第II-25図14・15である。これらは同一個体で、波状口縁の深鉢になる。

F種　ゆるやかな波状口縁の深鉢形土器で、波頂部に円形刺突と縦位の短沈線による文様が顕著なものである。第II-25図16・17・19。16は2つの山が連なるような波頂部の中央に縦位2個の円形刺突、山の両端に1個ずつの円形刺突が加えられ、円形刺突と円形刺突の間に短沈線が縦位に施されている。

第5類　口縁部に隆帯あるいは沈線をめぐらし、その下に沈線や条線による文様が見られる。

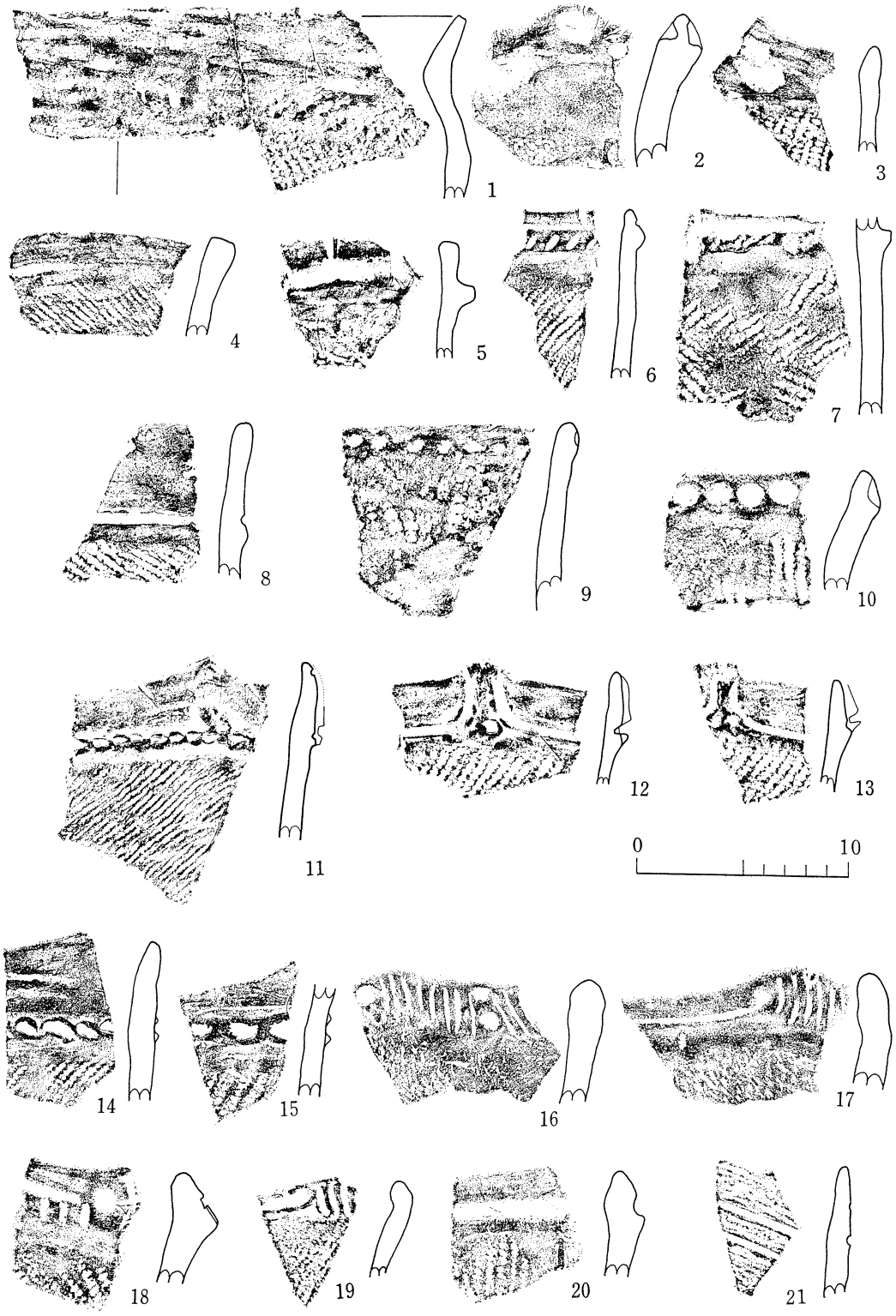
A種　隆帯の下の文様が沈線によるものである。沈線は交差するように描かれている。

A—a　隆帯に加飾のないものである。第II-26図1〜3、1・3は波状口縁である。1は両端に円形刺突のある隆帯が特徴的である。

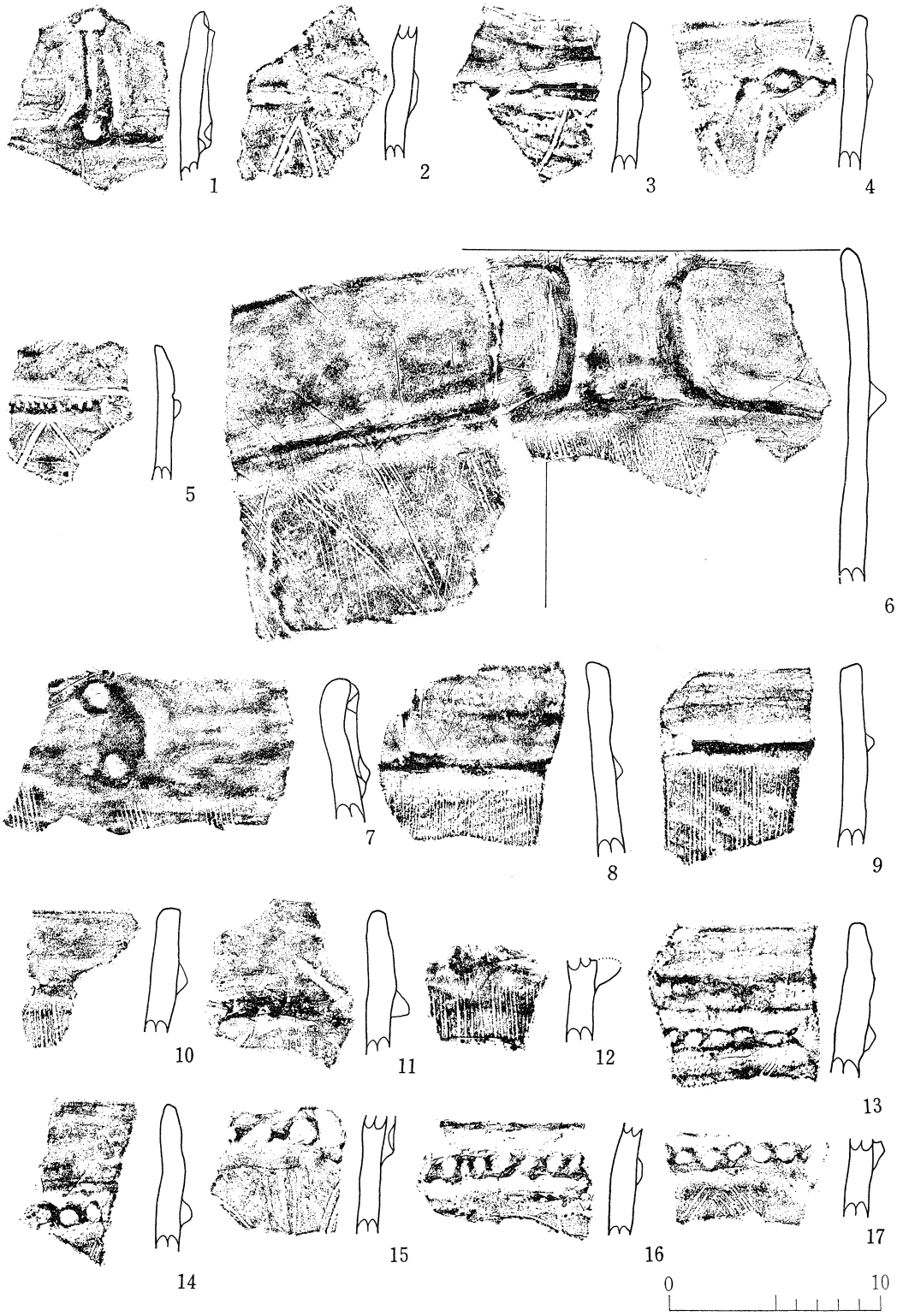
A—b　隆帯に押捺や刻目の加えられているものである。第II-26図4は円形の押捺、5は刻目である。5は隆帯の上方を沈線がめぐる。

B種　隆帯の下の文様が条線によるものである。

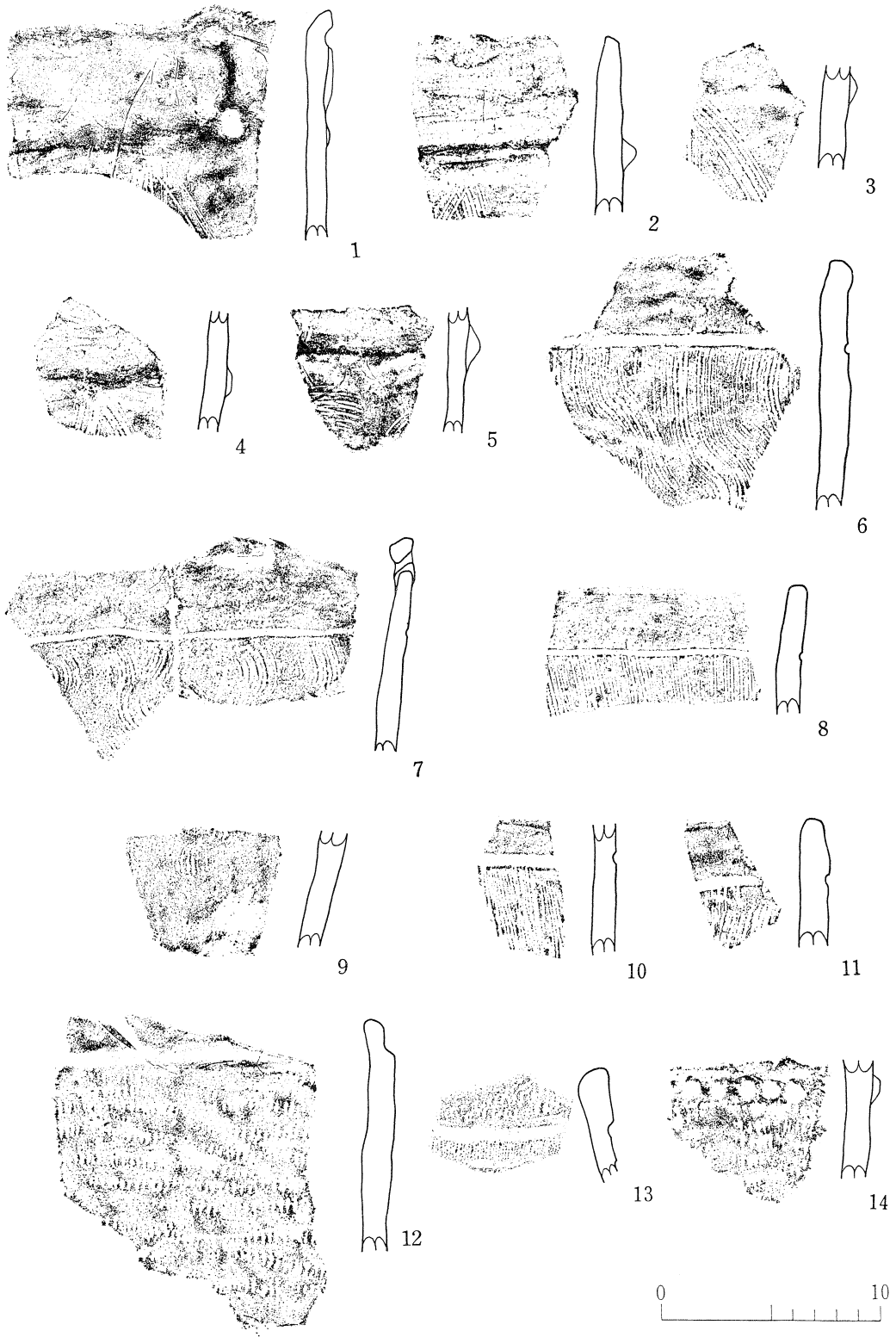
B—a　条線が隆帯に垂直に垂下するグループである。第II-19図1、第II-26図8〜10・12。第



第 II–25 図　堀之内 1 式土器



第 II–26 図　堀之内 1 式土器



第 II–27 図　堀之内 1 式土器

II-19図1は、底部から直線的に開口する深鉢である。口唇は肥厚している。条線は体部下半になると交差してしまうようである。第II-26図12は舌状の突起を伴う。

B—b　条線が間隔をおいて施されている第II-26図7・9・11などである。7は両端に円形刺突を加えられた隆帯が口縁部無文帯に貼付されている。

B—c　条線が交差するものである。第II-18図2、第II-26図6、第II-27図1～4などである。隆線の断面は、第II-18図2が「D」字型なのに対し、第II-26図6は三角形である。第II-18図2は、条線を弧線を描くようにして交差させているのに対し、第II-26図6は、直線的な条線を交差させている。口縁部無文帯には枠状をなす隆線を付けている。第II-27図1は、横位の隆線に垂直な両端に円形刺突を伴う隆線を貼付している。

B—d　基本的な文様は、B—cに類似するが、隆帯に押捺を有するものである。第II-26図11・13～17。直線を交差させる11・13・17のようなもの、曲線を交差させる14・15・16のようなものもある。第II-27図5は、短い弧線を用いて器面を飾っている。

C種　隆帯の代わりに沈線を用いたものである。器形はみな単純な深鉢である。

C—a　条線が底部に向かって直線的に下垂する第II-27図8・10・11などである。8は、10・11に比べると、沈線は浅く、ある程度幅のある条線が特徴的である。

C—b　第II-27図6。条線による文様は、蛇行しながら底部に向かっている。

C—c　手首を回すようにして施文した条線が特徴的である。条線そのものは短く表現される。第II-27図7・9は同一個体である。平縁の深鉢で、貫通のある小突起が付けられている。沈線が浅い点は同図8などと似ている。

第6類　第II-27図12～14に代表される。条線を描く櫛歯状施文具で器面を引掻くようにした文様であり、刺突に近い。12は、平縁の深鉢である。口唇外側に太いなぞりを加えている。13は、小波状の口縁で、爪か刺突か不鮮明な文様があり、その下の太い沈線の下には、条線が認められる。14は、口縁無文帯の下に円形刺突を加えた貼付文が付けられている。北関東から福島南部の海岸部に分布する称名寺2式土器との関連を考慮すべきであろうか。

第7類　無文の深鉢である。ほとんどが単純な深鉢である。器形は、口縁から胴下半部にかけて直線的あるいはゆるい曲線を描いていすぼまる深鉢である。口縁部の断面形態から分類する。

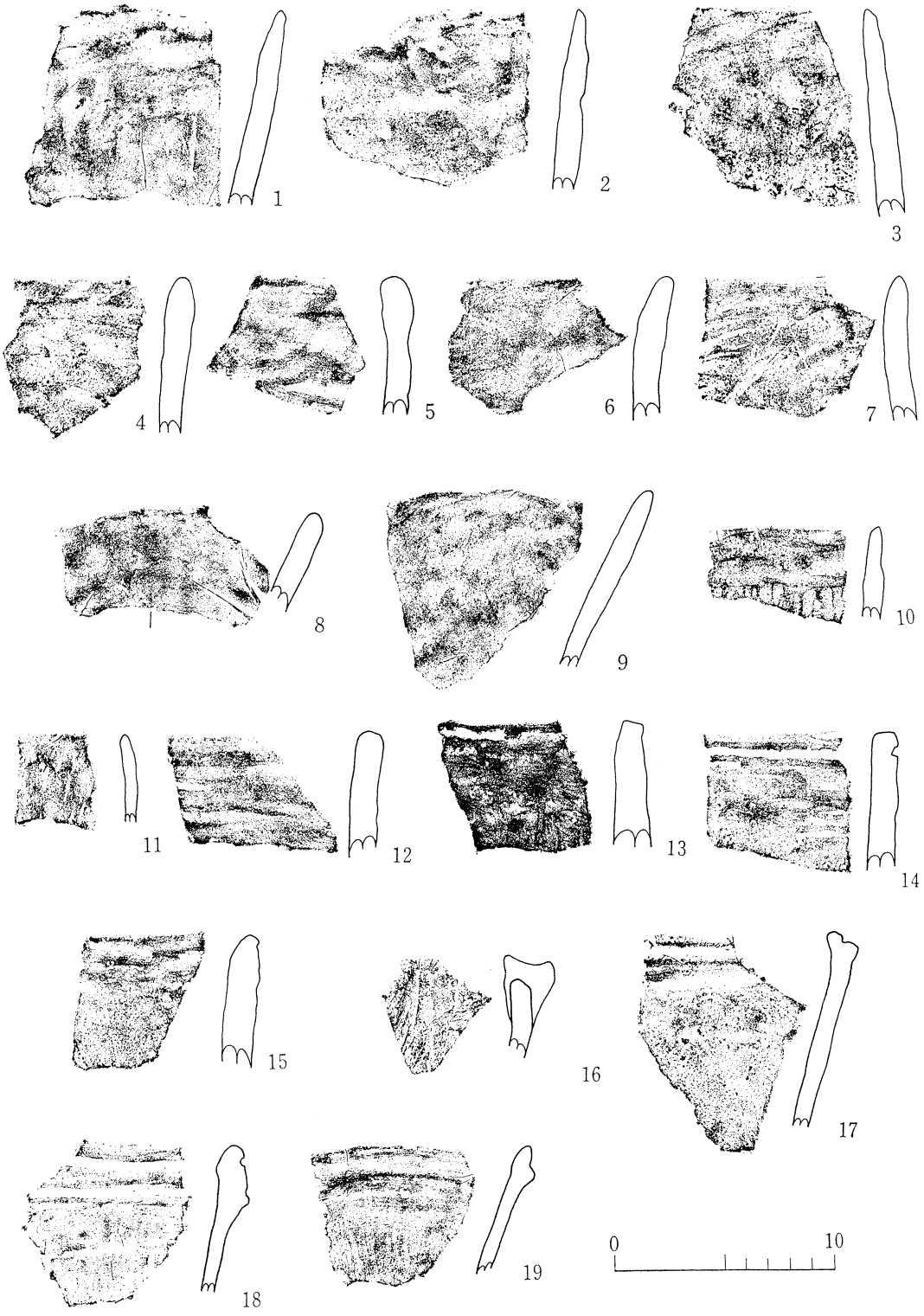
A種　口唇が丸味を帯びているものである。第II-28図4～9・12。ヘラ状の調整具によって、器面を整えられている。4・5・7・12には横位の調整痕が見らる。口縁部は横位に、体部は縦あるいは斜めに調整されるのであろう。5は少し内彎する深鉢である。

B種　口唇が外側に削がれるようになっており、厚さは口唇にいくに従ってだんだん薄くなっている。A種と同じように大きな深鉢である。第II-28図1～3である。3は口縁がほとんど水平であるのに、1・2は口唇のつくりがやや粗雑である。

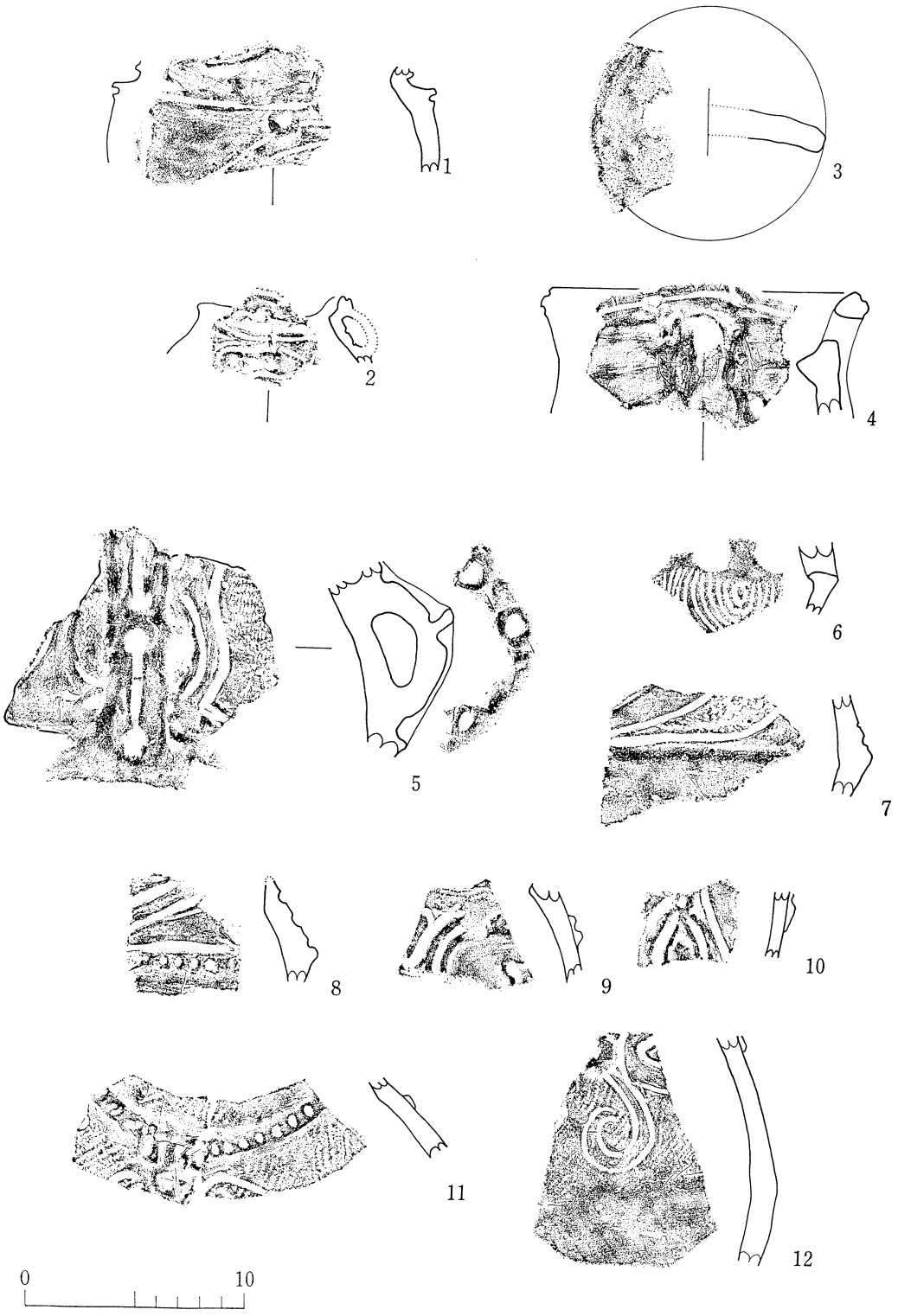
C種　口唇がB種とは逆のつくりになるものである。第II-28図10・11。10は、口縁より下の縦削りが顕著である。11は、口縁が少し内彎する。

D種　口唇が少し角ばった感じを与えるもので、第II-28図13～15などである。14は角棒状の施文具による沈線が引かれている。15は外側に少し曲げられたような口唇である。

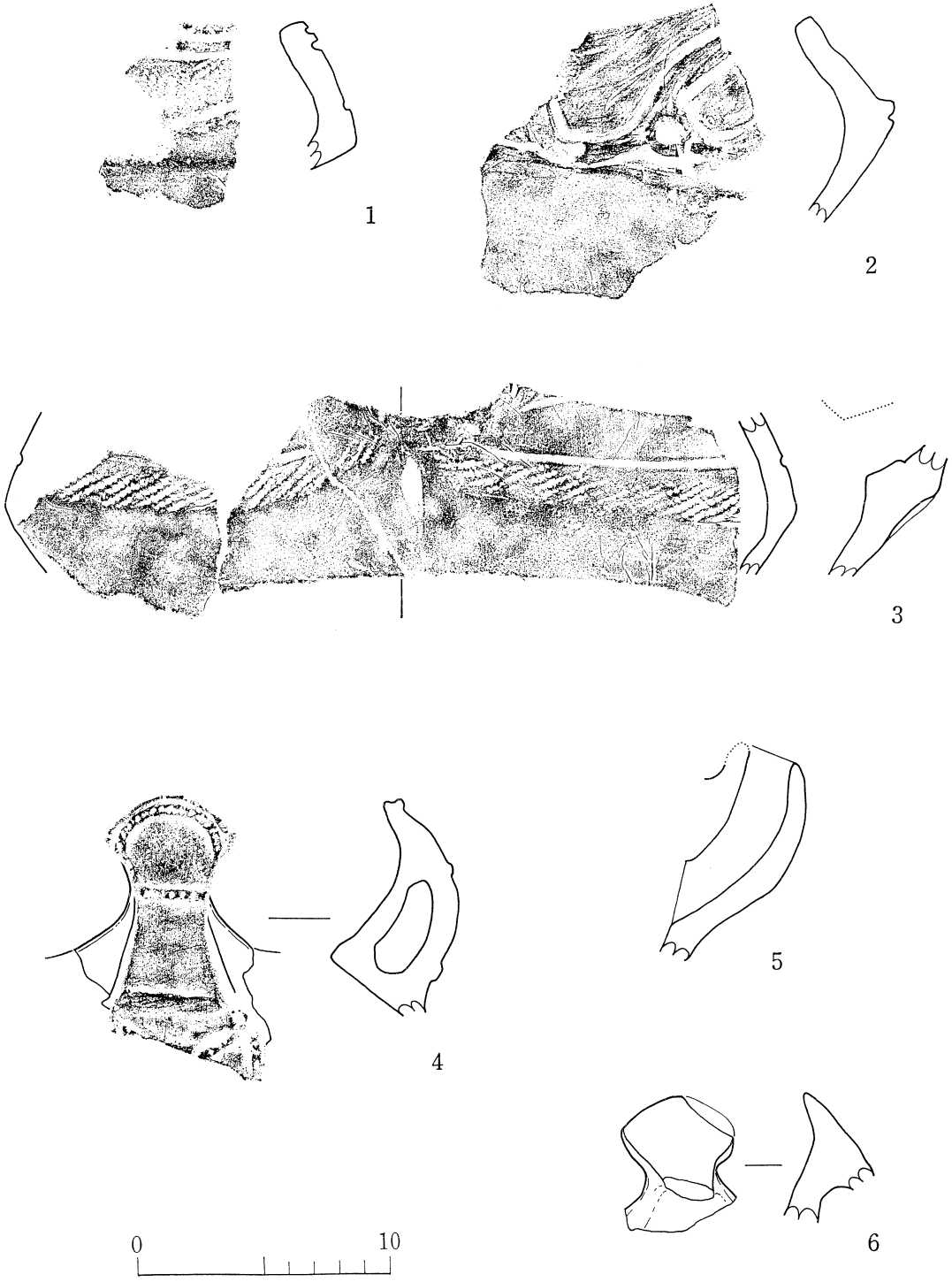
E種　口唇外側に沈線あるいはなぞりを加えられているものである。第II-28図17・19。



第 II-28 図　堀之内 1 式土器



第 II–29 図　堀之内 1 式土器



第 II–30 図　堀之内 1 式土器

F種　波状口縁の土器である。第II-28図16は、波状部が厚くふくらみ、波頂部は少しくぼむようなつくりである。口縁の単純な無文深鉢で波状を成すと見られるものは、これ1点であった。

第8類　今までは主に深鉢形土器について説明してきたが、ここではまだ採り上げていない器種や文様について、便宜的に第8類として説明を加える。

A種　壺形土器（第II-29図1・2・4）堀之内1式の壺形土器は珍しく、千葉県古作貝塚の貝輪の埋蔵されていた例は著名である。1は頸部下半を沈線によって描かれるもので、円形の貼付文を有する。2は、小形である。口縁には小突起をもち把手が付けられている。体部は2条1組の沈線によって文様が描かれる。4は口縁内側に蓋受けを持っている。口唇外側には1条の沈線がめぐる。ゆるやかな波状を呈し、波頂部の下には貫通孔がある。3は、4などに伴う土製の蓋である。中央には山形のつまみが付いていたと思われる。第II-29図9・10は、体部に隆帯を貼付してその上を沈線でなぞった文様が見られる。これらも器形は、壺形に類似するものだろう。

B種　鉢形土器（第II-29図7・8、第II-30図1・2）体部が強く屈曲し、横から見ると所謂ソロバン玉状をなす器形の鉢形土器である。第II-30図1は、口縁に2条の沈線がめぐり、体部上半には磨消縄文による文様が展開する。第II-29図7も同種の文様を持つ。第II-30図2は、体部上半に隆帯による文様が見られる。隆帯の両側には沈線を伴い、隆帯の分岐点には円形の貼付文が加えられている。口縁は波状をなすようだ。第II-29図8は、体部の屈曲部に刻目がくり返されている。体部上半には沈線による文様が見られる。これらの中には、本来注口土器であるものが含まれているであろう。

C種　注口土器（第II-29図5・11・12、第II-30図3～6）4種の器形があるようである。

C—a　大きな橋状把手の設けられたもの。第II-29図5の橋状部には堀之内1式特有の文様が見られる。体部上半には、磨消縄文による文様が展開される。ソロバン玉状の器形になれば体部下半は無文となるが、器高が高く最大径を体部下半ともつような器形になると同図8のような文様が描かれるかもしれない。

C—b　体部が球形をなすと考えられるもの。第II-29図11。器形は壺形に似ている。肩部には、刻目を伴う隆帯がめぐらされ、体部には、沈線による曲線的な文様が描かれている。細長い橋状の把手がつけられていたと想定される。

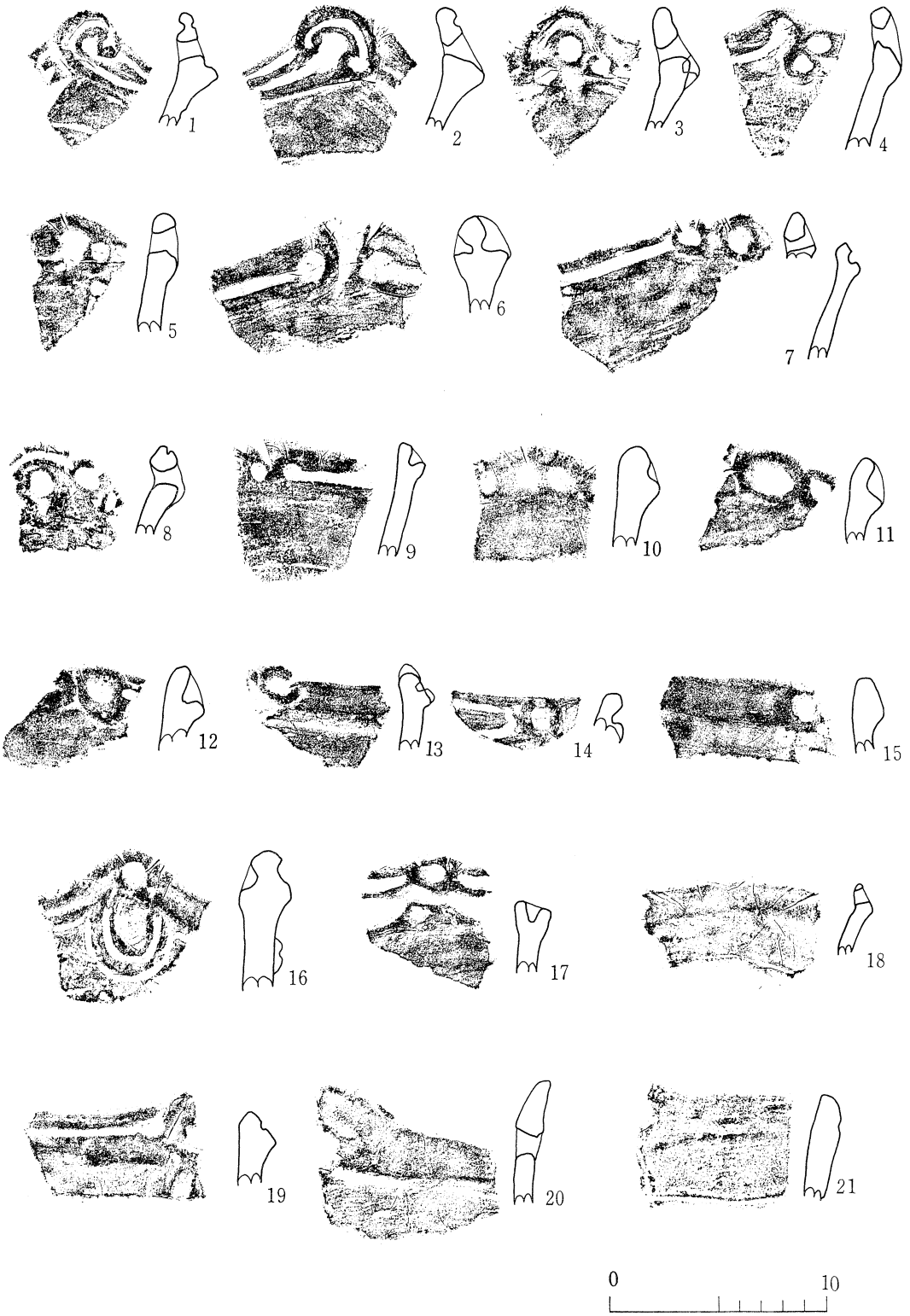
C—c　体部がソロバン玉状をなす大形の注口土器である。第II-30図3は、体部上半に磨消縄文による文様がうかがえる。第II-30図5は、注口部が独立しきっておらず、3などの注口部に近いようである。

C—d　ヘラ状の把手を有し、器面調整のていねいな体部がソロバン玉状に屈曲する注口土器である、第II-30図4は、体部上半や把手が、刻目のある隆線によって装飾される。6は、体部上半が磨消縄文によるものであろう。時期は堀之内2式である。

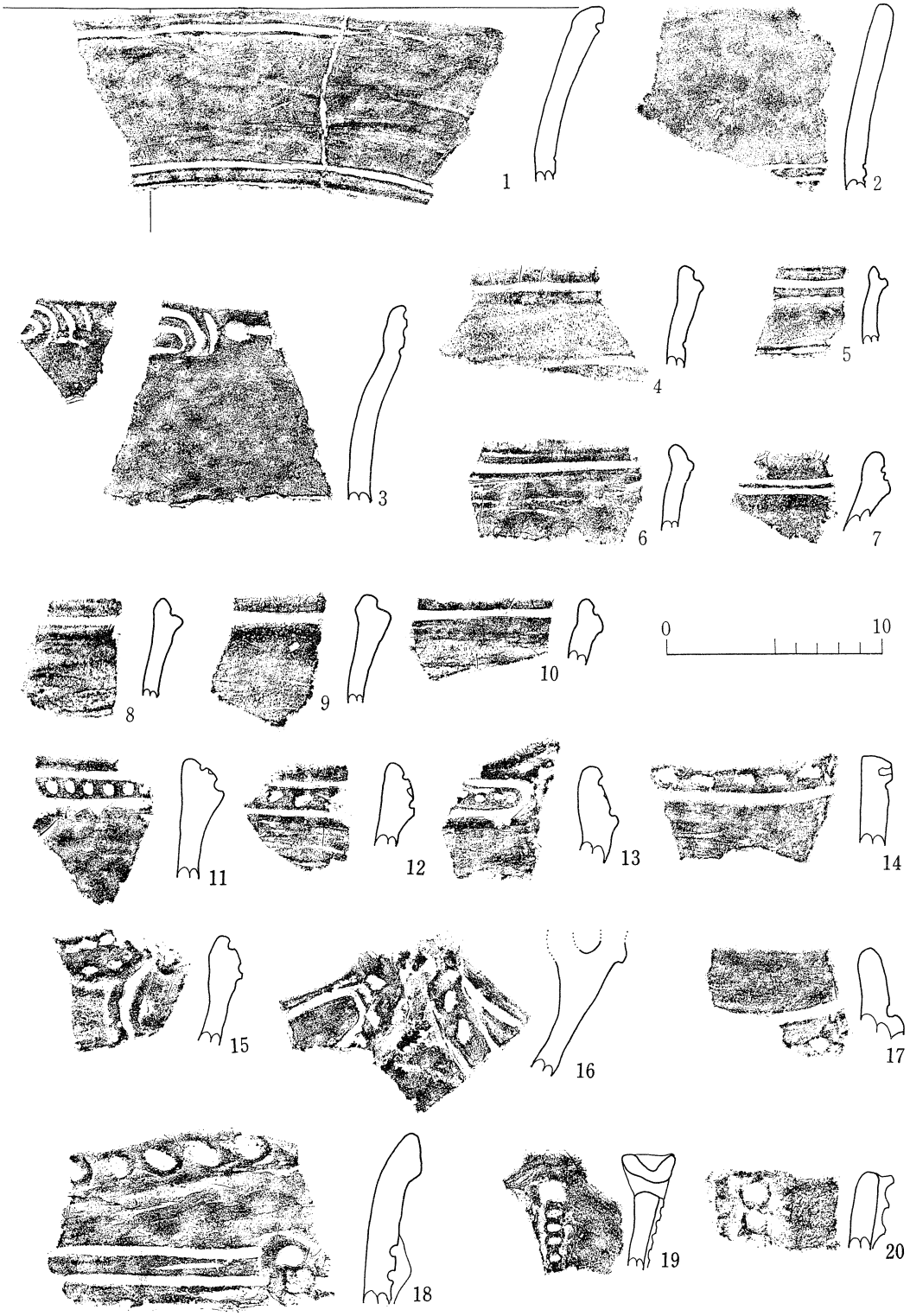
第II-31図～第II-36図は、堀之内1式の口縁部を集成した。

（3）　堀之内1式土器の様相

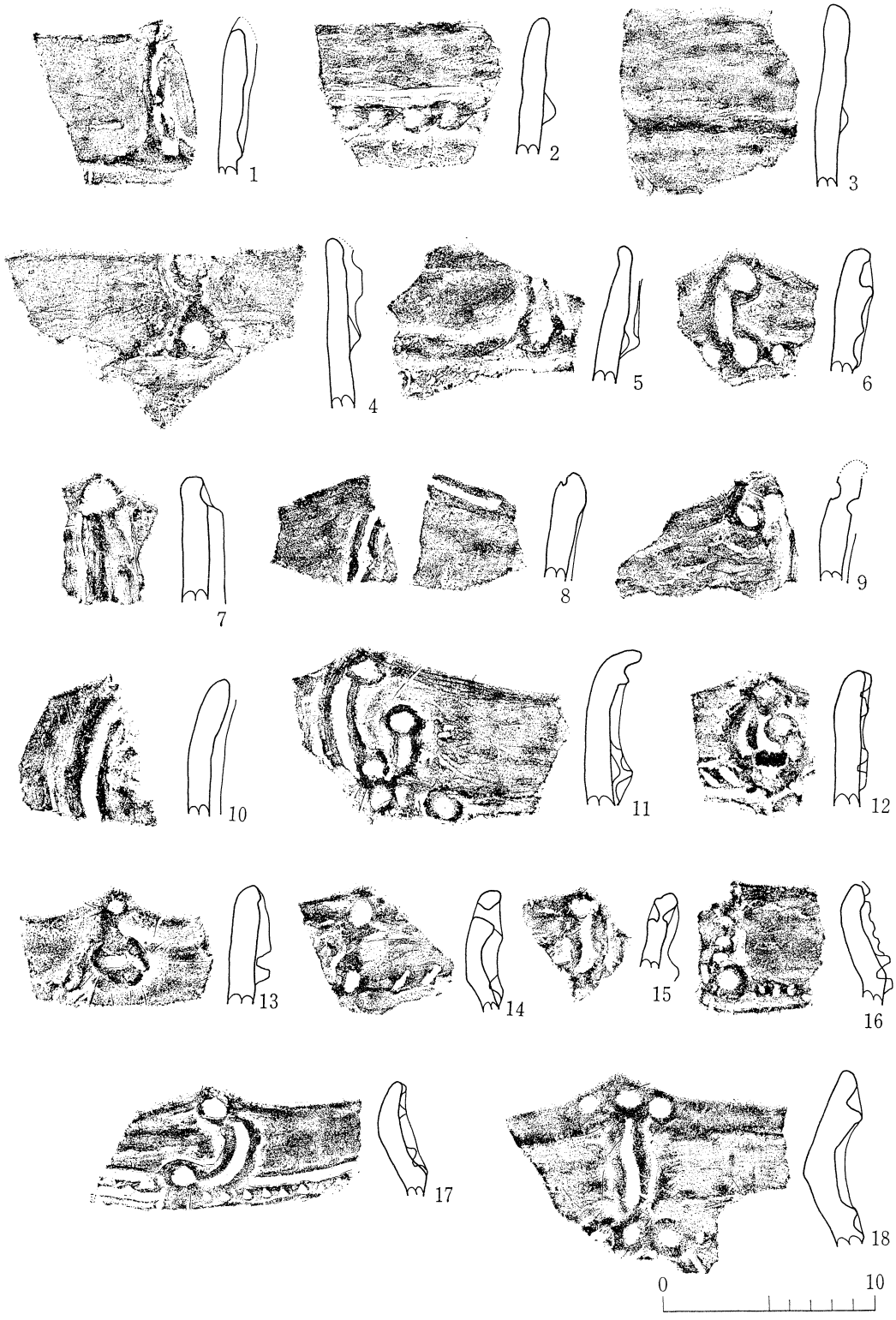
堀之内1式土器は、A区の最下層を基本的な包含層としながらも上に重なる各層からも多量出土している。外塚遺跡の縄文人は、外塚地内で生活地点を少しずつ変えていたと考えられるが、A区付近は、堀之内1式以降ほぼ継続して使われた場所のようだ。しかし、発掘地点は、居住・生活の中心ではなかったようだ。



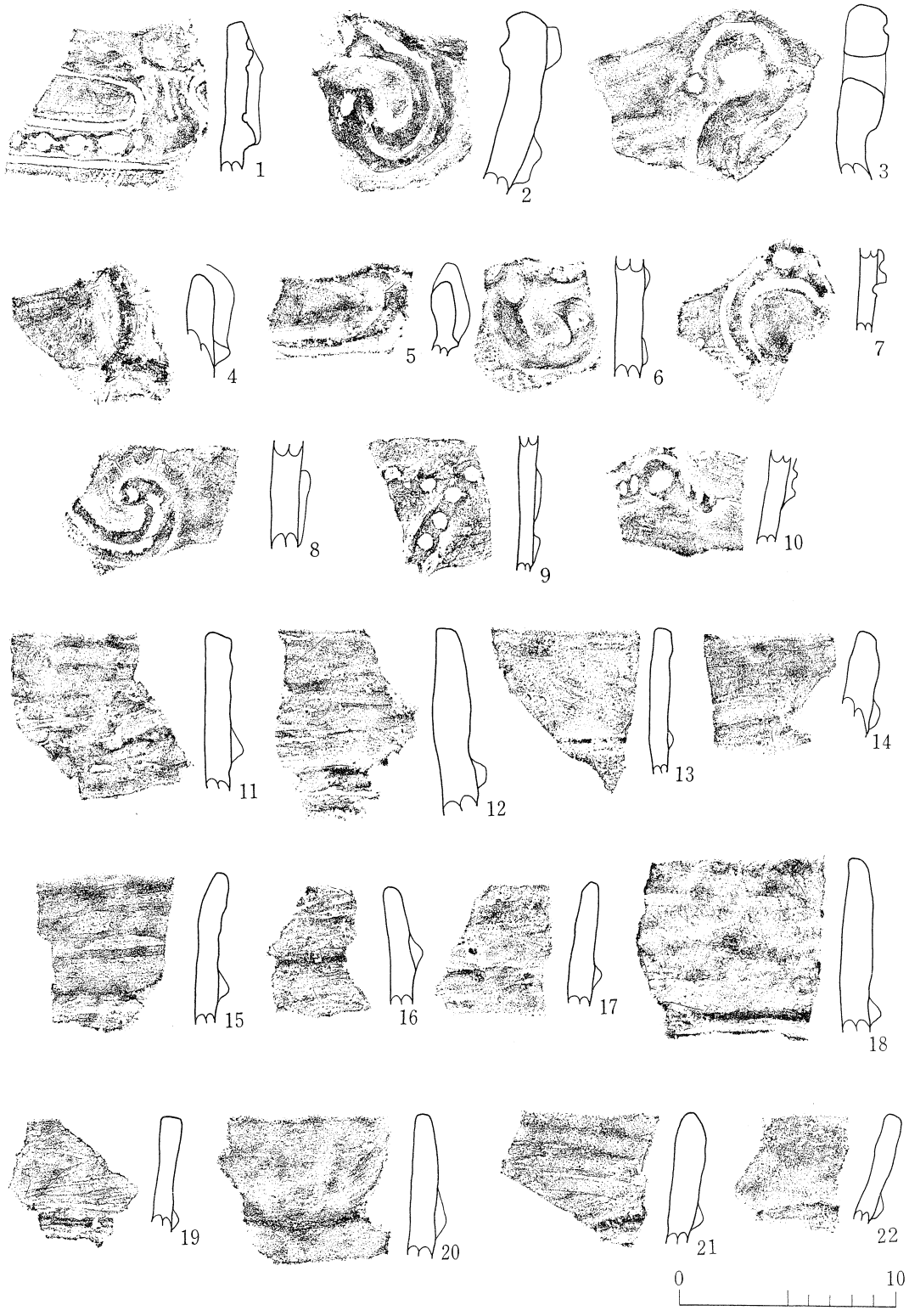
第II-31図　堀之内1式土器



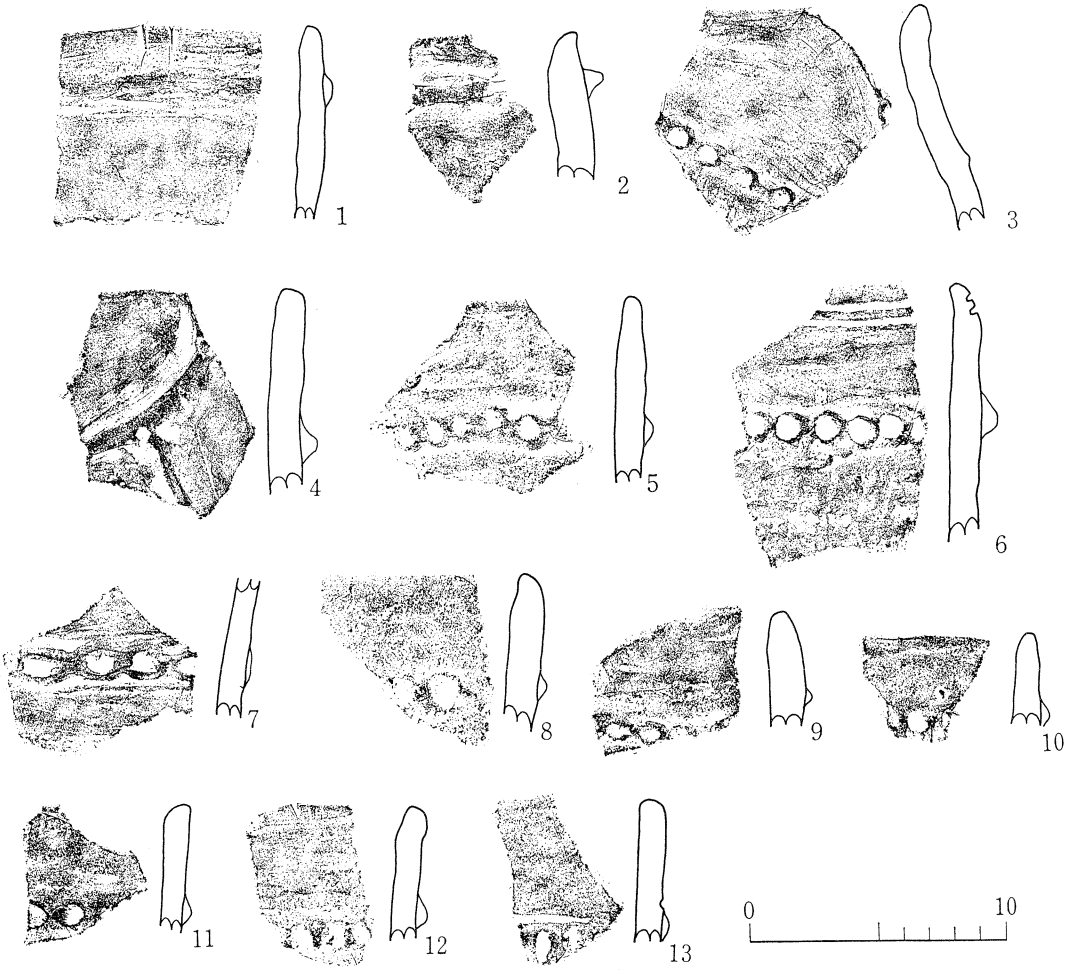
第 II–32 図　堀之内 1 式土器



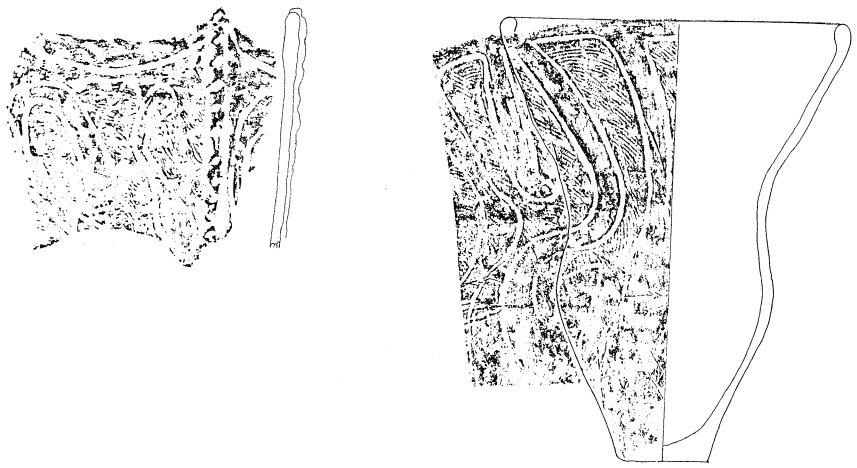
第Ⅱ-33図　堀之内1式土器



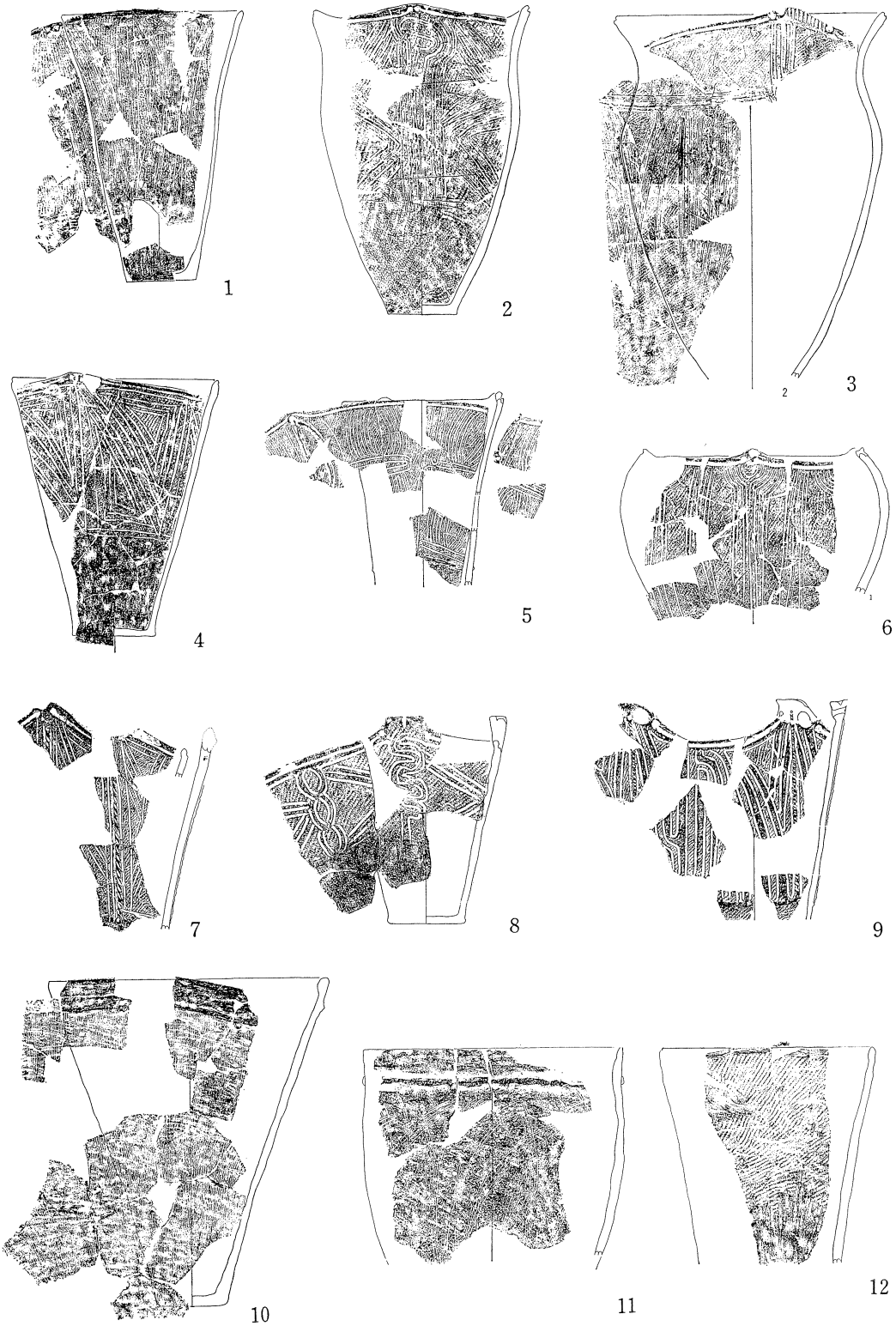
第 II-34 図　堀之内 1 式土器



第 II–35 図　堀之内 1 式土器



参考資料　下館市五戸遺跡、古堂遺跡出土称名寺式 1 式土器（真壁町史「考古資料編Ⅱ」長岡芳）



第 II–36 図　外塚遺跡出土の主な堀之内 1 式土器

堀之内2式土器への文様的傾斜

堀之内1式土器に関して、今回の調査での収穫は、同型式の中でも最も新しい段階（堀之内2式に接近した様相の見られる）の土器が、確認できたことである。

本遺跡出土の大形土器を観察してみると、堀之内2式土器は、堀之内1式土器を母体として流動的により発展的に自然成立したように見えてくる。堀之内1式でよく見られた文様が継続して用いられているのである。もちろん堀之内1式土器の全ての文様が堀之内2式土器に継承されるわけではない。文様には、次型式まで踏襲されるもの、特定の型式だけに用いられるものなどその採用のされ方は様様である。施文具についても同じことが言える。土器の表面に描かれた文様が文化的制約を有すると考えられる縄文時代において、或型式の或文様ができ上がるまでには相当のエネルギーを費したはずである。現代人は土器に表れた変化によってしか推察できないが、文様が受けている時間的制約、地域的制約を結束社会の「絆」と仮定するならば、文様の創造には想像を越える大きな力が働いていたにちがいない。新しい文様の創造（新型式の成立）には、個人的衝動を超越した集団的社会的意図を穿うことができる。文様を創造するにも創造の土台があり、踏襲、簡略化、消極的採用、デフォルメ、ミックス、異文化文様の引用、過去の産物にとらわれない独創など、絡み合いの中で文様が産まれてくるのである。逆に言うならば、一個の土器に描かれた文様は即興的に発生するのではなく前代までの系統を必ず引いているとうことである。

堀之内1式土器では「縄文地文に沈線による文様の描かれた土器」が主体的であった。堀之内2式土器は「沈線間を充填した縄文や磨消縄文を用い、研磨の顕著な土器」が目立ってくる。堀之内2式土器は、以後長く続く磨消縄文研磨土器文化の初めに置かれるが、堀之内1式土器と隔絶されているかといえば、そうではない。文様に視点をあてるとかなり流動的であることがわかる。堀之内2式土器が、いかに前代の系統を引き継いでいるかを、いくつかの点から見てみよう。

体部文様帯の下限

堀之内2式土器では、体部文様帯の上限下限が明瞭である。これも堀之内1式土器の伝統である。堀之内1式の中でも古式のものは、体部文様帯の下限がはっきりしない。また、単位文様も縦位に流れている。しかし体部下半まで届くものは少なく中半でとまっているものが多い。下半から底部までは無文で残される（頸部がくの字状になっている甕形土器は除く）。この意識的な手法が形として表われてきたのが、第II-36図5・7・9に見られるような小突帯、4に見られるような沈線である。小突帯による文様境界は堀之内2式a段階まで残る。

幾可学的文様

堀之内2式土器の文様といえばすぐ「幾可学的文様」といわれる。堀之内1式土器の沈線文様を観察していると、まさにそれは堀之内2式土器の源であることに気付く。堀之内1式土器に描かれた幾可学的文様を整理し、その中から必要な文様を抽出し、堀之内2式土器が成立したと考えられる。

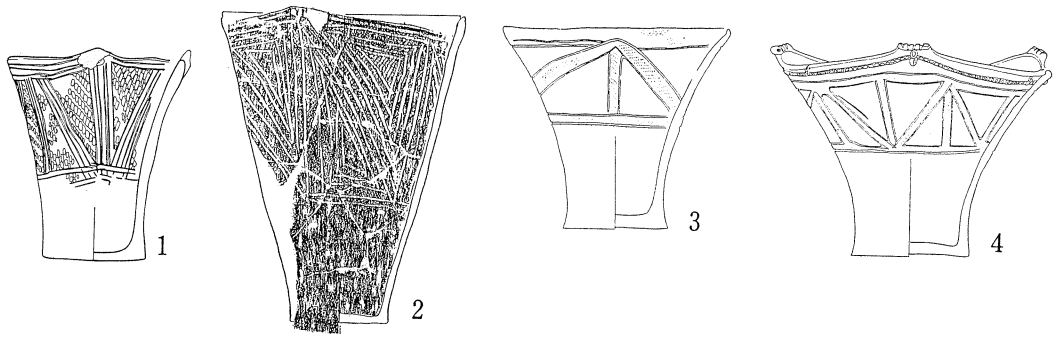
口縁部隆帯

刻目の付された細い隆帯も堀之内2式の特徴の1つである。これも堀之内1式から継承されたものである。第II-11図10は、蕨手状沈線文の土器である。堀之内1式を代表する土器である。堀之内1式土器は口縁に沈線をめぐらす。そのために口縁がやや張り出す。そこに刻目を加えたものである。より細く繊細にしたのが堀之内2式の口縁を飾る。

縦位区画隆帯

堀之内1式でも良く製作された土器によく刻目を加えた隆帯が見られる。堀之内2式a段階に継承されるが、同2式b段階ではほとんど消える。

（系統事例1）

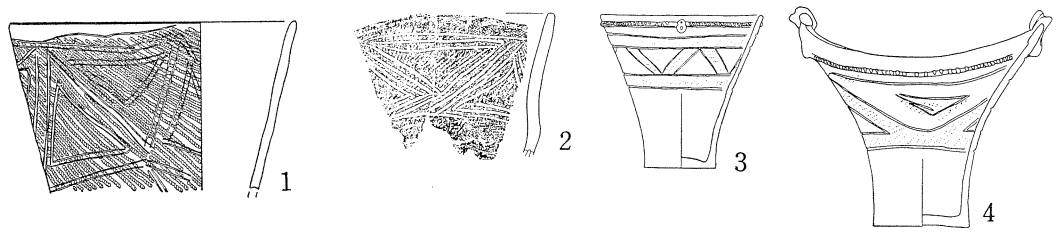


1　千葉・祇園原貝塚　　2　茨城・外塚遺跡　　3・4　千葉・堀之内貝塚

第31挿　三角形区画文（1）

縦位の文様分割帯の間を斜行する帯によって更に分割される文様が、堀之内1式から同2式に継承されたものである。1は三角形という意識はまだ薄い。2つの沈線は明らかに三角形を描いている。3は、平行する2条の縄文帯の間に山形の縄文帯を描いている。2と3にはやや隔りがある。文様の系統上は、1と3の方が共通性が見られる。4はほぼ完成された段階である。

（系統事例2）



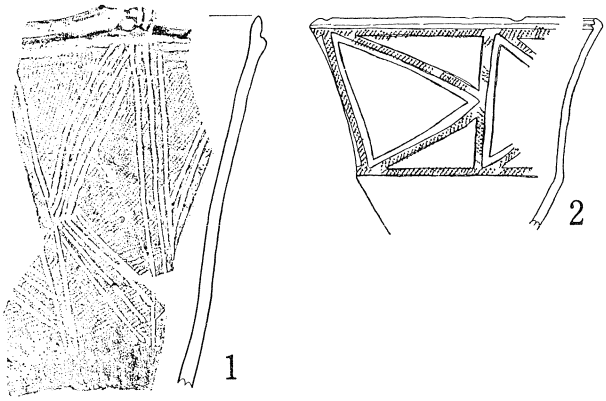
1　千葉・中野僧御堂遺跡　　2　千葉・木戸作貝塚　　3・4　千葉・堀之内貝塚

第32挿　三角形区画文（2）

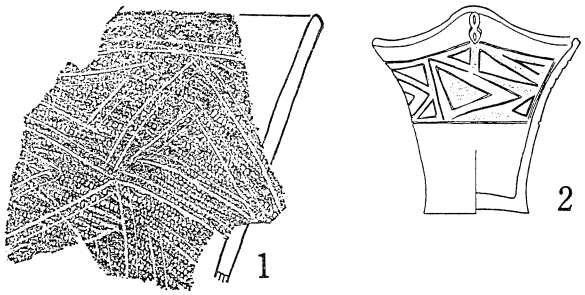
2条の縄文帯の間に、右傾、左傾の縄文帯が配され、2条の縄文帯を底辺とする三角形が交互に形成される。1はある程度文様帯の幅を考慮しているものの個々の三角形を描くのが精一杯という感じがする。2は鉢形土器である。1よりも整っている。文様帯の上限、下限が明らかであり、その間に三角形を意識した沈線文が描かれたいる。3は1・2がより発展かつ合理化されている。2条1組の沈線で、間隔をおいて引き文様帯の境界を決定し、その間に「ハ」の字状の沈線を配し、すべての沈線間を縄文で充填すればでき上がりである。従って三角形無文空間は、独立した3本の沈線で作られる。4は、1条の沈線で三角形を描こうとしたもので、1・2が保守的に発達したもので重圏化の意識も認められる。

（系統事例3）

縦位の文様帯の間に「く」の字状の文様が加えられ、全体を構成していくものである。1の堀の内1式は、文様帯の下限を決定する意識が希薄である。縦位の3条の沈線が中心となり、その間に2条



1・2　千葉・貝の花貝塚
第33挿　三角形区画文（3）



1　千葉・中野僧御堂遺跡　　2　千葉・堀之内貝塚
第34挿　三角形区画文（4）

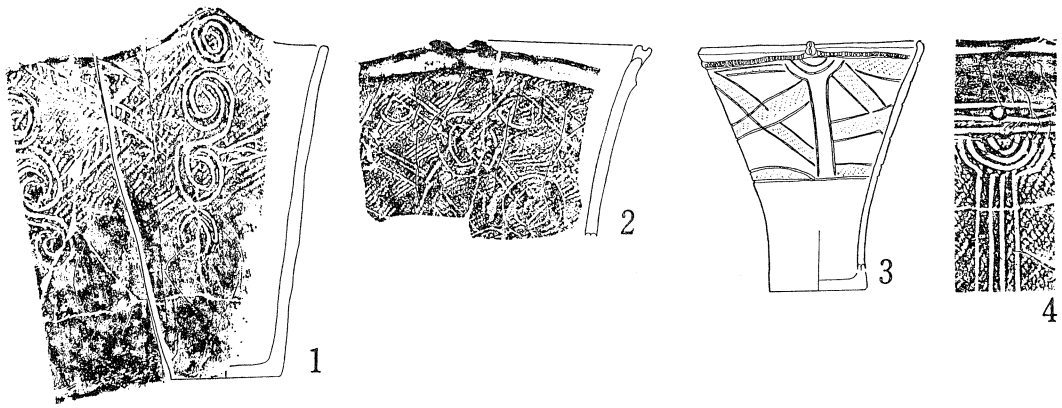
の縦位の沈線、これらの縦に流れる沈線帯の間を4条の「く」の字状の沈線がつなぐ。2は、文様帯の下限がはっきりした堀之内2式である。1の系統下にあることは明らかである。堀之内2式で縄文帯は2条の沈線で制限されるが、2は3条の部が見られる。重圏化よりは堀之内1式の伝統が強く残ったものとして見てよいだろう。

（系統事例4）

これは系統事例1に近い部分を見せる。系統事例1は縦位の文様分割帯の間に2つの三角形しか形成されない。系統事例4の2は、できるだけ多くの三角形空間をつくろうとしている。

2は、系統事例2の1よりも三角形の配置が複雑である。同一単位面積にむだなく三角形を形成している。三角形Aの1辺を三角形Bが共用している。2は、縦位分割文様帯に1の文様構成意識が加わったものであろう。

（系統事例5）

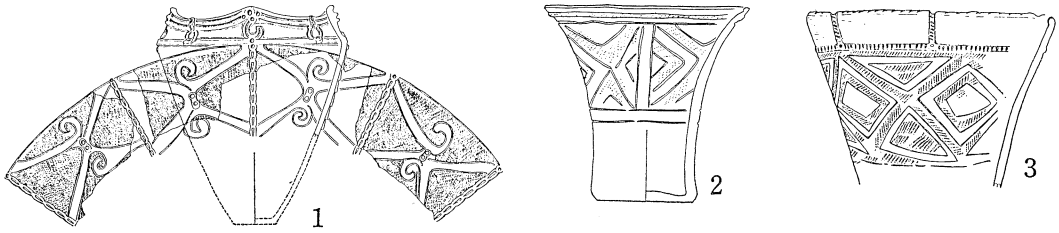


1　千葉・宮本台貝塚　　2・4　茨城・大貫落神貝塚　　3　千葉・堀之内貝塚
第35挿　襷掛け文

堀之内2式特有の体部文様帯の平行する2条の縄文帯は、文様を制限する作用を持っている。制限された白紙空間に様々な文様が描かれる。系統事例5は襷掛け状の文様が認められるものである。1は縦位の渦状の「Ｓ」字状沈線間を襷掛け状の沈線が埋めている。2は2条の沈線が格子状に施され

ている。1・2が発達し整理されたのが3である。3の「8」の字状貼付文の下には、半円の同心円状沈線を中心に懸垂する沈線は、堀之内1式に多く見られる文様である。4のような文様はいろいろな形で採用される。

（系統事例6）

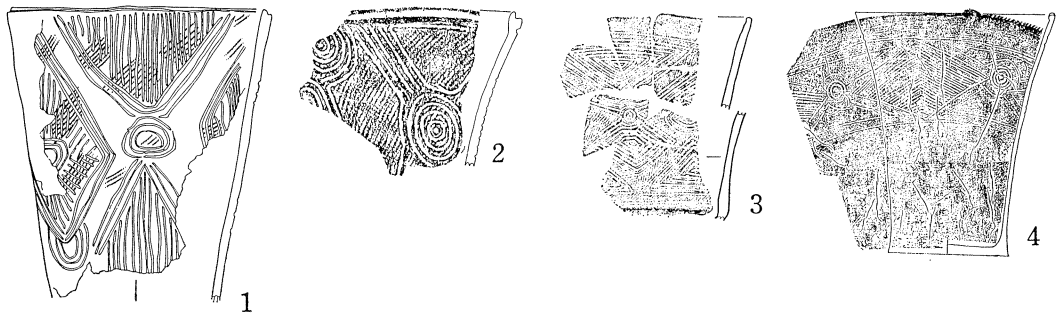


1　東京・平尾遺跡　　2　千葉・堀之内貝塚　　3　千葉・堀之内貝塚

第36挿　菱形区画文

「く」の字状に屈曲する沈線が、向かい合わせに配置された文様が発展して菱形状の文様が形成されるものである。1は称名寺式土器のJ字状文を継承した堀之内1式である。これが、整理され単純化したものが2である。2の縦位の文様分割帯が消失したものが3の菱形文に変わる。1と3を比較してみると、1の無文化された部分と3の充填縄文部分が逆転している。

（系統事例7）



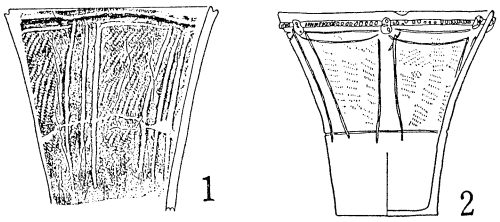
1　千葉・木戸作貝塚　　2・4　茨城・大貫落神貝塚　　3　千葉・貝の塚貝塚

第37挿　同心円文

菱形状の文様と同心円文状沈線が結びついたものである。1は3条の沈線によって菱形が描かれ、菱形と菱形の間には3条の沈線による上向き下向きの山形が構成される。これらの頂点の接する部分に同心円文が描かれている。これらが堀之内2式に引継がれ、3・4などが生まれる。3・4の無文空間を沈線で充填する方法も堀之内1式の伝統である。3・4は近似した文様構成であるが、4より3の方がより複雑である。

（系統事例8）

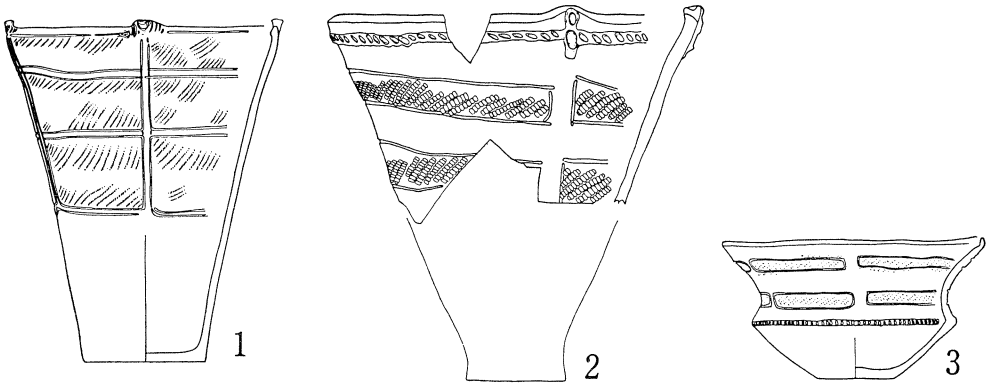
堀之内1式土器の懸垂文が堀之内2式に引継がれたもので、例は少ない。1の残された縄文は堀之内1式に通有であるが、堀之内2式では特殊な例である。堀之内1式と2式では所謂「パネル装飾」化するが、1・2はそうならない。堀之内2式でも例の少ない文様ではこういうことが間々あるようだ。



1　茨城・大貫落神貝塚　　2　千葉・堀之内貝塚

第38挿　懸垂文

（系統事例9）

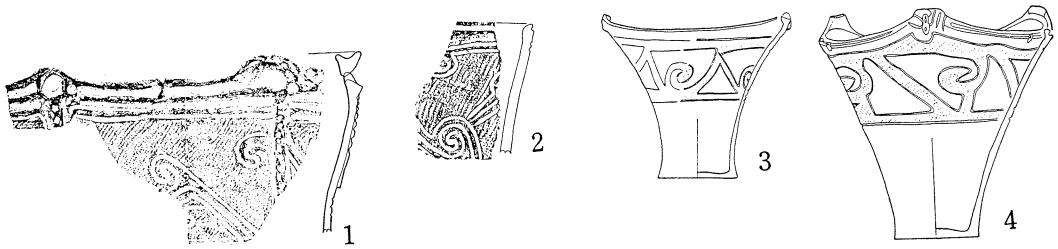


1　千葉・木戸作貝塚　　2　千葉・中野木新山遺跡　　3　千葉・堀之内貝塚

第39挿　長方形区画文

長方形の枠の中に縄文が施されたものである。1の文様が堀之内2式になると無文部が縄文、縄文部が無文になるのが普通であるが、本例も系統事例8と同じように類例が少ないためか、2・3とも1の縄文部が狭くなっただけで終わっている。長方形（方形）の文様というのは、作りやすい文様であるが、堀之内1・2式を通してあまり採用されない。堀之内1・2式では、長方形を文様の大きな枠組みとして用いている。複雑かつ多様な文様を創造した堀之内1式文化人には物足りなく、あまり用いられなかったのかもしれない。

（系統事例10）



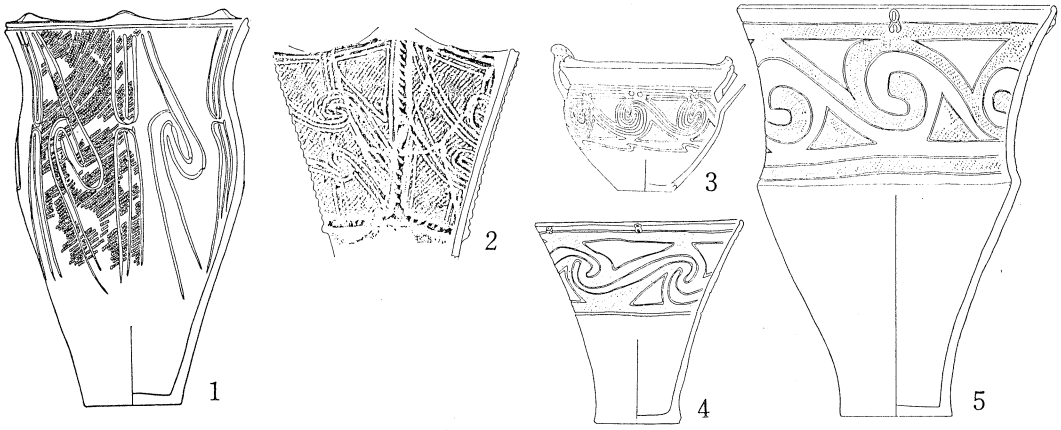
1　千葉・貝の花貝塚　　2　茨城・大貫落神貝塚　　3・4　千葉・堀之内貝塚

第40挿　渦状文

渦状文の土器である。渦状沈線、渦状磨消縄文など堀之内1式ではよく用いられている。堀之内1式の渦状文もその発生、発展ともにいろいろに分類されるであろう。堀之内2式の渦状文も同様である。3は系統事例2の下向き三角形の頂点から上に伸びた渦状文、4は系統事例1の縦位の文様分割

帯の中途で渦を巻き、下垂する帯状縄文によって下限縄文帯と結ばれている。明らかに渦状文の出自が異なってている。

（系統事例 11）



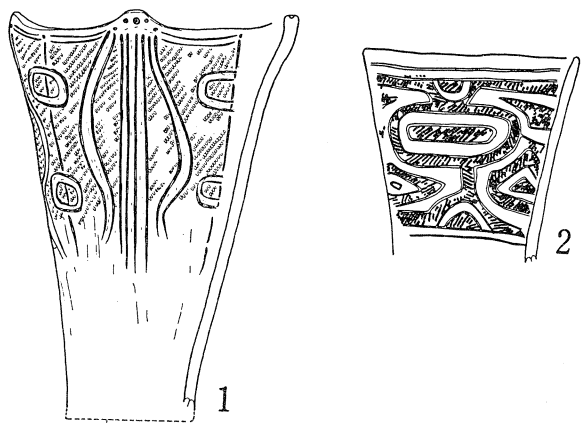
1　千葉・中野僧御堂遺跡　　2　茨城・大貫落神貝塚　　3・4・5　千葉・堀之内貝塚

第 41 挿　入組文・渦状文

4 は入組文、5 は渦状文である。相方に共通しているこは、縦や斜めの沈線、縄文帯に遮断されることなく流れるように入組文、渦状文が構成されていることである。いずれも中心文様（入組文、渦状文）以外の余白の形が良く似ている点も興味深い。

1〜3 は、4・5 の原点と予想される堀之内 1 式の沈線文様である。1 は縦に流れる屈曲する沈線に上下各 1 条の補助的な沈線が加わり入組文的雰囲気がでてきている。この種の文様が 2 では、2 段になっている。堀之内 1 式の深鉢形土器では、1・2 のように体部文様を縦に分割する沈線文や隆帯があった。注口土器 3 は、文様を描く幅が狭いせいか分割する文様が見られない。3 の場合、文様帯の下限を意図する曲線が認められる。3 の文様は次の世代の文様を生み出す素地を含んでいる。4・5 は、成立過程、表面形状は異なるものの出発点はかなり近かったかもしれない。

（系統事例 12）

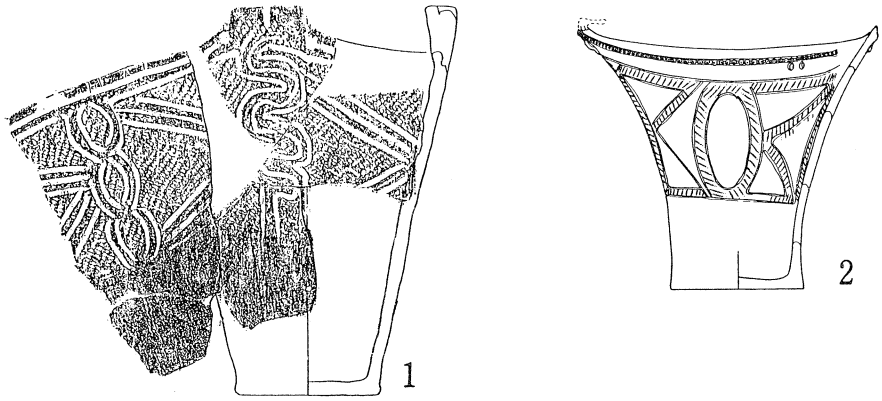


1　千葉・貝の花貝塚　　2　千葉・矢作貝塚

第 42 挿　楕円文

堀之内 2 式に例はさほど多くはないが、楕円形の区画を見ることがある。堀之内 1 式の向かい合う弧状の沈線が発展した形とも思えるが、堀之内 1 式そのものに楕円形区画文があるので、これを原形として考えてもよさそうである。1 は、楕円区画内を磨消し、上下それぞれを沈線で結んでいる。独立的に配置する例もあるが、連結させる意識は 2 に通じるものを感じさせる。

（系統事例 13）

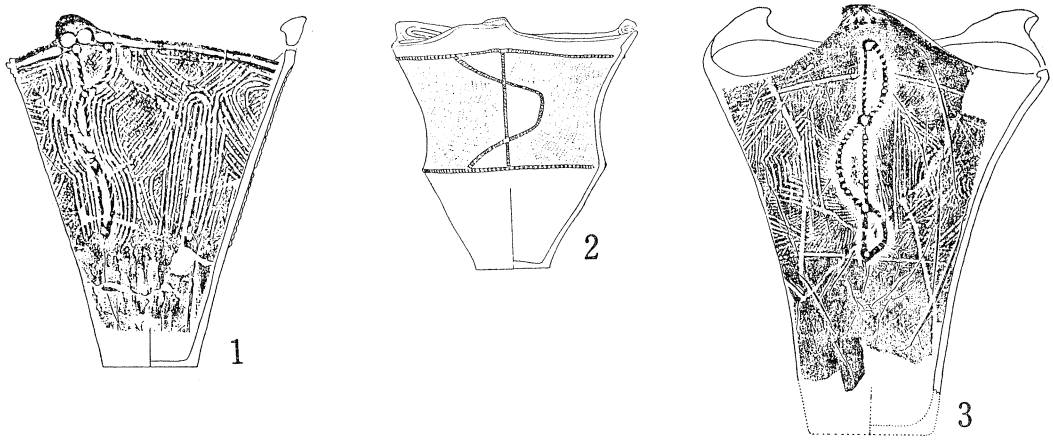


1　茨城・外塚遺跡　　2　千葉・木戸作貝塚

第 43 挿　弧状文

堀之内 2 式の体部文様には、向かい合う弧状の帯状縄文が用いられる。1 は口縁部突起の下に蛇曲する沈線、口縁部平担部に向かい合う弧状の沈線、これらを逆「く」の字状の 3 条の沈線が連結させている。2 は、1 の蛇曲線を廃し、弧状沈線の 1 つを拡大したような沈線区画である。堀之内 1 式より堀之内 2 式の方が、文様が単純化される傾向を示す好例である。

（系統事例 14）



1・3　茨城・大貫落神貝塚　　2　千葉・堀之内貝塚

第 44 挿　刻目隆線

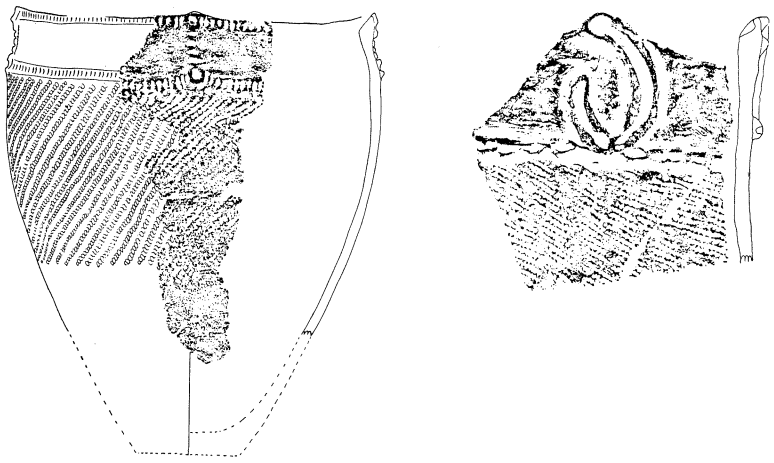
これらは、類似した刻目を伴う隆線のあるものを集成したものである。1 は体部文様帯の下限が不明瞭な段階の土器で、独特の隆線が施されており、隆線の両側は堀之内 1 特有の沈線が引かれている。2 は、平行する 2 条の隆線が体部文様を決定する。2・3 の口縁部は 3 単位で、つくりもよく似ている。2 の口縁内側の沈線文は堀之内 2 式に多く見られるものである。

以上、堀之内 1 式と堀之内 2 式の共通点を探し、発展形態として堀之内 2 式に触れてみた。ただしこれらが全てではない。また、やや無理として系統性を語ろうとしたところもある。改めて整理する

必要性を感じている。

引用文献

大場磐雄（1971）『平尾遺跡調査報告』南多摩郡平尾遺跡調査会
八幡一郎他（1973）『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
八幡一郎他（1974）『宮本台』船橋市教育委員会
中村恵次他（1976）『千葉市中野僧御堂遺跡』財団法人千葉県文化財センター
下津谷達男他（1977）『中野木新山遺跡』中野木新山遺跡調査団
滝口宏他（1978）『祇園原貝塚』千葉県市原市教育委員会
栗本佳弘他（1979）『木戸作遺跡（第２次）』財団法人千葉県文化財センター
今橋浩一（1979）「中妻貝塚出土の堀之内２式土器について」『取手と先史文化』取手市教育委員会
今橋浩一（1980）「堀之内式土器について」『太田区史（資料編）考古Ⅱ』太田区教育委員会
藤本彌城（1980）『那珂川下流の石器時代研究』
清藤一順他（1981）『千葉市矢作貝塚』財団法人千葉県文化財センター
長岡芳（1982）『真壁町史料・考古資料編Ⅱ』真壁町
桜井清彦・高橋龍三郎（1983）「千葉県堀之内貝塚・伊豆島貝塚・三ツ作貝塚の縄文式土器」史観



参考資料　真壁町高内遺跡出土堀之内１式並行期の土器（真壁町史「考古史料編Ⅱ」長岡芳）

堀之内2式土器（第II-37図～第II-38図）

本遺跡において堀之内2式土器の占める比重は軽い。出土の主体となる層を持たず、加曾利B1式土器以降の土器群に混じってごく少量の出土をみただけで、少破片が多い。

堀之内2式のa段階の土器（第II-37図1～17）

8字状の貼付文や刻目の細い隆線が特徴的な『日本先史土器図譜』図版57例以前の段階と考えられるものである。堀之内2式と言えば繊細というイメージがあるが、a段階の土器は器厚、沈線や縄文の施し方、器面調整などからみて、まだ「繊細」には至っていないグループである。堀之内2式の一応の完成を、Ⅱ文様帯の文様を規定する上下2条の沈線磨消縄文帯による三角形・菱形・渦状・弧状などの文様の組み合わせ、8字状の貼付文、刻目を伴った細い隆線、緻密なLR縄文などの複合状態とみたとき、a段階の土器はそれらの要素の欠落が目立つグループと言うことができよう。1・2は、Ⅱ文様帯を画する2条の沈線は完成したもののその間の文様が不安定な状態をよく表している。3なども下限の沈線を逸脱する下垂する沈線が認められる。3～6の口縁部は、口縁部内側の肥厚が認められ、Ⅱ文様帯の文様関係が完成する。1～12・14・16・17などは三角形状の文様を描出する。7は体部下半で屈曲する鉢形土器である。8・9は、三角形が重圏化する。10・11は、縦位の磨消縄文帯が認められる。6・9・15は、曲沈線が認められることから渦状文が描かれていたようである。16・17には多条沈線で無文空間を埋めている。a段階の土器はまだ細分可能である。

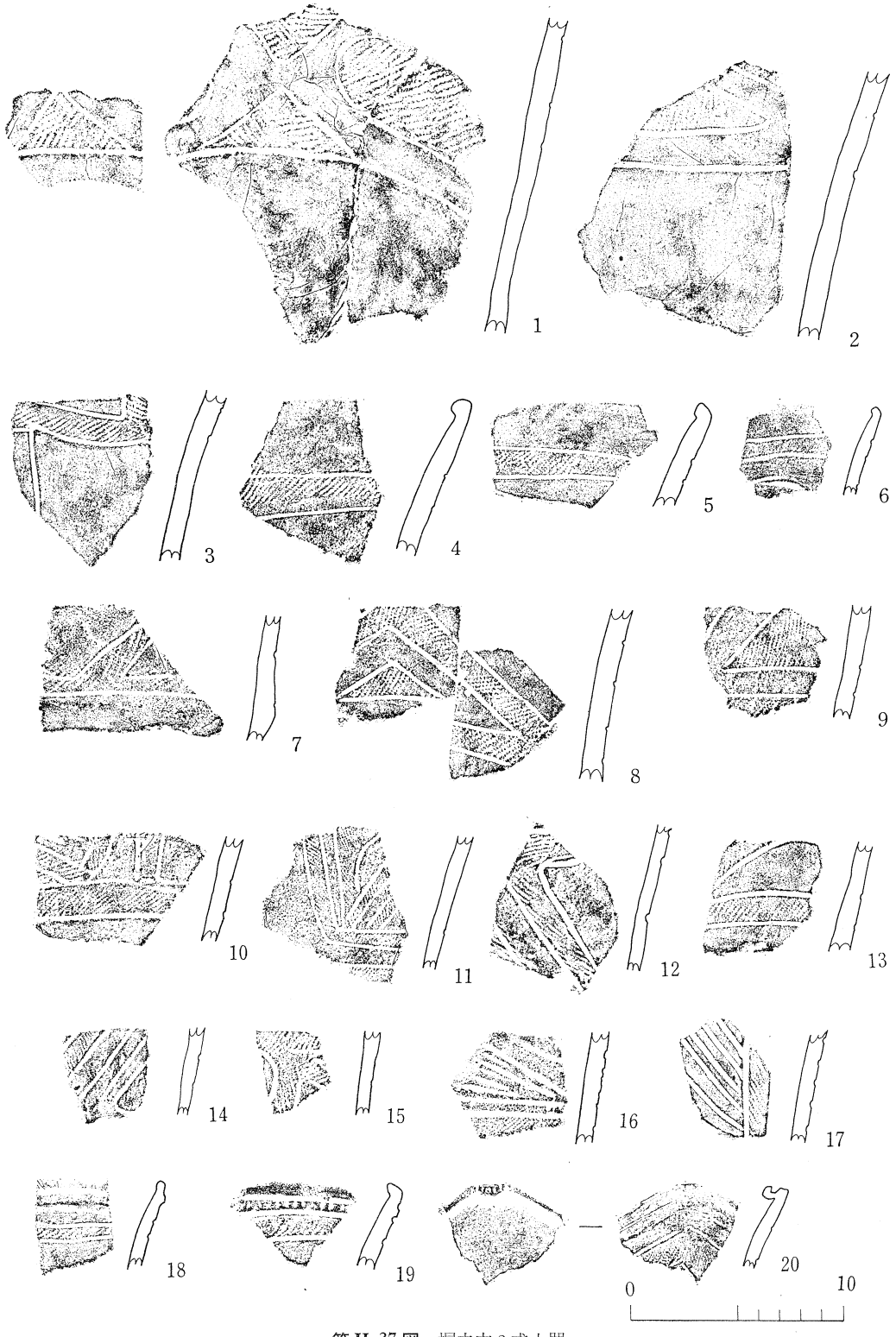
堀之内2式b段階の土器（第II-37図18～20、第II-38図1～9）

『日本先史土器』図版57にみられるように堀之内2式の完成段階である。口縁部内側の文様が発達するのもこの段階である。第II-37図18、第II-38図1～4・8・9は口縁部をめぐる隆線とⅡ文様帯の上限を画する沈線との間に無文空間を残しているが、第II-37図19は隆線の直下にⅡ文様帯の沈線が描かれている。堀之内2式では、無文空間を残しておくのが一般的である。第II-37図20は本遺跡では唯一の波状口縁の深鉢である。波頂部は内側に粘土を貼付して平坦面をつくり出し、円形の刺突を伴っている。また、口縁部の細い隆線を貼付するために浅い2条の沈線が準備されており、文様の描く順序を知る手がかりとなる資料である。第II-38図8・9は、口縁部を肥厚させる代わりに内側に沈線が用いられている。9は粗い縄文が用いられ、Ⅱ文様帯の幅も細く堀之内2式c段階とみた方がよさそうである。第II-38図5は器厚も薄く、小形の土器である。

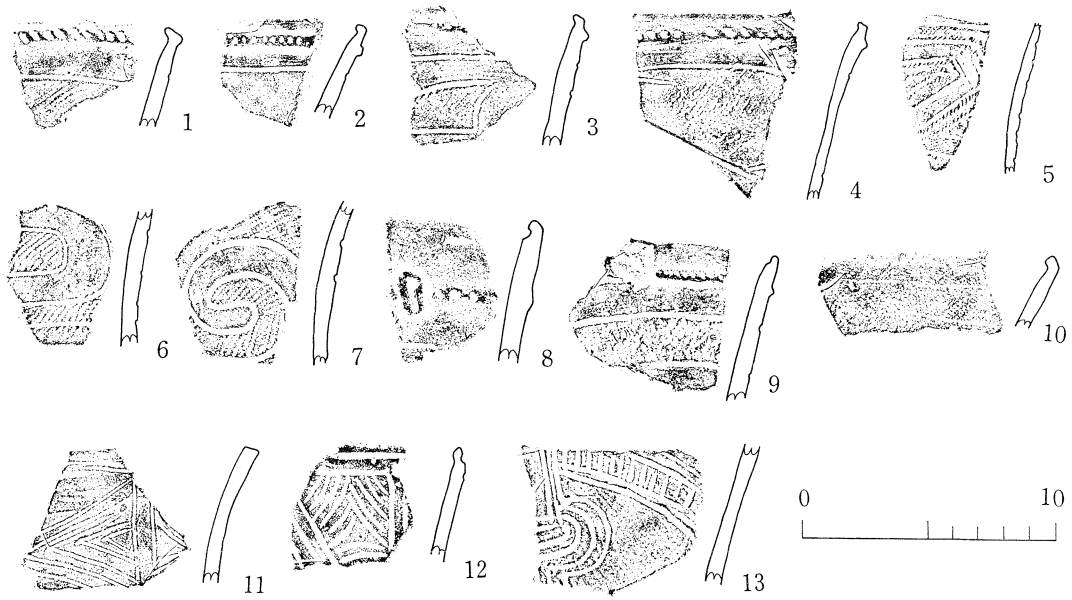
磨消縄文以外の土器（第II-38図10・11）

堀之内2式では、まだ磨消縄文土器以外の土器について不明瞭な部分が多い。本遺跡では興味ある例として10を指摘することができる。今まで、堀之内2式の斜縄文土器と言えば、堀之内1式の伝統を継承しているものが大部分であるが、10は磨消縄文の土器に用いられている縄文と同じである。また口縁部内側の肥厚器厚、器形とも磨消縄文土器によく似ている。11は無文地に鋭い沈線によって幾学的文様が構成されている。本遺跡では、集合条線による文様の描かれた土器をみることはできなかった。

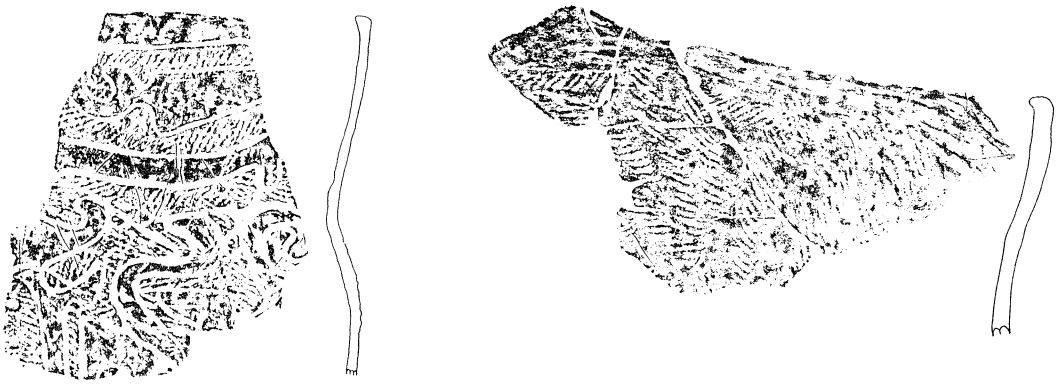
第II-37図12・13は堀之内1式の沈線文土器である。12の口縁部は、堀之内2式の傾倒する例として取り上げてみた。13は、2条の沈線間を短沈線を施したものである。これらの文様が堀之内2式の所謂粗製土器に生かされていないのは何故だうか。　（今橋浩一）



第 II–37 図　堀之内 2 式土器



第II-38図　堀之内1．2式土器



参考資料　外塚遺跡出土称名寺式土器（真壁町史「考古資料編II」長岡芳）

Ⅲ　縄文時代後期中葉の土器

E・モースによる大森貝塚の発掘が示したように、加曾利B式は関東地方における縄文時代後期の普遍的土器型式である。後期前半と後期後半においては縄文社会自体に大きな変革があったと推測できる。最近の加曾利B式の研究は、新たな文化的階梯を編年に加えること、遺跡研究を背景として、型式構造を地域的性格によって位置づける試みがおこなわれている。本章では外塚遺跡出土の加曾利B式についてその型式を構成する素因に注目しながら各資料の解説をおこなう。

用語として広義に「加曾利B式」、狭義に細別して「加曾利B1式」「同2式」「同3式」と呼称される2つの場合がある。そこで後期編年に関する基本的概念を示す。

時期の区分				型式名	細別による各段階
縄文時代後期	前半	前葉	前	称名寺式	
			後	堀之内式	
		中葉	前	加曾利B1式 加曾利B2式	Ⅰ—Ⅱ—Ⅲ—Ⅳ—Ⅴ—Ⅵ—Ⅶ—Ⅷ
	後半		後	加曾利B3式 曾谷式	
		後葉	前	安行1式	
			後	安行2式	

型式は型式構造によって決定されるから例えば粗製土器の出現は堀之内2式以降の加曾利B式の型式構造を決定するものであった。また胴部屈曲型の煮沸形態の出現は器種構成上、加曾利B1式と2式を区別するものである。注口土器の変化も同様の例としてあげられる。手法の点からいえば、加曾利B1式は堀之内2式の伝統中に顕在化した研磨（ミガキ）手法の延長にある。堀之内2式の粗大縄文を地文とする整形手法と、著しいミガキと細緻な充填縄文を装飾として用いる手法の併用という構造をそのまま受け継いでいる。これはB3式ではそれまでの精製土器の特徴的手法であったミガキに対し、条線文手法を発達させている。

一方，各段階の細別は文様の変化から辿ることができる。注口土器における加曾利B1式の集合沈線文など、充填縄文における主文様である加曾利B1式の平行線文からB2式、B3式の連孤文への変化など、これらはその文様の変遷過程によって段階を指示することができる。いま仮りにB1式からB3式まで8段階を想定したが、実際他遺跡の資料を秩序だてて文様変化を構成化すれば細別は増加するであろう。

外塚遺跡での加曾利B式の特徴は、古い段階（Ⅰ～Ⅲ）の型式構造をほとんどもたず、中位の段階から新しい段階（Ⅳ～Ⅷ）にかけてまとまりのある出土をした点である。資料点数そのものは多くないが器種については標準的なものはほとんどみられる。しかも加曾利B式はそれ固有として独立した存在を確立している。またここでは加曾利B式の地域的変型ともいうべき「中妻式」が共伴する。こ

の変型種の成立は加曾利B式における「粗製」「精製」2者の型式構造とは異なる次元によるものであることはいうまでもない。

第III-1図　加曾利B式粗製土器

1　暗褐色、口縁は断面で四角形をしており、裏面の沈線が特徴である。微隆起帯ははっきりしている。RL縄文施文後、隆起帯を付ける。**2**　黒褐色、裏面の沈線とともに口唇上の沈線が特徴である。また微隆起帯をはさんで上下に地文であるRLの縄文がみえることは施文順位が縄文—微隆起であることを示している。**3**　明褐色、口唇はやや内側に向いており、その口唇に沈線がある。このはっきりした沈線が特徴。ここでは、裏面に沈線がない。微隆起帯文はやや低い。縄文はRL、器形は波状を呈するらしい。**4**　暗褐色、ゆるい波状口縁の深鉢形。口縁裏面に浅い凹線がある。表面の紐線は粘土を断面三角の微隆起状に貼り付けて指頭で押圧文を加えた。地文の縄文はLRの節の粗いもの。紐線は縄文施文の後である。A区d-3グリッドII層出土。

5　小突起を有する深鉢形土器の破片。色調は茶褐色、焼成はやや悪い。胎土は小石粒を多く含む。直立する口辺で、口唇は丸みをおびる。小突起は内側にキザミをもつ。内面の口縁直下に二条の沈線が施される。文様は地文にRLの縄文が施されている。口辺には粘土紐が付され、キザミがつけられている。**6**　黒褐色、地文はLR縄文。緩い波状口縁、おそらく浅鉢形土器、口縁はやや肥厚しているが裏面に沈線はない。沈線の紋様は単純に短かい横線をひいただけである。**7**　明褐色、焼成は良好、緩波状口縁である。貼りつけた紐線の押圧文は指頭によるもの、下の紐線は括れ部のもの。地文は粗い節のLRと思われる。紐線は縄文の後である。裏面口縁直下にはっきりした太い沈線が二条ある。**8**　黒褐色、地文はRL縄文、平縁の深鉢形土器、口縁裏に沈線はない。器表は紐線と縄文と沈線の組み合わせである。縄文—沈線・紐線の順である。**9**　明褐色を呈する。波状口縁深鉢形。口縁裏面にはっきりした沈線がある。口縁に押圧文があるが指頭によるかどうかの判別はつかない。この紐線も薄く粘土を貼り付けたものである。地文の縄文は節の粗いRL、紐線はやはり縄文施文の後。沈線の紋様はただ左下がりの短い単純なもの。破片の左側寄りの穴はいわゆる補修孔。**10**　灰黒色を呈している。口辺はやや外反して、平縁と思われる。やや丸味を帯びた口縁直下に紐線がはりだすようにつけられている。この押圧文は指頭によるものかも知れない。器面の地文は節の緩んだLRと思われるが鮮明でない。沈線も密集しているためはっきりしないが各一本毎と思われる。研磨が良好である分、裏の口縁直下の沈線は浅いがはっきりしている。**11**　灰色を呈する。裏に沈線はある。平縁深鉢形、地文はRL、紐線の押圧は指頭によるもの。また沈線は半載竹管状のもの。**12**と**15**　おそらく同一個体、暗褐色を呈し焼成はやや不良、胎土がやや砂質のせいか厚手のつくりである。口辺の外反する平縁深鉢形である。口縁を下に紐線を貼りつけているが、その押圧文は指頭によると思われる。器面の地文は不鮮明であるが粗いLRの縄文であろう。沈線は各バラバラのものが集合したものである。裏面の沈線は太くてはっきりしている。研磨は丁寧でないが、この沈線内も研磨している。**13**　褐色を呈し焼成良好、括れ部の屈曲部に紐線がある。この紐線より以上が外反する口辺部となる。紐線の押圧は指頭による。地文は粗い節のLRの縄文で、括れ部以上の沈線は水平方向、以下は縦の斜線である。沈線は一本毎に描かれる。裏の屈曲は緩く稜線は明確でない。**14**　赤味がかった褐色を呈する。口辺はやや外反して平縁と思われる。やや丸味を帯びた口縁直下に紐線を配している。紐線の押圧文は竹管様の施文具による。地文の縄紋は節の粗いLR、その上を一本一本が別の太く浅い沈

線文を描いている。裏面は横方向に研磨している。口縁直下はややくぼんでいるが、はっきりした沈線ではない。**16**　暗褐色、平縁と思われる。比較的器壁が薄い。紐線の押圧は指頭による。地文の縄文は粗いRL、沈線は一本毎で太く鈍い。施文は縄文—紐線—沈線の順、裏口縁直下の太い沈線ははっきりしている。**17**　茶褐色、平縁深鉢形、紐線の押圧は指頭、地文の縄文は粗いLR、沈線は一本毎で太く鈍い。施文は、縄文—紐線—沈線の順。裏面の沈線は浅くはっきりしない。**18**　赤みがかった褐色を呈する。平縁深鉢形、紐線の押圧が指頭によるものであることははっきりしている。地文の縄文は粗いLR、沈線は一本毎であろう。太く鋭い。施文は縄文—紐線—沈線の順である。裏面の口縁直下の沈線ははっきりしない。A区d-4グリッドⅡ層出土。

第III-2図　加曾利B1式土器

1　口縁がやや直立する鉢形土器の口辺部破片である。色調は褐色、焼成良好。口唇は先細りし、やや鋭い。文様は口縁の下にキザミ、その直下から浅い沈線がめぐらされており、さらにLRの縄文が充填されている。これらの細横帯文の下には無文部がある。キザミ以下の部分の器壁は口縁部に比べやや厚い。

2　灰褐色を呈する鉢形土器。多段に沈線をめぐらし節の細いLRの縄文を施文。最上段には列点を配する。施文は沈線—縄文—研磨の順、最下段では縦に区切る短い三日月状沈線がみえる。**3**　黒色を呈する。鉢形土器と思われる。口唇部を少し欠く。多段に沈線をめぐらし節の細いLR縄文を施文。各沈線を結ぶように列点を配置する。列点は右上から左下へ各段毎に位置を少しずつ移動している。施文は沈線—列点—縄文—研磨の順。**4**　黒褐色を呈する。深鉢形土器の小破片。沈線による多段の横線とその後に施された節の細いLR縄文、内外面とも研磨、縄文施文部分はやや肥厚した感じがある。A区c-4グリッドⅡ層出土。

5　突起を有する波状口縁深鉢形土器の口辺部破片。色調は黒褐色、焼成良好。突起は一部を欠くが円形の立体的なもので、波頂部に斜めに付けられている。内側には小孔がある。口唇は先細りしキザミが施される。内彎する口辺の内側に段がつく。文様は波頂部突起を中心にLR縄文の横帯文を配し、さらに無文帯をはさんだ一段下に鍵手状の区切りをもつ横帯文を描いている。**6**　暗褐色を呈する。鉢形土器、緩い波状口縁と思われる。厚手であるが断面でみると口辺は内面で1段くぼんでいる。口唇にはキザミがある。破片右上の口辺の小突起は貼り付けたもので上からみても穴がある。文様は沈線によって描かれた横帯を中心とする。口辺に描かれた一本の横帯は突起につながる。胴部では横帯が三段となっていて、これと口辺の横帯を結ぶ楕円文がある。さらにこれらの円文、胴部横帯を結ぶように中央に短縦線がある。縄文は細い節のLRを沈線で文様を描いたうえから施文している。その後、全体を研磨しているが、沈線部にはナゾリを施している。**7**　黒色を呈する深鉢形土器。口唇部は内側に反って鋭く稜をつくっているが内面は平滑である。破片は紋様の単位の一つであるが突起はない。沈線によって横帯文と楕円文が描かれた後、節の細いLR縄文で充填している。紋様の構成は口辺直下に一本の横帯文と胴部に多段の横帯文を配し、これらの間に楕円文を描き加えている。楕円文が横帯と接する位置に列点化した短縦線がある。これはさらに胴部の下部に展開する文様と関連するらしい。無文部の研磨はしてあるが、沈線のナゾリはない。**8**　暗褐色、器面はよくミガかれ口唇は平坦である。小型の浅鉢形土器、緩い波状を呈する。破片はちょうどその頂部にあたり，口辺に小突起が付されている。うえからみるとこの小突起に丸いくぼみがある。ほかに目立った装飾のない突

起である。これを結ぶのは口辺と胴部を区別するキザミのある横帯である。文様の構成はキザミのある横帯と胴部の縄文施文の横帯、これらの間に配された楕円文である。この楕円文の中心に短縦線が加えられ、さらに胴部横帯に対応して描かれている。細い節のLRの縄文は沈線の後から加えられている。**10・11**は同一個体、暗褐色、胎土に石英・雲母が多い。緩い屈曲をもつ深鉢形土器の胴部、どちらも表面ではっきりしないが内面ではかなりはっきりした稜をもっている。内面は良くミガキが施されている。稜より上は横方向、下は縦方向となっている。器面の文様の構成は一段毎に無文帯を設けた縄文横帯と各縄文横帯を結んで無文帯に描かれる円文である。円文の中心部には半月状の短い縦線が描かれこれは横帯の沈線と連結している。これとは別に縄文横帯を区切る縦線がS字状に描き加えられてこれは円文の一部と連結している。縄文は節の細いLRが充填されている。無文部はミガキが施され、沈線にはナゾリがみられる。A区d-5グリッドⅢ層出土。

12　波状口縁内彎深鉢形土器、口縁から胴部上半の破片。A区d-3グリッド包含層出土。

暗褐色、焼成良好。口辺断面内側に段差がある。口辺部の厚さと胴部器壁の厚さが異なるためである。胴部の器壁はやや厚い。胴部にやや幅の狭い横帯文が無文帯と交互に描かれている。無文帯のほうが幅が広い。波状口縁の頂点を単位として胴部を縦に列点が描き加えられている。縄文はLR。口辺と胴部の境の縄文帯やキザミはない。

13　平縁の深鉢と思われる。茶褐色を呈する。断面で観察すると口縁は二重になっている。つまり器面外側から口辺をかぶせるように粘土を貼り付けている。そのため貼り付けた部分ともとの器壁の部分で裏面の口縁直下に沈線をつくっていてそこにも刺突が施されている。この破片にみえる横帯は無文とLR縄文の2本が対になっている。沈線は上下2段とも短い縦線で区切られている。縄文は沈線の後に施されそのため下段の縦線は半分消えている。**14**　口辺が内彎する平縁の深鉢形。これは底部までほとんど屈曲がない。口唇に横からはみえない刻みが施される。破片の左隅に簡単な小突起がある。これは大きな突起に対応するものである。色調は灰色の強い灰褐色で焼成は極めて良好。表裏とも丁寧な研磨を施している。裏面は口辺付近を横方向、以下を縦としている。紋様の横帯は無文部と交互にLRの縄文帯がある。これらの単純な紋様は器面に縦に施された列点を中心に描かれている。

第III-3図　加曾利B2式土器

1　小型鉢形土器、口縁から胴部にかけての破片。A区b-4グリッドⅠ層出土。

淡褐色を呈する。焼成はやや悪い。胎土は砂質。口辺はやや内彎する。器壁は薄く均等な厚さであるので極端な屈曲はないと思われる。口唇は内側にそがれたように鋭くなっているが形態としては単純である。大型の土器と基本的に同じである。口辺付近に2段胴部に1段のRL縄文横帯を配し、それぞれ3つの刺突列点を配している。胴部横帯文の下には斜線文を描いているがこの交わる部分には4点の同じような刺突列点がある。無文帯はミガキがあるが紋様帯にミガキはみられない。

2　内彎する波状口縁の鉢型土器、口辺部の破片。A区d-4グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成は良好。波状は緩い。波状の部分に粘土を継ぎ足したと思われる。全体の成形は連続している。器壁は薄い。波頂部を単位として口辺部に2個1対の列点を配する。口辺と胴部の境にはLRの幅の狭い縄文帯が施文されるが，胴部には渦文の一部がみえるだけで縄文部分はみえない。

3　内彎する平縁鉢形土器、口縁から胴部上半の破片。A区c-4グリッドⅡ層出土。

褐色を呈する。焼成はややわらかい。

口辺は短かく内彎する。口唇はやや丸味をおびている。その他口辺部周辺に目立った特徴はない。平縁と思われるがあるいは極めてゆるい波状であるかも知れない。

充填縄文手法によるものとしては最も簡単な構成である。口辺屈曲部をめぐる縄文帯を含めて交互に縄文帯と無文帯を繰り返している。縄文はLR。沈線は完全に周回するのではなく、単位毎に鍵の手となる。

4　赤味のある褐色を呈し焼成は極めて良好。器形は内彎屈曲する深鉢形。全体に無文で表裏とも良く研磨されている。LR縄文は口辺の横帯と破片下にわずかにみえる紋様にもちいられるのみである。これも口辺の屈曲部はつけ足しの部分である。A区b-5グリッドⅡ層出土。

5　外反する平縁深鉢形土器、口縁から胴部上半の破片。A区c-4グリッドⅠ層出土。

明褐色を呈する。焼成は良好。胎土は緻密である。

口辺が外反する平縁の深鉢形土器、口唇は先細りで丸味をおびている。頸部で一度括れ、胴部でまた緩く膨らむ。断面で緩いS字を描く。

全体にミガキの施された無文を基調として、頸部と胴部にLRの縄文を施文した横文帯を主な文様として描いている。横文帯には2個1対の列点文が描き加えられている。これらは横の縄文帯に対し縦方向に並べられている。施文順序は〈縄文—描線—列点—ミガキ〉である。表面の研磨は括れ部まで横方向、以下胴部では縦方向である。**6**　暗褐色を呈し、焼成は良好。平縁の深鉢と思われる。口唇部が特徴的に平坦である。まるで水平に切断された切り口のようである。口辺が肥厚していない。沈線—縄文の順であるが列点は縄文の後である。A区c-4グリッドⅡ層出土。

7　波状口縁内彎鉢形土器、胴部破片。A区d-5グリッドⅡ層出土。

明褐色、焼成良好。緩い波状口縁の鉢形土器である。内彎する口辺は立ちあがりがやや急である。内面に特徴となる文様はない。幅の狭いLR縄文の横帯文とやや幅広の無文帯の交互の構成による。波頂部を単位として連結文となる、2個1対の列点が縦に施されている。沈線—列点—縄文—ミガキの順。

8　内彎する波状口縁鉢形土器、口辺部破片。A区c-5グリッドⅠ層出土。

灰褐色、焼成はやや悪い。外面では口辺と胴部で屈曲が明瞭であるが内面は緩やかである。口唇は薄く丸味をおびている。器壁はやや薄手。口唇の直下に1条の沈線が描いている。口辺と胴部の境にキザミを施し、その直下にRL縄文の横帯文を設けている。口辺の波頂部と波底部に対弧文を配し、横帯文にも同じ単位で対弧文を配する。

第Ⅲ-4図　加曾利B1～B3式土器

1　黒褐色に近い暗褐色、胎土が粗く、焼成もやや不良、大粒の石英が混じる。浅鉢もしくは皿、やや厚手のつくりである。裏面の横方向の研磨で緩波状口縁であることがわかる。破片の左上隅に突起の残存があるのでここが波頂部と知れる。突起は口辺に粘土を貼り付けにして紋様を浮き彫り状にした加曾利B1式特有のものである。断面ではその貼り付けの様子が観察できる。LR縄文の横帯文を縦に区切るのは短いコンパス文である。縄文—沈線—コンパス文の順に施文されている。

2　平縁内彎口縁鉢形土器、口縁から胴部にかけての破片。A区c-4グリッドⅡ層出土。

褐色、焼成良好。口辺は狭く、胴部まで連続した成形である。器壁は薄い。口辺と胴部の境に狭い縄文帯（LR）を設けるほか、胴部はミガキを施して描線内に縄文を充填している。充填縄文部の文

様は横に展開するものであるが詳しい構成は不明。

3　内彎深鉢形土器、胴部下半の破片。A区d-5グリッドⅡ層出土。

黒褐色および明褐色を呈する。焼成は良好。内彎する口辺から屈曲する胴部まで幅広い頸部をもつ土器である。断面はやや厚手でしっかりしたつくりである。横帯文からうえが器形上括れ部となって内面にゆるい稜がある。頸部の連弧文と胴部の横帯文を主文様としている。縄文はLRでミガキの前に施されているがそれ以前に描線があったかどうかは不明である。

4・5　おそらく同一個体、口辺から胴部にかけての破片。灰褐色、焼成は良好、胎土にやや粗い石英粒を多く含む。器形は胴部で大きく屈曲するソロバン玉状の鉢形土器であろう。断面は口縁から緩い曲線で特徴がない。全体に器壁は均一である。文様は連弧文と充填縄文で構成される。口辺と胴部は幅の狭い縄文帯で区切られる。口辺は上方弧線が描かれ、胴部は向い合った弧線が描かれる。口辺では口縁から弧線まで、胴部では弧線間にLR縄文が充填されている。C区包含層出土。

6　暗褐色、焼成良好、屈曲する深鉢形土器の胴部破片。内外面ともミガキが著しい。縄文はLR沈線にナゾリがみられる。文様の構成は下部の多段縄文帯と上部の弧線区画文の組み合わせで、これをS字状の縦線が連結している。

7　内彎屈曲型深鉢形土器、胴部破片。A区d-4グリッド出土。

黒褐色、焼成は良好。屈曲する胴部下半の一部、断面はほぼ均等で内外面とも屈曲は緩かである。LRの充填縄文による横帯文と連弧文の組み合わせ、頸部を中心とする連弧文と胴部の横帯文が文様を構成する。連弧文と横帯文の連結に縦の文様が入るがここでは不明である。

第III-5図　加曾利B1式（新）土器

1　内彎平縁鉢形土器、口辺部破片。A区c-5グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成良好。器壁の断面は連続したもので内湾する口辺から胴部への曲線は緩かである。内外面、口唇とも特徴といえるほどのものはない。

文様は口辺に貼り付けられた「S字」の立体文が最大の特徴である。口辺と胴部の境にキザミが施され、胴部はミガキの著しい無文部の他、LR縄文部がみえるが全体の構成は不明である。

2　口辺が内湾する鉢形土器、器高はやや低く、口径は大きい。暗褐色を呈する。胎土に黒雲母が混じる。表裏の研磨は丁寧だが焼成が悪いため荒れている。表面の横帯文は、列点を中心に描かれている。施文は縄文—沈線—研磨の順である。A区c-4グリッドⅡ層出土。

3　内彎口縁鉢形土器、胴部から底部にかけての破片。A区d-5グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成良好、雲母の細片を少量含む。

器形は径が最大の部分（施文部）では緩く外反するが、それより下はかすかに内彎していく。下方にいくにつれ器壁は厚くなる。底部はおそらく平底。また口縁はおそらく緩い波状をなすと思われる。

三段の太い平行沈線を施し、次にそのすきまに2個1対の刺突を配する。そしてLRの縄文を充填して、最後に沈線の中をなぞり、施文部以外の部分に入念なミガキを施す。

4　平縁内彎鉢形土器、ほぼ完形で底部を欠く。A区b-5グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成は良好。

短口辺の土器、器壁はやや厚い。

口辺と胴部の境から胴部の中程まで縄文帯が幅広く施される。縄文はLRである。縄文帯を区画す

る描線は器面を一周するのではなく、途中、鍵の手に途切れる部分を何ヶ所か持つ。さらに充填された縄文帯に描線で文様を描いている。これらは曲線を主としており、全体としてジグザグ文様である。縄文施文後に描線を施文。

5　暗褐色、焼成は極めて良好、鉢形土器の胴部破片。内外面ともミガキは著しい。文様は複雑な入り組文である。構成する要素は、二段縄文帯、円文、三角文とその区画内側の無文部、三角文の外周にみえる縄文帯などがある。ミガキは沈線をナゾっている。縄文はLR、二段縄文帯も一段毎別々に施文したものである。**6**　暗褐色、焼成は良好。波状口縁の深鉢形、やや胴部が屈曲する形。波頂部には突起がつく。口唇にはキザミが施こされる。全体によく研磨されているのが特徴。縄文帯以上の無文の口辺部は構造的にはつけ足した部分。施文は縄文—沈線—研磨の順。

7　波状口縁胴部屈曲深鉢形土器、口辺から頸部の破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

明褐色、焼成は良好、胎土にやや大きな石英粒を多く含む。

三単位の突起をもつ波状口縁の深鉢形土器、口辺部はやや薄手で胴部の境で内面に段差がある。口唇は薄く、やや丸味をおびている。

口辺部を無文とする以外、LRの縄文が頸部全体に施文される。縄文施文以前にあらかじめ描線文様があるが不明、単位に伴う縦の連結文はない。

第III-6図　加曾利B式外塚遺跡の地域的特性

1　外反口縁型平縁深鉢形土器、完形土器。A区c-4グリッドⅡ層出土。

褐色、焼成良好、胎土に若干の石英粒を含む。全体の器形は幅の広い口辺部が外反するコップ形の深鉢形土器である。口辺部と胴部の境でわずかに括れる。器壁は薄手で均一である。口辺ではやや先細りとなる。底部も胴部の延長によってつくられている。文様は胴部における充填縄文の区画文様が全てである。口辺部と胴部との境である括れから胴部$^{3}/_{5}$程が文様帯として区画されている。この文様帯の区画内に「2字状」文を描いて充填縄文を施している。縄文はLRで全て充填手法で施されている。ミガキは文様帯の無文部以外に、底部付近にも施されている。この土器で横方向である点が特徴である。底部には編代痕がみえる。

2　平縁壺形土器、口辺部、頸部から胴部上半の破片。A区d-2グリッドⅡ層出土。

黄褐色、焼成はやや悪いがこれは胎土が原因である。胎土に石英その他の小礫を多量に含んでいる。基本的な形態は外反する口辺部と球形に膨んだ胴部からなる。器壁は口辺、胴部とも薄く頸部でやや厚味を増す。これは製作手法で胴部上半から輪積みによって頸部に至るまで序々に口径をせばめてゆく方法をとっているためである。口縁は先細りとなっている。口辺部と胴部は全面に緩いLR縄文を施文している。頸部は描線で区画され3本の無文横帯文としてミガキが施されている。この無文部は磨り消し手法によっている。

3　碗形土器、口縁から胴部の破片。A区d-4グリッド表土層出土。

淡褐色、焼成はやや悪い。口唇は丸味をおびている。器形が単純であるので器壁が薄手で均一であるほか、これといった特徴はない。口辺部は無文であるが胴部には大きく区画文様帯が設けられクランク状の文様が描かれる。RL縄文による充填縄文の手法であるため、文様によっては縦施文の部分も一部みえる。

4　平縁深鉢形土器、完形土器。A区d-4グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成良好。器壁は全体に薄手である。口縁付近はやや肥厚して口唇は丸味をおびる。これは内側から貼り付けられた粘土によって口唇が成形されているためである。口縁表側に一本の沈線がめぐらされるが、これがその仕上げを意味していると思われる。底部近くで器壁は厚くなる。これは内側で底面がくぼんだようになっているためである。したがって最底面では器壁は薄くなっている。胴部下半は序々に径をせばめてゆくが、底面でわずかに裾広がりとなる。文様といえるのは胴部全面に施された粗大な節のRL縄文である。底部付近のミガキは縄文施文後に施されたものであり縦方向である。外底面は平底で無文。

5　碗形土器、口縁から胴部の破片。A区bc-2グリッドⅠ層出土。

茶褐色、焼成良好、胎土に長石、石英などの細礫を含んでいる。器壁は均一でやや薄手である。口唇はやや平坦である。あるいはこの種の器では台付土器の台部である場合もある。口辺部付近にはミガキが施されてRL縄文の残る胴部と区別される。2条の沈線がめぐって口辺部と胴部を区画するようにもみえる。ミガキは縄文後施文である。内面はハケ様の条痕の残る調整となっている。

6　波状口縁深鉢形土器、口辺から胴部上半の破片。C区出土。

黒褐色、焼成良好。口縁は肥厚して口唇が平坦面となる。波状は大きくなると思われる。破片は胴部上半であるがやや外反気味である。単位文として波底にあたる口辺に「逆C字状」の貼り付け文がつく。これは波頂部に同様のものがあると思われる。口辺部はミガキが著しい。胴部の縄文部は描線によってさらに幅の狭い横帯文に区切られている。この横帯文もそれぞれ縦の短い弧線によって区切られている。縄文はLRである。

7　平縁深鉢形土器、口辺部から頸部破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

褐色、焼成良好。器壁は薄手である。口辺部はやや厚味があるが頸部から胴部にかけてさらに薄手となる。口辺部、頸部、胴部に区画され、頸部のみに文様をもつ。口辺部、胴部はケズリ、もしくは緩い撚糸文と思われるが器面が荒れてはっきりしない。頸部は描線によって流線形文様を描いたのち、ミガキを施している。

8　平縁鉢形土器、口辺部破片。A区b-4グリッド表土層出土。

灰褐色、焼成は悪い。胎土中に石英その他の細礫を多く含むためであろう。口縁は口唇部成形によって肥厚している。口唇は平坦で内傾している。器形はあるいは甕形土器と思われる。口縁直下に押圧的刺突文が施されるほか羽状縄文が特徴となっている。全面に1.5 cm位の幅でLRとRLを交互に施文している。

9　大波状口縁（小）鉢形土器、完形土器。A区d-3グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成はやや悪い。胎土に石英などの細礫を含む。器壁は厚手、特に底部は最も厚い。これは底部に器壁を貼り付ける手法をとったためである。口辺から胴部までの器壁は均一な厚さで、特別な口縁部手法はみられない。口唇は丸味をおびている。底部はやや裾広がりな器形となっている。全面をRLのやや粗大な縄文で施文している。そのうえから描線をめぐらしているのである。胴部にみえる3本の沈線は器体を全周していると思われる。口辺部にみえる細い沈線は波状部分の文様として波頂部を中心とした文様なのであろう。外底面は平底でケズリが施されている。

第III-7図　加曾利B1～B2式土器

2　平縁皿型土器、口辺から胴部の破片。

黒褐色、焼成やや不良。

浅い皿型土器。口辺でやや肥厚し、口辺と胴部の境でやや薄くなるが胴部では底部付近まで序々に肥厚する。口唇の断面は丸味をおびている。外面で口辺と胴部の境に段差がある。

内面には全面にミガキが施されている。外面で口辺はミガキを施されているが胴部は全てケズリ調整のままである。通常、文様は全く見られない。

3　平縁皿形土器、口辺部破片。A区d-3グリッド表土層出土。

黒色、焼成良好。口唇には太いキザミが、口辺と胴部の境には細いキザミがそれぞれ施される。口辺に貼り付けられた突起が特徴となっている。同じ位置で内側にも「8字」文が貼り付けられている。口辺と胴部の屈曲が強く、内側で段をなすことなど古い要素である。

4　緩波状口縁皿形土器、口辺部破片。A区d-5グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成良好。口辺から胴部までが屈曲ではなく緩い曲面となっている。文様も全くなく、口辺と胴部を区別しているのは調整手法の違いである。口辺の部分は緩い波状の波底部にあたり、小突起がみられる。

5　皿形（浅鉢形？）土器、口辺部破片。

黒褐色、焼成良好。口辺から胴部まで緩い曲線による断面。口唇上にキザミがみられる。口辺には「逆C字」文が貼り付けられ、内側では列点による「巴文」があり、また口辺と胴部の境に沈線が描かれている。文様と呼べるものは全くなく、器表面で口辺と胴部を区別しているのは調整手法の違いである。

6　皿形土器、口辺部破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

黒色、褐色を呈する、焼成良好。口縁断面は丸味をおびている。胴部と口辺部の成形は異なることが断面に現われている。外観上胴部と口辺部の境の段部において口辺は後から貼り付けられたものである。内面はミガキが著しい。

7　緩波状口縁皿形土器、口辺部破片。A区d-4グリッドⅡ層出土。

黒褐色、焼成やや悪。口縁には波底部における小突起がみられる。口辺は胴部との境で大きく屈曲して直立する。胴部においてケズリ調整を地文として沈線によって格子文が描かれている。

8　皿形（浅鉢形？）土器、口辺部破片。C区包含層出土。

黒褐色、焼成良好。口辺と胴部の境には押圧的なキザミが施され、胴部にはケズリ調整を地文として格子文が描かれている。詳しい形態は不明。

9　緩波状口縁皿形（浅鉢形？）土器、口辺部破片。A区a-4グリッドⅠ層出土。

黒灰色、焼成良好。波状口縁の口辺部とケズリ調整の胴部の境にキザミが施されるだけの破片である。

第III-8図　加曾利B1～B2式土器

1　胴部屈曲型鉢形土器、口辺部から胴部上半の破片。A区c-5グリッド表土層出土。

暗褐色、焼成良好、胎土に石英その他の細礫を多く含んでいる。口辺部は頸部と一体になっている。胴部は直立する口辺部との境から外側に屈曲してはりだし、最大径に達すると再び大きく屈曲して内側にせばまる。いわゆるソロバン玉状の器形を呈する。注口土器と思われる。口辺の断面は複雑な形態である。口唇は幅広で外傾しており、そこに1条の沈線がめぐる。この沈線上に「S字状」貼り付

文がつけられている。さらに口縁の内側には断面三角形の隆帯がめぐらされている。したがって口辺部断面では極端な屈曲を繰り返している。なおこの口辺は屈曲する胴部との境で接合したことがあきらかである。口辺部では先に述べた特徴のほか口縁内側に細いキザミが施されている。また口辺全体が内外ともミガキの著しいことが目立つ。特に胴部内面はケズリ調整のままであるのと口辺内側のミガキは対称的である。胴部上半の文様は充填縄文による横帯文と楕円文の組み合わせである。3本の幅の狭い横帯文と1本の幅広の横帯文を描き、幅広の横帯文中に楕円文を組み入れている。さらに破片下端の無文部にも文様の展開がみられるが様子は不明である。充填される縄文はLR単節。

2 おそらく注口土器の胴部上半。暗褐色、焼成良好。内面は荒れてミガキが認められない。器面の紋様の構成は破片上部に幅の狭い横帯を描き、その下に三角文を描いたうえ中心部に円文を加えている。その下にも別の三角文を描くがこれは中心に縦線を加えて、上とは別な図となっている。さらに下に描線は続いているが円文か三角文かは不明。描線後、節の細いLR縄文が施されている。上段横帯と三角文は区別なく縄文施文され、下段三角文はその区画内だけを充填されている。無文部にはミガキが施されている。A区c-4グリッドⅡ層出土。

3 胴部屈曲型鉢形土器、胴部上半部から下半の一部の破片。A区d-5グリッドⅠ層出土。

赤褐色を呈する。焼成はやや柔かい。

口縁が直立し、胴部はいわゆるソロバン玉状に最大径部分で大きく屈曲する。断面を観察すると屈曲する部分で胴部の上下を接合していることがわかる。

胴部上半はRLの充填縄文とミガキによる幾何学紋様を描いて下面は条線による調整である。口辺、胴部の屈曲部にはキザミが施されている。裏面では口辺に至る部分でミガキがみられるものの胴部内面では内反する上半部が全くの未調整であるが、下半部は幾分調整を受けた痕跡がある。これは、下面にある程度の調整を施したうえで上面が貼り付けられたと思われる。

4 胴部屈曲型鉢形土器、胴部上半部と下半の一部を残す破片。A区c-5グリッド表土層出土。

暗褐色、焼成良好。いわゆるソロバン玉状の器形で胴部最大径の屈曲の著しい部分である。断面では胴部上半で厚手、下半で薄手の器壁である。文様は連弧文に円形刺突（竹管）文と中心縦線の構成にLR縄文を充填している。胴部下半は条線文となっている。この下半部にススが付着している点からこの種の土器が煮沸形態の一つであることがわかる。また胴部上半においても内面にミガキが認められた。

5 胴部屈曲型鉢形土器、胴部破片。

暗褐色、焼成良好。器壁は全体に薄手であるが破片の上端や胴屈曲部など接合の部分付近では厚みを増している。そのため内側の断面はなだらかなものとなっている。文様は連弧文と中心の縦線の組み合わせの一部がみられる。充填された縄文はRL、胴下半は条線文である。胴屈曲部にキザミが施されている。

6 胴部屈曲型鉢形土器、胴部上半破片。

褐色、焼成やや悪。文様に連弧文はみられるが中心の縦線がない。この破片に施されたLR充填縄文と他の中心線をもつ連弧文の充填縄文を比較してみると、前者の縄文施文が連弧の区画だけを意識しているのに対し、後者の場合、連弧文を分割する中心の縦線による区画も意識して施文していることがわかる。

7　胴部屈曲型鉢形土器、胴部上半破片。A区d-2グリッド包含層出土。

暗褐色、焼成やや悪。文様は連弧文に中心縦線を配したもの、縦線の下端に円形刺突（竹管）文がある。充填縄文はRL。

8　短口縁胴部屈曲型鉢形土器、口辺から胴部下半の一部までを残す破片。C区包含層出土。

褐色、焼成良好。短かく直立した口辺が特徴となっている。胴部上半の器壁は厚手であり、下半では薄手となっている。胴部上半はその厚味のためかやや膨らんだようになっている。胴部上半はRLの充填縄文が施され、下半は条縄文が施される。充填縄文を区画する連弧文にそって粗大なキザミをもつ弧帯文が組み合わされる。また弧は他の例とは逆に下方に向けて描かれている。全体に雑然とした印象の文様である。口辺と胴部の境、胴上半と下半の境など器形の屈曲する主要な部分にも刺突（キザミ）が施されている。これらは縄文施文後に施文されたものである。

9　胴部屈曲型鉢形土器、胴下半部破片。A区d-4グリッドⅠ層出土。

灰褐色、焼成良好。胴屈曲部から割れた破片のうち下半にあたる部分である。破片上端には胴部上半の文様の一部が残り、RL縄文の横帯文がみえる。さらに破片右端には刺突文がみえるので胴部上半の文様が連弧文であったろうことは予測がつく。胴下半では半分がミガキを施された無文帯でさらに下半分ではケズリ調整を地文として斜方向沈線（条線）文が施されている。

10　胴部屈曲型鉢形土器、胴部上半部破片。A区d-2グリッドⅡ層出土。

黒褐色、焼成良好。胴部上半に全てRL縄文が施され、それを一部磨り消して円文（渦文）を描いている。口辺と胴部の境にはキザミの施された横帯があり、その直下にはさらに押し引き文が施されるなど装飾が多い。胴下半との境で一部無文帯がみえるが屈曲部以下どうなるか不明である。

第III-9図　加曾利B2式（古）土器

1　直立口縁深鉢形土器、口縁部破片。A区c-3グリッド表土層出土。

暗褐色、焼成はやや悪い。

口唇は丸みをおび、わずかに肥厚する。口辺は直立するか、やや外傾するであろう。内面の口唇直下に沈線状のくぼみがある。

口辺に横走する沈線文を不規則に描き、その後全体にミガキを施している。

2　直立口縁深鉢形土器、口縁部破片。A区c-5グリッド表土層出土。

暗褐色、焼成はやや悪い。器壁は均等に厚く、口唇は丸味をおびている。口辺は直立するか、やや内傾するであろう。内面に沈線状のくぼみがある。口唇部付近で肥厚するのが断面の特徴となっている。口辺の文様はケズリ調整をおこなった器面に横走する沈線文をやや不規則に描き、その後で全体にミガキを施したものである。

3　暗褐色を呈する。粗製の深鉢形。地文は節の粗いRL縄文、無文磨り消しの部分は頸部にあたる。沈線を頸部にめぐらし、これを研磨して無文帯としている。やはり施文順は、縄文—凹沈線—ミガキである。**4**　茶褐色を呈する。深鉢形の一種である。地文の縄文は節の粗いRL、頸部以上は地文の縄文がなく、沈線をめぐらしたうえで磨り消している。縄文—沈線—研磨の施文順。

第III-10図　加曾利B2式（古）土器

1　緩波状深鉢形土器、口辺から胴部にかけての破片。A区d-4グリッドⅠ層出土。

色調は黒褐色、焼成は良好。口唇は切断されたように平坦に仕上げられている。口辺は内彎し、胴

部が屈曲する。胴部の器壁はやや厚くなっており、そのため外面に段ができている。口辺部は無文で、ミガキが施されている。屈曲部にはキザミがあり、その下に浅い描線が数条めぐり、横帯文を描く。描線間は無文であるが、斜方向のケズリの痕が観察できる。

2　波状口縁内彎深鉢形土器、A区d-3グリッドII層出土。

破片は波底の口辺部から胴部上半にかけてであるが、胴部紋様全てを含んでいるわけではない。暗褐色、焼成良好。断面の観察によれば、幅の広い口辺も全て貼り付けによっている。口唇はやや平坦で丸味をおびているが、キザミ等はない。口辺と胴部の境にあたる屈曲部以下の描線によって区画された横帯文は、ミガキが施されておらず、ケズリ調整のままである。この描線を切るように2個一対の列点が縦に配されている。この文様単位は波底と波頂部の両方にあるらしい。また波頂部には口辺に何らの隆起した紋様があったらしい。

3・4・5は同一個体？　黒褐色を呈する。おそらく6のような緩波状の鉢形土器、縄文はなく、横線無文部が多段となってこれを短い縦線が区切る。破片にはいずれもその一部がみえる。多段の横帯部分は表面は未調整である。裏面はよく研磨調整され、表面も横帯以外の部分は良く調整されている。A区d-3グリッドII層出土。

6　暗褐色部分を含む褐色を呈する。裏面は良く研磨されて黒色である。3・4・5と同じように波状口縁の鉢形土器、全形がうかがえる。屈曲する口辺以下の胴部は単純な横帯文で占められている。地文は器面をヘラケズリのままとした無文で、これをやや幅の狭い横帯が区画している。区画内と外は、器面の研磨調整によって対称的である。横帯を区切る短い縦線は、向い合わせに対になって各段にみられるようである。A区d-3グリッドII層出土。

第III-11図　加曾利B2式土器

1　大波状口縁鉢形土器、口辺部破片。A区d-3グリッドII層出土。

灰褐色、焼成良好。破片はちょうど外反する口縁の波頂部である。波頂部にさらに小突起が2つ貼りつけられている。やや厚手でしっかりしたつくりである。文様は内外両面に描かれている。外面では波頂部を中心として横帯文を口縁に平行に描いている。その中心に「S字・Z字」の連続組み合わせ文を縦に描いている。内面ではそれに対応するかのように口縁に平行な横帯文は一条の描線で、縦の組み合わせ文は一つの凹点という簡略化した姿で表現している。外面地文はケズリ調整、内面は丁寧なミガキが施されている。

2　緩波状内彎口縁鉢形土器、口辺から胴部上半の破片。A区d-4グリッドII層出土。

灰褐色を呈する。焼成は良好。胎土はやや粗い。緩い波状の単位は3単位であろう。うねるような緩い波状口縁は、堀之内式からの伝統として加曾利B式の特徴である。口唇は平坦で何の装飾もなく、幅広の口辺部全体にも肥厚した部分やくぼんだ部分もなく素直なつくりである。破片の右上が波頂部にあたる。おそらくここに簡単な装飾がつくものと思われる。縄文による装飾を全く持たない土器であるので、その装飾は器面を沈線で区画して、その区画の内と外で整形であるミガキを施すことと、そうでない部分を一部残すことで文様効果をだすという手法を採用している。従って工程として〈区画描線—縄文—ミガキ〉から縄文の部分を除いたものと理解できる。ここでは実際に未調整部分として残されているのは口辺と胴部の境である屈曲する部分と胴部の三本の描線で区画された2段の横帯文である。

3・4は同一個体？　灰褐色を呈して焼成は良好。口辺が内彎する波状口縁の深鉢形である。屈曲する口辺部はかなり幅広である。全体は表裏とも良く研磨され丁寧な調整であり、これが紋様の区画された横帯内の未調整の器面と対称をなしている。未調整の部分では右下りにヘラケズリされた様子が観察される。A区d-4グリッド出土。

5　緩波状内彎鉢形土器、口辺部破片。A区d-4グリッドⅡ層出土。

暗灰褐色、焼成良好。波状口縁は極めて緩いものと思われる。口唇は平坦で沈線やキザミはない。紋様は口辺から直接胴部の多段横帯文に移行している。多段横帯文は描線で区画されただけであるが、口辺はミガキが施され、横帯文はケズリ調整のままであるのが違いである。

6　深鉢形土器、胴部破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

黒褐色、焼成良好。やや厚手である。文様は沈線（描線）のうえからコンパス文の手法による連続「S字状」文が描かれている。沈線施文部は表面が荒れており、ミガキの痕跡はない。

7　深鉢形土器、胴部破片。

黒褐色、焼成良好。文様は対連弧文による組み合わせと、中心の連続「S字状」文の構成である。「S字状」文を含む連弧文の区画の内側はケズリ調整である。

8　深鉢形土器、胴部破片。A区d-4グリッドⅡ層出土。

暗褐色、焼成良好。薄手である。文様は対連弧文と横帯文の組み合わせである。これら文様の区画内は無文調整であり、その他の部分には丁寧なミガキが施されている。また横帯文以下のミガキは縦方向である。

9　深鉢形土器、胴部破片。A区d-5グリッドⅢ層出土。

黒褐色、焼成良好。胴部の屈曲に伴い内側で緩い段をもつ。文様は横帯文と連弧文の一部が断片的にみられる。破片中央の幅広の無文部分が丁寧なミガキを施されている。他の部分はケズリ調整である。

第Ⅲ-12図　加曾利B2式土器

1　小口径土器、A区d-4グリッドⅡ層出土。

詳しい形態は不明。黒褐色を呈し、裏面は良く研磨されている。短口辺でこの部分は貼り付けである。やや厚くなった胴部の紋様は太い沈線によって三角形に区分され、その内部を細い沈線が埋めるが、さらにその上からLRの細い縄文を施す。その三角区画内は充填のための縄文の方向の単一でないことがわかる。

2　緩波状口縁（深）鉢形土器、口辺部破片。A区d-4グリッドⅡ層出土。

黒色、焼成良好。口辺は全体に厚味を増し内彎気味に彎曲している。文様は矢羽根状の浅い沈線（条線）であり、地文は丁寧な横方向のケズリ調整である。

3　大波状口縁深鉢形土器、口辺部破片。C区出土。

黒褐色、焼成良好。深鉢形といっても大波状部分が外側に大きく外反する、ラッパ状深鉢である。波状部を支えるために口縁の内側では肥厚して稜をつくる。唯一の胴部文様である沈線（条線）施文は密であるがやや雑然としている。

4　小波状口縁（深）鉢形土器、口辺部破片。C区包含層出土。

灰褐色、焼成良好。胴部から口辺に至るまで屈曲のない器形で、波状部分もほとんど平縁の口縁に

小粘土帯を貼りつけることによってつくりだしている。文様については、区画を描く描線とそれに加えられたキザミ、区画内の沈線（条線）も同一の手法で鋭い沈線をもちいている。口辺部はミガキが施されているが、胴部の文様区画内は地文をケズリ調整としている。

5　波状口縁深鉢形土器、口辺部破片。

黒褐色、焼成良好。胴部以下の器壁は薄手であるが口縁部付近で厚手になっている。全体に文様と思われる横走する条線（沈線）が施され、地文には丁寧なケズリ調整がみられる。

6　深鉢形土器、胴部破片。C区出土。

黒褐色、焼成良好。この種の土器の構成は、どこかで器形の屈曲がある。この場合、胴部上半が内彎屈曲していわゆるソロバン玉状深鉢形土器となるのであろう。内面には丁寧なミガキがみられる。文様は矢羽根状沈線（条線）が発達した典型的なもので上位から下位に順に施文されている。地文には丁寧なケズリがみられる。

7　胴部破片、器形は不明。

黒色、焼成良好。器壁はやや厚手であるが矢羽根状沈線（条線）の部分だけなので器形は不明である。沈線は浅く、地文は丁寧なケズリがみられる。

8　鉢形土器、口辺部破片。C区包含層出土。

黒色、焼成良好。口縁部付近で断面は肥厚している。文様は口縁に平行に沈線（条線）が横走するだけである。これらは特別に横帯文を描いているわけではない。地文にミガキが施された痕跡はない。

9　平縁（深）鉢形土器、口辺部破片。A区bc-2グリッドⅡ層出土。

黒褐色、焼成良好。やや厚手の土器。文様は口縁に平行に横走する浅い沈線で、区画を示す描線がない。全体にミガキの痕跡がみられ、裏面でもミガキの痕跡が著しい。

10　平縁深鉢形土器、口辺部破片。

黄褐色、焼成良好。器壁はやや厚手である。口唇は平坦で外側にせりだしている。この口唇の平坦面と器壁内面のつくりだす角度はほぼ直角ではっきりとした稜をなす。特徴ある口縁付近の断面である。文様は横走する浅い沈線（条線）である。地文にはケズリ、ミガキの痕跡がなく無文調整である。文様の区画はちょうどこの破片の下端で区切れるらしい。なお、土器の内面にはミガキが施されている。

11　（緩波状口縁）深鉢形土器、口辺部から頸部にかけての破片。A区d-4グリッドⅠ層出土。

黒色、焼成良好。器壁は均一でやや薄手である。口唇成形の仕上げの際、粘土を貼りつけているため口縁部前面でややはみだすように厚くなっている。文様は口辺部については雑然とした右下がり斜方向の沈線（条線）、地文は粗い無文調整である。口辺部以下の頸部にはミガキが施されている。区画描線―沈線文（条線）―ミガキの順で施文されている。

12　波状口縁深鉢形土器、口辺部から頸部、胴部の破片。A区d-2グリッド包含層出土。

暗褐色を呈する。焼成は良好。

波状は4単位と思われる。丸味を帯びた波状部は大きく、胴の括れ部以上は広がりそのほとんどを占めている。内面ではこの括れ部に稜を持っている。全体にやや厚手のつくりである。このハリダシ手法は波状口縁土器の一部にみられ、後の曾谷式、安行式にみられる伝統的手法である。

胴部の括れを境として、上下に条線文を施文している。さらにこの境の部分には不ぞろいな列点を

めぐらし、それより上にはミガキを施して無文帯としている。無文帯以外の部分はケズリによって表面を整形したままである。手法の順序はケズリ—斜条線—横の描線—列点—無文部のミガキである。ミガキが粗いため斜条線ははっきり跡を残している。全体として大分粗い施文であるといえる。

13　深鉢形土器、胴部破片。A区c-4グリッドⅡ層出土。

灰褐色、焼成良好。やや膨らみをもった胴部で、文様は横走する沈線と縦の「連続S字状」文によって構成する。地文はケズリ調整である。頸部と胴部の境に押圧状の刺突文（キザミ）が施されている。

第III-13図　加曾利B2～B3式粗製土器

1　平縁外反深鉢形土器、口縁頸部から胴部上半にかけての破片。C区出土。

破片は口辺から胴部中央付近まであるので全体の様子はうかがえる。明赤褐色、焼成不良、表裏ともマメツしている。胎土には石英のやや大粒な粒子のほか微細な金雲母を含む。胎土は砂質。口唇は丸味をおびている。内面に1本の沈線がある。器壁は厚手、口辺から頸部まで厚く、胴部はやや薄手となる。特に接合の痕跡はみられない。頸部無文帯を除き、全面を左下がり斜線と右下がり斜線による格子文を施している。無文帯にミガキが施されているのはわかるが格子文の地文は不明。

2　黒褐色を呈する。平縁の深鉢形。胴部は比較的厚手につくられている。地文はLRの縄文、これに格子模様を描いている。頸部と胴部の境に列点を配したうえ頸部を磨り消している。格子文が頸部無文帯を境としてあらかじめ別々に描かれたものであることが施文順位によって判る。すなわち格子模様の描き方では、頸部上では左下がり沈線を先に描いてから右下がり沈線を描いてゆくのに対し、胴部以下の格子はこれと逆の順序で描いている。格子模様を描いた後に列点を施文、頸部の磨り消しを最後におこなった。この無文部の研磨はわずかである。破片の左側、無文部列点部にかかる欠落はいわゆる補修孔である。A区bc-4グリッドⅡ層出土。

3　平縁浅鉢型土器、A区d-4グリッドⅠ層出土。

破片は口辺から胴部まであるが底部近くが不明。

黒色、焼成良好。平縁器高の浅い土器、器壁はやや薄く、口唇は内側に削ったように平坦である。全体的に左下がり斜線と右下がり斜線の格子文である。器面の調整は内面が丁寧にミガキが施されているのに対し、外面はケズリ整形のままである。外面最下部に一部だけミガキがみられる。

4　褐色を呈し焼成良好。中形の平縁深鉢形、裏面口縁直下には沈線をもつ。地文の縄文は節のまとまったRL沈線を連弧にして向かい合うように上下に描いている。比較的薄手。**5**　赤褐色を呈する。胎土はやや砂質、外反する平縁深鉢形、やや厚手の土器である。裏面口縁直下の沈線ははっきりしている。地文の縄文は節の緩いLR、浅い沈線で格子模様を描いている。これを施文後、横の沈線で区画して磨り消し部分をつくっている。その沈線が破片下部に一部みえる。**6**　赤味を帯びた褐色を呈し焼成はやや不良、胎土は砂質、外反する平縁深鉢形、裏面口縁直下の沈線ははっきりしている。地文は非常に粗くて節の緩んだRL、厚手の土器、やや浅い沈線を格子に描いている。破片下部にはこれを区画する横の沈線がみえる。**7**　灰褐色、胴下部、沈線は太く浅い。縄文は節の粗いRL、左下がり沈線後、右下がり沈線。**8**　暗褐色、胴下部、沈線は太く浅い。縄文は節の粗いRL、沈線は右下がり後左下がり。

第III-14図　加曾利B2式（新）～B3式土器

1　外反口縁深鉢形土器、底部を欠く。A区d-3グリッドⅡ層出土。

淡褐色、焼成良好。

口縁から胴部にかけての外部の断面はやや肥厚している。胴部下半はやや薄手となっている。

沈線による描線だけで文様を表現している。口辺と胴部を2条の沈線で区画し、連弧文をその横帯文を口径にして描いており、連弧文と連弧文との間には2個1対の列点を配している。

2　褐色。焼成良好、大波状口縁深鉢形の口縁。地文は無文にミガキを施す。文様は描線と口縁のキザミ。A区d-4グリッドⅡ層出土。

3　平縁深鉢形土器、口辺部破片。C区表土層出土。

明褐色を呈する。焼成は良好。

最も一般的といえる外反する口辺をもつ深鉢形、頸部で括れ以下の胴部でやや膨みをもつ。口唇は内側に切断されたように内傾して平坦である。キザミをもつ。

頸部にミガキの施された無文帯がある。この他器面はケズリによって整形されたうえ斜方向条線が施されている。

4　平縁深鉢形の口縁から頸部の破片。明褐色、焼成良好。文様は口唇直下に丸いキザミ、口辺に右下がりの描線、その下に水平の描線1本。頸部は水平描線の下に指頭による列点。口縁部は肥厚して内側に段を持つ。地文は表裏ともにミガキ、ただし口辺の描線の地は無文。口唇部は指頭による押圧のために、かすかに波状となっている。**5**　波状深鉢形の口縁部。明褐色、焼成育好、石英の細粒を少量含む。口辺部は水平と左下りの描線、その上に列点を施す。口辺部以外の地文はミガキ。**6**　平縁深鉢形の口縁部。暗褐色、焼成良好。口唇にキザミ、その下に水平の描線、さらにその下から、おそらくは連弧文の端と思われる描線が左右に一部だけみられる。頸部との境には水平描線。口唇は肥厚して内側に稜を持つ。地文はミガキ。**7**　内彎して立ち上がる平縁の口縁部。褐色、焼成良好、黒雲母の細粒を含む。口辺は平行描線の間にキザミを施す。胴部上端に曲線を施し、内部にLRの縄文を充填。口唇部はやや不明確な稜をなす。表と口唇の地文はミガキ、裏は無文。

8　平縁鉢形土器、ほぼ完形土器。C区包含層出土。

淡褐色、焼成良好。

平縁、丸底と思われる。口唇は肥厚して、やや平坦、口唇直下に太い沈線があるため断面では口縁がはり出したようにみえる。内面では口縁部がはりだしている。器壁は厚い。

文様は胴部に配された沈線だけである。斜線は左下がりで末端は浅く流れている。内外面とも全面ミガキが施されており、さらに沈線にはナゾリが施されている。

9　内彎して立ち上がり、わずかに波状を呈する口縁部。褐色、焼成良好。口辺は平行描線の間に列点を施す。胴部に1本の平行描線が見える。口唇はかすかに肥厚して表裏両面との境にそれぞれ稜をなす。地文はミガキで、口唇部は時に入念である。**10**　平縁深鉢形の口縁。黒褐色、焼成極めて良好。口唇直下に2本の平行描線を引き、その間に左下がりの短い斜行描線を配する。さらにその下に右下がりの異なる、先端がなめらかでない工具による雑な斜行描線を配する。裏面の口唇直下に極めて細い2本の平行沈線を施す。口唇は平坦。地文は表の描線部分は無文、口唇・裏面はミガキ。**11**　ごくわずかに波状をなす口縁部。暗褐色、焼成良好。口唇直下にやや波行する水平描線を引き、その下半部に斜めのキザミを施す。口唇はかすかに稜を成し、やや下部でわずかに肥厚し、裏側にはりだ

して稜をなす。地は全て入念なミガキ。**12**　平縁深鉢形の口縁部。明褐色、焼成良好、黒雲母・石英の細粒を少量含む。口縁直下に竹製の角棒による押し引き沈線（方向は向って左から右）、その直下に1本の水平描線を施す。表の地文は縦の条線。施文順序は、縦条線—水平描線—押し引き沈線の順。口唇は平坦でやや内傾、入念なミガキが施される。

第III-15図　加曾利B3式土器

1　大波状口縁深鉢形土器、口縁から胴部上半の破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

黒褐色を呈する。ややもろい。

大波状口縁であるが突起はもたない。口唇はやや平坦で内側へのハリダシもない。器形は胴部で一たん大きく括れ、下半でまた膨らみをもつものである。断面を観察するとこの波状も粘土を幾度もつけ足して成形していることがわかる。

縦の斜条線で全面を整形している。また胴上半の波底では縦にジグザグの描線胴下半でも単位をずらしてジグザグ文を描いている。そのほか胴括れ部に押し引き手法による列点帯を加えているだけで装飾に乏しいといえる。

2　小波状口縁深鉢形土器の口辺から頸部にかけての破片で、波頂部を含んでいる。色調は暗褐色、焼成は良好である。口縁部が肥厚して内側に稜をもつ。文様は、格子状の条線で、口辺下部に描線を引きその下をミガいている。**3**　2と同様の形態である。色調、暗褐色、焼成良好、胎土は緻密である。文様は、口唇部にキザミを有し、その下には左下りの条線が施される。この条線は、破片の右下にみられるように、描線の下ではすり消されている。

4　小突起鉢形土器、口縁から胴部の破片。A区d-3グリッドⅡ層出土。

暗褐色を呈する、焼成は良好。

口唇が肥厚して丸味をおびている。平縁の口縁に小突起、おそらく5単位を貼り付けることによって特徴をもたらしている。口辺部は頸部を兼ねていて胴部との境で内側に稜をもつ。

突起を口縁部の文様とみれば、胴部の膨んだ部分のLRの縄文帯が文様となる。胴部下部の無文帯の下には縄文帯がある。沈線—列点—キザミ—縄文の順で施文されている。

5　小波状口縁深鉢形土器、ほぼ完形で底部を欠く。C区包含層出土。

灰褐色、焼成はやや悪い。

胴部は緩く内彎、括れ部から口縁にかけては緩く外反する。口唇は平坦、やや肥厚する。口唇上の波状突起は貼り付けによるもの。

口唇にキザミを施し、その直下に水平描線を1本引く、その下は無文帯。頸部には、水平描線を引いた後、その下半部にキザミを施す。胴部には右下がりの斜行条線を施す。地文はRLの縄文であるが、焼成が良くないため残りが良くない。口唇と裏にはミガキが施される。

6　緩波状口縁鉢形土器の口辺から頸部にかけての破片。色調は暗褐色、焼成良好、胎土は緻密である。口辺は均一な厚さを保って胴部に至る。内面で段をなしている。文様は口辺においてはミガキの施された無文で、口辺と胴部の境にキザミ、胴部にLR縄文を施文する。

7　外反する平縁深鉢形土器の口縁。色調、黒褐色、焼成良好、胎土は粗く2～3 mmの小石粒を含んでいる。器壁は厚いが、全体的に均一的な断面である。破片下端に頸部と胴部との境があり、ここで屈曲しているのがわかる。文様は口辺にLRの縄文を施文、頸部と胴部の境にキザミを施してい

る。口縁直下の描線は縄文施文後のもの。A区c-3グリッド表土層出土。

8 外反する小波状口縁深鉢形土器の口縁。色調、黒褐色、焼成良好、波状は小突起によってつくられている。器壁は均一であるが厚手で破片下端の頸部と胴部の境で屈曲している。文様は口辺にRL縄文を施文、口縁と頸部胴部の境にはキザミを施している。**9** 外反する緩波状口縁深鉢形土器の口縁部。色調は淡褐色、焼成はやや悪い。口縁は内側でやや肥厚して段をなす。文様は口縁にキザミ、口辺にRL縄文を施文、頸部は無文帯としている。C区出土。

第III-16図 加曾利B3式土器

1 外反口縁台付皿形土器、口辺～頸部破片。

暗灰褐色を呈する。焼成は幾分悪い。胎土に金雲母の微細粒のほか石英のやや大きい粒子を混える。平縁で、口縁に突起物はみられない。口唇の断面は丸味をおびている。口辺部から頸部までは緩く外反しながら連続するが、胴部との境で段をもつ。胴部はややふくらみをもった後、大きくすぼんで台部との接合部に至る。台部は丸味をおびた碗をふせたような形態をしているものと思われる。この台部の形態は伝統的に曾谷式までつながるものである。条線が施文の全体を占める。口辺と頸部は一体であって沈線によって上下2分割され、上半分を条線、下半をミガキによる無文帯としている。胴部以下も同様の手法による条線が施されるのであろう。従ってこの種の土器の文様構成は頸部無文帯が中心である。A区d-4グリッドII層出土。

2 口辺部破片。灰褐色、焼成良好。口唇にキザミを施文している。条線の地はケズリ調整。**3** 頸部破片、口辺の一部、胴部の一部を含む。暗褐色、焼成はやや悪、胎土にやや大きい石英粒を若干混える。無文部に丁寧なミガキが施されるほか、口辺と胴部の地はケズリ調整、条線の破片で観察できる部分では口辺は右下がり、胴部は左下がりとなっている。頸部と胴部の境にはキザミが施され印象を強めている。内面でははっきりと段をなしている。**4** 口辺部破片。赤味をおびた暗褐色、焼成良好。口唇にキザミを施している。条線はやや太い沈線様のもの。条線の地は無文調整。**5** 口辺部破片、頸部がわずかに残る。赤味をおびた暗褐色、焼成良好。4とほとんど同様、同一個体であろう。**6** 頸部から胴部にかけての破片。暗褐色、焼成良好。頸部と胴部の境で大きく段をなし、そこにキザミを施している。胴部の条線は浅いが密であり下方に向って弧を描くように施されている。**7** 頸部から胴部にかけての破片。黒色、焼成良好。頸部と胴部の境は外面ではやや小さく、内面ではっきりとした段となっている。境にはキザミが施され、胴部では鋭い沈線が矢羽根状に施文されている。地はケズリ調整、頸部のミガキは胴部の施文後におこなわれている。**8** 頸部から胴部にかけての破片。暗褐色、焼成良好。頸部と胴部の境は外面で大きく段をなし、キザミを施している。胴部はまばらな条線が下方に弧状に施されている。地は無文調整。**9** 胴部の破片。暗褐色、焼成良好。この破片では頸部と胴部の接合部分で割れている。すなわち頸部と胴部の境の段部が接合を原因としていることを示す良い資料である。段部外面にはキザミが施され、それを頸部のミガキが一部磨消している。条線はまばらで浅く、地は無文調整である。**10** 頸部から胴部にかけての破片。暗褐色、焼成良好。頸部断面の厚い土器である。はりだすような胴部境の段部は鋭角的な稜をなし、そこに押圧的なキザミが施される。胴部の条線はやや密で、下方に弧を描くように施文されている。**11** 口辺部から頸部、胴部にかけての破片。灰褐色、焼成やや悪。口辺、頸部はやや直立気味で器壁も厚い。頸部から胴部にかけての屈曲は内外面とも緩い。口辺の条線は細く密で縦に施文されている。キザミも細く縦長に

施され密である。胴部条線は下方に弧状に施文されている。キザミと条線間は磨り消し状の浅く太い沈線が施される。施文順序は条線—沈線—キザミ・沈線ミガキである。全体として雑な印象の土器であり、あるいは異なる器種を形成するかも知れない。

第 III-17 図　加曾利 B3 式土器

1　波状口縁外反深鉢形土器、口辺部～頸部破片。A 区 b-5 グリッドⅠ層出土。

褐色、焼成良好。おそらく四単位の波状口縁の土器、口辺から頸部までが外反する上半部で頸部と胴部の境で括れる。胴部はややふくらんだ砲弾型で、波状の部分を除けば同時期の大型深鉢形の基本的形態であると思われる。現存する口辺から頸部にかけての部分は連続した成形による。従って口辺と頸部に製作上の差異はない。口縁は肥厚しており、口縁内側で明瞭な稜を形成する。口唇はやや先細りでまるめられている。口縁にはキザミが施される。同様なキザミは頸部と胴部の境にも施される。口辺部は波状部分を含めて LR の縄文帯で占められる。頸部はミガキの施された無文帯である。これら手法の施文順序は〈描線—縄文・キザミ—ミガキ〉である。

2　口辺部破片、頸部の一部が残る。黒褐色、焼成良好、大波状口縁外反深鉢形土器の一部である。口縁はわずかに肥厚して内側に緩い稜をもつ。文様は口縁のキザミと頸部の無文部以外は RL の縄文帯で、縄文施文は波状の形態にそっている。A 区 c-4 グリッドⅠ層出土。

3　口縁部破片、赤褐色、焼成良好。大波状口縁鉢形土器の波頂部口辺部、破片の下端が口辺と頸部の境。口縁は肥厚して内側に稜をもつ。文様は口縁にキザミが施されるほか口辺全体に RL 縄文が施文。断面を観察すると口縁のキザミが施される部分以上が貼り付けた部分で、肥厚している。

4　口辺から頸部にかけての破片。黒褐色、焼成良好。緩い大波状口縁深鉢形土器であるが波頂部は欠損している。口縁は肥厚して内側に稜をもつ。口唇はやや平坦。口縁にキザミをもち口辺に LR 縄文が施文される。頸部はケズリ調整後ミガキを施しているが所々地があらわれている。

5　口辺部から頸部にかけての破片。暗褐色、焼成良好。大波状口縁深鉢形土器、波頂部の偏平な突起の部分がある。口縁は内側に著しく肥厚しており段をなしている。突起は内側から丁寧に貼り付けられており接合部がみえない。文様は口縁にキザミ、口辺部全体を LR 縄文施文、頸部はミガキ調整である。A 区 c-4 グリッドⅠ層出土。

6　口辺部破片。黒褐色、焼成やや悪。胎土がやや緻密で混入物が微細であり他と異なる。大波状口縁深鉢形土器で波頂部の偏平突起の部分である。口縁は内側に肥厚して鋭い稜をつくる。文様は口縁に 2 段のキザミ、口辺部は RL 縄文を施文する。断面を観察すると口縁の肥厚する部分は突起に連続しており、口縁成形の際に突起がつくられたことがわかる。また 2 段のキザミのうち上段のキザミもその際につけられたものである。A 区 bc-2 グリッドⅡ層出土。

7　口辺から頸部へかけての破片、黒褐色、焼成良好。大波状口縁深鉢形土器であるが波頂部は欠損している。破片下端に頸部と胴部の境に施されたキザミが一部みえる。口縁はその内側部分だけわずかに肥大して段をつくる。器壁は全体に薄手である。下端の頸部と胴部の境で大きく屈曲している。文様は口縁にキザミ、口辺は全体を RL 縄文施文、頸部はミガキ調整である。**8**　口辺から頸部にかけての破片。黒褐色、焼成良好、黒雲母、石英の微細粒子を含む。大波状口縁深鉢形土器であるが、波頂部は欠損している。口縁は内側に著しく肥厚、段をつくっている。文様は口縁にキザミ、口辺全体に LR 縄文を施文、頸部はミガキ調整である。断面を観察するとキザミ下の描線から肥厚する

部分が口縁部成形の際貼り付けられた部分である。**9**　口辺部破片、頸部の一部が残る。黒色、焼成良好、黒雲母の微細粒子を含む。大波状口縁深鉢形土器で波頂部は欠損している。口縁は内側に肥厚する。口唇は丸味をおびている。器壁は薄手。文様は口縁にキザミ、口辺にLR縄文を施文、破片下端に頸部との境である描線がみえる。**10**　口辺部破片、暗褐色、焼成良好、石英の微細粒子を含む。大波状口縁深鉢形土器で波頂部は欠損している。口縁は肥厚して内側に稜をつくる。器壁は薄手、文様は口縁にキザミ、口辺にRL縄文を施文、破片下端に口辺と頸部の境である描線がみえる。**11**　口辺から頸部へかけての破片、黒褐色、焼成良好、黒雲母の微細粒子を多く含む。おそらく小波状口縁深鉢形土器であろう。口縁はほとんど肥厚せず器壁全体は薄手である。文様は口縁にキザミ、口辺にRL縄文を施文する。頸部の無文部はミガキ調整であるが地のケズリがあらわれている。また口縁直下の太い描線はキザミ、縄文施文以前であるが、口辺と頸部の境になっている描線は縄文の施文後である。**12**　口辺から頸部にかけての破片、褐色、焼成良好、石英の微細粒子を多く含む。緩い波状口縁深鉢形土器、破片の右端が波底部で小突起がつく。口縁は内側でやや肥厚する。口唇は丸味をおびている。器壁は薄手。文様は口縁にキザミ、口辺にRL縄文施文の他、破片下端に頸部と胴部の境のキザミがみえる。**13**　口辺から頸部にかけての破片。暗褐色、焼成やや悪、石英の微細粒子を含む。平縁深鉢形土器。口縁はわずかに肥厚する。器壁は薄い。口縁にキザミはみられず口辺にLR縄文を施文、口縁の描線は縄文施文後のものである。**14**　口縁を含む胴部破片、黄褐色、黒斑がある。焼成良好、石英の微細粒子を含む。平縁深鉢形土器、おそらく瓢形土器であろう。口縁のみ内側に大きく肥厚して稜をつくる。口唇も鋭く稜をつくる。器壁は薄手、文様は口縁直下に無文の部分を残して1段下にキザミを施し、その他はLR縄文を施文。断面を観察するとキザミの上の無文部から口縁の肥厚する部分が口縁成形の際貼り付けられた部分である。**15**　口辺部破片。褐色、焼成良好、黒雲母の微細粒子を含む。平縁深鉢形土器、おそらくやや口縁が内彎する瓢形土器であろう。口縁内側はやや肥厚して稜をつくる。器壁は薄い、文様は口縁にキザミを施し、その他はLR縄文を施文。**17**　口辺部破片。暗褐色、焼成やや悪、石英粒を含む。平縁深鉢形土器、おそらくやや口辺が内彎する瓢形土器であろう。丸味をおびた口縁は口辺から序々に肥厚している。口辺はキザミを施した口縁から破片下端の描線に至るまである。全体にLR縄文を施文。

第III-18図　加曾利B1～B3式土器

1　波状口縁外反型深鉢形土器、完形土器。A区c-5グリッドI層出土。

胴部上半以上黒褐色、胴部下半から底部にかけて淡褐色、焼成良好。おそらく3単位で波頂部に突起をもつ波状口縁の深鉢形土器である。器形は突起の貼り付けられた口辺部、外反する頸部、胴部という構成である。内面では口辺部と頸部の境に段をもち、頸部と胴部の境も屈曲して稜をなす。成形ではこの頸部と胴部の境で接合されている。胴部はやや膨みをもって底部付近でせばまるが底面では裾広がりとなる。口唇にはキザミ、口辺には波頂部にややひねりのある円形突起、波底部に縦長で横のキザミをもった突起がそれぞれ貼り付けられている。口辺部と頸部の境は充塡縄文の波状横帯文、頸部波頂部の空間に三角文、そして胴部には間に無文帯をはさんだ2本の充塡縄文横帯文がある。これら横帯文に対し、波頂、波底部を単位として縦の短線が区切るように描かれている。充塡縄文部以外はミガキが施される。特に胴下半の無文部は縦のミガキである。内面でも頸部、胴部の境の稜以下は縦のミガキである。外底面には編代痕が残る。

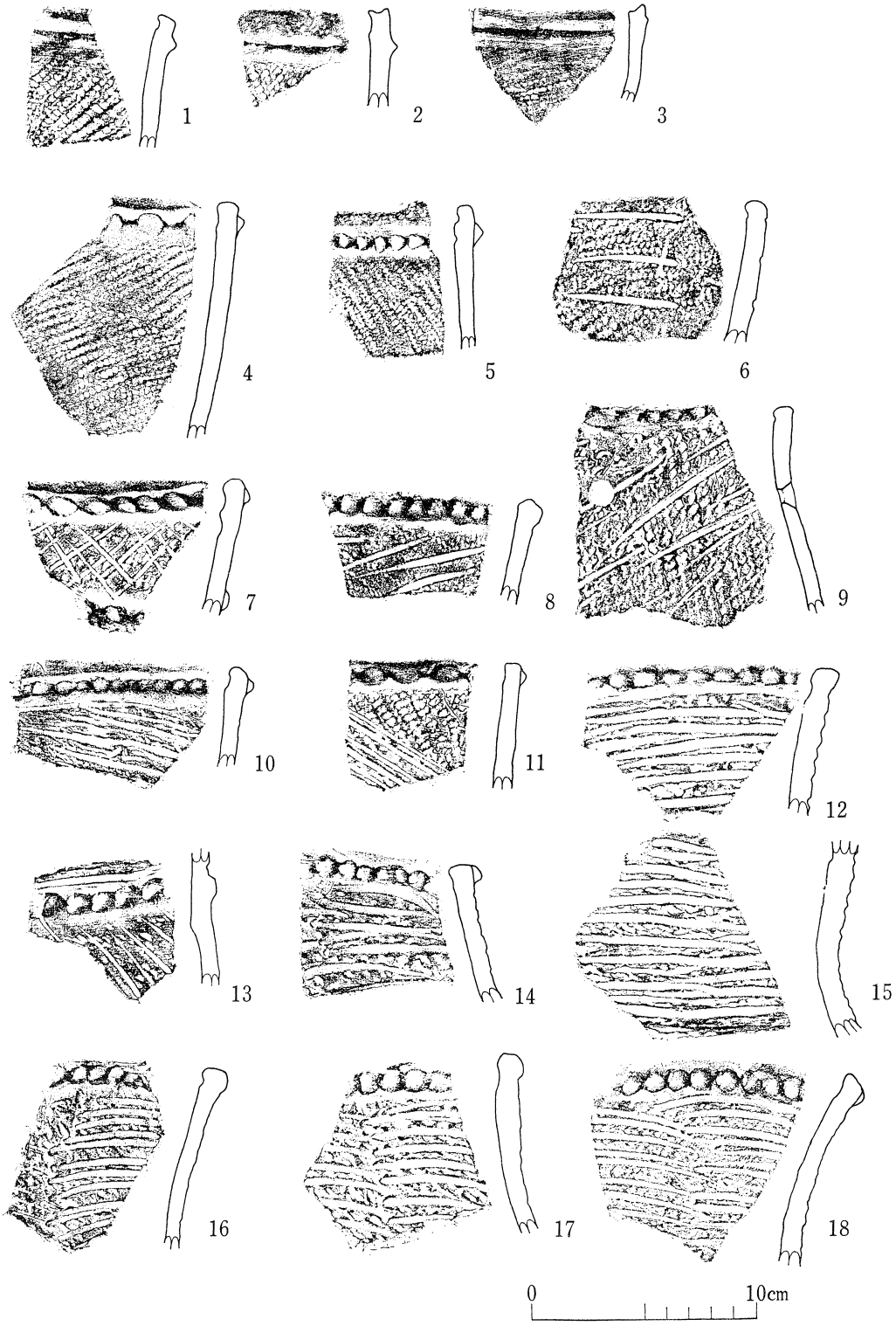
2　内彎口縁型鉢形土器、完形土器。A区d-4グリッドⅡ層出土。

褐色、焼成良好。断面の観察によれば接合痕の認められるのは底部だけである。底面にあたる粘土板に輪積して一体に成形したものであろう。底部付近は上体を支えるために2重の粘土帯で成形している。器形は単純でやや内彎する口辺部と底部にむかって径のせばまる胴部となる。したがって口辺と胴部の境が最大径にあたる。充塡手法による横帯文のみで文様は構成される。口辺と胴部の境の屈曲部に1本、胴部中ほどに2本2段になった横帯文が描かれている。これを四単位に分割する縦の短線がみられる。それぞれ横帯文の描線に対し、「C字・逆C字」文として、単独あるいは対になって施されている。その他無文部は全面横方向のミガキである。外底面も無文でミガキが施されている。

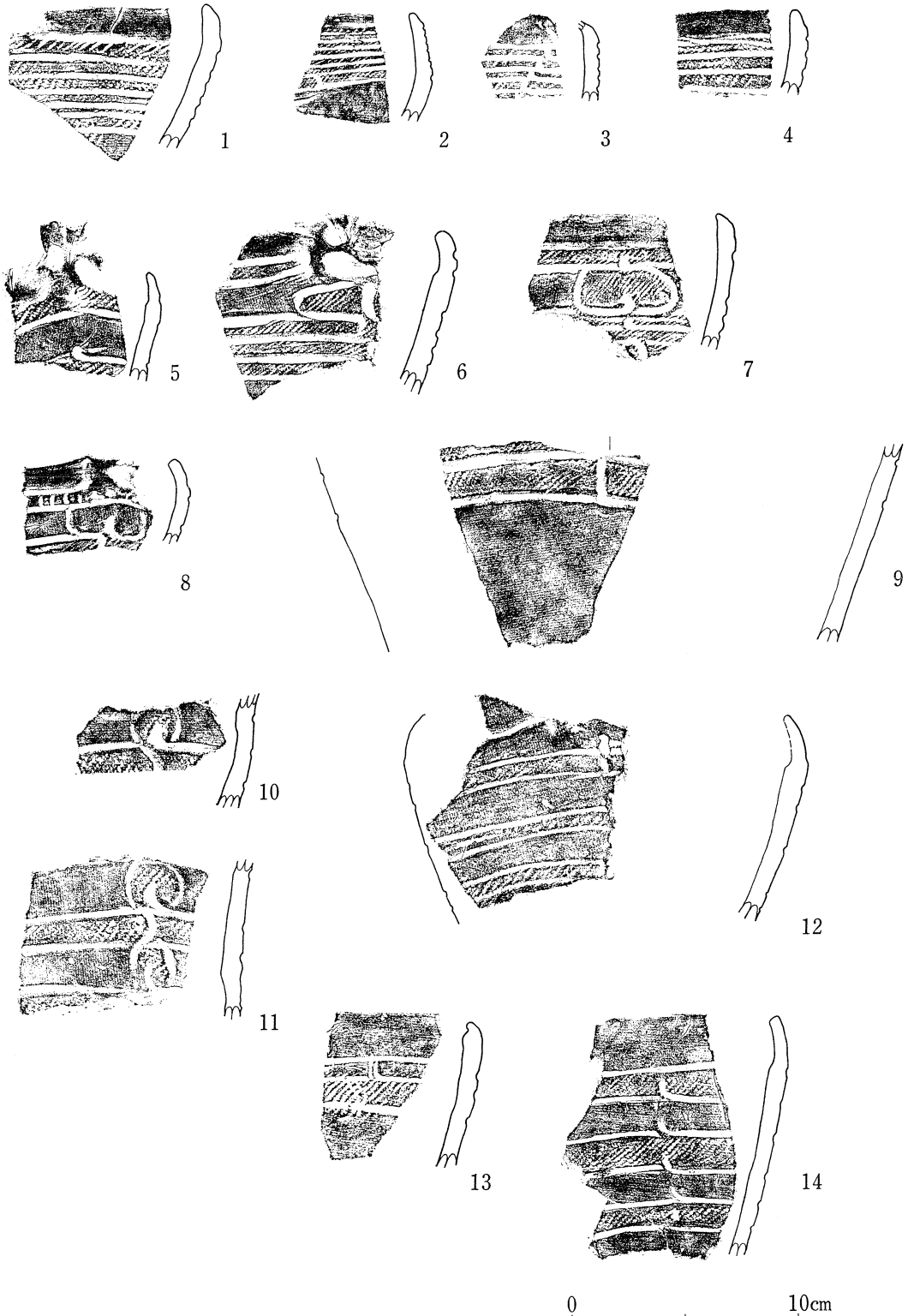
3　外反口縁台付皿形土器、口辺部、頸部から胴部にかけての破片。A区d-5グリッドⅠ層出土。

茶褐色、焼成はやや悪いがこれは胎土が砂質であることが原因である。口唇は丸味をおびやや肥厚するが器壁は全体に薄手である。口縁の肥厚は成形のために粘土帯を口唇から口辺裏面に貼り付ける手法のためである。そのため口縁表側では貼り付けられた境界が痕跡として残っている。同様の手法は頸部と胴部の接合にもみられる。胴部の内面に頸部を貼り付ける手法をとっている。頸部はミガキの施された無文帯である。口辺には縦の条線（沈線）が施される。地文は横方向のケズリである。胴部は連弧状の条線が施されている。地文は無文の調整である。全体に文様は乏しく、条線による施文効果のみの簡素な土器である印象が強い。

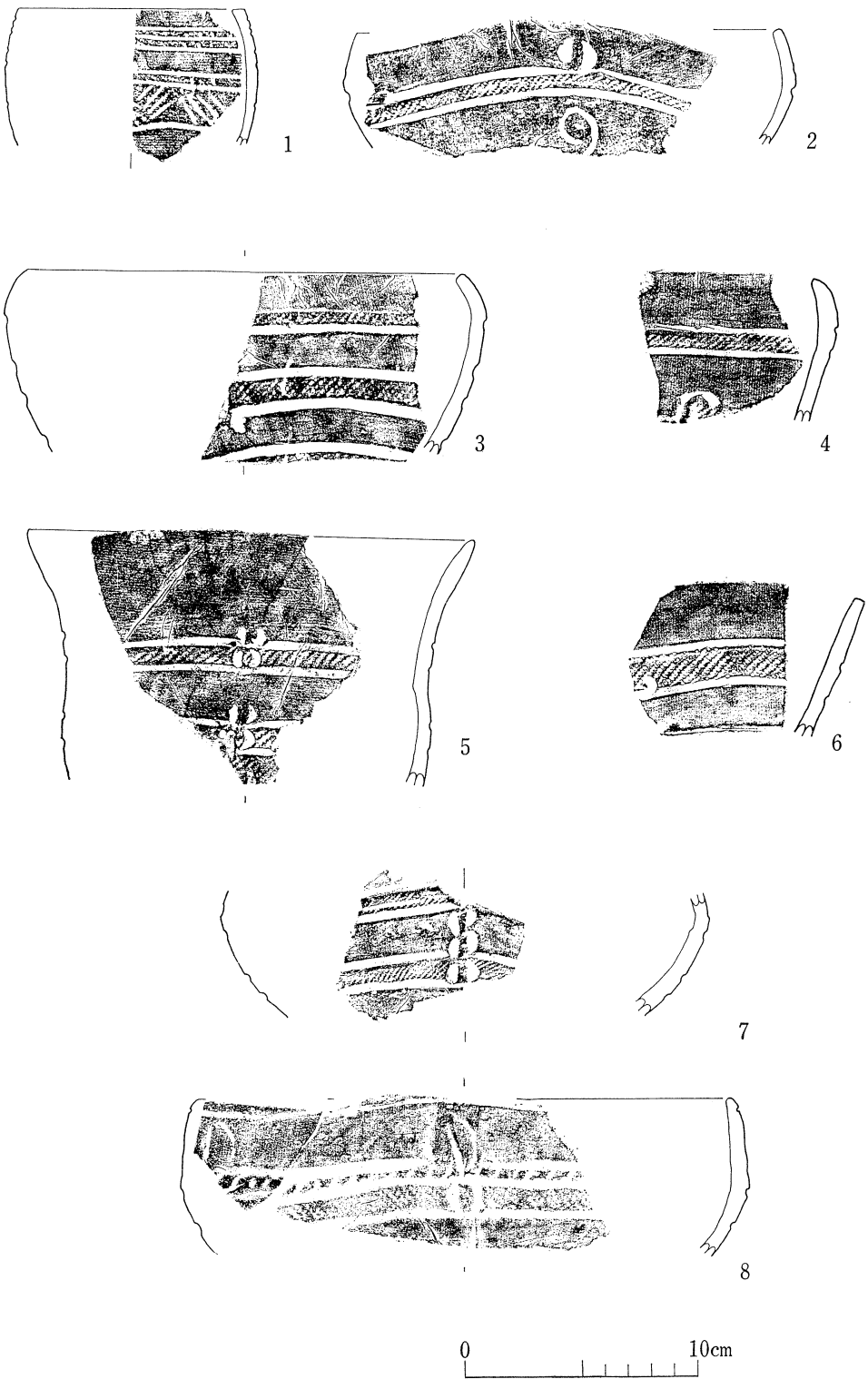
（宮内良隆）



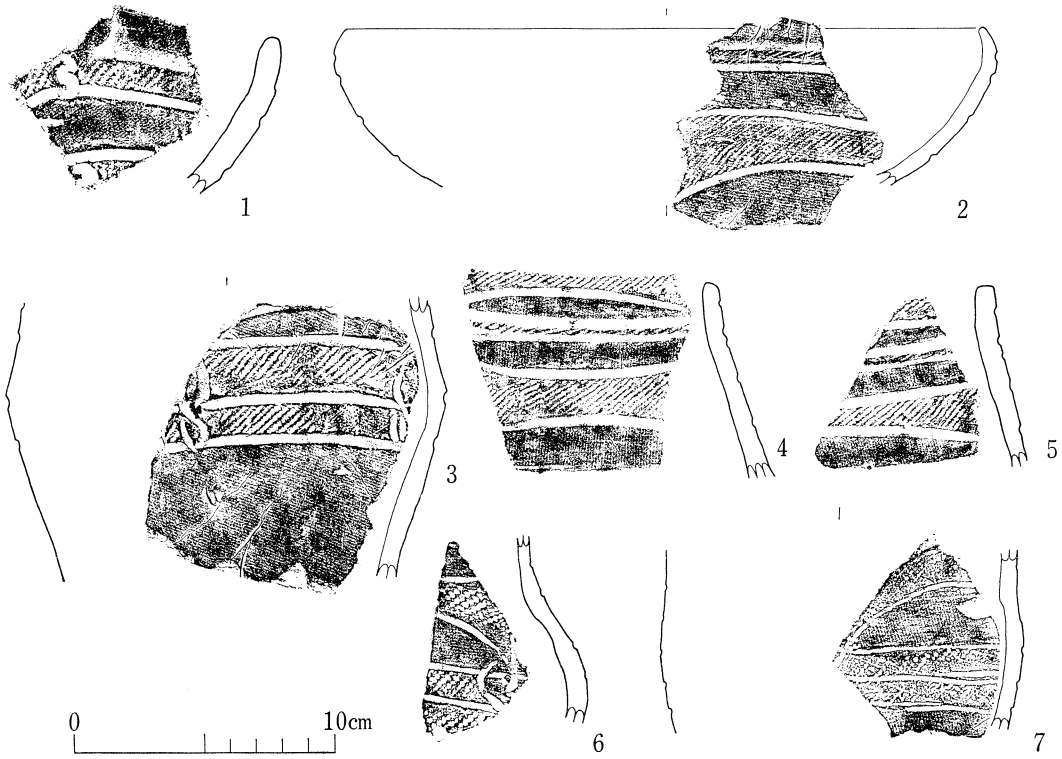
第 III–1 図　加曾利B式粗製土器



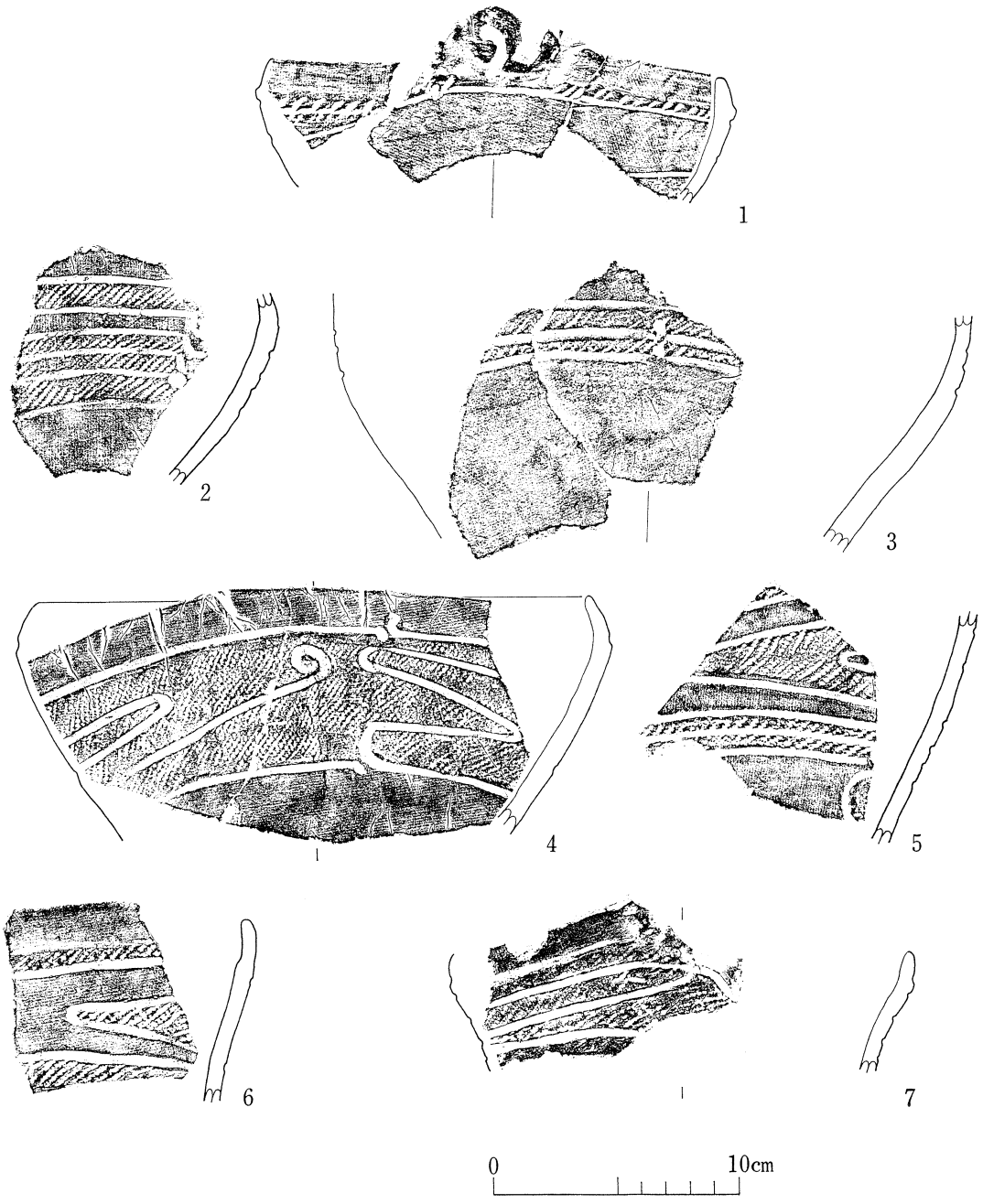
第Ⅲ-2図　加曾利Ｂ１式土器



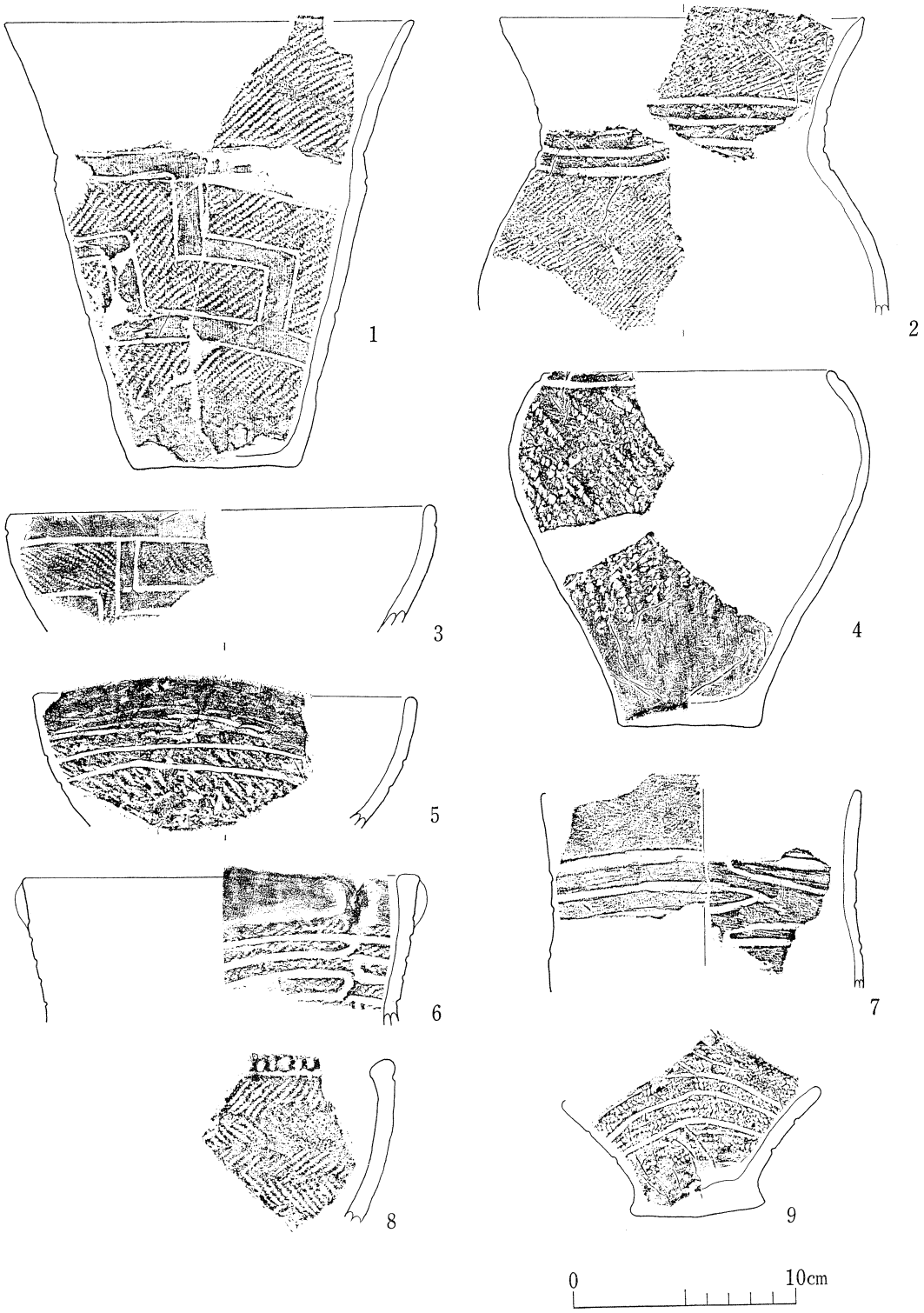
第III-3図　加曾利Ｂ１式土器



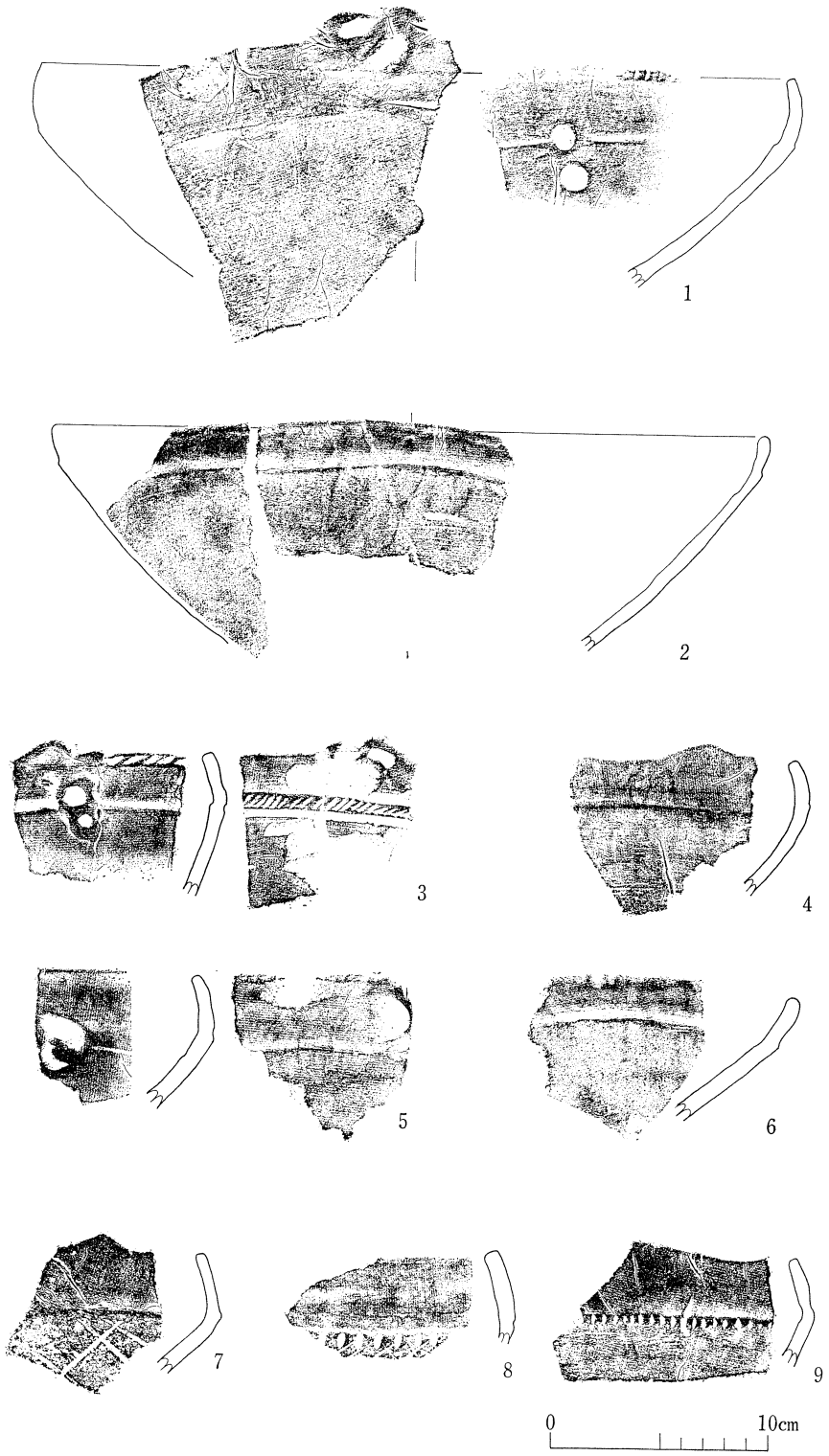
第 III-4 図　加曾利Ｂ１～Ｂ３式土器



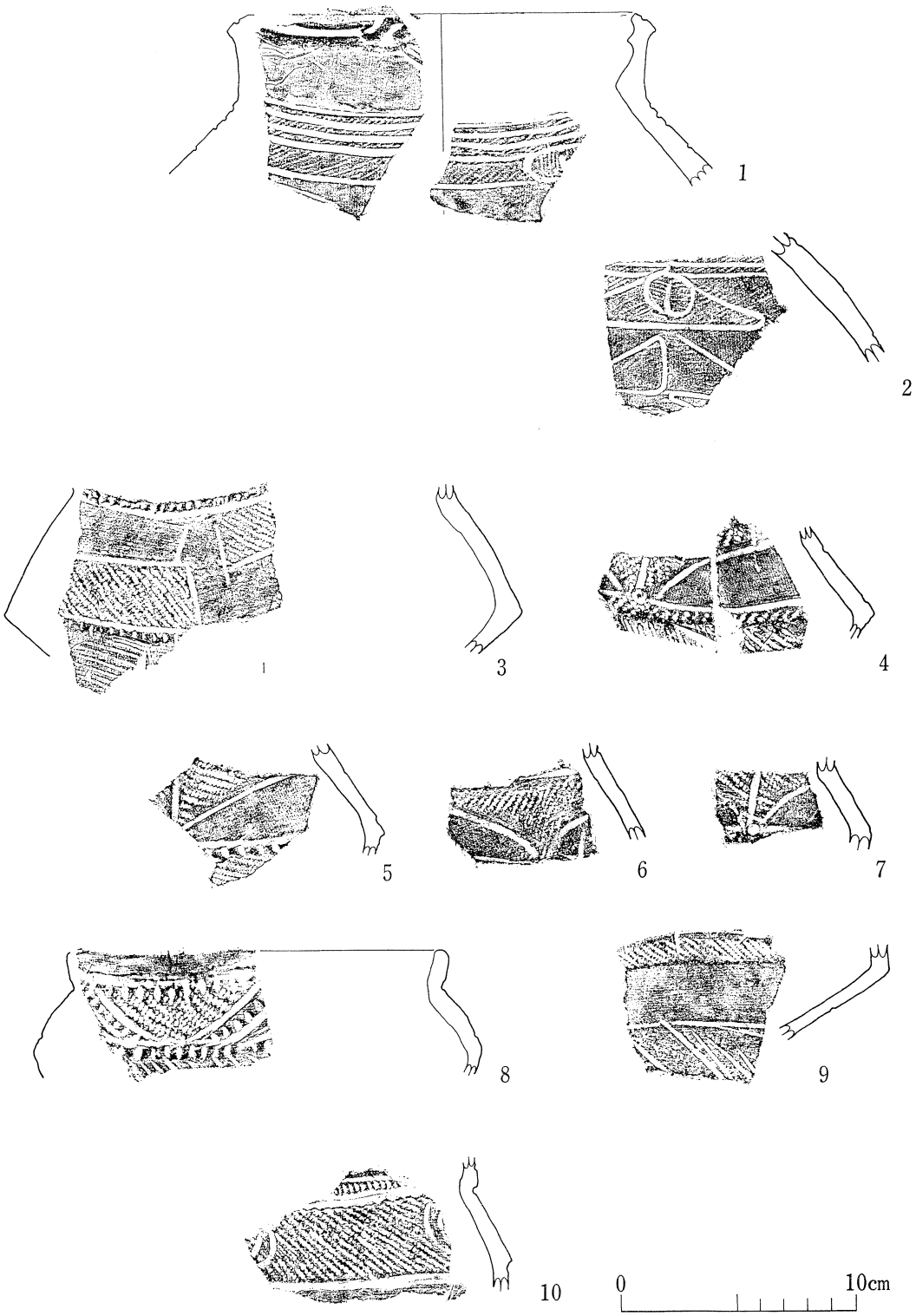
第 III-5 図　加曾利Ｂ１式（新）土器



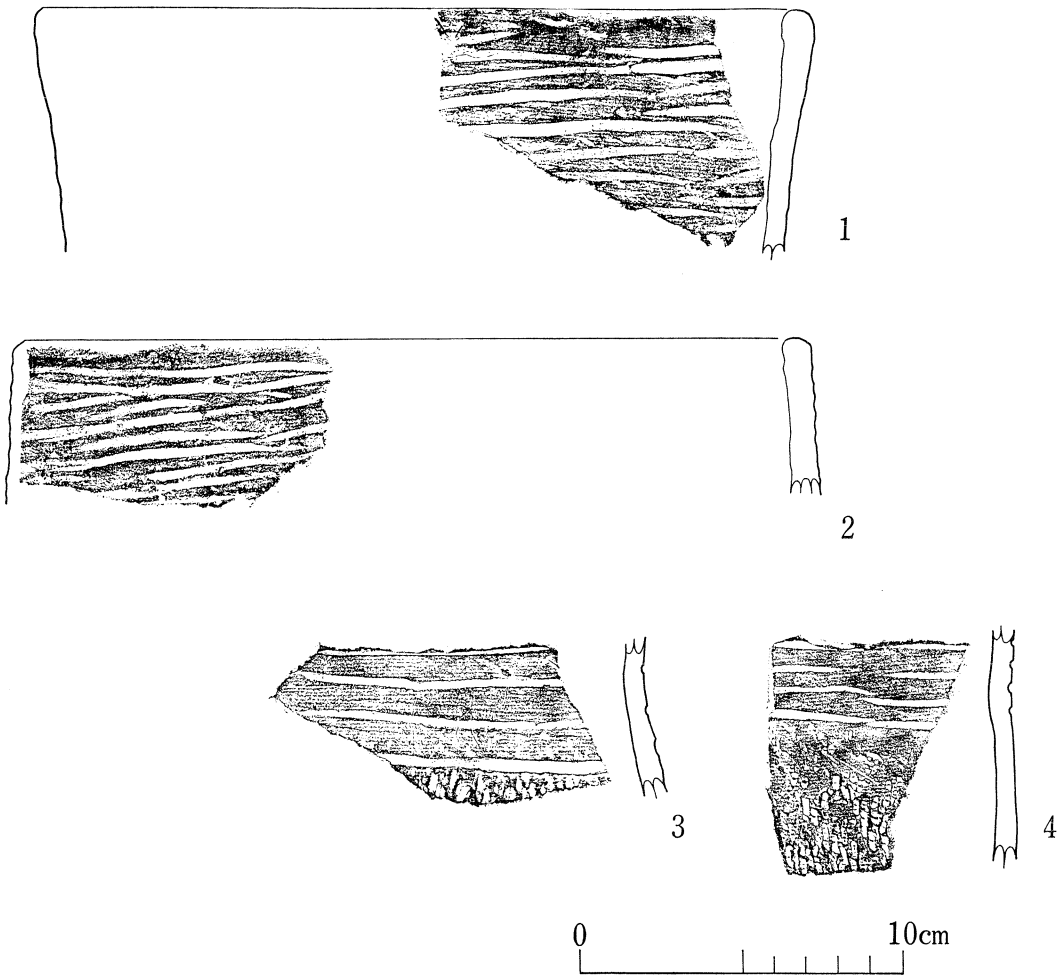
第Ⅲ-6図　加曾利Ｂ式外塚遺跡の地域的特性



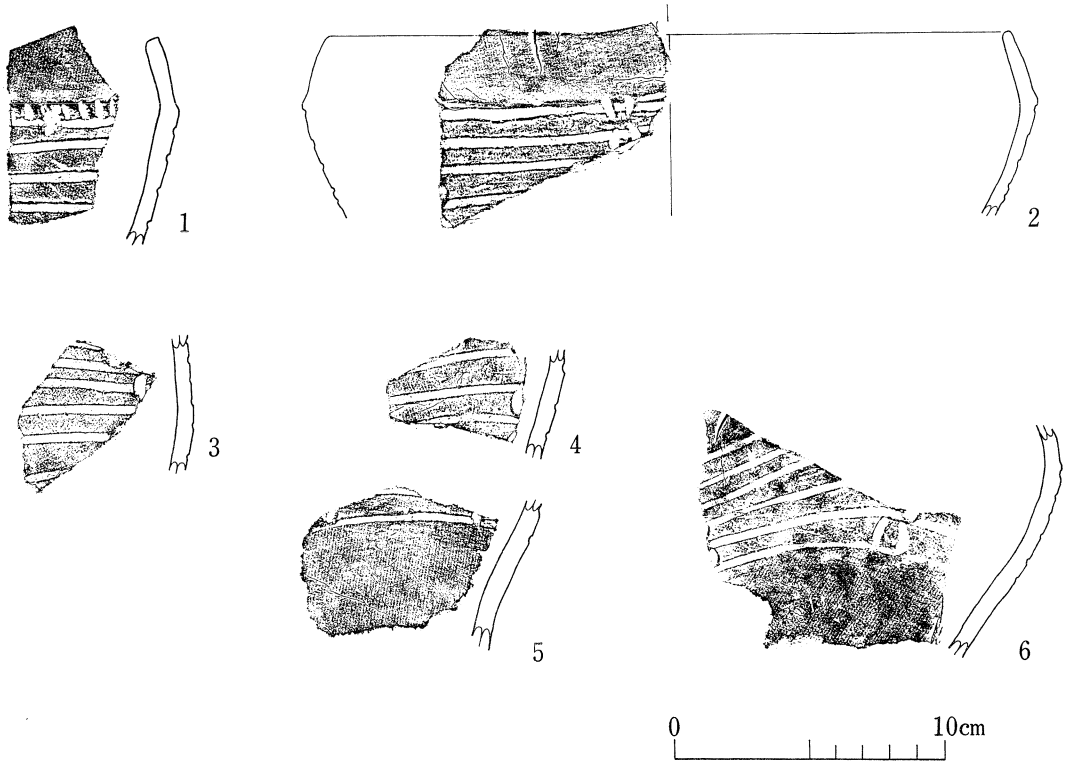
第 III–7 図　加曾利Ｂ１～Ｂ２式土器



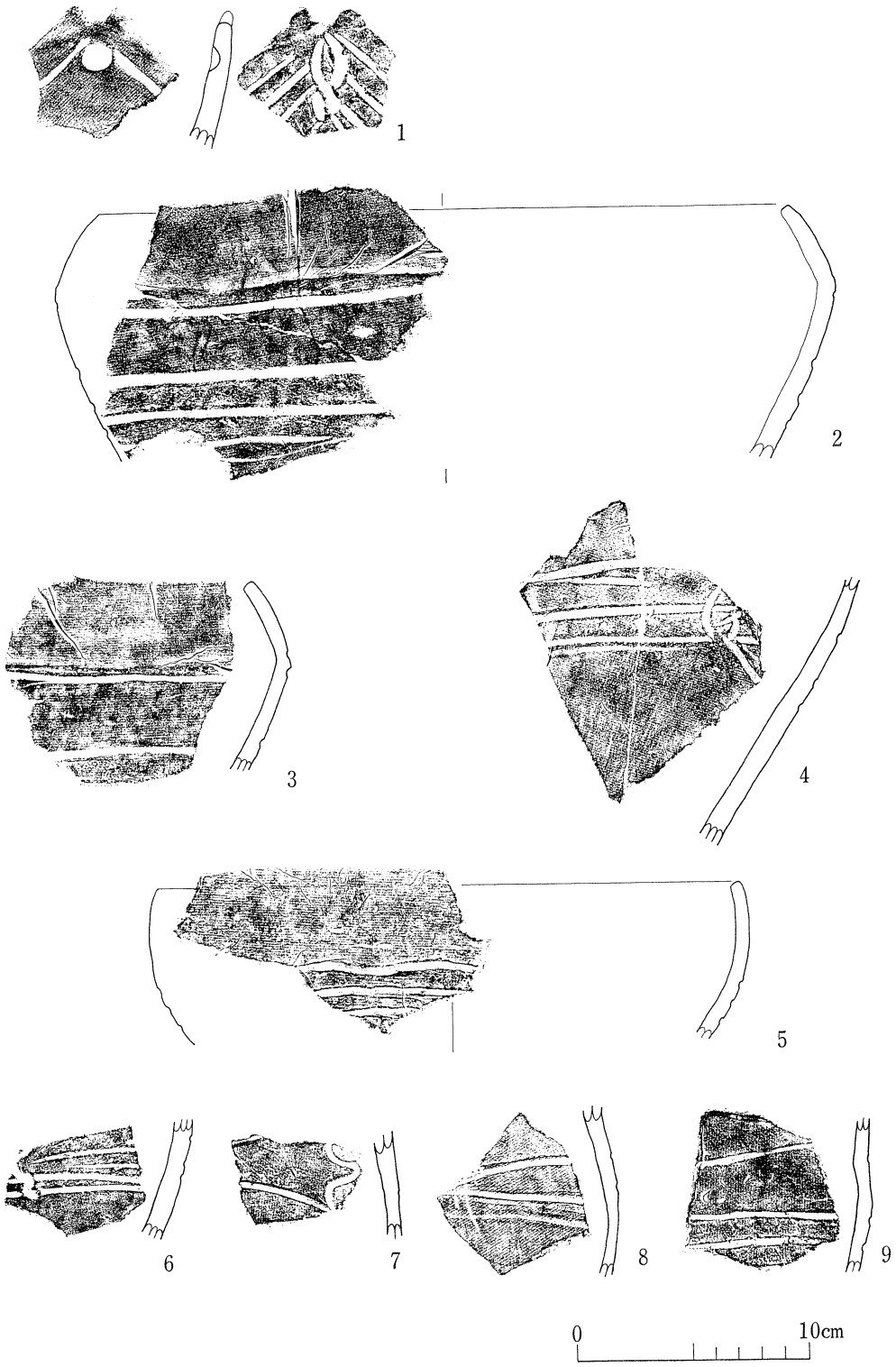
第Ⅲ-8図　加曾利Ｂ1～Ｂ3式土器



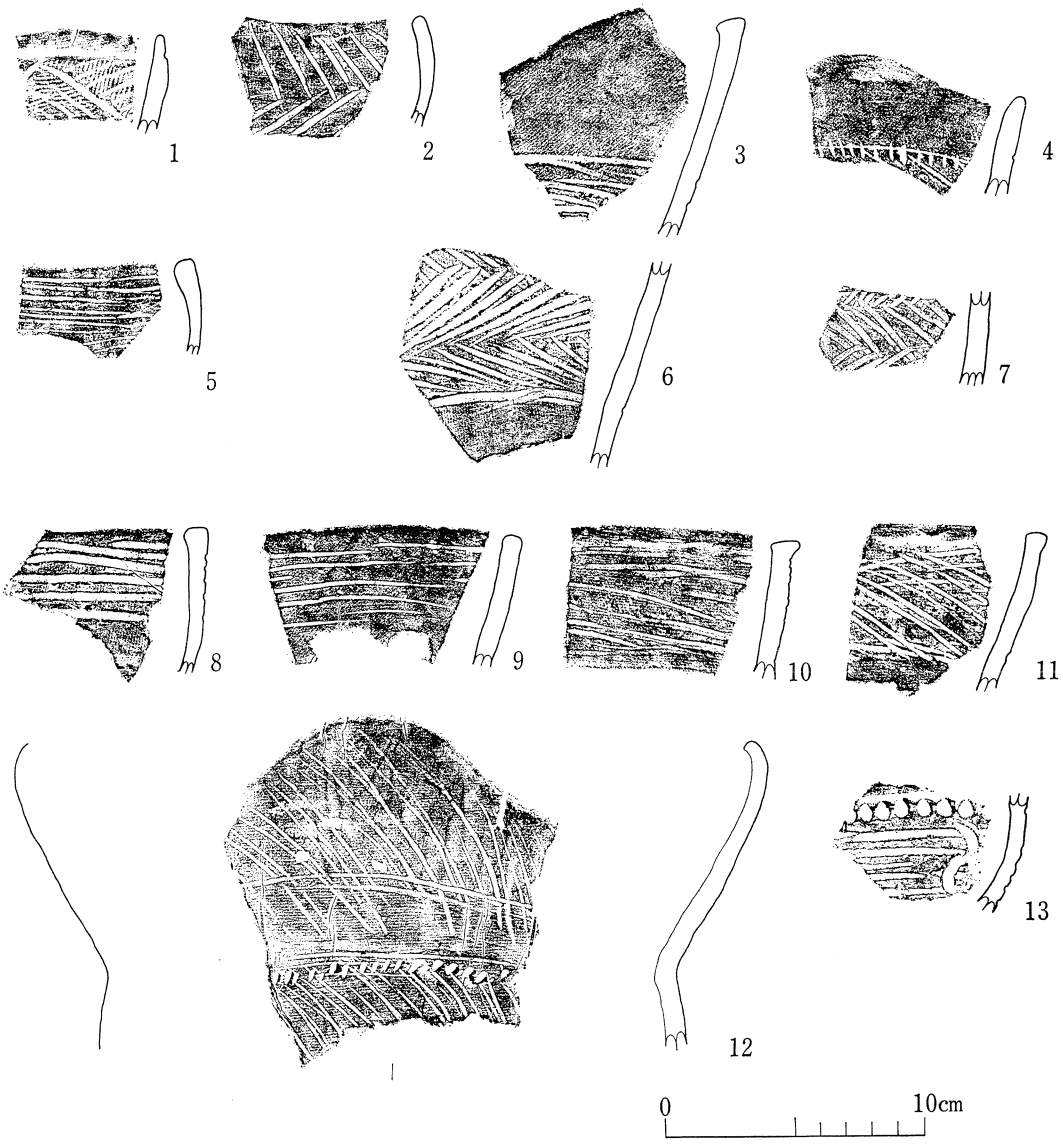
第 III-9 図　加曾利Ｂ２式（古）土器



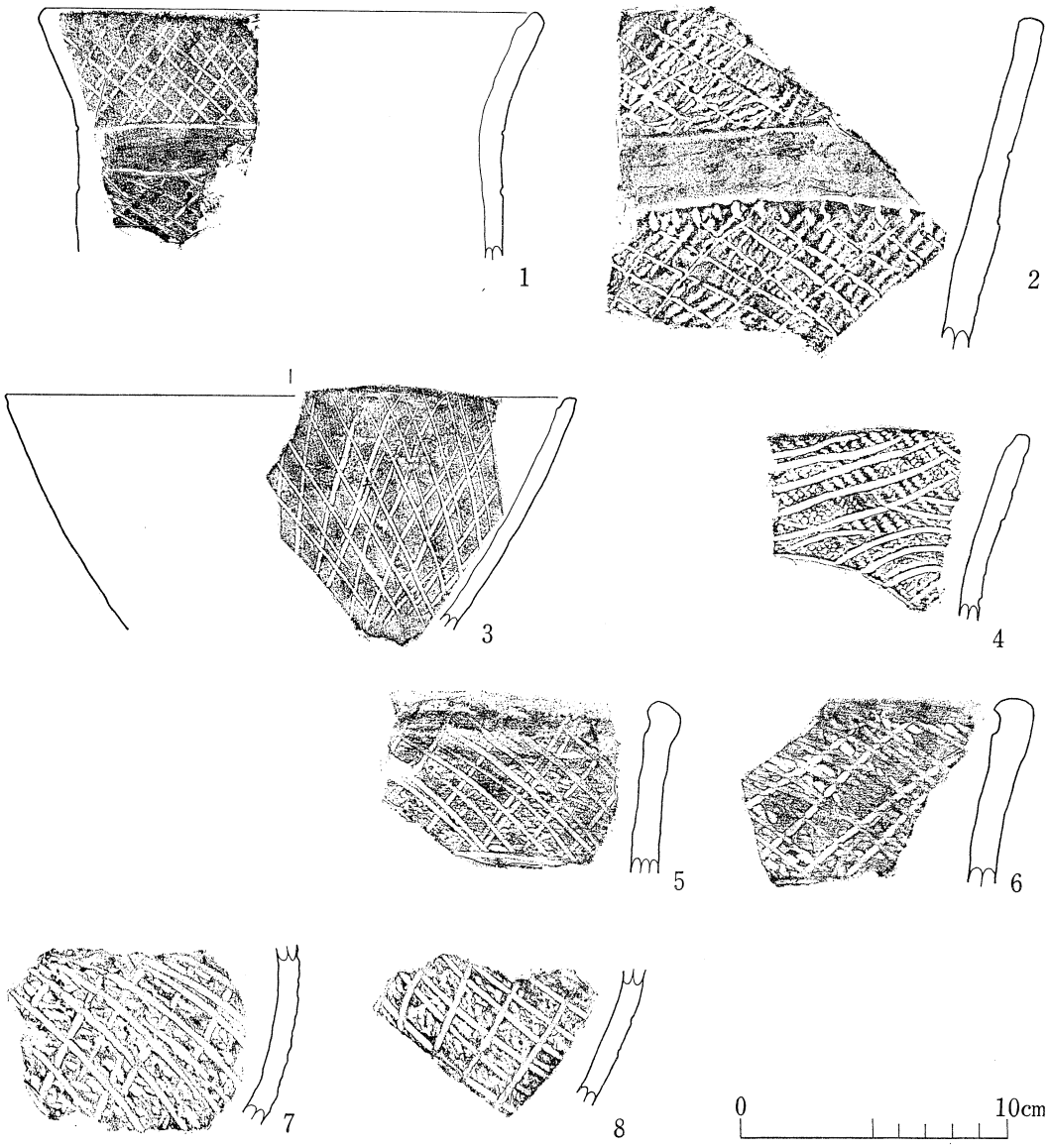
第 III–10 図　加曾利Ｂ２式（古）土器



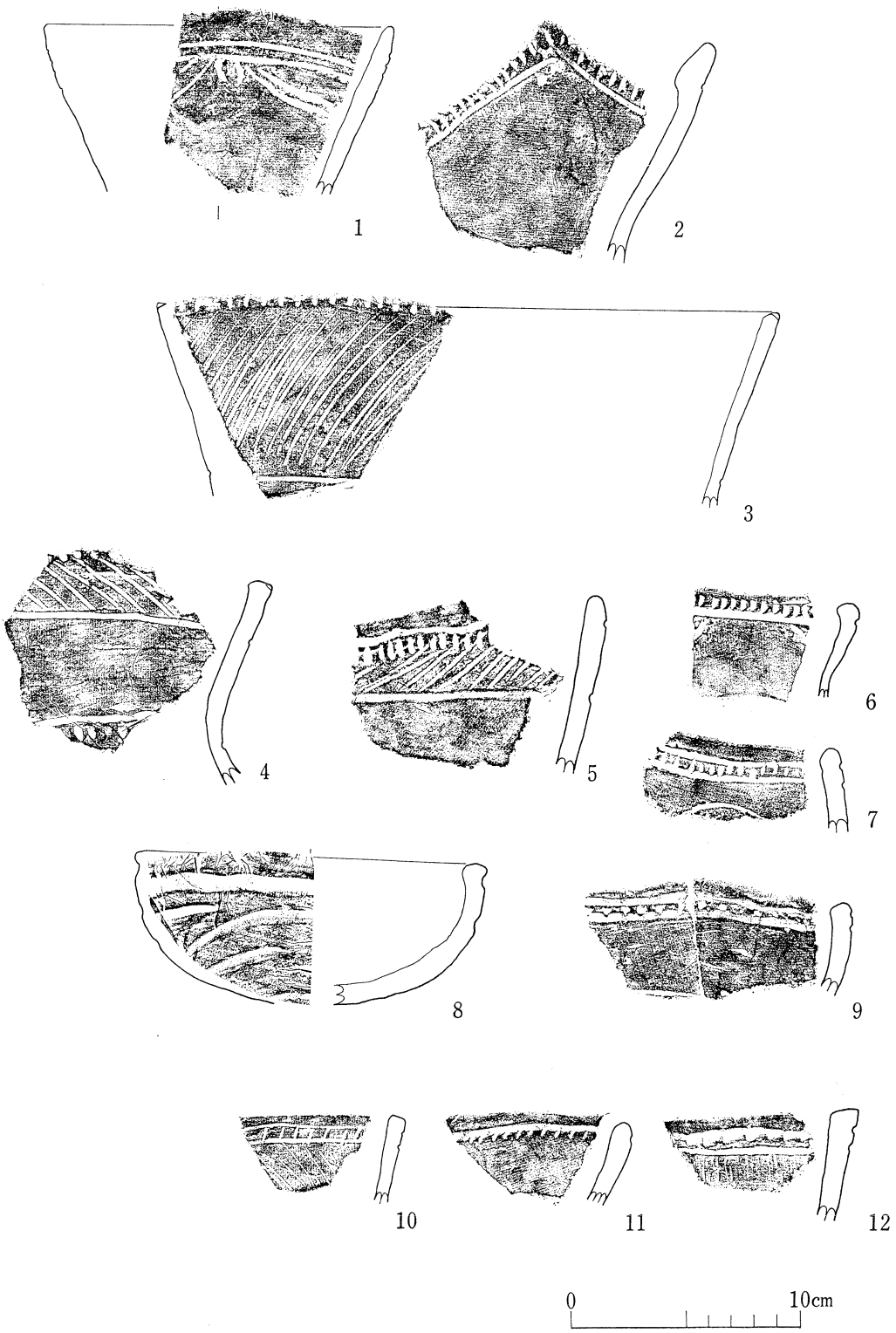
第 III–11 図　加曾利 B 2 式土器



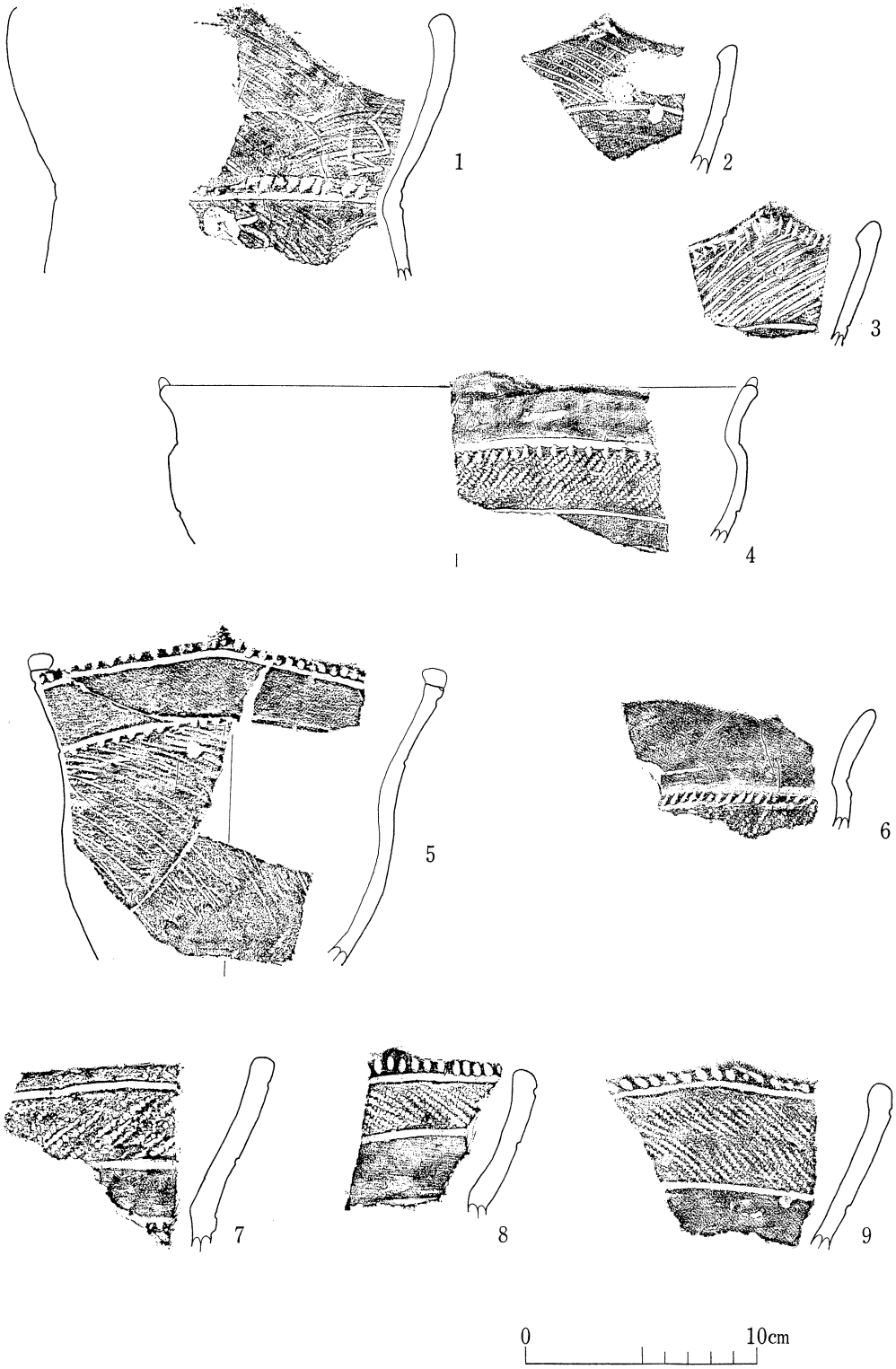
第Ⅲ-12図　加曾利Ｂ２式土器



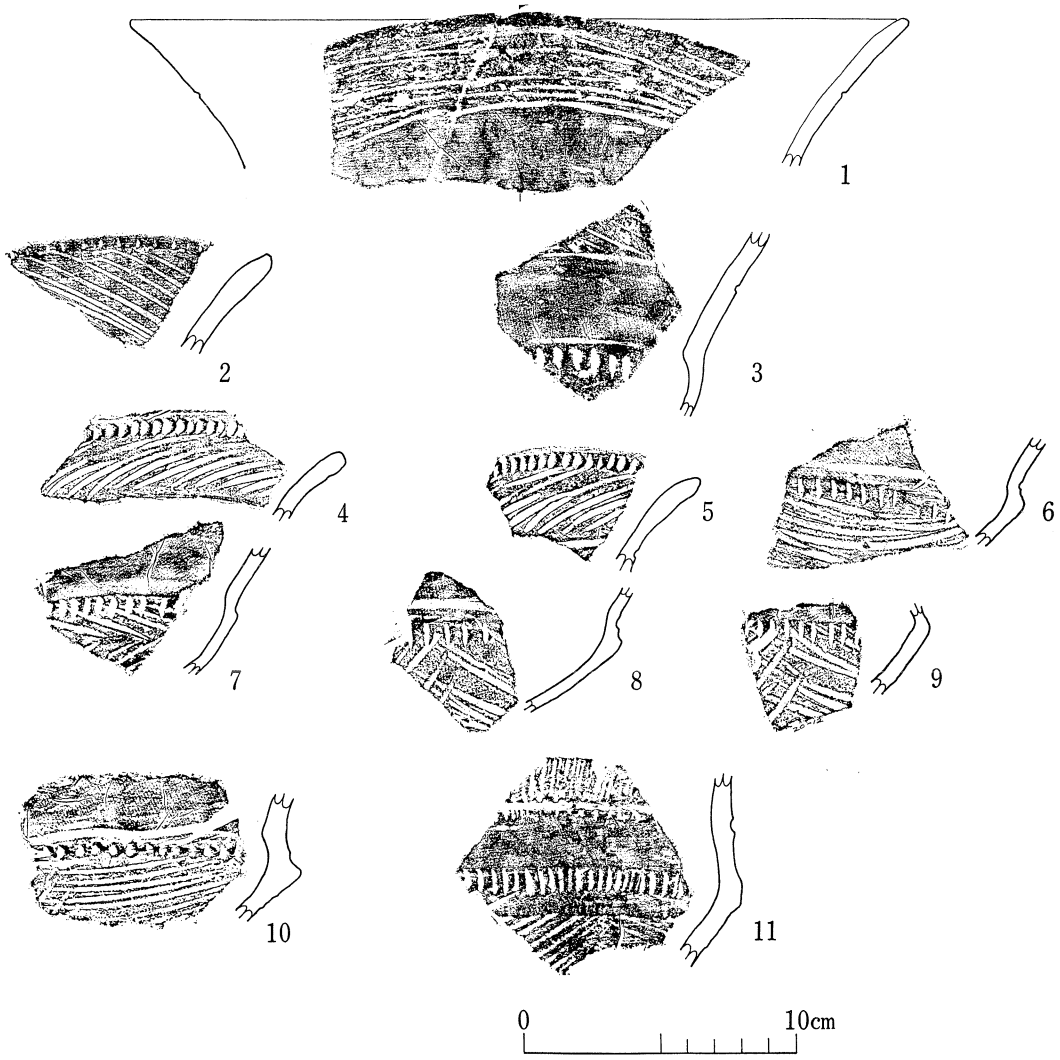
第 III-13 図　加曾利 B 2～B 3 式粗製土器



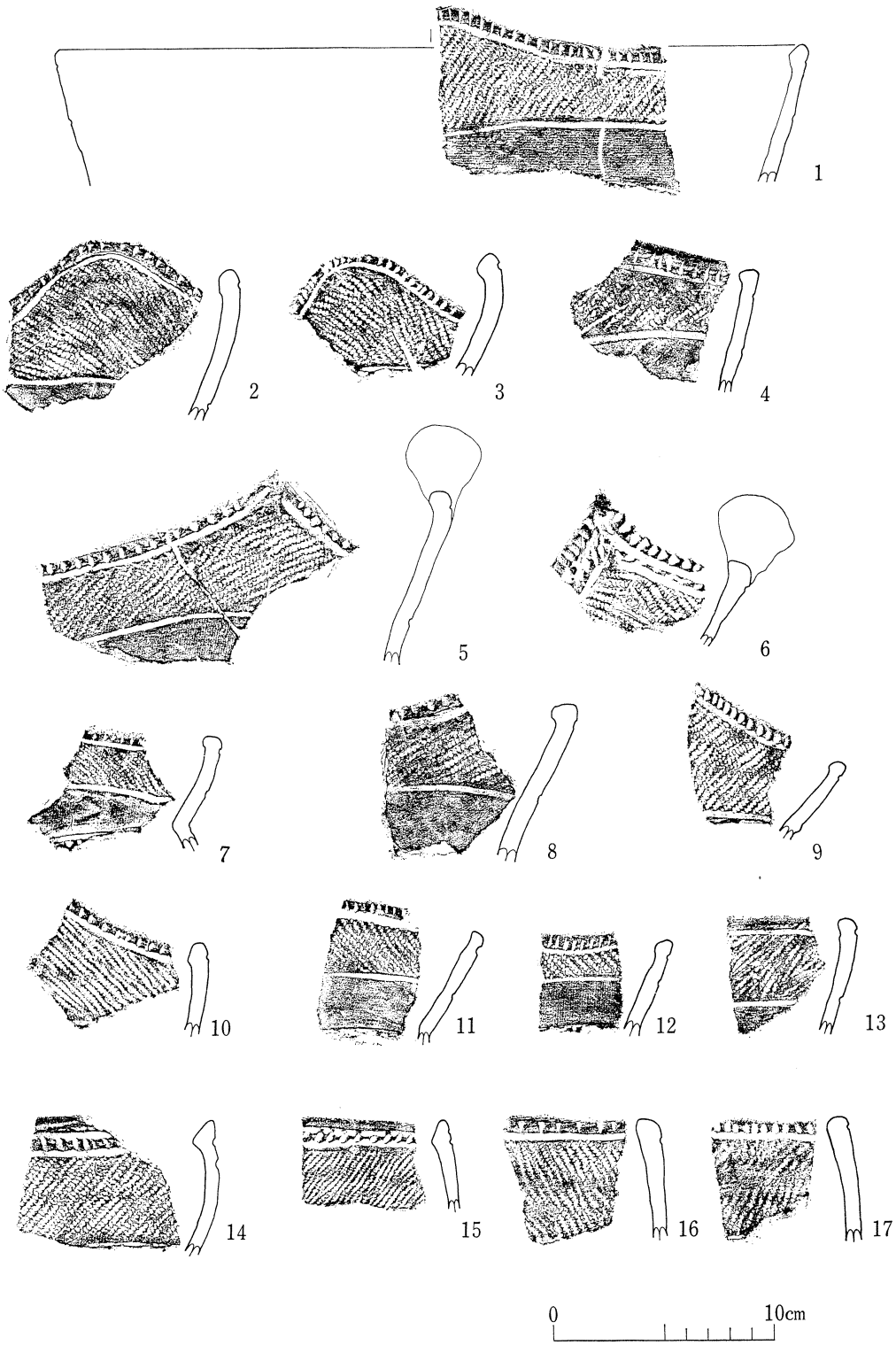
第Ⅲ-14図　加曾利Ｂ２式（新）～Ｂ３式土器



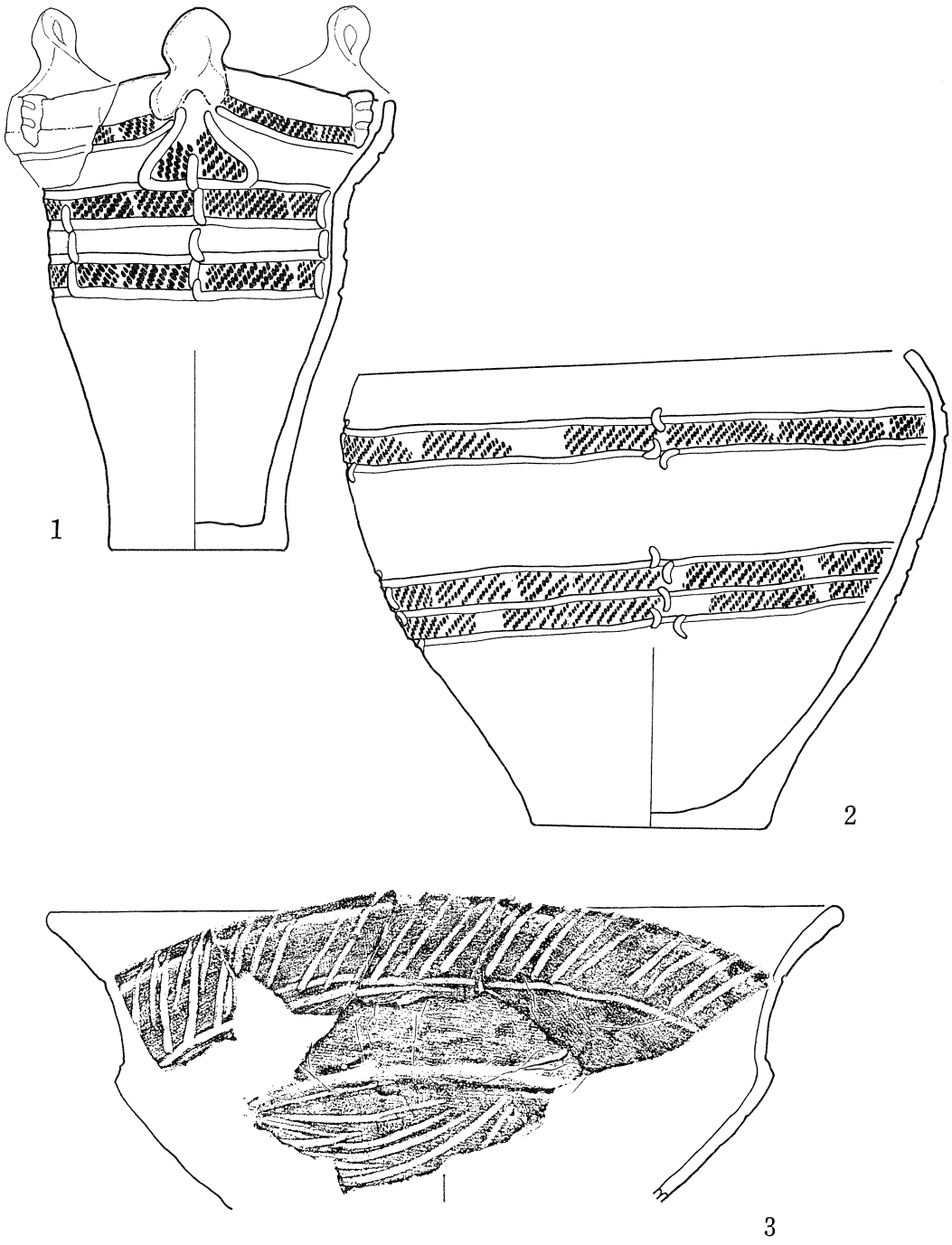
第 III-15 図　加曾利 B 3 式土器



第 III-16 図　加曾利Ｂ３式土器



第 III–17 図　加曾利 B 3 式土器



第 III–18 図　加曾利Ｂ1～Ｂ3式土器

Ⅳ　縄文時代後期後葉の土器

本調査の主任調査員であった長岡芳氏は、本報告書の刊行のために奔走され、原稿執筆に心血を注がれてきたのであるが、突然の病にふされ4ヶ月余の闘病生活の後、報告書の刊行を目前にして逝去された。本章は長岡氏が執筆を分担し、土器図版とその解説については脱稿されたのであるが、後期後葉の土器全般に関する総括については完成をみなかった。そのために表およびその解説の前に、氏が採集し、「真壁町史料（考古資料編Ⅱ）」所収の一部を真壁町町史編さん委員会の承認を得て転載させていただいた。

（川崎純徳）

（解説）　曾谷式土器

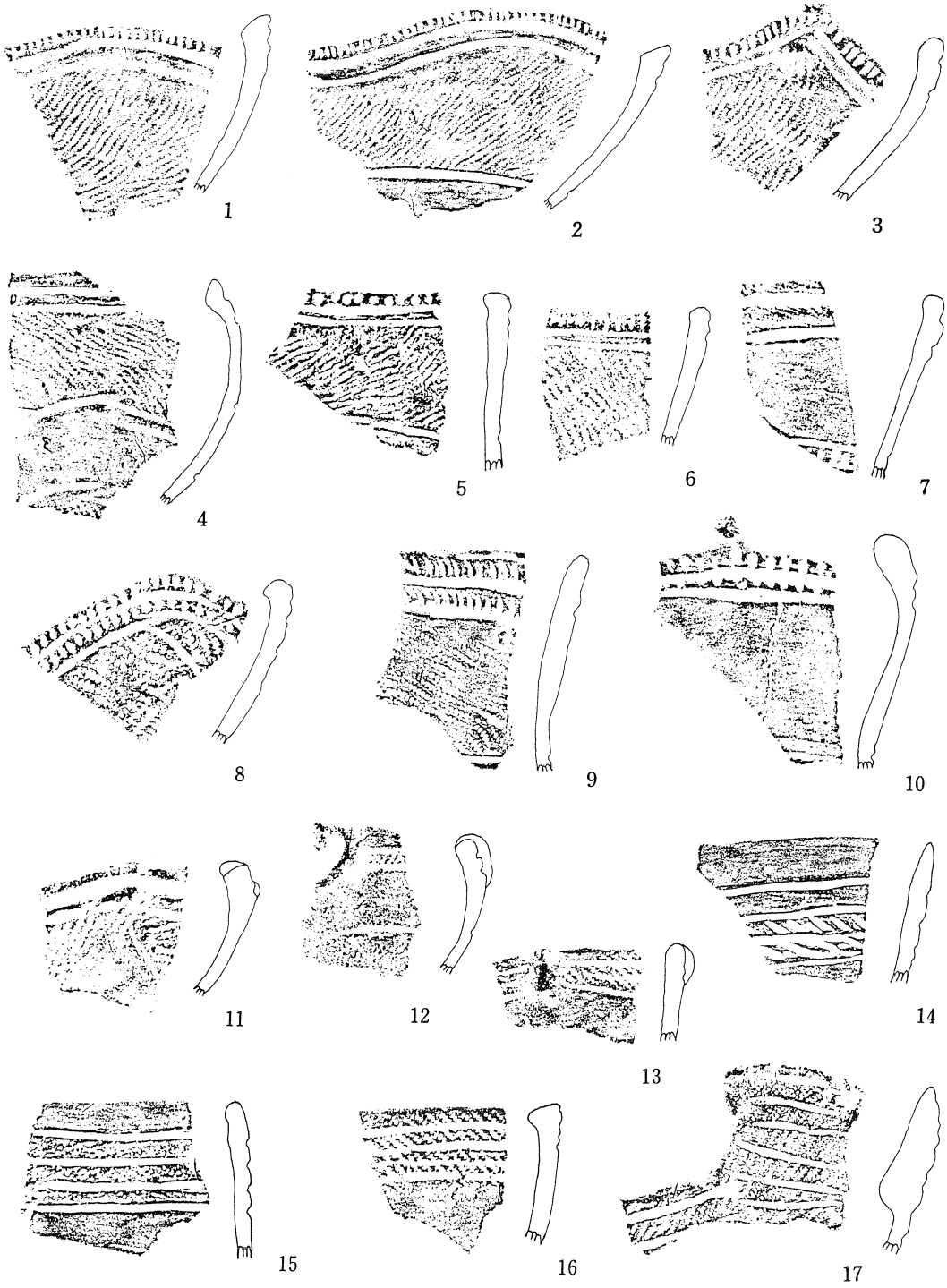
先行型式加曾利Ｂ3式の口縁部文様帯を拡張する手法に、口縁部直下の刻文を持つ横線よりやや間を置いてもう1条の横線を施し、無文帯を作出することによって曾谷1式中妻系列が誕生する。((註) 曾谷式における各種系列はすでに鈴木正博氏（「曾谷式」研究序説　滝口宏古稀記念論文集1980）によって分析が果されている。理論体系の基礎を文様帯の法則性に求め、一連の作業内容は比類ない緻密な分析であり学界でも定評がある。) 1～7はほぼこの系列に該当し、4は口縁部帯に刻目を持たない類例で、曾谷1式貝の花系列に分類され、浅鉢の形態をとる。7も同系列からの派生と言われ、頸部文様帯の縄文が消失し、口縁部文様帯に縄文が転写されている。

小貝川下流中妻貝塚の、口縁部帯強調は2条の横線による下端部を無文帯として構成する技法が特徴であり、それと同期して、霞ヶ浦沿岸の広畑貝塚では2条の横線間に刻文を配し、2段重ねの口縁部文様帯を構成する類型も存在した。広畑系列である。この「複段連続刻目手法」は普遍的な現象として関東一円は勿論のこと、東北・北海道・北陸地方まで波及していることが判明している。8は緩い波状、9は平縁であり、共に頸部は帯状縄文で構成されるが、8の頸部には羽状の縄文が施文され系統として南奥との関係性が考えられる。10は平口縁に小突起が付き頸部文様帯は消失している。

11～13は瘤が重要な指標となる資料である。11は緩い波を持ち、口縁部中央とその裏面に当る口唇部帯にも小型の瘤を張り付ける。頸部は弧線の磨消し縄文で瘤が口縁部文様帯を支配し、頸部の弧線文とも関係している。12の耳状の瘤の祖元は加曾利Ｂ3式広畑系列に求められ、瘤は独立的に存在する。

口縁部には沈線区画の狭い縄文帯がめぐり、頸部は無文帯である。13は11・12よりも後出の資料で、口縁部に貼付された小型の瘤を起点に3条の沈線が巡り、単節RLの縄文が充填され頸部は無文帯である。類似資料は稲敷郡茎崎村小山台貝塚にも認められる。11・12は曾谷1式、13は曾谷2式に比定される。14、15は加曾利Ｂ式と思われる。

曾谷式後半の表徴は口縁部文様帯の沈線多条化に集約され、各系列は縮小ないし消滅し急速に統合化する過程で、装飾要素のモチーフ及び貼付文に系統的表徴性が表示されてくるようである。14は口唇部直下に少しく間を置き、ほぼ等間隔で4条の沈線を巡らし下位2段を刻文帯とする。15・16と



第 IV-1 図　外塚遺跡出土曾谷式土器

も口縁部縄文帯に4条の沈線が巡る。頸部は無文帯である。13から継承されたものであろう。15の内面には沈線がめぐる。16の沈線は左から右へ巾を拡げて走行する。瘤が沈線の起点となる可能性が強い。17は先端部が台形に作出された波状口縁で、口縁部縄文帯に6条の沈線が施されている。瘤の付かない類例である。

口縁部に3条の沈線を巡らす各系統の別で曾谷2式は集合化が可能である。18は口縁部直下の沈線上端を無文帯とし、重複する刻文帯を下位2段で構成し口縁部帯の拡張をはかる。広畑系列からの変生である。19も口縁部上端に無文帯を作出する。頸部文様帯は入組み弧線文で下向き弧線文の連結部に瘤が付く。中妻系列から生成されたものであろう。20は中妻系列の刻文帯を縄文に置き換えている。頸部は帯状の縄文であり、1.5 cm位の原体LRが5工程の横回転で施文されている。括れ部の狭い無文帯に弧線の一部が連結しているが全体は判別出来ない。焼成は固く器内外面の調整は精緻であり、縄文の施文はなかば乾燥の段階に行われたものであろう。圧痕が力の関係を証明している。21は縄文地に均等の太い沈線を施している。22の口唇部帯には切り込みを、その直下に三角状刻文を上下交互に施し、小波状の浮線を作出する。この加飾要素が併行沈線と連動し1文様帯の拡張がはかられる。18～22はすべて曾谷1式からの変生と考えられる。

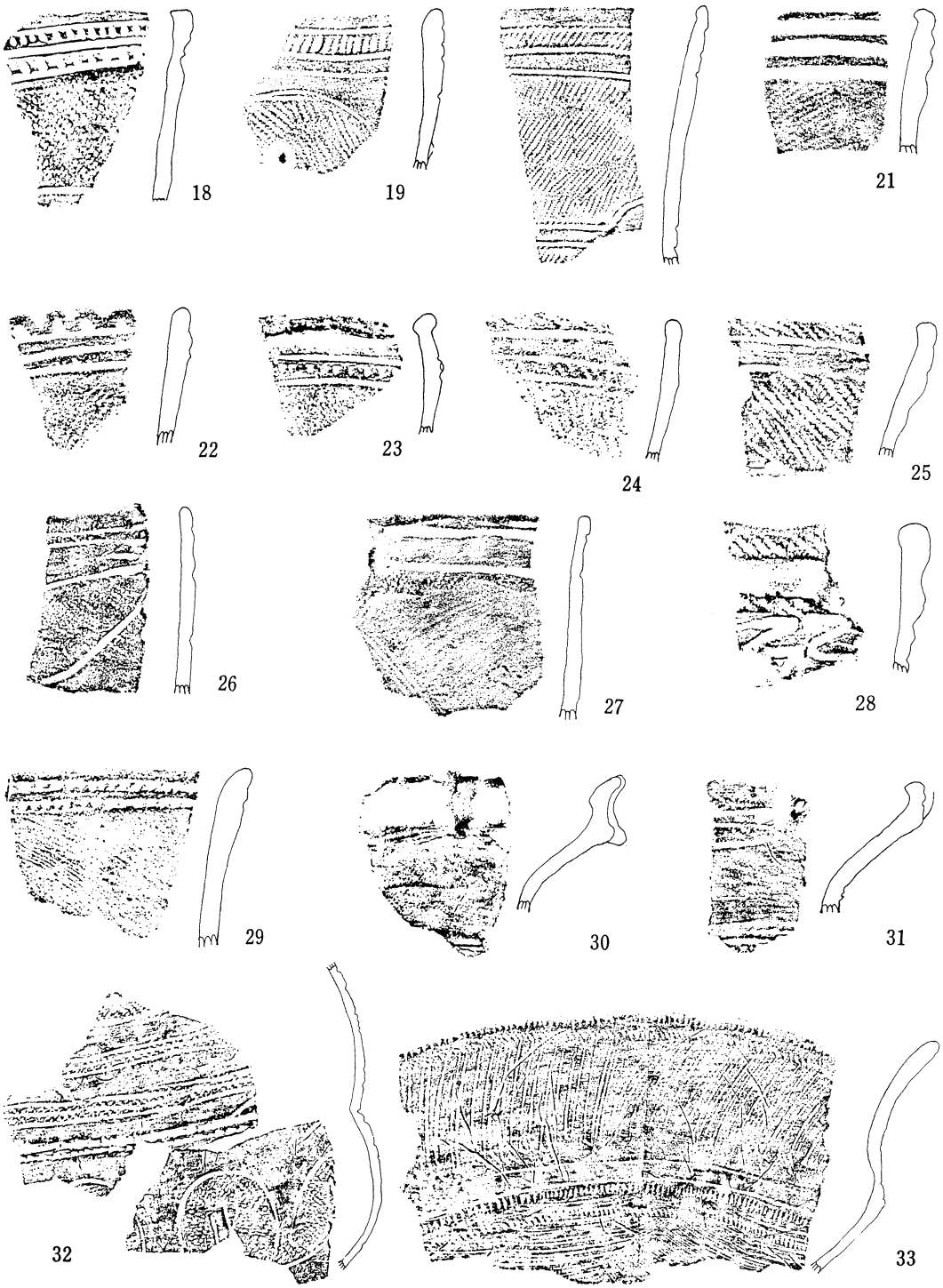
（考察）安行Ⅰ式土器

23・24は平縁深鉢の資料で安行Ⅰ式初期の類例である。23にはまだ口縁部文様帯の整一的均衡性は見られず、口唇部に接する縄文帯は異常に盛上り、下端の隆起帯上には曾谷4式からの沈線間刻文が継承される。24は整合された隆起帯上に縄文が施文され、沈線区画の無文帯は器面に対応する平担面作出のナデが作用するが、頸部縄文帯は口縁部文様帯と同調し、文様帯の構造はまだ未分化の儘でありこれは安行Ⅰc期まで継続する。23は安行Ⅰa、24は安行Ⅰb期になる。

土器の型式変化は画一的な図式の中で簡単に捉えられるほど単調なものではない。精査すればするほど内容は複雑であり多岐に亘る。25～27の個々の類例は隆起帯縄文作出の過程に見られる正調的変遷からはずれ、型式移行の過程で消滅する一時的現象と見られ、継承される要素は以後安行Ⅰ式総体の中に解消される運命を辿る。これらは何れの場合も頸部文様帯の優位性が包括され、口縁部文様帯としての明確な存立が確定し得ない。曾谷1式からの口縁部文様帯の強調とは無縁の存在である。25は頸部に接する隆起帯を区画する沈線が存在しない。磨り消し弧線文が頸部を支配する。口縁部帯に削りの手法は見られず軽いナデのみが行われている。26の頸部も25とほぼ同様であり、沈線で区画された内外に不充分な磨り消し洩れが残る。口縁部帯に残る沈線の痕跡は単位数を4条に意図したものであろうが、最初に企画された沈線の規範は、優先された巾広い無文帯作出の陰に立ち消えとなっている。27の頸部は単節LRの縄文が磨り消され斜条線が主体を占め、頸部を区画する沈線は存在しない。口縁部無文帯のナデは緩く凸凹が残る。25～27は斜線文の系統で高井東式との関係性をもつものであろう。これらはいずれも初期的要素を保有する安行Ⅰaと思われる。

（解説）安行Ⅰ式土器

28及び29も安行Ⅰa期の資料であり、28は隆起帯を2段で構成する波状口縁深鉢の波底部に相当する破片である。頸部に蛇行する沈線が併列して下垂し、口縁部の隆起帯縄文は深い彫りのナデで作



第 IV-2 図　外塚遺跡出土曾谷式・高井東式・安行 I 式土器

出される。類似形象をもつ他遺跡のいずれとも異っている。29は2条の列点刻文帯を口縁部にもち、頸部には右下りの斜条線が施されている。山王堂遺跡の枠状文をもつ資料と対比して考える必要がある。

（解説）高井東式土器

30・31に見られる口縁部が大きく開き、上端で強く「く」の字状に屈曲する。形態的変異は在地性の土器からは継承されない。この事実を証明するように口縁部に貼付された瘤には縦長の圧痕が見られ、一系を辿る変遷を南関東に求められる。本資料は安行Ⅰb期に併行する東井東5式と思われる。

（解説）安行Ⅰ式土器

瓢形土器の祖元は加曾利B3式広畑系列に求められ、生成の元基において文様帯の構造は、口縁部・体部ともに巾広い帯状縄文の重畳であった。変成作用の契機に平縁深鉢が保有するⅡ文様の転写があり、両者の合成が瓢形土器文様帯の確立となった訳で、曾谷式期に至り各種の別が生成される。

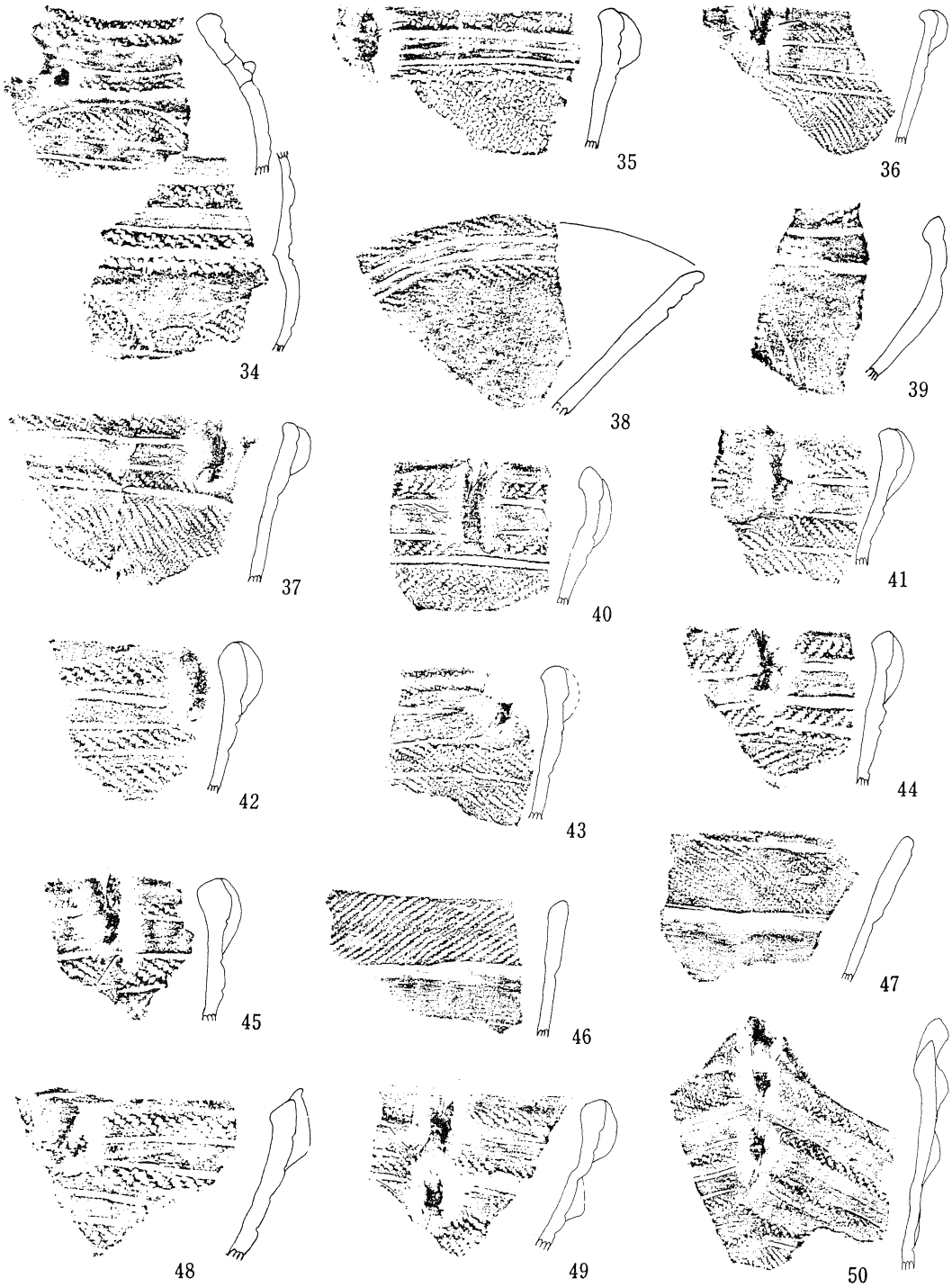
32は、口縁部帯の隆起帯の部分と底部上端部を欠くが、ほぼ全体形を想定出来る瓢形土器の資料である。体部上半を帯状縄文で構成し、下半部に縦位の入組み弧線文が描出されている。沈線の区画はまだ未発達であり帯縄文は隆起化されていない。本例は安行Ⅰb期、同期する好資料が中妻貝塚にあり、瘤が付く。安行Ⅰc期の完全品は三和町恩名遺跡で検出されている。

33は、台付鉢形土器の鉢部を形成する資料で、推測される口径計数は29.5 cmとなりかなり大型の破片である。口縁部が大きく開き肩部から胴上部にかけて張り出し、緩い傾斜で台部に移行する形態をとる。上半部は縦位の条線で、弧状の条線は下半部に施されている。沈線で区画された無文帯が肩部を巡り、口縁部帯と張り出し部には施文手法を変えた刻文を併列する。沈線区画の無文帯作出手法は安行I-2a期の帯縄文土器に共通し、相異した刻文を併列させる手法も同期の粗製土器にしばしば見られるものである。本例は以上の事例を参考に安行Ⅰ式後半でも比較的初期に比定される資料かと思われる。関東全域でも現在類似資料の検出例が少なく、型式判定可能の完形土器は皆無に等しい。千葉県千代田遺跡に本例より先行する台部の欠落した資料がある。明確な細別は尚資料の増加を待って将来に期待する。

34は、安行Ⅰ式後半の資料で、帯縄文の優位性は括れ部の列点刻文帯と同一構造体をなし、波状口縁深鉢の変移と基本的には同調している。例の遮光器文様が帯縄文との融合により、上向き弧線文の横連結に退化している。帯縄文は隆起し沈線区画には整一性が見られる。高内遺跡の資料が先行し、本例はそれより後出の安行I-2a期に比例されよう。

35～37は、I-IIa-IIを形象とする平縁深鉢の類例であり、安行Ⅰb期に比定される資料である。Ⅰaとの分別は、口縁部文様帯が隆起帯縄文に統一されたのと並行して無文帯の作出に平滑なナデが作用し1文様帯の強調をはかるが、まだⅠc期の巾には及ばない。従って瘤は小さく腰が高い。いずれも縄文の原体は撚りが固く、頸部は帯状縄文で構成されている。

38・39は、共に口縁部無文帯にナデの手法が見られるが、沈線区画による隆起帯の作出は確立していない。安行Ⅰa期の資料である。38の形態は小型の台付鉢形土器と思われるが、確定は出来ない。器面の調整は丁寧で精緻に仕上げられており、縄文は単節RLである。39は波状口縁をなし頸部に



第 IV-3 図　外塚遺跡出土安行 I 式土器

斜条線が施されている。今後の資料の増加によって高井東式との関連性で捉えられると思われる。

40～45は、35～37例に続く同類型で安行Ⅰc期の資料である。口縁部文様帯は相対的に巾を持ち、隆起帯縄文が顕著である。瘤も偏平で細長くなる。口唇部が肥厚し、沈線の区画も太く鮮明であるが、頸部文様とは同化しておりまだ未分化の終末過程にある。

46・47は、口縁部を折り返し縄文帯を作出している在地性の土器で、参考資料の類型によって一系を辿る変化の集合化が可能と思われる。46の縄文は単節LR、47がRLで撚りが細い。ともに2工程の横回転で縄文帯下端には太い沈線が施され、体部には刷毛目状の刷痕が残されている。本例は大塚遺跡に後続する安行Ⅰc期の資料となろう。

48・49は、口縁部が緩やかな波状で形成される浅鉢形土器で、好資料は「日本先史土器図譜」図版64-1と3の遠部貝塚例である。48は明瞭に沈線で区画された2帯の隆起帯縄文に1個の瘤が支配し、49は3帯の隆起帯に独立した2個の瘤が付く。共に頸部が独立した文様帯の構成をとる安行Ⅰ式後半の資料である。

（考察）安行Ⅰ式土器

50・51及び52は大型の波を山形に作出した安行Ⅰ式後半I-2a期の資料である。口縁部帯の多段化は進行し4段帯の構成をとるが、波頂部中央先端から連結して下垂する瘤は3段帯に留まるようである。前段階のⅠc期からは微妙な変化であるが重要な意味を持つ。これは括れ部の列点刻文帯に同調する隆起帯が作用し、新たに頸部文様帯が構成されるためと思われる。波状口縁における頸部文様（IIa）の欠落は曾谷3式から継承される異系統の要素であり、胴部文様帯（II）の入組み弧線文は加曾利B3式から継承される在地性の要素である。安行Ⅰ式後半の最大の特徴は各要素がIIa・IIに相互に転写されることによって、文様帯が完全に融合合体化された構造として成立することである。51の資料が該期の典型となる形象をもつものである。

53～57は、前例の波状口縁深鉢に同期するI-IIa-IIを形象とした平縁深鉢の類例である。前段階から引続き口縁部文様帯の強調が継続し、沈線区画を一層巾を持つ。口縁部文様帯と同調し連動した頸部文様帯が、沈線に区画された無文帯によって初めて分離する。在地的な頸部文様帯の独立は各種類型に一連の傾向を帯びて波及し、以後も確実に継承される。

（視点）高井東式土器

限定された領域を範囲として共有する各種要素を保守し、時間的重層性の中で連続的に継承される系統として、東関東の曾谷式期に併行する西関東における高井東式の独立的存在が証明された。高井東5式は、安行Ⅰb、Ⅰc期に併行し、Ⅰc期の存在を高井東遺跡では明確に実証し得なかったが、安行Ⅰ式後半における東西両系統の統一融合は、胎動する布置された時間帯が偶然的な変異を否定する。即ち安行Ⅰc期に併行する高井東式の存在である。

58～60は、隆起帯上に刻みを持つ各種類型で、この系統のセットをなすものと私考する。共通する手法にみられる特徴は、隆起帯作出の最終工程として深い彫りのナデが施され、先工程の沈線区画が磨り消されることである。58は丸味をもった波頂部の中央辺に正円の瘤を2個独立して貼付する。隆起帯は4段構成で垂直施文の細い刻文は爪形をなしている。波頂部断面と貼付文の形態、それに係

第 IV-4 図　外塚遺跡出土安行 I 式土器

る貼付の位置など一連の相似性を異系統の先行型式に見い出すことが出来る。59は平縁深鉢で1文様帯の連動である。隆起帯上には荒い刻みを施し、胴部を斜線文で飾り、口縁部の突起と対応してスリットを施す。60は鉢形土器となり隆起帯は3段の構成で1文様帯の連動である。最下段の巾を持つナデは後工程で、口縁部文様帯の拡張を意図したものと理解する。体部には斜条線を施し、更にその後同種の併行する横線を重ねている。以上3例の文様帯は口縁部文様帯が主動する構成であり、安行Ⅰc期に比定される。

（解説）安行Ⅰ式土器

61・62は安行Ⅰ式1-2bを形象とする波底部の破片資料である。頸部文様帯と認識する括れ部2段構成の隆起帯縄文上に、新たに瘤の貼付が見られることで前段階と明瞭に識別できる特徴を持つ。隆起帯縄文の胴部への転写は東西両系の融合であったが、新たにこの期ではこの新生の文様帯に瘤を加飾し独立性を強調する。61・62とも胴部に単節RLの縄文が僅かに見られる。胴部文様帯（II）を構成しない類型になるかも知れない。62の隆起帯中央部には右下り斜線文の区画帯を配し文様帯を分離する。下垂する4個の瘤は2個単位の構成をとり、スリットで連結している。

63は本来口縁部文様帯のみで構成される平縁深鉢であるが、縄文の多段化現象に連動し本例も隆起帯縄文は4段に作出されている。下位2段の縄文帯はそれぞれ小型の瘤が付き、口縁部帯には大型の瘤が独立する。瘤の配置は完全に文様帯を分離する構成であり、下位2段は頸部文様帯と見做さなければならない。胴部は斜条線が施されている。本類型は口縁部文様帯（I）から頸部文様帯（IIa）の派生、独立を一連の経過として捉えることが出来る。

64は、安行Ⅰ式後半でも最終末1-2c期の波状口縁深鉢の資料である。波頂部から下垂する瘤は、5段帯に構成される隆起帯を完全に支配し、小型の瘤は前期同様各要所に貼付される。この瘤には刻みが施される。本例は切り込みの刻文ではなく円形の刺突文で、この手法は在地性の土器には見られない。頸部の三角形区画内の不規則な条線も異系統のもので、斜線文系列である。完全形は1-2b期、1-2c期とも埼玉県石神貝塚に検出されている。縄文は、単節LRである。

（考察）安行Ⅰ式土器

65及び66は共に安行Ⅰ式1-2c期の瓢形土器（注口を含む）の資料である。65は帯縄文の系列で刻みを持つ瘤が全段に亘って規則的に貼付され、胴部文様帯は入り組み弧線文で構成されるようである。瓢形における帯縄文の系列も安行Ⅰ式後半には多段化現象と同調し頸部文様帯が発達する。本例も口縁部文様帯と連繋しながら多段化現象と同一歩調で連動していることを理解する。「縄文土器大成」③後期　図版286も本例と酷似し、文様帯の構造は安行Ⅰ式終末の構成となっているが、どうしたことか、それが安行Ⅱ式と認定されている。判別の基準を安易に刻みをもつ瘤においたのだろうか、それにしても単独の加飾要素それのみでは型式判定の誤認は避けられない。66の胴部文様帯は欠落しI-IIaの構成をとり、頸部には襷掛け入組み弧線文が描かれている。相対的に文様施文の乱調さは敵い難い。本資料は64の波状口縁深鉢と伴出したものである。

（視点）高井東式土器

安行Ⅰ式後半の文様帯は、東西両系統の保有する文様帯を相互重畳によって融合化され、汎関東の規模に拡大統一される訳であるが、この現象も又一元的突発的なものではない。狩猟採集を基礎構造とする先史社会の重層する多元的要素の必然的帰結と理解される。認識される前段階の波状口縁深鉢を形象とする各種類型は、I、I-II、I-II a-II（?）の3種が存在し、Ⅰ類型には縄文系と斜線文系があり、尚後者には口縁部帯を沈線文と帯縄文で細別される。各種型の別は各系統要素の複合体で構成されるか、又は、一系を継承する。安行式初期の先進的意味は後者が優先する。

67～71は安行Ⅰb期に併行する高井東5式であり、「く」の字屈曲の口縁部はほぼ沈線が主動する。67は口縁部が内彎する屈曲部に張りを持ち波状となる深鉢で瘤が付くようである。口縁部に併行する3条の沈線は左端で急激に巾をつめる。枠状文の作出である。瘤を介した枠状文は前段階のこの系統には存在しない。安行Ⅰaとの関係性である。頸部上端には異系統の手法である帯状刷毛目文が横走し、胴部にかけての下端部には右下りの斜線文が施されている。68・69とも枠状文の類例と思われ、70の押えを持ち口縁部に突出した瘤は象徴的であり、口縁部帯は地文縄文である。71の口縁部隆起帯は荒い刻みを施す。瘤が付くようである。頸部には斜沈線の先端部を接続して稲妻文を描いている。

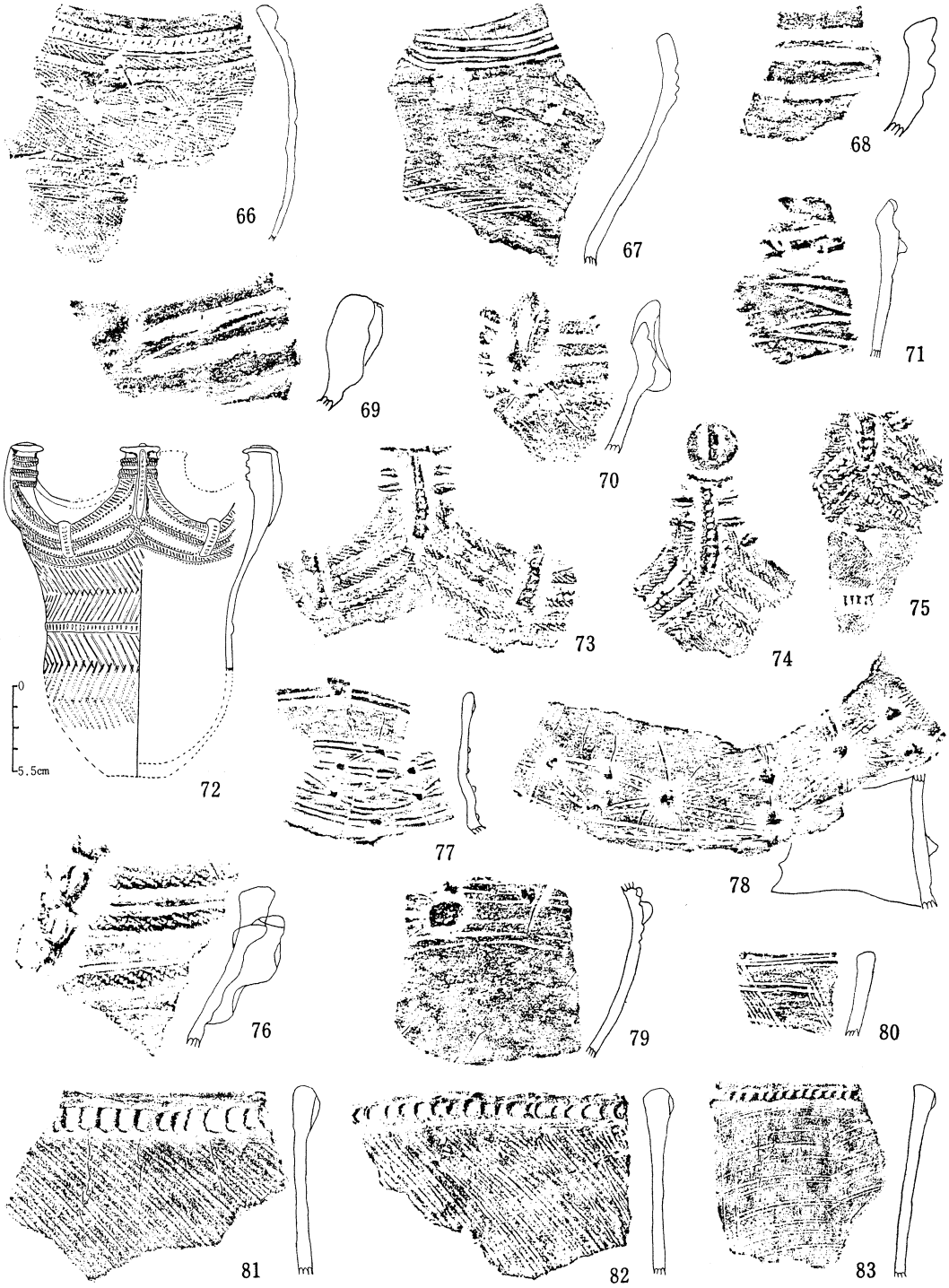
72の復元図及び73～75の波状口縁深鉢は1類型の斜線文系であり一系の連続的継承となる。この系統の強固な勢力が存在したことによって、安行Ⅰ式前半での東西統合は果されなかったのである。口縁部帯は3段帯の隆起帯縄文で構成され、波頂先端部を円柱状に作出し2段の帯を巻いて円盤状の帽子をかぶせる。棒状の浮文が波頂部中央と波底部に付く。浮文が口唇部を巻いて下垂する共通した手法は円柱状の各要素の装飾性と関係し、円形刺突文も又それぞれ相関する。頸部及び胴部には極細の斜行沈線が矢羽状に施され、括れ部の隆起帯刻文は沈線施文の後工程で貼付されている。大塚遺跡の波状口縁深鉢はI-IIの類型であり、胴部文様帯に在地性の先行型式から継承された入組み弧線文が施されている系統である。両系統をじっくり対照して欲しい。両者の交渉関係が、即ち土器社会に反映した確証となる。

（解説）安行Ⅰ式土器

76も口縁部を3段帯の隆起線で構成する波状口縁深鉢であり、その波底部に位置する安行Ⅰb期の資料である。瘤が特徴的で切り込み状の押えがあり口唇部を巻いて貼付けている。波状口縁深鉢の頸部文様帯は、曾谷式後半から口縁文様帯の拡張に連動して欠落する傾向にあり、それが一般的であった。本例はそれに同調しない類例であり頸部に入組弧線文の描かれる可能性が強い。I-II a-IIの類型となるのであろうか、判然とはしない。

（解説）南奥系土器

該期の異系統土器との接触は分布の主体を南奥に持つ瘤付土器とも関係する。当遺跡は昭和56年8月、比較的良好な包含層を主とする一部の調査が下館市教育委員会によって行われた。この調査によって瘤付土器最盛期の完全形注口土器2個体が検出され、安行Ⅰ式1-2b期と層位的に共存し、口縁部1段の刻目で構成される一部瘤付土器も安行Ⅰ式1-2c期に伴出する保証が得られた。両者の共



第Ⅳ-5図　外塚遺跡出土高井東式・安行Ⅰ式南奥系土器

存が果して製作の同時性、および使用の同一時間帯に結び付くかどうか、包含層の形成と絡み合せて多角的な考察が層位的事実性を保証する。共伴の事実は破棄の同時性だけであって、真実の事象の解明は今後あらゆる角度から追求しなければならない。

77は沈線作用による複合効果が微隆起線文の作出に還元される黒色を帯びた精緻な土器である。IIa帯が欠落し、I-IIb-IIの文様帯で構成される注口土器となろう。各文様帯に貼付される瘤の単位は不明である。器厚3.5mm～4mm、口径5cmの小型の土器である。微隆起線文と瘤に古式の様相が窺える。

78は全面に彩色が残り採拓の時にもかなり脱色した。資料は肩部文様帯（IIb）のみの残存であり、各モチーフを3単位の複合体で構成している。

77・78とも内面は製形時のままで器面調整のナデは全く行われていない。この瘤は円錐形である。79は磨滅が激しく器面が荒れ、瘤も多用しているが剝落しているものもある。沈線区画には乱れが見られ総体的に不調である。80はこの系統の粗製土器である。77が古く、78が瘤付最盛期の資料となろう。79は不明である。

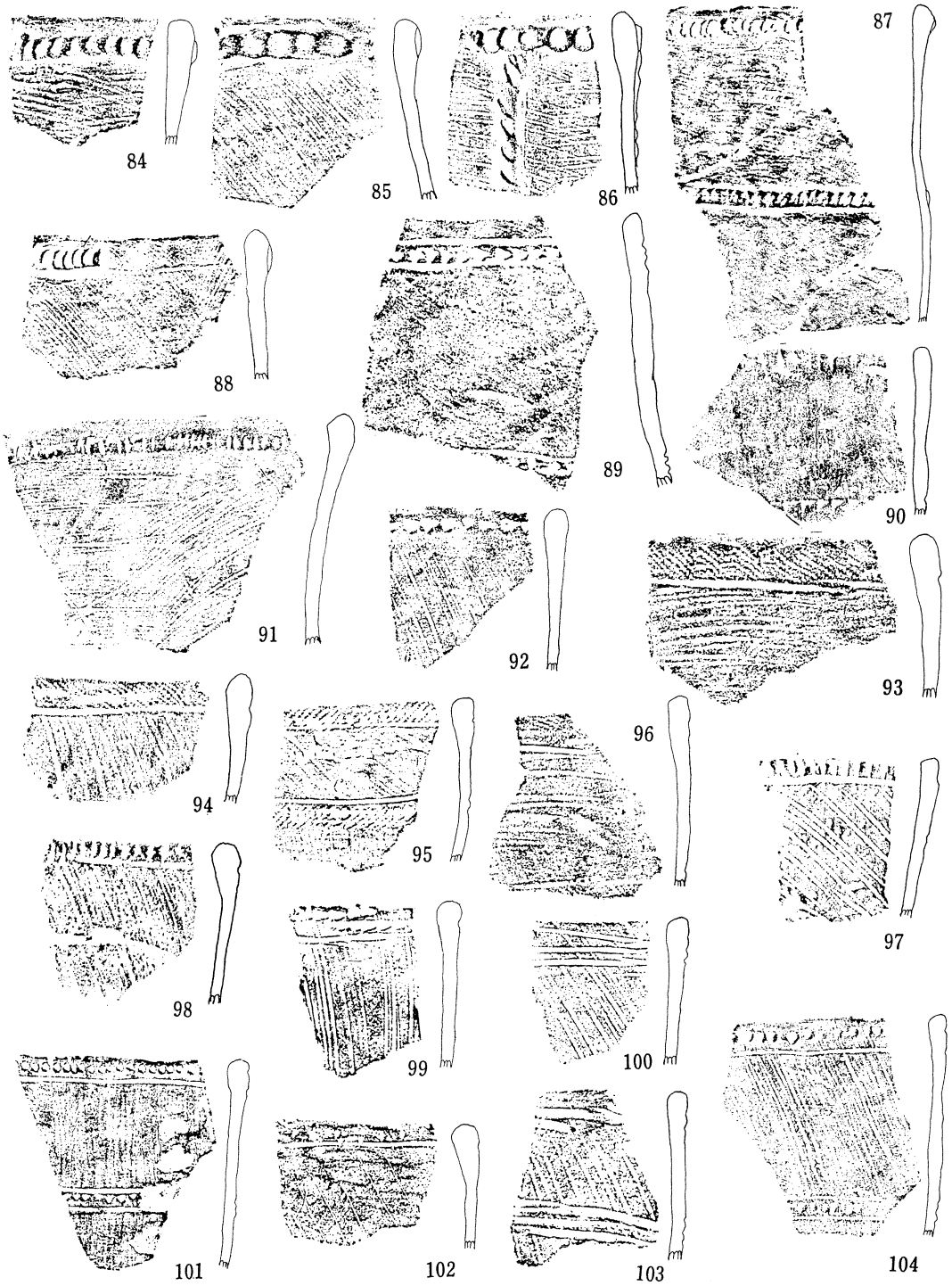
（解説）安行Ⅰ式粗製土器

安行Ⅰ式粗製土器は大略、刻文加飾類系と紐線付類系に大別され、極く少数を除いて共に条線文を加飾要素とする。両者は加曾利B式を継承し以後一連の生成過程を辿るが、精製土器との関係性に絡み、系統、分布の明確な分析は、尚今後の課題として残される。81～88は外塚遺跡で検出された紐線貼付類系の資料である。83は細い紐線を口唇部直下巡らし、頸部の条線は上向きの弧状をなして展開する。口縁部は外反し条線を切り込む併行沈線が垂直に施されている。先行型式の要素が強く残る。81の紐線は太く刻文は円形を帯び、条線は右下りで口線部は外反する。共に安行Ⅰ式前半Ⅰc期に比定される82・88の紐線直下には沈線が巡り、口縁部はやや肥厚し直上又は内彎気味となる。88の紐線剝落部は右傾、左傾の条線が交差し紐線貼付の工程に先行することが判別出来る。共に安行Ⅰ式後半1-2a期の資料となる。

85・86の紐線貼付にはそれによって生ずる器面との段差を二次的に粘土を付加して埋め口縁部を肥厚させる。85は、口縁部上端で「く」の字状に曲する、括れを持たぬ形態をとるようである。86の条線は上向き弧線の横展開で左右の交差は深い。頸部に垂直の紐線が加飾され、粘土内面に折返し口縁部を肥厚させる。共に安行Ⅰ式1-2b期に比定される。84・87の紐線は口唇部よりやや間を置いて貼付し、口縁部は先行するいずれの資料よりも肥厚を増す。87は73～75の波状口縁深鉢と同一地点から層位的に伴出した。共に安行Ⅰ式終末1-2c期の資料である。

（解説）安行Ⅰ式土器

89は口縁部直下に2条の併行沈線をめぐらし、三角刻文を沈線区内に施し、上端は無文帯とする口縁部文様帯の構成をとり、一般粗製土器平縁深鉢とは同調しない。口縁部が内傾し頸部に条線は施されていない。類例は現在皆無であるが瓢形の形態をとるようである。本例は隆起化された口縁部帯に作出されてない先行型式の特徴を継承している安行Ⅰ式前半の資料となる。尚、精密な分析は将来の資料の増加を待ち、各種類型にも粗製土器が存在した可能性を指摘するのみにとどめたい。



第IV-6図　外塚遺跡出土安行Ⅰ式土器

（解説）安行Ⅰ式粗製土器

91の器面には刷毛目状刷痕が認められ、成形時の凸凹面上に不規則な条痕が斜位、横位に錯綜している。口唇部直下に縦位の刻文を施し内面を平坦に削り稜を作出する。口縁部は外反角度を強く持つ。

90の口縁部は直下気味で条線、刻文共にタテである。器面が風化し荒れているが刷毛目状刷痕が残され91と共通している。92は右下りの条線に三角刻文を施している。半乾燥時に土器を伏せ胴下半部の文様を施文した為であろうか、口唇部に重力のかかった平坦面が残されている。胴下半部の文様施文には抱きかかえた土器を回転させる手法と、土器を固定し製作者が移動する場合の2例が考えられる。3例共に安行Ⅰ式前半、安行1c期に比定される。

93～96は口縁部直下と胴上部に横線を区画し縄文帯を構成するもので、条線方向は横・縦・斜とさまざまで、縄文及び加飾手法も一定していない。口縁部は幾分肥厚し内彎する傾向にある。安行Ⅰ式後半の資料である。中妻貝塚に多くの類例が検出されている。

97～104は安行Ⅰ式後半1-2期における粗製土器の主要セットを構成する類例である。口縁部直下に横線を巡らしその上端に縦位の刻目（a）と、三角刻文（b）、それに併行沈線のみ（c）の3種に類別出来る。97・98はa種で97は地文に荒い縄文があり、右下りの条線は深い切り込みを持つ。98は刷毛目状の細線で、両例とも口唇部は平坦に作出され口縁部はやや内彎している。100・103はc種で併行する沈線は一定していない。他はb種で101・104の刻文は連続して併行するが、99・102は不規則で102の右下りの条線は特に細く間隔を置いて施している。類例としては「日本先史土器図譜」61-2岩井貝塚例が挙げられる。

（長岡芳著「真壁町史料考古資料編Ⅱ」より転載）

第1表　第Ⅳ—7図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	c—4	I	曽谷式	瓢	口縁	口縁部は隆起帯刻文、頸部はLRの帯状縄文。
2	C	ォ—2	／	曽谷式	瓢	口縁	口唇部直下の内外面に稜、口縁部は刻文帯、頸部に入り組み弧線、区画内を斜条線で充填。
3	A	c—2	II	曽谷式	瓢	口縁	形態上例に類似、口縁部帯は横線に併行する上下の刻文。
4	A	c—4	表土	曽谷式	瓢	口縁	口縁部帯沈線間刻文、頸部は単節LRの縄文帯。
5	A	d—4	I	曽谷式	瓢	口縁	口縁部帯沈線間刻文、頸部に径9㎜の貫通孔。
6	A	d—5	I	曽谷式	瓢	口縁	頸部の縄文帯は単節RL、中央部に粗雑な点列文。
7	A	d—3	I	曽谷式	瓢	口縁	口縁部帯沈線間刻文、頸部は入り組み弧線文。
8	A	d—5	I	曽谷式	浅鉢	口縁～体	口縁部帯の沈線間刻文は正円の浅い刺突文、体部は組み合せ弧線文、内面にヘラ状工具の粗雑な横ナデ。
9	A	d—5	II	曽谷式	瓢	口縁	口縁部横線関与の刻文帯、頸部縄文帯はLRの横回転。
10	A	b—4	表土	曽谷式	瓢	口縁	文様帯の構成同上、縄文RL、成形、焼成とも良好。
11	A	c—2	II	曽谷式	瓢	口縁	口縁部帯2段の刻文帯に瘤、括れ部は2条の横線直下に刻文、器表面未調整。
12	A	c—4	II	曽谷式	深鉢	口縁	口唇部帯に突起、刻文2段、頸頭は単節LRの帯状縄文。
13	A	b—5	表土	曽谷式	鉢	口縁	波状口縁、2段の刻文は丸棒状工具の押圧、頸部は帯状縄文。
14	A		表採	曽谷式	深鉢		口縁部2段の刻文帯、頸部は帯状縄文、口唇部に突起。
15	A	c—2	II	曽谷式	深鉢	口縁	波状口縁、文様帯の構成同上、器厚8㎜。
16	A	d—2	II	曽谷式	鉢	口縁	口縁部緩い波状、肥厚内面に稜、刻文帯2段、頸部無文帯。
17	A	d—4	I	曽谷式	鉢	口縁	No.15に類似、やや小型。
18	A	d—5	I	曽谷式	鉢	口縁	口縁部波状で外反、2段の刻文帯押圧と刺突、頸部帯状縄文。
19	C	カ		曽谷式	浅鉢	口縁	口頸部内弯屈曲、口唇部直下に2条の横線、鰭状の瘤。
20	A	c—4	I	曽谷式	浅鉢	口縁	口縁部屈曲面に2条の横線、頸部上端に亘り瘤、帯状縄文。
21	A	d—3	II	曽谷式	浅鉢	口縁	形態前2例に共通、口縁部帯2条の横線、瘤は斜位。
22	A	c—2	I	曽谷式	浅鉢	口縁	瘤の貼付が先行し、横線施文は後工程、No.20、21とも共通。
23	A	d—3	II	曽谷式	浅鉢	口縁	作出No.19に類似、但し瘤の貼付は後工程。
24	A	d—3	I	曽谷式	浅鉢	口縁	口縁部の内弯屈曲面に2条の横線、頸部は帯状縄文。
25	A	c—2	II	曽谷式	鉢	口縁	口縁部帯下端の横線が頸部縄文帯を分断。
26	A	b—4	I	曽谷式	鉢	口縁	No.23に類似。
27	A	d—4	I	曽谷式	鉢	口縁	口縁部帯2条の横線、頸部縄文帯は単節LRの横回転。
28	A	d—2	II	曽谷式	鉢	口縁	口縁部帯2条の横線、頸部に斜行磨り消し帯を表出。

第2表　第Ⅳ—8図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—4	I	曽谷式	浅鉢	口縁	口唇部直下に2条の横線、体部は上向き弧線文。
2	A	b—4	I	曽谷式	浅鉢	口縁	口縁部肥厚面に刻文、直下に2条の横線、頸部は帯状縄文。
3	A	a—4	I	曽谷式	深鉢	口縁	口縁部帯の3条の横線縄文地に施文、口唇部直下は磨り消す。
4	A	c—4	焼土	曽谷式	深鉢	口縁	波状口縁、口唇部直下に刻文帯、以下は巾広い2条の横線、頸部は帯状縄文。
5	C	ォ—2	／	曽谷式	深鉢	口縁	緩い波状口縁、波底部に突起、口唇部に接し大型刻文、直下の3条の横線間は刻文、頸部は併行する弧線の磨り消し縄文帯。
6	A	c—2	III	曽谷式	深鉢	口縁	形態は「ソロバン玉」型、口縁部と張出部に刻文帯、肩部は帯状縄文。
7	A	d—4	I	曽谷式	深鉢	口縁	波状口縁、口縁部帯の構成はNo.6に類似。
8	A	c—4	I	曽谷式	深鉢	口縁	口縁部折り返し面に刻文、やや間を置いた下部に3条の横線、頸部は帯状縄文。
9	C	／	表採	曽谷式	深鉢	口縁	口縁部帯2条の隆起帯に刻文、頸部の縄文は単節RL。
10	A	c—4	I	曽谷式	深鉢	口縁	上例と同一類型、小型の土器。
11	A	d—2	III	曽谷式	台付土器	脚	併行する下端の横線が隆起帯を区画し文様帯を構成。
12	A	b—4	I	曽谷式	台付土器	脚	脚部文様帯は等間隔の4条の横線、区画帯に円形刺突文。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
13	A	c—5	包含層	**曽谷式**	平縁深鉢	頸部～胴	頸部は帯状縄文、胴部は入り組み弧線文、括れ部の大型三角刻文は下部からの刺突、沈線は何れも不規則。

第3表　第Ⅳ—9図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	c—4	焼土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口唇部に接する隆起帯上と頸部にRLの縄文、沈線間刻文が頸部に同居、斜位の瘤剝落。
2	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	前例に類似するも口縁部緩い波状、頸部は帯状縄文。
3	A	d—4	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部と頸部が同一構造体、瘤は高く、頸部に接する区画沈線帯は表出されない。
4	A	d—5	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	同上、口縁部帯の沈線間削りの手法、未発達。
5	A	d—5	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	手法上、上例に似て、縄文帯は明瞭に隆起化していない。
6	A	a—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.3に類似、やや小型。
7	A	d—5	III	**安行1式**	鉢？	口縁	No.3、4に類似、縄文LR、区画沈線は細い。
8	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	区画沈線僅かに弧状、棒状の瘤頸部に亘る、器面風化。
9	A	c—4	I	**安行1式**	鉢？	口縁	口縁部の横線が3帯を区画、中央を磨り消し上下に縄文帯、頸部にも不規則な縄文。
10	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部の巾広い隆起帯上に、併行する2条の横線、瘤は斜位、良く研磨した頸部とは、太い沈線で区画。
11	A	c—4	焼土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯は併行する4条の横線、頸部に弧線文、瘤は剝落。
12	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	胴	本例はNo.16、17、20、23と同一個体か、帯状又は枠状に区画、枠状文のみが沈線を伴う、他はヘラ状工具による押し引き状磨り消し帯。
13	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	口縁	瘤を介して枠状文を描出、区画内を磨り消す。縄文は無節L。
14	A	d—4	I	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部文様帯を枠状文で構成。
15	A	d—2	表土	**安行1式**	鉢	口縁	通常とは全く逆、枠状文の区画内に充填縄文。
16	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	胴	No.12に類似。
17	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	胴	同上。
18	A	b—4	I	**安行1式**	鉢？	口縁	No.13と同一個体。
19	A	d—4	I	**安行1式**	鉢？	口縁	No.4に類似。
20	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	胴	No.12に類似、胴上部無節Lの縄文帯。
21	A	d—4	I	**安行1式**	鉢？	口縁	突起下端に瘤、中央部に爪型の刺突、縄文は無節L。
22	A	d—2	II	**安行1式**	深鉢	胴	入り組み弧線文を縦位に描出。器厚6㎜。
23	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	胴	No.12に類似。
24	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	頸部	胴部との境に三角刻文を併列、頸部は変形化した弧線文、区画内に縄文RLを充填。

第4表　第Ⅳ—10図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯の横線が、2帯の縄文帯を作出、まだ隆起化の手法は未発達、頸部は弧線文、胎土に貝の粉末混入。
2	A	b—5	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	口縁部帯縄文地に4条の横線、頸部下端のスリット間は5条を単位とする上向き弧線文、頸部上半とスリット区画内を磨り消す、口縁部肥厚外反、精巧な作出、口径20㎝。
3	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	頸部～胴	頸部に上向き弧線文、胴部は入組弧線文、括れ部乱雑な刻文を併列、L＝－36。
4	A	b—4	I	**安行1式**	鉢	口縁	器面風化、小型の土器。
5	A	d—4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	口縁部2帯の隆起帯縄文、波状口縁深鉢の波底部に相当。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
6	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	口縁部帯を3段帯で構成する波状口縁深鉢、隆起帯の作出丸棒状工具による押し引き、波頂部と波底部に連結した瘤。
7	A	c—5	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	口縁部帯巾広く構成、隆起帯作出にヘラ削りの技法未発達。
8	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、区画沈線施文前後に縄文は2度施文。
9	A	a—4		**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、口縁部帯に異常に高い瘤、頸部に弧線文。
10	A	d—2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、口縁部内弯屈曲、内面に稜。
11	A	d—2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	器形砲弾型、直上する口縁部先端で外反、縄文2度の施文。
12	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、口縁部肥厚、内面に稜。
13	C	オ—2		**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、口縁部隆起帯上に瘤、頸部に弧線文。
14	A	d—2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、器面風化、胎土に土器砕粒混入。
15	A	d—3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.7の類型、口縁部帯に高い瘤、頸部に弧線文、器面風化。
16	C	カ		**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.7の類型、2帯の縄文で口縁部帯を構成。

第5表　第Ⅳ—11図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b—4	Ⅱ	**安行1式**	鉢	口　縁	隆起帯縄文、深い押し引きの凹線で作出。
2	A	d—3	Ⅰ	**安行1式**	鉢	口　縁	緩い波状口縁切り込み状の波底部直下に2個連立の瘤、隆起帯作出、押引きの技法、胎土に貝の微粒。
3	A	b—5	Ⅰ	**安行1式**	台付鉢	口　縁	口縁部は帯状縄文、体部に刷毛目状刷痕、内面研磨。
4	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	台付脚	接　面	No.3、6、9の文様構成に共通、縄文帯に対弧文、体部との境みみず腫れ状に隆起、内面処理は粗雑。
5	A	c—5	表　土	**安行1式**	台付浅鉢	口縁～体	口径27cm、口縁部は区画沈線の縄文帯、低い瘤、内外面研磨。
	A	c—4	Ⅰ				
6	A	c—4	Ⅰ	**安行1式**	台付鉢	口縁～縁	縄文帯の隆起化、区画沈線もなく、中央部で僅かに凹む。
7	A	d—3	Ⅱ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	口縁部2帯の縄文帯、内外面とも研磨。
8	A	c—5	包含層	**安行1式**	鉢	口　縁	口縁部の縄文帯に区画沈線、磨り消し不充分。
9	A	c—4	Ⅱ	**安行1式**	鉢	口　縁	No.6と同一個体、体部に刷毛目状刷痕。
10	A	d—3	Ⅱ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	口縁部2帯の縄文帯、内面をそぎ取り、稜を作出。
11	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	小型鉢	口　縁	口縁部外面に折返し、直下をヘラ状工具で押圧、体部も同具の押し引きで器面調整、縄文無節L。
12	A	d—2	Ⅲ	**安行1式**	小型鉢	口　縁	折返し口縁、縦長の瘤、内面処理は横ナデ。
13	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～胴	口縁部帯の構成頸部文様と相関し、まだ未分化の段階、相対的に巾を拡げ、区画沈線間にヘラ削りの手法が出現する、頸部は弧線文、括れ部に沈線を伴う刻文が併列、口縁部の瘤は6単位、縄文は単節RLの2度施文である。口径23cm、器厚8mm。
14	A	b—2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	頸部～胴	No.13の類型、充填縄文2度の重複施文。
15	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	頸部～胴	No.13の類型、同上。
16	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	頸部～胴	No.13の類型、括れ部の屈曲が激しい。
17	A	d—2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.13の類型、単節RLの縄文、重複施文。
18	A	b—5	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.13の類型、同上、口縁部外反肥厚。
19	C	カ	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.13の類型、同上、区画沈線太く鮮明。
20	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	波頂部	波頂先端部が破損、隆起帯刻文2段帯、区画沈線は枠状文、瘤に縦位截痕、頸部に組合せ弧線文を表出する。高井東系。

第6表　第Ⅳ—12図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部文様帯未分化の儘で頸部文様帯と連動、区画沈線、沈線間削りなど幾分整一的様相を帯びてくる。内面横ナデ、稜を作出、安行1式全般を通じ普遍的な類型。
2	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、同上。
3	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部屈曲、頸部の弧線文、瘤と無関係。
4	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部丸味をもって肥厚。
5	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線が不明瞭、口縁部帯の瘤が剝落。
6	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面に折り返しをとり、稜を作出。
7	A	c—2	II	**安行1式**	鉢	口縁	外反する口縁部広い縄文帯、縦位の併行線をはさみ対弧文をを描出、体部には刷毛目状刷痕。
8	A	d—4	I	**安行1式**	鉢	口縁	前例に類似、胴部に垂直の条線を施す。
9	A	d—4	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類似、括れ部に三角刻文、胴部に入組弧文。
10	A	c—4	I	**安行1式**	波状深鉢	口頸	口縁部を4段帯の隆起帯縄文で構成する波状口縁深鉢の波頂部に亘る破片、頸部に斜条線を交互に施し、三角帯中央部をスリットで2分し、区画内を磨り消す、括れ部に三角刻文を併列、口縁部内面を断面三角形に作出し、高い稜とする。
11	A	c—4	II	**安行1式**	波状深鉢	胴	No.10の類型、括れ部に三角刻文を併列、胴部は山形の斜条線、胎土に土器の砕粒。
12	A	d—4	／	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部縄文帯直下の凹帯に鮮明な横線を施し、体部と区画。
13	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、充填縄文は2度の重ね施文。
14	A	a—4	I	**安行1式**	波状深鉢	胴	No.10の類型、胴部の厚さ7㎜。
15	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口縁部内面に稜、外面に刻文を施す、器表面は未調整。
16	A	b—4	I	**安行1式**	小型深鉢	口縁～底	口縁部帯約¼を欠く、口径13cm、器高13.6cm、底径1.9cm、平縁の口縁部が外反し、頸部で一亘括れ、胴上部で幾分膨らみ小さい底部へと移行、帯状縄文は区画沈線を伴わない、内面全域に炭化物が付着、器厚頸部で7㎜。
17	A	d—3	I	**安行1式**	瓢？	胴	弧線文を対向させ、楕円形をなす各接点に瘤を配置、沈線に区画された胴下半部にも縄文を施文。

第7表　第Ⅳ—13図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—3	II	**曽谷式**	瓢	口縁	口縁部内弯屈曲、断面は鋭角、直下に刻文帯、円孔有り、頸部は帯状縄文。
2	A	c—5	表土	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部直下に横線、頸部は帯状縄文となる。
3	A	c—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部直下に沈線間刻文、頸部は帯状縄文。
4	A	d—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部の縄文帯幾分隆起、直下は沈線間刻文、頸部を帯状に区画、無文帯と縄文帯を交互に配置、円孔有り。
5	A	d—5	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、頸部は無文帯を置き、以下沈線多条の縄文帯。
6	A	d—3	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部縄文帯沈線で2分、頸部は沈線多条の縄文帯。
7	A	d—4	表土	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.4に類似、器厚6㎜。
8	A	d—2	III	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、肥厚した口縁部を研磨、直下に2帯の沈線間刻文を併列、巾狭い頸部の縄文帯は刻文帯と連動、以下無文帯と縄文帯の交互施文。
9	A	d—3	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.8に類似、区画沈線は均一的。
10	A	b—2	III	**安行1式**	瓢	胴	No.1の類型、磨り消し無文帯をはさんで弧線文を抱き合わせ、各弧線が交わ各弧線が交わる接点に瘤を貼付。
11	A	b—4	II	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、沈線区画は未熟、帯縄文は未隆起。
12	A	b—4	I	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、括れ部に三角刻文併列。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
13	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	口縁部が肥厚し強く外反、口唇部直下に荒い刻文帯、頭部はほぼ垂直の条線を施す。以下この台付鉢部に限り内面処理はすべて滑達、器厚口縁部で11㎜、頸部は7㎜。
14	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、刻文、条線とも不規則。
15	A	d－2	Ⅱ	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、口縁部は肥厚せず、外反は急。
16	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、口縁部が幾分肥厚し外反、器面は風化。
17	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、口縁部が僅かに肥厚、外反する。
18	A	c－3	表　土	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、刻文の配列、口唇部帯よりやや下がる。器面の風化特に激しい。
19	A	d－4	表　土	**安行1式**	台付鉢部	口　　頸	No.13の類型、刻文は不規則、条線垂直、器面風化。
20	A	b－5	Ⅱ	**安行1式**	台付鉢部	口縁～体	No.13の類型、口縁部弧状に弯曲し外反、体部境界張り出し部から緩やかに底部に移行し、台付土器の鉢部を形成、頸部下端には2条の沈線で区画された無文帯が、張り出し部の刻文と併列し、体部との堺を画す。体部は弧線の集合体、頸部はほぼ垂直の条線、口唇部直下の刻文と体部境界の刻文は一致し、口縁部の肥厚が増す。

第8表　第Ⅳ—14図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	口縁部帯直下の無文帯によって口縁部帯と頸部が完全に分離する。安行1式後半、この類型の文様帯構成の一般的特徴である。器面調整は内外面ともヘラ磨き。
2	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、外反弯曲著しい。口縁部断面三角形。
3	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、縄文帯の巾が狭く、瘤は斜位、口径19cm。
4	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、口縁部緩い波状、波底部に縦連結の2個の瘤、口唇部は平担。
5	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、瘤は斜位、文様分離帯が巾を持つ。
6	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢		No.1の類型、No.4に類似、頸部縄文帯を分離する横線。
7	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢		No.1の類型、口唇部に接する縄文帯のみが隆起する。
8	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、口縁部帯のみ深いヘラ削り、頸部は弧線文、括れ部に沈線間刻文。
9	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、口頸部を構成する帯縄文間は巾を持つ、区画沈線は不鮮明、貼付された瘤は低い。
10	A	c－2	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、相対的に口縁部帯が巾を持つ、焼きが甘い。
11	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、器表面の処理が不充分、細かい亀裂が残る。
12	A	d－5	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	口縁部外面に肥厚、直上気味に外反、2個連結の瘤。
13	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、No.10に類似、器厚頸部で6㎜。
14	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　頸	No.1の類型、頸部に新たな縄文帯を構成、弧線文が尚下端に描かれる場合と帯縄文の二者がある。本例はNo.1の資料より後出。
15	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　縁	No.1の類型、巾広く作出された口縁部内弯、文様帯の権成にも器形に対応した変化が生じ、口唇部帯に接する縄文帯を除き、各帯は極度に巾をつめ相対的に無文帯が拡張する。前例より尚後出。
16	A	d－5	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　　縁	No.1に類型、No.11に類似。
17	A	b－5	表　土	**安行1式**	平縁深鉢	口　　縁	No.1に類型、外面に肥厚する口縁部、文様帯を巾広く構成。

第9表　第Ⅳ—15図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	口縁部帯相対的に巾広く作出、貼付する瘤は低い。
2	A	c—2	III	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面にナゾリ、稜を作出、器面調整棒状工具の横ナデ。
3	A	c—2	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.2に類似。
4	C	カ	包含層	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部の肥厚方形に作出、瘤は低い。
5	A	d—2	III	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯巾を持ち、区画沈線は太く鮮明。
6	A	d—3	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、全体に白く変色。
7	A	d—5	黒色包含層	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯に低い瘤。
8	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面に稜、斜位の瘤が付く。
9	A	d—5	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口唇部帯に接し小型の瘤。
10	A	d—5	表採	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線が鮮明、器面の調整も良好。
11	A	c—2	表土	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯に細長い瘤。
12	A	d—2	III	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口唇部帯直下の沈線、縄文帯を隆起化する、瘤は剝落。
13	A	c—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯に長い瘤、ヘラ状工具の研磨過剰により沈線消滅、再度施文。
14	A	d—5	黒色包含層	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.11に類似。
15	A	c—2	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、瘤が付く。
16	A	c—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、明瞭なヘラ削り。
17	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面を抉り、高い稜を作出。
18	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、区画範囲を超えた磨り消しを施す。
19	A	b—4	表土	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、口縁部丸味をもって肥厚。
20	A	d—4	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部緩やかに弯曲、その下半部に縄文施文、低い瘤が付く。
21	A	d—4	I	安行1式	平縁深鉢	胴	No.1の類型、沈線間刻文と入組弧線文を表出。
22	C	ア	表採採	安行1式	平縁深鉢	頸	No.1の類型、沈線乱調、単節RLの縄文は二重施文。
23	C	ア、イ	包含層	安行1式	平縁深鉢	胴	No.1の類型、No.21に類似、但し縄文は単節LR。
24	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	頸～胴	No.1の類型、括れ部を挟む上下の破片、この類型の典型。
25	A	d—3	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、丸い瘤が口縁部上端に付く。
26	A	a—4	表土	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.19に類似。
27	C	ア	表採	安行1式	平縁深鉢	頸	No.1の類型、口縁部下端の帯状縄文と頸部の弧線文。
28	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	胴	No.1の類型、頸部に弧線文、胴部に入組弧線文、括れ部には沈線を伴う三角刻文を併列、縄文は単節RL、器厚6㎜。

第10表　第Ⅳ—16図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—2	表土	安行1式	平縁深鉢	口縁	口縁部外反肥厚、内面に稜、口縁部帯2帯の縄文、瘤は2帯に亘り、隆起帯間ヘラ削りの手法が顕在化する。
2	A	d—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	内弯種、(胴部文様帯を構成しない内弯平縁深鉢。) 口縁部帯の2個連結の瘤は下端が剝落。
3	A	d—4	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、口縁部帯3段帯の隆起帯縄文、2個の瘤。
4	A	d—5	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.1に類似。
5	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線を部分的に磨り消す。
6	A	c—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、器面にヘラ状工具の押し引き。
7	A	b—2	III	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、全体的に器厚は薄い、頸部で4㎜。
8	A	b—2	III	安行1式	鉢	口縁	口縁部緩波状、上位の瘤が口唇部を巻く、区画沈線概ね消滅。
9	A	c—2	III	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、口縁部帯3帯の隆起帯縄文、2個の瘤は独立、瘤の懐の弧文が区画沈線を連繋し枠状文を表出。
10	A	d—5	表土	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、部分的に区画沈線を磨り消す。
11	A	d—4	／	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、No.9に類似、縦長の瘤3帯に亘る。区画沈線瘤を

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
							起点に左右が不一致、器厚4㎜。
12	A	a—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線太く鮮明。
13	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片。
14	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、器表面が風化。
15	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、口縁部緩やかな波状、2個の瘤が付く。
16	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片。
17	A	c—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は明瞭。
18	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に瘤が付く。
19	A	c—2	Ⅱ	安行1式	波状深鉢	口　縁	波底部の破片、口縁部の隆起帯上に偏平な瘤を2個連結する。
20	A	c—4	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、器面調整は良好。
21	A	b—2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は明確、沈線間削りの技法も端正。
22	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に低い瘤が付く。
23	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は明確。
24	A	d—2	Ⅲ	安行1式	鉢	口　縁	区画沈線及び縄文とも磨り消し、再度施文区画する。
25	A	b—5	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、口縁部帯巾広く、内面に稜を作出。
26	A	d—4	Ⅰ	安行1式	鉢	口　縁	No.2の類型、3条の隆起帯縄文に2個の瘤。
27	A	d—4	Ⅰ	安行1式	鉢	口　縁	No.2の類型、区画沈線は明確。
28	A	a—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、器面は風化、区画沈線は多条。
29	A	c—4	表　土	安行1式	鉢	口　縁	No.2の類型、全体に器厚を薄く作出。
30	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、施された沈線は明確、器面調整も良好。
31	A	b—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯を巾広く作出、磨り消し不充分。
32	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部の縄文帯が剝落、区画沈線は明確。

第11表　第Ⅳ—17図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	a—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	2帯の縄文で口縁部帯を構成し、瘤はその2帯に亘って貼付する。口縁部の肥厚内外にとり、内面に稜を作出、器厚6㎜。
2	A	a—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の瘤は低く、区画沈線も不揃い。
3	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、器表面はヘラ削り、内面は横ナデ、瘤は低い。
4	A	c—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、内面に鋭い稜を作出、小破片。
5	A	c—5	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、沈線間ヘラ削り、縄文はRL。
6	A	d—3	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	内弯種、口縁部の肥厚外面にとる。瘤は連立するようである。
7	A	d—2	包含層	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に瘤が付く、器面は両面ともヘラ状工具の横ナデ、多条沈線は部分的に磨り消されている。
8	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部に瘤が付く、全体に丁寧な作出。
9	A	d—2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部直下の区画沈線が省略。
10	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線を省略、瘤は斜位につく。
11	A	d—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.6の類型、口縁部帯をヘラ削りによって丁寧に作出するが、区画沈線まで磨り消す、口縁部帯の瘤は連立する。
12	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、縦長の低い瘤が付く。
13	A	b—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に瘤が付く、沈線間はヘラ削り。
14	A	d—3	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は弱々しく低い瘤が付く。
15	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部を鋭角に、内面に稜を作出、区画沈線は太く鮮明。
16	A	c—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、瘤は斜位に付き、区画内は良く研磨する。
17	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、口縁部帯に瘤が付く。
18	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、沈線区画内のナデが強く低い瘤も半ば潰れる。
19	A	d—4	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、口縁部帯に瘤が付く。
20	A	d—3	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に小型で粗雑な瘤が付く、区画内をヘラ削り、ヘラ磨き、区画沈線は消滅している。
21	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、全工程とも入念、良好な作出。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
22	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、器面調整は内外面とも粗雑、低い瘤が付く。
23	A	c—2	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線は明瞭、口縁部帯に瘤が付く。
24	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.6の類型、口縁部帯を巾広く作出、縦長の瘤が付く。
25	A	d—5	I	安行1式	平縁深鉢	頸～胴	No.1の類型、頸部の破片、器面調整は良好。
26	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	頸～胴	No.1の類型、括れ部の破片、部分的に磨消し洩れがある。

第12表　第Ⅳ—18図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	c—2	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	内弯種、小破片、瘤が付く、器面調整は内外面とも丁寧。
2	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁	縄文帯に瘤、内面に稜を作出、区画内はヘラ削り、ヘラ磨き。
3	A	d—3	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、器表面に凸凹目立ち、区画沈線を磨り消す。
4	A	d—4	／	安行1式	平縁深鉢	胴	No.2の類型、括れ部に隆起帯縄文、充填縄文は重複。
5	A	d—2	II	安行1式	平縁深鉢	胴	No.2の類型、括れ部に沈線区画の無文帯をはさみ上下に隆起帯縄文を作出、胴部の弧線文には斜条線を充填。
6	A	b—4	I	安行1式	平縁深鉢	頸	No.2の類型、頸部の弧線文が表出された破片。
7	A	d—3	II	安行1式	甕	胴	胴部に入組弧線文、括れ部の縄文帯上に三角刻文を併列。
8	A	c—2	II	安行1式	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、口縁部は3帯の縄文帯で構成、粗雑な作出。
9	A	d—4	I	安行1式	平縁深鉢	頸	No.2の類型、口縁部下端と頸部に亘る破片。
10	A	d—4	I	安行1式	平縁深鉢	胴	No.2の類型、No.4と同一個体。
11	A	d—4	表土	安行1式	平縁深鉢	胴	No.2の類型、器面が可成り風化。
12	A	d—3	I	安行1式	平縁深鉢	胴	No.2の類型、乱雑な入組弧線文に充填する縄文も乱調。
13	A	d—4	I	安行1式	甕	胴	No.7の類型、括れ部に隆起帯縄文を伴う刻文が併列、縄文帯には正円の瘤が付き胴部には入組弧線文を表出。
14	A	d—3	I	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚、端正な隆起帯縄文を作出。
15	A	b—4	I	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、全体に薄く作出。区画沈線は枠状文を描く。
16	C	ア、イ	包含層	安行1式	甕	口縁	安行1式後半、口縁部肥厚を利用し、刻文、沈線の活用が縄文帯の隆起化を一層捉進する。本例はその初期の段階、口縁部縄文帯を区画する沈線上に刻文を施すが隆起化はそれ程目立ない。
17	A	d—5	I	安行1式	甕	口縁	口縁部縄文帯の屈曲部に刻文を施し隆起化を果す、頸部の縄文帯は隆起化しない、頸部上端に径1.8cmの円孔を穿つ。
18	A	d—4	／	安行1式	甕	口縁	口縁部は隆起帯縄文、各縄文帯直下の刻文は隆起化を計る。
19	A	d—4	I	安行1式	甕	口縁	口縁部の区画沈線を磨り消す、内面に深いナゾリ。
20	A	b—5	I	安行1式	甕	口縁	基本的には前例に似るも、本例は沈線間刻文となる。
21	A	d—2	III	安行1式	甕	口縁	口縁部帯の区画沈線が磨り消され、隆起帯を刻文が区画する。
22	A	d—3	表土	安行1式	甕	口縁	口縁部帯の構成はNo.18に、形態はNo.20に類似する。
23	A	c—2	II	安行1式	甕	口縁	No.21と同一個体。
24	A	c—2	II	安行1式	甕	口縁	No.21と同一個体。

第13表　第Ⅳ—19図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—4	表土	安行1式	甕	口縁	口縁部の隆起帯を刻文で区画するが、乱れた沈線も共に施す。内面は細い丸棒状の横ナデ。
2	A	d—4	I	安行1式	甕	口縁	No.1の類型、口縁部屈曲、肥厚を増す、刻文を縄文帯直下に施し、以下巾広い磨り消し帯を作出。
3	A	b—4	I	安行1式	甕	口縁	No.1の類型、口縁部帯を2帯の縄文で構成、縄文帯直下の刻文が口頸部の弯曲を生かし隆起化する、頸部に弧線文を表出。
4	A	c—2	III	安行1式	甕	口縁	No.1の類型、No.1に類似、器表面の調整は粗雑。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
5	A	b－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.2に類似、区画沈線は深く鋭い。
6	A	d－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、区画沈線は磨り消されている。
7	A	a－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、胎土に砂粒が混る、器面調整良好。
8	A	c－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、同上、刻文をまばらに施文、区画沈線は明確。
9	A	c－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、先工程の区画沈線を省略、縄文帯を刻文が区画。
10	A	b－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、但し、口縁部が波状を形成。
11	A	b－4	表　土	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、全体に粗雑な作出。
12	A	c－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、但し、内弯傾斜が急、胎土に土器の砕粒が混る。
13	A	d－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の構成No.9に類似、頸部に襷掛け入り組み弧線文を表出、器面調整は粗雑、器厚頸部で5㎜。
14	A	c－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.12と同一個体。
15	A	c－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.12と同一個体、口径21cmを計測する。
16	A	d－4	表　土 Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部の縄文帯間に刻文を併列し、頸部との境に沈線を区画する。
17	A	d－5	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、内弯傾斜を深くもつ、口径25cmを計測。
18	A	d－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、小破片、器面調整は良好。
19	A	c－5	表／土	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、広い口縁部の縄文帯を沈線を伴う刻文で2分。
20	A	d－3	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の構成No.17に類似。
21	A	c－2	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、器表面が風化。
22	A	c－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の区画沈線上に刻文を重ねて施文。
23	A	d－4	／	安行1式	平縁深鉢	口　縁	内弯する口縁部帯の棒状の瘤に刻みを施す。表面½が剝落。
24	A	b－5	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯下端の縄文帯は沈線で区画する。
25	A	c－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口唇部を鋭角に作出、内面に稜をもつ。
26	A	d－5	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の構成No.16に類似、口縁部肥厚。
27	A	b－2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	口唇部に接する縄文帯に正円の瘤が付く、口縁部縄文帯を沈線が区画、先工程でヘラ削り、右下端が剝落。
28	A	d－4	Ⅰ	安行1式	甕	胴	No.1の類型、括れ部に縄文帯を伴う刻文を併列、瘤が付く。
29	A	b－4	／	安行1式	甕	胴	No.1の類型、括れ部に正円の瘤を貼付した隆起帯縄文を作出、その上下に刻文を併列する。胴部は沈線区画の縄文帯。 L＝－39.4。

第14表　第Ⅳ—20図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－3	Ⅱ	安行1式	甕	口縁～体	口縁部帯の構成3段帯の縄文、体部は隆起化しない帯状縄文。
2	A	c－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	内弯種、口縁部文様帯の連動で胴部文様帯は構成しない。
3	A	d－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯は2帯の隆起帯縄文、内面に稜を作出。
4	A	d－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、肥厚する口縁部が先端で屈曲、各縄文帯に瘤。
5	A	d－4	／	安行1式	注口付？	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、左方下端に注口部？。
6	A	b－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
7	A	c－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、縄文帯間を深く彫り込み、細刻文を施す。
8	A	d－5	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯は2帯の隆起帯縄文、頸部は帯状縄文、隆起帯間に径7㎜の穿孔。
9	A	d－3	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口径19cm、器厚頸部で3㎜。
10	A	b－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部外面に肥厚、区画沈線を磨り消す。
11	C	カ		安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.9に類似、部分的に区画沈線を磨り消す。
12	A	d－2	Ⅲ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の縄文を隆起化する。頸部に弧線文。
13	A	c－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、No.2に類似。
14	A	d－2	Ⅱ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、口縁部内面を抉り稜を作出。
15	A	d－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、区画沈線は太く鮮明。
16	A	d－4	Ⅰ	安行1式	甕	口　縁	No.1の類型、No.8に類似、小破片。
17	A	c－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.2の類型、口縁部を2帯の隆起帯縄文で構成、瘤が付く。頸

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
							部に横位の条線を施す。
18	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.2の類型、口縁部帯を構成する縄文帯直下に太い沈線を施して縄文帯の隆起化を計る。
19	A	d—2	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、太い沈線と縄文帯が相乗する口縁部帯を作出。
20	A	b—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、隆起帯縄文の作出同上する。口頸部に亘り3段帯を構成、縄文は撚りの細い単節ＬＲ。器厚頸部で5㎜。
21	A	d—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.15に類似、端正に作出。
22	A	b—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部の内弯傾斜が強い。縄文は細いＬＲ。
23	A	d—2	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.8に類似するも区画沈線は深く切り込む。
24	A	c—4	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、形態はNo.10に類似、沈線は太く鮮明。
25	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.8に類似、但し沈線は太い。
26	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	口縁 縁	No.1の類型、口縁部屈曲、口唇部を鋭角に、内面を深く抉り稜を作出。
27	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.25に類似。
28	A	d—3	I	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、形態No.26に似るも内面に鋭い稜を作出。
29	A	c—4	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、No.27に似るも沈線は多条、頸部に弧線文を表出する。端正な作出。

第15表　第Ⅳ—21図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—4	I	**安行1式**	瓢	頸	括れ部に刻文のみを併列、頸部に襷掛け入り組み弧線文、胴部に弧線の一部を細い沈線で表出、器厚5㎜。安行1式前半。
2	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、括れ部は沈線区画を省略した隆起状縄文帯の直下に刻文を併列、頸部は襷掛け入り組み弧線文、胴部には入り組み弧線文が展開、磨り消し不充分、充填縄文は単節ＲＬ。
3	A	d—3	II	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、頸部に帯状縄文、胴部に横の条線、共にその一部が磨り消し洩れで残る。括れ部の縄文帯に刻文を軽く施す。
4	A	d—5	I	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、頸部は帯状縄文、胴部に上向き弧線文、括れ部には縄文帯を伴う沈線区画の刻文が併列する。
5	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、頸部、括れ部の縄文帯共隆起化、共に截痕ある瘤を貼付、括れ部の刻文は縄文帯直下に併列、胴部が弯曲する張り出し部の下端に沈線区画の無文帯を作出、上向き弧線文はその無文帯にのせ、弧線の交わる中央部に耳状の瘤を貼付。
6	A	d—3	I	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、No.4に類似。
7	A	d—4	／	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、上例に類似、但し縄文帯は隆起化する。
8	A	d—3	II	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、No.4に類似、但し縄文帯に偏平な瘤が付く。
9	A	d—3	II	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、No.8と同一個体。
10	A	d—4	I	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、口頸部帯状縄文、2個併列の瘤が付く。
11	A	d—3	I	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、縄文帯をはさみ上向き弧線文と下向き弧線が重畳、区画沈線、縄文施文とも乱雑。
12	A	c—2	II	**安行1式**	瓢	胴	No.1の類型、胴部に弧線文、括れ部に沈線間刻文を表出。
13	A	d—4	I	**安行1式**	瓢	頸～胴	No.1の類型、文様構成は上例に共通。
14	A	d—3	I	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、口縁部帯は隆起帯縄文、頸部に緩い弧線文。
15	A	b—4	I	**安行1式**	瓢	頸	No.1の類型、上例に類似、但し内弯傾斜が増す。
16	A	b—4	II	**安行1式**	瓢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は隆起帯縄文、内面に稜を作出。
17	A	c—2	II	**安行1式**	台付・鉢	口縁	巾広く持つ外反する口縁部帯に、対面する乱れた弧文を表出。
18	A	d—3	I	**安行1式**	台付・鉢	口縁	No.17の類型、上例に類似するもやや小型。
19	A	c—2	III	**安行1式**	台付・鉢	口縁	No.17の類型、縄文帯直下に太い沈線を区画、安行1式後半期に

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
							普遍化する手法。
20	A	b－5	Ⅰ Ⅲ	**安行1式**	台付・脚		No.17の類型、前出例の鉢部に接続する脚部、通常脚部の内面処理は殆んど行わない。
21	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	台付・脚		No.17の類型、同上、鉢部との接続部を含む。
22	A	c－2	Ⅱ	**安行1式**	台付・鉢	口　縁	No.17の類型、No.19に類似。
23	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	接続部	No.17に類似、鉢部との接続部に相当、鉢部内面は研磨、脚部内面は成形時の儘殆んど加工なし。縄文は単節ＲＬ。

第16表　第Ⅳ－22図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－4	Ⅱ	**安行1式**	台付土器	口　頸	肥厚した口縁部外面を刻文帯とする。体部との境も沈線区画の無文帯をはさみ刻文帯を併列、頸部は垂直の条線、体部には弧線の集合条線を施す。口径27.5cm。
2	A	d－4	／	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、No.1と同一個体。
3	A	c－2	Ⅲ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚、外反弯曲、条線は左下り。
4	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、区画沈線の刻文帯、条線は垂直。
5	A	d－4	／	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、No.1と同一個体。
6	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、No.1と同一個体。
7	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、極度に外反する口縁部直下に強いナゾリ、条線は右下り。
8	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、隆起帯状に肥厚した口縁部の外面を刻文帯とする。条線は垂直、太い沈線の直下に細刻文を施す。
9	A	c－2	Ⅲ	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、明確な区画沈線による刻文帯が定着、多段化された刻文帯を構成し頸部下端を占有する。安行1式後半なかば頃この刻文帯に瘤を加飾する。本例及び次例である。
10	A	a－4	／	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、口頸部が直上し、口縁部の極度の肥厚は外面に突出、刻文は端正、研磨は内外面に及ぶ。
11	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	体　部	No.1の類型、No.1と同一個体。
12	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	体　部	No.1の類型、No.1と同一個体。
13	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	体　部	No.1の類型、No.1と同一個体。
14	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	体　部	No.1の類型、No.1と同一個体。
15	A	d－4	表　土	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、3段の隆起帯縄文と帯状縄文で構成する脚部。
16	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、区画沈線による縄文帯、体部との境は無文帯。
17	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、2帯の隆起帯縄文と帯状縄文、形態は球状。
18	A	c－2	Ⅱ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、接面部肥厚、表面に縄文を施文、他は磨り消す。
19	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、接面部の内外面とも肥厚、区画沈線の縄文帯。
20	A	b－2	Ⅲ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、No.16に類似。
21	C	ア，イ	包含層	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、肥厚した接面部が「く」の字状に屈曲。
22	A	a－3	表　土	**安行1式**	台付土器	口　頸	No.1の類型、口唇部直下に刻文帯、条線は垂直、頸部に補修孔、その上端に細密刻文を施文。
23	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、No.18に類似、器面の縄文は磨り消す。
24	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	台付土器	脚	No.1の類型、器面は不規則な沈線と縄文帯で構成。

第17表　第Ⅳ－23図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　頸	口縁部帯は3段の隆起帯上に刻文を施して構成、区画沈線は枠状文を描く、波頂部は円柱状、中央部に円孔を穿ち、上下に大小の瘤を貼付、頸部に弧線文を組合せて表出、括れ部の隆起帯縄文間には三角刻文を併列、高井東系、Ｌ＝－39。
2	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1と同一個体、棒状の瘤は半円状に貼付。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
3	A	b－4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.1と同一個体。
4	A	d－2	III	安行1式	波状深鉢	口縁	口縁部帯を4段の隆起帯縄文で構成する波頂部破片。独立した瘤が3個付く、隆起帯作出は押し引きとヘラ削りを併用。
5	A	b－5	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、同上。
6	A	d－4	／	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、波底部口縁部帯に2個連結の瘤が付く、区画沈線は、縄文帯と一致しない、頸部な斜条線を綾杉状に施文。
7	A	d－4	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、同上、但し頸部の斜条線下に単節ＲＬの、縄文が残り、括れ部には隆起帯縄文を作出する。
8	A	c－2	III	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、器面調整は内外面ともヘラ状工具のナデ。
9	A	d－4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、No.5に類似。
10	A	d－4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、口縁部帯は弧状をなした4段帯の隆起帯縄文、頸部は右下りの条線、スリットを施す。
11	A	d－3	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.4の類型、波底部に2個連結の瘤が斜位に付く、頸部に一般的な斜条線がなく、括れ部の縄文帯が接続する。
12	A	c－4	I	安行1式	波状深鉢	頸～胴	No.4の類型、波状口縁深鉢の波底部に相当する頸部から胴部に亘る破片、括れ部には沈線区画の無文帯をはさみ隆起帯縄文を作出、その直下に刻文を併列、胴部は入り組み弧線文、頸部には綾杉状の斜条線を施す。

第18表　第Ⅳ－24図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	a－2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	口縁部帯を4段の隆起帯縄文で構成、波頂先端部から下垂する4個の瘤を貼付、中間の2個が剝落、隆起帯作出にヘラ削り。
2	A	b－5	／	安行1式	波状深鉢	頸	No.1の類型、波底部の破片、上下両端に口縁部、括れ部の隆起帯縄文、頸部の斜条線上にスリットを施す。
3	A	d－2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、4段帯で構成する口縁部は急激な波をもち、緩く内弯して作出、波頂天中部を円形に押し潰し、下垂する瘤は棒状の粘土を切り込み5個が連立する。沈線は多条。
4	A	d－2	III	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、括れ部は隆起帯縄文と直下の三角刻文で構成。
5	A	d－3	包含層	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯の区画沈線に弧文が連繋し枠状文を表出、沈線多条、瘤が斜位に付く。
6	A		表採	安行1式	波状深鉢	頸～胴	No.1の類型、頸部に斜条線、胴部に入り組み弧線文、中間の括れ部に沈線区画の隆起帯縄文と刻文を併列させる。
7	A	d－4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波底部に相当する破片。
8	A	d－3	II	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、No.6に類似、器面が風化、器厚4㎜。
9	A	b－4	／	安行1式	波状深鉢	頸～胴	No.1の類型、頸部にスリット、縄文帯は刻文で区画する。
10	A	d－2	II	安行1式	波状深鉢	頸～胴	No.1の類型、No.6に類似。
11	A	d－3	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂部に相当する口頸部の破片。
12	A	c－2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波状口縁深鉢の波底部に相当。2個の大型の瘤をはさみ、小型の瘤を上下に作出、この瘤は波頂部下端の頸部にも関係し、各要所に貼付する。区画沈線は深く鋭い。
13	A	d－2	表土	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、同上、但し小型で全体を端正に作出。
14	A	b－2	III	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、口頸部に亘る破片、瘤の直下にスリット。
15	A	d－2	III	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、括れ部の隆起帯上に対向して小型の瘤が付く。
16	A	d－3	I	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、括れ部の破片、深い押し引きで作出された隆起帯刻文上に対向した瘤を貼付。
17	A	d－3	I	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、隆起帯刻文上の対向する瘤とは別個に、胴上部にも瘤を貼り付ける。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
18	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、波頂部下端の頸部を構成する破片、中央部にスリットを施し、下位の接点に瘤を貼付。

第19表　第Ⅳ—25図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－2	III	**安行1式**	波状深鉢	口縁～胴	口縁部帯を4段の隆起帯縄文で構成、波頂部及び波底部に連結する大型の瘤を貼付、胴部に入り組み弧線文が展開し、底部に至る下半部では縄文帯を描出する。波頂部下端の頸部に三角帯を形成、括れ部にも隆起帯縄文が作出され、頸部のスリットを連繋し2個1対の小型の瘤を配置する。口径34.8cm、器高推計45cm、胴部最大径34cm。
2	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波頂部を台形に作出、中央部に貫通孔。
3	A	d－2	包含層	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波頂部先端欠損、区画沈線は多条。
4	A	b－5	I	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、緩く内湾する台形の波頂部破片、波頂中央部から下垂する棒状浮文に切り込みを施し瘤に見立てる。瘤を中心に両側から摘まみ上げたナデを施す。貫通孔の作出なし。
5	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線に弧文が連繋し、枠状文を描く。沈線多条。

第20表　第Ⅳ—26図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁～胴	安行1式波状口縁深鉢も文様帯の構成により一定の規則性をもって推移する。本例も胴上部に瘤付の隆起帯を作出、第19表No.1に同期し安行1式後半なかば頃の資料となる。口径28cm、器高推計28.5cm、胴部最大径25cm、L＝－31.5。
2	A	a－4		**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、刻文を施した2帯の隆起帯で口縁部を構成する。2個の瘤を波頂部に貼付、先端の瘤が剝落、瘤の下端は広い三角帯を構成し、括れ部にも口縁部帯と同質の刻文を施す。区画沈線は枠状文、小型の土器、テストピットより出土。
3	A	b－4		**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、波底部に相当、口縁部帯下端と胴上部の縄文帯上に対向し小型の瘤を貼付、頸部の綾杉状斜条線には瘤を中継して蛇行垂線が併行する。
4	A	d－2	包含層	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、台形の波頂部に棒状浮文を削り取り一連の瘤を作出、区画沈線は弧文と連繋し枠状文を描く。多条沈線は磨り消し、貫通孔は未作出。
5	A	d－3	II	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、小型で端正に作出、器厚頸部で4㎜。
6	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、No.3に類似。
7	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、括れ部の縄文帯が口縁部下端で密着する接点に小型の瘤が付き、頸部の斜条線は表出されていない。
8	A	b－4		**安行1式**	波状深鉢	口　頸	No.1の類型、No.1に共通、但し括れ部をはさみ隆起帯縄文が併列、器厚頸部で6㎜。L＝－39.5。

第21表　第Ⅳ—27図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	口縁部を4段帯で構成する波頂部の破片、幾分内弯しながら直上し、先端部で「く」の字状に屈曲し外反、折返した口縁部内面は肥厚し稜を作出、台形の波頂先端中央部に円孔を穿つ、瘤は円孔をはさんで垂直に連立する。頸部に三角帯を形成し小型の瘤を貼付する。瘤付注口土器と伴出。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
2	A	d－3	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、円孔の右下に明瞭なヘラ削りを確認。
3	A	d－3	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、波頂先端部に瘤が連立。
4	A	d－2	包含層	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、端正に作出された土器、器厚は頸部5㎜。
5	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、同上、但し貫通孔は内面から穿孔。
6	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、器面調整、ヘラ削り、沈線区画、穿孔、瘤の貼付など、一連の工程に粗雑さが目立つ。L＝－39.5
7	A	b－4	／	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.1の類似。
8	A		表採	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂部先端部が丸味を帯び、中央部の瘤は剝落。
9	A	a－2	包含層	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂先端部約½が欠損。
10	A	d－3	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線は弧文が連繋、器表面は風化。
11	A	b－2	III	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、山型の波頂天中部にも瘤を貼付、口縁部帯の瘤は棒状浮文を切り込み、尚深い刺突を施す。小型の土器。
12	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	胴	No.1の類型、胴下半部の弧線文と底部に接する縄文帯。
13	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂部の破片、全周すべて破砕、区画沈線に弧文が連繋し枠状文を描く。

第22表　第Ⅳ—28図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	a－4	／	**安行1式**	波状深鉢	口縁	波状口縁深鉢の波底部、区画沈線は鮮明、テストピット。
2	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、頸部三角帯に相当。
3	A		排土中	**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、区画沈線に弧文が連繋、沈線多条。
4	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	頸	No.1の類型、器面が剝落、斜条線を2分し下半部は縄文帯。
5	A	d－2	III	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、沈線多条。
6	A	b－5	I	**安行1式**	波状深鉢	口頸	No.1の類型、波頂部下端に相当する破片。
7	A	c－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.5に類似。
8	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、幾分丸味をもつ波頂先端部にも小型の瘤が付く。
9	A	d－2	III	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、肥厚する口縁部外面に異常に盛上がる巾の狭い縄文帯を作出、区画沈線は太く鮮明。
10	A	b－5	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、深く広い押し引きで縄文帯を隆起化する。
11	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線は明瞭、小破片。
12	A	d－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、同上。
13	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、同上。
14	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、同上。
15	A	a－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、沈線多条。
16	A	a－4	表土	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、各工程とも粗雑。
17	A	d－5	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、最終工程にナデ、縄文、沈線を幾分磨り消す。
18	A	d－3	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.12に類似。
19	A	c－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.12に類似。
20	A	c－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.5に類似。
21	A	d－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.5に類似、小破片。
22	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.1に類似、但し内外面とも滑達に研磨。
23	A	d－2	II	**安行1式**	波状深鉢	口頸	No.1の類型、沈線多条、粗雑な土器、器面に亀裂あり。
24	A	d－3	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、沈線多条、丁寧な作出。
25	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂部下端の小破片、区画沈線は未熟。
26	A	c－	II	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部の内外面極度に肥厚、沈線多条。
27	A	b－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、焼きは堅く形態、手法ともNo.24に類似。
28	A	b－5	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂先端部の小破片、瘤が2個付く。
29	A	d－4	I	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、急激な波をもち、分厚く作出。
30	A	c－5	撹乱	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内弯し先端部の屈曲なし、区画沈線は直線的、縄文帯はすべて巾をもち、大型の瘤が2個付く。
31	A	b－2	III	**安行1式**	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂下半部の破片、低い瘤が2個付く、沈線区画

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
							後、丸棒状工具で区画内を研磨。

第23表　第Ⅳ—29図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	a—3	表　土	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	口縁部の肥厚は、後工程として既存の口縁部に巻きつけて補強し、内面に折り返す、区画沈線は鮮明、器面のナデも良好。
2	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部を除く周辺を破砕し円盤状に作出。
3	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、弧状をなした縄文帯を作出、2個の瘤が付く。
4	A	c—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部を4段帯で構成、沈線多条、弧文が連繋、2個の瘤が付き、上位の瘤に刻みを施す、頸部に斜条線。
5	A	d—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、多条の沈線を部分的に磨り消す。
6	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部を2帯の隆起帯縄文で構成する小型土器、内弯する波頂先端より棒状の瘤を下垂、その直下にも円形の瘤を貼付、頸部は沈線区画による三角帯が形成される。
7	A	c—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、先端が鋭角に突起する波頂部破片。
8	A	a—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波頂部の破片、区画沈線は枠状文を描く。
9	A	b—5	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、入念な作出。
10	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は太く鋭い、最終工程にナデを施す。
11	A	d—4	／	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、沈線間削りが浅い、瘤が2個付く。
12	A	d—4	表　土	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、No.2に類似。
13	A	c—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、No.1に類似。
14	A	a—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、瘤は2個連立、内外面とも良く研磨。
15	A	a—2	Ⅲ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は太く鋭い、瘤は2個連立。
16	A	b—5	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、内弯する山形の波頂部破片、全面に亘り剝落、口縁部の縄文帯は2帯で構成、頸部は縄文と斜条線が重複。
17	A	d—3	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.11に類似。
18	A	a—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、急激な波をもつ、下端の瘤が剝落、隆起帯間はヘラ削り、瘤を起点に左右の縄文帯は巾、位置とも不一致。
19	A	d—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.頂部下端の破片、丁寧な作出。
20	A	d—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波頂部約½の破片、最先端に瘤、沈線多条。
21	A	d—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.5に類似、但し口縁部の肥厚が増す。
22	A	d—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波頂部約½の破片、全体に整った作出。
23	A	c—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	把　手	No.1の類型、波頂先端部に付く把手、弯曲した丸棒状原体の3ヶ所に粘土紐を巻く。
24	A	d—3	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部外面に肥厚、区画沈線は細く鋭い。
25	A	d—4	／	**安行2式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部下端の隆起帯が巾の狭い刻文帯に変る。
26	A	c—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、瘤が2個付く、深いヘラ削り、小型土器。
27	A	c—2	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、極度に隆起する縄文帯、区画沈線も太く鮮明。
28	A	a—3	表　土	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.3に類似、全体に粗雑な作出。

第24表　第Ⅳ—30図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	波底部の小破片、左右の縄文帯が不一致、区画沈線は正確。
2	A	d—4	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部の波は緩く、上位の瘤は口唇部に併行して貼付する。区画沈線は弧文と連繋し枠状文を表出。
3	A	c—5	表　土	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、区画沈線は枠状文、縄文帯が巾をもつ。
4	A	c—4	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部の波は緩いが、縄文帯は弧状をなす。
5	A	d—3	表　土	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、器面が風化、区画沈線は細い。
6	A	d—4	Ⅰ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、山形に作出された波頂先端部。
7	A	d—3	Ⅱ	**安行1式**	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波底部、3個の瘤が連立、区画沈線は明確。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
8	A	c—2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波底部、小型土器、作出は良好。
9	A	b—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波底部、沈線多条、部分的に磨り消す。
10	A	d—4	／	安行1式	波状深鉢	胴	No.1の類型、括れ部の破片、胴上部の縄文帯は刻文で区画。
11	A	d—3	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、瘤が斜位に付き、深い押し引きのナデを施す。
12	A	c—2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、縄文帯は広いヘラ削り、区画沈線は正確。
13	A	c—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.8に類似、但し幾分大型になる。
14	A	d—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.13に類似、縄文帯の隆起は少い。
15	A	b—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、瘤が付く、粗雑な作出。
16	A	d—3	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂先端部、区画沈線は未熟、粗雑な土器。
17	A	b—5	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.3に類似。
18	A	c—2	II	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯に刻文を施す。
19	A	c—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、波頂先端部の破片、粗雑な作出。
20	A	d—4	／	安行1式	波状深鉢	頸	No.1の類型、隆起帯縄文間に斜条線、器厚4㎜。
21	A	d—4	表土	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.4に類似、良好な作出。
22	A	d—4	表土	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.3に類似。
23	A	d—2	III	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、急激な波をもつ口縁部、沈線は多条。
24	A	c—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は2帯の隆起帯刻文、大型の瘤は橋状、括れ部に沈線区画の隆起帯刻文が併行し、波頂部下端で三角帯を構成、小型の瘤も付く。胴上部に縄文を施文、高井東系。
25	A	c—4	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、円柱状の波頂先端部、瘤に細刻文を施す。
26	A	c—2	I	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.3に類似。
27	A	d—2	III	安行1式	波状深鉢	頸	No.1の類型、太い斜条線で綾杉文を表出。
28	A	b—4	I	安行1式	波状深鉢	頸	No.1の類型、胴部との境に沈線区画の無文帯を作出。
29	A	d—4	表土	安行1式	波状深鉢	口縁	No.1の類型、No.8に類似。
30	A	d—3	I	安行1式	波状深鉢	底	No.1の類型、底部直上は放射状のヘラ削り、径3.8㎝。
31	A	d—4	I	安行1式	鉢	口縁	口縁部帯は沈線区画の縄文帯で構成、肥厚した口縁部の内面をそぎ鋭い稜を作出、瘤が付く。
32	A	b—4	I	安行1式	鉢	口縁	No.31の類型、上例に類似。
33	A	d—2	表土	安行1式	鉢	口縁～体	No.31の類型、区画沈線は枠状文、棒状の瘤は3段帯に亘り、上端に載痕ある瘤を重ねて貼付、縄文は撚りの細い単節ＬＲ。

第25表　第Ⅳ—31図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—4	I	安行1式	鉢	口縁～体	口縁部帯は隆起帯刻文の連動で巾広く構成し、それぞれ独立した小型の瘤を貼付、体部は荒い条線を垂直に施す。粗雑な土器。
2	A		排土	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、広い押し引きの凹帯を持つ、器表面は風化。
3	A	d—3	包含層	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線を部分的に磨り消す。
4	A	b—4	I	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、細い区画沈線には弧文が連繋、小型の瘤は下端に付く。口唇部帯を平担に作出。
5	A	d—2	III	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線明瞭、口縁部が屈曲、内弯も増す。
6	A	c—2	II	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、ヘラ状工具の押し引き、沈線多条、弧文が連繋、大型の瘤が剝落、瘤の変形として垂直の集合条線を表出。
7	A	b—5	II	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、No.1に類似、区画沈線を磨り消す。
8	A	c—4	I	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、縄文帯は隆起化しない。区画沈線は弧状。
9	A	b—4	／	安行1式	鉢	口縁～体	No.1の類型、隆起帯縄文は4段帯、瘤は2個、体部は横位の条線、口径25㎝。器厚体部で5㎜。Ｌ＝－39.5
10	A	d—3	I	安行1式	鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部帯は2帯の隆起帯縄文で構成。
11	A	d—2	III	安行1式	鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯縄文は4段帯、瘤は上位2帯に貼付。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
12	A	c－2	II	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.3に類似、粗雑な作出。
13	A		表採	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.5に類似。
14	A		排土	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.3に類似、器面が風化し、部分的に剝落。
15	C		包含層	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚外面にとり内弯する。沈線は未熟。
16	A	d－4	I	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は3帯の刻文帯、棒状の瘤を貼付、区画沈線は枠状文、体部に斜条線を表出。
17	A	a－4	／	**安行1式**	鉢？	口縁～体	No.1の類型、口縁部帯は帯状縄文、体部は研磨。
18	A	d－2	III	**安行1式**	鉢？	口縁	No.1の類型、上例に類似、区画沈線は太く鮮明、口径18cm。
19	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は形態の異なる刻文で3帯に作出。
20	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部帯は2帯の刻文帯、体部は斜条線。
21	A	b－4	I	**安行1式**	鉢	口縁～体	No.1の類型、No.17に類似するも小型に作出。
22	A	d－4	表土	**安行1式**	鉢	口縁～体	No.1の類型、No.17に類似、縄文帯に対弧文を表出。
23	A	d－4	表土	**安行1式**	鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部は緩い波状、2連の瘤は口唇部を巻き口縁部上端に付く、縄文帯は多段化する。
24	A	c－2	II	**安行1式**	鉢	体	No.1の類型、区画沈線に弧文が連繋、正円の瘤が付く。
25	A	a－3	表土	**安行1式**	鉢	体	No.1の類型、上端破砕部にそって刻文、下端には右下りの条線、中央に沈線区画の縄文帯を表出。
26	A	b－4	I	**安行1式**	鉢	体	No.1の類型、No.4に共通。
27	A	c－2	I	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、小型の土器で精緻に作出。
28	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯はヘラ状工具の押し引きによって隆起帯を作出、刻文を施す。体部の縄文帯には横線を区画し、口縁部の波に対応して瘤を貼付、直下にスリットを表出する。
29	A	d－2	II	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.28と同一個体。
30	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.28と同一個体。
31	A	d－2	II	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.28と同一個体。
32	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁	No.1の類型、No.28と同一個体。

第26表　第Ⅳ—32図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－4	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	小破片、口縁部帯は隆起帯縄文、入念な作出。
2	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面に稜を作出、内外共良く研磨。
3	A	d－2	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯を隆起帯縄文で構成、沈線多条。
4	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、内外面に肥厚、多条沈線を部分的に磨り消す。
5	A	d－2	III	**安行1式**	鉢	口縁	隆起帯上に刻文と正円の瘤、内面はヘラ状工具の横ナデ。
6	A	b－4	I	**安行1式**	鉢	口縁	No.5の類型、口縁部帯は3段帯、体部との境は沈線間刻文。
7	A	d－2	II	**安行2式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、薄板状の口縁部、下端の細い隆起帯は刻文。
8	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、口径13.5cm、粗雑な作出。
9	A	c－4	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は緩い波状、区画沈線は明瞭。
10	A	c－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は隆起帯刻文、沈線多条、器厚は薄い。
11	A	a－3	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は緩い波状で隆起帯縄文は4帯。
12	A	c－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、3帯の隆起帯を区画する沈線は細い。
13	A	d－4	I	**安行1式**	鉢	口縁	No.5の類型、口縁部帯は刻文帯、器面調整は粗雑。
14	A	c－2	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.2に類似。
15	A	d－2	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、沈線多条、縄文帯が異常に隆起する。
16	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、小破片、区画沈線は太い、研磨は良好。
17	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、小破片、薄く作出。
18	A	b－5	表土	**安行1式**	鉢	口縁～体	No.5の類型、口縁部の刻文帯巾をもつ、体部は垂直の条線。
19	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、縄文帯間を巾広く作出、無文帯は丁寧に研磨。
20	A	d－3	II	**安行1式**	鉢	口縁	No.5の類型、口縁部は2帯の隆起帯縄文、沈線多条。
21	A	d－2	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は多帯化の隆起帯縄文、良好な作出。
22	A	c－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は刻文帯、最上位区画沈線上に細刻文。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
23	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、内弯する口縁部を2帯の刻文帯で構成。
24	A	c－2	II	**安行1式**	鉢	口縁	No.5の類型、口縁部は緩く内弯、全面に無節Lの縄文。
25	A	b－5	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、小破片、口縁部内面に稜を作出。
26	A	d－2	包含層	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯刻文は多帯化、多条な沈線は不規則。
27	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部の隆起帯縄文は3帯、斜位の瘤が連立。
28	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、小破片。
29	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、内面を抉り稜を作出、縄文帯の隆起化なし。
30	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、最下段の縄文帯は巾が狭い、沈線は明確。
31	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁～底	No.1の類型、上例に類似、口径16cm、瘤付注口土器と伴出。
32	A	b－2	III	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.2に類似。
33	A	d－3	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は刻文、区画沈線は細く鋭い。
34	A	a－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は刻文、区画沈線は正確。
35	A	b－5	／	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、区画沈線は鮮明、縄文帯の隆起化なし。
36	A	d－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は緩るい波状、器面の調整は不良。
37	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は多帯化した縄文、瘤は斜位、ヘラ削り。
38	A	c－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は多帯化した縄文、枠状文、瘤が2個。
39	A	b－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.4に類似。
40	A	d－3	II	**安行1式**	鉢	底	隆起帯刻文の連動、ヘラ状工具の押引き、四角の底をもつ。

第27表　第Ⅳ—33図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	口縁部帯は隆起帯縄文、区画沈線は明確、内面に稜を作出。
2	A	d－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は隆起帯縄文、沈線多条。
3	A	d－4	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯作出は押し引き、区画沈線を省略。
4	A	b－4	I	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部が外反し、全面に単節RLの縄文を横回転で施文。
5	A	d－3	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯は3段帯、棒状の瘤に半円の突起。
6	A	c－5	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯作出はヘラ削り、口縁部は緩い波状。
7	A	d－4	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.5に類似。
8	A	b－5	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、3帯の隆起帯縄文、区画沈線間の巾は狭い。
9	A	b－4	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.1に類似。
10	A	d－2	III	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯刻文の連動、多条な沈線は不規則。
11	A	d－3	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯刻文、細い沈線で枠状文、瘤は剝落。
12	A	d－3	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、作出はNo.2に構成はNo.1に類似。
13	A	a－3	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、隆起帯上の縄文は判別不能、沈線は多条。
14	A	c－5	撹乱	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は緩い波状、瘤が2個付く。
15	A	c－4	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.2に類似。
16	A	d－3	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.23と同一個体、体部丸棒状工具の横ナデ。
17	A	d－4	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部は緩い波状、隆起帯は押し引きによる。
18	A	b－2	III	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.9に類似。
19	A	a－4	／	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯3帯、沈線は弱い、口径14.5cm。
20	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.12に類似。
21	A	c－5	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部帯は2帯の縄文、胎土に土器の砕粒。
22	A	d－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁	No.1の類型、No.15に類似、区画沈線は太く鮮明。
23	A	c－4	I	**安行1式**	浅鉢	口縁～底	No.1の類型、口縁部帯は2帯の縄文、底部僅かに盛上る、瘤の変りに浅い切込み、口径12cm、器高3.8cm、底径5.2cm、玉と伴出。
24	A	b－5	I	**安行1式**	鉢	口縁	No.4の類型、太い沈線で区画した口縁部帯は広い巾をもつ。
25	A	c－2	II	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、隆起帯縄文は3段帯、沈線明確、研磨も良好。
26	A	b－4	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、未隆起の刻文帯間に対弧文、器表面は未調整。
27	A	d－2	表土	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、区画沈線は太く鮮明。
28	A	b－2	III	**安行1式**	浅鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部3帯の刻文に突起が付く、細い沈線。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
29	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	浅　鉢	口縁～体	No.1の類型、No.25に類似、器面は風化。
30	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	浅　鉢	口縁～体	No.1の類型、No.19に類似、器面が風化。
31	A	b－5	表　土	**安行1式**	浅　鉢	口縁～体	No.1の類型、No.21に類似、僅かに風化、作出は良好。
32	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	浅　鉢	口縁～体	No.1の類型、口唇部帯は平担、沈線が無文帯の巾と不一致。
33	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	浅　鉢	口縁～体	No.1の類型、文様帯は体部文様帯は体部との連動、刻文帯は「V」字状。
34	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、No.15に類似。
35	A	b－5	／	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、No.22に類似。
36	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、No.24に類似。
37	A	b－5	Ⅱ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
38	A	b－5	Ⅰ	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部緩い波状、内面に稜、区画沈線鮮明。

第28表　第Ⅳ－34図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－3	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	口縁部帯を多帯化する隆起帯縄文で構成、大型の瘤を2個貼付、深い押し引きの隆起帯間に枠状文を表出。
2	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部緩い波状、内面に稜、隆起帯多帯化。
3	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、上例に類似、縄文帯にずれ。
4	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、刻文帯の口縁部外反、多条の沈線を磨り消す。
5	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部外面に肥厚く広い縄文帯、その中央に瘤、下端の縄文帯は極端に巾をつめる。沈線は太く鮮明。
6	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部直下に刻文帯、その下段は縄文帯。
7	A	c－2	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.4に類似、小破片。
8	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部緩い波状、縄文帯に半円の突起と瘤。
9	A	d－4	表　土	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部「く」の字状に屈曲、区画沈線は明瞭。
10	A	a－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、前例に類似、区画沈線は明確、瘤が剝落。
11	A	d－3	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、縄文施文で瘤を潰す。沈線も一部磨り消す。
12	A	d－2	Ⅱ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.10に類似、口縁部内面が剝落。
13	A	d－4	／	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、胴上部に隆起帯縄文、その下端は斜条線。
14	A	d－3	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、同上個体か。
15	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、No.13に類似、胴部はヘラ状工具の垂直条線。
16	A	a－4	／	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.11に類似、正円の瘤が付く。
17	A	a－4	／	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.10に類似。
18	A	b－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、胴部条線は強い右下り、縄文帯直上は同一工具による横ナデ。
19	A	c－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、No.15に類似、区画沈線は明瞭。
20	A	d－2	Ⅲ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、未熟な縄文帯と綾杉状の不規則な条線。
21	A	d－4	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、No.18に類似、胴部条線は細く、ほぼ垂直。
22	A		表　採	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯を隆起帯縄文で構成。
23	A	d－2	Ⅱ	**安行1式**	鉢	口　縁	口縁部は折り返し状の広い縄文帯、直下を太い沈線で区画、縄文は撚りの強い無節L、台付の可能性あり。
24	A	b－5	Ⅰ	**安行1式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、胴上部の刻文帯上に瘤、条線はほぼ垂直。
25	A	c－2	Ⅱ	**安行1式**	台付異形土器	口　縁	口縁部帯は2帯の隆起帯刻文、体部の刻文も連繋する。区画沈線は枠状文、口唇部を沈線が2分、刻文を施す。口径8.5cm。

第29表　第Ⅳ－35図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	a－2	Ⅱ	**高井東系**	深　鉢	胴	斜位に付く小型の瘤をはさみ左右に条線、直下に不規則な横線を施す。胴部の条線は乗直、内外の荒れた器面に亀裂あり。
2	A	c－2	Ⅱ	**高井東系**	波状深鉢	頸	波頂部下端の破片、多条の沈線は不規則。
3	A	d－4	表　土	**高井東系**	波状深鉢	口　縁	口縁部が屈曲、口唇部直下に太い横線、屈曲部に低い瘤。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
4	A	b－4	I	**高井東系**	異形台付	口縁～脚	併行する孤線で表出する口縁部と体部の文様がほぼ対応し、縄文帯に瘤を貼付、口唇部の2個一対の突起が口縁部と体部の装飾体の配置と一致、脚部の帯状縄文も総体として鉢部の文様構成に共通する。縄文は単節ＬＲ。
5	A	d－4	I	**高井東系**		体	張り出しを持つ体部の破片、2個一対の瘤、その直下の瘤を中継し弧状の併行線を表出、縄文ＬＲ、器種不明、注口土器か。
6	C	カ	包含層	**高井東系**	波状深鉢	口縁	口唇部平坦、直下の内面を深く抉り稜を作出、口縁部は波状、多条の沈線、波底部に瘤、頸部は左下りの条線を施す。
7	A	a－4	I	**高井東系**	波状深鉢	口縁	No.3に類似、口縁部は屈曲をもたず肥厚、器面½の剝落。
8	A	b－2	III	**高井東系**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯は併行する横線、直下に刻文、以下は不規則な条線。
9	C	キ－1	III	**高井東系**	平縁深鉢?	口縁	口縁部帯に併行する横線、中央部に円文、頸部は帯状縄文。
10	C	ア－イ	包含層	**高井東系**	波状深鉢	口縁	口縁部は波頂先端部を含め折返し口縁に作出、波頂先端部を切り込み直下に腰の高い瘤を垂直に連結、単節ＲＬの縄文帯に3条を単位とする沈線を施す。頸部は右下りの条線、波頂部は弧状に弯曲し口縁部は内面に肥厚する。
11	A	c－2	II	**高井東系**	波状深鉢	口縁	口縁部帯の縄文は2条の横線施文後に磨り消す、頸部は斜条線。
12	A	c－2	II	**高井東系**	波状深鉢	口縁	口縁部帯は狭い屈曲を利用し2条の横線、頸部は斜条線。
13	A	c－2	III	**高井東系**	鉢?	口縁	口縁部帯は2条の横線、中央部の瘤は剝落。
14	A	b－4	I	**新地式**	注口土器	口縁～底	装飾の主体を肩部と体部中央に置く。何れも3条の併行線によって2条の微隆起線を作出。瘤に変化を加えた装飾体を微隆起線上に加飾、それぞれは装飾性総体の中で対応関係をもつ配置で構成、注口部と底部の一部を欠くがほぼ完全形、口径9cm、器高22cm、胴部最大径15cm、底径4cm、Ｌ＝－33.5

第30表　第Ⅳ－36図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b－4	I	**新地式**	注口土器	口縁～底（完全形）	器形及び文様帯の構成、基本的に前例に類似、器高26cm、口径12cm、胴部最大径17cm、底径4cm、底部は上げ底、口頸部が内弯しやや大型になる。肩部を3帯で構成し上位2帯が微隆起線下段は沈線区画の縄文帯、それぞれ尖った瘤を貼付、体部は巾広い縄文帯、区画内に注口部と刻みをもつ大型の瘤を器周4単位で貼付、その中間部に楕円文を描き、瘤と楕円文を中継する対弧線文を表出、区画外を磨り消し微細な瘤を貼付する。器面を棒状工具のナデで研磨、縄文はＬＲ。
2	A	d－2	III	**新地式**	注口土器	頸	弧線の長短を抱き合わせ巾の狭い変形入り組み状弧線文を表出単位文の接点に瘤、充填縄文は単節ＬＲ、器面は風化。
3	A	d－4	I	**新地式**	注口土器	肩	併行する微隆起線上に正円の瘤、下端は剝落、内面未調整。
4	A	d－3	I	**新地式**	注口土器	胴	微隆起した弧線を抱き合わせ、中央部に瘤を貼付、研磨良好。
5	A	a－2	III	**新地式**	深鉢	頸～胴	括れ部に沈線間刻文、頸部は斜行する併行線、胴部は対向する弧線文が横に連続し、区画内を磨り消す。接点に瘤を貼付、縄文は単節ＬＲ、器厚3mm、焼きは堅い、胎土に多量の雲母。
6	A	a－3	表土	**新地式**	台付土器	接続部	内面は横ナデ、表面は未調整、接続部に刻文帯を作出。
7	A	a－4	I	**新地式**	深鉢	口縁	口縁部帯は荒い刻文、胴部に亘り櫛歯状の条線、粗製土器。
8	A	b－4	I	**新地式**	注口土器	口縁～肩	限定された本資料には意匠文の表出はない、表面研磨は粗雑、内面未調整、無文の注口土器か、口径9cm、推計器高22cm。
9	A	b－4	I	**新地式**	不明	胴	櫛歯状の条線を連続し木の葉状文を表出。
10	A	d－3	II	**新地式**	鉢	口縁	口唇部の突起は先端部から内面にかけて截痕、表面に縄文を施文、区画沈線による縄文帯は未隆起。

第31表　第Ⅳ—37図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—4	I	**新地式**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯は沈線区画の刻文帯、作出は良好。
2	A	b—2	III	**新地式**	平縁深鉢	口縁	前例に類似。
3	A	b—2	III	**新地式**	平縁深鉢	口縁	No. 1 に類似。
4	A	b—4	表土	**新地式**	平縁深鉢	口縁	口縁部を3帯で構成する刻文帯、下位2帯は細刻文。
5	A	b—2	III	**新地式**	平縁深鉢	口縁	No. 2 に類似。
6	A	b—2	III	**新地式**	平縁深鉢	口縁	No. 4 に類似、口唇部帯からやや離れて刻文帯、刻文は荒い。
7	A	c—2	I	**新地式**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯は横線を伴う隆起帯刻文、頸部に2個一対の瘤。
8	A	c—2	II	**新地式**	平縁深鉢	口縁	頸部に入組み弧線文、区画内は刷毛目状条痕、2個一対の瘤。
9	A	d—2	II	**新地式**	平縁深鉢	胴	沈線区画の括れ部に2個一対の瘤。
10	A	d—4	I	**新地式**	平縁深鉢	頸	弧線を入組み状に表出、接点に瘤、区画内に細刻文。
11	A	c—2	II	**新地式**	平縁深鉢	頸	上例に類似。
12	A	d—2	II	**安行1式**	鉢	口縁～体	口縁部外反、内外面とも横ナデ、刷痕残る。器厚8㎜。
13	A	c—4	I	**安行1式**	鉢	口縁～体	内面は垂直と斜位のヘラ磨き、外面未調整。
14	A	c—4	I	**安行1式**	鉢	口縁～体	内外面ともヘラ状工具によるナデ、刷痕残る。口唇部鋭角。
15	A	d—2	II	**安行1式**	鉢	口縁	頸部で括れ、口縁部は内弯、内外面とも巾約3㎜のヘラ状工具で器面調整、両端の刷痕が刷毛目状をなす。
16	C	エ	／	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部肥厚、外に開く。内外面とも横ナデ。
17	A	d—2	III	**安行1式**	鉢	口縁	器面調整ヘラ削り、先工程の刷毛目状刷痕残る。器面は風化。
18	A	c—4	表土	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部僅かに外反、内外面ともヘラ磨き。
19	A	d—3	II	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部内弯、器面調整ヘラ削り、刷毛目状刷痕残る。
20	C	カ	包含層	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部肥厚、胎土に多量の破粒が混入、器面は風化。
21	A	b—4	I	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部は外反、全面に刷毛目状刷痕。
22	A	a—2	表土	**安行2式**	深鉢	口縁	口縁部の肥厚外面にとる。器面に刷痕。
23	A	b—4	I	**安行1式**	深鉢	口縁	口縁部内面に稜を作出、外面未調整、刷毛目状刷痕残る。
24	A		表採	**安行1式**	鉢	口縁	口縁部が肥厚し外反する。内外面とも丸棒状工具の横ナデ。
25	A	d—4	I	**安行1式**	鉢	口縁	小破片、内外面ともヘラ状工具の横ナデ。
26	A	c—2	I	**安行1式**	台付土器	脚	接面上部で「く」の字状に屈曲、内外面とも横のヘラ磨き。
27	A	b—4	I	**安行1式**	台付土器	脚	接面部を広く持つ、内外面とも未調整。

第32表　第Ⅳ—38図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	胴部との境と口唇部帯に併行し紐線を貼付、地文縄文に弧状の条線、口唇部直下の内面には1条の横線を施す。
2	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、口頸部外反、紐線⅔と頸部の一部が剝落、太い条線は右下り、内面はヘラ状工具の横ナデ。
3	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、No. 1 に類似、内面強いナゾリ、スリット。
4	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、No. 1 に類似、紐線⅔が剝落、内面は横ナデ。
5	A	d—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、No. 1 に類似、口縁部外反、内面は横ナデ。
6	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、紐線は平担な口唇部帯に併行、条線は弧状。
7	A	d—3	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、低い紐線は口唇部帯に併行、条線は弧状。
8	A	a—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、肥厚部に低い紐線を貼付、条線は右下り。
9	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、No. 3 に類似。
10	A	d—5	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No. 1 の類型、紐線文直下に丸棒状のナデ、内面にナゾリ。
11	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、ヘラ状工具による条線は右上り、スリット。
12	A	b—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、No. 6 に類似、内面にナゾリ、スリット。
13	A	b—2	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、紐線は口唇部帯に併行、地文縄文に弧状線。
14	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No. 1 の類型、口縁部に三角刻文、条線は弧状、内面に稜。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
15	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.12に類似。
16	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、紐線½剝落、地文縄文に右上りの条線、スリット。
17	A	d—4	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、紐線の円形押圧文は大型、条線は弧状。
18	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、地文縄文に浅い右下りの条線、内面にナゾリ。
19	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、右下りの条線のみ、内面にナゾリ。
20	A	d—4	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部直下に横線、条線は右下り、内面に稜。
21	A	d—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口唇部直下に刻文、条線は右下り、内面に稜。
22	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部と胴上部に同種の刻文、条線はほぼ垂直。
23	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部に荒い三角刻文、胴上部は沈線状に連続、条線はほぼ垂直。
24	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部三角刻文、条線右下り、内面に稜。
25	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部の刻文縦、条線右下り、内面に稜。
26	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部に細刻文、条線は弧状、内面は特に平滑。
27	A	d—3	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部、胴上部とも連続刻文、条線は右下り。
28	A	a—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部三角刻文、条線右下り、内面にナゾリ。
29	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部三角刻文、条線は不規則。
30	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部三角刻文、条線右下り、内面にナゾリ。
31	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部三角刻文、条線右下り、
32	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、口縁部三角刻文、細い条線は垂直。
33	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線は口唇部帯と併行、口唇部直下の内面を深く削ぎ取る、条線は弧状内面の研磨は滑達。

第33表　第Ⅳ—39図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	口縁部帯刻文、直下にナゾリ、条線は右下り、内面に稜。
2	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、器表面未調整、内面は丸棒状の横ナデ。
3	A	c—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線剝落、先工程の刻みを確認、条線は弧状。
4	A	a—4	I	**安行1式**	浅　鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯刻文縦、表面未調整、内面は滑達。
5	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部強く外反、刻文縦、条線右下り、
6	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁 口	No.1の類型、口縁部内弯、紐線太く押圧円文大型、条線は荒い右下り、器面未調整、内面は強いナゾリ。
7	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内弯、装飾体なし、条線細い右下り。
8	A	d—3	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に荒い三角刻文、垂直の条線は端正。
9	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の刻文縦長、荒い条線右下り。
10	A	d—3	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、荒い右下りの条線のみ、器面調整は良好。
11	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯荒い刻文、条線は磨り消す。
12	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内面に折返し、条線右下り、器厚3㎜。
13	A	b—5	II	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、極細の条線は先工程、太い条線は後工程。
14	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、垂直の一定の巾をもつ中央部条線間を磨消す。
15	A	b—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部直下の内外面に強いナゾリ。
16	A	b—5	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部はナデによる隆起化、条線はヘラ状工具。

第34表　第Ⅳ—40図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	口縁部僅かに肥厚、その外面を利用し紐線を貼付、上下にナゾリ、縄文地に不規則な右下り条線。
2	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線直下にナゾリ、地文縄文に細い弧状線。
3	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、内面に稜、条線右下り。
4	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線に刻文、直下にナゾリ、器厚は薄い。
5	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、地文縄文に右下りの条線、紐線頸部にも下垂。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
6	A	d－2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、内面に稜、条線右下り密に施文。
7	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、紐線に円文を作出、条線右下り。
8	A	d－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線簿く大柄、直下にナゾリ、条線右下り。
9	A	d－4	表　土	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内外面に肥厚、内面に強いナゾリ、低い紐線を襞状型作出、条線は右から左へ弧状に表出。
10	A	d－5	現表土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線½剝落、下地の作出精製土器にも優る。
11	A	c－2	Ⅱ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚する口縁部屈曲、低く広い紐線、条線横。
12	A	d－2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内外に肥厚、紐線の押圧不規則。
13	A	c－4	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線文口唇部帯からやや下る、条線右下り。
14	A	b－2	Ⅲ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚外面、紐線文直下を沈線で区画。
15	A	b－4	表　土	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線口縁部肥厚下端に貼付、内面にナゾリ。
16	A	b－4	Ⅰ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線は口縁部の肥厚面を利用、直下にナゾリ。
17	A	c－2	Ⅱ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、幾分前例に類似、条線太く，紐線上端に沈線。
18	A	d－3	Ⅰ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、条線弧状。
19	A	b－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口頸部外反、口縁部外面をそぎ内面に稜。
20	A	d－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、内面に稜、条線弧状。
21	A	b－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、円文はヘラ状工具の削り、細い条線右下り。
22	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、内面にナゾリ、紐線直下に横線。
23	A	d－4	Ⅰ	安行2式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、作出No.11に類似、縄文地に条線弧状。
24	A	b－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に紐線、直下にナゾリ、条線右下り。
25	A	b－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部帯から離れて紐線、直下にナゾリ。
26	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部下端に紐線文、内面に稜、条線弧状。
27	A	d－3	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に大型の紐線、直下を沈線区画。
28	A	c－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、上例に類似、条線右下り。
29	A	b－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部帯から離れて紐線、条線弧状。
30	A	c－5	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、厚い紐線口唇部帯に併行、条線弧状。
31	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、紐線直下に沈線区画、条線右下り、内面に稜。
32	A		排　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、内面にナゾリ。
33	A	c－2	Ⅱ	安行　式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、条線は右下り。
34	A	d－5	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.19に類似。

第35表　第Ⅳ－41図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	a－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	口縁部肥厚面に紐線文、直下にナゾリ、条線右下り。
2	A	d－2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口縁～胴下部	No.1の類型、口縁部肥厚、やや内弯し頸部下端で僅かに括れる胴上部にかけ膨みを持ち、内曲して底部に至る。口縁部と胴上部に紐線を貼付、器周6単位で両者を継ぐ紐線が下垂する。器面を蔽う条線は、口頸部、胴部とも右下りに統一、微細な刻文を胴上部と頸部の一部に施す。口径27.4cm、胴部最大径、28.5m、器高推計37cm。
3	A	d－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
4	A	b－2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に細い横線、直下に紐線、条線右下り。
5	A	d－2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、直下を沈線で区画。
6	A	b－5	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内面を折り返し稜を作出、円文は二重の施文、紐線直下を沈線区画条線右下り。
7	A	d－3	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口頸部器厚あり、肥厚面に紐線、条線右下り。
8	A	b－4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、内面に稜、条線右下り。
9	C	エ		安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、直下にナゾリ。
10	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.4に類似。
11	A	a－5	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部丸く肥厚、紐線薄く刺突は深い。
12	A	c－2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に紐線、区画沈線鮮明、条線ほぼ垂直。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
13	A	b—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、前例に似るも条線は垂直。
14	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.13と同一個体。
15	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.12と同一個体。
16	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.12と同一個体。

第36表　第Ⅳ—42図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—5	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	口縁部肥厚面に紐線、その直下と内面にナゾリ、スリットの区画を磨り消す。
2	A	a—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、紐線口唇部帯に併行、地文縄文、スリット。
3	A	c—2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、肥厚面に紐線、地文縄文に弧状線、スリット。
4	A	d—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、前例に類似。
5	A	c—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、内面ナゾリ、条線弧状、器面風化、スリット。
6	A	d—4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚、条線弧状、器面風化、スリット。
7	A	d—5	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、条線弧状、スリット。
8	A		表採	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.2に類似、但しスリットに磨り消しなし。
9	A	c—2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.1に類似。
10	A	d—2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、地文縄文、スリット。
11	A	d—2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、紐線口唇部帯に併行、頸部内面にナゾリ。
12	A	d—2	包含層II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、条線弧状、スリット。
13	A	c—2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、紐線部肥厚面に貼付、条線弧状、スリット。
14	A	d—2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、紐線直下にナゾリ、条線弧状、スリット。
15	A	d—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.7に類似。
16	A	d—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、条線弧状、スリット。
17	A	d—5	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、地文縄文、スリット。
18	A	d—2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.10と同一個体。
19	A	b—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚、内弯、器面の内外面とも未調整。
20	A	b—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部外面ヘラ削り、頸部に右下りの条線。
21	A	b—5	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、器面内外とも未調整、表面にヘラ削りと刷痕。
22	C	カ	包含層	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、器表にヘラナデの刷痕、胎土に貝、土器の砕片。
23	A	d—4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚、内面に稜、荒れた器面に条線。

第37表　第Ⅳ—43図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—5	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	口唇部直下に縦位刻文、下端に三角刻文を併列、条線は垂直。
2	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部屈曲、肥厚面に刻文、微細刻文。
3	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁 口	No.1の類型、口縁部内面に折り返し、外面に三角刻文、直下を強くナゾリ隆起帯状に作出。条線右下り。
4	A	d—3	包含層	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯連続三角刻文、条線ほぼ垂直。
5	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口唇部帯に併行し刻文、内面に稜、条線右下り。
6	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、前例に類似。
7	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、刻文強いナデにより押し潰す。条線右下り。
8	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、右下りの条線先行程、口縁部帯連続刻文。
9	A	d—4	／	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、前例に類似。
10	A		排土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.6に類似。
11	A	b—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、縦位刻文、口唇部直下、口縁部肥厚、条線右下り。
12	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部屈曲面に縦位刻文、条線右下り。
13	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、刻文縦、肥厚内面に稜、条線右下り、小破片。
14	A	d—4	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯隆起化、刻文瓜形、条線左下り。
15	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部屈曲面に刻文、内面に稜、条線右下り。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
16	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部鋭角、内外面に稜、口縁部凹帯に刻文。
17	A	d－3	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚内面に稜、外面に平滑、直下に三角刻文。
18	A	b－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯に三角形文併列、条線右下り。
19	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面直下に乱雑刻文、条線も不規則。
20	A	b－4	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面直下に刻文、条線緩い右下り。
21	A	b－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に刻文、条線緩い弧状。
22	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部屈曲面直下に刻文、条線緩い弧状。
23	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面直下に刻文、条線右下り。
24	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部内面に肥厚、連続刻文、条線右下り。
25	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.23と同一個体。
26	A	d－3	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯の刻文端正、条線ほぼ垂直。
27	A	b－5	II	安行1式	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、口縁部肥厚内面に稜、口唇部帯に併行し刻文、胴上部沈線間刻文、条線頸、胴部とも右下り、頸部に微細刻文を併列、作出良好。

第38表　第Ⅳ—44図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　縁	肥厚面に刻文、直下の条線上を帯状に磨り消す。内面に稜。
2	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
3	A	d－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
4	A	d－5	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
5	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に刻文、内面ナゾリ、条線右下り。
6	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、刻文縦、条線右下り、微細刻文。
7	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に瓜型刻文、直下にナゾリ。
8	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に連続刻文、条線上に微細刻文。
9	A		排　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面直下に三角刻文、条線右下り。
10	A	d－2	包含層 II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、刻文、条線とも極細、器厚薄く器面風化。
11	A	b－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、縦位刻文口唇部帯に併行。条線ほぼ垂直。
12	A	d－3	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に刻文、条線ほぼ垂直。
13	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に三角刻文連続、条線右下り。
14	A	d－3	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似。
15	A	d－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部直下を押圧隆起帯を作出、刻文瓜型、胴上部も同質刻文、上端に沈線区画の無文帯、条線右下り。
16	A	d－2	包含層	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部外反、肥厚面に三角刻文、器面風化。
17	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口唇部帯直下に刻文、条線垂直、器面風化。
18	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に刻文、内外面ともヘラ削り。
19	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に縦位刻文、表面軽いナゾリ。
20	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部屈曲、刻文直下を沈線区画、スリット。
21	A	c－5	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部肥厚、刻文直下に横線、
22	A	b－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚な口縁部、横線を伴う刻文、条線乱調。
23	A	d－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に三角刻文、直下に横線、条線右下り。
24	A	d－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に刻文、直下に横線、条線右下り。
25	A	d－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯横線を伴う刻文、条線右下り。
26	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、内弯する口縁部外面に刻文、直下に横線。
27	A	d－4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、小破片、刻文、横線、条線とも粗雑。
28	A	b－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に横線と刻文、胴上部に沈線間刻文。
29	C	カ	包含層	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、肥厚面に横線と刻文帯、条線上に微細刻文。
30	A	d－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.21に類似。
31	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.28に類似。
32	A	d－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　縁	No.1の類型、No.25に類似。

第39表　第Ⅳ—45図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～底	口縁部帯横線を伴う三角刻文、胴上部も同種の沈線間刻文、条線はともに右下りで統一、頸部と胴上部に微細刻文と帯状の磨り消しを施す。口径25.6cm、器高34.4cm、底径3cm。
2	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、頸部器厚3mm、小型土器、条線不規則。
3	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯刻文に横線、直下に三角刻文併列。
4	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、口縁部帯横線と爪形刻文、器面風化。
5	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、口縁部帯刻文に横線、条線右下り。
6	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、上例に類似。
7	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、刻文横線を掻き消す。直下に刻文帯が併列。
8	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯横線を伴う刻文、不規則条線右下り。
9	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、器面½に炭化物付着、条線右下り、器面風化。
10	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.8と同一個体か。
11	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に横線と刻文、条線右下り。
12	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、文様構成前例に類似。入念な作出。
13	A	d—4	／	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、前例に類似。
14	A	d—3	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、肥厚面に刻文、口縁部直下の横線で隆起化。
15	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、本例の施文工程、条線、横線、刻文の順位。
16	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯横線と刻文、条線右下り。
17	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、刻文口唇部帯に併行、横線粗雑、条線右下り。
18	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.8に類似。
19	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、器面中央部剝落、口縁部帯横線と三角刻文、胴上部沈線間刻文。条線垂直。
20	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、No.12に類似。

第40表　第Ⅳ—46図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	口縁部肥厚面に刻文、直下の横線で隆起化、条線右下り。
2	A	d—3	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯爪形刻文と横線、条線右下り。
3	A	c—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部内面に折り返す。横線巾をとる。
4	A	d—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、横線、条線とも粗雑、条線右下り。
5	A	b—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚した口縁部帯刻文と横線、条線右下り。
6	A	d—5	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部肥厚、横線下端に帯状刷痕、条線垂直。
7	A	b—2	III	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に爪形刻文、直下に凹線、条線右下り。
8	A	c—2	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部下端の垂直条線上に帯状の磨り消し。
9	A	a—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、細い条線は右下り。
10	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚外面に刻文、直下の横線で隆起化。
11	A	d—4	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、広い口縁部帯に細密刻文、条線はヘラ状工具。
12	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、条線右下り。
13	A	b—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部丸く肥厚、横線太く条線右下り。
14	A	d—4	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、条線右下り。
15	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯爪形刻文と横線、条線上に微細刻文。
16	A	d—3	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、No.10に類似。
17	A	b—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、No.10に類似。
18	A	c—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部肥厚内面に突出、条線は垂直。
19	A	d—4	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯爪形刻文と太い横線、条線左下り。
20	A	d—4	／	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と細い横線、条線は左下り。
21	A	b—5	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線が密着、頸部に磨消し帯。
22	A	d—2	表土	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、条線左下り。
23	A	d—2	II	**安行1式**	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、刻文帯は共に隆起、刷毛目状条線右下り。
24	A	d—4	I	**安行1式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、刻文アナダラ属の貝殻圧痕、直下に微細刻文。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
25	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.24と同一個体。
26	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.24と同一個体。
27	A	c—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、刻文間隔をあけ連続、横線と密着、条線粗雑。
28	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、先工程の条線口縁部帯に及ぶ、頸部に刻文。
29	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯不鮮明、条線右下り、小破片。
20	A	b—5	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文間隔をあけ連続、頸部に細刻文。
31	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部の刻文直下にナデ、右下りの条線は雑。
32	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部、胴上部の刻文同一施文具、条線垂直。
33	A	b—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、不規則な条線右下り。
34	A	c—4	／	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、前例に類似。
35	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯三角刻文と鮮明な横線、条線は右下り。
36	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、No.4と同一個体、胴上部沈線間刻文。

第41表　第Ⅳ—47図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d—2	包含層	安行1式	平縁深鉢	口　頸	口縁部肥厚、内面に稜、口縁部帯三角刻文と横線、条線右下り。
2	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、右下りの条線は巾狭いヘラ状工具の押し引き。
3	A	d—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、頸部1/3が剝落、垂直の条線は細いヒゴを使用。
4	A	d—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.3と同一個体、器面約2/3が剝落。
5	A	b—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯巾狭く、右下りの条線丸棒状工具。
6	A	b—4	／	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、胴上部に沈線間刻文、頸部の条線上に帯状の磨り消しと刺突を施す。
7	A	c—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、前例に類似、条線は丸棒状工具の軽い押し引き。
8	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、口縁部肥厚面に三角刻文、直下に横線、胴上部は沈線間刻文、条線はヘラ状工具の削ぎ落し、ほぼ垂直、胴部でやや右下り。
9	A	c—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.7と同一個体。
10	A	b—5	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部内面に突出、条線ほぼ垂直、微細刻文。
11	A	b—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、上例に類似。
12	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯の刻文は小粒、条線右下り。
13	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、条線弧状、内面に稜。
14	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.13と同一個体。
15	A	d—2	Ⅲ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、横線太く鮮明、弧状の条線を磨り消す。
16	A	d—2	表　土	安行2式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面直下に連続刻文、条線は弧状。
17	A	d—2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、連続する三角刻文は細い横線と密着。
18	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯縮小、刻文微細、器面未調整。
19	A	d—4	／	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面上端に刻文と横線、器面風化。
20	A	d—4	／	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、頸部の条線は不規則。

第42表　第Ⅳ—48図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	b—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	沈線間刻文巾広く構成、内面にナゾリ、器表面は未調整。
2	A	b—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、器面が風化、区画沈線確認不能、条線弧状。
3	A	c—2	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部外反、条線、沈線、刻文の工程順位。
4	A	d—4	表　土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、頸部の刷痕条線状。
5	A	c—4	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線2条、内弯、条線右下り。
6	A	d—3	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯前例に類似、器面は未調整。
7	A	b—5	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、刻文口唇部帯に併行、2条の横線間巾をもつ。
8	A	b—5	Ⅰ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.7と同一個体、区画内条線を磨り消す。
9	A	d—2	Ⅱ	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、胴上部も横線2条の区画帯、条線は右下り。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
10	A	d－3	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯連続刻文と横線、条線は右下り。
11	A	d－4	表土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯広く作出、内面に稜、条線右下り。
12	A	b－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯連続刻文と横線、直下に細刻文。
13	A	c－3	表土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.6に類似、但し口縁部肥厚し強く内弯。
14	A	d－4	／	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、頸部にスリット、区画内を磨り消し、条線右下りで密。
15	A	b－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚する口縁部、内面に2段の折り返し、三角刻文は大型、細密条線右下り。スリットあり。
16	A	c－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.15と同一個体。
17	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、小破片、口唇部に接し大型刻文、瘤も付く。
18	A	d－2	III	安行1式	鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯隆起帯刻文、体部は弧状線。
19	C	ア、イ	包含層	安行1式	鉢？	口　頸	No.1の類型、口縁部帯の刻文大型、直下に押し引き状凹帯。
20	A	d－3	II	安行1式	鉢	口　頸	No.1の類型、小破片、口縁部帯刻文と横線、体部は研磨。
21	C	ア、イ	包含層	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面に半月状の大型刻文。
22	A	d－2	表土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯広く作出、刻文大型、口頸部内弯。
23	A	c－5	II（下部）	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に刻文、直下にナゾリ、斜行沈線。
24	A	c－2	表土	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚する口縁部屈曲、直下にナゾリ。
25	A	d－3	I	安行1式	鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、器表面は未調整。
26	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部屈曲、刻文帯直下にナゾリ、スリット。
27	A	b－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面大型刻文、頸部条線磨り消す。
28	A	b－5	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.23に類似、小破片。
29	A	b－5	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と横線、条線は不規則。

第43表　第Ⅳ—49図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－2	III	安行1式	平縁深鉢	口　頸	肥厚する口縁部帯多条沈線、内面にナゾリ、条線右下り。
2	A	d－2	包層層	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯刻文と多条沈線、内面にナゾリ。
3	A	b－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯横線に縄文、条線は不規則な弧状。
4	A	b－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯横線に縄文、条線弧状、内面にナゾリ。
5	A	c－2	II	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部帯横線に縄文、内面に稜、条線右下り。
6	A	d－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、縄文帯中央部に刻文を点列、条線右下り。
7	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚する口縁部帯横線に縄文、条線右下り。
8	A	b－4	I	安行1式	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部屈曲、条線右下り。
9	A	c－4	I	安行1式	平縁深鉢	口縁～胴	No.1の類型、口縁部帯刻文、肥厚する内面に稜、胴上部に無文帯、上下に沈線間刻文を併列、条線は頸部、胴部とも上向きの弧状線、頸部にスリット、口径29cm、胴部最大径26.5cm。L＝－30。

第44表　第Ⅳ—50図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	a－4	／	安行2式	波状深鉢	口　縁	波頂先端部に突起、直下に瘤、口縁帯2帯の隆起帯、下位刻文帯が三角帯を形成、頂部に截痕の瘤、区画沈線枠状文。
2	A	c－2	II	安行2式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、口縁部隆起帯縄文、瘤が剝落。
3	A	c－2	II	安行2式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、波頂先端部と瘤が剝落。
4	A	d－2	II	安行2式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、波頂中央部に大型の瘤。
5	A	d－3	包含層	安行1式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、口縁部帯隆起帯刻文の多段化、先端部と瘤欠損。
6	A	d－4	I	安行2式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、No.1に類似、三角帯下端に截痕の瘤。
7	A	d－4	I	安行2式	波状深鉢	口　縁	No.1の類型、波底部の破片、区画沈線枠状文、瘤は剝落。
8	A	c－4	I	安行2式	注口土器	口　縁	口縁部2帯の隆起帯、直下に三角刻文、左下端に円文。
9	A	b－4	I	安行2式	平縁深鉢	口　縁	肥厚する口縁部屈曲、巾広い口縁部帯は隆起帯縄文。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
10	A	b－5	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　縁	No.９の類型、No.９に類似、口縁部内弯、区画沈線枠状文。
11	A	d－4	II	**安行２式**	不　明	口　縁	口縁部極度に肥厚、内外面とも未調整、台付土器脚部か。
12	A	b－4	I	**安行１式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.５に類似、波底部の破片。
13	A	c－4	I	**安行１式**	平縁深鉢	口　縁	No.９の類型、器面風化、瘤に横位の刻み、縄文ＬＲ。
14	A	b－4	I	**安行２式**	台付　鉢	口　縁	口縁部帯横線を伴う刻文、装飾の主体は頸部、沈線間刻文の区画内、斜条線とスリット、瘤が付く。
15	A	d－2	II	**安行２式**	台付鉢	口　縁	No.14の類型、上例に類似。
16	A	d－3	II	**安行２式**	台付鉢	口　縁	No.14の類型、No.14に類似。
17	A	d－2	II	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、波底部の口縁部帯は大型瘤、左端に截痕の瘤。
18	A	c－2	III	**安行２式**	台付鉢	口　縁	No.14の類型、No.14に類似。
19	A	b－4	I	**安行２式**	台付鉢	体	No.14の類型、沈線区画の刻文帯と弧状線、瘤が付く。
20	A	a－4	I	**安行２式**	台付鉢	体	No.14の類型、No.19に類似。
21	A	d－4	／	**安行２式**	台付鉢	体	No.14の類型、No.19に類似。
22	A	c－4	表　土	**安行２式**	台付土器	脚	No.14の類型、隆起帯上に細刻文、上端は縄文帯。
23	A	b－4	I	**安行２式**	甕	頸～胴	小破片、頸部の隆起帯刻文上に瘤、括れ部に三角刻文を併列。
24	A	d－3	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　縁	No.９の類型、隆起帯の作出、強い押し引き、沈線多条。
25	A	c－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　縁	No.９の類型、上例に類似、小型の土器。

第45表　第Ⅳ－51図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－2	包含層	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	波状口縁深鉢の波底部、大型瘤は横位截瘤、小型瘤は豚鼻状。
2	A	b－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、波頂先端部と瘤に截痕、右下半部破損。
3	A	c－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、頸部斜線で綾杉文、豚鼻状瘤を中継スリット。
4	A	c－4	表　土	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、波頂先端部を円柱状、三角帯頂部に豚鼻状瘤。
5	A	c－2	II	**安行２式**	波状深鉢	胴	No.１の類型、胴上部に弧線文、連結部に豚鼻状の瘤。
6	A	d－4	I	**安行２式**	波状深鉢	頸	No.１の類型、頸部に併行線で山形を表出、接続部に瘤。
7	A	d－4	表　土	**安行3a式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、大型瘤は剝落、区画沈線は枠状文。
8	A	d－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、波底部破片、口唇部と隆起帯上の瘤がセット。
9	A	b－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、下端の沈線区画内の刻文乱調。
10	A	d－2	II	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.14に類似。
11	A	b－2	表　土	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、波底部に亘る破片。
12	A	d－2	包含層	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.11に類似。
13	A	c－2	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.11に類似。
14	A	c－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.９に類似。
15	A	b－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.９に類似。
16	A	c－2	表　土	**安行２式**	平縁深鉢	口　縁	口縁部帯は隆起帯縄文、口唇部の突起と隆起帯上の瘤が結合。
17	A	c－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　縁	No.16の類型、口唇部帯が破損欠落。
18	A	c－4	表　土	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.11に類似。
19	A	d－3	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.11に類似。
20	A	b－4	I	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、No.11に類似。
21	A	c－2	II	**安行２式**	波状深鉢	口　縁	No.１の類型、縄文帯のモチーフが直線から曲線変化。
22	A	c－5	撹　乱	**安行２式**	台付鉢	口　頸	隆起帯刻文とスリットを結ぶ接点の瘤が豚鼻状に変化。
23	A	d－3	II	**安行２式**	台付鉢	口　頸	No.22の類型、下例に類似。
24	A	c－2	III	**安行２式**	台付鉢	口　頸	No.22の類型、沈線間刻文帯が頸部下端に多帯化する。
25	A	c－2	II	**安行２式**	台付鉢	口　頸	No.22の類型、上例に類似。
26	A	b－2	III	**安行２式**	波状深鉢	胴	No.１の類型、No.５に類似。
27	A	c－2	II	**安行２式**	波状深鉢	胴	No.１の類型、No.６に類似。
28	A	c－2	II	**安行２式**	台付鉢	口　頸	口縁部は２帯の刻文と２条の横線、頸部は多条沈線の稲妻文。
29	A	d－4	I	**安行２式**	波状深鉢	頸	No.１の類型、No.21に類似。
30	A	b－4	I	**安行２式**	波状深鉢	頸	No.１の類型、波頂部下端に三角帯、瘤の直下にスリット。
31	A	d－2	II	**安行２式**	台付鉢	口　頸	No.28の類型、口唇部帯に突起、口縁部帯は２条の刻文帯、頸部

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
							は稲妻文と弧文が連繋、入り組み状をなす。
32	A	c－2	II	**安行2式**	台付鉢	頸	No.28の類型、No.28と同一個体。
33	A	c－2	II	**安行2式**	台付鉢	頸	No.28の類型、No.28と同一個体。
34	A	c－2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.16の類型、小破片、瘤は棒状、横位截痕。
35	A	d－2	包含層	**安行2式**	波状深鉢	胴	No.1の類型、括れ部の破片。
36	A	c－2	III	**安行2式**	鉢	体	スリットが豚鼻状の瘤を中継、縄文は単節RL。

第46表　第Ⅳ—52図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	c－4	II	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	口縁部の隆起帯上は縄文、又は刻文、口縁部肥厚、屈曲する。
2	A	b－4	I	**安行2式**	波状深鉢	口縁	波底部の破片、下位隆起帯に刻文、区画沈線は明瞭。
3	A	c－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、下位刻文帯は未隆起、器面未調整、枠状文。
4	A	c－4	I	**安行2式**	鉢	口縁	口唇部帯突起に連結し下端に瘤、直下の区画沈線は枠状文。
5	A	d－2	包含層	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、細長い瘤に横位截痕。
6	A	d－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部内面破損、枠状文、長い瘤に截痕。
7	C	ア、イ	包含層	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、No.1に類似。
8	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、小破片、No.1に類似。
9	A	d－3	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部沈線区画のみ、瘤に截痕、縄文無節R。
10	C		包含層	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口唇部帯に刺突文、注口土器の可能性あり。
11	A	b－4	I	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、小破片、別種の瘤が対向。
12	A	c－4	表土	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、前例に類似、沈線多条、枠状文、作出良好。
13	A	d－3	II	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、小破片、棒状の瘤に截痕。
14	A	b－4	I	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、隆起帯作出深い押し引き、長い瘤に刺突文。
15	A	d－4	I	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、口縁部帯多条沈線、瘤にも同種の沈線。
16	A	c－2	II	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、前例に類似、口唇部帯に半円状の突起。
17	A	a－5	表土	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、口縁部帯横線を伴う縄文、体部に蛇行垂線。
18	A	c－2	III	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、口縁部帯は3段帯の隆起帯刻文、口唇部帯に半円の突起、直下の瘤に截痕、下端の瘤は豚鼻状、沈線多条に弧文が連繋、体部は帯状縄文。
19	A	c－2	II	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、前例に類似。
20	A	d－4	表土	**安行2式**	鉢	口縁	No.4の類型、小破片、口縁部に潰れた瘤、瘤の横に刻文。
21	A	d－3	表土	**安行2式**		口縁	No.4の類型、口唇部帯に瘤、口縁部の瘤と対。
22	A	d－2	包含層	**安行2式**	注口土器	胴	上端破損部に注口部、直下の瘤は剝落。
23	A	d－4	I	**安行2式**	波状深鉢	頸	No.2の類型、頸部に相当する破片。
24	A	c－4	I	**安行2式**	波状深鉢	胴	No.2の類型、併行する隆起帯の上位は斜条線、直下に刻文。
25	A	c－5	表土	**安行2式**	台付鉢	口縁	口縁部帯横線に刻文、頸部に文様の主体を構成。
26	A	d－2	II	**安行2式**	波状深鉢	頸	No.2の類型、隆起帯刻文上に豚鼻状の瘤。
27	A	c－2	II	**安行3a式**	平縁深鉢	胴	No.1の類型、胴下半部に相当、帯状縄文に低い瘤が付く。
28	A	d－4	／	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部帯横線区画の縄文帯、頸部にスリット。
29	A	d－4	／	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.1の類型、口縁部肥厚面に刻文、直下に深いナゾリ。
30	A	b－4	I	**安行2式**	浅鉢	口縁	器面風化、併行する蛇行垂線と稲妻文、部分的にLRの縄文。

第47表　第Ⅳ—53図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－4	表土	**安行2式**	鉢	口縁	口縁部帯は隆起帯縄文、区画沈線枠状文、口唇部帯に併行し棒状の突起、直下に縦長の瘤、瘤と突起は別種の刻みで加飾。
2	A	c－2	II	**安行2式**	波状深鉢	口縁	波頂部先端に突起、直下に瘤、下位刻文帯が三角文を表出。
3	A	d－3	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	口縁部帯巾広く構成、縄文極細のRL。
4	A	d－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.3の類型、口縁部帯尚広い巾をもつ。
5	A	c－4	I	**安行2式**	注口土器	口縁	口縁部強く内弯、口唇部帯に弧状の瘤、直下の瘤は密着。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
6	A	d－4	表土	**安行2式**	注口土器	口縁	No.5の類型、小破片、前例よりやや小型。
7	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	注口土器	口頸	No.5の類型、口縁部帯2帯の隆起帯、瘤が連立、頸部に装飾の主体を置き、瘤を介して三角文を構成。
8	A	d－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	頸	No.3の類型、口縁部帯が破損欠落、棒状の瘤に深い刻み。
9	A	d－4	Ⅰ	**安行2式**	注口土器	口縁	No.5の類型、口縁部隆起帯刻文間に瘤、直下に貫通孔、頸部に右下りの条線。
10	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	注口土器	胴	No.5の類型、瘤を起点に刻文帯は放射状、上下は三角文。
11	A	a－2	表土	**安行2式**	注口土器	口縁	No.5の類型、頸部に微隆起帯で枠状文を表出。
12	A	d－3	Ⅰ	**安行2式**	注口土器	口縁	No.5の類型、口唇部の突起と直下の瘤が同化、下端に三角文。
13	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**		口縁	No.1の類型、小破片、No.1に類似。
14	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.3の類型、No.4に類似。
15	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.3の類型、器面を研磨、隆起帯間の瘤に刻み、枠状文。
16	A	d－2	包含層	**安行2式**	鉢	口縁～体	No.1の類型、口縁部帯巾広い隆起帯縄文、体部も連動する縄文帯、口唇部帯に突起、内向き截痕、直下に耳状の瘤。
17	A	c－2	Ⅰ	**安行2式**	波状深鉢	胴	No.2の類型、弧線文連結部に相違した瘤を連立。
18	A	c－4	焼土	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.3の類型、No.4に類似。
19	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口縁	No.3の類型、器面風化、口縁部内弯、区画沈線は太い。
20	A	d－3	Ⅰ	**安行2式**	注口土器	胴	No.5の類型、注口部太く短い、直下に瘤を貼付、微細刻文。
21	A	d－4	Ⅰ	**安行2式**	注口土器	胴	No.5の類型、小破片、注口部直下に瘤。
22	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	注口土器	胴	No.5の類型、注口側辺に截痕の瘤、下端に耳状の瘤。

第48表　第Ⅳ－54図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－2	Ⅲ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	口縁部帯の紐線剝落、条線は上向きの弧線、内面にナゾリ。
2	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部屈曲、肥厚面に紐線、条線弧状。
3	A	d－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部肥厚、条線は密。
4	A	d－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、弧状の条線は細い、スリット。
5	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部外反、口唇部平坦、内面にナゾリ。
6	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、上下にナゾリ、条線不規則。
7	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面直下に紐線、条線不規則、粗雑な作出。
8	A	b－2	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線上下を押圧、口唇部帯の瘤を潰す。
9	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、No.2に類似、条線は端正。
10	A	d－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、条線ヘラ状工具の施文、頸部に同具の刻文。
11	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚内面にナゾリ、紐線、条線とも粗雑。
12	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、No.7に類似、粗雑な土器。
13	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線肥厚下端に貼付、内面にナゾリ。
14	A	b－2	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線口唇部帯に併行、直下に沈線、条線は密。
15	A	d－2	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、内面にナゾリ、条線弧状。
16	A	b－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部外面を折り返した肥厚部に紐線、刺突文は円形、条線は密、内面に深いナゾリ。
17	A	d－4	／	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部屈曲、紐線は大型、縄文地に荒い条線。
18	A	d－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部外面に折り返し紐線、条線2度引き。
19	A	b－5	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線断面三角形、無造作に貼付、粗雑な作出。
20	A	b－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部内面にナゾリ、紐線薄く、条線太い。
21	A	d－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚外面に厚い紐線、直下に段差、条線は密。
22				**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、注記なし。肥厚外面に紐線、調整は良好。
23	A	c－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、大型紐線口唇部帯に併行、内面に稜を作出。
24	A	c－4	Ⅰ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線肥厚面下端に貼付、直下にナゾリ。
25	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、紐線細く厚い、上下に段差、条線不鮮明。
26	A	b－2	Ⅲ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、前例に類似。
27	A	d－2	Ⅱ	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、上下にナゾリ。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
28	A	c－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部内弯、肥厚面に高い紐線、上下に段差、刻文密、条線薄く粗雑。
29	A	c－2	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚下端に厚い紐線、条線なし。
30	A	b－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、上下に沈線区画、条線垂直。
31	A	c－3	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、頸部に蛇行紐線下垂、器面風化。

第49表　第Ⅳ－55図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	d－2	包含層	**安行2式**	平縁深鉢	口縁～底	現存½弱、口頸部内弯し胴上部で最大径、以下底部へ緩やかに移行、口縁部と胴上部に紐線、側辺にナゾリを加える。器面は荒い右下りの条線、胴下半部では器体を逆にし、右から左へ同横の条線を施す。口径28cm、器高33.6cm、胴最大径32cm、底径5.2cm。
2	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部折返し面に紐線、条線右下り。
3	A	c－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、紐線口縁部の屈曲を利用、上下にナゾリ。
4	A	b－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面下端に紐線、条線右下り、粗雑。
5	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に厚い紐線、条線右下り。
6	A	b－2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、薄い紐線を押圧し帯状に作出、条線右下り。
7	A	c－2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、紐線肥厚面下端に貼付、条線右下り。
8	A	c－2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚面に紐線、頸部にも下垂。
9	A	d－2	表土	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部弯曲部に高い紐線、頸部に垂直、斜行のスリット、条線は不規則。
10	A	c－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部弯曲肥厚、紐線直下にナゾリ、スリット。
11	A	c－5	II	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部内弯肥厚、縄文地に弧線、スリット。

第50表　第Ⅳ－56図の解説

No.	出土地点		層位	型式	器形	部位	特徴
1	A	c－2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	口縁部肥厚面に粘土紐、刻みを深くし隆起化、右下りの条線にスリット。
2	A	b－2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚下端に紐線、縄文地に弧線、スリット。
3	A	d－2	II	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に大型紐線、縄文地に弧線、スリット。
4	A	b－5	I	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、薄い紐線を隆起化、条線弧状、スリット。
5	A	d－2	II	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.3と同一個体。
6	A	d－2	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に大型紐線、条線弧状、スリット。
7	A	d－2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、上例に類似。
8	C	エ	／	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に大型紐線、条線左下り、スリット。
9	A	a－5	表土	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に薄い紐線、条線弧状、スリット。
10	A	a－4	I	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、紐線の円形押圧文が密着、直下にナゾリ。
11	A	c－4	表土	**安行3a式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部外面折返し肥厚、スリット、器面風化。
12	A	d－4	／	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、直下にナゾリ、条線右下り。
13	A	b－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚部下端に薄い紐線、直下に強いナゾリ。
14	A	d－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚部下端に紐線、直下にナゾリ、条線弧状。
15	A	c－4	II	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚部下端に紐線、直下にナゾリ。
16	A	d－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部肥厚、内面に稜、紐線直下にナゾリ。
17	A	d－3	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、内外面丁寧に研磨。
18	A	d－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、直下にナゾリ、条線右下り。
19	A	b－2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、上例に類似。
20	A	b－2	III	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、口縁部極度に肥厚、紐線大型、条線右下り。
21	A	d－2	II	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、上例に類似。
22	A	d－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口　頸	No.1の類型、No.18と同一個体。

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
23	A	b－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面にくずれた紐線、条線右下り、粗雑。
24	A	d－3	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、紐線直下に太い沈線、頸部にも紐線下垂。
25	A	d－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.20に類似。
26	A	c－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.20に類似。
27	A	c－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面に大型紐線、直下にナゾリ、条線右下り。

第51表　第Ⅳ－57図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	d－2	包含層	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	口縁部外面に折り返した肥厚面に刻文、直下にナデ、条線右下り、頸部に帯状の磨り消し。
2	A	c－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、粘土紐に刻文、直下にナデ、スリット。
3	A	d－3	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部極度に肥厚、紐線直下にナデ。
4	A	d－4	表　土	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面に紐線、条線右下り。
5	A	d－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、内面に稜、肥厚面な紐線、直下に沈線。
6	A	b－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面下端に紐線、直下にナゾリ、条線右下り。
7	A	d－2	表　土	**安行3a式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、紐線口唇部帯に併行、スリット併列。
8	A	b－5	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部帯横線と刻文、条線不規則な右下り。
9	A		III	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部内弯屈曲、内面にナゾリ、外面に折返した肥厚部下端に刻文、直下を乱雑な沈線で区画、弧状の条線上にも刻文が点列、粗雑な土器。
10	A	d－3	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部肥厚面に刻文、直下の横線で隆起化。
11	A	d－3	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部極度に内曲し、刻文は外面を利用。
12	A	c－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部帯横線と刻文、頸部に狭い磨り消し帯。
13	A	b－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.10に類似。
14	A	b－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.13と同一個体。
15	A	b－4	I	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.13と同一個体。
16	A	d－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.９に類似。
17	A	c－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面下端に刻文、条線弧状、器面風化。
18	A	d－2	III	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口頸部、胴部とも条線右下り、両者の傾斜極端に相違、胴上部に不規則な横線、大型破片。
19	A	d－2	III	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.18と同一個体。
20	A	d－2	III	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口唇部平坦、内面をそぎ取り直下にナゾリ、口頸部上向きの弧条線、胴部は右下りの条線、端正な作出。
21	A	b－2	III	**安行２式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部肥厚、内面に稜、弧線は不規則、粗雑。
22	A	b－5	I	**安行3b式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、前例に類似。
23	A	c－2	II	**安行3b式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.21に類似。
24	A	d－4	II	**安行3b式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.21に類似。
25	A	b－2	III	**安行3b式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、内弯肥厚の口頸部屈曲、紐線全面剝落。
26	A	d－4	I	**安行3b式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、No.21に類似、器面風化。
27	A	c－2	II	**安行２式**	平縁深鉢	胴	No.１の類型、胴上部に連続円形押圧文、直下に横線、条線右下り、頸部は上向きの弧条線とスリット。

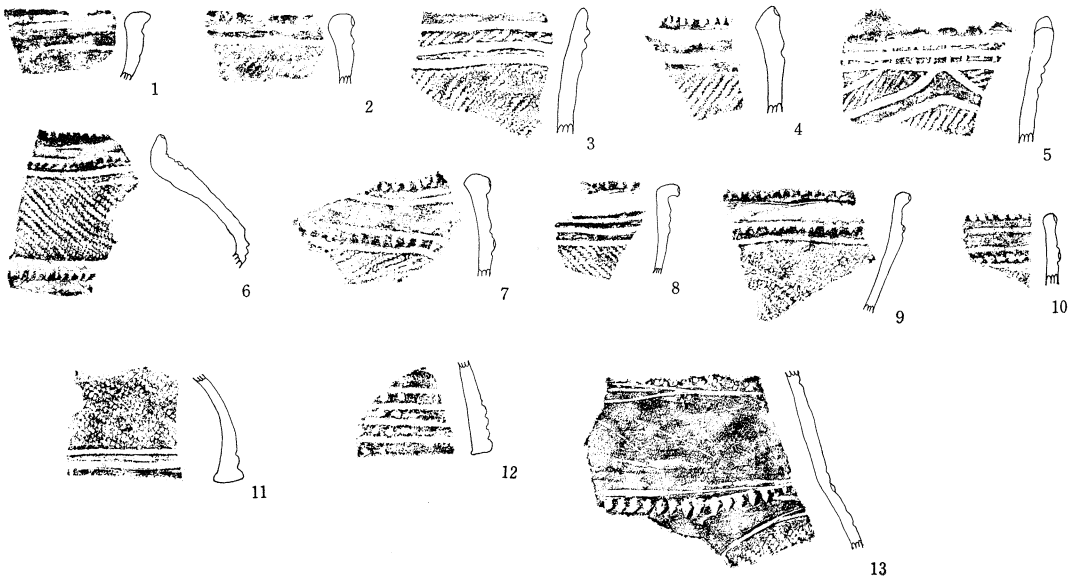
第52表　第Ⅳ－58図の解説

No.	出土地点		層　位	型　式	器　形	部　位	特　　徴
1	A	c－4	I	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	口縁部外反、肥厚面に厚い紐線、器面風化。
2	A	d－2	II	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、口縁部極度に肥厚、紐線直下にナゾリ。
3	A	c－4	I	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚下端に紐線、頸部の斜行沈線は後世の傷。
4	A	c－5	表　土	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面下端に爪形刻文、直下に太い横線。
5	A	c－4	I	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面に紐線、内面にナゾリ、スリット。
6	A	b－4	I	**安行３式**	平縁深鉢	口　　頸	No.１の類型、肥厚面に紐線、粗雑な押圧円文、スリット。

No.	出土地点		層位	型式	器形	部他	特徴
7	A	c－2	II	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、押圧円文密着、縄文地に弧条線、スリット。
8	A	d－2	表土	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、条線右下り、粗雑なスリット。
9	A	c－4	表土	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に刺突文、スリット、作出は粗雑。
10	A	c－4	I	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部弯曲外面に丸棒状の紐線、直下に横線、条線は横、スリット。
11	A	d－4	／	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面下端に紐線、弧状の条線上に併行弧線。
12	A	c－4	表土	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、弧状の条線上に対弧線。
13	A	b－4	I	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部屈曲、紐線上下にナゾリ、楕円文。
14	A	c－2	II	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、対弧文と楕円文、条線不規則。
15	A	c－2	I	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、円形押圧文密着、対弧線文。
16	A	d－3	I	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、折返しの肥厚面に深い刻文、直下にナゾリ、楕円文の充填縄文RL。
17	A	a－4	表土	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、折返しの肥厚面に縄文、直下に太い横線、条線は上向きの弧状線、胴上部に沈線区画の縄文帯。
18	A	c－4	I	**安行2式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、口縁部弯曲、内面にナゾリ、外曲面に紐線。
19	A	c－2	I	**安行3式**	平縁深鉢	口頸	No.1の類型、肥厚面に紐線、頸部に弧線文を表出。

（長岡　芳）

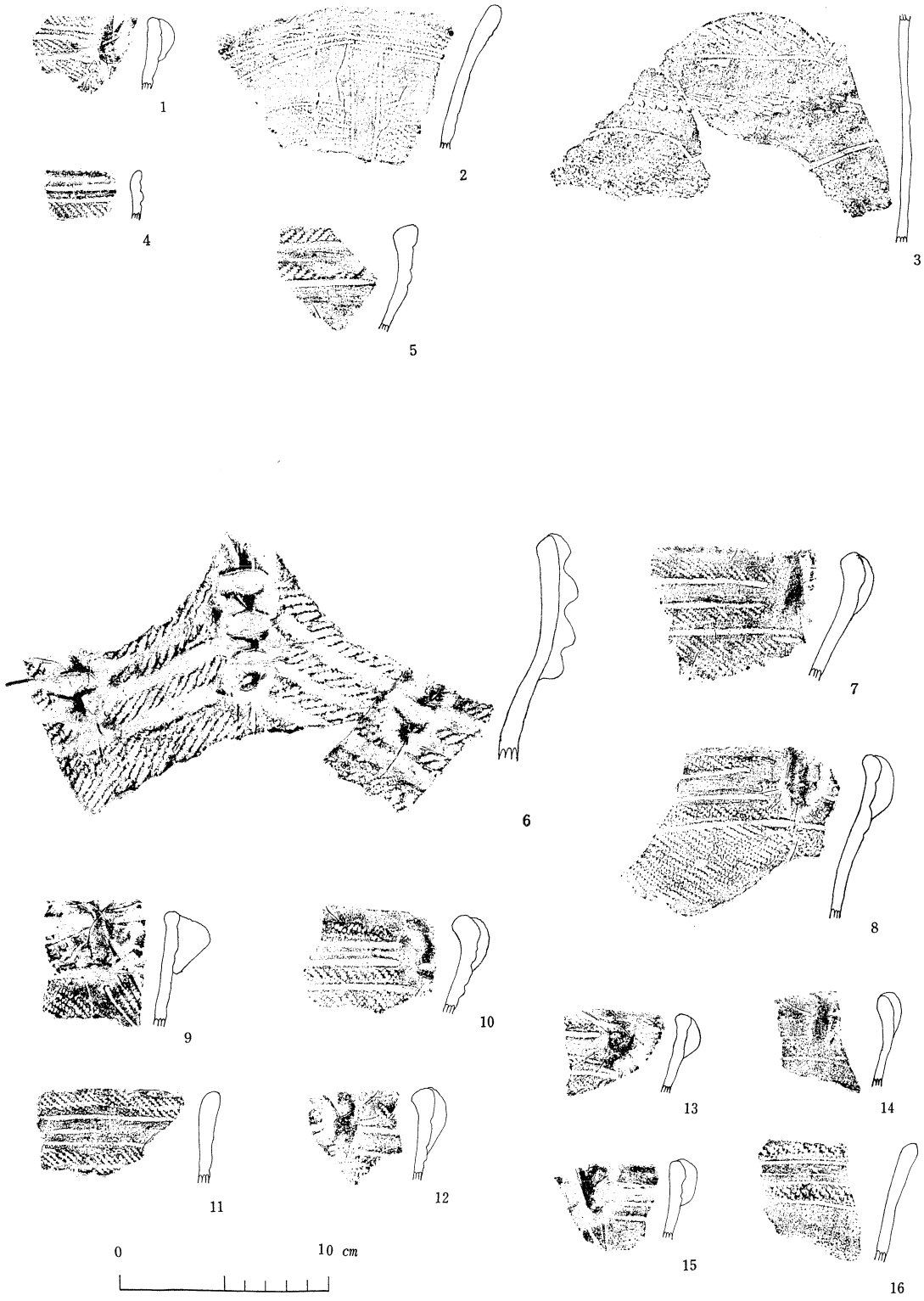
第IV-7図　曾谷式（前半）土器



0 10 *cm*

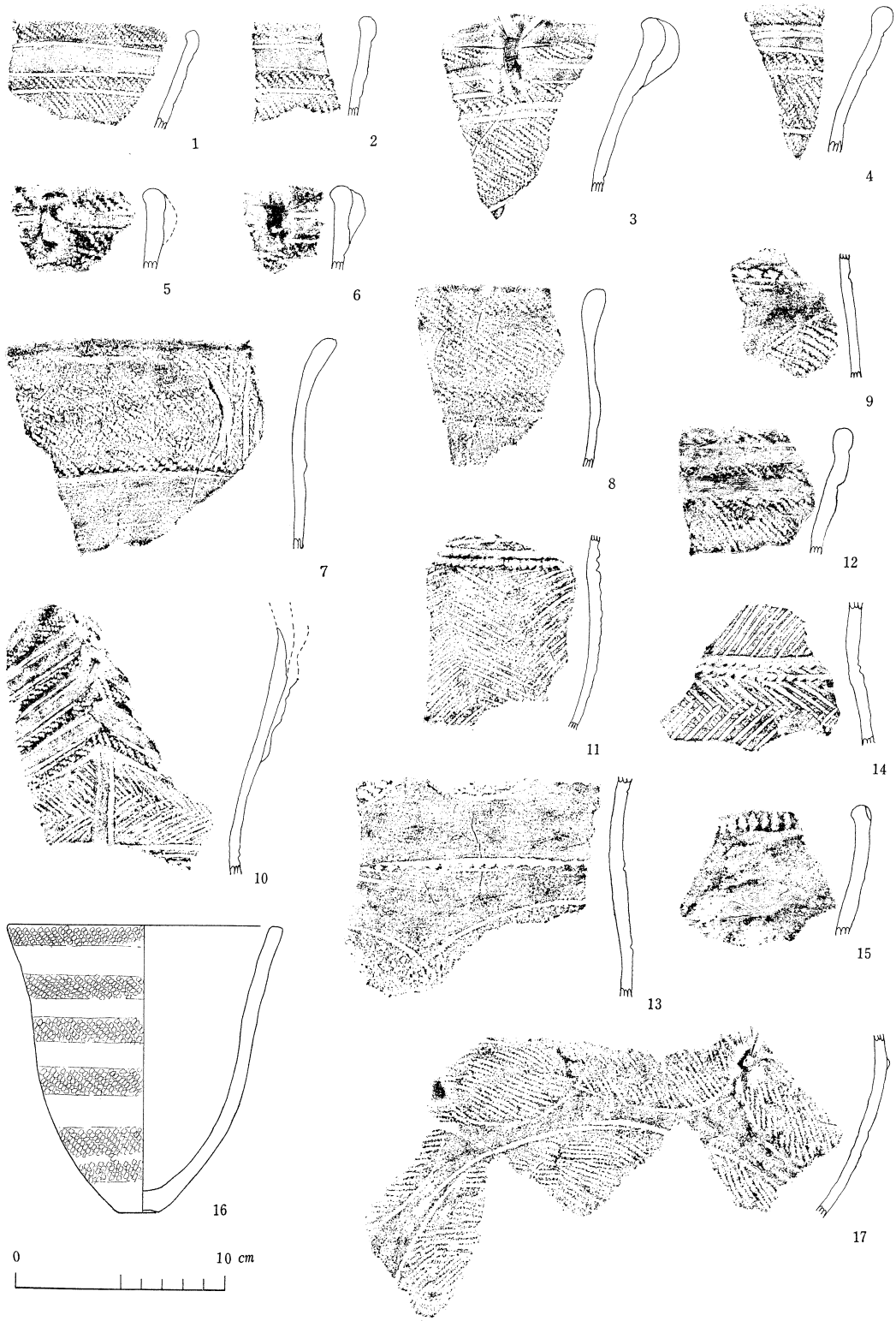
第 IV–8 図　曾谷式土器

第Ⅳ-9図　安行1式土器

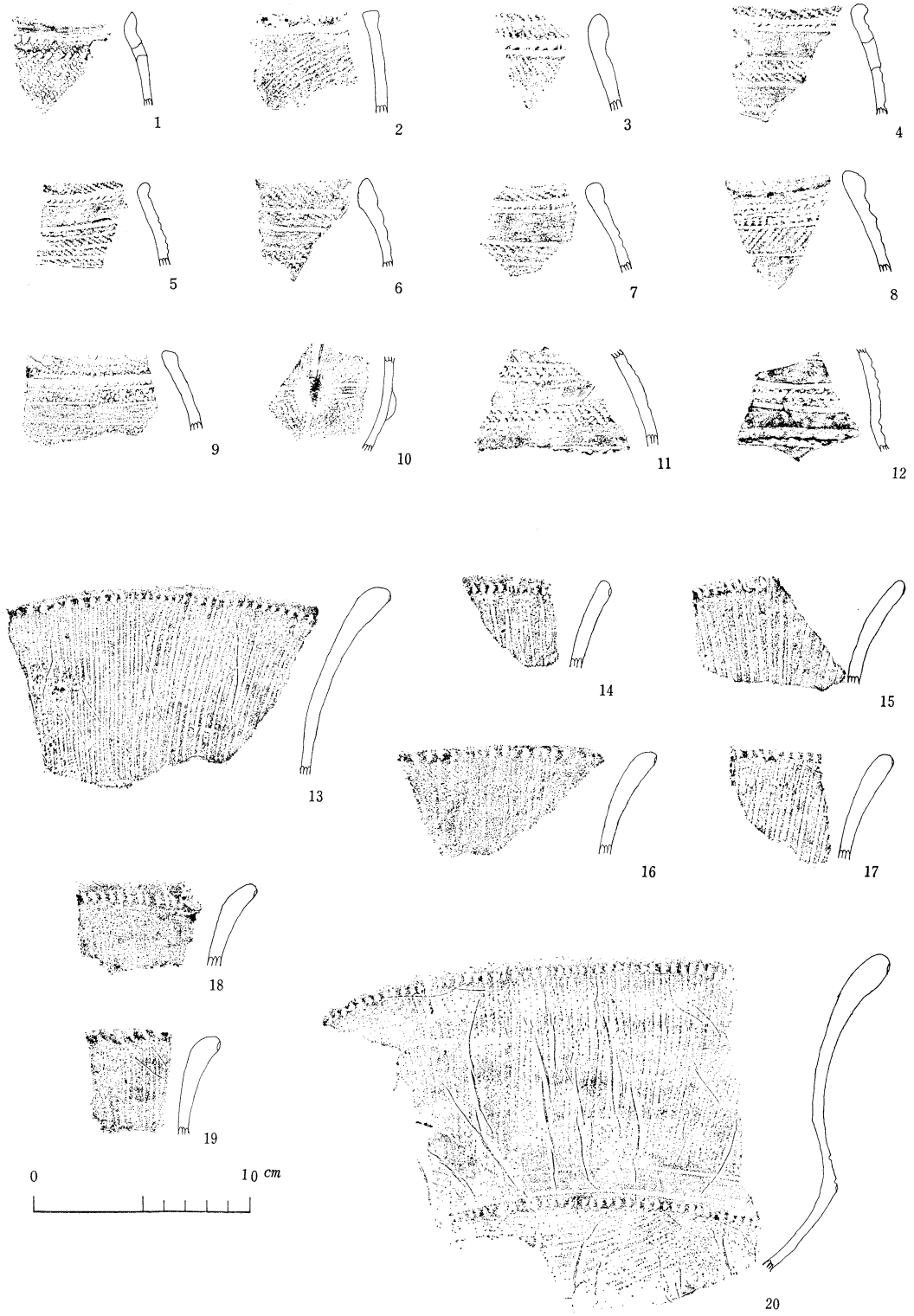


第IV-10図　安行1a式（上段）・1b式（下段）土器

第Ⅳ-11図　安行1b式（上段）・1c式（下段）土器



第 IV–12 図　安行 1c 式（上段）・安行 1 式（前半）瓢型土器



第Ⅳ-13図　安行1式瓢形・台付土器

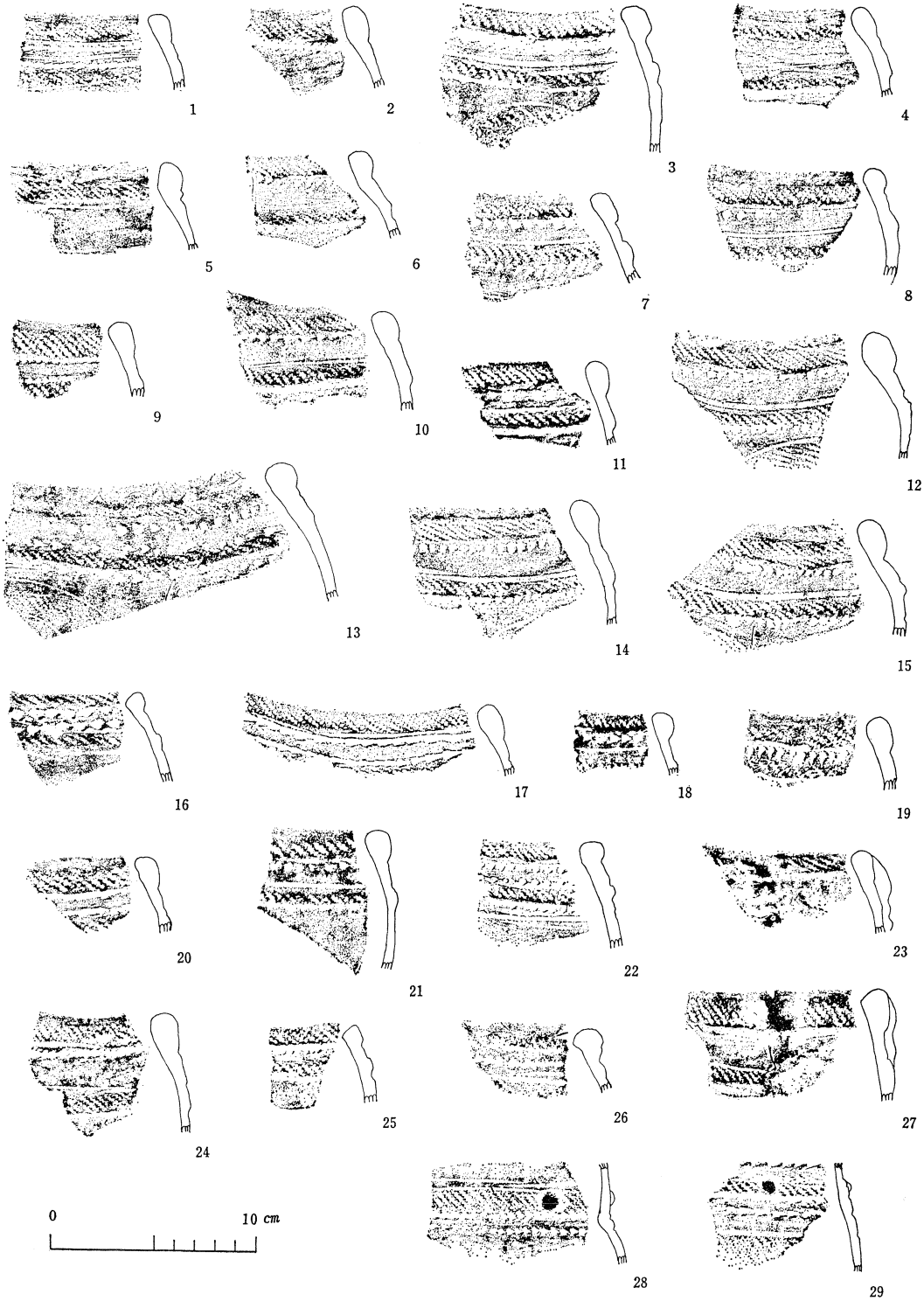
第 IV-14 図　安行 1-2 式平縁深鉢土器

第 IV-15 図　安行 1-2 式平縁深鉢土器

第 IV-16 図　安行 1-2 式平縁深鉢土器

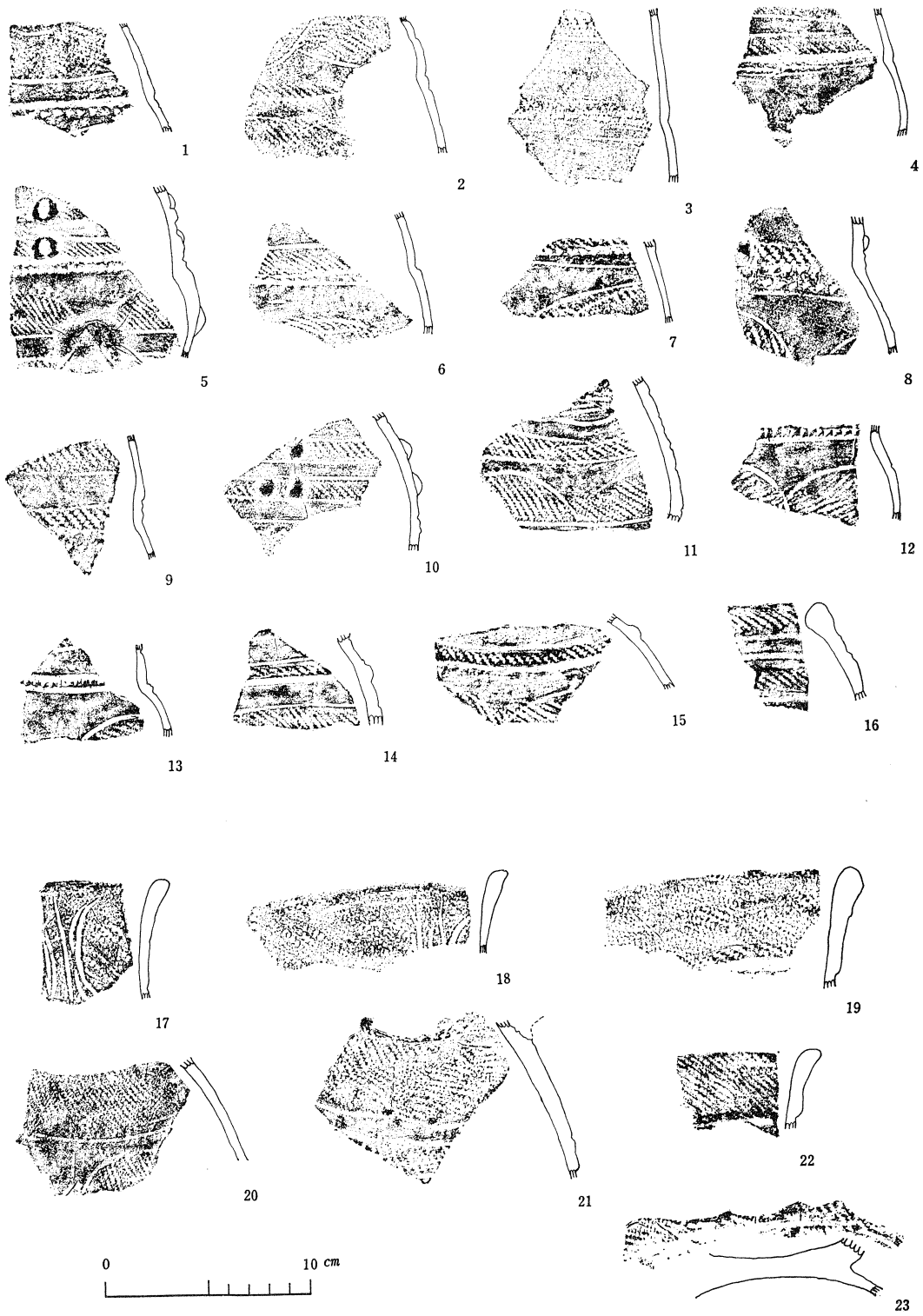
第 IV-17 図　安行 1-2 式平縁深鉢土器

第 IV-18 図　安行 1-2 式平縁深鉢（上段）・瓢形（下段）土器

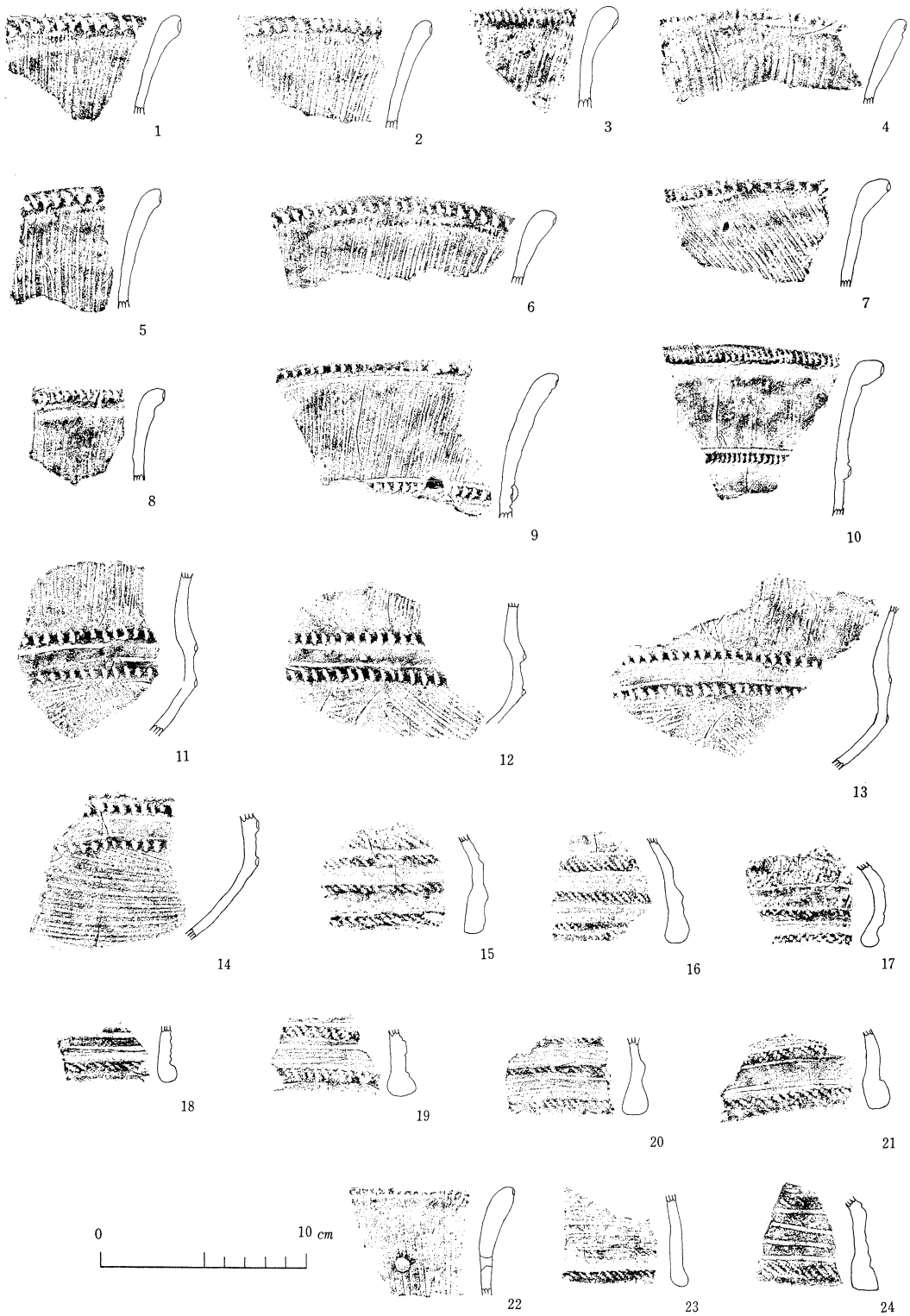


第Ⅳ-19図　安行1-2式瓢形土器

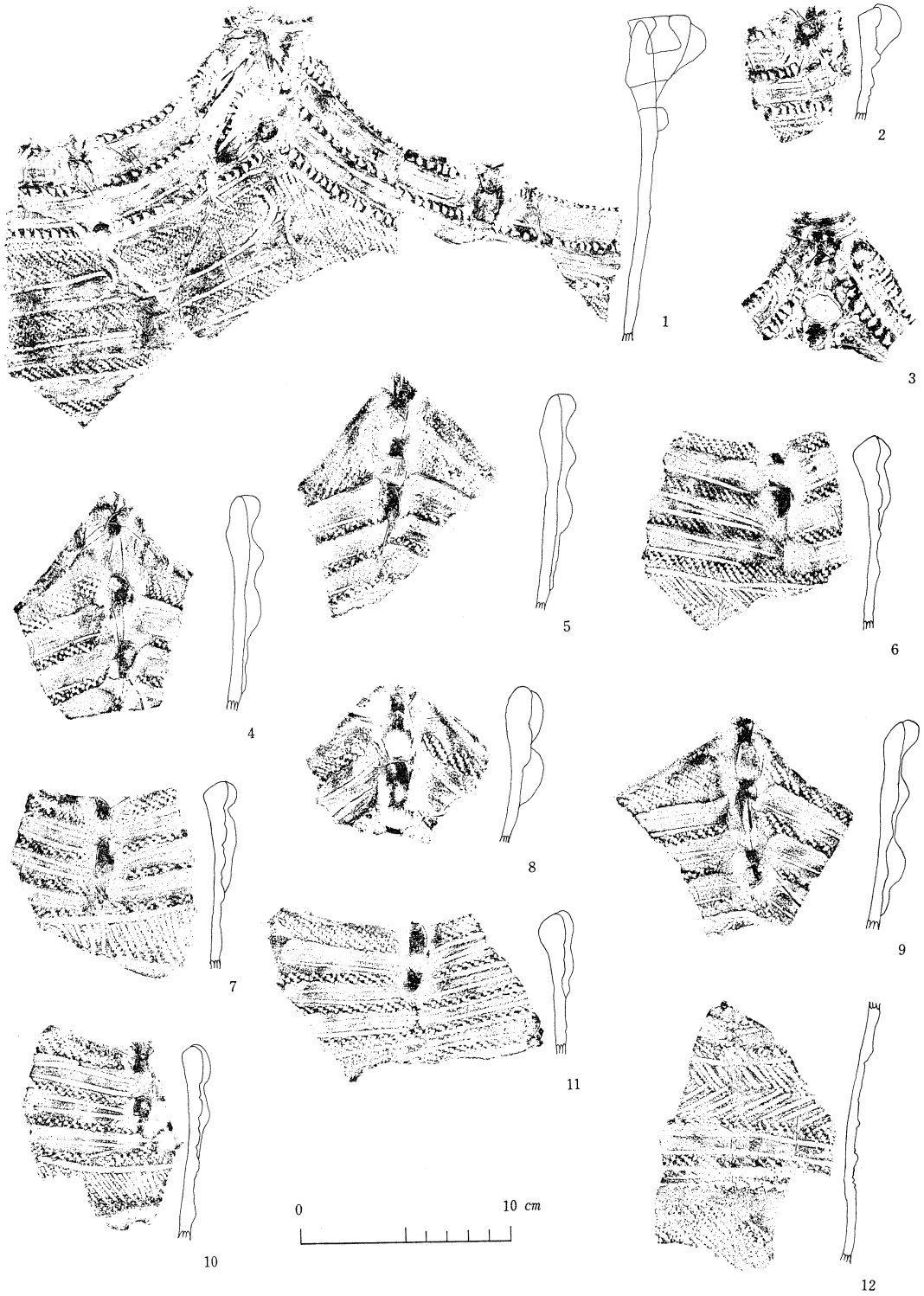
第 IV-20 図　安行 1-2 式瓢形土器



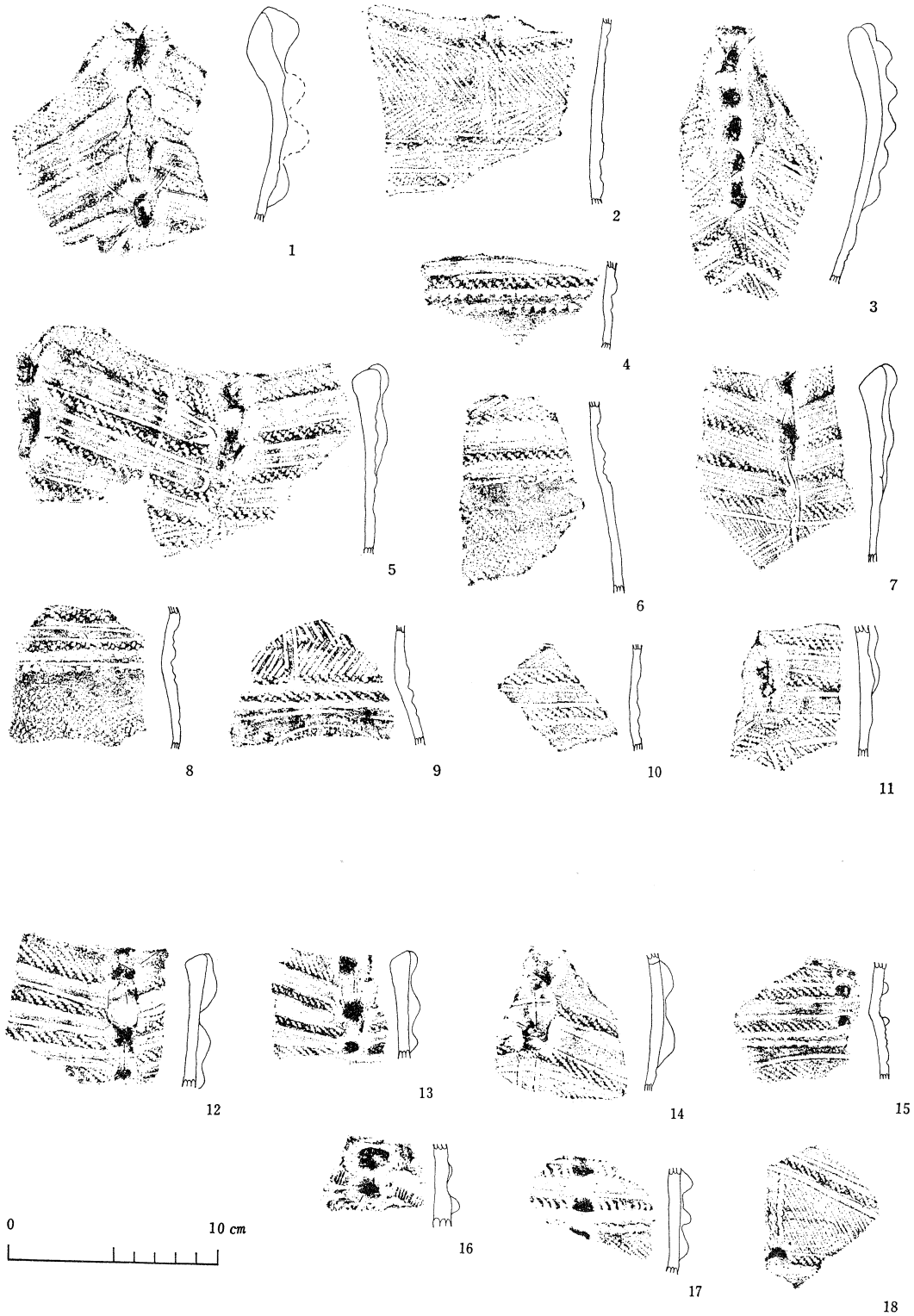
第IV-21図　安行1-2式瓢形（上段）・台付（下段）土器



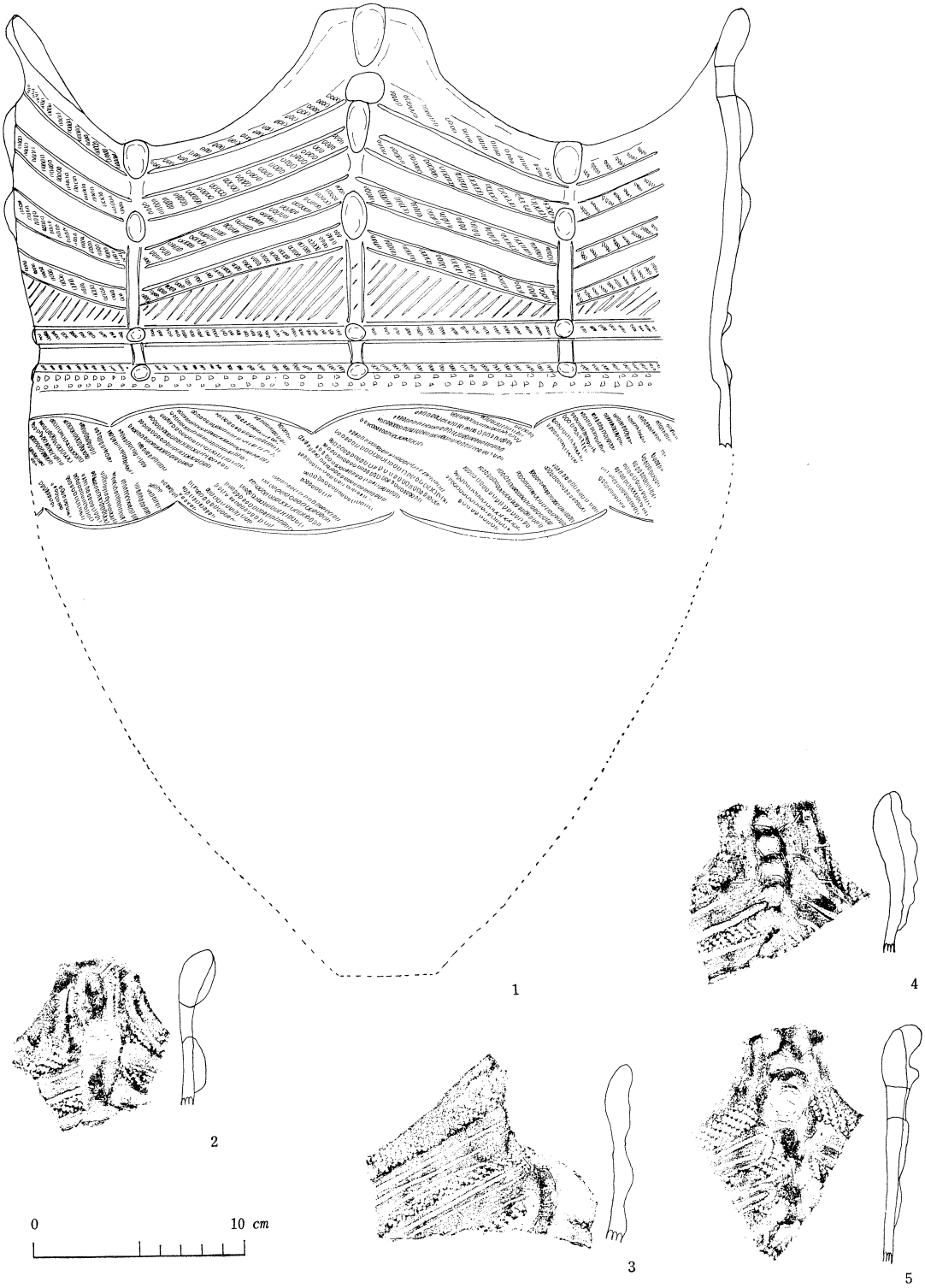
第 IV–22 図　安行 1–2 式台付土器



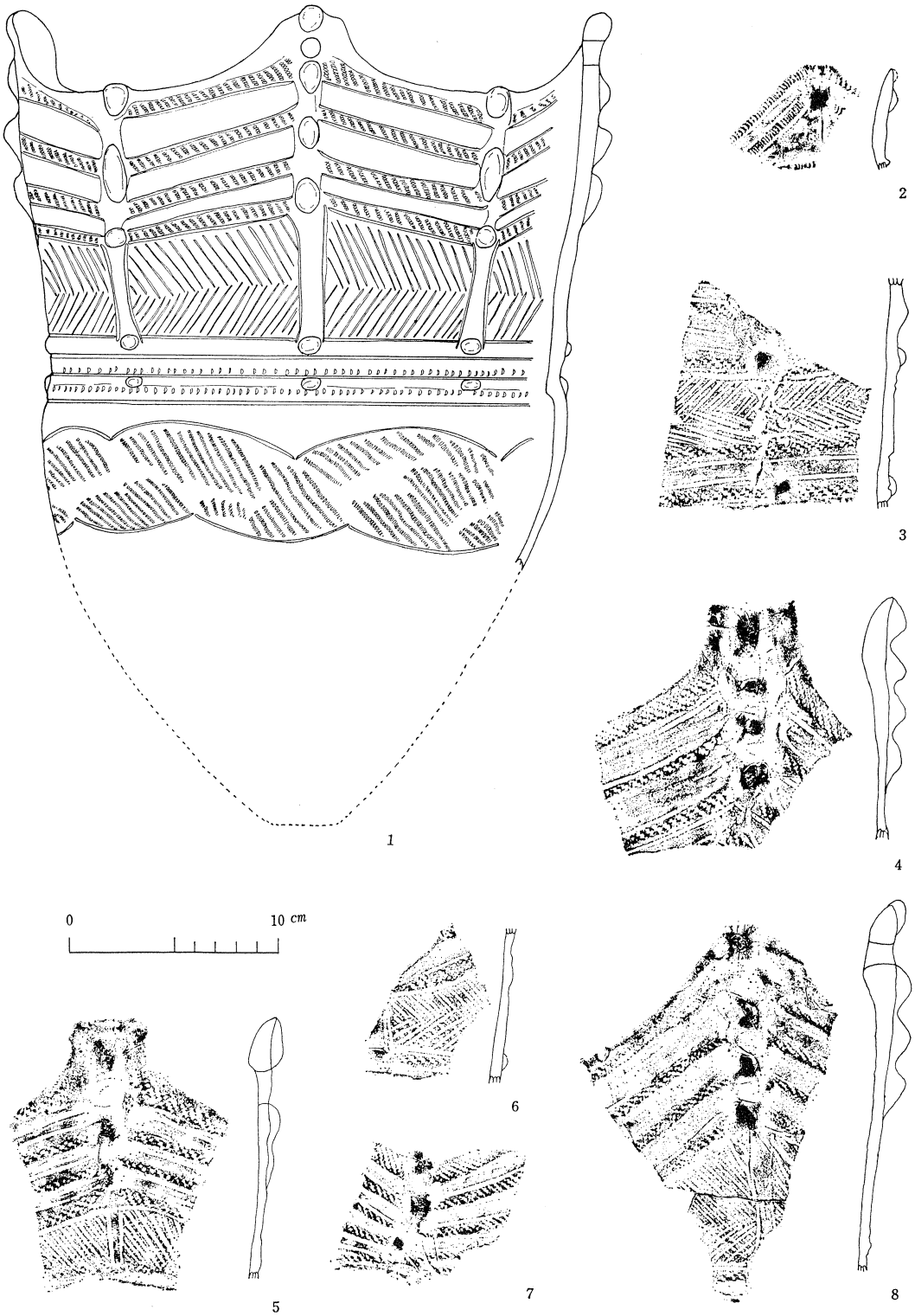
第 IV-23 図　安行 1-2 a 式波状口縁土器



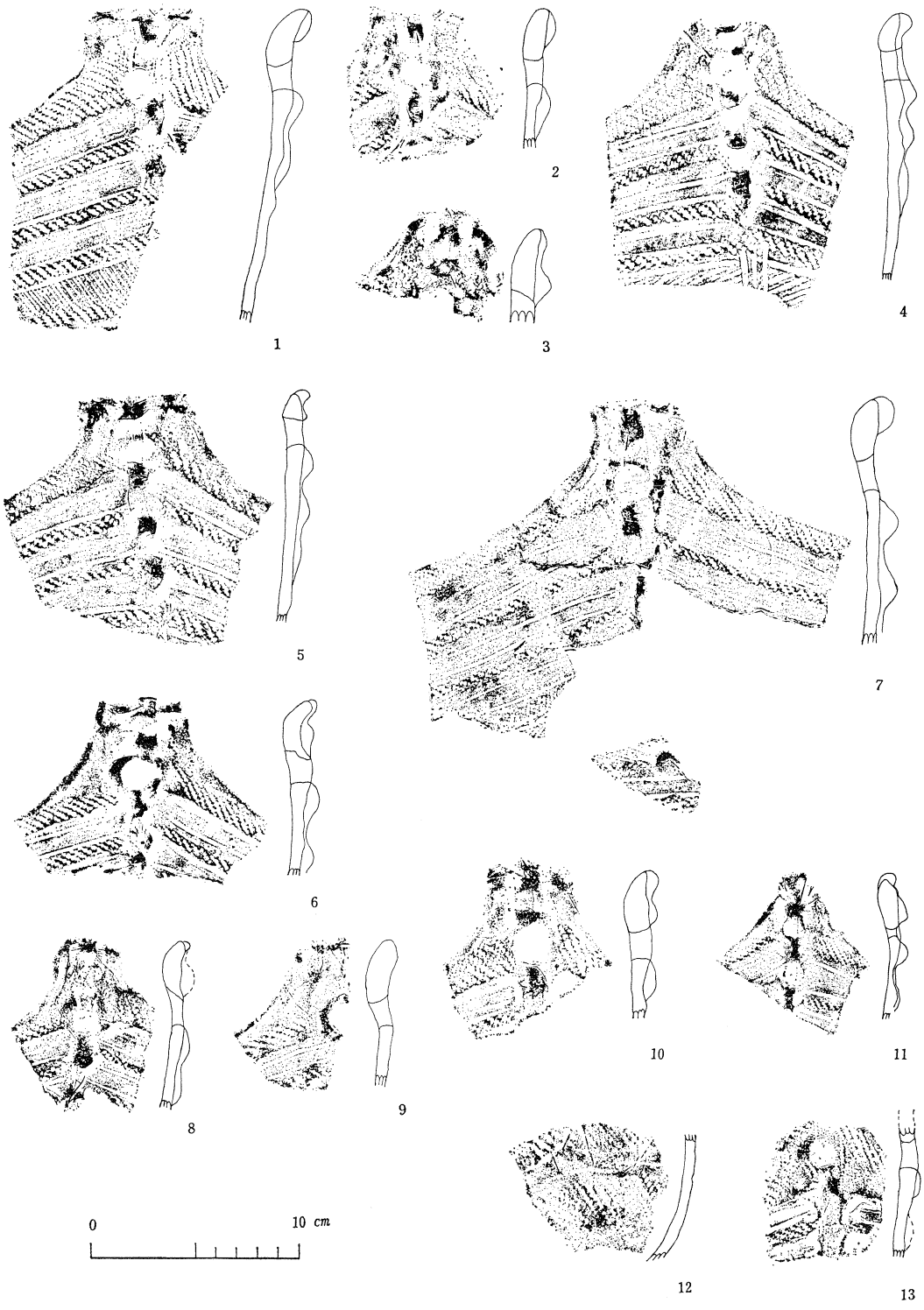
第 IV–24 図　安行 1–2 a 式波状口縁（上段）・安行 1–2 b 式波状口縁（下段）土器



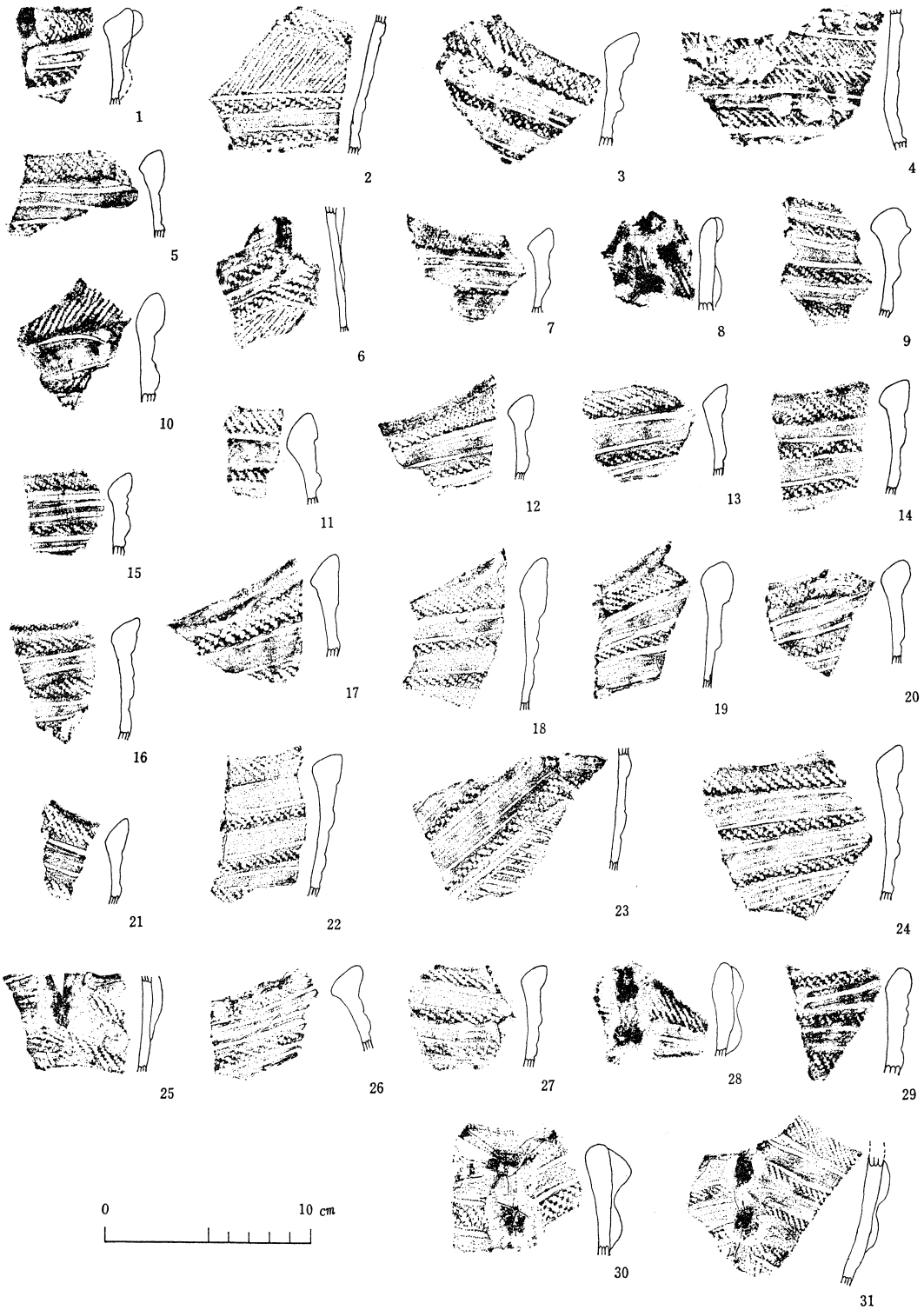
第 IV–25 図　安行 1–2 式波状口縁土器



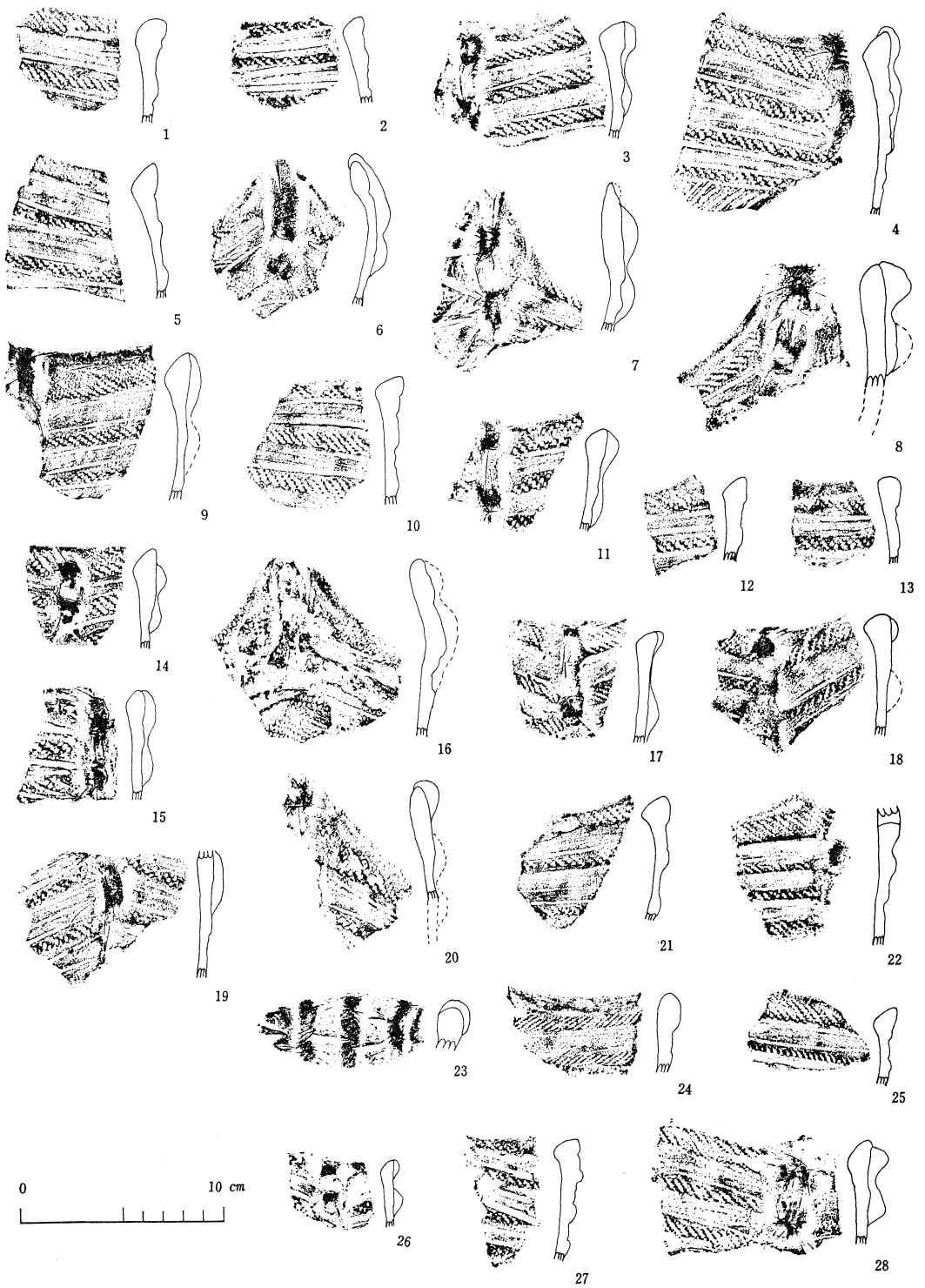
第 IV-26 図　安行 1-2 式波状口縁土器



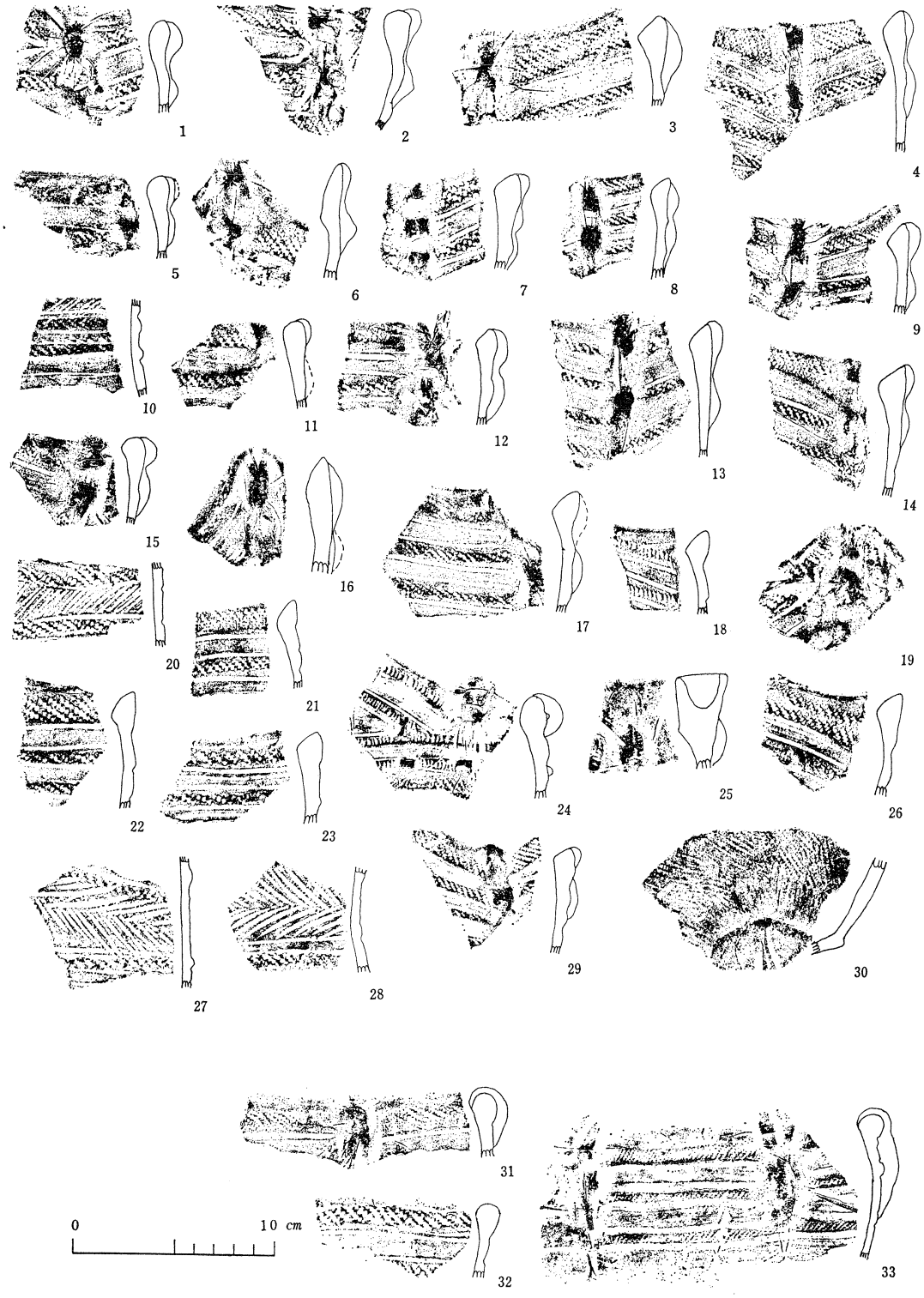
第IV-27図　安行1-2式波状口縁土器



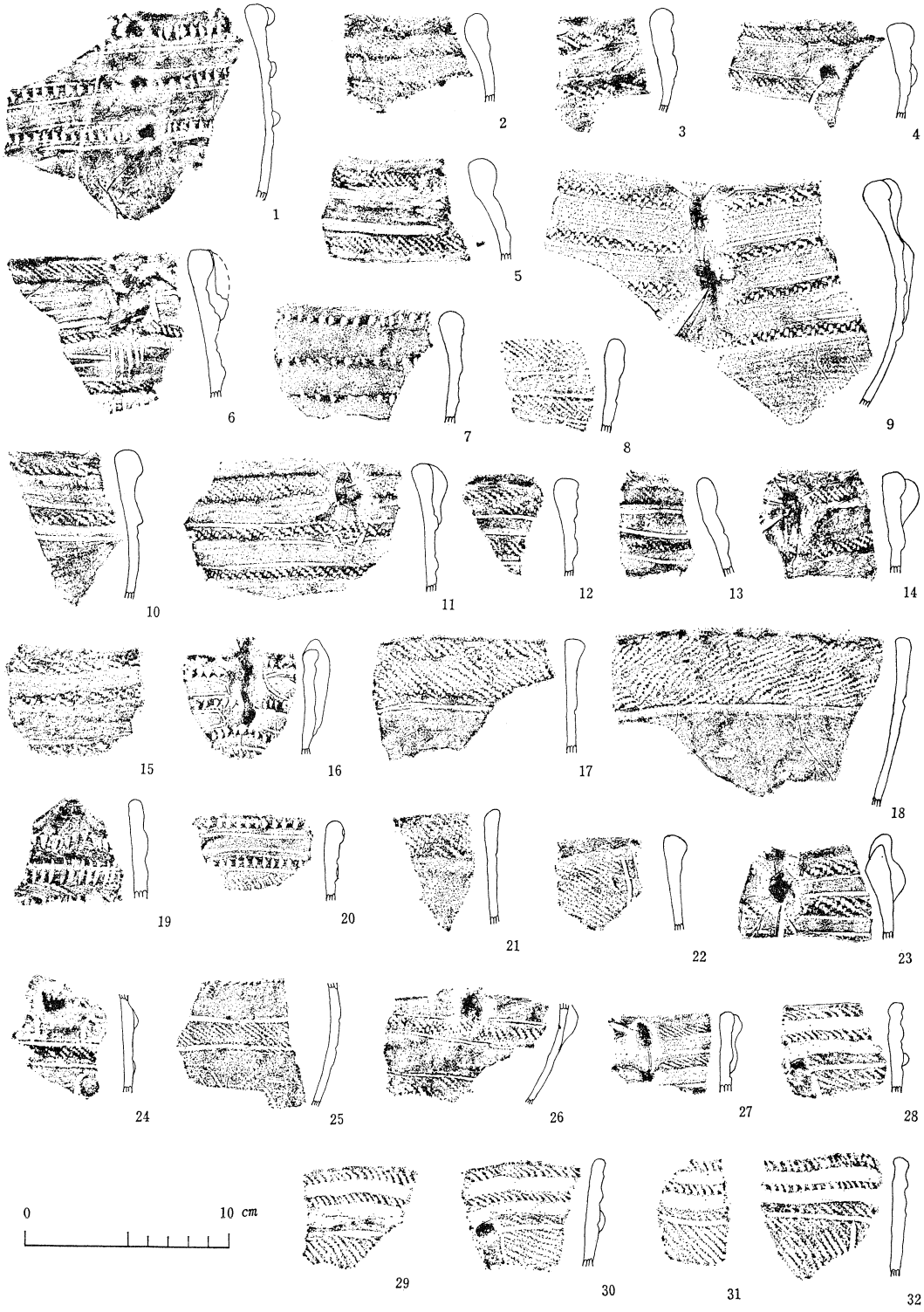
第 IV-28 図　安行 1-2 式波状口縁土器



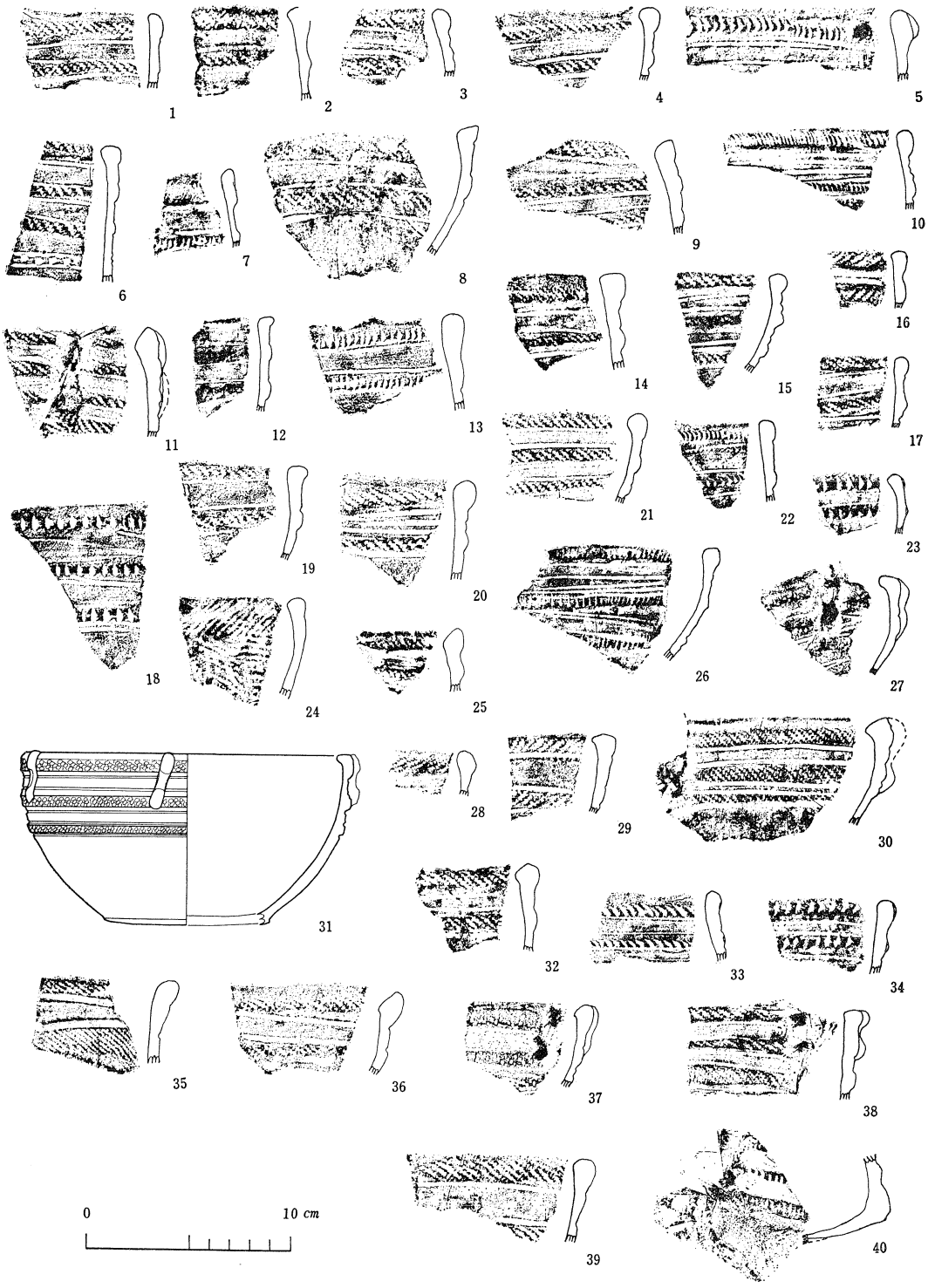
第 IV-29 図　安行 1-2 式波状口縁土器



第 IV–30 図　安行 1–2 式波状口縁（上段）・鉢型（下段）土器

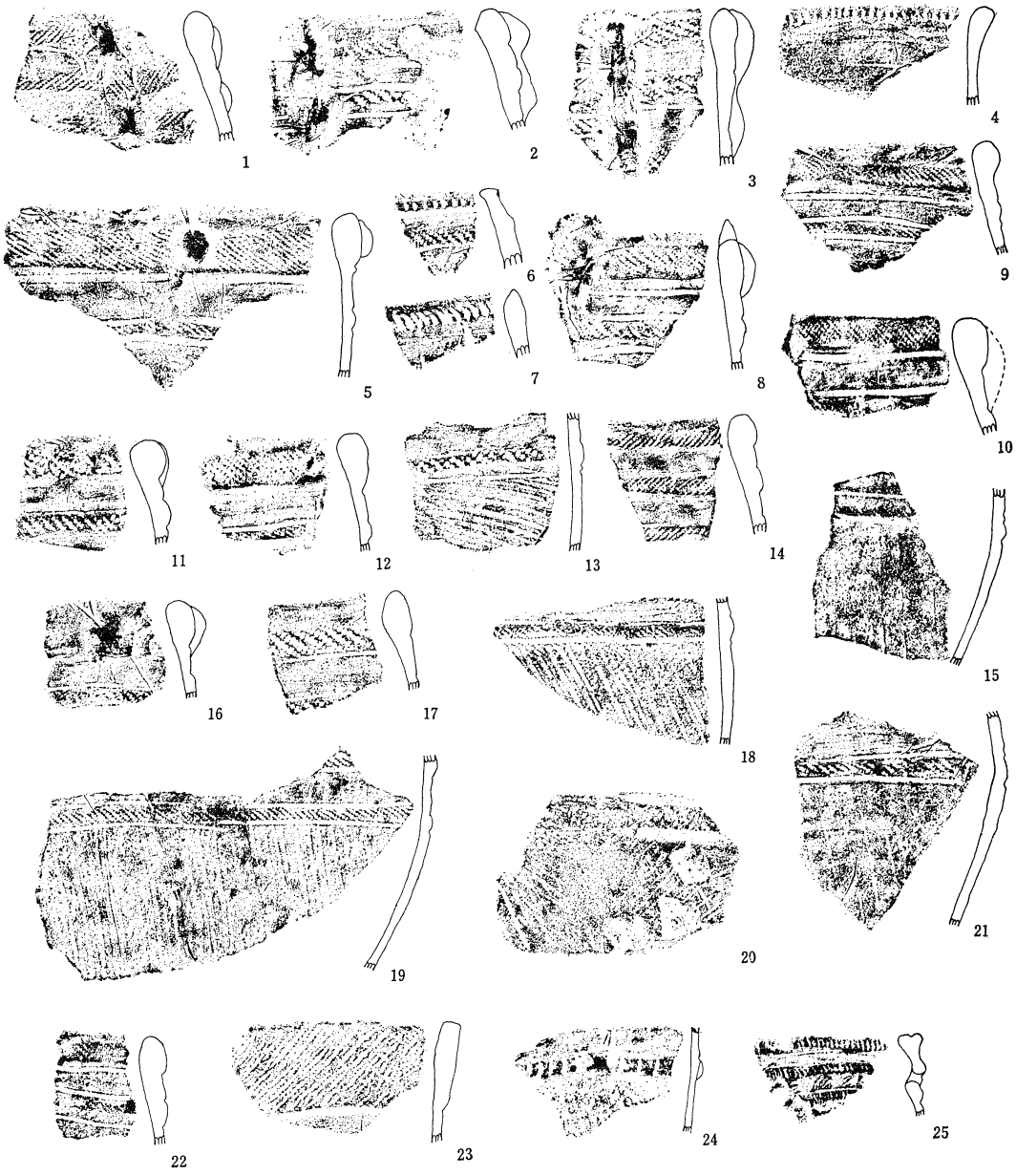


第 IV-31 図　安行 1-2 式鉢型土器

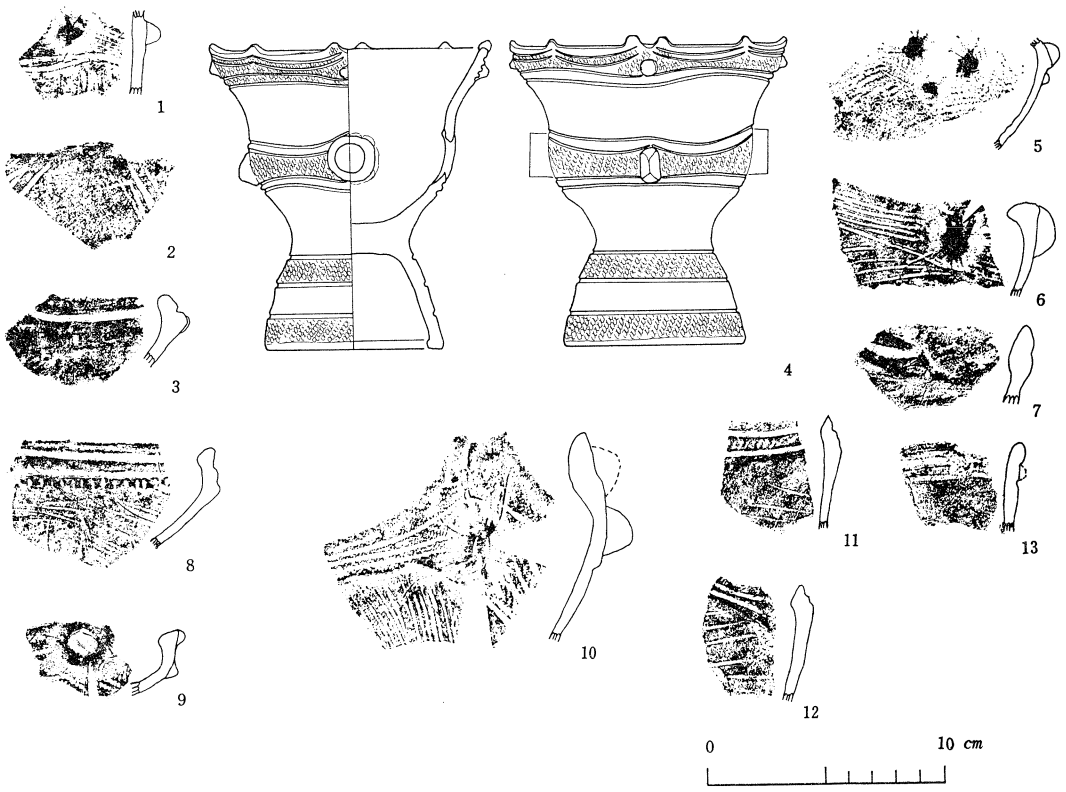


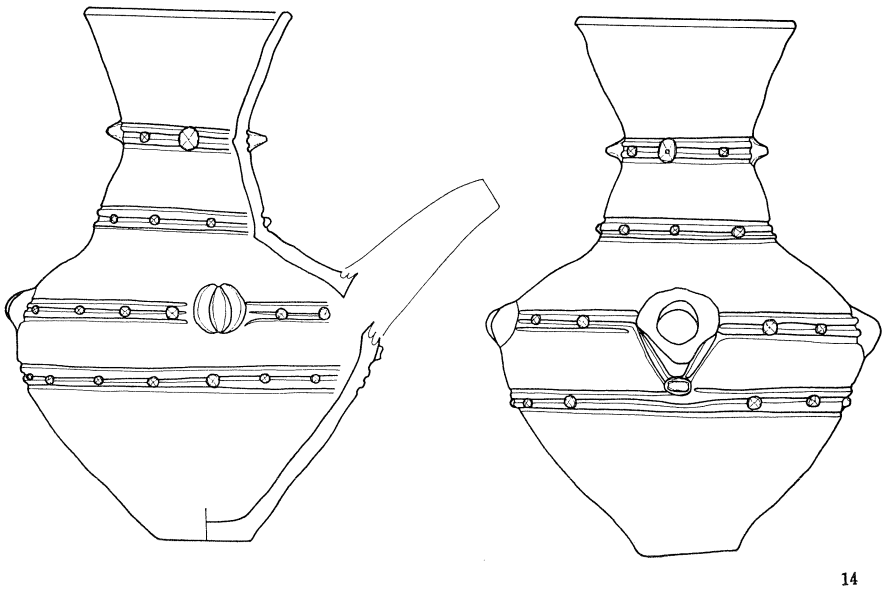
第 IV-32 図　安行 1-2 式鉢型土器

第 IV-33 図　安行 1-2 式鉢型土器

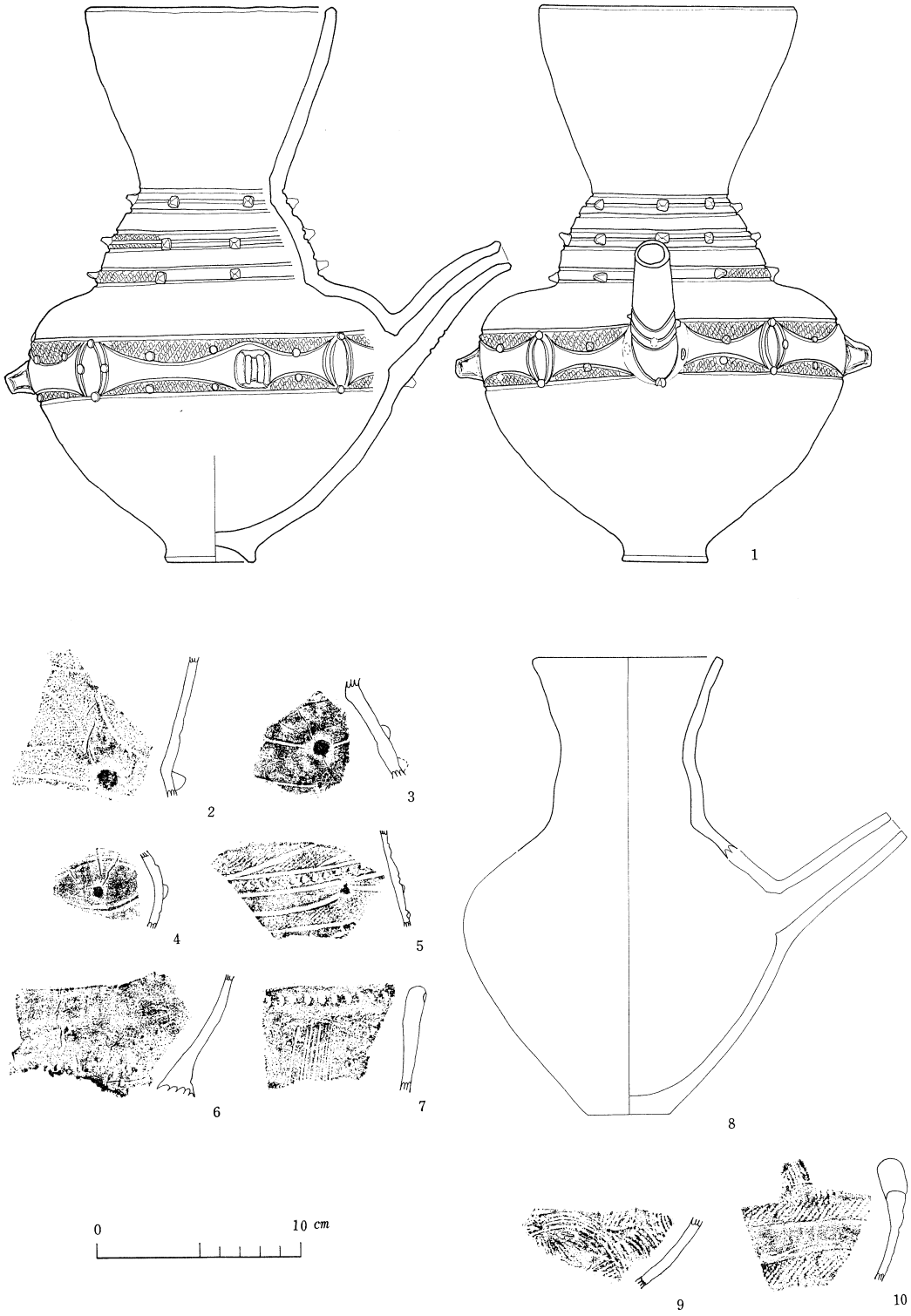


第 IV-34 図　安行 1-2 式平縁胴張り深鉢土器

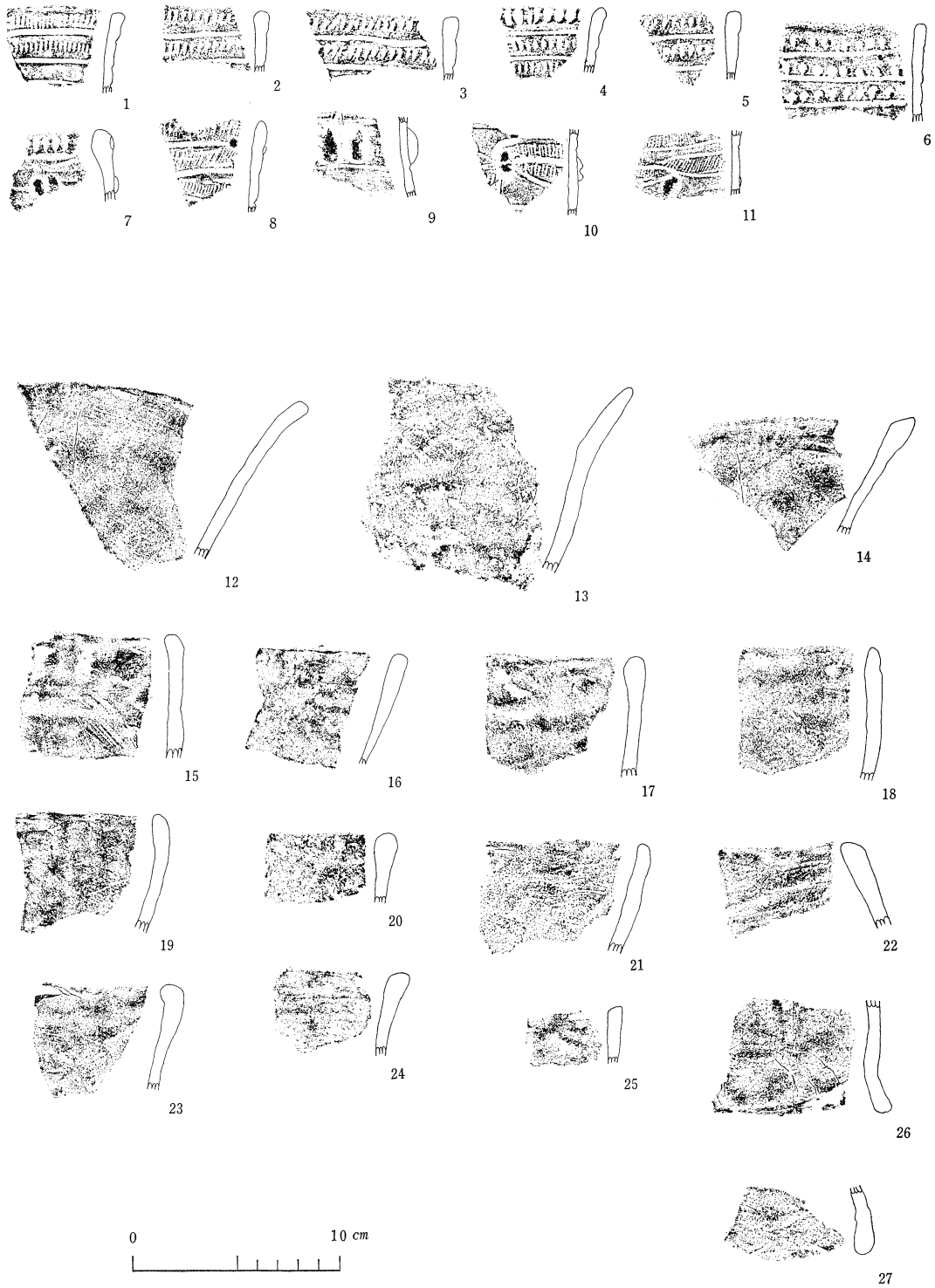




第 IV–35 図　異系統土器

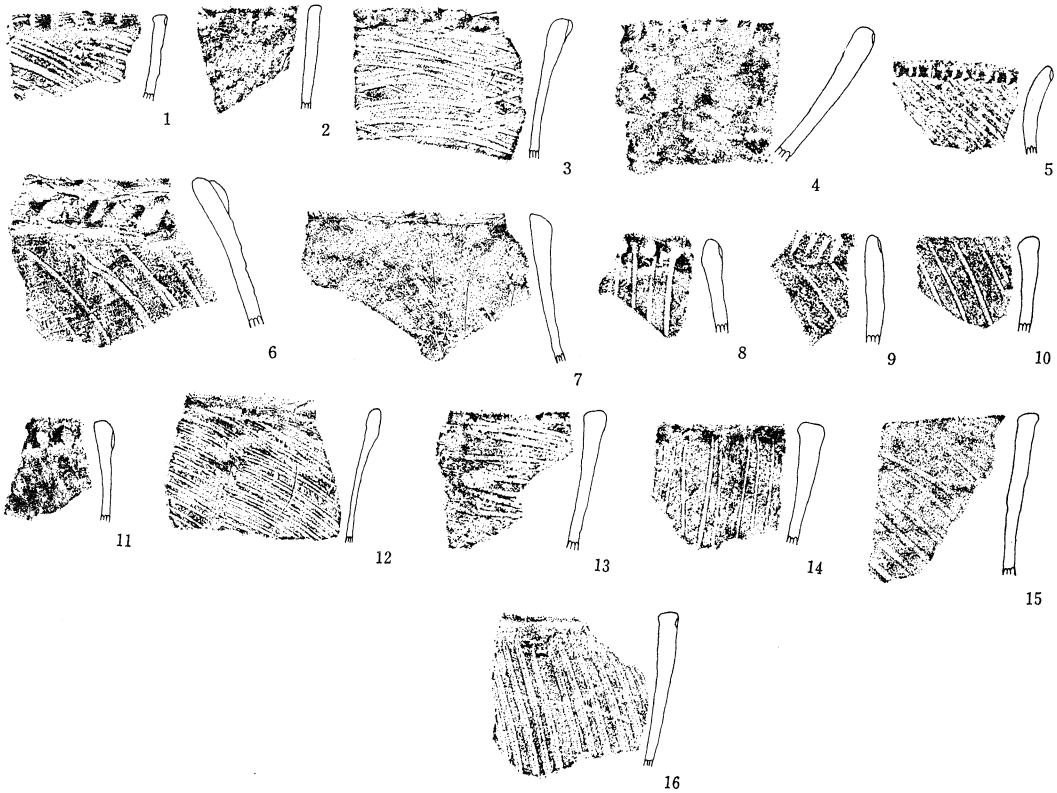


第 IV–36 図　異系統土器



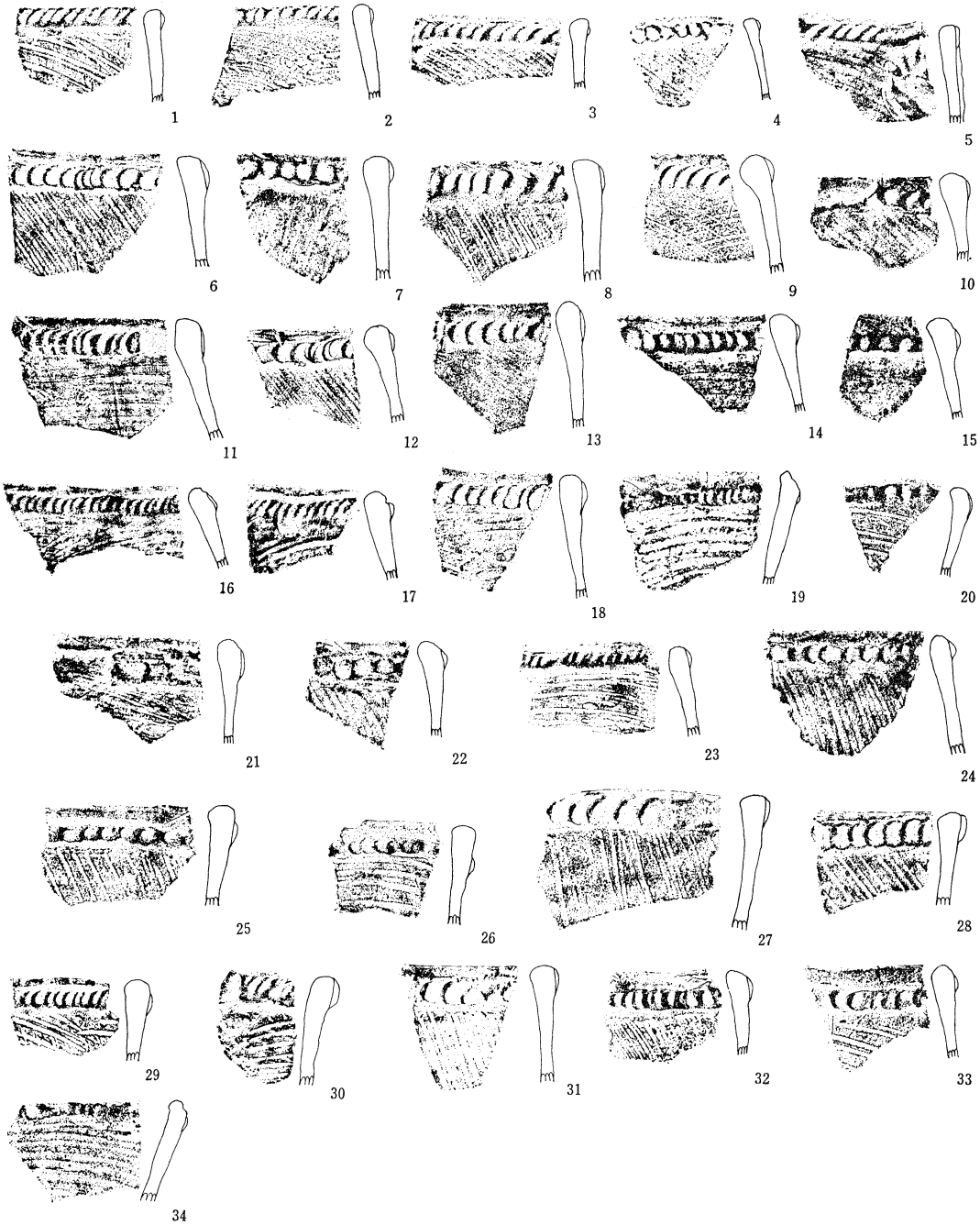
第Ⅳ-37図　異系統（上段）・安行1式無文（下段）土器

第 IV–38 図　安行 1 式（前半）粗製土器

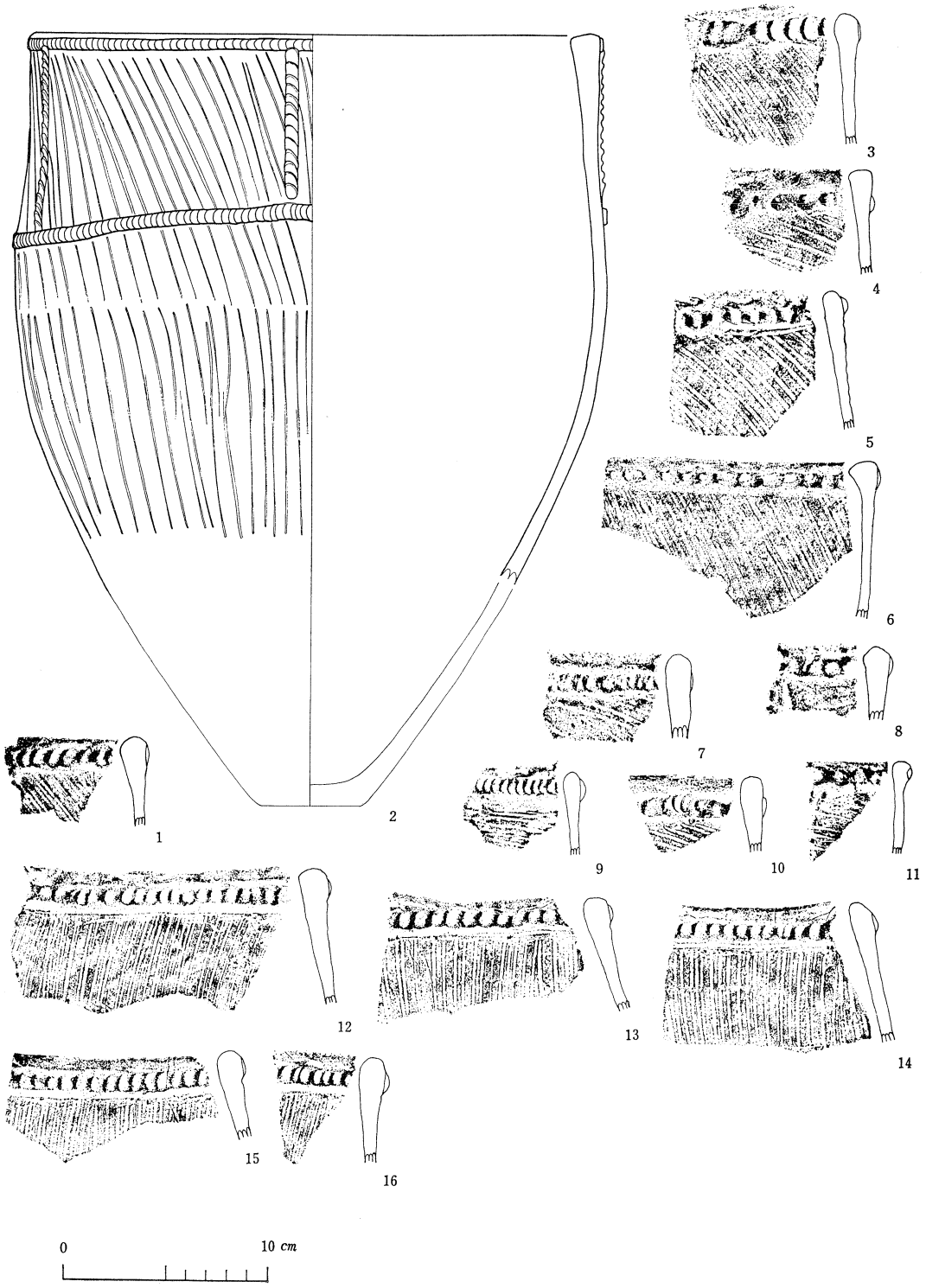


0　10 cm

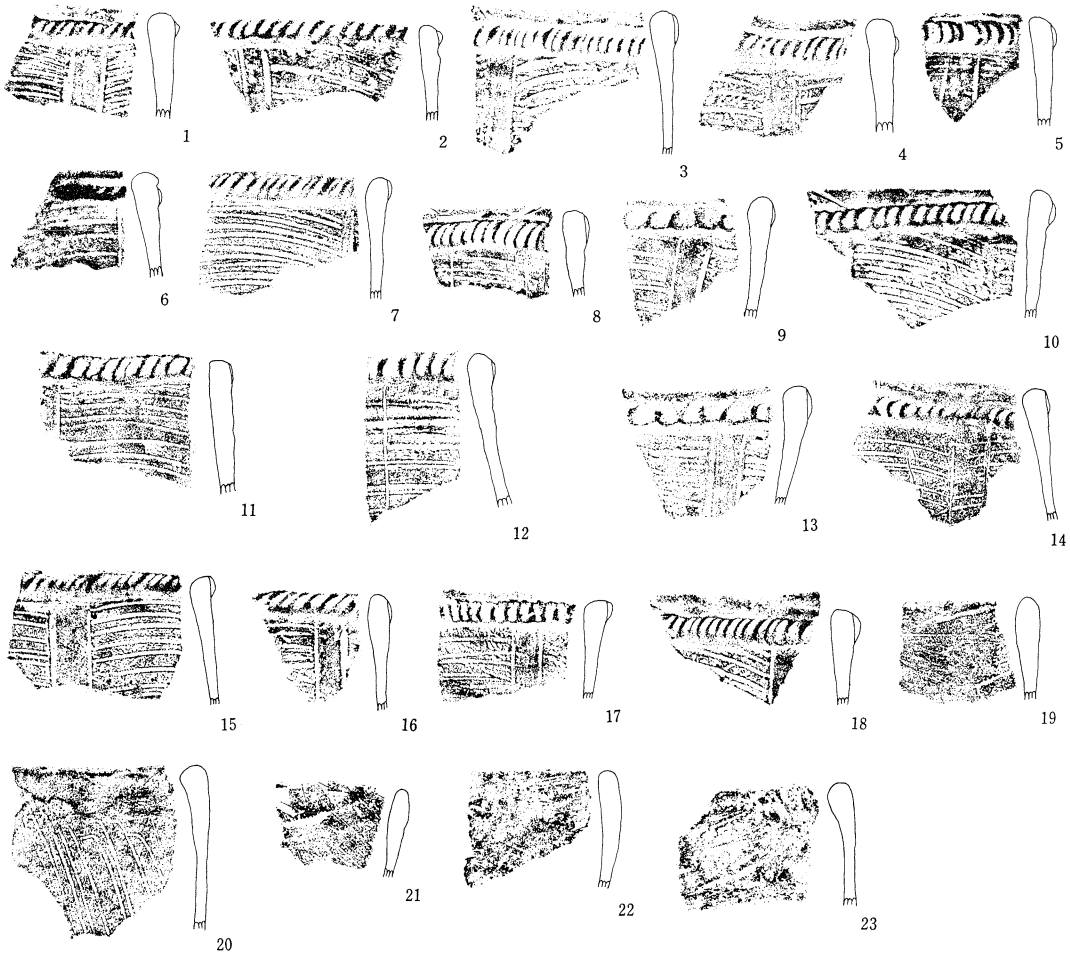
第Ⅳ-39図　安行1式（前半）粗製土器



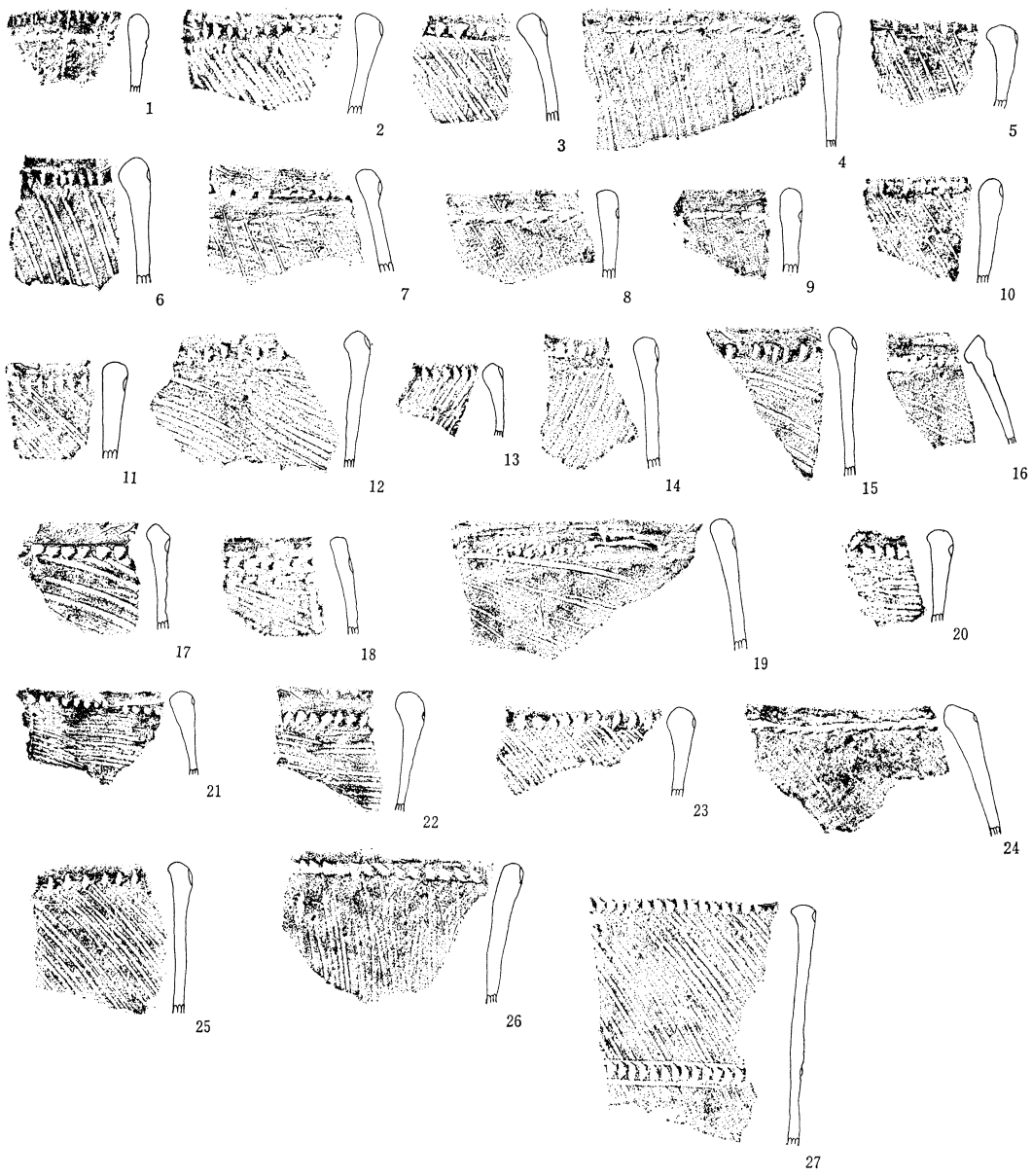
第 IV-40 図　安行 1 式（後半）粗製土器



第Ⅳ-41図　安行1式（後半）粗製土器

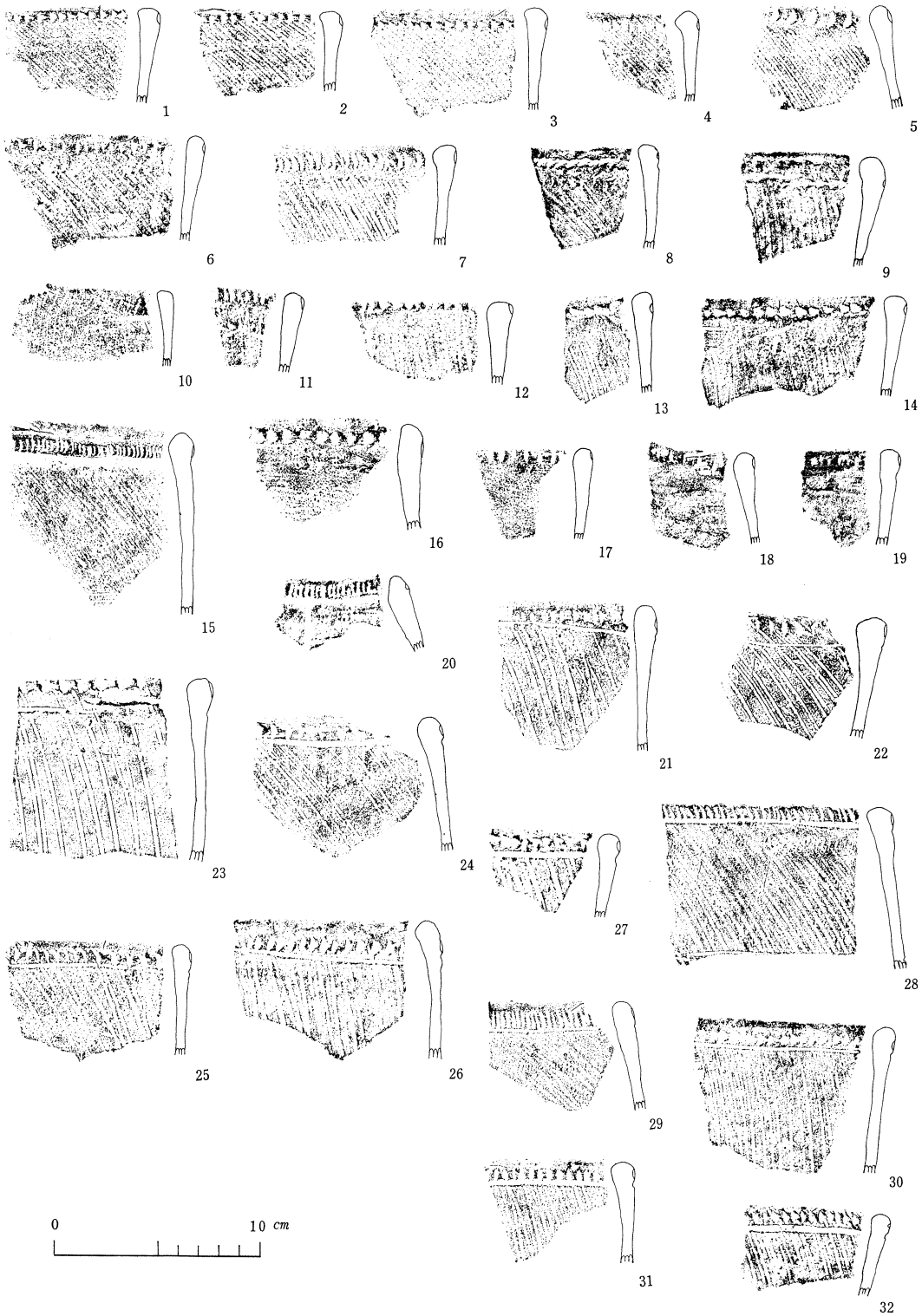


第 IV-42 図　安行 1 式（後半）粗製土器

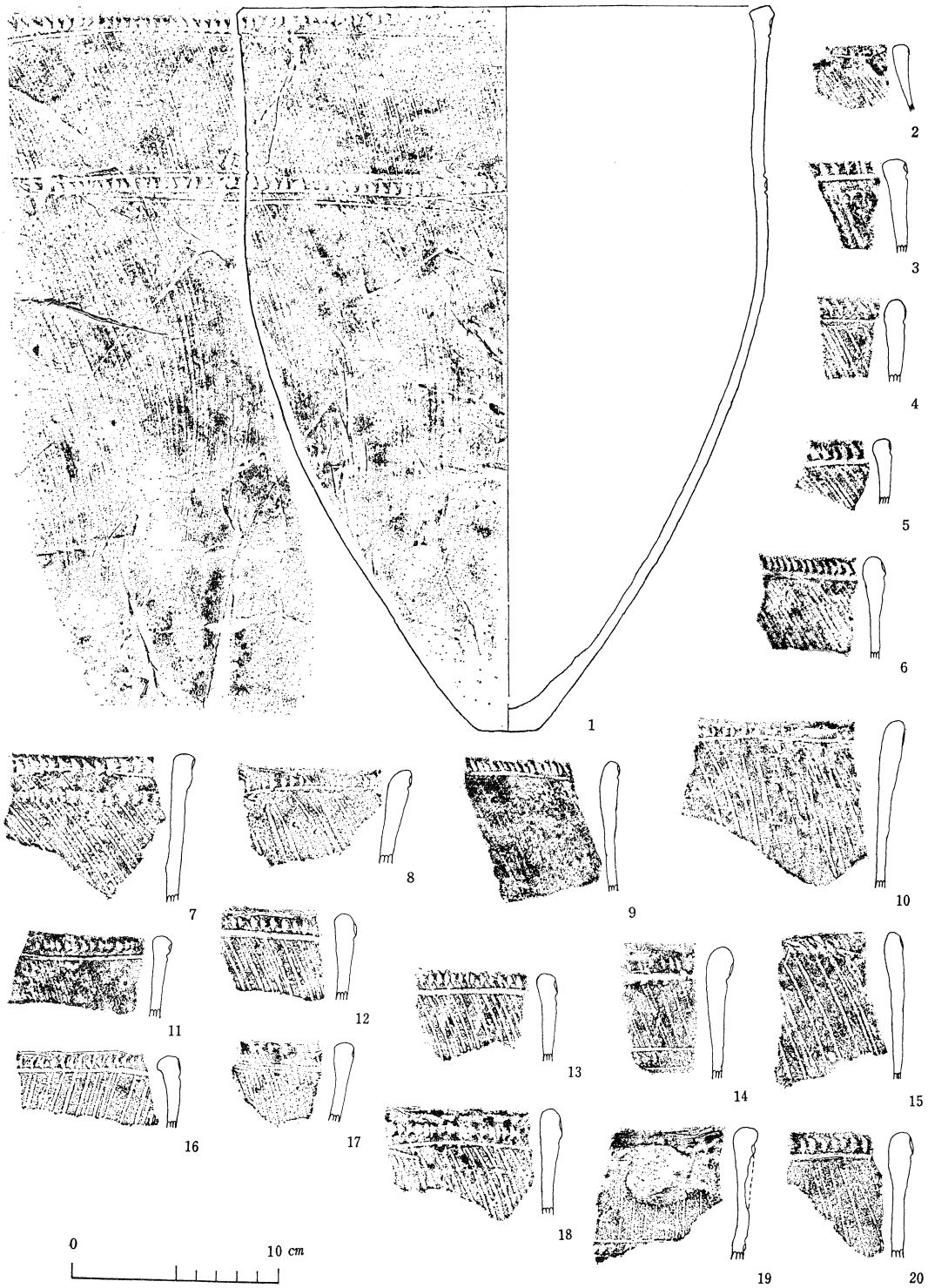


0　10 cm

第Ⅳ-43図　安行 1-2 式粗製土器

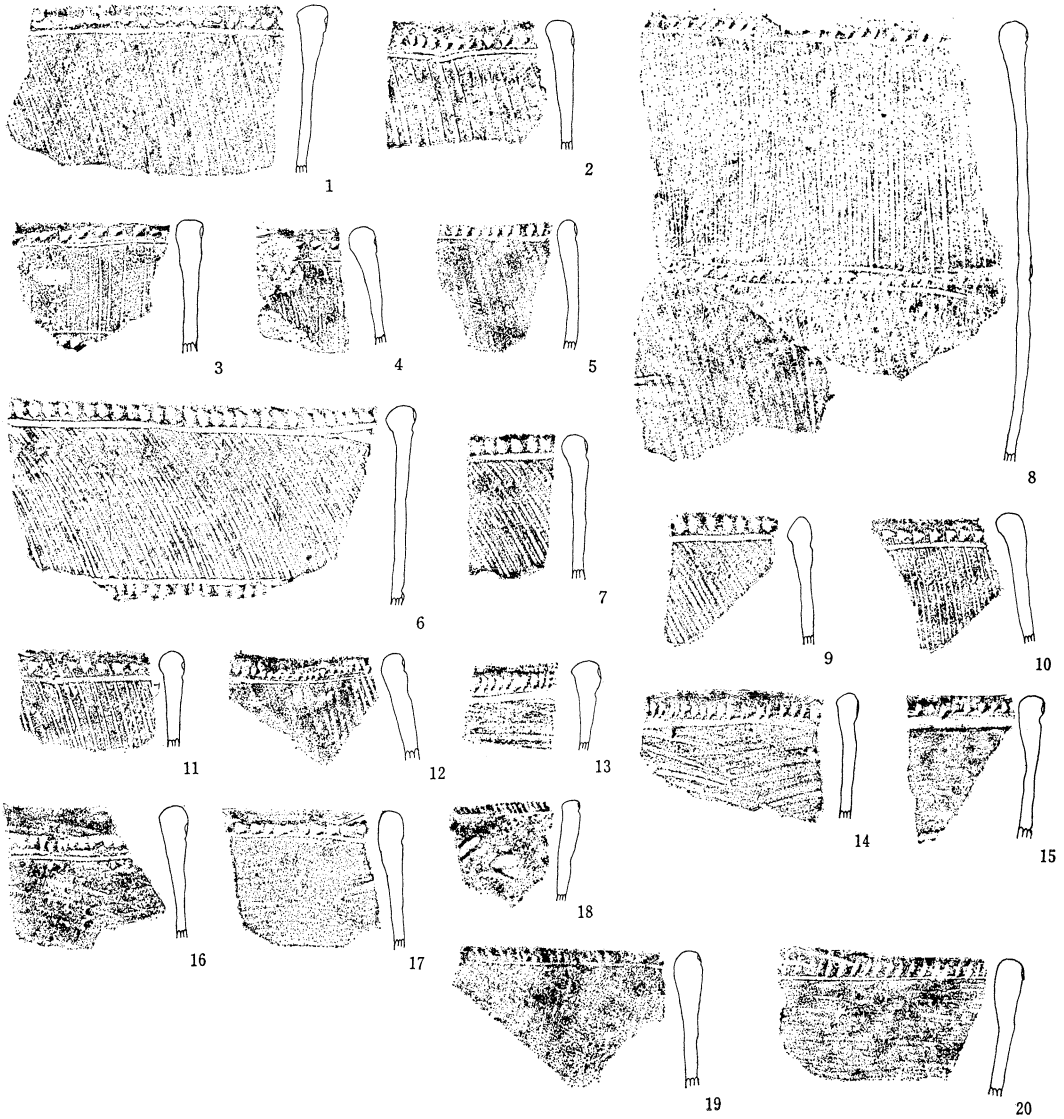


第 IV-44 図　安行 1-2 式粗製土器

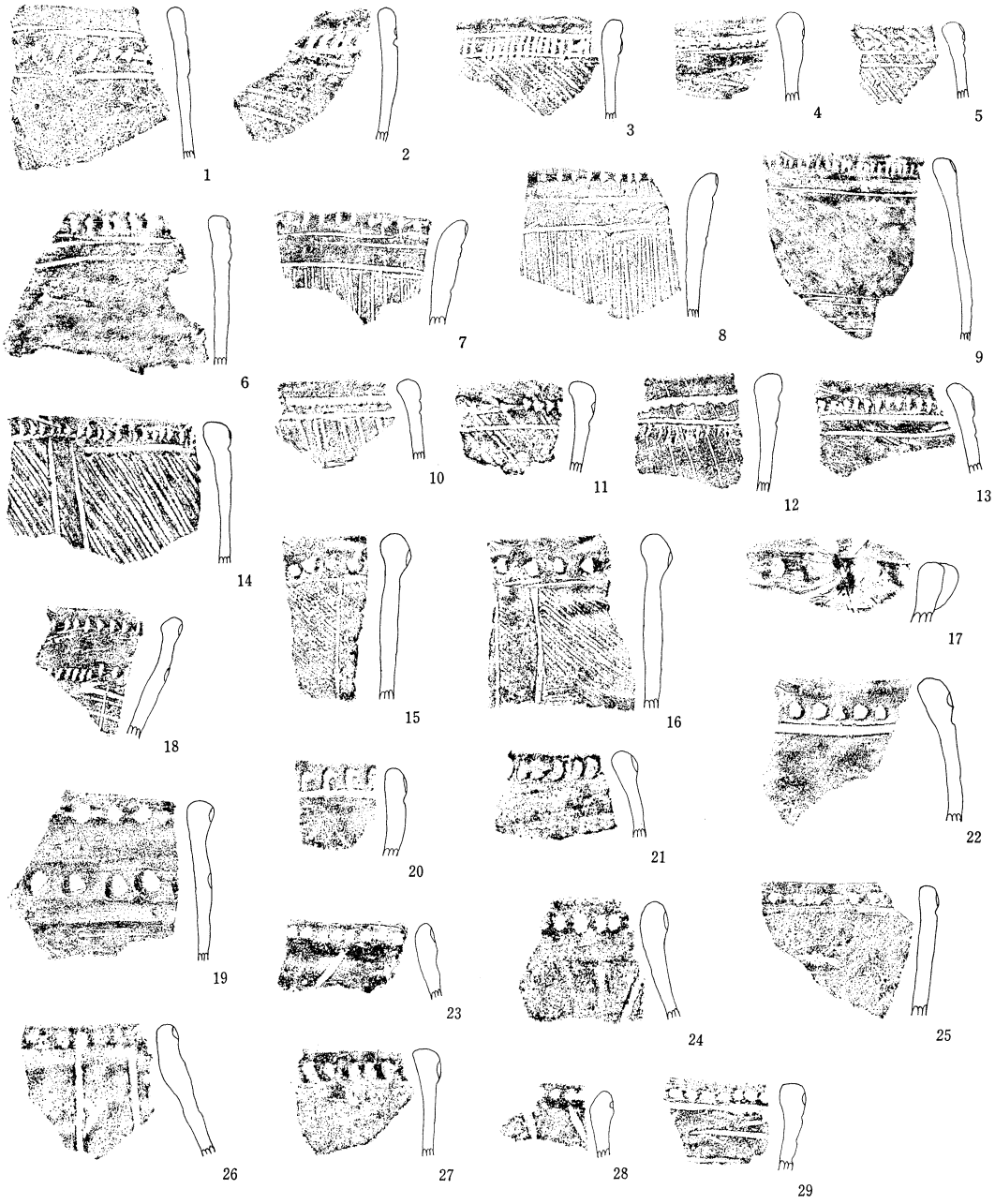


第 IV-45 図　安行 1-2 式粗製土器

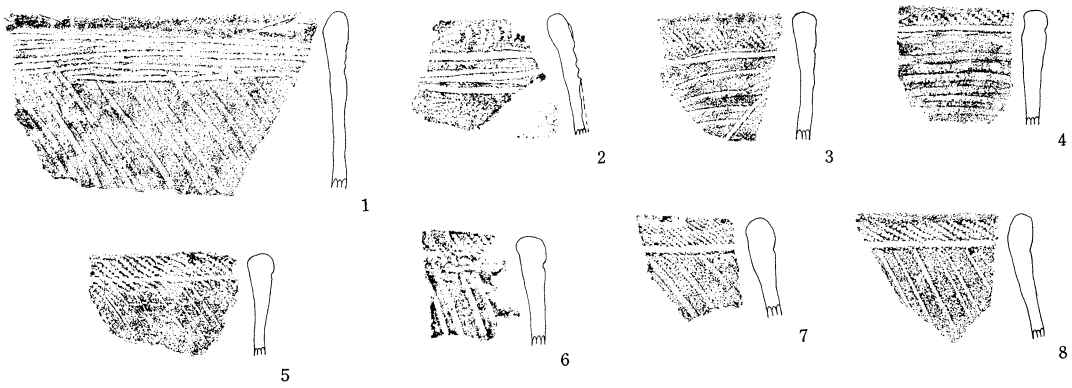
第 IV–46 図　安行 1–2 式粗製土器

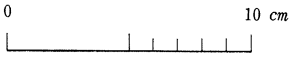


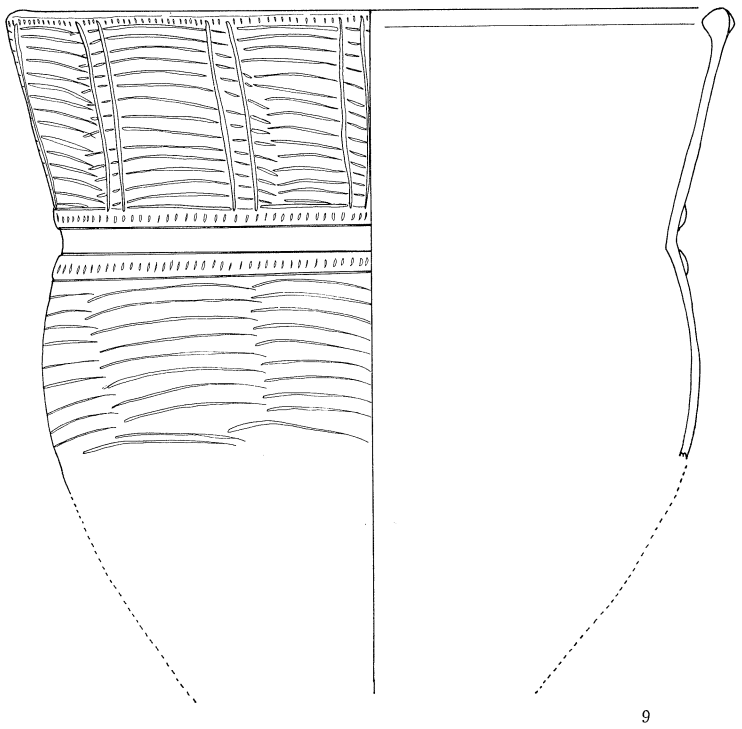
第 IV-47 図　安行 1-2 式粗製土器



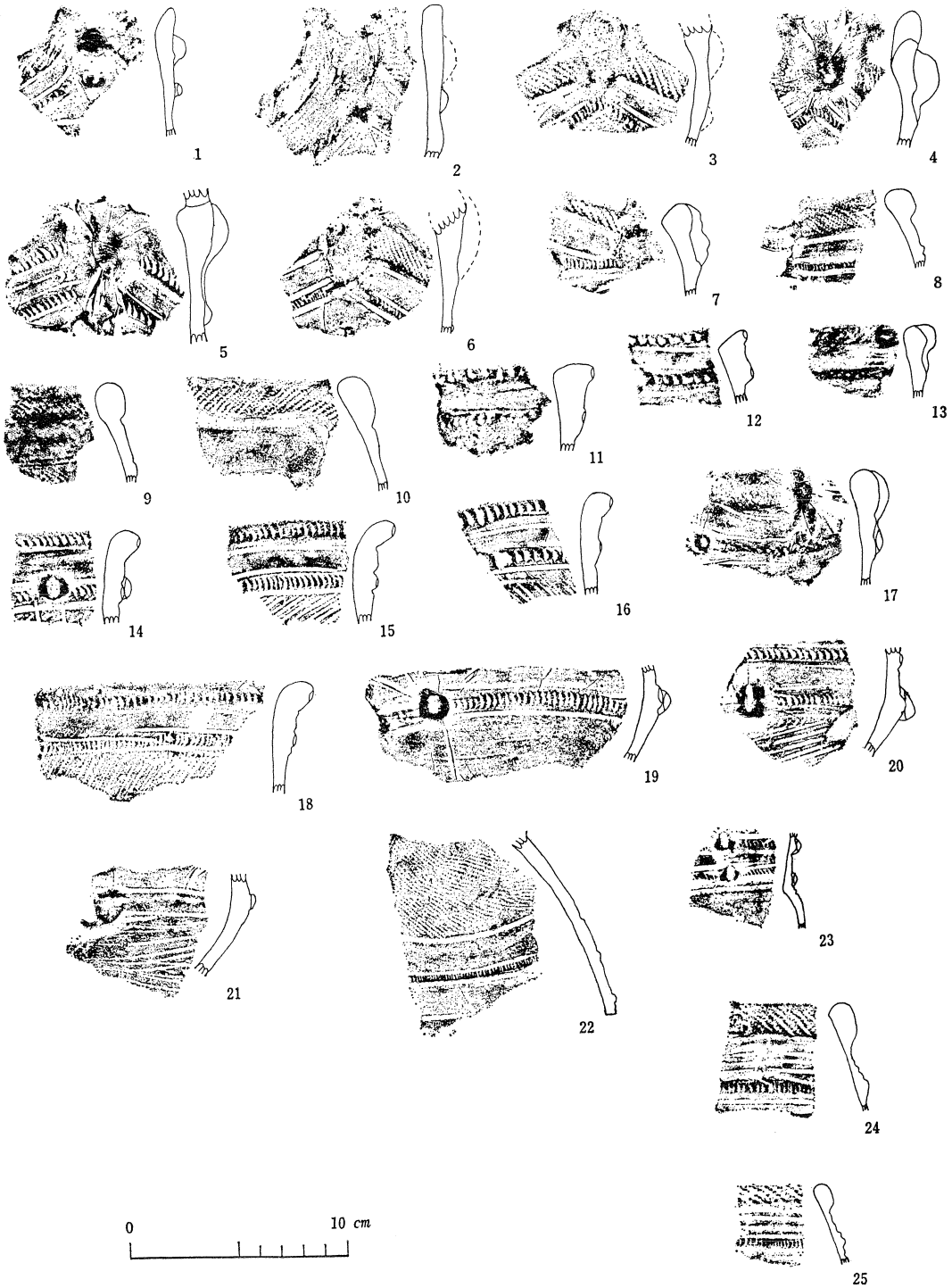
第 IV–48 図　安行 1–2 式粗製土器





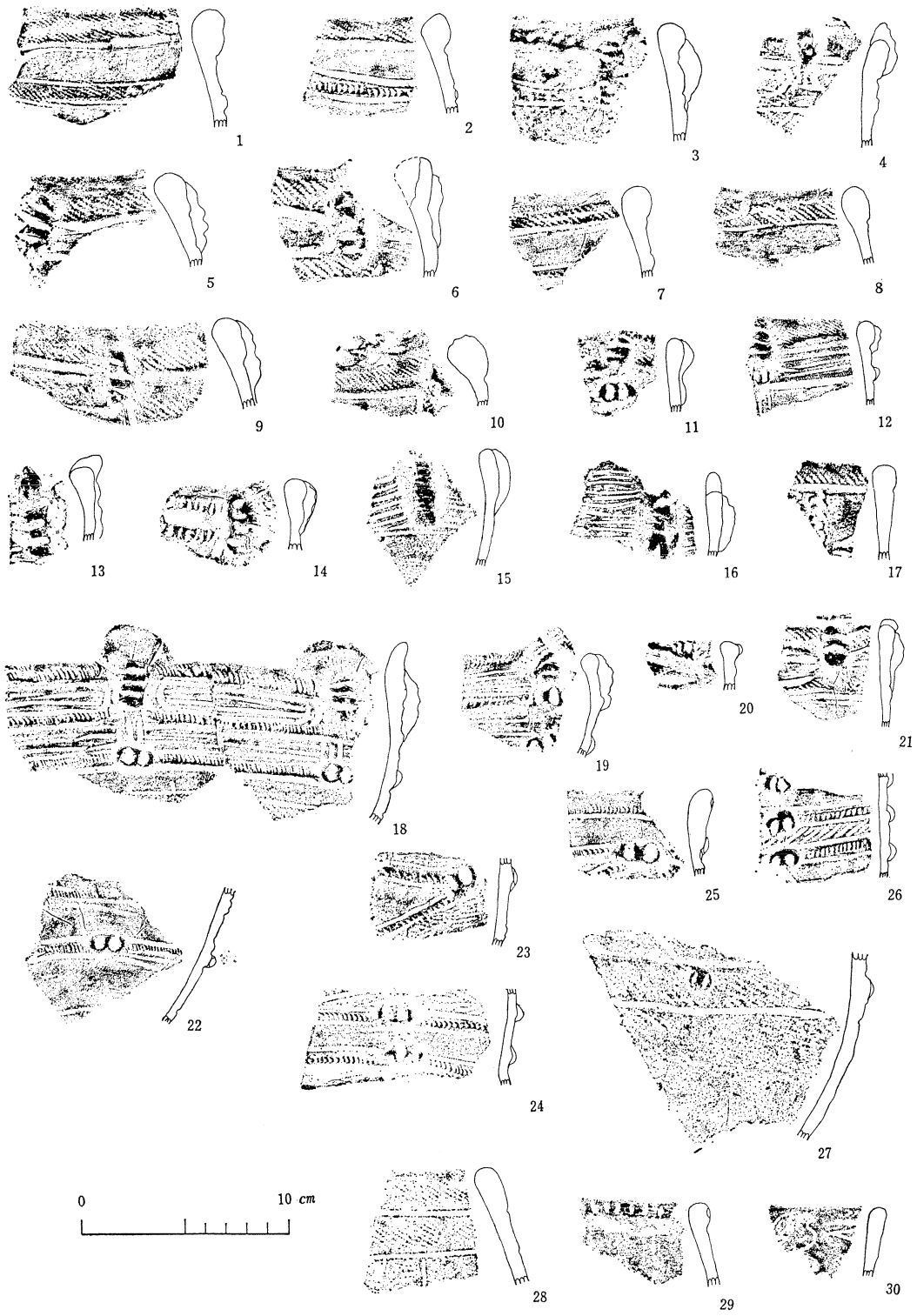


第 IV-49 図　安行 1-2 式粗製土器

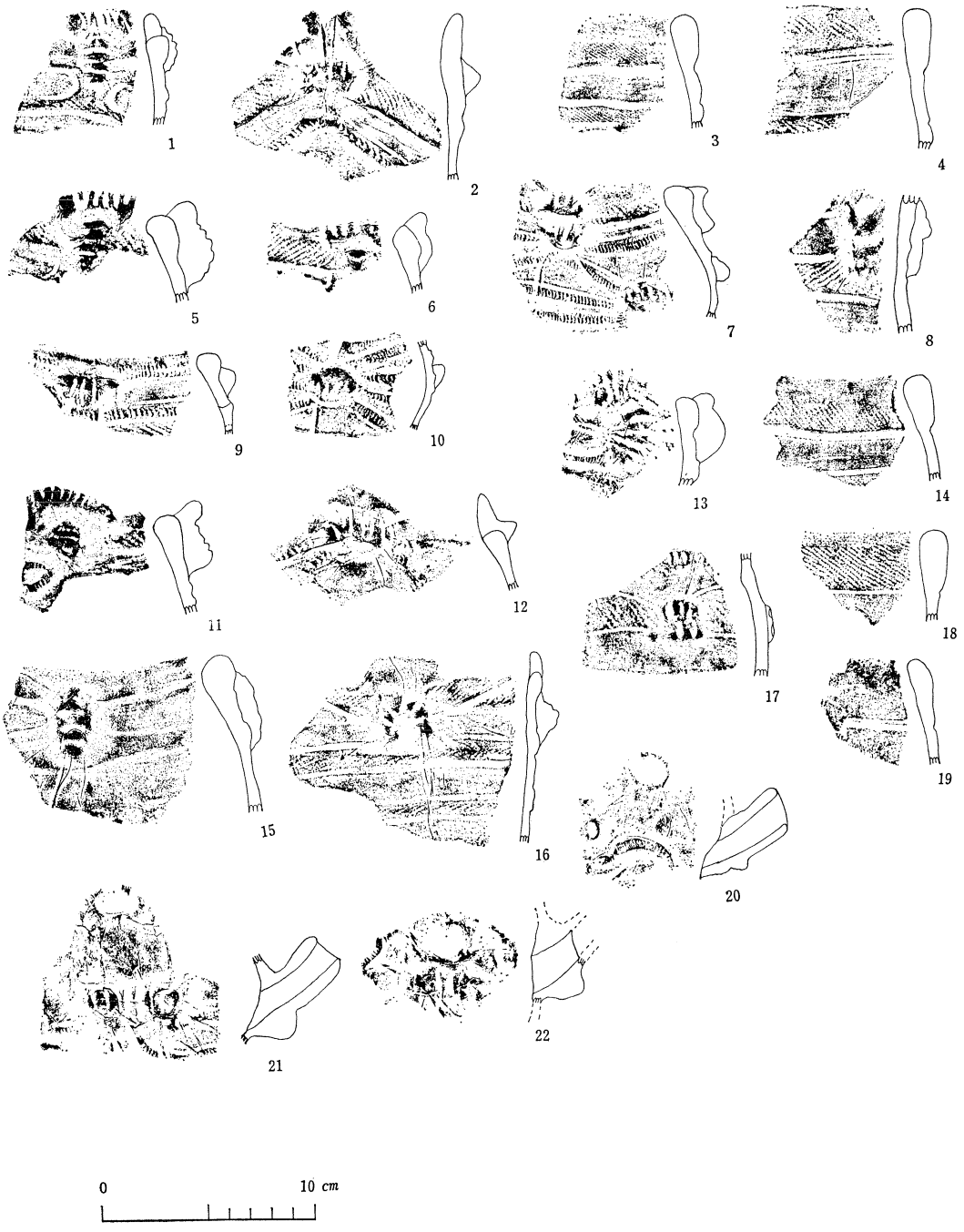


第 IV-50 図　安行 2 式土器

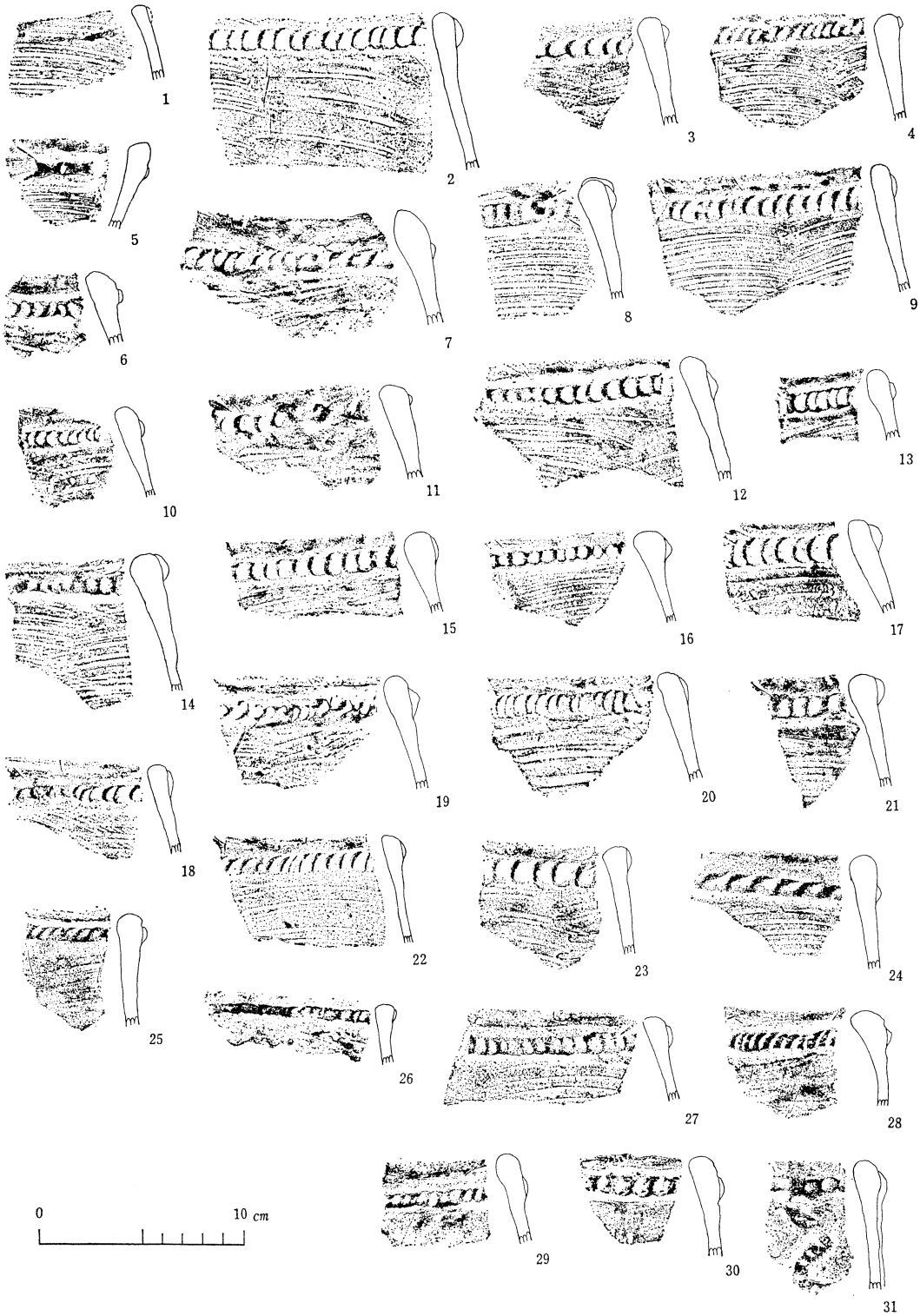
第 IV-51 図　安行 2 式土器



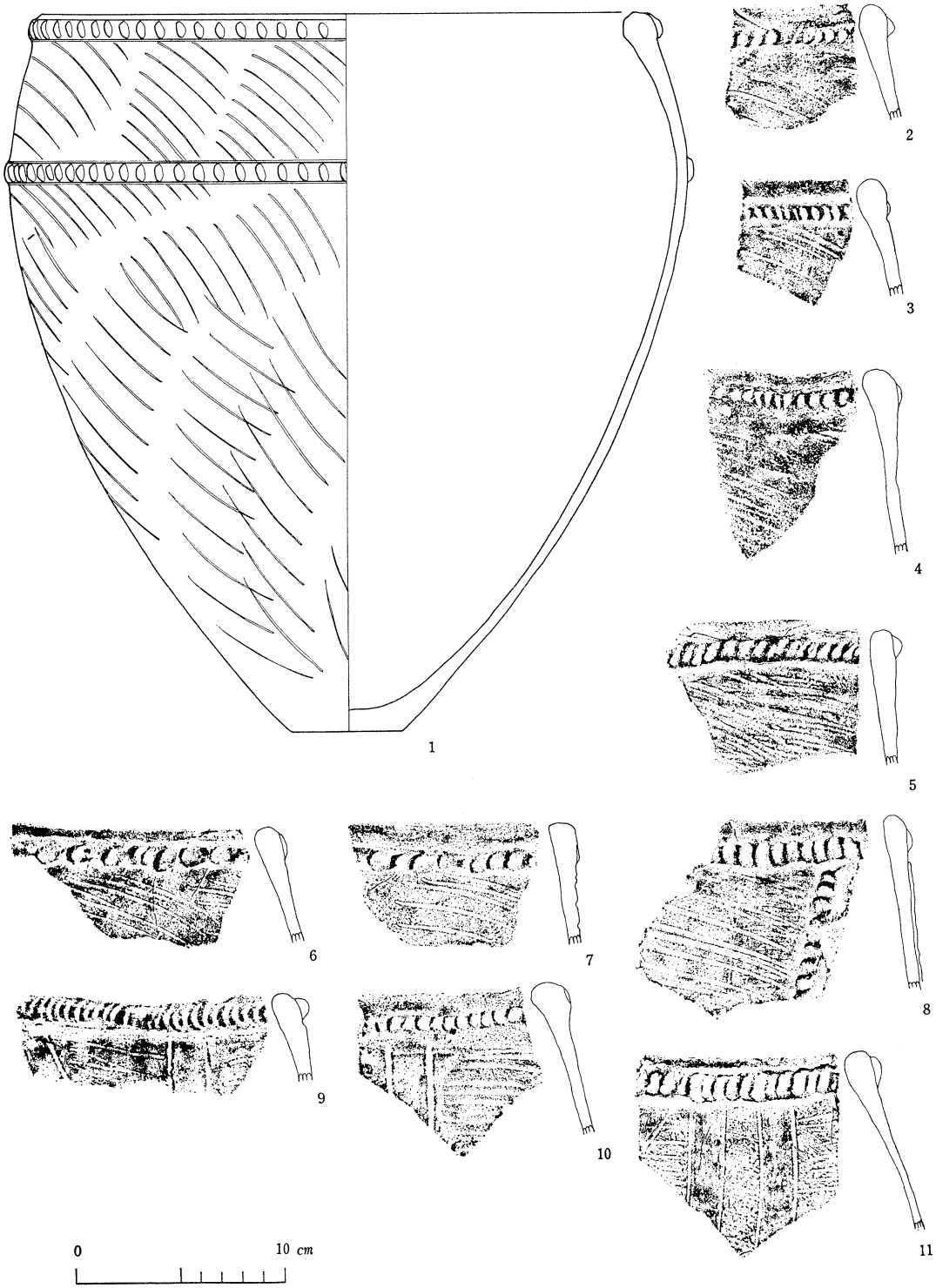
第 IV-52 図　安行 2 式土器



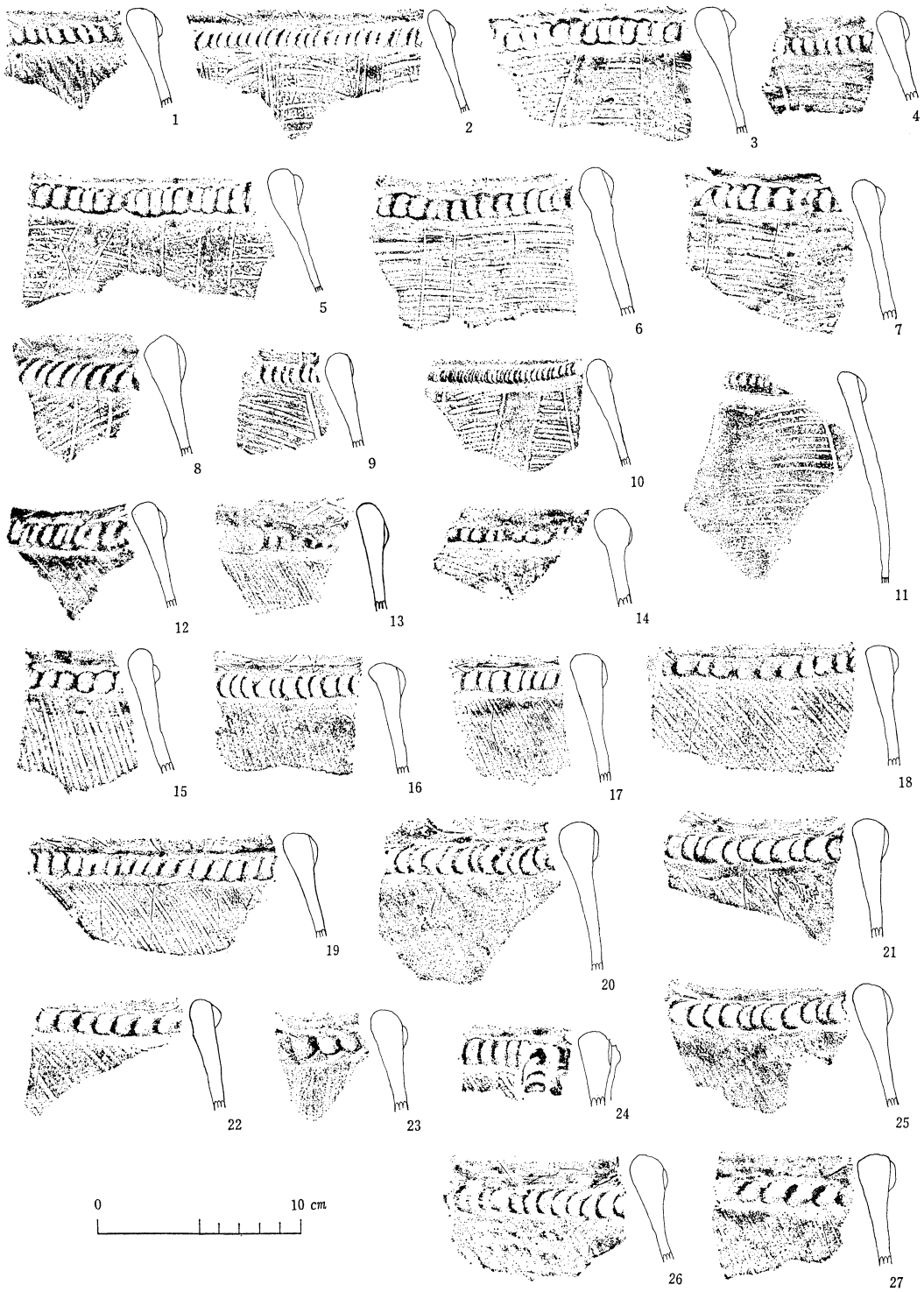
第Ⅳ-53図　安行2式土器



第 IV-54 図　安行 2 式粗製土器

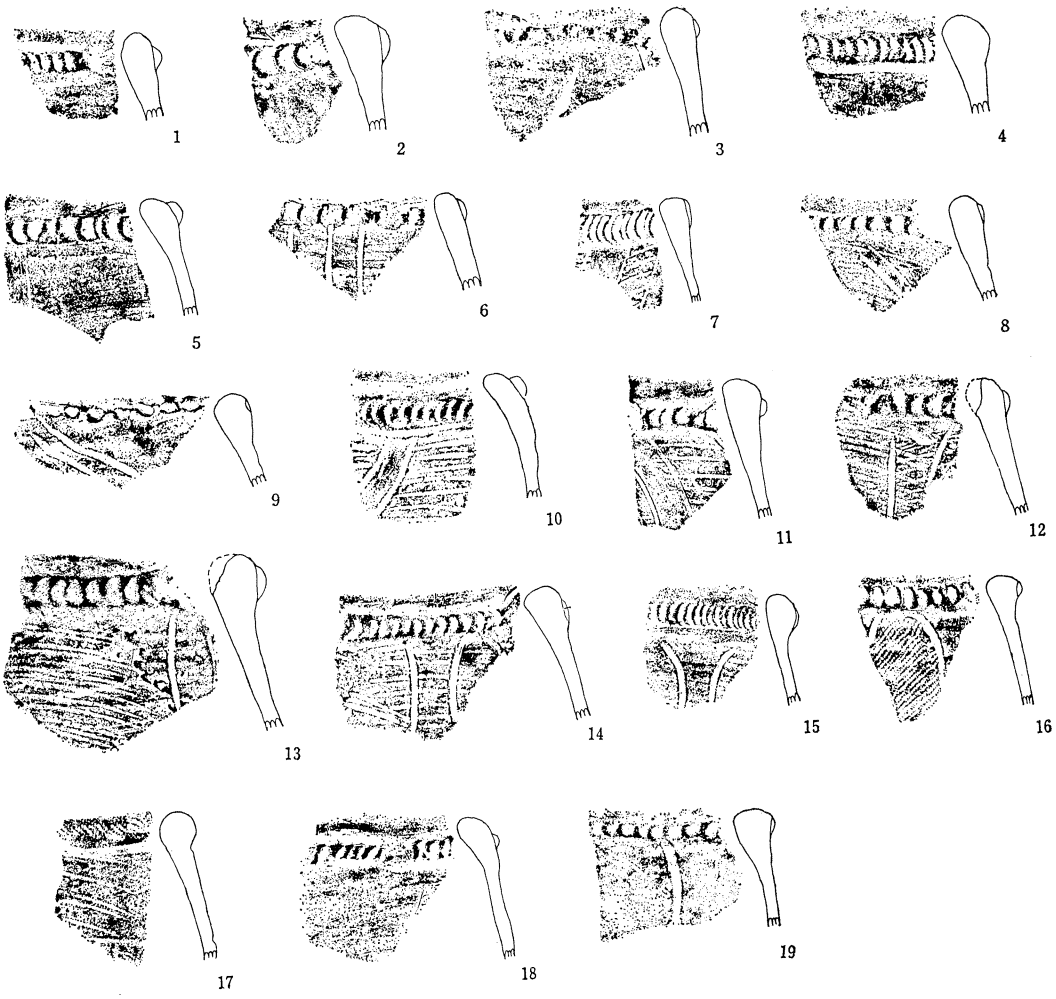


第 IV-55 図　安行 2 式粗製土器



第 IV–56 図　安行 2 式粗製土器

第 IV-57 図　安行 2 式粗製土器



第 IV–58 図　安行 2 式粗製土器

V　縄文時代晩期の土器

1　出土層位の概要

外塚遺跡A区晩期土器群の出土層位は各グリッドの表土、第2層茶褐色土層、第3層黒色土層を主とする。各層からは晩期以前の後期安行式、曾谷式、加曾利B式、堀之内式等の土器も多く混在出土した。茶褐色土層と黒色土層は、調査区の中でグリッドによって形成地点が異なる。中でも黒色土層はa・bの各グリッドを中心に広がり、特にa-4・b-4グリッド面にかけては漆黒色土の形成が顕著であった。この漆黒色土層中には骨片、炭化物等が多く見られたことが注意される。

黒色土層はb-4グリッドの北側c-4グリッドにかかる付近より漸移的に消失し、茶褐色の色合いを帯びた層に変化する。この変化はdグリッド面まで続く。土層の変化に伴って出土土器群に異なった纏まりを検出させている。

一方、調査区西側b-2、c-2、d-2グリッド面には黒色土層の堆積を見ず、晩期包含層は骨片等を含む茶褐色土層を形成している。包含土層の違いはここでも出土土器群に異った一群を表出させている。

今回の比較的狭小な調査面積の中で晩期包含層を概観しても晩期土器群の前後関係を層位的に捉えることは難しく、むしろ、平面的な土質の違いが土器群の地点的な差異となって表われたことが注意される。

外塚遺跡C区はA区の北方約100mの低地に設定された調査区である。調査当初泥炭層の存在が推定された地点でもあったが今回の調査では確認できなかった。出土土器のほとんどは調査区西側に集中し、第Ⅳ層黒褐色シルト土層付近より検出されている。晩期に属する土器片はそれほど多くないが完形土器が何点か出土した点は特記される。

2　出土土器の概要

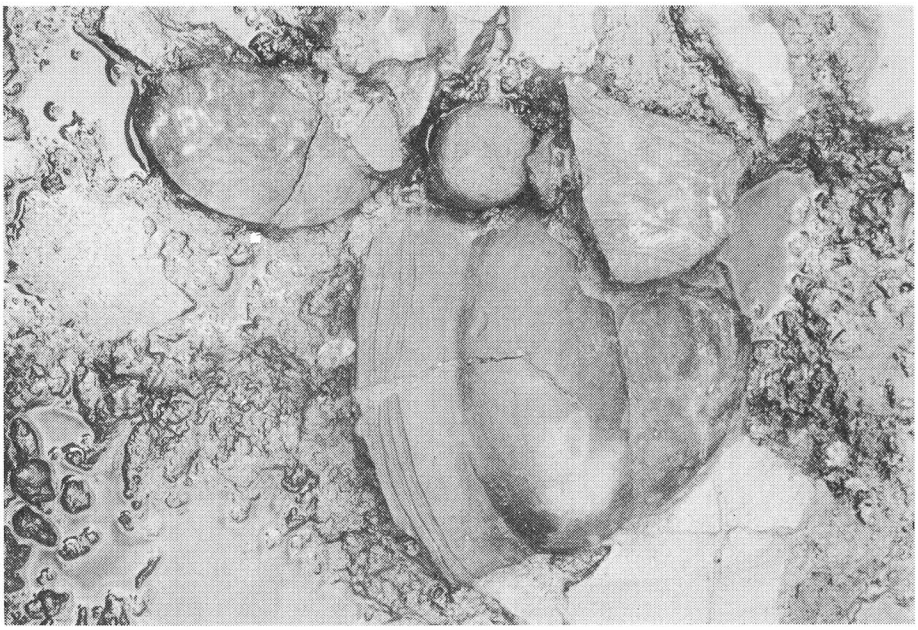
晩期包含層は層位的に分別することは不可能であったが平面的に見て単一ではなく、層位の記述中に触れ得た程度の差異ではあるがいくつかのグリッドの纏まりごとに出土土器の違いが観察される。晩期という比較的永い時間を扱うに当って，まずその概要を記述しておこう。主にA区についてであろう。

外塚遺跡出土の晩期土器は初頭から中葉までである。まず、漆黒色土層の堆積の著しかったa-4、b-4グリッドからは多くの晩期安行系土器と共に大洞BC、C_1式土器が比較的纏って出土している。これらに伴出した安行系土器は3b式、3c式と考え得るものであるが、その中にはこれまで安行3b式、3c式として指摘されてきた以外の資料も多く検出され、外塚遺跡を中心とする茨城県西部域——主に結城・真壁台地——一帯の晩期前半の土器相が利根川下流域或いは奥東京湾域とは多分に異ったものであることが指摘できる。

漆黒色土が消失するc-4グリッドからd-4グリッドにかけては常磐地域土器相の影響下に生成したと考えられる晩期初頭の土器群が纏って検出されている。福島県寺脇貝塚（馬目順一、1965）に代表されるそれらは精選された土質を持つ特長ある一群であり、識別しやすい斉一性をもっている。c-4グリッド出土土器の中で注意を引く二つ目は無文薄手の所謂「製塩土器」が数点出土していることである。それらは所謂利根川・霞ケ浦等の製塩址を伴う貝塚地帯の製塩土器とは器質に多少異なりがあると思われるが、ヘラカットによる尖唇状の口縁部形態を持つものも見られ、晩期初頭の土器群に伴った内陸部の製塩土器としてその技術系統が興味深い。

b-2、c-2グリッドを中心として茶褐色晩期包含層中に集中的に出土する一群の土器に大洞C_2式土器がある。C_2式土器は中でも新しいものは含まず、中葉段階のものまでである。安行系土器は3d式と明確に同定しうる資料は殆どなく、東関東の土器を多少含みつつ、主体的には栃木県北、北関東と同相域を形成することを指摘できる。

今回の調査では調査区の中央部b-3、c-3グリッドが樹木のため未調査に終った点いくつかの興味ある課題が心残りとなったが、大略、外塚遺跡の晩期はその初頭から中葉まで間断なく連続していくが、安行系の物差しで言えば安行3b式、3c式期にその盛期のあったことを指摘できよう。



第45挿　C区土器出土状態

3　出土土器の解説

A区

1　a-2グリッド出土土器（第V-1図、第V-26図3、第V-28図1）

第V-1図1（第V-26図3）は黒色磨研の小形深鉢形土器。浅く太い描線による三叉文が対に向き合う胴部文様を持つもの。斯様な三叉状文は従来晩期初頭に位置付けられて来たが、再考の余地があ

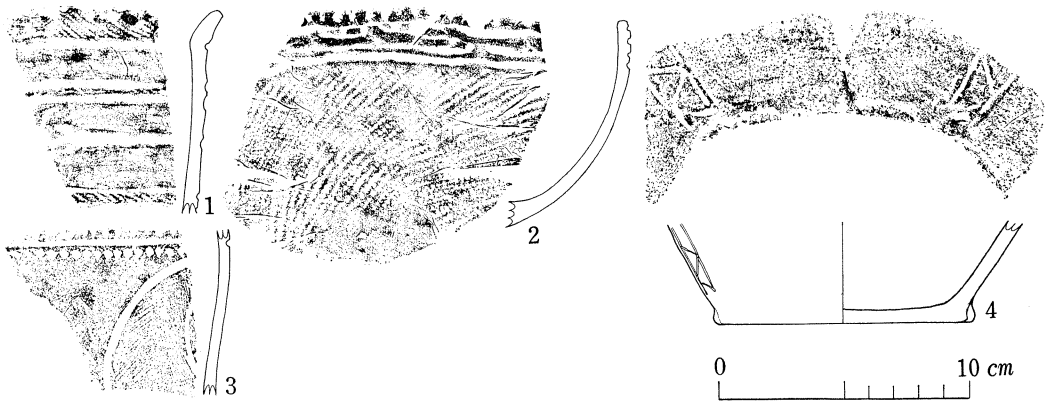
る。安行 3b 式。2（第 V-28 図 1）は土質粗弱な埦形土器。口径約 13 cm、器高約 8 cm。口唇部外端に刻目が施され、口縁部の羊歯状文は粘土紐を貼り付けたように見える。茶褐色。大洞 BC 式比定。3 は細密沈線文土器。安行 3b 式。4 は角底の土器である。各稜部に鋸歯状文が描かれている。淡褐色で土質は小石粒を多く含み粗い。本例のような鋸歯状文が角底土器に付される類例は寡聞にして知らないが、浅鉢形土器に描かれる例が埼玉県真福寺貝塚にある（杉山壽栄男，1928）。本遺跡では他に一点本例とは時期が異なるが c-2 グリッドより角底土器が出土している。本例底部各稜端部は多少突出気味に張り出している。これは c-2 グリッド出土例の角底土器に見られるような豚鼻状等のコブが付されたことの名残りではないかと思われる。安行 3c 式か。

他に a-4 グリッド出土の台付鉢形土器或いは皿形土器（第 V-25 図）との接合資料が出土しているがそれらについては主たる出土地点の a-4 グリッドに纏めた。

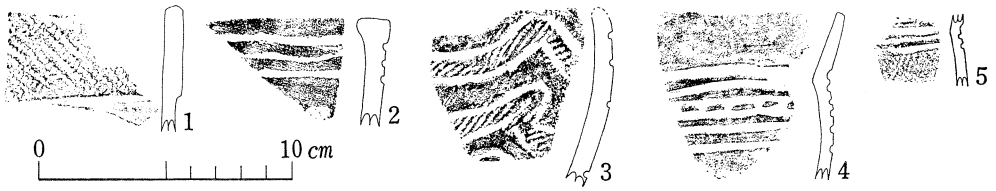
2　a-3 グリッド出土土器（第 V-2 図）

第 V-2 図 1 は口縁部縄紋帯が複合口縁状に隆起しているもの。同一個体が a-4 グリッドより出土している（図版になし）。2 は沈線文系土器。焼成堅緻で赤褐色。3 は土質、焼成粗なる黒色の土器で、波状口縁部に添って縄紋帯、入組縄紋帯が展開する。以上安行系土器。1 は 3a 式、2・3 は 3c 式期のものであろう。2 は台付土器台部である（図逆さ）。

4・5 は大洞系土器。4 は黒っぽく滑沢のある小形（深）鉢形土器である。5 は土質粗製のもの。共に大洞 C_1 式の古い部分に比定されよう。



第 V-1 図　A 区 a-2 グリッド出土土器



第 V-2 図　A 区 a-3 グリッド出土土器

3　a-4 グリッド出土土器（第 V-3 図、第 V-4 図、第 V-25 図、第 V-26 図 4）

a-4 グリッドは隣接する b-4 グリッドと共に漆黒色の晩期包含層が最も良く発達し、晩期前半に属する土器群が他のどの地点よりも多く纏って出土した箇所である。安行系では 3b 式、3c 式、また大洞系では BC 式、C_1 式の出土が多く注目された。ここでは b-4 グリッドも含めて外塚遺跡晩期土器群様相の一つである晩期最初頭或いは晩期中葉の大洞 C_2 式土器がほとんど検出されない点が他の地点と区別される。

安行系土器

第 V-3 図は安行系と思われる土器を纏めた。

1 は後期以来の系譜を持つ波状口縁深鉢形土器。口縁部に貼付される受け口状のコブが特長的である。土質、焼成とも粗い。茶黒色。5 は波状深鉢三角内帯文の部分。21 も同様の部分であるが 5 よりは後出のもの。2 は晩期に入り新たに生成する一例。B 突起に三叉文が指標となる。茶褐色で滑沢がある。3 は平縁の深鉢形土器。口唇部および口縁部にコブが付されている。二段の枠状文が特長的である。淡褐色。4 も二段の枠状文による。口縁部は内傾し胴部の張り出す深鉢形土器で、3 より後出のもの。所謂「姥山Ⅱ式」の一組成。焼成よく滑沢がある。LR の縄紋は太さの異なる原体 2 種の撚り合わせによるもの。或いは附加条。6 は黒色で胎土は粘土質に富み軟らかい。7 は大洞系の影響か。8 は鉢形土器であろうか。口辺部内側には赤色顔料痕が認められる。9 は入組文系土器。11 は黒色で平滑に撫でられている。磨消縄紋によるものである。鉢形土器。12・13・17 は細密沈線文土器。土質緻密、焼成もよい。12 は口唇部上に截痕が加えられている。17 内面には炭化物状黒色付着物が一面に見られる。15 は平口縁の深鉢。浅い沈線による枠状文が二段、縄紋帯は撚り戻し状の微細な縄紋原体に依っている。口縁部に貼付された細長のコブは北関東に散見されるものである。黒灰色。

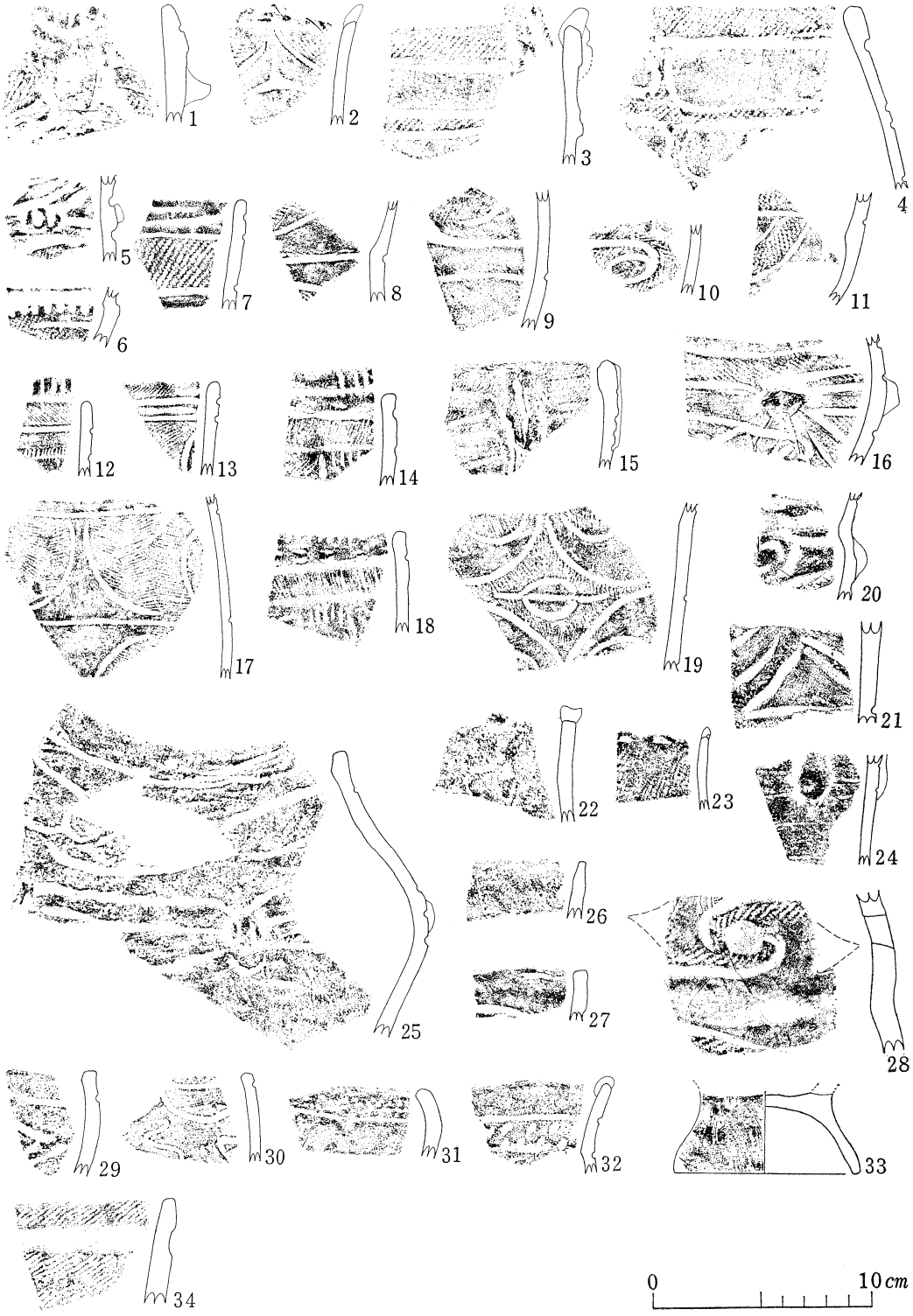
以上は晩期前葉の土器群である。1～3・5・16・20 等は安行 3a 式、他は 3b 式期のもの。次は安行 3c 式期のものである。

14・18・19 は細密沈線文系土器の後出のもの。中でも 14・18 は 12・13・17 等の手法が劣化し細密沈線文が幾分粗大なものに変化している。北関東に類似例がある。該期それまで主として内傾する小形深鉢形土器に付されていた細密沈線文が縄紋の代替として色々な器種、文様の中に充填施文されるようになる。19 もその一例で、弧線による菱形文様中に細密沈線文が充填されている。概して前段階の細密沈線文土器より胎土、焼成とも粗雑になる点は注意される。共に黄褐色。

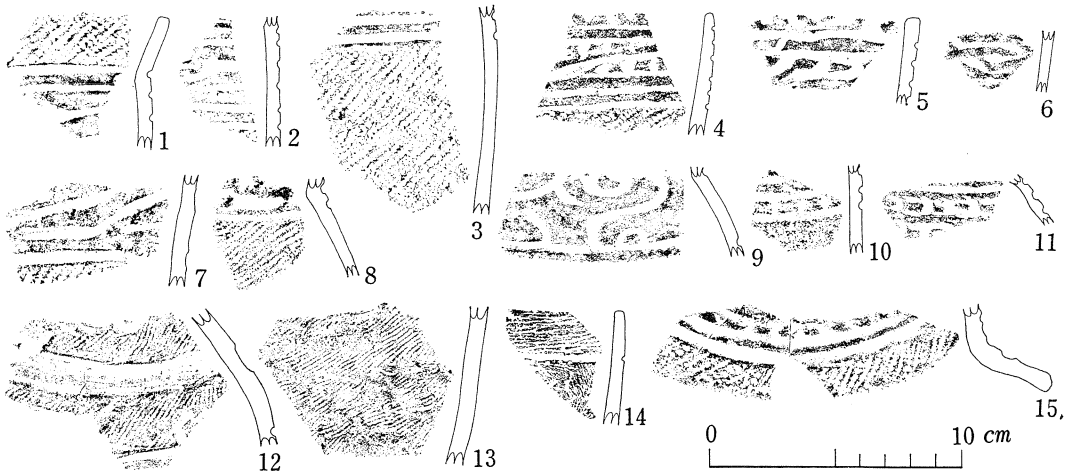
25（第 V-26 図 4）は口縁部が内彎気味に立ち最大径を胴部上半にもつ深鉢形土器。この期になって比較的目を引くようになる器形である。口頸部に三叉状の入組文、胴部最大径の部分にコブを起点とした重弧線文が見られる。描線は下方から上方に削り上げるような特長がある。口径約 16 cm。茶褐色。器面は篦削り痕の残るナデ整形である。27・29・30 も沈線文系土器。29 は菱形構成を持つものか、波状口縁である。小石粒を多く含み土質は粗い。茶褐色。30 は篦削りの器面に弧線、蛇行沈線を描いている。黒色。

31・32 は刺突文によるもの。31 は細かい三角刺突文が口縁部に充填されるもの、32 は米粒状の粗大な刺突文による。淡褐色で焼成良好。

28・33 は台付土器の台部。28 は恐らく複段となる台部で入組文が穿孔部を中心に磨消縄紋となるものである。橙褐色。安行 3b 式。33 は篦削り痕を残している。



第V-3図　A区a-4グリッド出土土器（1）



第V-4図　A区a-4グリッド出土土器（2）

34はa-4グリッド中では新しさと地域差の要素を持つ土器である。無節の縄紋、太い描線等は霞ケ浦、利根川下流域に分布する前浦式に近似する。淡褐色。焼成良好。

大洞系土器

第V-4図はa-4グリッド出土の大洞系土器を纏めた。

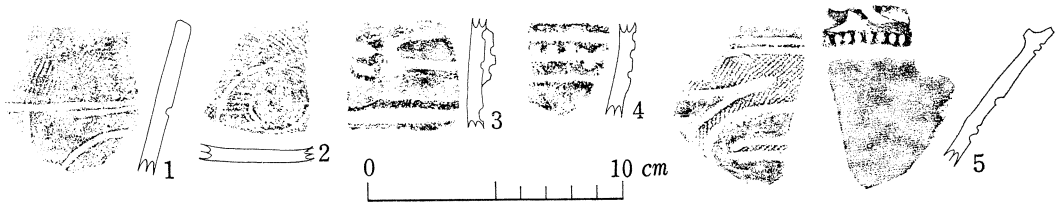
1～3は恐らく同一個体。体部上半に三叉文を方向を違えて重ね横帯化させるものである。大洞B_2式系譜のもの。暗褐色。器面は研磨され滑沢がある。

4・6は羊歯状文のもの、5・10・11は横線間截痕の施されるもの。大洞BC_2式～C_1式。4・5は口唇部にも刻目彫刻が施され、黒色で滑沢がある。9は壺形土器或いは注口付土器。15は台付土器の台部である。12は縄紋部を削り出している。大洞C_1式比定のもの。13には綾絡文が見える。14は口縁部の内彎する薄手の粗製土器。口縁部は横位の条線、沈線で区画した口縁部下は口縁部とは異なる尖鋭な原体による細線が充塡されている。暗褐色。粗い砂粒を多く含む。

a-4グリッドからは他に第V-25図に示したような2個体の磨消縄紋による入組文系土器が出土した。1・2共にa-2グリッドおよびa-4グリッドの両グリッドより出土して接合し得たものであるが主たる出土地点はa-4グリッドである。

第V-25図1は口径約24 cm、推定器高約7.7 cm。暗褐色研磨の精緻な台付鉢形土器である。口唇上のB突起は2個1対で4箇所に貼付される。口縁部文様帯は恐らく9単位の縄紋帯を連続的に入組ませ、三叉状の入組部を削り込むことによってあたかも羊歯状文様を浮き出させるという精巧なものである。鉢部と台部の接合部にはメガネ状突帯が繞っている。図上台部が上下二体に分かれて図示されているのは接合箇所を見出すことができなかったためで、台部の径、傾き等により復元した。第V-3図28のように複段になる台部の例も見られるが（伊藤・増田1978・1980）本例の場合全体の均衡等を考慮してもその可能性はないと思われる。器内は薄く胎土中には粗い砂が多い。縄紋は一見附加条風。太さの異なる原体二種3本の撚り合わせ$L\begin{cases}R\\R\\R\end{cases}$か或いは附加条LR＋Rかは不明である。

2は口径約25 cm、器高約5 cmの皿形土器である。体部文様は「軽快な磨消縄紋」（山内清男、1937）



第V-5図　A区a-5グリッド出土土器

によるもので、本グリッド或いはb-4グリッド等にもその類例が見られる。『日本先史土器図譜』中の安行3b式型式標本としての群馬県板倉沼例はその好例である。赤褐色。焼成良好。群馬、埼玉等北関東寄りに知られる台付鉢形土器の体部文様は概してこの種の入組文が展開することが多い。

4　a-5グリッド出土土器（第V-5図）

1は口縁部縄紋帯、縦線スリットに上向きの弧線文が見える。沈線は浅く弱い。淡茶褐色。b-5グリッドに1片文様構成の類似するものが見られるが器形は異なる（第V-9図5）。安行3b式。2は浅鉢或いは皿形土器の底部。黒色で内面に赤色塗彩痕がある。3b式。3は横位截痕あるコブが付されているもの。胎土、焼成ともに軟質。淡褐色。5は大洞C_1式の好例。雲形文は彫刻手法によって浮彫りにされている。黒色研磨の浅鉢形土器。4は大洞C_1式比定のもの。

5　b-4グリッド出土土器（第V-6図、第V-7図、第V-8図、第V-26図5、第V-28図2～4）

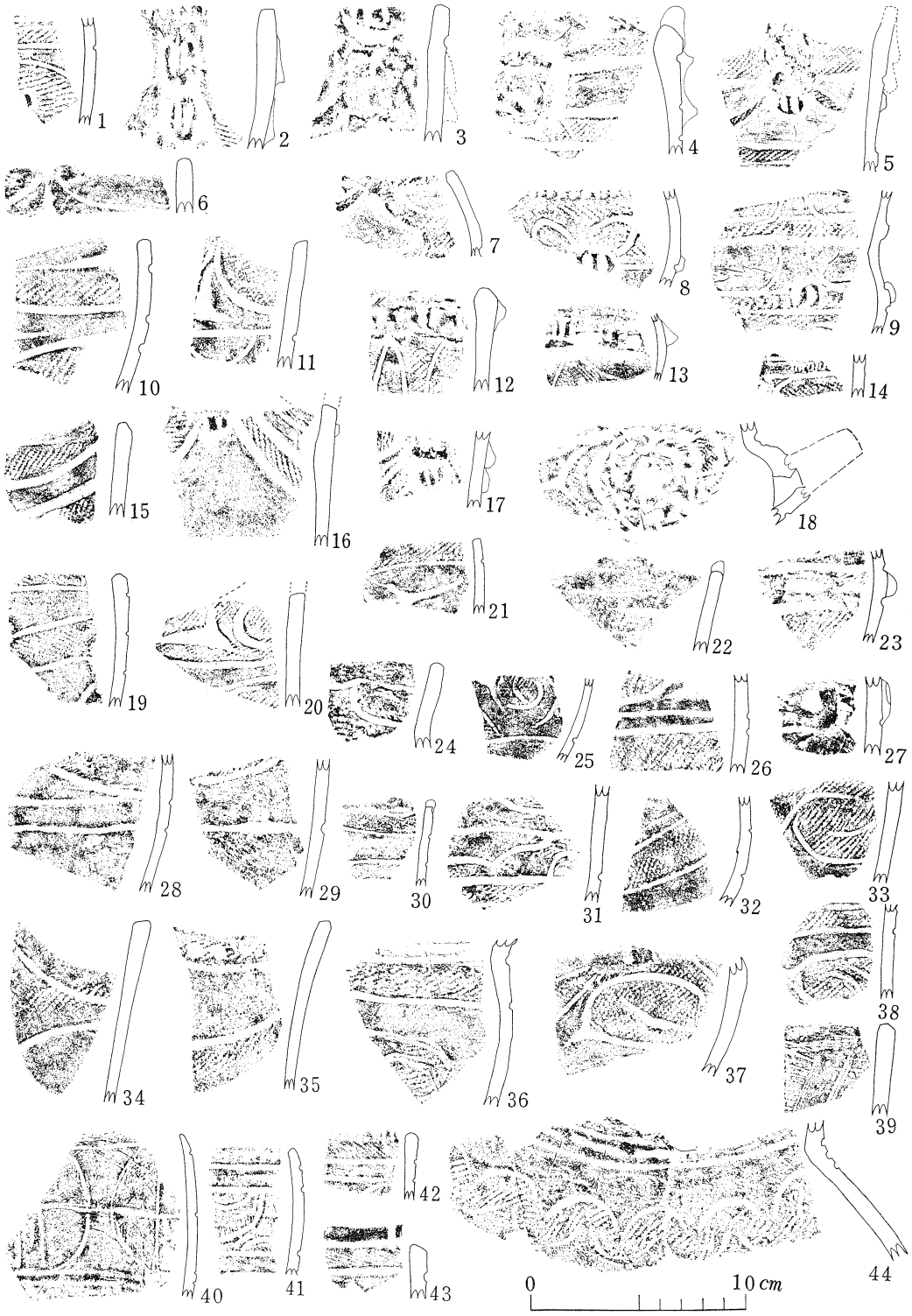
b-4グリッド出土土器群中目を引くのは安行3b式入組文系土器および大洞BC式、C_1式土器に比定される土器群であろう。入組文系土器は群馬県板倉沼（山内清男、1937）或いは同県千網谷戸（伊藤・増田、1978・1980）等に纏った資料が知られるように該種土器群は利根川中流域を中心に強い位相を持ち安行3b式の一系列を形成している。b-4グリッドの大洞系土器は主にBC式比定のものが多く、中でも新しいものからC_1式に亘るものである。それらは黒茶色或いは黒色研磨の器面に半彫刻的手法で文様を描くもの、褐色で胎土・焼成とも劣り文様も粗略に化した厚手ものがある。概して前者は大洞BC式に比定されるものの器質に共通する。骨片、炭化物等を多く含んだ漆黒色土層を包含層とし、主にa-4グリッド寄りに検出された。

安行系土器

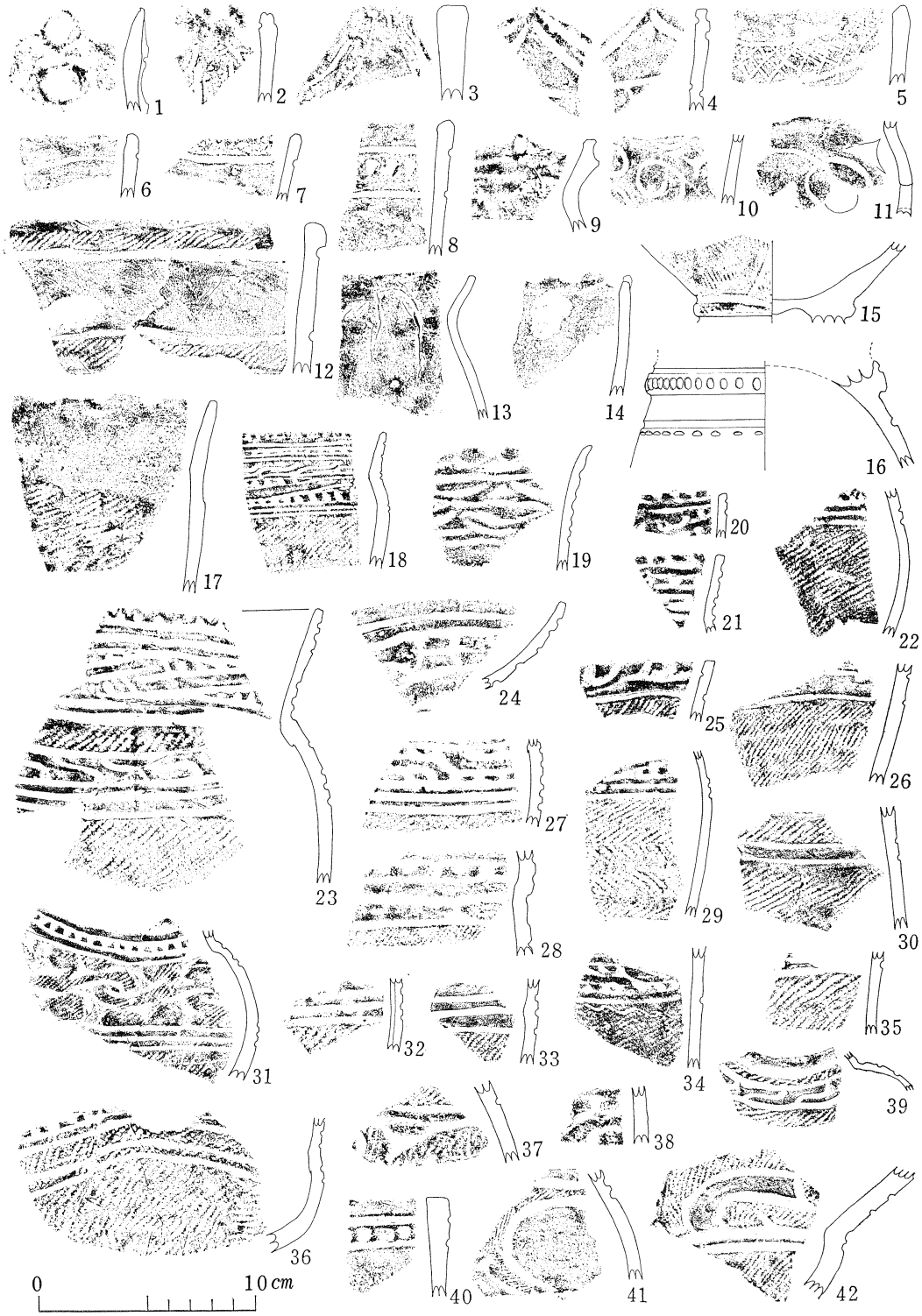
第V-6図2～5は下方に長く延びたコブを持つ深鉢形土器。2・3は波状口縁のもの、4・5は平縁のものである。安行3a式である。概して晩期に入ると前代の安行2式より胎土中に小石粒等の混入物が多くなり器質、焼成も劣る傾向にある。主に波状口縁に目立つ。8・9等は波状口縁深鉢の括れ部に見られる文様である。8は器形に不明な点がある。13は屈曲部に突帯の繞る浅鉢形土器。焼成堅緻。12は粗製土器。口縁部に押圧痕ある紐線が繞る。磨消縄紋によるが地文に条線のない点は注意される、小形土器の7、突帯の繞る23を含めて以上安行3a式。1は南奥系後期末～晩期初頭のもの。

6・10・11・18・20・21・25・26は弧線に三叉文の関与する類である。概して器面は平滑にナデ整形されており焼成良好。前述の波状深鉢等とは器質異なる。安行3b式であろう。18は東北系注口付土器。灰白色。39は利根川下流域の系統をひく粗製土器。

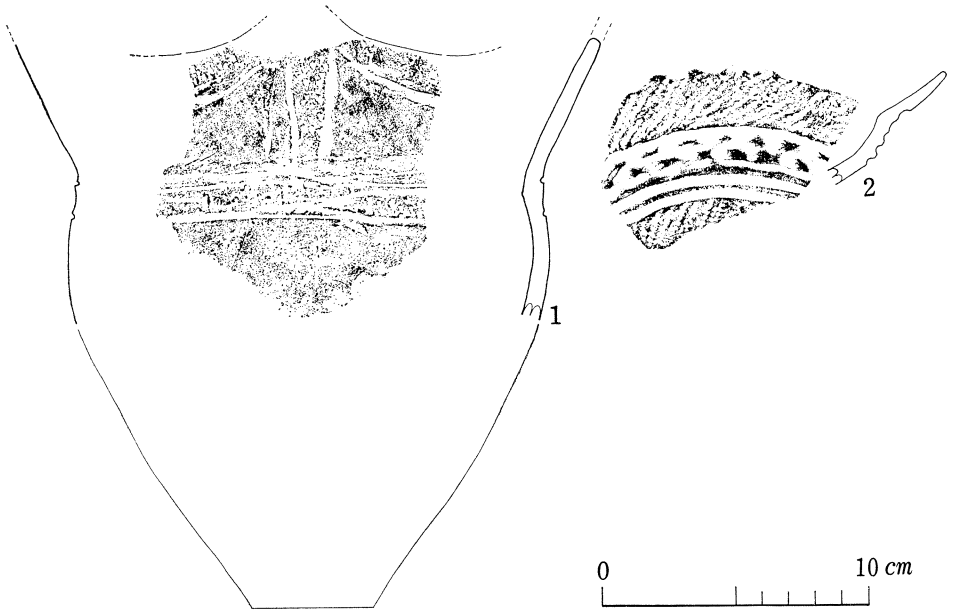
16は波状深鉢形土器。太い沈線に区画された縄紋帯が懸垂するものである。黒茶色で焼成堅緻。



第V-6図　A区b-4グリッド出土土器（1）



第V-7図　A区b-4グリッド出土土器（2）



第V-8図　A区b-4グリッド出土土器（3）

安行3b式。15は所謂「前浦直前」に類似している。

32・33・36～38は入組文系土器群。これらの入組文には少なくとも二種、入組部が接続しないもの（37・38）、連続して一繋ぎになるもの（33、好例が第V-25図2）が認められる。前者が古く後者が新しい。黒茶色で器面は平滑になでられている。安行3b式。

34・35は所謂姥山Ⅱ式類似の波状口縁土器。34は橙褐色で器面平滑。口縁部に刺突文の繞る35は黒色。

40～43は細密沈線文土器。42・43は橙褐色で土質、焼成共に良い。40（第V-26図5）は黒色で胎土中に砂粒を多く含む、42・43に比して文様構成も簡略化している。41は所謂細密沈線文土器の規範からは外れるものであるが弧線文間に細密線が充填されている。40・41は42・43より後出のものであろう。他にコブを有すもので細密線が施されるものが17である。3b式。

安行3b式を構成するものとして他に磨消縄紋のもの（19・24・28・29・31）、口縁部縄紋帯で突起を有するもの（22・30）等が属すかと思われるが文様構成等不明な点も多い。44は淡黄色～灰白色。胎土に混入物多く焼成もあまり良くない。括れ部に横位の刺突列が繞るが、多少古いものかも知れない。

第V-7図2・3・7および第V-8図1は三角形の刺突が施されるもの。器面が無文化し、口頸部に縦位スリットが加えられる第V-8図1等の出現については畿内系土器に留意する必要がある。第V-7図8の刺突截痕は大洞C_1式的である。7・8は橙褐色。他は黒色。概して器面整形が粗くなる点前代の波状深鉢と区別される。波状深鉢には第V-7図1ボタン状の円形コブを持つものがあるが安行3b式あるいは3c式期のものと思われる。コブは北関東に知られるものである。

沈線文系土器としては第V-7図4・5・6・10等がある。10は大洞式土器を模倣したもの。

無文土器に9・13・14等がある。13は小形土器、14は口唇部上に突起が付される。共に器面は平

滑になでられ滑沢を持つものもある。安行3b式～3c式。

無節の縄紋Lを磨消縄紋として太い沈線で枠状文を描くものが12である。黒色で口縁部は複合状に肥厚している。17は口唇部に押圧痕を持つ粗製土器。外反気味の口縁部が無文となる点が特長的である。暗褐色で土質は混入物多く粗い。安行3c式期だが、大洞系粗製土器を模倣している。

15は台付土器の鉢部、11・16は台部である。15は体部を細かな縄紋が覆うもの、11は穿孔のある入組文のもの、東北的なものである。16は刺突のあるもの。前2者より後出のものである。

大洞系土器

第V-28図2（第V-7図23）は口径約24cm、緩く開く口縁部が頸部で縮約し肩部が多少張り出した深鉢形土器。口唇端部は刻目が施され、口縁部文様帯に羊歯状文、胴部文様に右下りのクランク状文様が付されている。文様帯および胴部のクランク状の文様等は東北的と言うより中部日本的である。茶褐色～黒色。器面は多少滑沢を帯びる。第V-7図18・39には左下りのクランク文が見える。18は羊歯状文と重畳する口縁部文様、39は黒色研磨の壺形土器肩部に付されるもの。大洞BC式の新しいものに比定されると思われる。大洞BC式には他に20・21・25・27・34等が該当しよう。黒色研磨の20のような入組文は中でも古く、27・34等に見られる羊歯状文が横線化するものは新しい。22・26・29・30・32・33・35等は黒色で器面に滑沢があり古い要素を持つ。

第V-28図3（第V-7図31）は胴部最大径約15cmほどの壺形土器。沈線による入組文の要所に三叉文と変形の菱状文様を磨消縄紋とすることによって羊歯状文風の帯状入組文を表出させるものである。頸部は横線間截痕による。黒色で多少滑沢を帯びる。磨消縄紋による羊歯状文の構成は大洞BC式的であるが、弧線文による変形菱形状の磨消文様等の出現は新しい文様要素を持ち、大洞C_1式に通ずる。BC式末か或いはC_1式の初頭に比定される関東的な土器である。

第V-28図4（第V-8図2）は口径約16.5cm、推定器高約4.5cmの小形浅鉢形土器。頸部文様は彫刻的手法による截痕が加えられた後研磨されて滑沢を帯びる。口唇上には小突起が4個現存している。淡茶色で内外面とも研磨され滑沢がある。土質は精選され緻密、焼成も非常に良い。大洞C_1式か。越後の系統か。

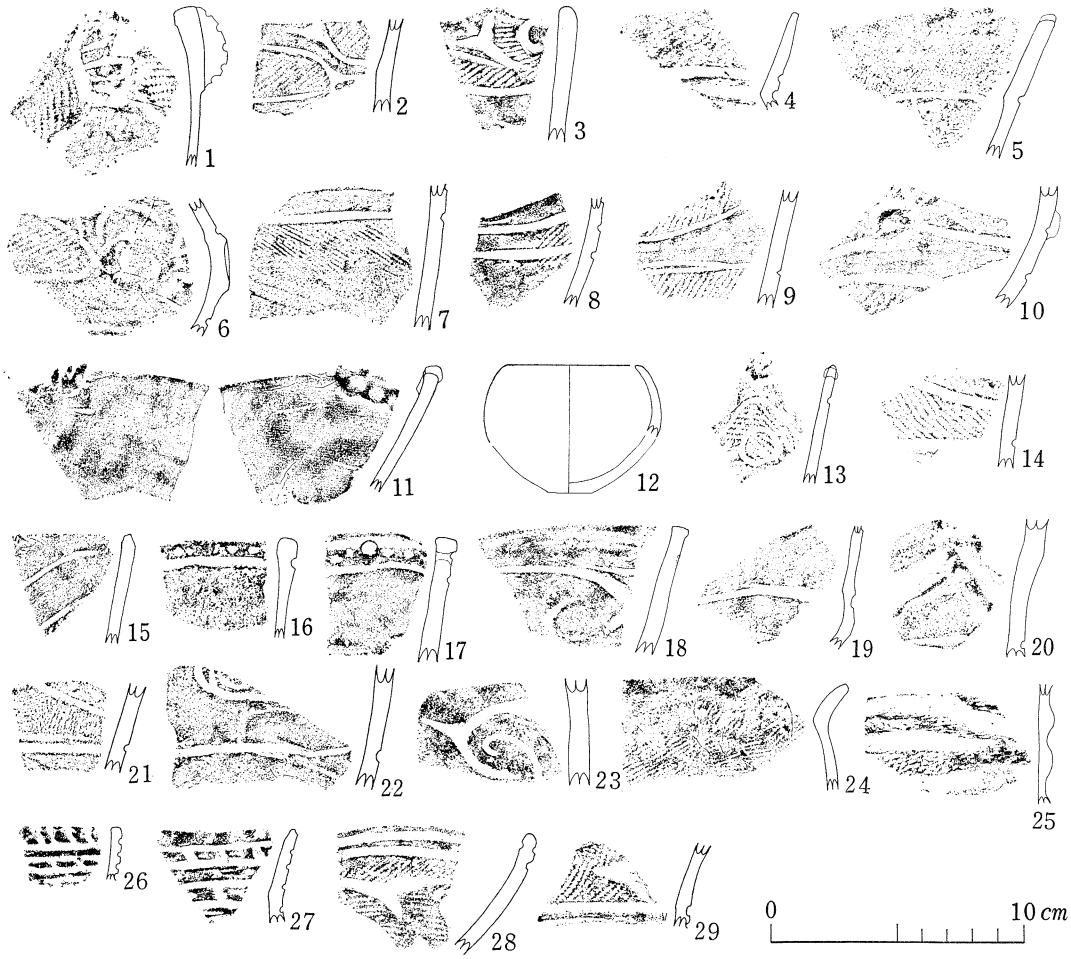
第V-7図24・28・37・38・41・42等は大洞C_1式比定のもの。文様は太目の沈線によって描かれるもので概して粗大である。24・42は橙褐色で器面に滑沢がある。第V-7図36も大洞C_1式比定のもの。土質砂粒等の混入物多く粗い。40は横線間截痕を模したもの。

6　b-5グリッド出土土器（第V-9図）

b-5グリッドは東方が攪乱のため出土土器の量は多くない。黒色土の堆積もb-4グリッドほど顕著ではない。

1・2・6・7は晩期初頭のもの。1は安行系。三角内帯文が欠落している点が注意を引く。黒色で焼成堅緻。2は東北系のもの。入組部が三叉状文となっている。6は注口付土器。ボタン状のコブを中心として、第V-26図1に近似した磨消弧線文が展開すると思われる。淡褐色で焼成は軟かい。10にもコブが見える。文様の全体は伺えないが古いものであろう。7は沈線および縄紋が東北系のもの。

3～5、8・9・14は安行3b式。3は三叉文をもち器面滑沢のあるもの。3・4は東北の系譜を引くものである。5は類似のものがa-4グリッドにあるが文様構成は不明。口唇上にB突起が見られる。8



第V-9図　A区b-5グリッド出土土器

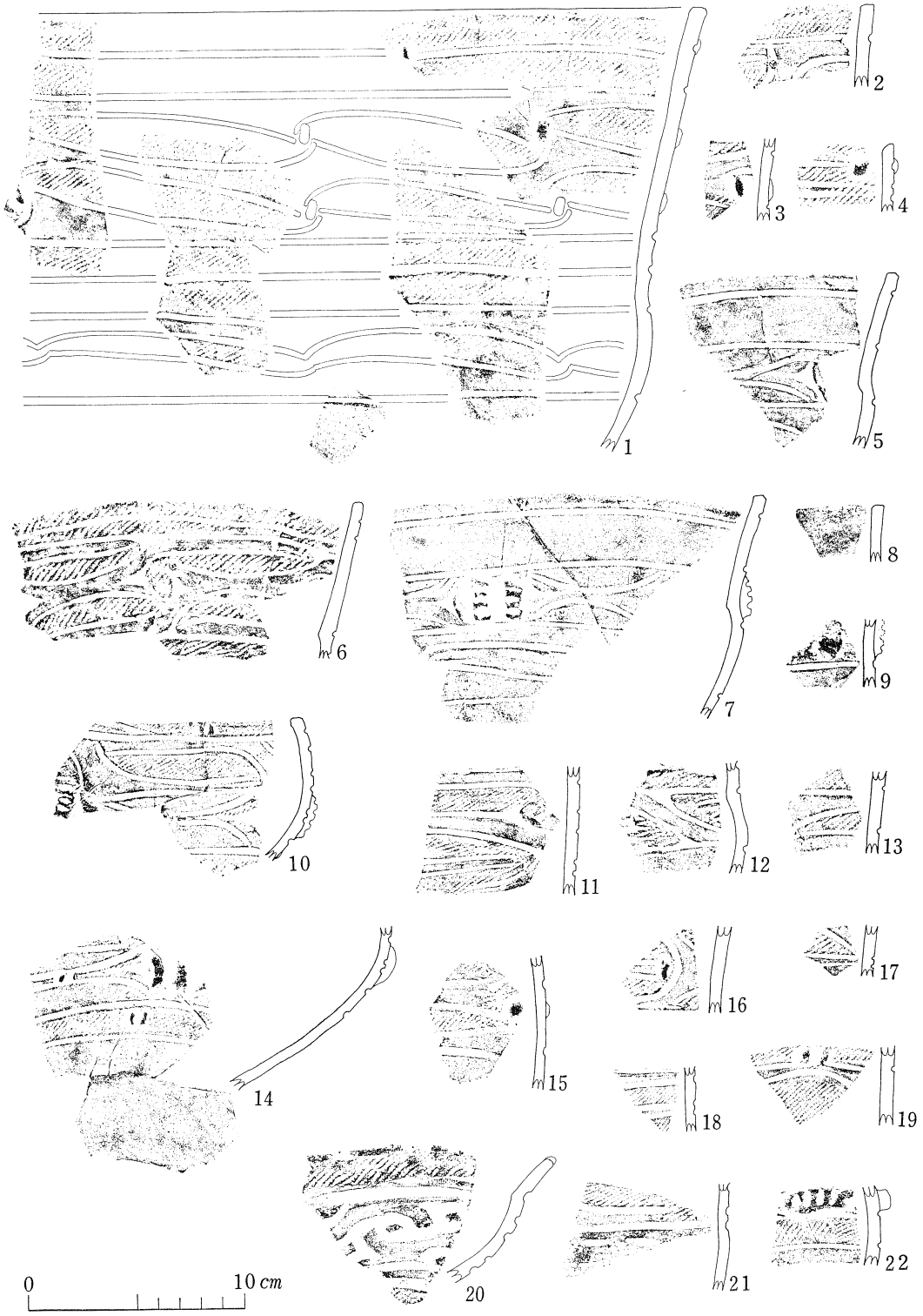
は赤褐色の土器。第V-6図16等の北関東、中部に見られる波状深鉢の類と思われる。9・14は磨消縄紋のもの。15も3b式か。

無文の浅鉢形土器11は赤褐色で滑沢がある。袖珍土器の12は砂混りの粗い土質、焼成不良のもの。淡褐色。安行3b～3c式。

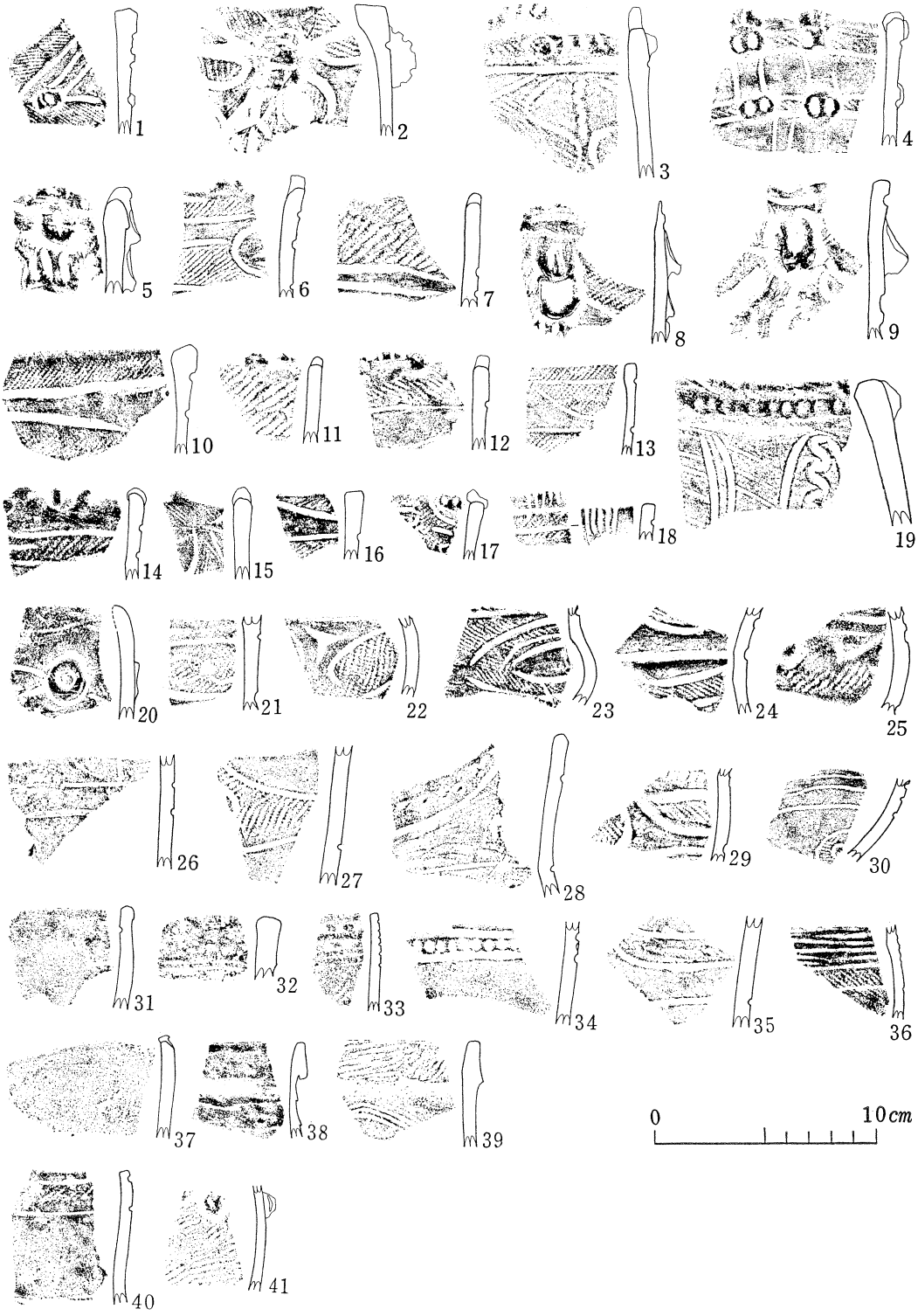
安行3c式には刺突文のもの（16～18）、沈線文のもの（19・20・22・23）、姥山系（13）、細密線のもの（21）等が見られる。13は口縁部から垂下する弧線文が波頂部で連結、円文が加えられる等文様は簡略化されている。21も波状口縁土器であろう、縄紋部が細密線で代替が行なわれている。黄茶色。

26～29は大洞系土器。26・27は横線間截痕のものであるが27の截痕は粗大である。26は黒色。27は茶褐色で滑沢がある。28・29は三叉文のあるもの。共に浅鉢であるが29は括れを持つものである。黒味を帯び、28には滑沢がある。24も東北系のものであろう。灰茶色。

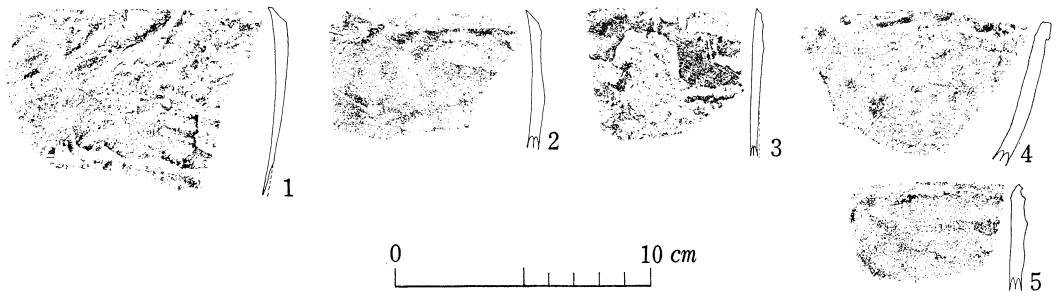
25は無節の縄紋に太目の沈線文が引かれるもの。3c式期のものであろうか。あるいは3d式期。



第 V-10 図　A 区 c-4 グリッド出土土器 (1)



第V-11図　A区c-4グリッド出土土器（2）



第V-12図　A区c-4グリッド出土土器（3）

7　c-4グリッド出土土器（第V-10図、第V-11図、第V-12図、第V-24図、第V-28図5）

c-4グリッド出土土器は、安行3b・3c式、大洞BC・C_1式を主に出土したb-4グリッドと隣接しながら全く時期の異った一群の土器の検出が目を引く。南奥系「寺脇系列」とでも名付けられる晩期初頭の土器群がそれで、入組文系の深鉢、台付鉢等のあり方は後期と晩期の区分についての茨城県西部における一回答例となろう。他に製塩土器数片の伴存が注意される。

寺脇系土器

第V-10図1〜19・21・22、第V-24図である。6を除いて器質に強い斉一性があり、小破片でもそれと判断できる。土質は精選された粘土質に富み、微細な砂を混じえるもので焼成堅緻白っぽい淡茶色〜黒色を呈する。他グリッドから検出され南奥系晩期初頭土器と見られるものにも共通する。

第V-24図1（第V-10図1）は長い口縁部が緩く開き、器体中央部でわずかに括れる平縁深鉢形土器である。図は苦しい復元実測で、入組文が図のように重畳する例は今のところ管見に触れ得ないので不安は残る。口縁部縄紋帯が二段になり2個一対のコブを持ち、頸部にはコブを中心に三叉文の関与しない入組文が横位に展開するものである。2〜4・13・15〜18等もコブの有無、入組文の構成の差異はあるが、三叉文の関与しないものとして共通する。

第V-24図2（第V-10図6）は口径約13.5 cm。口頸部文様は左下りの入組文が2段一組となって恐らく5単位で展開するもので入組部が三叉状に削り込まれているものである。土質は他の土器群と異なり、胎土中に粗い砂を多く含む。茶褐色で内外面とも粗く磨かれて滑沢がある。11・12等は入組文に三叉文が関与するものである。

第V-24図3（第V-10図5・7・9）は口径約21 cmの台付鉢形土器。口縁部一条の横線、緩く括れる頸部に横位截痕ある縦長のコブ2個一対を中心に弧線文と三叉文が、胴部に入組文が展開するものである。第26図4（第V-10図10・14）は内彎する鉢部を持つ台付土器。口径約19.5 cm。屈曲部はやはり2個一対のコブを中心に弧線文と三叉文が、口縁部は右下りの入組文が展開する。屈曲部のコブは截痕のあるものとないものが観察される。磨消縄紋である点前者と異なる。後者には第V-24図1の口縁部に見られる粘土を掻き寄せて作出したような2個一対の小コブが付されている。19にも同様のコブが観察される。21は括れ部に横長の截痕のあるもの、22には5個の刻目のある豚鼻状コブが見える。

第V-28図5（第V-10図20）は大洞BC式比定の浅鉢形土器の黒茶色。胎土には粗い砂が多く、器面は軽く磨かれている。

安行系土器

第V-11図1～4は晩期初頭の土器群である。1は三角形の隆起帯がRLの縄紋帯となっている。2は注口付土器。黒褐色で滑沢がある。3は口縁部の心持ち開く平縁深鉢。口唇部に突起、口縁端部に截痕ある横長のコブが付されている。4は台付鉢形土器であろう。

受け口状のコブを持つものに5・8・9がある。5・8は安行3a式後半のもの。9は恐らく三角内帯部に三叉文等が描かれるもので、5・8よりは後出の異系列のものと思われる。19は紐線文系土器。黄白色で焼成堅緻。埼玉県井沼遺跡（安岡・早川、1960）に好例がある。

6・12・21～23・29等も晩期初頭のものであろう。

7・10・11・13～18等は安行3b式期のもの。口唇部上に突起や粘土紐が付されるものが多い。18は口唇上に断続的な截痕のあるもの。26は細密沈線文系土器であるが作りは粗く焼成も良くない。黄茶色。27は黒色の焼成堅緻な姥山Ⅱ式波状深鉢形土器である。

安行3c式期のものに刺突文のものがある。28は口頸部に交互入組文のあるもの、32は三角刺突文の充填されるもの、34は円形の刺突文が横線間に施されている。35は3c式期。37は無文の浅鉢形土器。器表面は篦削り痕が残る。黒色。

38・39は粗製土器である。38は折り返し口縁のもので淡黄色、焼成は良くない。輪積み痕が残る。安行3c式期のものであろう。39は黒色で焼成堅緻なもの。口縁部隆起帯縄紋は無節のL、体部は櫛状の曲線文によっている。型式不問。

その他20はボタン状のコブを持ち、41は截痕あるコブを持つ。30・40は磨消縄紋のもの。安行3b～3c式期のものと思われるが型式同定できる類例を知らない。41は古いものかもしれない。

大洞系土器

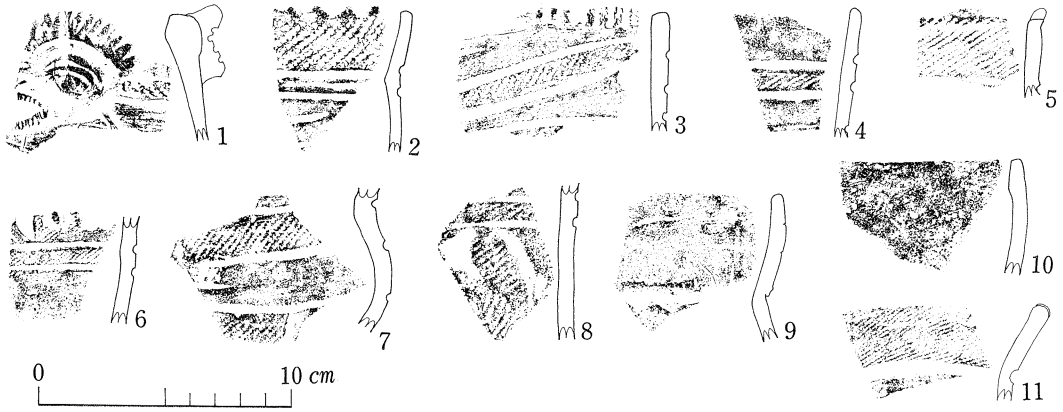
25と33であるが、共に大洞C_1式に比定されよう。25は灰白色、半肉彫風である。33は橙褐色、土質、焼成とも粗い。36も大洞系のものと思われる。黒色研磨。

製塩土器および類似土器（第V-12図）

製塩土器およびその類似土器として抽出した5片のうち明らかに製塩土器と同定できるものは1～3・5である。中でも1・2は赤褐色で器肉は薄く焼成は堅緻である。1は器面剝落しており、内彎する口縁部は指押えによると思われる。2は器面横位の篦削り痕が残り、口唇部篦カットによって内側への尖唇状を呈している点は他と異なる。安行3a式の典型。内面は共にナデ整形が施されている。鉢形のものであろう。3・5は白黄色、器肉は1・2より幾分厚手である。器表面の整形は3には剝落が見られるが篦削りの跡が窺える。5は指押えの後なでられているようである。口縁部は粘土を積み上げて軽く押えているもので口端は2の形状とは異なり所謂尖唇状を呈さない。むしろ1に近似する。内面はナデ整形による。

4片の製塩土器は製塩址を伴う利根川・霞ケ浦沿岸出土のものに比すると器質に多少異なりがあるが、c-4グリッドのみに見られた製塩土器の存在は本グリッド出土土器の時期を考える上で重要である。製塩土器の形式学的研究に照らせば（寺門・1969、鈴木・1976）、後期末～晩期初頭に比することができる。

4は浅鉢形土器であろう。口縁部の作りが3・5に類似し、粘土を積み上げて軽く押えたものである。口端は比較的厚く器面も平滑になでられている等製塩土器そのものとは認め難いが製作技法に共



第V-13図　A区c-5グリッド出土土器

通性のある点他の無文土器と異なるので図示した。淡黄色。焼成良好。

8　c-5グリッド出土土器（第V-13図）

安行系土器

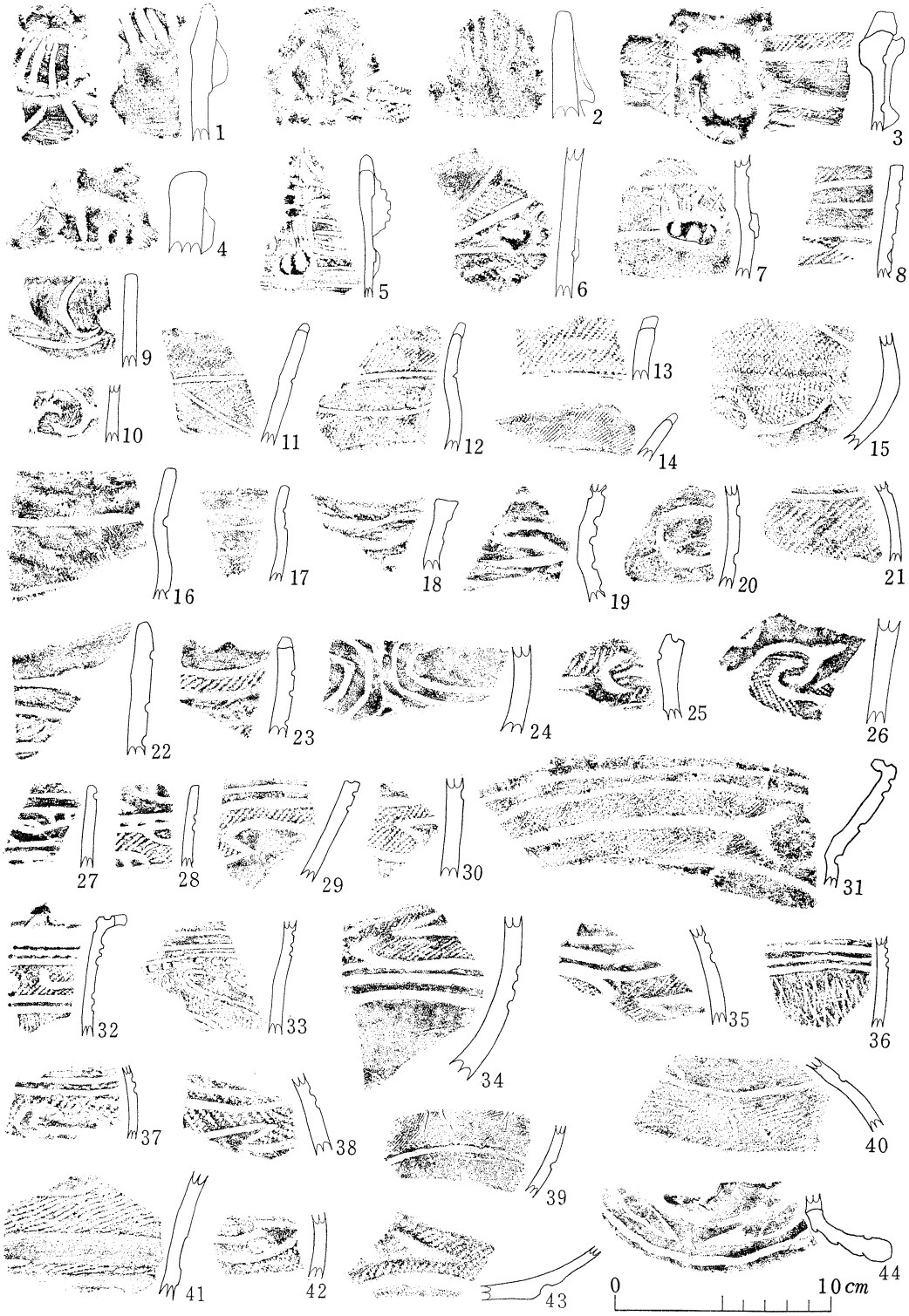
1は安行2式の注口付土器。暗褐色で焼成堅緻。

3～7・11は安行3b式。磨消縄紋系の土器。3は口唇部上に刻目が施されている。滑沢がある。4は淡褐色。小形土器の口縁部であろう。5・6は黒色、6は滑沢がある。7は台付土器の台部であろうか、入組文が描かれているものと思われる。黒色で土質は粗い。11は浅鉢形土器であろう。口唇部に刻目ある粘土紐が貼付されている。黒色研磨の土器である。

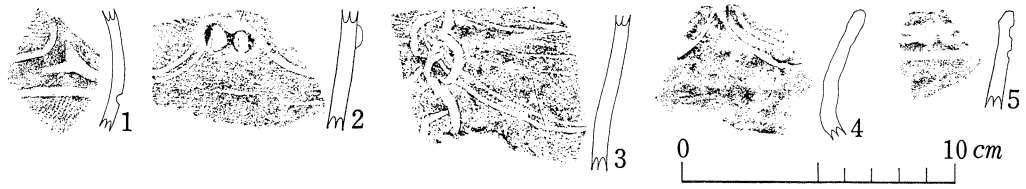
その他、9は肥厚する口縁部に輪積痕の残るもの。粗製土器と思われる。淡茶色で土質は粗い。10は鉢形土器。口縁部内側が肥厚する。淡黄色で器面に粗く縄紋が残る。

大洞系土器

2と8である。2は大洞B_2式に比定されるもの。第V-4図1～3と同一個体。8は大洞C_1式に比定されようか。灰白色で焼成は柔らかい。



第V-14図　A区b-2グリッド出土土器（1）



第V-15図　A区b-2グリッド出土土器（2）

9　b-2グリッド出土土器（第V-14図、第V-15図、第V-30図1）

安行系土器

第V-14図1・2・4は縦位截痕のあるコブを持つ波状深鉢形土器。1・4のコブは断面半円状を呈す。2は下方に延びた形のもの。2個一対となる。1・4より後出のものである。平縁深鉢に貼付される3のコブは縦長で粗大である。いずれも暗褐色～赤褐色、焼成堅緻。6・7は波状口縁深鉢の口頸部破片である。5は横位截痕と豚鼻状コブを持つ土器。隆起帯にはRLの縄紋、枠状文内には横線が数本充塡されている。淡黄色。以上安行3a式である。

第V-14図8～10・21、第15図1は東北系土器文様の影響下に生成する土器群。器面研磨され滑沢がある。以上も安行3a式である。

第V-14図11～14は口縁部縄紋帯で口唇部上にB突起を持つ。器面には滑沢がある。15は入組文のものであろう。以上安行3b式である。

第V-14図16～20・22～26、第V-15図2～5は安行3c式期。16～20は沈線文系のものである。16は埼玉県大宮・岩槻台地に多く見られる平縁深鉢で体部に沈線による入組文が展開する。17は小型土器。20は枠状文の粗略なもの。18・19・24等は中でも新しい段階のものであろう。22は波状縁。概してこの期のものは茶褐色～褐色で前代に比して器面は粗いナデ整形が或いは篦削り痕をそのまま残すものが目を引く。23・25・26は縄紋系のもの。25・26は三叉文の関与するもので、25は赤褐色、23・26は黒色である。第V-15図5は内面整形より恐らく台部。同図4は北関東のものか。

大洞系土器

b-2グリッドの大洞系土器はc-2グリッド同様C_2式期のものが目立つ。

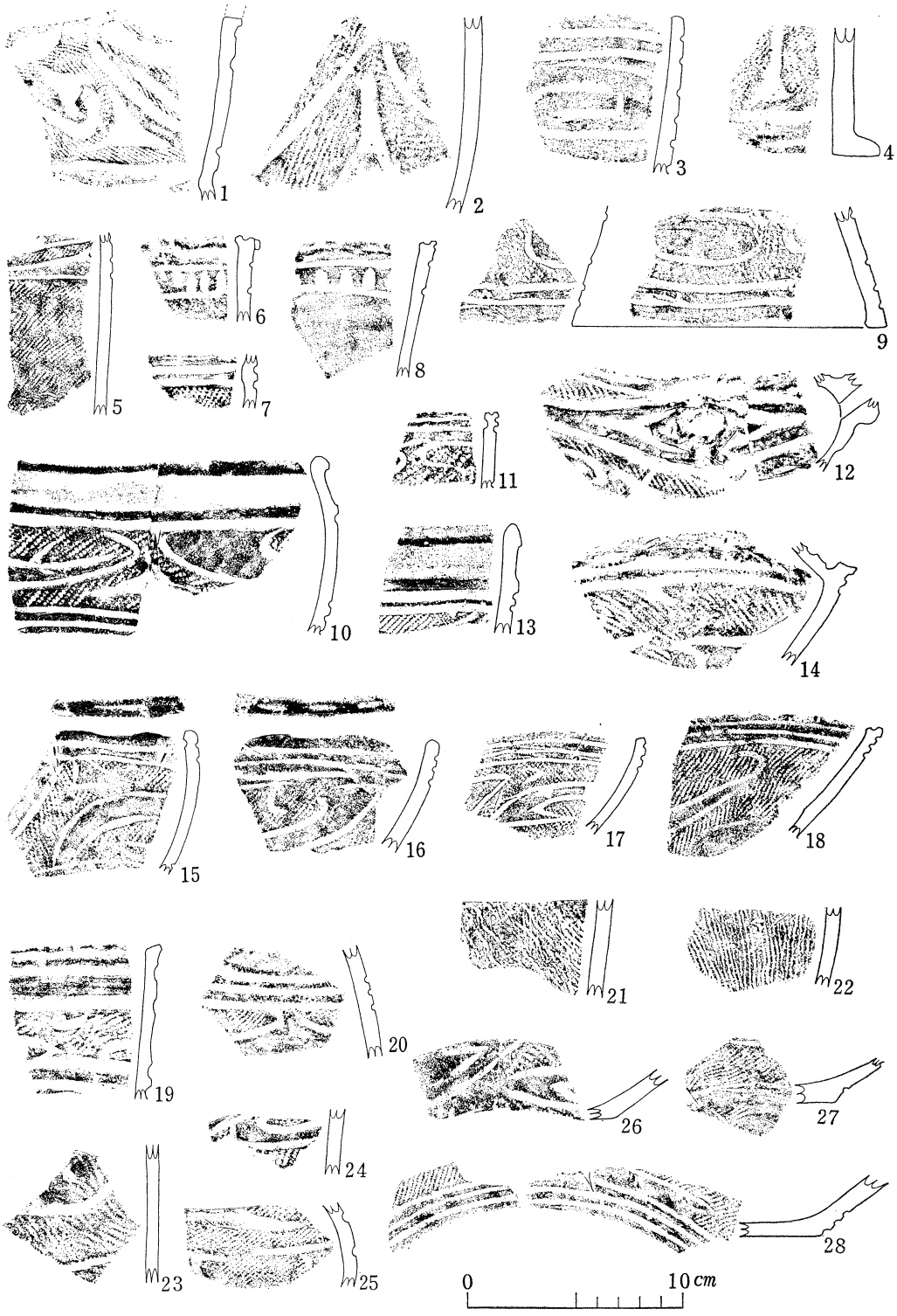
27・28は大洞BC式比定のもの。39は古いものかもしれない。

29・30は大洞C_1式比定の浅鉢。同一個体。口唇外端部に截痕が施される。文様は浅い沈線による。41・43も大洞C_1式期のものと思われる。こちらは縄紋部を浮彫風に仕上げている。

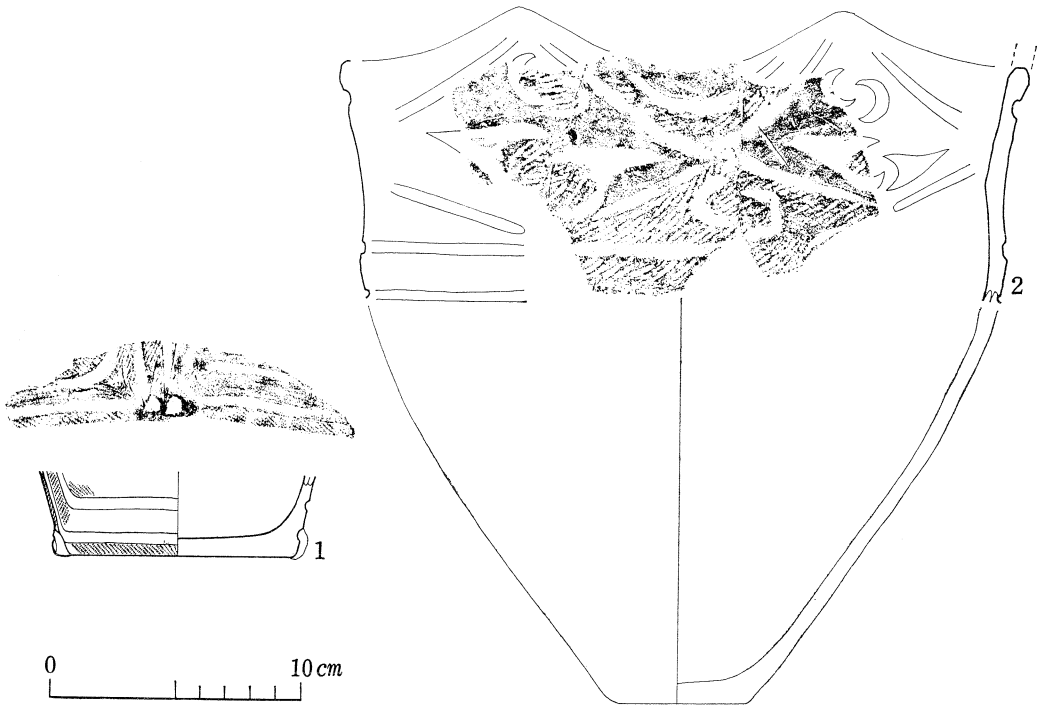
31～40・42・44は大洞C_2式期のもの。ただ、31（第V-30図1）の文様は大洞C_2式には存在しない。器形、口唇部の作り等は前浦式の浅鉢に見られるものである。太目の沈線による点も同式に近い（鷹野光行、1978）。胎土も異質で、白色の軽鉱物、砂粒を多量に含み、焼成も悪い。34・35・37・38・42はC字状の磨消縄紋を特長とする一群。C_2式前半の土器群である。暗茶色で焼成堅緻。44はC字文を台部に付したものである。黒色研磨の土器。

32・33は栃木県北等の北関東に比較的多い深鉢形土器。36の網目状撚糸文の土器も同様。主として粗製土器を構成する文様であるが、32・33等の精製土器の体部を飾るものともなる。32・33は黒色。36は暗茶色。同様C_2式前半期のものである。39については前述。

第V–16図　A区c–2グリッド出土土器（1）



第 V-17 図　A 区 c-2 グリッド出土土器（2）



第V-18図　A区c-2グリッド出土土器（3）

10　c-2グリッド出土土器（第V-16図、第V-17図、第V-18図、第V-29図1、第V-30図2・3・4）

c-2グリッドからはb-2グリッドと共に大洞C_2式比定の土器が多く出土している。他には安行3c式期のものと思われるものが目を引く。比較的類例に乏しい一群で説明に困難を感じるが、沈線文によるものと縄紋の施されるものとがある。前代のものに比すると土質、焼成、整形等において幾分劣化する傾向にあることは既に触れた。安行3d式期になると土器相が大洞系に席巻されるという現象は隣接する栃木県南部或いは利根川を挟んだ猿島台地とは異なり、北関東或いは茨城県北東部と同期の傾向にある。そうした傾向は安行3c式期にも窺え、同じ茨城県西部でも猿島台地とは共通性に乏しい。

安行系土器

第V-16図1～8は安行3a式。1・2は波状深鉢形土器、3・4はそれらの口頸部破片。5は浅鉢形土器。6は平縁深鉢である。以上暗褐色～黒褐色で一様に焼成良好。特に5は焼成堅緻で土質も精選されている。7・8は玉抱き三叉文のもの。茶褐色で土質は混入物多い。

第V-18図1は1辺9.5cmほどの角底土器である。矩形の底部から立ち上がる角部には豚鼻状コブが付されている。黒色研磨の土器である。安行3a式か。

第V-16図14～17は安行3b式。14は姥山Ⅱ式の波状縁土器、暗褐色で器面滑沢がある。15～17は磨消縄紋系のもので焼成土質共に良好。10～13は安行3a式或いは3b式と思われる。

第V-16図18～20・23・31～33、第V-17図3は沈線文系土器である。18の口唇部には押圧痕がある。黄茶色、土質、焼成あまりよくない。31は内面にも太い沈線が繞っている。33は綾杉状文のも

の。安行3d式に類似の構成をとるものがある。暗茶褐色。胎土中に混入物多い。23・32の文様構成は不明、32にはボタン状の突起がつく。安行3c式期のものと考えられる。33、第17図3等は後出のものである。

23・25・26は刺突列の加えられるもの。22・26は同一個体。復元図が第V-29図1である。口径約20cm、口縁部強く外反し頸部で括れて肩部の張り出した深鉢形土器。肩部に付された2頭あるコブを中心に広がるL字状の沈線、その沈線に添って刺突文が繞っている。口唇部上にも刺突文が施されている。胎土中には乳白色の軽鉱物を含む。焼成は良好。黒褐色。25は口縁部の内彎する鉢形土器（？）で口端部と体部に刺突文の繞るものである。器面は剝落が著しく口唇上および体部にコブが貼付されていた痕跡がある。黒茶色で焼成良好。第V-17図6・8も刺突文によるものであるが、これらは大洞C_1式を模した類である。口唇部上に彫刻文がある。6は橙褐色、焼成は軟質である。8は黒茶色。刺突の加えられるこれらは安行3c式であろう。

第V-16図24・27～30は多少張り出した口唇部外端に截痕の加えられるものである。口唇部下には1条或いは2条の横線が引かれている。暗褐色～黒色、器面には滑沢がある。安行3c式期のものであろう。

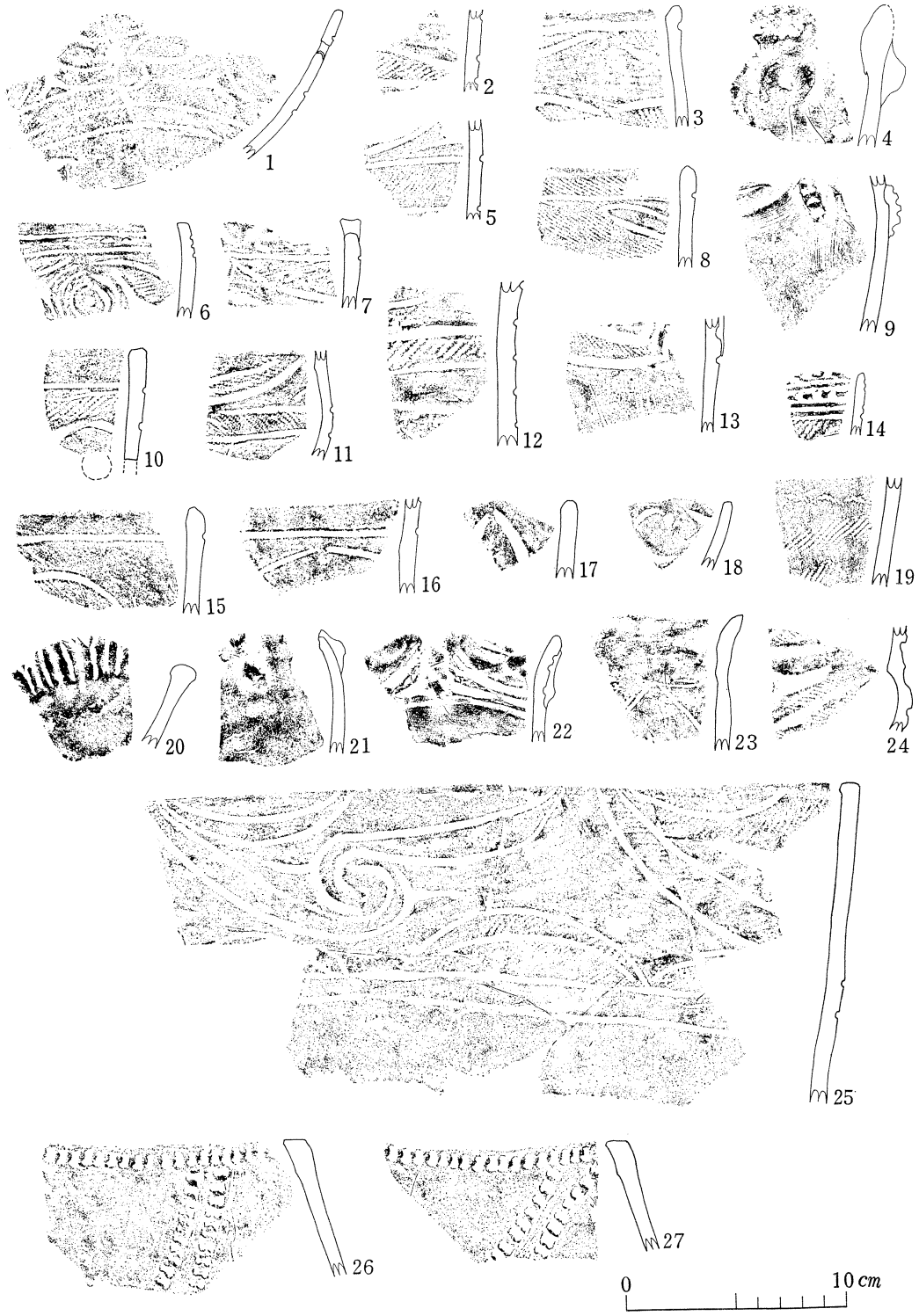
第V-16図28、第V-17図1・2・4・9、第V-18図2は縄紋系のもの。第V-17図1は波状口縁深鉢形土器。弧線および三叉文は深く抉るように描かれることを特長とする。黒色で焼成堅緻。第V-18図2も波状縁に三叉文の関与するものである。前者より新しいもの。菱形区画の中に入組弧線文と三叉文を配置するもの。Lの縄紋は無節のものと思われ、器形太く浅めの沈線等の特徴は姥山系土器に連なるものというより、より前浦式に近い安行3c式終末期のものではないかと考える。胎土中に粗い砂粒等の混入物多く焼成もあまりよくない。茶褐色。前浦式に近以するものとしては第V-17図2の太く浅い沈線、粗大な三叉文等を指摘できる。波状口縁のもので内面は丁寧になでられている。淡茶色。第V-16図28は口縁内側に横線を持つもの、34はRLの縄紋帯に横線の走るもの、共に千葉県西広貝塚（鷹野光行他，1977）等に類似資料がある。28は暗灰色、34は黒色である。第V-17図4・9は台付土器台部。共に晩期中葉のもの。大洞C_2式に類似する。4は淡黄茶色、9は暗褐色である。

大洞系土器

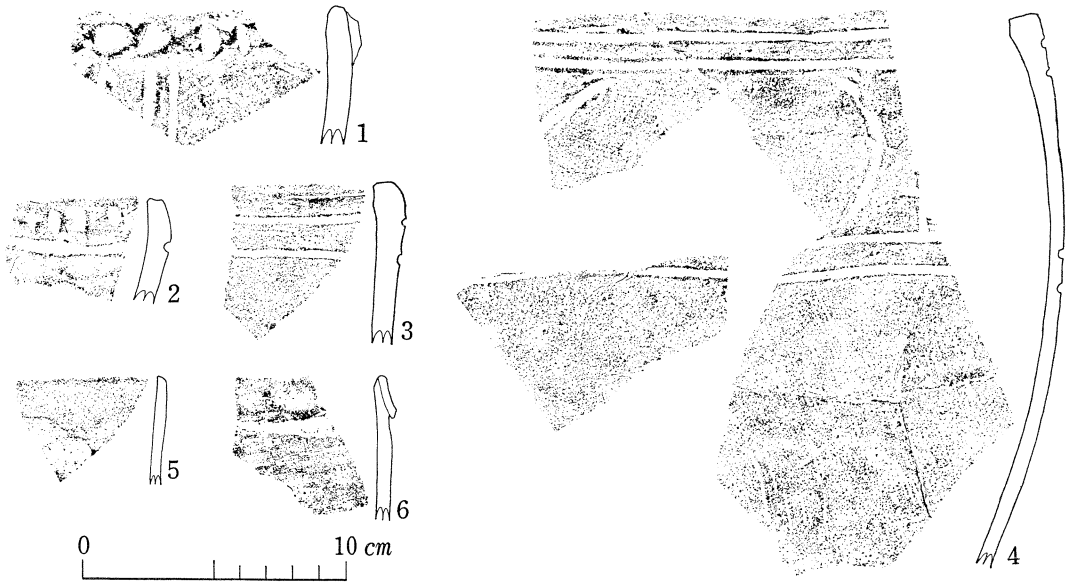
第V-30図2（第V-17図10）は大洞C_2式中葉の典型。口径約21cm、口縁部を無文帯とし、体部にC字文を配すもの。黒色で器面に滑沢がある。C字文を持つものに第V-17図15～18・24・26がある。共に浅鉢或いは鉢形土器である。15・16は口縁部が波打ち口唇上に横位の沈刻がある。18は口端に截痕の加えられるもの。大洞C_2式前葉のものである。第V-17図20も同様。同図27・28は（浅）鉢形土器の底部である。21・22はC_2式に伴う粗製土器である。11はC_2式類似のものである。

第V-30図3（第V-17図12）は恐らく大洞C_2式の注口付土器。黒色で滑沢がある。同図4（第V-17図14）も大洞C_2式比定の注口付土器。同文様を呈するものに第17図25がある。4は淡黄色で焼成は軟らかい。第V-17図13は同図10に胎土、焼成等酷似する。

第V-17図5は大洞B_2式或いはBC式比定のもの。口縁部文様が磨消縄紋となっている点特異である。黒茶色。幾分滑沢がある。



第 V-19 図　A 区 d-2 グリッド出土土器 (1)



第V-20図　A区d-2グリッド出土土器（2）

11　d-2グリッド出土土器（第V-19図、第V-20図、第V-26図1・2、第V-27図、第V-29図2、第V-31図）

本グリッドからは安行系土器の他は異系統土器がほとんど認められない。唯一大洞系土器が1片見られるだけである（第V-19図14）。

第V-19図1（第V-26図2）は小形浅鉢形土器。穿孔ある突起が特長的で、弧線間に三叉文が配されるものである。安行3a式であろうが、口縁部突起の類似例は東北地方にも見られる（林・鈴木、1980）。土質は混入物多く焼成は軟質である。淡橙褐色。第V-19図2・5・6・18・24等も三叉文の関与するもの。晩期初頭のもの。

第V-26図1（第V-27図）は注口付土器。口縁部、注口部を欠損する。円形のコブを中心に弧線文と三叉文が広がるもので、水海道市築地出土の注口付土器に類似例がある（星山芳樹、1976）。寺脇系列に比定される。古鬼怒湾に類似資料が多くみられる。

第V-19図3・7・8・10～12は磨消縄紋のもの。同図4の波状深鉢と共に晩期前葉と思われる。

第V-19図15・16・17・23は沈線文系のもの。15・16は粗製土器の文様帯を持つ。黒灰色で焼成堅緻。深鉢形土器。同図21は小コブの付された小形無文土器。安行3c式である。同図22は壺形土器の口縁部片であろうか、暗褐色でよく磨かれている。晩期中葉のものと思われる。

本グリッドで目立つ大形土器は第V-19図25（第V-29図2）である。胴下半部を欠損しているので明確ではないが、ほぼずん胴の深鉢かと思われる。弧線文と三叉状入組文が磨消縄紋の部分とそうでない部分がある。淡茶色、焼成堅緻。安行3c式期のもの。

他、第V-19図に後期のものが混入した。9は高井東系のもの、20は加曾利B式期のものである。

第V-20図、第V-31図は粗製土器である。第V-31図1は口径約29cm、口縁部粗い条線文に斜位のスリットが配されるもの。スリット部は軽く磨消されている。後期末～晩期初頭の、主に霞ヶ浦、

利根川下流域を中心に分布する紐線文系土器である。同図2も1同様内彎する口縁部をもつ砲弾形の深鉢。第V-19図26・27も同一個体で、主体部は本グリッドから出土しているが他にb-2、c-2の各グリッドよりも検出されている。紐線が頸部にのみ繞り、口端および口縁部には斜位のコの字状の刺突文が連続するものである。工具は半截竹管の両端を使用したと思われる。口縁部は丁寧にナデ整形され、胴部は篦削りの後軽くナデ整形が行なわれている。茶褐色で焼成堅緻、東部関東或いは西部関東には見られないものである。恐らく安行3b式。

第V-20図1は紐線に粗大な押圧痕のあるもので所謂紐線文土器に見られるそれとは趣きを異にする。茶黄色で焼成堅緻。2は口端に刺突文の繞るもの、3・4は沈線文のものである。共に焼成堅緻。6は折返し口縁のものである。4は安行3b式直後。6は更に後出の段階。

12　d-3グリッド出土土器（第V-21図）

1・2・6は同一個体。c-4グリッド出土の寺脇系晩期初頭の土器群と器質を全く同じくする。精選された粘土質の軟らかい胎土を持ち器面は非常に平滑になでられている。要所に米粒ほどのコブを持つ。淡橙褐色～黒色。台付鉢形土器か。

7～10は三叉文のあるもの。7・8は弧線間に三叉文の配されるもの。9・10は横位に並ぶもの。いずれも黒色で焼成良好。晩期初頭～前葉のもの。

3～5・12・13は安行系深鉢土器。3は横位截痕のコブを持つ平縁のもの。5・6は2個一対のコブを持つ類、13のコブは指頭状の窪みのあるもので三角内帯文は恐らく三叉文のある類である。12はRLの縄紋が三角隆起帯部を覆うもので口唇上に貼付文がある。安行3a式及び3b式のものである。

安行3a或いは3b式のものに入組文の11、磨消縄紋の14、口縁部縄紋帯、B突起を持つ15等がある。18・19は姥山II式。細密沈線文土器である。焼成軟質で粗製。恐らく安行3b式段階。17については器面滑沢がある。3b式に見られる器質を持つ。22も恐らく3b式。入組文の台部である。17は橙褐色で焼成堅緻。姥山II式類似の波状口縁深鉢。恐らく3c式期。

23～27・29・32・33は沈線文によるものである。23は3b式からの伝統を持つステッキ状の弧線文のもの。26のボタン状貼付文に弧線のものは北関東に見られる（小島純一、1981）。27は玉抱き三叉文の浅鉢。赤褐色。安行3b或いは3c式期と思われる。25・29は器面調整・沈線の様子等、常総台地の3c式の典型である。共に淡褐色。25はヘラ削り後、軽いナデ。

34・35は口唇部に突起或いは押圧痕のある無文土器。34は灰白色、35は茶褐色である。安行3b式或いは3c式期と思われる。30は器表面縄紋で内に三叉文と太い沈線が描かれる。3c式或いはさらに後出のものか。21は磨消入組文を肩部に配する壺形土器。恐らく安行3c式期。

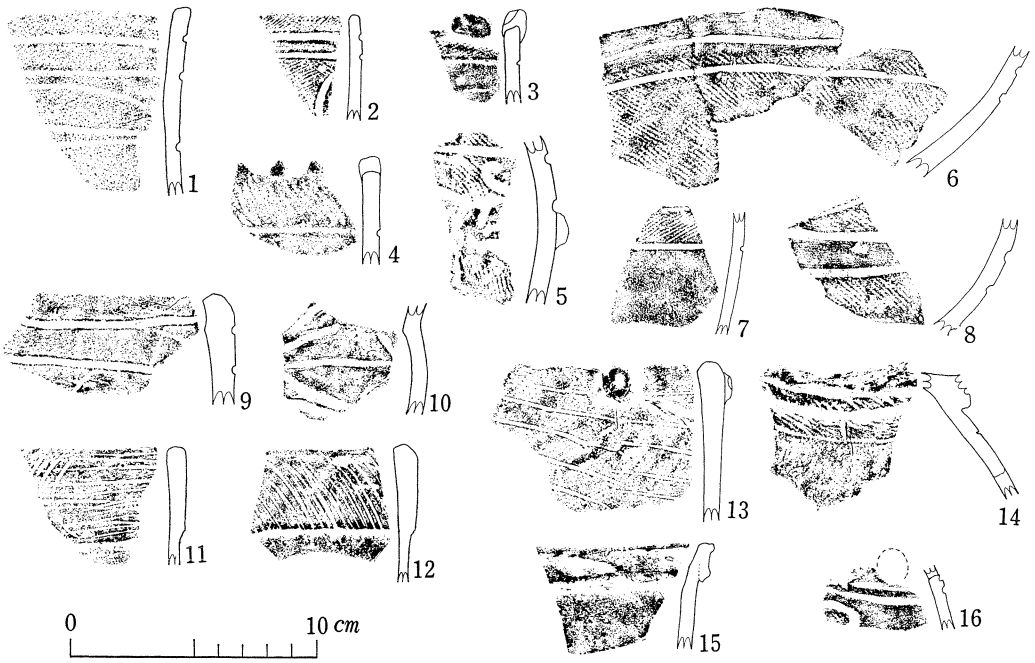
大洞系土器が2点、28と31である。28はBC式。31はC_1式かと思われる。口唇上に彫刻文がある。

13　d-4グリッド出土土器（第V-22図）

1は南奥系後期末～晩期初頭入組文系土器。c-4グリッド出土の一群とは土質が異なり、砂粒等の混入物多く粗い。黄茶色。6・8は浅鉢形土器であろう。黒茶色。同一個体。

2は細密沈線文土器。土質、焼成良好。3・4は口唇上に突起をもつもの。5は豚鼻状のコブのあるもの。安行3b式。

第 V-21 図　A 区 d-3 グリッド出土土器



第 V-22 図　A 区 d-4 グリッド出土土器

9・10 は沈線文のもの。9 は粗製土器の文様帯をもつ。

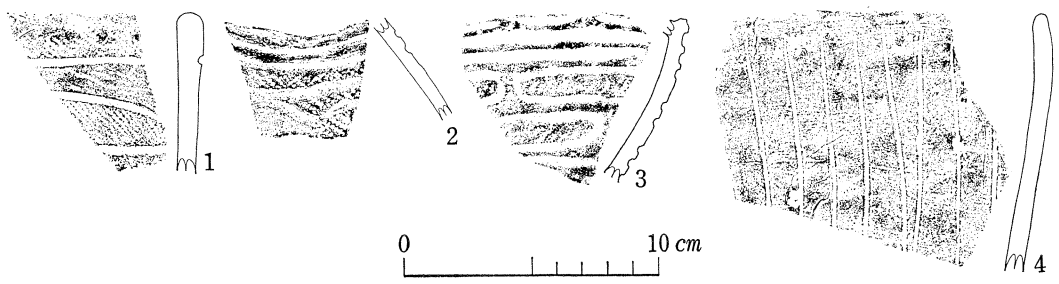
13・15 は粗製土器。13 はボタン状コブを持つ粗い斜行条線文のもの。安行 3c 式期。黒茶色。焼成堅緻。15 は折り返し口縁のもの。焼成は非常に良い。淡茶色。

11・12 は複合口縁状を呈し、口縁部に条線が充填されている。黒茶色で胎土焼成ともあまり良くない。恐らく縄紋の代替文様であろう。安行 3c 式期。

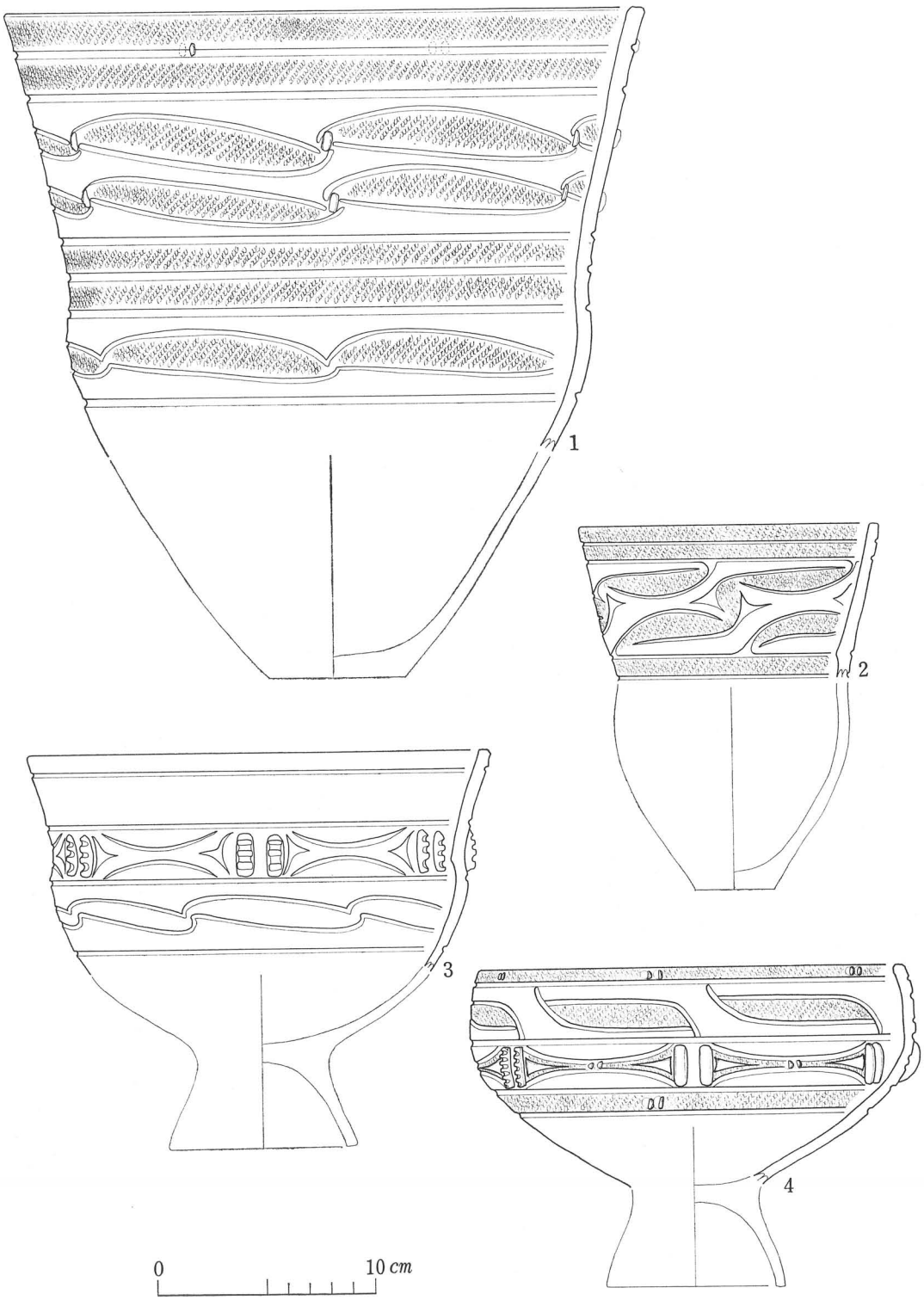
14・16 は台付土器の台部である。14 は台接合部に粘土紐が繞り、斜位截痕が施されている。赤褐色。

14　d-5 グリッド出土土器（第 V-23 図）

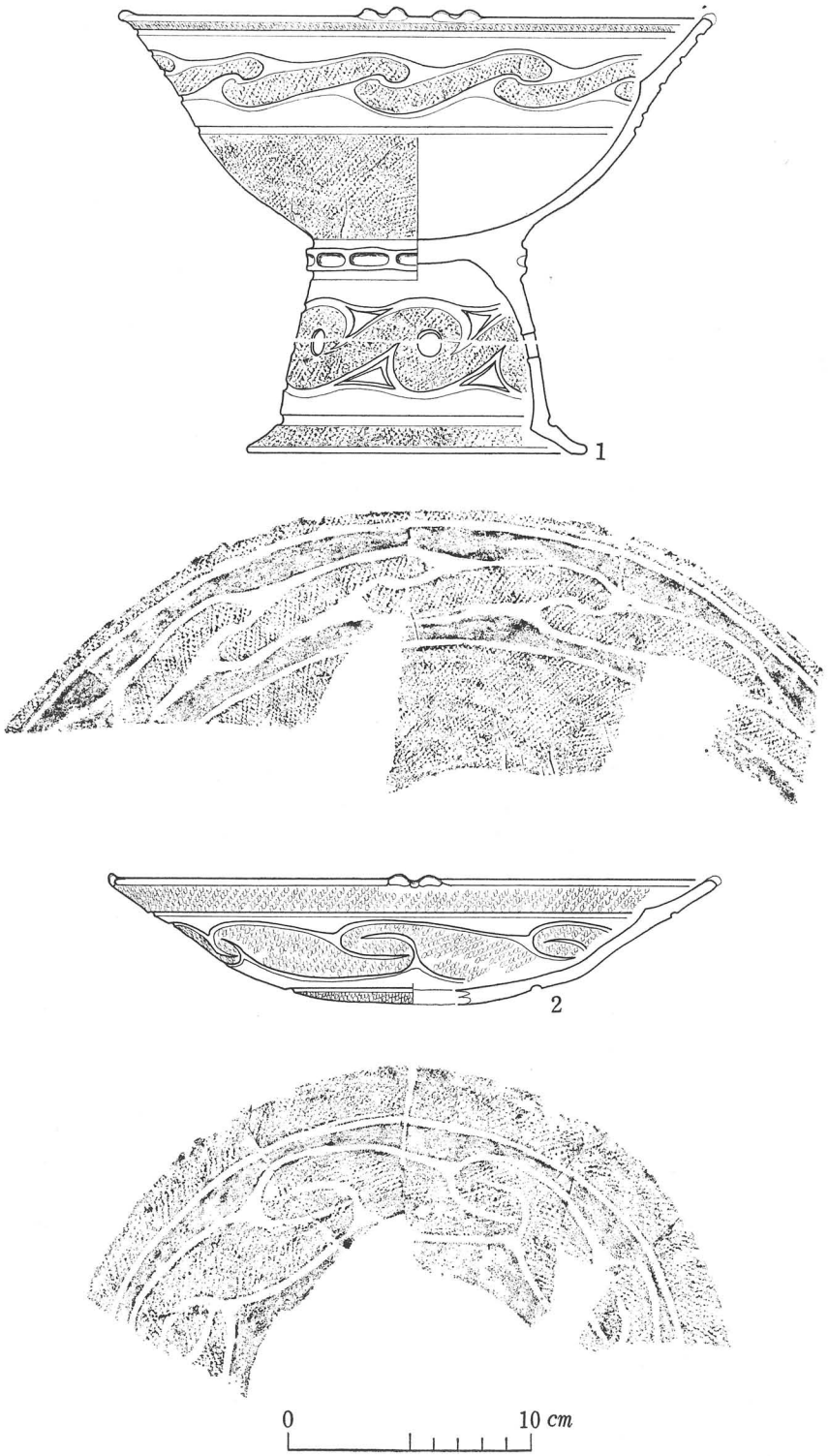
1 は南奥系入組文土器。茶褐色。2・3 はいずれも黒色研磨の土器。大洞系のもので、3 の浅鉢は c-2 グリッド出土の一群より多少後出の C_2 式。4 は口縁部内彎する粗製土器。黒茶色。



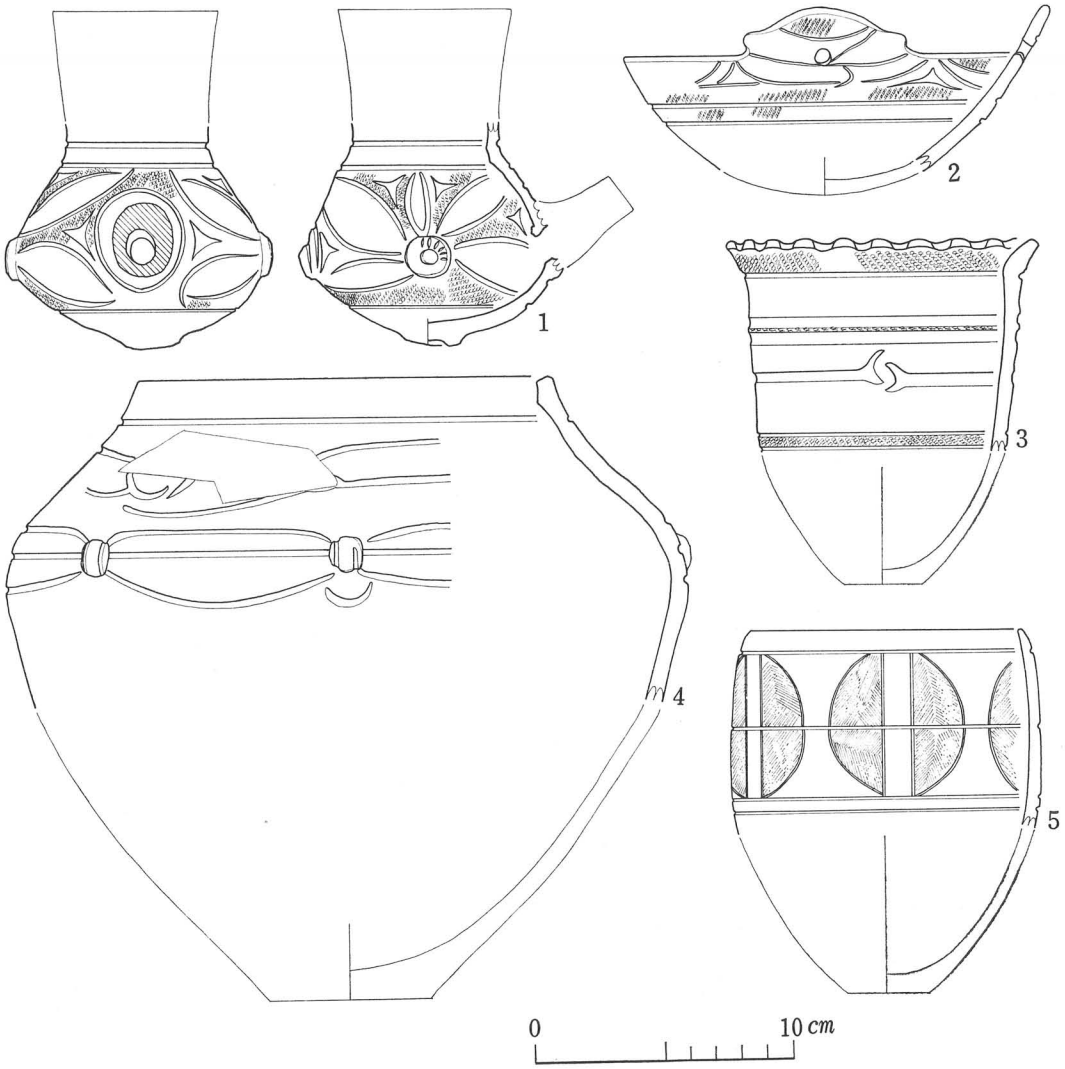
第 V-23 図　A 区 d-5 グリッド出土土器



第V-24図　A区c-4グリッド出土土器

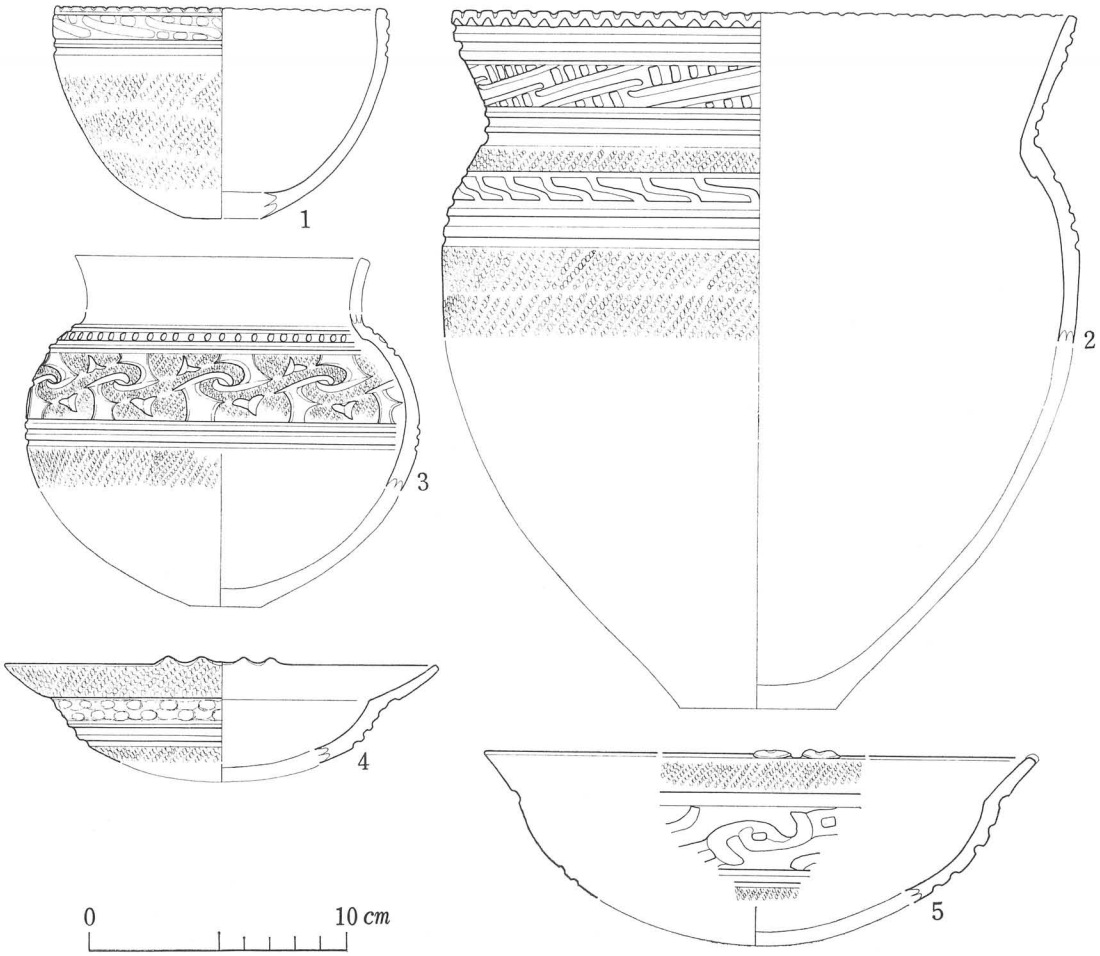


第 V-25 図　A 区 a-2、a-4 グリッド出土土器



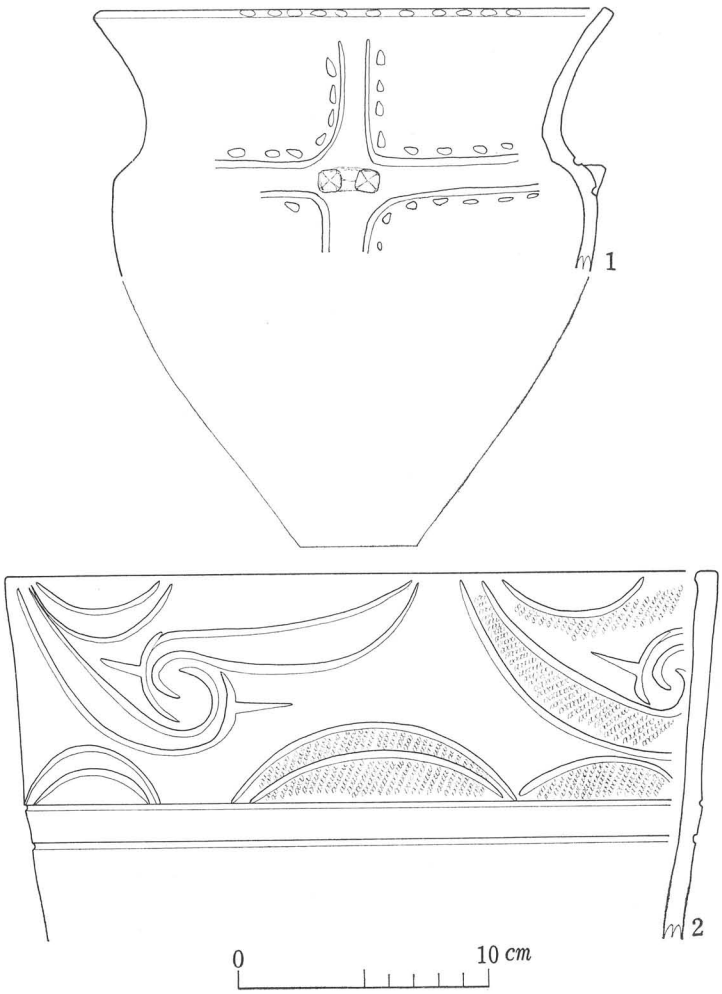
第V-26図　A区a-2、a-4、b-4、d-2各グリッド出土土器

第V-27図　第V-26図1注口付土器拓本図

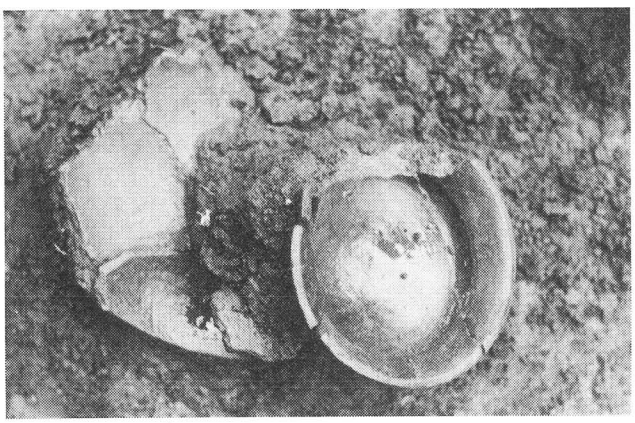


第 V-28 図　A 区 a-2、b-4、c-4 各グリッド出土土器

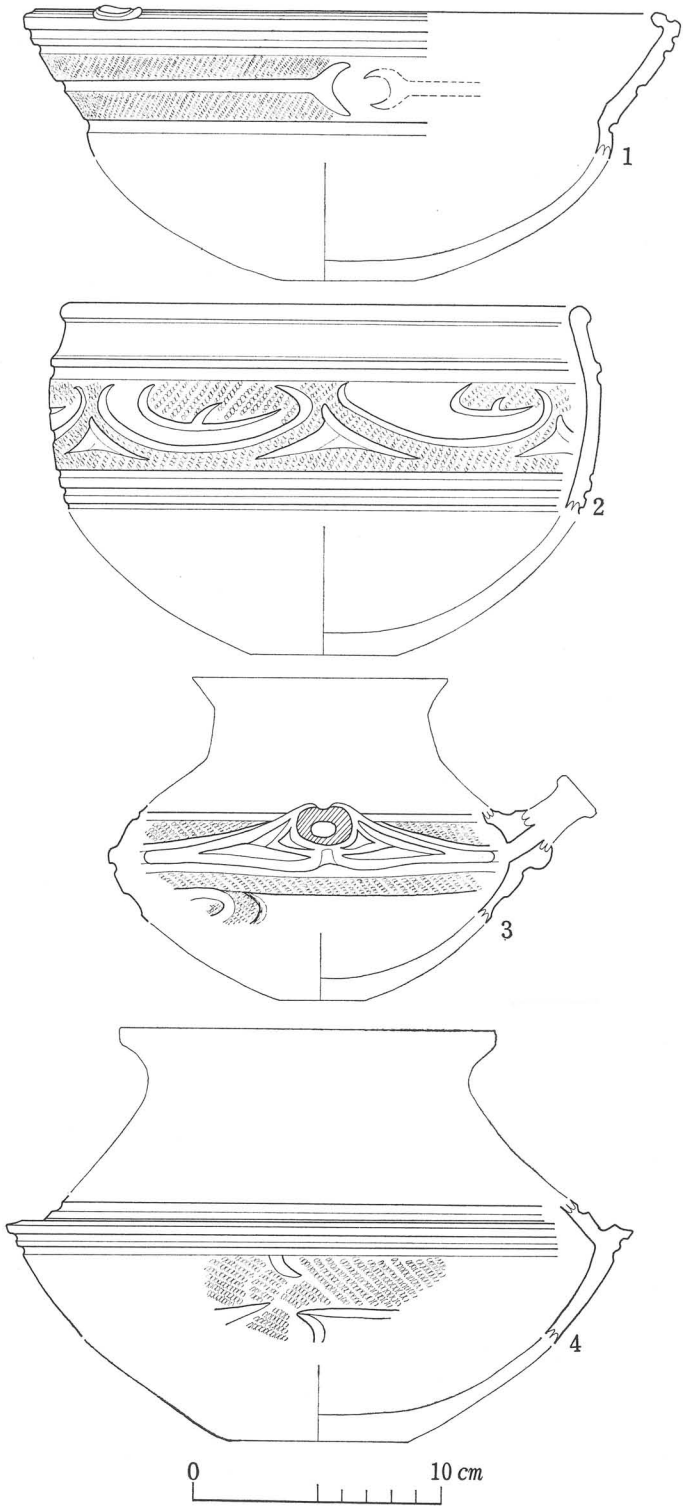
第 46 挿　A 区 d-2 グリッドの注口付土器出土状態



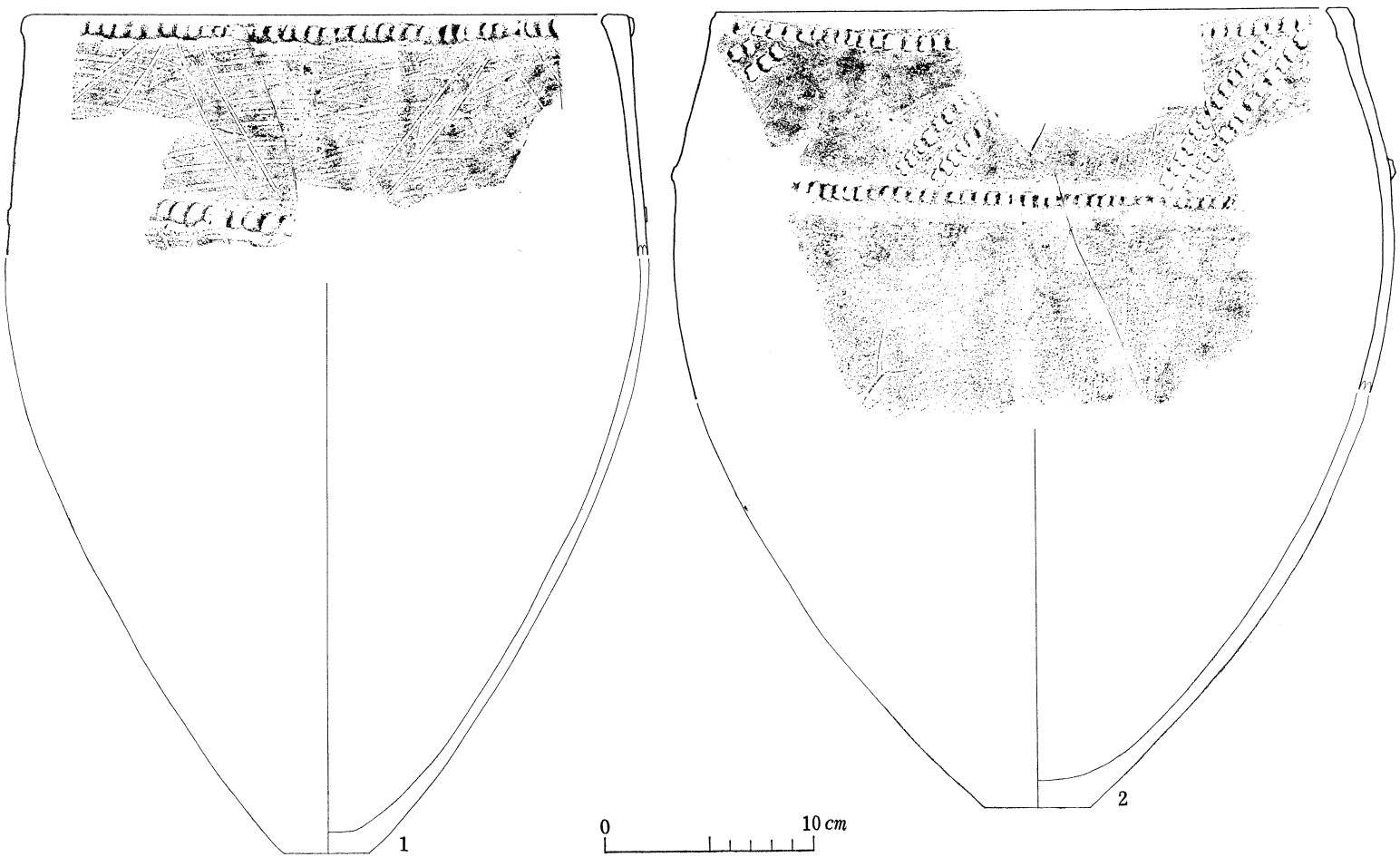
第 V-29 図　A 区 c-2、d-2 各グリッド出土土器



第 47 挿　C 区土器出土状態



第 V-30 図　A 区 b-2、c-2 各グリッド出土土器



第V-31図　A区d-2グリッド出土土器

C区

C区出土土器（第V-32図、第V-33図、第V-34図、第V-35図）

安行系土器

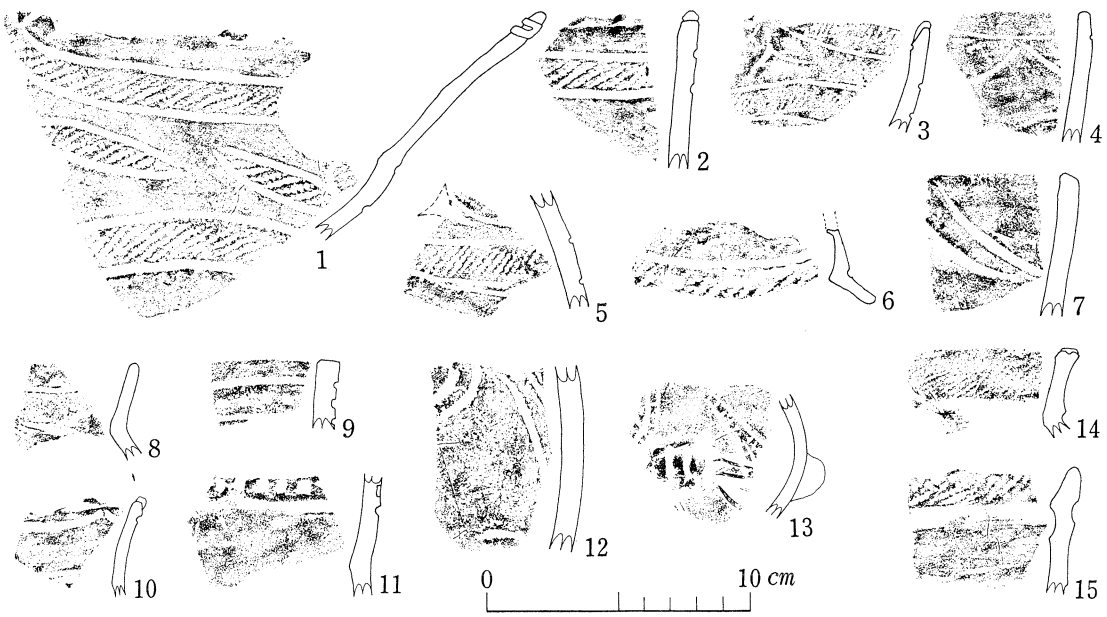
第V-34図1（第V-32図1・2）・2・4は222ページ挿図写真に見られるように同一地点に折り重なるように出土している。1は頸部がわずかに屈曲し口縁部の広く開く浅鉢形土器。口縁部は緩い波状となる。粘土紐が巻かれ、B突起が付される。黒色で器面は平滑によくなでられている。2は口径約23 cm、器高約13 cm。口唇上にB突起が2箇所、小突起が3箇所、口縁半周上に並んで付されている。灰茶褐色で口縁に3条の横線が粗く引かれるだけの浅鉢形土器である。底部は周囲を削り込んで作出している。表裏面ともナデ整形による。焼成堅緻。4は口径約15.5 cm、器高約5 cmの小形浅鉢。器表面は斜め篦削りの後粗いナデ整形。黒褐色。

同図3は口径約30 cm、器高約18 cm。口唇部上に3個一対の突起一組と押圧痕列が恐らく3箇所にある。括れ部に刺突文の繞るもので、底部は丸底に近い。口縁部および体部横方向の篦削り、括れ部と内面を横ナデによっている。3は2より後出のもので、1・2は3c式初頭と思われる。5は口径約13 cm、高さ約3.5 cm、底部が広く坏形をなす。黒茶色。

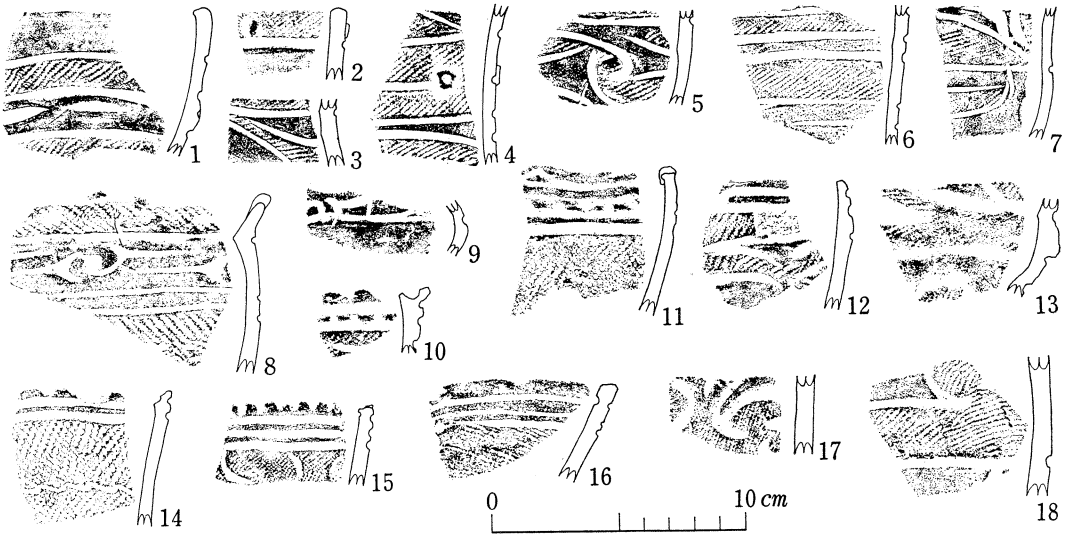
晩期前葉の三叉文のあるものとして第V-32図3・5・7がある。3は磨消弧線文間に三叉のある浅鉢。7は深鉢、5は台付土器の台部である。4・6等も前葉のものであろう。

8・10・12は沈線文系のもの。9・10は刺突文のものである。安行3c式。11の刺突は斜方向からの深い刺突文であるが、これについては北関東に類似例が見られる（小島純一、1981）。黒色で焼成は非常に堅緻である。3c式より遡るものかもしれない。

14・15は口縁部縄紋帯のもの。14の口唇上には沈線が繞っている。15は内面に太い沈線が繞る等が前浦式に近似する。14は3c式期か。



第V-32図　C区出土土器（1）



第V-33図　C区出土土器（2）

第V-35図2・3は粗製土器である。1は口径約26 cm、器高約41.5 cmの大形の深鉢形土器。小石、粗い砂等を多量に含み、器面は口縁部へ向かっての縦篦削り整形を行なう。内面は粗いナデ整形による。内側底部にはスス痕が残る。焼成は良いが作りは全体的に粗雑である。赤褐色。完形の浅鉢形土器等に伴うものと思われる。3は底径約8 cm。灰褐色。器面篦削りによる。安行3c式期。

大洞系土器

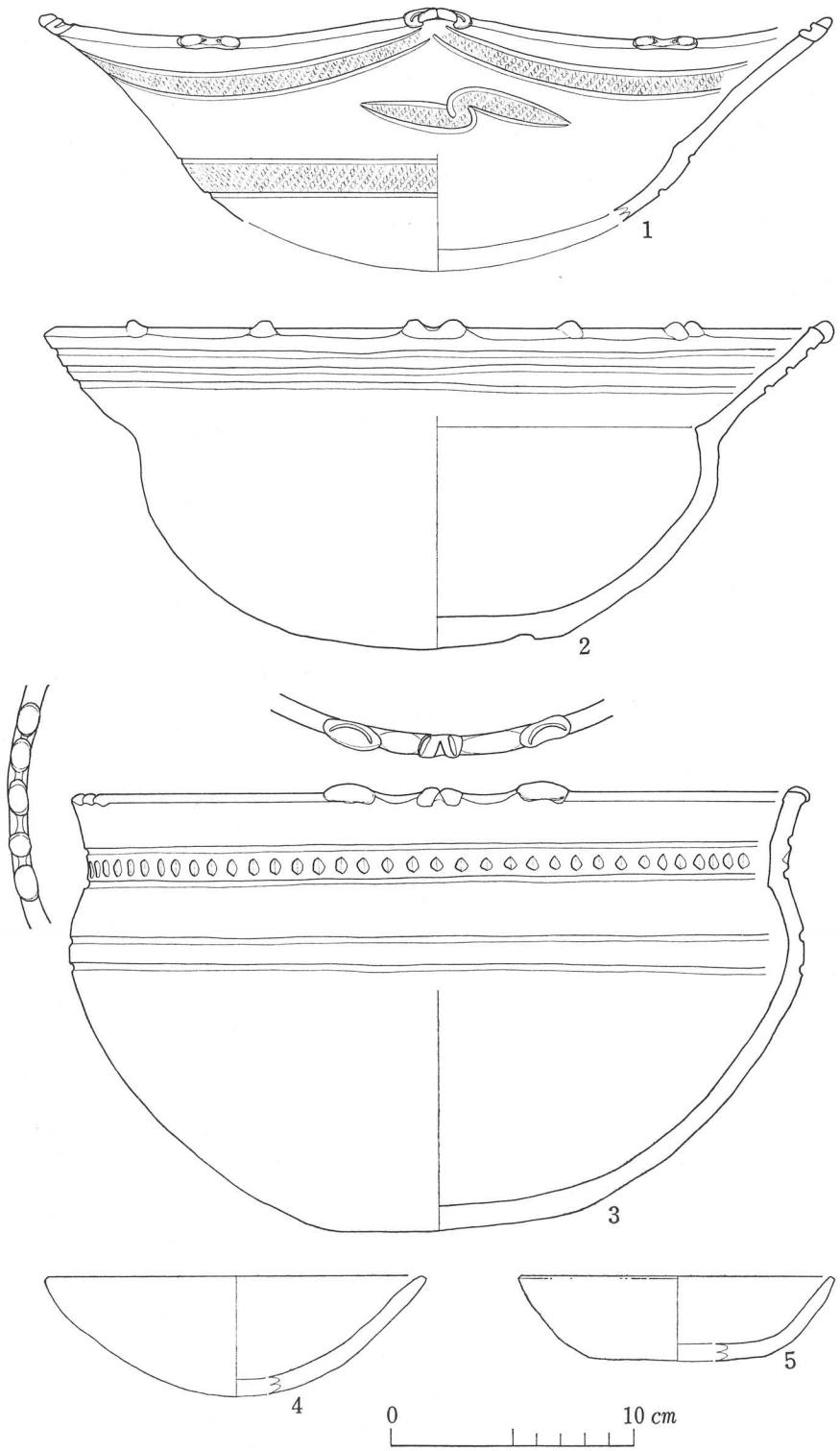
第V-33図8（第V-35図1）は晩期初頭大洞B式期のものである。推定口径約20 cm。黒色で滑沢がある。台付鉢形土器かもしれない。

9～17は大洞C_1式比定のもの。口唇部に刻目、彫刻文のあるもの（10・11・14～16）、文様が半肉彫風によるもの（12・13・17）等がある。器質は概して器面に滑沢がある。淡茶色・茶褐色・黒色。13は土質粗い。

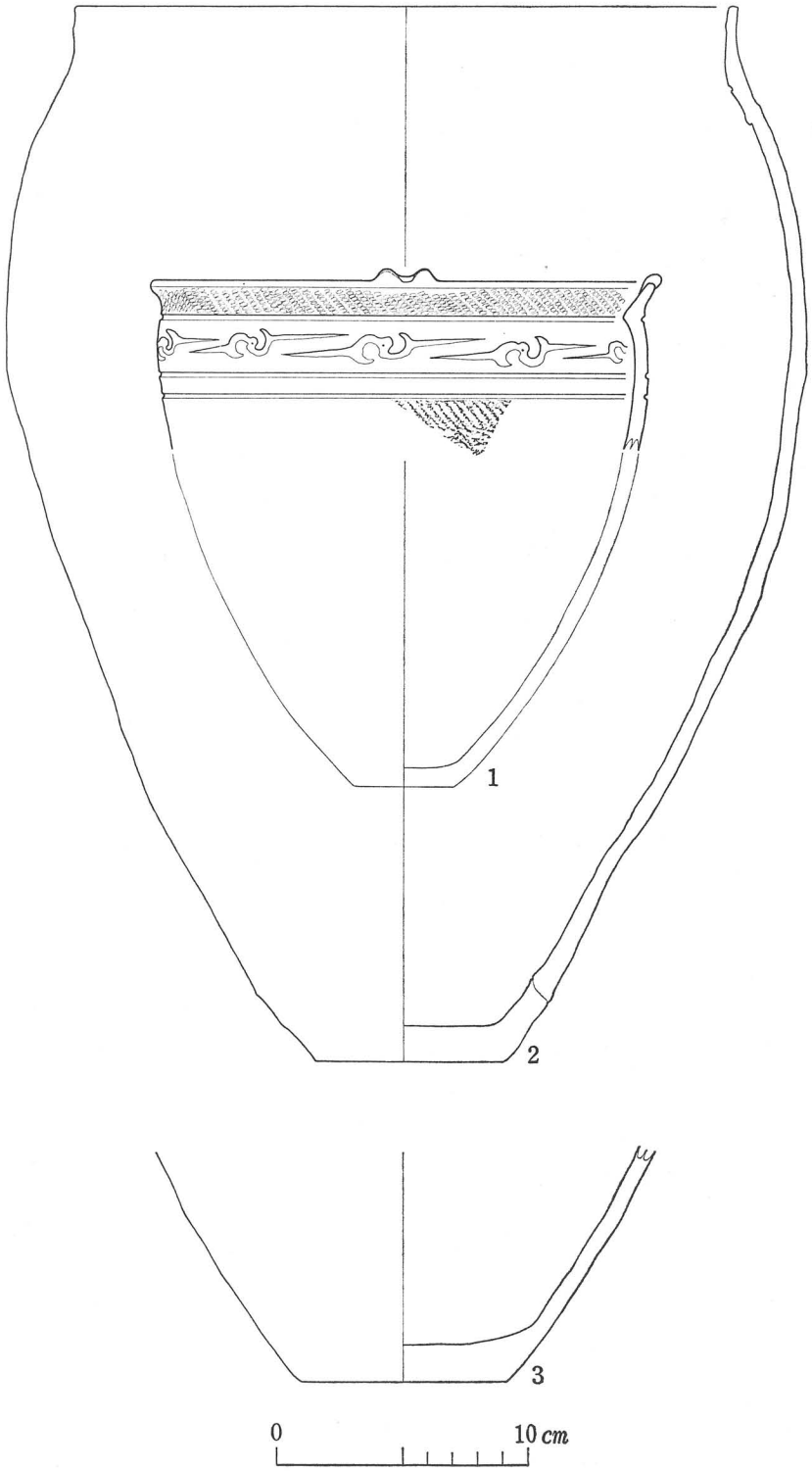
18は大洞C_2式期のものであろう。

寺脇系土器

第V-33図1～7は晩期初頭寺脇系列に比定される。1～7は総じて黒茶色～暗茶褐色で器面滑沢のある土器群である。特に1は3a式との交渉に関連する一例であり、類似の例が中妻貝塚（鈴木加津子、1981）にもある。



第V-34図　C区出土土器（3）



第 V-35 図　C 区出土土器（4）

4 まとめ

外塚遺跡の晩期を概観すると以下の如くである。

安行 3a 式期

最初頭に極めて特長的な土器群が存在する。c-4 グリッド出土土器解説中「寺脇系土器」と呼んだものがそれである。第V-10図および第V-24図に見られる入組文系土器のうち平縁深鉢の類は最も寺脇的な土器群である。個々の文様素に南奥的色彩の濃い2体の台付鉢については寺脇貝塚には見られない。それらは猿島郡三和町二十五里寺遺跡（田川・道沢、1975）或いは埼玉県井沼遺跡・同県雅楽谷遺跡（金子裕之、1982）等に見られる安行3a式期初頭の台付鉢とほぼ前後して連動する一系列であると思われる。

寺脇系平縁深鉢と台付鉢が恰も組成を呈するが如き外塚遺跡の様相は、d-2 グリッド出土の注口土器を含めて結城・真壁台地を中心とした茨城県西部における晩期の幕開けであり、このアセンブリッジは安行3a式成立に関する「外塚型組成」と言えるものと思う。器形による「セット論」が成立するならばこれらは当該地域における安行3a式成立の一回答例である。以後、晩期安行式土器のなかで三叉文の関与する土器群は無論のこと、他の入組文系土器群の生成発展、或いは利根川下流域に顕著に見られる安行3a式浅鉢形土器の生成に関する一母体になったと考える。外塚遺跡の晩期は「寺脇系土器」をもってその開始としたい。「外塚型組成」に安行2式以来の伝統が加わることは言うまでもない。

以後、外塚遺跡では安行系波状深鉢、平縁深鉢、浅鉢或いは大洞 B_2 式比定の深鉢・鉢等が見られるものの纏まりとしての土器群は顕著ではなく、その傾向は安行3b式前半まで続く。

安行 3b 式期

安行3b式は前半期のものが希薄である。大洞系土器もBC式の古手のものを欠く。後半期になると安行式土器では姥山系波状深鉢、細密沈線文土器、枠状文土器等の所謂「姥山Ⅱ式」と共に千網・板倉沼等北関東に見られる「Ⅱ入組文系土器群」（鈴木他、1982）が顕在化する。また滑沢ある磨消縄紋の類も目立つ。安行3b式は不分明な部分の多い型式であったが、第V-25図の台付鉢に見る如く「Ⅱ入組文系土器群」と大洞BC式羊歯状文が並行関係に置かれることは明白である。この北関東系「Ⅱ入組文系土器群」は関東地方広く見られる。

この期の大洞系土器は汎関東的に広がるが、大洞BC式の新しいものが顕著である。

以上の様相に加えて安行系波状深鉢形土器に地域性の窺えることが注意される。「Ⅱ入組文系土器群」の主たる分布圏である北関東にも固有の波状深鉢が見られるが、近傍の女方遺跡例（徳富・中根1932）と合わせて当該地域にも別個の系列が存在したようである。安行式帯縄紋系波状深鉢の地域性については今後注意を払う必要があろう。

安行 3c 式期

安行3c式期の最も著しい特長は、前代概して滑沢を帯びるほどによく研磨された器面調整が粗略になり、ナデ整形或いは篦削り痕をそのまま残すものが多くなる。器面から縄紋が抜けて無文化の傾向が強まり、刺突文或いは沈線文のものが主体となる。「姥山Ⅲ式」を構成する波状深鉢或いは枠状

文、または粗大な細密沈線文土器も見られるが、この期には前代までの利根川以南、大宮台地との共通要素も殆んどなくなり、わずかに黒谷田端前遺跡（宮崎朝雄、1976）等に見られるものが目を引く程度である。これらの傾向は主に前半期に顕著である。大洞系土器も C_1 式の古いものが明解な位相を示す。

縄紋系のものも引き続いて見られるが、主に後半期に特異なものが注意を引く。それらと前浦式との関係については3c式後半の資料が乏しいため確定出来ない。

安行3d式期

外塚遺跡では南関東西部地域或いは奥東京湾周辺に見られる安行3d式は殆んど検出されていない。替わって主体を占めるのは大洞 C_2 式土器である。それも中葉期のものまでである。安行3d式期、席捲する土器群が大洞系で占められる様相は南奥と隣接した県北部或いは栃木県北部と共通する。同じ県西部域でも利根川以南の猿島台地は安行3d式に前浦式が主体を占める地域である。隣接する栃木県南部小山周辺思川流域にも一部安行3d式が進出する。結城・真壁の台地を東漸する利根川・霞ヶ浦沿岸の稲敷台地は前浦式の文化圏である。東・西・南方面をそうした土器圏に囲まれた結城・真壁台地は北関東大洞 C_2 式主体分布圏の南端に当たる地なのであろう。厳密には利根川以北・鬼怒川左岸～思川に挟まれた結城の地が如何なる様相を持つのかが一つの課題であるが、今のところ晩期前葉を除いて資料に乏しい。安行3d式期が大洞 C_2 式で占められる背景は安行3c式期後半にあるが外塚遺跡ではその実態は明らかにしえない。　（鈴木加津子）

（1984年1月8日提出）

引用文献

杉山壽栄男（1928）『日本原始工芸』
徳富武雄・中根君郎（1932）「常陸国真壁郡伊讃村女方の土器」『人類学雑誌』47-12
山内清男（1937）『日本先史土器図譜』X集・XI集
安岡路洋・早川智明（1960）『井沼遺跡』埼玉県立文化会館
末永雅雄・酒詰仲男（1961）『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊
杉原荘介・戸沢充則（1963）「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1
杉原荘介・外山和夫（1964）「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」『考古学集刊』2-3
西村正衛（1965）「千葉県成田市荒海貝塚C地点発掘報告」『学術研究』14
馬目順一（1965）『寺脇貝塚』福島県磐城市教育委員会
寺門義範・芝崎のぶ子（1969）「縄文後晩期にみられる所謂「製塩土器」について」『常総台地』4
椙山林継・金子裕之（1972）「千葉県富士見台遺跡の調査」『考古学雑誌』58-3
田川　良・道沢　明（1975）「茨城県三和町二十五里寺遺跡の研究」『奈和』14
宮崎朝雄（1976）『黒谷田端前遺跡』埼玉県岩槻市遺跡調査会
星山芳樹（1976）「水海道市築地遺跡出土の注口付土器について」『常総台地』7
鈴木正博・渡辺裕水（1976）「関東地方における所謂縄紋式「土器製塩」に関する小論」『常総台地』7
鷹野光行・他（1977）『西広貝塚』千葉県市原市教育委員会
鷹野光行（1978）「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』64-3
伊藤晋祐・増田　修（1978・1980）『千網谷戸遺跡発掘調査報告』群馬県桐生市教育委員会
林　謙作・鈴木公雄（1980）『縄文土器大成』4晩期　講談社

設楽博己（1980）『井岡遺跡確認調査報告書』小山市文化財調査報告書　第9集
小島純一（1981）『稲荷山 K_1・安通、洞 K_3』群馬県勢多郡粕川村教育委員会
鈴木加津子・他（1981）『取手と先史文化』下巻　茨城県取手市教育委員会
金子裕之編（1982）『日本の美術』4　—縄文時代 Ⅲ—　至文堂
鈴木正博・鈴木加津子（1982）「安行3b式研究の序」『土曜考古』5

〈付　記〉

本報告に図示しなかった晩期土器に無文粗製土器がある。有文のものについてはほぼ図示した。その事からもわかるように外塚遺跡晩期粗製土器の主体は無文土器である。数量的には精製土器の半数或いはそれ以下であろう。稿改めて報告したいと考えているが、それに先立って気付いた一、二の点について付記しておきたい。

無文粗製土器を瞥見する中に数点であるが口縁部に特長あるものが目についた。1つは口唇上に刻目・刺突・押圧痕の施文されるもののあること、1つは口唇部整形の際口唇外端の粘土のはみ出しているものの存在等である。なかに口縁部をナデ整形し、括れ部以下を粗整形のままにするものもある。いずれも数片であるが、これらは東海以西の晩期のある時期に見られる無文土器の一特徴である。愛知県稲荷山遺跡（杉原・外山、1964）、或いは奈良県橿原遺跡（末永・酒詰、1961）等が好例かと思われるが、北陸にも広がっている。本稿を提出してのち橿原考古学研究所附属博物館の御厚意により橿原遺跡出土土器を拝見した。その折、上記土器との付き合わせを行なってみた。結果、器質は全く異なるが口唇部等に見られる技法には強い共通性のあったことを指摘しておきたい。口唇部に押圧痕等の特長ある無文粗製土器は本遺跡に限らず近隣県の晩期中葉の遺跡には比較的散見しうるものである。他に、外塚遺跡では有文土器に2・3西日本土器の間接的影響下に生成したと思われる文様をもつものがある。市内女方遺跡では滋賀里系土器も検出されている（徳富・中根、1932）。

かつて「巨視的に見れば安行3b式以降関東において無文化の傾向が風靡した」（西村正衛、1965）と指摘された。また、西日本系粗製土器については神奈川県杉田桂台遺跡（杉原、戸沢、1963）、栃木県井岡遺跡（設楽博己、1980）等で注意されてきた。条痕文系土器進出期を取り巻く関東地方晩期における動態をより具体的に把握する必要があろう。

（1984年1月31日）

VI　土製品および土偶・土版

土製品

Ⅰ　土錘……土器片利用のものと初めから土錘として焼成したものとの二者がある。外塚においては後者例が2点検出されている。

Ⅱ　いわゆる円板系土製品……土製円板、有孔土製円板も含めて土器片の周縁に磨耗痕の認められるものを一括したが、その形態上の差違によってさらに細分される。

〈II-a 類〉　いわゆる円板。土器片を打ち欠き、その周辺を磨りこんで作出。

〈II-b 類〉　いわゆる円板未製品。土器片を円形に調整したままのもので使用痕を認めない。

〈II-c 類〉　土器片を利用して円形もしくは方形に調整しているが、磨耗痕は全周せずに1～2ヶ所のみ部分的に認められている。磨耗痕の位置は特徴的である。

〈II-d 類〉　鰹節型を呈するもので、長軸両端に切れ目を加えれば土器片錘として利用できるものであるが切れ目を入れていない。やや厚手の土器片を選択し周辺をきれいに磨く。

〈II-e 類〉　いわゆる有孔円板。土器片を円形に磨りこみ、中央に孔を穿ったものである。

Ⅲ　耳栓……いわゆる耳飾りといわれるもの。縄文後晩期に多出するものであるが破片も含めて外塚遺跡から数点検出されている。形態的に次のように分類される。

〈III-a 類〉　いわゆる円筒形を呈するもの。概して小型である。

〈III-b 類〉　いわゆる環状形をしたもの。文様施文例と施文しないものが認められている。

Ⅳ　土偶……堀之内式～加曾利B式に伴なうものとみられるものが若干検出されている。

Ⅴ　土版……縄文晩期を特色づける遺物である。無文のものと文様を有するものとがみられる。

Ⅵ　各種土製品……形態上からⅠ～Ⅴに含まれないものを一括する。小型の祭祀用土器（ミニチュア土器）あるいは用途不明土製品，土製玉類などがある。

円板系土製品（第VI-1図11～42）

円板II-a類　土器片再利用品。土器片を円形に打ち欠き、その周縁を研磨したものとされているが、研磨することによって製品化したものなのか、土器片再利用の結果として周縁磨耗化したものかは不明である。ここで円板IIa類としたものの中には完全に周縁磨耗しないものも若干含まれているのは使用の結果であると推考されるものである。しかし、一応円形に剝打調整され、その周縁が全部もしくは大部分磨耗しているものを本類の中に加えた。直径6.3 cmを最大とし、最小例は直径2.5 cmである。平均値は4.0 cm～4.5 cmの間にほとんどが属する。また重量別にみると最大72 g、最小2 gであり、その平均値は19 gである。16 g～25 gの間にほとんどの円板IIa類はおさまる。

円板II-b類　一般的には完成された土製円板（円板IIa類）の未製品とされるものである。ここでは使用痕もしくは磨耗の全く認められない剝打調整したままのものを一括した。調整は土器片を手ごろな形に打ち欠き、裏側から押圧もしくは剝打によって調整したものと思われる。土器破片とちがって、その痕跡は比較的明瞭に識別できる。円板IIb類としたものは最大径9.0 cm、最小径2.5 cm、

重量は最大62g、最小7gであり、平均値は大きさでは直径4.0～4.3cm、重量では16～20gを測る。本類については時間差はあまり認められない。

円板II-c類　土器片再利用品。円板IIa、IIb類との識別を必ずしも明確にしていないが方形ないしは不整形を呈するものを一括。当然ながら磨耗は全周せずに一か所もしくは二か所に認められる。本類の典型として口縁部破片を利用したものについてみると口縁部には使用痕は認められず、その反対側の下端部分に磨耗のあとを認めるものが圧倒的である。これは明らかに使用の結果を示すものというべきであろう。それが前二者と比較して相違するものとはいい難い。本類の最大長は7.0×6.7cm、重量48gを測り、最小は3.3×7.0cm、重量6gを測る。平均値は長軸2.5cm～3cm，重量は20g～25gまでが多い。本類の時期は堀之内式から安行2式まで確認されるが、主として安行系土器群に顕著に認められる。

円板II-d類　厳密な意味では円板の範疇に属さない。すなわち楕円形もしくは鰹節形を呈する土製品であり、土器片再利用品である。土器片を打ち欠いて調整して作出したものであり、周縁は磨耗する。このような形状のものを意識して作り出したものか使用の結果なのかは分らない。いわゆる県北部の土器片錘の形状に酷似しているが切れ込みを入れていないところから土器片錘とはいい難い。

円板II-e類　いわゆる有孔土製円板といわれるもので、用途については諸説があるが、紡錘車とみる見方がつよいように思われる。形態は土器片の周縁を磨りこんで円形に作り、その中央に孔をうがったものである。紡錘具のはずみ車であると推考したことがあったが外塚遺跡から出土したものは小型である。2点のうち1例は直径3.5cm、重量8gで裏側より孔をうがっている。もう1例は直径4.0×3.5cm、重量11gであり穿孔は前者と同様であるとすることができる。

分　類	数
II-a	53
II-b	41
II-c	54
II-d	2
II-e	2
計	152

円板系土製品（II類）について各類型別に整理したものが左表である。このうちII-d類は所謂鰹節型を呈する土製品であり、出現時期をほぼ堀之内式に限定できるものであり、さらにII-e類は有孔円板であり、II-a～c類とは別の用途と推考することが可能であろう。このような観点に立つならば、いわゆる土製円板はその周縁の全部もしくは一部が磨耗していることによって、その用途に若干の相違が認められるにしても、これが製品として作られたものではなく使用の結果であるといってもよいのではなかろうか。II-b類は未使用品であろう。

土錘（第VI-1図4～7）

土錘は4点が検出されている。内訳は土器片錘1、土錘3であるが、クロスするように切れ込みを加えたものと中央に孔を穿つものとに分けることができる。概して土器片錘の出土は少量であった。

VI-1-4、5は土錘として前もって作られたものである。形状は楕円形を呈し、表裏とも糸かけの溝がクロスするようにつくられている。4は長径3.4、短径2.2、厚さ0.7cm，重量6g、A・C-2出土。5は長径3.0、短径2.0、厚さ1.2cm、重量7g、A・d-5出土。

VI-1-6は土器片錘である。薄手の土器破片を利用して周辺を打ち欠き磨耗を加えたものであるが半欠している。主軸両端に切れこみを入れて土器片錘としたものと思われる。薄手であるが堀之内式のものと思われる。長径3.8、短径2.5、厚さ1.9cm、重量19g、A・d-4出土。

VI-1-7は中央に孔をうがったものであり、糸かけの溝は長軸中央に施され、その中央附近に直径

2 mm ほどの小孔がある。VI-1-4・5 にくらべて作りは入念である。4・5・7 とも編年的位置は不明である。加曾利B式の所産であろうか。長径 4.0、短径 1.8、厚さ 1.9 cm、重量 10 g、A・b-4 出土。

土偶（第 VI-2 図 3～8）

概略顔面部を含めて 6 点出土している。加曾利B式から安行 1 式にいたるものと推考される。出土状況は、いわゆる遺構に埋置されたという状態ではなく、雑然と他の土器片とともに投棄された状態で発見されている。

VI-2-3 は土偶頭部である。残存部は顔面のみである。製作は粘土紐を棒状にのばし、上部をつぶして平坦にして頭頂部および顔面をつくる。顔面はヘラ状工具で大きく彎曲するようにえぐりとり、さらに細い工具によって入念になでつけをおこなって整形している。顔面は粘土紐を半円形に貼付してふちとりをし、刺突による列点を施している。目は大豆大の粘土板を貼付し、その中間部をヘラをおしつけるようにして眼球を表現する。鼻は同様粘土紐を貼付する。目鼻と口の間はかなりの間隔をとり、口は顔面の輪郭線に接して粘土板を貼りつけている。輪郭線の外側に左右に耳を表現し、小孔をうがっている。首から下は欠失しているが後頭部はひさし状に頭頂部がつき出している。文様は二列に施された列点文である。頭頂部のひさし状のはり出しの縁どりにも列点文が施文されているが、周縁が部分的にしか残存していないために全面に施されていたかどうかは分らない。ここでは全周する列点文があったと推考しておこう。頭頂部は平坦につくる。文様は沈線によっている。頂部の形態は前後よりも左右がひろくつくられる。鼻直上の位置から 2 本の沈線が孔状に左右の耳の直上にのび、その外側に列点が施文される。さらに弧線の切れるところからさらに 2 本の沈線文が弧状に施文されているが一方は欠失しているが、恐らく対象形に施文されていたものであろう。

本土偶の現存高は約 4 cm、左右幅は約 8 cm を測る。本土偶の顔面部のつくりからみて加曾利B式に属するものであることは議論の余地はないが細別編年に従うならば加曾利 B 2 式の新しい部分から加曾利 B 3 式の古い部分に位置するものと推考したい。残念ながら手足を欠いており、厳密な位置づけは筆者の力量の外にある。色調は褐色を呈し、焼成はきわめてよい。胎土に石英粒とみられる石片の混入が認められるが、おおむね精緻とすべきものであろう。

頭部を大きくひろげて作る作風と顔面を半円形につくる形態および頭部における髪の表現とみられる沈線文の施文は端的に安行式ミミズク形土偶へつながるものである。曾谷タイプの千葉県余山例を経過して安行 1 式の土偶へと連続していくとみなされる。しかし、外塚例と余山例の間にもう一つの型式が存在すると考えるべきであろう。いずれにせよ、土偶編年の基軸になる重要な資料となることは論を待たない。土器との共伴など厳密な時期固定資料ではないが、今後の検索課題を残している。

VI-2-4 は胸部上位を欠く。現存する部分は腹部以下であるがよく残されている。作風は粗雑で土偶の表裏面とも凹凸が顕著に認められる。作出は平板な粘土板をつくり、手ひねりで手足および頭部をつくり出しているものとみられる。厚みは約 2～2.5 cm を測り、腹部を特に強調した様子はみられない。胸部に円形の沈線文が施文される以外は文様は認められていない。足は小さく彎曲するように作られている。腰部はやや大きく作られている以外はほとんど平板形である。

色調は灰褐色ないしは淡褐色を呈し、焼成はよい。胎土には小石状のものをかなり混入している状態が観察されている。現存する器高は約 7.5 cm、幅は腰部で約 5.9 cm、胸部で 4.2 cm を測る。これ

だけの材料をもって本土偶の編年的位置を示すことは難かしいのであるが加曾利B式に伴なうものであろうか。本時期には比較的粗略な土偶がみられるところから疑問も多いがそのように捉えておきたい。

VI-2-5は小型土偶であり胴上半部を欠いている。粘土紐を調整して作りあげたものと推考される。足を大きく開脚した状態を呈している。文様は沈線によって描かれている。表面（腹部）は一条の沈線がめぐり、沈線の中央部附近から股部にかけてU字形に沈線が施文され、その先端に小さな刺突がみられる。腹部の膨張はみられないがややもりあがりがみられるところから女性像であると考えられる。そのような観点に立つならば股下の刺突は女性の陰部を示すものであろう。足も脚部に一条の沈線が施されるが裏面までは達していない。裏面（背部）は無文である。

色調は淡褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。胎土は精緻であり素材はよく吟味されているといえよう。現存部分の高さは約4 cm、上部破損部分で幅1.6 cm、厚さ1.4 cmを測る。開脚した足間の幅は4.3 cmである。本土偶の編年的位置は縄文後期加曾利B2式に比定されるものと推定しておく。

VI-2-6は安行系土偶の左足部である。棒状を呈し、平滑化のあと細縄文を施文している。平滑化のあと二本の沈線文施文する。足は下端では丸味をおびている。上の沈線文の上位に小さな粘土瘤状の貼付がみられる。現存高約5.3 cm、幅3 cm、厚さ2 cmをはかる。焼成は比較的よく、胎土にも石片を若干混じえているものの精緻である。色調は黒褐色を呈している。

VI-2-7は土偶左足部である。棒状を呈し、下端は平坦になりややひろがる。作出は棒状の原料土にケズリを加えて調整したものである。文様はヒザ上とみられる個所に3本の沈線文をめぐらし、それと直角になるように沈線を施している。色調は褐色を呈し、焼成はよい。現存高3.5 cm、幅2 cm、厚さ約2 cmである。編年的位置は加曾利B式である。

VI-2-8は土偶左足である。本土偶はいわゆる安行2式のミミズク形土偶であり、その典型とすることができる。本土偶は原料土を棒状にこねあげて整形したものである。上部および下部に2本の沈線を施し一周させている。下端は沈線によってくびれる状態にまとめ、さらに3本の沈線文が横走する沈線に対して直角状に施されている。足の内股部には粘土紐を配し、キザミ目を施している。また全面に細縄文を入念に回転施文する。

現存する部分の高さは約8.2 cm、幅は約5.0 cm、厚さ3.4 cmを測る。編年は上述したごとく安行系土偶の典型である。色調は全面的に黒ずんで褐色を呈し、胎土は精緻であり、焼成はきわめて良好である。完形ならは見事な土偶であったと考えられる。

土版（第VI-2図1・2）

概略　検出された土版は2点である。安行3a式に属するものと推考したいが1点は文様がなく明らかではない。出土状況については土偶同様に一括投棄されたものと思われ、土偶、土版に何らかの意識が投影された状態を示すものではなかった。

VI-2-1は隅丸方形状を呈するものである。原料土を板状に整形し文様を描いたものであるが、整形は指頭による平滑化、また文様は棒状工具によって描き出したものと推考される。完成品ではないが3分の2ほど残っており、ほぼ文様の輪郭は知ることができる。

表面の文様は相対する渦巻文を描き、それぞれ中央に刺突を配している。右側では上からの渦巻に入組むようにして文様を描いているが左側は渦文状を呈するようである。しかし欠落によってよく分らない。下端にも沈線状の文様があるがその構成は不明である。裏面文様は左側縁にそって孤線文が三個所施されている。右側を欠いているが同様であったと推測される。土版の中央には入組状の沈線文が描かれている。この文様の上位に蕨手状の文様があり、さらに下端にも沈線文がみられる。

土版の現存部の長さ約8.4 cm、幅5.6 cm、厚さ約2 cm を測るが、復元では全長9 cm、幅7 cm 位になるものと思われる。色調は淡褐色ないしは灰褐色を呈する。焼成は普通であろう。また胎土中には石片の混入がかなりみられた。この土版の編年的位置は文様の特徴から安行3a式のものと思われる。

VI-2-2 は楕円形を呈するものである。板状に原料土をのばして若干の整形を施したものである。文様は表面の磨耗と本来、沈線によって浅く施文されているためにはっきりしないが周辺部に弧状の沈線が施文されている。中央にみられる「の」状のものも文様であろう。裏面は無文である。

現存する長さは5.6 cm、幅7.7 cm、厚さ1.4 cm ほどであるが、土版がほとんど中央部附近で折損しているとみられるところから、全長11 cm 位になるものと考えられる。色調は表面が黄褐色を呈しているのみに対して裏面は黒色を呈し、スス状のものが付着している。焼成が悪く、胎土には砂粒、石片等の混入がみられる。編年的位置は不明であるが晩期初頭に位置づけて大過ないものであろう。

耳栓（第VI-1図8～10）

所謂耳栓は3個検出されている。用途は耳飾りとされているが正確なところは分っていない。

VI-1-8・9 はほとんど同じ整形技法によって作られている。すなわち円盤状の粘土板をつくりそれを指頭によって平滑化し、ヘラ状の工具で整形したものである。形態はぶ厚い円盤形を呈し、表裏面ともやや凹めたものである。側面もゆるく彎曲するように作られている。文様は全く認められていない。8は直径約3 cm、厚さ1.7 cm、9は直径1.7 cm、厚さ1.2 cm を測る。いずれも色調は褐色を呈し、焼成はよく、胎土には石片が若干混入されている。

VI-1-10 は有孔の耳栓である。円板形につくった粘土板をヘラ状の工具でえぐって穿孔したものと思われる。表面は平坦であり、直径1.7 cm を測る。側面の彎曲はするどく、裏面は直径1.4 cm になる。えぐりによって器肉はきわめて薄くつくられ、耳栓の中央部附近の最大厚は約3 mm を測り、表裏面近くでは2 mm ほどになっている。このために孔は表面では直径1.5 cm、中ほどで約4 mm、裏面では1.2 mm となっている。色調は褐色を呈し、焼成はよく、胎土も精緻であるが若干の砂ないしは石片の混入がみられる。

耳栓（VI-1-8～10）の編年的位置は明確ではないが縄文後所（加曾利B式～安行2式）に属するものであると推考しておきたい。彫刻を施したものが検出されなかったのは意外であった。

第VI-1図3に示したものは環形を呈する。焼成はよく赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。全体の4分の1が残存しているが、周縁に刻み目を連続的に施文し、その内側に沈線文が施されるものと考えられるが全体の構成については明確ではない。

その他の土製品（第VI-2図9～14）

概略　ここではミニチュア土器および用途不明の土製品について一括記述しておくことにしたい。縄文後期～晩期初頭にかけては、この種の土製品は比較的多く検出されるのが常であるが外塚遺跡からも数点の土製品が検出されている。

棒状有孔土製品　VI-2-13 がそれである。用途は全く不明である。形状は側面からみるとスプーン状を呈し、実測図に示したように下端から斜めに約 4 mm の孔が貫通しているものである。また正面からみると棒状を呈し下端は丸味をもつように作られている。単に粘土紐を指頭によって平滑化したままのものを土製品として焼成したものと思われる。完全品ではなく上端は欠けているが、欠失部はわずかなものであろう。現存部分の長さは約 7.8 cm、幅 1.2～1.5 cm あり有孔部分では幅 3.5 cm に達する。色調はつよい褐色を呈し、焼成はよい。胎土には石英、長石細片の混入がみられる。編年的位置については分らない。縄文後期の所産であると記しとどめておくだけにしたい。

棒状土製品　VI-2-12 がそれである。土偶の足とも推考されるが類例を欠く。原料土を直径 2.2 cm ほどの円い棒状につくり、これを平滑化したものである。下端は大きくひろがり直径 3.8 cm ほどを測る。文様は全くなく、下端に網代痕を施している。現存部分の長さは約 3.5 cm ほどである。焼成はよく、胎土に長石、石英粒、砂などの混入が認められる。編年的位置は全く不明であり、これも縄文後期の所産になるものと記しとどめておくことにしたい。

蓋およびミニチュア土器 VI-2-9 は蓋形を呈する。注口土器の蓋であると思われる。手づくねによって粘土板を整形したものであり、ヘラ等による入念な整形はみられない。表面は若干の凹凸がみられる。直径約 6 cm、高さ約 1.7 cm を測る。実測図に示したように対になる小孔がうがたれる。孔径は約 3 mm であり、上から刺突によってあけられたものである。これに対応する孔は欠けているが 1 孔のみその痕跡がかすかに残されており孔があったことが分るのである。ここに撚紐が通されていたことは確かであろう。堀之内 1 式に伴なうものであろう。色調は淡褐色を呈し、焼成はよい。

VI-2-14 も蓋形を呈するものと思われる。手づくねによって整形される。本土器の特徴は中央に突起が一つ、さらに側面に 4 単位の突起を有していることである。蓋中央の突起は欠失しているが、直径 8 mm ほどの棒状のものと思われる。高さは欠落によって不明である。側面のものは不整形であるが、おおむね形態は楕円形を呈している。手でひねったような状態である。中央部から細かい櫛歯状の条線が施文されており、底辺部まで及んでいる。蓋形土器は底辺部径 6.7 cm、高さ 3.1 cm を測り、器肉の厚さは蓋頂部においては 5 mm，底辺部においては約 3 mm 倍である。色調は褐色を呈し、焼成はよい。胎土中には長石粒、石英粒などの細片の混入がみられる。編年的位置は安行 1 式の古い部分であると思われるが検討の余地がある。

VI-2-10 はミニチュア土器である。単に原料土をまるめ、中央を指でえぐっただけのものである。一応口縁部は円形を呈し、直径 2.9 cm を測るが全体的に凹凸がはげしい。器高約 2.6 cm、土器の深さは 1～1.2 cm ほどである。また底部も整わないために直立しない。色調は褐色を呈し、焼成はよい。

VI-2-11 は小型台付土器の台部分である。上部は欠失しているために全体の器形は明確ではない。安行 3 a 式に属するものであろう。色調はややくすんだ褐色を呈している。焼成は良好であり、胎土には石片の混入がみられる。形態は屈曲し、屈曲する部分に刻み目文が全周し、その下に三角形と円形の透し彫りを交互に施している。底辺部径 5.0 cm、現存高 5.5 cm を測る。

腕輪（第VI-1図1・2）

概略　土製腕輪とみられるものが7点検出されている。2個はほぼ輪郭を把握できるが、その他は5分の1以下の破片であるために実測図の提示は省略した。成形は粗雑であり、文様の施文もない。いずれも粘土を環形に整形し、ヘラ状の工具であらく削って調整してある。色調は褐色を呈し、焼成はおおむね良好である。

	形態	推定直径		出土地点	備考	残存部
		上幅	下幅			
1	腕輪	4.5	7.0	表　採	(表) 研磨 (内) 条痕により整形	1/5
②	腕輪	6.0	6.0	A・b-4	(表) 器面粗雑、ヘラ状工具により整形 (内) 表に同じ (第VI-1図2)	1/3
3	腕輪	4.7	4.9	A・c-4	(表) ヘラにより研磨 (内) 条痕により整形	1/5
4	腕輪	5.8	5.8	A・a-4	(表) ヘラ研磨 (内) 整形入念	1/5
5	腕輪	5.0	6.4	A・b-4	(表) ヘラ研磨 (内) 指ナデ	1/6
6	腕輪	9.0	10.0	A・c-4	(表) ヘラ研磨 (内) 指ナデ	1/5
⑦	腕輪	6.4	7.5	A・c-4	(表) ヘラ研磨 (内) 指ナデ (第VI-1図1)	

⑦はほぼ完形に近い。長軸7.5 cm、短軸6.4 cm、厚さ0.6 cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は非常によい。粘土をドーナツ状に整形しヘラ状工具によって研磨調整したものであるが、胎土に小石粒が多含されるために作風は粗雑である。側面からみると台形状を呈するがやや彎曲する。上面はやや内側に傾斜するように作られ、指ナデによって整形される。中央の環内部は形態は楕円形を呈しているが正確な楕円ではなくゆがみがある。内法は長軸4.8 cm、短軸3.7 cmである。

②はやや円形に近いとみられるが実測図上面に対して下面は急にすぼまり幅がせまくなるように思われる。作出は⑦とほぼ同様であり、長軸6.0 cm、短軸6.0 cm、厚さは約0.6 cmである。内法は長軸4.3 cm、短軸4.2 cmでほぼ円形に近い形を示している。　(川崎　純徳)

第 VI-1 図　腕輪・土錘・耳栓・円板系土製品

第 VI-2 図　土版・土偶・その他の土製品

Ⅶ 石　　器

1 総説

本遺跡より700点余りの石器類が出土している。これらの内、明らかに石器であると認められる502点のうちほとんどを一覧表とし、さらに特徴的なものを図版として掲載した。

石器としては磨製石斧・独鈷石・打製石斧・凹石・磨石・敲石・石皿・石匙・石棒・石剣・小玉・剝片・その他に分けられる。最も出土数が多いのは磨石・敲石の類で、次いで石錘・打製石斧の順となる。石器の種類と石質との関係は、石錘が全てチャートを利用している以外はっきりとした傾向は把みかねる。しかし、磨石や石皿は粒子が粗くゴツゴツしている安山岩を多く利用しているように、各石器の機能に適した石質の選択による使用が考えられる。

C地区における石器の出土数はわずかなので、A地区において出土地点と器種との関係をみてみると特定な器種による出土の偏りは認められない。(小玉は例外であるが、) グリッド別に見てみると出土例のほとんど無いグリッドと多いグリッドに分けられ、出土数の多いグリッドではいくつもの器種が混在している。さらに層位別に見ても同様のことが言える。層位別、グリッド別の特徴としては、b-5 グリッド・b-4 グリッド・c-4 グリッド・d-4 グリッドでは表土層と第Ⅰ層に出土数が多いのに対し、d-3 グリッド・b-2 グリッド・c-2 グリッド・d-2 グリッドでは第Ⅱ層と第Ⅲ層に集中している。全体的には表土層と第Ⅰ層からの出土が多く、第Ⅲ層からの出土数は少ない。

2 磨製石斧 (第1表、第VII-1図、写真図版35)

磨製石斧は4点出土している。全て定角式磨製石斧と考えられるが、このうち2点が完形品である。1は砂岸が使用され、やや厚みがあり器全体が丸みをおびている。刃部には使用によって生じた剝離が残り、鋭さはない。これはA地区 b-5 グリッドの表土層から出土しているが、同グリッドの第Ⅰ層から出土しているのが2である。2は基部を欠損し、全体の約半分程度を残しているが、何度も研ぎ直し使用したと考えられる刃部はやや彎曲している。硬砂岩を利用し、断面はかなりの厚みを持ち、表面は非常によく研磨が行なわれているが、使用のためと思われる剝離も多く残っている。3はわずかに基端のみを残している。花崗岩を使用し、かなり大型であったと思われる。4はC地区から出土した完形品である。流紋岩を使用し扁平な断面を持つ。1より機能的な形態をなしている。表面は全面にわたりよく研磨されている。

3 独鈷石 (第2表、第VII-1図、写真図版35)

独鈷石と認められるものが1点出土している。中央部は入念な敲打によりやや括れ，両端は先端部

に近づくにつれて平坦になり槌状となる。断面は円に近い楕円形を呈し、石英斑岩を使用している。括れの部分はザラついているが、他はよく研磨されている。米田耕之助氏[1]の分類によると A_1 形に該当する。中央部の括れも弱く単純な形態をなすが、類例としては、小山台貝塚、山野貝塚出土のものや佐野市立西中学校所蔵品があげられる。

4　打製石斧（第3表、第VII-1図、第VII-2図、写真図版35）

打製石斧は47点出土してい、大部分が分銅形である。扁平な礫を素材とし周囲に剝離を施し側縁に抉りを付し、両端に丸みのある刃部を作り出している。抉りの部分が長いものも目立つ。表裏面とも自然面を多く残しているものも少なくない。44は非常に大きく1kg以上の重量を持つ。ホルンフェルスという石質のせいか刃部はあまり鋭くなく、自然面はほとんど残していない。

石質としては、全体的に安山岩、流紋岩が多く、その他に硬砂岩、凝灰岩、片麻岩，砂岩，ホルンフェルス、粘板岩が使われている。

5　磨石・敲石・凹石（第4表、第VII-3・4・5・6図、写真図版35・36）

磨石・敲石・凹石は198点出土している。この三者はその特徴を共有していることが多く、明確に区別することが難しいので、まとめて扱うことにした。形態的に分類すると、まず平面が円形に近いもので扁平な断面を持つものがあげられる。このうち小型のものは、くぼみを持っていることが多い。次に平面は円形に近く断面は中央部がやや盛り上がっているものがあげられる。これは長軸の2方向からの使用によるものである。さらに平面は楕円形に近く扁平なもの、同じく楕円形で厚みを持ち棒状に近くなるもの、また平面は長楕円に近く断面は扁平、同じく長楕円形で厚みを持つもの、平面も断面も円形を呈し、球形のものがあげられる。くぼみは多くのものについているが、大まかに2種類に分けられる。浅く指のかかる程度のくぼみと、大きく深い円錐形に近い断面を持つくぼみである。ほとんどは前者であるが、いずれの場合も表面はよく磨かれている。

これらは、同じ形態のものばかりが同一地点から出土するということはない。A地区では各出土グリッドとも円形のもの、楕円形のもの、扁平なもの、厚みのあるもの、大型のもの、小型のものが多様に混在している。が、C地区出土のものは円盤状で小型のものが多い。石質としては、安山岩が最も多く、流紋岩、凝灰岩、砂岩、片麻岩、硬砂岩、安山岩溶岩、レキ岩を使用している。

6　石皿（第5表、第VII-7図、第VII-8図、写真図版36）

石皿としてはごく小さな破片を含めて64点が出土している。完形品はほとんどみられない。これらは、皿の形態とくぼみの有無から大きく5類に分けられる。

1類：皿状をなし上下面ともにくぼみを持たない。（2、6、22、55、58）

2類：皿状をなし下面のみにくぼみを持つ。（7、26、34、46、47、50、59、60）

3類：皿状をなし上下面にくぼみを持つ。（8、16、28、35、44、48、51、61、62、63）

4類：扁平な板状をなしくぼみの数はごく少ない。(9、10、27、53、56)

5類：扁平な板状自然石をそのまま利用したもの、小型である。(3、4、11、17、18、43、52)

この他に小破片が数多く出土している。2類と3類のくぼみは大きめで深く、断面は半円形に近く、多数存在しているが、4類のくぼみの断面は三角形に近く少数となる。

石質は安山岩、安山岩溶岩が多く、片麻岩、凝灰岩、砂岩、花崗岩、流紋岩もわずかに使われている。4類の9は新地式の注口土器と共に出土している。

7　石錘（第6表、第VII-9図、第VII-10図、写真図版37）

石錘は72点出土している。このほとんどが礫石錘であるが、有溝石錘A種(2)と切目石錘A種が1点ずつ出土している。石の長軸を一周するように溝をつけた有溝石錘は、A地区d-3グリッド第Ⅰ層から出土している。硬砂岩を使用し、幅2～3mmの溝をめぐらせている。石の長軸の両端に刻みをつけた切目石錘A種は同グリッドの第Ⅱ層から出土している。このグリッドからは表土層より錘石礫が2点出土している他、石錘の出土はみられない。全体的な石錘の出土層位は第Ⅰ層と第Ⅱ層に集中している。礫石錘はその多くが打ち欠き石錘A種で、石の長軸の両端を打ち欠いただけのものであるが、30g前後の小型のものから、100gを越える大型のものまである。また、整った楕円形に近い自然石ばかりでなく、ややゆがみを持つ自然石も数多く利用されている。

石質は砂岩、流紋岩、安山岩、凝灰岩、硬砂岩、花崗岩、石英安山岩が使われている。

8　石鏃（第7表、第VII-11図、写真図版37）

石鏃は7点出土してい、全てチャートが使われている。このうち2と6は無茎石鏃であるが、2は抉りが浅くやや大型なのに対し、6は小型で抉りも深い。1、3、5は有茎石鏃である。1は基部の突出が著しく、細長い形である。3は基部先端と茎部の先端を欠損しているが、やはり基部がやや突出し厚みがある。5は基部に抉入を持つやや大型のもので第Ⅲ層から出土している。4と7は茎部の作り出しがはっきりしていない。4は菱形を呈し直線的な刃部を持つ。7は木の葉形を呈し全体的に丸みをおび小型であり、晩期のものと考えられる。1～5はやや大きめで同じくらいの大きさであり、6と7は小型である。

9　剝片（第8表、第VII-11図、写真図版37）

剝片は8点以上出土している。7はC地区から出土したものであるが石質は頁岩で厚みがある。側辺の一部が使用されている。1～6はA地区出土であるが、全般的に厚みがない。1、2、4、8はチャートを使用し、やはり側辺を刃部として使用している。このうち2と4は石鏃未製品なのか剝片と石鏃に利用したものかは不明である。3は2と同じ地点から出土したもので、黒耀石を用い側辺の一辺を使用している。5は頁岩を使い、やや自然面を残す。側辺の一部に二次加工を施し、使用している。6は安山岩質で入念に整形されている。側辺の一辺が使用され、反対側には二次的な加工が施されて

いる。

10 石匙（第9表、第VII-11図、写真図版37）

石匙は2点出土してい、共に安山岩質である。1はA地区b-5グリッドの第I層から出土した横型石匙である。裏面に自然剝離を残し、全体的に入念な押圧剝離による調整を施している。ほぼ直線的で鋭い刃部を持つ。2はC地区ウグリッドから出土した縦型石匙である。1の2倍の重量、大きさを持つが、つくりは粗雑であり、はっきりとした刃部は認められない。

11 石棒（第10表、第VII-11図、写真図版37）

石棒及び石剣は断面が円形に近いものは石棒、断面が扁平に近いものは石剣とした。石棒は3点出土しているが、いずれも破損している。2と3は結晶片岩角セン岩が使われてい、2の表面はよく研磨されている。1は片麻岩質で途中から幅が少し広くなっている。いずれもA地区の第I層から出土している。

12 石剣（第11表、第VII-11図、写真図版37）

石剣は5点出土している。1、2、3は結晶片岩角セン岩を使用している。1は表面中央に長軸と平行に一本の細い沈線が刻まれている。2は側辺に細かな刻みが入り両側辺ともギザギザとしている。この他、粘板岩、凝灰岩、砂岩が使われ表面はいずれもよく研磨されている。

13 小玉（第12表、第VII-11図、写真図版37）

ひすいの小玉が7点A地区c-4グリッド第I層より出土している。7点中6点は完形であるが、1点は破損している。大小の違いはあるが、みな丸い側辺を持ち、上面に大きく下面に小さな孔径を持つ穴を孔っている。ひすいの質によるのであろうか、透明度のない深緑色と白濁した色が混じりあっているものと、一様に透明感のある薄緑色のものがある。

14 その他の石製品（第13表、第VII-6図、写真図版36）

以上の分類にあてはまらない石製品が83点出土している。3は流紋岩質の扁平で楕円形に近い自然石を素材とし、左右から斜めに交差する2線と、長軸方向に直交する1線が何重にも浅く刻まれている。7はほぼ中央部に細長いくぼみがみられる。4は片麻岩を利用しているが表面は全面よく研磨されている。8もやや小型ではあるが同様である。20は特異な形態を有する。片麻岩の細長い礫を素材としているが、入念な打ち欠きにより表面には自然面を残さない。中央部はごくわずかに括れ、両端は三角形となり先端はとがっている。

今回は誠に大まかな報告となってしまった。各石器とも、さらに詳細な分類や他遺跡との比較研究等今後の課題としたい。（高橋伸子）

註

（1） 米田耕之助 1981 年 12 月「独鈷石製品覚え書」『古代』71

（2） 渡辺誠 1973 年『縄文時代の漁業』

参考文献

図書刊行会 1976 年『小山台貝塚』

埼玉県教育局文化財保護課 1974 年『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会

第1表 磨製石斧

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚)cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	11.6	4.9	3.1	251	砂岩	A地区 b—5 表土層	側面は、よく研磨されているが、全面的にザラついている。厚みを持つ定角式磨製石斧。第Ⅶ—1図—1 写図35—1
2	5.7	5.6	3.5	165	硬砂岩	A地区 b—5 II層	表面は非常によく研磨されている。基部欠損。使用による剝離が著しい。第Ⅶ—1図—3
3	3.9	3.2	2.6	45	花崗岩	A地区 b—4 II層	基端のみ残存。研磨されている。かなり厚手。
4	12.4	5.6	2.5	235	流紋岩	C地区 I 不明	全面、研磨が行なわれている。刃部は何度か研ぎ直し使用されたようで、やや彎曲している。 第Ⅶ—1図—2 写図35—2

第2表 独鈷石

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	11.8	5.2	3.3	296	石英斑岩	A地区 d—4 I層	中央のくびれの部分はザラザラしているが、両端はよく研磨が行なわれている。晩期中葉。 第Ⅶ—1図—4 写図35—3

第3表 打製石斧

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	6.4	9.6	2.2	193	流紋岩	A地区 b—5 I層	扁手でやや大きめの礫を素材としている。やや丸みのある刃部を作り出している。自然面を多く残している。
2	6.7	7.9	1.1	74	安山岩	A地区 b—5 I層	板状の礫を素材とし、刃部と抉りを作り出している。約¼が欠損。
3	7.1	6.0	2.0	131	流紋岩	A地区 b—5 II層	扁平な礫を素材とし、丸い刃部を作り出している。約½が欠損。
4	9.5	9.0	2.7	346	硬砂岩	A地区 c—5 表土層	扁平な礫を素材とし、側面に抉りと両端に刃部を作り出している。約½が欠損。
5	6.8	6.1	1.6	78	流紋岩	A地区 c—5 不明	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部とやや深い抉りを作り出している。自然面を多く残す。約½が欠損。
6	9.6	7.0	2.2	228	流紋岩	A地区 d—5 I層	扁平な礫を素材とし、やや直線的な刃部と側面の抉りを作り出している。
7	8.0	6.0	2.4	120	安土岩	A地区 d—2 表土層	扁平な礫を利用し、周囲に剝離を施す。側辺に抉りを付すと共にやや直線的な刃部を作り出している。第Ⅶ—1図—5
8	11.3	5.6	2.2	189	流紋岩	A地区 b—4 I層	やや扁平な礫を素材とし、周辺に大まかな剝離を施し、やや丸みのある刃部と側辺の抉りを作り出している。細長い分銅形。第Ⅶ—2図—2
9	11.0	7.5	2.2	195	片麻岩	A地区 b—4 I層	ごく薄く扁平な礫を素材とし、やや直線的な刃部と長さのある抉りを作り出している。風化が著しい。第Ⅶ—2図—3
10	9.3	6.8	2.1	165	流紋岩	A地区 b—4 I層	扁平な礫を素材とし、やや直線的な刃部と側面の抉りを念入りに作り出している。自然面を多く残す。第Ⅶ—2図—7
11	10.4	8.7	2.5	247	安山岩	A地区 b—4 I層	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と長めの抉りを作り出している。自然面を多く残す。第Ⅶ—2図——5

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
12	5.5	6.5	2.5	92	片麻岩	A地区 b—4 Ⅰ層	やや扁平な礫を素材とし、念入りな剝離を施し、丸い刃部を作り出している。約½が欠損。
13	4.7	5.8	1.7	74	凝灰岩	A地区 b—4 Ⅰ層	扁平な礫を素材とし、直線的な刃部と側面の抉りを作り出している。
14	7.4	5.9	1.5	114	流紋岩	A地区 c—4 Ⅱ層	やや扁平な礫を素材とし、側面の抉りを作り出そうとしている。約½が欠損。
15	5.6	5.5	1.7	62	流紋岩	A地区 b—4 Ⅱ層	やや扁平な礫を素材とし、丸い刃部を作り出している。
16	6.4	6.7	2.4	102	凝灰岩	A地区 d—4 不明	扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部とわずかな抉りを作り出している。自然面を多く残す。約½が欠損。
17	8.8	4.1	2.0	70	粘板岩	A地区 c—4 Ⅰ層	細長い礫に大まかな剝離を施した後、刃部を作り出している。抉りはごくわずか。第Ⅶ—2図—6
18	9.8	6.0	1.5	136	安山岩	A地区c —4 Ⅰ層	ごく扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部と長めの抉りを作り出している。自然面を多く残す。第Ⅶ—2図—9
19	7.9	5.8	1.2	75	硬砂岩	A地区 c—4 Ⅰ層	ごく薄く扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と小さな抉りを作り出している。自然面を多く残す。第Ⅶ—2図—10
20	5.4	6.6	1.7	94	硬砂岩	A地区 c—4 Ⅰ層	風化が著しい。ごく扁平な礫を素材とし丸い刃部を作り出している。抉りはごくわずか。
21	12.7	7.2	3.4	320	安山岩	A地区 d—4 表土層	扁平な礫を素材とし、やや念入りの剝離により側面には長めの抉りを付す。両端には丸みのある刃部を作り出している。第Ⅶ—1図—7　写図35—6
22	12.2	9.3	2.1	353	流紋岩	A地区 d—4 Ⅰ層	ごく扁平で薄い礫を素材とし、直線的な刃部を作り出している。側面の抉りはゆるやかで長い。自然面を多く残す。
23	7.0	9.6	2.1	213	安山岩	A地区 d—4 Ⅰ層	扁平な礫を素材とし、丸い刃部を作り出している。
24	6.8	7.1	1.8	112	片麻岩	A地区 d—4 Ⅱ層	かなり風化している。やや扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。
25	6.7	6.6	1.9	132	安山岩	A地区 d—4 Ⅱ層	やや扁平な礫を素材とし、直線的な刃部と側面の抉りを作り出している。風化が著しい。約½が欠損。
26	13.2	6.5	3.6	308	流紋岩	A地区 d—3 表土層	礫に大まかな剝離を施した後、やや鋭い刃部とわずかな抉りを作り出している。側面に自然面を残す。第Ⅶ—2図—1
27	6.3	10.4	2.3	201	流紋岩	A地区 d—3 Ⅰ層	扁平な礫の表面に大まかな剝離を施し、丸い刃部を作り出そうとしている。約½が欠損。
28	6.5	7.1	1.6	106	硬砂岩	A地区 d—3 Ⅱ層	かなり風化している。扁平な礫を利用し、丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。約½が欠損。
29	10.2	7.7	1.7	200	流紋岩	A地区 b—2 Ⅰ層	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。典型的な分銅形。自然面を多く残す。第Ⅶ—1図—6　写図35—5
30	11.2	5.5	1.3	87	片麻岩	A地区 b—2 Ⅱ層	ごく薄い扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部と長めの抉りを作り出している。自然面を多く残す。第Ⅶ—2図—4
31	8.2	6.7	1.8	164	ホルンフェルス	A地区 c—2 Ⅱ層	大まかな剝離によりほぼ板状にされた礫を素材とし、やや丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。
32	7.1	10.1	2.3	206	流紋岩	A地区 b—2 Ⅱ層	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。約½が欠損。自然面を多く残す。
33	5.6	8.6	1.9	114	安山岩	A地区 b—2 Ⅱ層	扁平な礫を素材とし、表面からの剝離によりやや丸みのある刃部と、側面の抉りを作り出している。自然面

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
							を多く残す。
34	9.5	5.8	2.3	110	凝灰岩	A地区 b—2 III層	薄く扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部を両端につくり出し、側面に抉りを付している。自然面を多く残す。第Ⅶ—1図—8 写図35—4
35	8.7	5.9	1.9	131	流紋岩	A地区 c—2 不明	扁平な礫を素材とし、やや丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。第Ⅶ—2図—8
36	8.7	8.4	2.2	249	安山岩	A地区 c—2 不明	扁平な礫を素材とし、側面の抉りと丸い刃部を作り出している。約½が欠損。
37	10.0	7.8	1.9	207	片麻岩	A地区 d—2 II層	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。風化が著しい。
38	7.6	5.3	1.9	83	流紋岩	A地区 d—2 II層	扁平な礫を素材とし、念入りな剝離を施し、丸みのある刃部と側面の抉りを作り出している。37と似ている。
39	5.2	7.3	1.7	94	安山岩	A地区 d—2 II層	扁平な礫を素材とし、丸みのある刃部と、側面の抉りを作り出している。
40	11.2	9.5	2.9	338	凝灰岩	A地区 d—2 III層	やや扁平な礫を素材とし、周辺に剝離を施し、丸みのある刃部と抉りを付している。自然面を多く残す。
41	10 0	9.4	3.1	297	片麻岩	A地区 d—2 III層	板状の礫を素材とし、丸みのある刃部とゆるやかな抉りを付している。
42	9.1	7.1	3.0	300	片麻岩	A 地区 d—2 III層	扁平な礫を素材としている。周辺に剝離を施し、刃部と側面に抉りを付そうとしている。自然面を多く残す。

第4表　磨石・敲石・凹石

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	6.4	6.0	3.2	229	安山岩	A地区 b—5 表土層	平面は円形、上下はやや厚みがある。上下面側辺ともよく磨れている。側辺の一部に敲打が残る。
2	6.5	6.6	3.9	256	流紋岩	A地区 b—5 表土層	平面は円形。全面にわたりよく磨れている。側辺の一部に敲打によるザラつきが残る。
3	7.1	6.2	4.9	265	安山岩	A地区 b—5 表土層	平面は不正円形。厚みがある。長軸方向の使用が目立つ。
4	8.1	6.4	3.1	264	流紋岩	A地区 b—5 表土層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面ともよく磨れている。側辺が敲打によりザラついている。
5	10.1	9.3	4.2	576	流紋岩	A地区 b—5 表土層	平面は円形・大型。上下面はよく磨れていて、側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—4図—4
6	7.4	4.4	2.1	100	砂岩	A地区 b—5 表土層	平面は楕円形。断面は扁平、小型。
7	7.4	7.3	3.9	268	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は円形。上下面ともよく磨れ、上下面中央には、くぼみがある。側辺はわずかに敲打されている。
8	5.6	5.8	3.5	150	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は不正円形。上下面はよく磨れている。側辺はザラつき、大きく敲打を残す。
9	8.2	7.6	4.1	344	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は方形に近い円形。上下面はすれているが、側辺は敲打によりザラついている。
10	8.6	7.9	6.5	600	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は円形．ほぼ球形、全面よく磨れている。側辺に少しザラつきがある。写図35—7
11	7.9	5.3	5.4	327	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は円形～楕円。断面も円形。よく磨れている。約½が欠損。
12	8.5	7.0	4.9	491	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は楕円形。上面に浅いくぼみを持つ。全面にわたりよく磨れている。
13	11.3	8.4	4.4	680	砂岩	A地区 b—5 I層	平面は楕円形。上面に小さなくぼみがある。側辺には何箇所か敲打が残る。
14	7.1	7.0	5.8	467	安山岩溶岩	A地区 b—5	平面は楕円形。全面よく磨れている。断面はほぼ円形。

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重 量（g）	石 質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
15	12.7	8.3	5.6	269	花崗岩	A地区 b—5 Ⅰ層	平面は楕円形。全面よく磨れている。側辺に敲打が残る。
16	9.9	9.0	5.6	727	安山岩	A地区 b—5 Ⅱ層	平面は不正円形。やや厚みがある。全面よく磨れている。
17	10.3	6.4	7.1	633	安山岩	A地区 b—5 Ⅱ層	平面は楕円形。下面に2箇所浅いくぼみがある。上下面ともよく磨れている。側辺先端部が敲打によりザラついている。第Ⅶ—4図—5
18	7.5	6.4	4.4	223	安山岩	A地区 c—5 表土層	平面はほぼ長方形。上下中央に大きなくぼみがある。主に長軸方向を使用している。全面ザラついている。第Ⅶ—3図—11 写図36—2
19	6.4	5.9	2.9	153	流紋岩	A地区 c—5 表土層	平面は円形。断面は扁平。全面にわたりよく磨れている。側面に一部敲打を残す。
20	9.9	8.0	3.2	376	安山岩	A地区 c—5 表土層	楕円形。断面は扁平。側辺はザラついている。
21	7.9	7.6	4.6	861	流紋岩	A地区 c—5 表土層	平面は不正円形。上下面中央に浅いくぼみを持つ。側辺に敲打を残す。
22	8.6	5.9	3.4	211	砂岩	A地区 c—5 表土層	平面は楕円形。断面は扁平。全面よく磨れている。側辺の先端部に敲打がみられる。
23	11.6	6.1	2.3	285	安山岩	A地区 c—5 表土層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上下面とも磨れている。側辺の先端部がザラついている。第Ⅶ—3図—17
24	12.1	9.8	7.1	1198	流紋岩	A地区 c—5 Ⅱ層	平面は楕円形。厚みがあり大型。全面よく磨れているが、側辺はややザラついている。
25	8.7	7.3	5.5	454	安山岩	A地区 c—5 Ⅱ層	平面は楕円形。上下面ほぼ中央にごく浅いくぼみがある。
26	6.7	6.5	3.3	185	凝灰岩	A地区 d—5 Ⅰ層	平面は円形。全面にわたり、よく磨れている。
27	10.5	8.1	5.2	632	流紋岩	A地区 d—5 Ⅰ層	平面は不正円形。自然石をそのまま利用。
28	5.2	8.4	3.4	175	安山岩	A地区 d—5 Ⅰ層	大部分を欠損。現存部分はよく磨れている。
29	17.1	7.0	5.9	935	安山岩	A地区 d—5 Ⅰ層	平面は長楕円形に近い。全面、よく磨れている。
30	7.6	7.8	3.9	302	凝灰岩	A地区 d—5 Ⅲ層	平面は不正円形。側辺に楕打がやや残っている。
31	9.8	8.7	5.5	610	安山岩	A地区 d—5 Ⅲ層	平面は不正円形。上下面は磨れているが、側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—5図—10
32	6.4	8.1	4.4	640	流紋岩	A地区 d—5 Ⅲ層	平面は楕円形。上下面に浅いくぼみを持ち、よく磨れている。側辺には敲打が著しい。第Ⅶ—4図—11 写図36—3
33	6.1	6.0	3.5	182	安山岩	A地区 b—4 表土層	平面は円形。断面は扁平に近いが中央部がやや厚め、上下面はよくすれていて、側辺はわずかに敲打。
34	9.1	7.9	3.5	861	安山岩	A地区 b—4 表土層	平面は円に近い楕円形。上下面中央に浅いくぼみを持つ。側辺は敲打によりザラついている。
35	7.7	7.2	4.4	276	安山岩	A地区 b—4 表土層	平面は不正円形。側辺がわずかな敲打によりザラついている。
36	6.1	5.6	3.2	114	安山岩	A地区 b—4 表土層	約半分が欠損。楕円、ほぼ扁平。側辺にザラつきが認められる。
37	8.6	7.3	4.9	422	硬砂岩	A地区 b—4 表土層	欠損部分が多いが、平面は楕円形。上下面面に浅いくぼみがある。側辺に敲打を残す。
38	10.5	8.4	3.5	489	安山岩	A地区 b—4 表土層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面はすれているが、側辺は敲打によりザラついている。

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
39	6.1	6.2	3.9	192	安山岩溶岩	A地区 b—4 表土層	平面は不正円形。上下面はよくすれているが、側辺には大きな敲打を残す。
40	14.2	8.1	4.7	7.9	安山岩	A地区 b—4 表土層	平面は楕円形。先端部に敲打が残る。上下面は磨れている。第Ⅶ—6図—1　写図36—5
41	11.9	6.7	4.3	422	流紋岩	A地区 b—4 表土層	平面は楕円形。上下面とも磨れている。側辺がややザラついている。
42	9.8	7.7	4.5	423	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。上下面に深く大きなくぼみを持つ。側辺は敲打によりザラついている。
43	5.9	5.3	3.7	149	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は不正円形。上下はやや厚い。上下面はよく磨れていて、側辺はややザラついている。
44	6.8	6.4	3.8	218	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は円形。ややいびつな形をしている。上下面はよく磨れていて、側辺は敲打によるザラつきが残る。
45	7.1	6.5	4.5	279	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は隅丸方形。上下はやや厚みを持つ。上下面はよく磨れているが、側辺はザラついている。
46	8.7	6.9	4.4	409	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。上下は厚みがある。全面よく磨れているが周辺はザラついている。
47	10.2	7.4	3.5	390	流紋岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上面にごく浅いくぼみがある。全面よく磨れているが側辺はザラついている。
48	7.1	6.3	4.3	261	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。側辺はザラついているが、下面はよく磨れている。
49	13.6	9.1	6.1	975	安山岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。大型。全面よく磨れている。側辺にややザラつきがある。第Ⅶ—4図—12
50	15.4	8.1	4.4	893	流紋岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。全面よく磨れている。先端部に1箇所敲打が残る。
51	10.3	6.7	5.2	491	安山岩溶岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形に近い。全面よく磨れている。上下の厚みがある。側辺に敲打を残す。第Ⅶ—4図—8
52	12.8	5.3	3.9	392	流紋岩	A地区 b—4 I層	平面は楕円形。棒状を呈す。上下面はよく磨れてい、側辺はやや敲打されている。
53	8.6	5.2	4.2	235	砂岩	A地区 b—4 I層	約半分が欠損。上下面に浅いくぼみがあり、側面はわずかな敲打によりザラついている。
54	5.8	5.7	3.8	179	流紋岩	A地区 b—4 II層	平面は円形。全面にわたりよく磨れている。側辺の一部に敲打によるザラつきが残る。
55	6.4	5.7	3.2	191	安山岩	A地区 b—4 II層	約½が欠損。断面は扁平。上面に浅いくぼみがあり、全面磨れている。
56	10.7	7.9	4.9	620	流紋岩	A地区 b—4 II層	平面は不正円形。全面よく磨れ、先端部は敲打によりザラついている。
57	11.1	8.2	6.1	789	安山岩	A地区 c—4 表土層	平面は楕円形。上下面に浅いくぼみがあり、よく磨れている。第Ⅶ—3図—16
58	5.6	4.8	3.8	139	流紋岩	A地区 c—4 I層	平面は不正円形。全面よく磨れている。
59	7.4	7.2	3.3	394	安山岩	A地区 c—4 I層	平面は楕円形。約半分が欠損。上下面とも磨れてい、先端はザラついている。
60	6.8	7.1	3.9	242	流紋岩	A地区 c—4 I層	約½が欠損。よく磨れている。側辺に敲打によゆ欠損がみられる。
61	8.7	7.3	3.1	242	安山岩	A地区 c—4 I層	平面は楕円形。断面は扁平。側辺に敲打によるザラつきが残る。
62	4.2	6.1	4.9	189	流紋岩	A地区 c—4 I層	平面は長楕円形。大型で棒状を呈す。全面よく磨れている。側辺が一箇所打ち欠かれている。
63	11.4	6.8	4.4	357	安山岩溶岩	A地区 c—4 I層	平面は楕円形。側辺に敲打を残す。第Ⅶ—5図—13
64	11.0	9.0	5.1	692	安山岩	A地区 c—4	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上下面は磨れ、中央

番号	最大長（cm）	最大幅）cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
						Ⅰ層	にごく浅いくぼみがある。側辺は敲打によりザラついている。
65	7.1	6.9	4.4	312	安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は隅丸方形。上下の厚みがある。側辺は2方向から磨れている。
66	6.7	6.2	3.2	219	安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は不正円形。断面は扁平。片面が½ほど剝離している。上下面はよく磨れているが、側辺は敲打されザラついている。第Ⅶ—3図—1
67	9.5	7.5	4.8	457	安山岩	A地区 c—4 Ⅱ層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上面に小さなくぼみがある。側辺は敲打によるザラつきがある。
68	6.4	4.5	4.4	165	安山岩	A地区 c—4 不明	½が欠損。上下面側面ともよく磨れている。
69	7.4	11.3	7.0	908	安山岩	A地区 d—4 表土層	欠損部分が多い。全面よく磨れている。
70	6.4	4.3	3.6	140	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。断面はほぼ円形。小型。全面よく磨れている。
71	7.7	5.4	4.1	187	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。全面よく磨れている。側辺の先端部に敲打を残す。
72	6.0	5.8	2.4	128	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は円形。断面は扁平。上下面はよく磨れ、側辺はわずかに敲打を残す。
73	5.7	4.9	2.6	112	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は不正円形。断面は扁平。上下面はよく磨れているが、側辺は敲打されザラついている。
74	8.1	8.0	4.5	373	硬砂岩	A地区 d—4 表土層	平面は不正円形。ゴツゴツしていびつである。上面に深い、下面に浅いくぼみがある。第Ⅶ—5図—9
75	8.7	8.0	6.4	587	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は不正円形。厚みを持ち球形に近い。全面よく磨れている。
76	8.5	6.4	4.2	279	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。磨れている。約½が欠損。
77	10.0	8.8	5.7	633	凝灰岩	A地区 d—4 表土層	平面は円～楕円形。上下面はよく磨れている。側辺部にザラつきが残る。
78	12.1	7.0	6.4	659	流紋岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。断面は円形。側辺～下面に敲打が残る。
79	10.5	8.0	4.4	475	安山岩	A地区 d—4 Ⅰ層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面中央部には小さなくぼみがある。上下面は磨れ側辺はザラついている。第Ⅶ—5図—11
80	9.0	7.2	4.1	347	安山岩	A地区 d—4 Ⅰ層	平面は楕円形。上下面ともほぼ中央に浅いくぼみがある。側辺はザラついている。
81	12.1	8.4	5.7	885	流紋岩	A地区 d—4 Ⅰ層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平で厚みがある。側辺はザラつき、特に長軸方向には大きな敲打が残る。第Ⅶ—5図—14
82	7.1	6.3	4.2	254	安山岩	A地区 d—4 Ⅱ層	平面は不正円形。上下面に小さなくぼみがある。上下面はよく磨れている。長軸方向に敲打によるザラついている。第Ⅶ—3図—2
83	6.2	5.7	2.8	129	砂　岩	A地区 d—4 不明	平面は不正円形。断面はほぼ扁平。石質のせいか全面ザラザラしている。
84	7.7	7.5	5.0	373	流紋岩	A地区 d—3 表土層	平面は不正円形。全面よく磨れている。やや厚みがある。
85	7.3	5.9	3.9	165	安山岩	A地区 d—3 表土層	平面はほぼ楕円形。側辺は敲打によるザラつきが著しい。
86	7.3	6.8	3.5	333	流紋岩	A地区 d—3 表土層	平面は楕円形。上面はよく磨れているが、下面は敲打による破損が残る。
87	6.7	6.4	3.5	218	安山岩	A地区 d—3 表土層	平面は円形。上下面・側辺ともよく磨れている。

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	出土地点層位	形態的特徴及び備考
88	7.8	6.1	3.7	206	安山岩	A地区 d—3 表土層	平面は円形。断面はほぼ扁平。全面よく磨れている。
89	8.6	7.0	4.5	351	流紋岩	A地区 d—3 I層	平面は楕円形。上面に小さなくぼみを持つ。全面よく磨れている。
90	9.9	8.3	2.3	333	安山岩	A地区 d—3 I層	平面は楕円形。断面は扁平。上面に浅いくぼみがある。側辺には敲打が残る。第Ⅶ—4図—13
91	8.5	6.6	2.9	257	流紋岩	I層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。全面よく磨れているが、側辺に敲打を残す。
92	6.5	6.9	4.2	203	安山岩	A地区 d—3 I層	平面は円形。断面は扁平に近い。上下面、側辺ともよく磨れている。第Ⅶ—3図—9
93	7.2	7.2	5.2	359	安山岩	A地区 d—3 I層	平面は円形。上下の厚みがある。側辺は敲打によりザラついている。
94	10.2	6.2	3.8	294	安山岩	A地区 d—3 I層	平面は楕円形。長軸方向からの使用が目立つ。第Ⅶ—6図—4
95	13.4	4.4	4.2	408	硬砂岩	A地区 d—3 I層	平面は長楕円形。棒状を呈す。全面よく磨れてい、敲打は認められない。第Ⅶ—6図—3
96	12.6	8.8	4.3	501	安山岩	A地区 d—3 I層	自然石をそのまま利用。上面中央がややくぼんでいる。
97	6.2	7.7	3.4	200	砂岩	A地区 d—3 I層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上面中央に浅いくぼみがある。約半分が欠損。
98	5.5	7.8	7.5	165	安山岩	A地区 d—3 I層	断面は扁平。上下面はよく磨れ、側辺は敲打によりザラついている。
99	6.8	6.7	2.6	190	安山岩	A地区 d—3 II層	平面は方形に近い円形。断面はほぼ扁平。側辺は主に長軸2方向から使われている。写図36—1
100	5.8	5.5	4.7	200	安山岩	A地区 d—3 II層	平面は円形。断面も楕円形に近い。上下面はよく磨れてい、側辺は敲打によるザラつきが残る。
101	6.1	6.4	3.4	204	安山岩	A地区 b—2 表土層	平面は円形。断面は扁平。片面に小さなくぼみがある。側辺はわずかに敲打されザラついている。第Ⅶ—3図—4
102	9.4	6.7	4.5	411	流紋岩	A地区 b—2 表土層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上面にごく浅いくぼみがある。全面よく磨れているが、側辺はザラついている。
103	7.8	6.9	4.7	368	流紋岩	A地区 b—2 I層	平面は不正円形。やや厚みがある。全面よく磨れている。
104	6.2	6.1	3.5	182	安山岩溶岩	A地区 b—2 II層	平面は不正円形。上下面、側辺ともよく磨れている。
105	6.1	5.5	2.6	130	安山岩	A地区 b—2 II層	平面は不正円形。断面は扁平で薄い。上面中央に小さなくぼみがある。上下面はよく磨れ、側辺はわずかに敲打されている。
106	7.0	6.0	2.9	162	流紋岩	A地区 b—2 II層	平面は不正楕円形。断面はほぼ扁平。全面にわたり、よく磨れている。長軸方向に敲打が残る。
107	7.9	5.9	4.4	301	安山岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。上下面ともよく磨れている。側辺にザラつきが残る。
108	8.6	7.4	4.6	457	安山岩	A地区 c—2 II層	平面は長方形に近い。上下面に小さなくぼみがある。上下面ともすれているが、側辺はザラついている。第Ⅶ—3図—13
109	7.8	7.3	4.0	271	安山岩	A地区 c—2 II層	平面は方形に近い円形。上下面は磨れているが側辺は敲打によりザラついている。
110	6.7	5.7	3.9	173	流紋岩	A地区 c—2 II層	平面は円形。全面よく磨れている。
111	10.1	6.4	4.1	327	安山岩	A地区 c—2 II層	平面は楕円形。上下面にくぼみみを持つ。全面ザラついている。第Ⅶ—4図—14

番口	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
112	9.3	6.4	4.2	301	凝灰岩	A地区 c—2 II層	平面は楕円形。下部欠損。上下面とも浅いくぼみがある。長軸方向の側辺には敲打が残る。
113	10.1	8.5	6.3	632	硬砂岩	A地区 c—2 II層	平面は不正円形。厚みがある。全面よく磨れている。
114	11.7	6.9	4.5	725	流紋岩	A地区 c—2 III層	平面はほぼ楕円形。断面は扁平で厚みがある。全面よく磨れてい、側辺の1部に敲打が残る。第Ⅶ—4図—7
115	12.1	5.3	4.0	439	流紋岩	A地区 b—2 III層	平面は楕円形。棒状を呈す。全面よく磨れている。一方の先端は敲打が著しい。写図36—6
116	12.3	6.0	3.4	410	流紋岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。上下面に小さなくぼみがある。長軸方向に敲打が残る。
117	9.9	7.1	4.6	452	安山岩	A地区 b—2 不明	平面は楕円形。上下面にごく浅いくぼみが持つ。側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—4図—10
118	7.8	5.8	4.7	360	砂岩	A地区 b—2 不明	棒状を呈す。約½が欠損。
119	6.1	5.9	3.9	188	安山岩	A地区 c—2 I層	平面は不正円形。上面に浅いくぼみがある。上下の厚さがある。
120	8.7	6.3	3.9	310	安山岩	A地区 c—2 I層	平面は長方形に近い。上下面ともに大きなくぼみがある。側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—3図—15
121	7.5	7.0	4.9	361	片麻岩	A地区 c—2 I層	平面は方形に近い不正円形。全面よく磨れている。第Ⅶ—4図—15
122	8.4	7.5	4.1	423	流紋岩	A地区 c—2 I層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面はよく磨れている。側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—3図—14
123	9.2	6.6	4.5	330	流紋岩	A地区 c—2 I層	平面は楕円形。厚みがある。全面よく磨れている。
124	8.1	7.2	3.2	281	安山岩	A地区 c—2 I層	平面は楕円形。上面中央に浅いくぼみがある。全面よく磨れているが、側辺はザラつき、敲打が残る。第Ⅶ—3図—10
125	10.1	6.7	4.1	409	安山岩	A地区 c—2 I層	平面は楕円形。全面よく磨れている。断面はほぼ扁平。側辺はややザラついている。第Ⅶ—5図—15
126	9.8	6.9	4.2	543	流紋岩	A地区 c—2 I層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面とも磨れている。側辺のザラつきは少ない。
127	5.5	5.5	4.8	233	安山岩	A地区 c—2 II層	平面は円形。上下面中央にやや深いくぼみがある。全面よく磨れている。第Ⅶ—5図—1　写図35—9
128	10.3	9.5	4.3	512	安山岩溶岩	A地区 b—2 II層	平面は円形。上下面とも中央に小さなくぼみが集中している。上下面はよく磨れ、側辺はわずかに敲打が残る。
129	12.9	9.0	6.2	1005	流紋岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。厚みがある。上下面ともよく磨れてい、側辺は少しザラついている。第Ⅶ—6図—5
130	8.7	6.2	3.7	231	安山岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。全面、磨れている。
131	4.6	5.1	4.0	124	安山岩	A地区 d—2 表土層	平面は不正円形。上下面はよく磨れ、側邇はややザラついている。
132	6.2	5.9	4.5	230	安山岩	A地区 d—2 表土層	平面は不正円形。厚みがある。側辺は2方向から磨れている。第Ⅶ—3図—8
133	7.6	5.5	2.9	253	流紋岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。全面よく磨れている。長軸方向からの使用が目立つ。
134	7.3	6.1	4.6	315	砂岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。長軸方向からの使用が著しい。第Ⅶ—5図—8
135	8.8	6.4	4.3	319	安山岩溶岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。やや厚みがある。側辺に敲打によるザラつきが見られる。

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点層位	形態的特徴及び備考
136	12.0	8.4	5.8	816	流紋岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。全面よく磨れている。側辺に一部敲打を残す。
137	9.2	6.6	5.4	528	安山岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。棒状を呈す。先端部が敲打によりザラついている。
138	9.7	8.2	3.6	473	流紋岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。上面に浅いくぼみを持つ。上下面はよく磨れているが、側辺に敲打を残す。第Ⅶ—4図—3
139	9.7	6.0	4.1	260	流紋岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。厚みを持つ。全面よく磨れているが、側辺の先端に敲打が残る。第Ⅶ—3図—7
140	7.7	7.2	4.8	343	安山岩	A地区 d—2 I層	平面は円形。上下面中央にわずかにくぼんでいる。上下面はよく磨れているが、側辺には大きな敲打が残る。第Ⅶ—3図—12
141	6.3	5.9	4.1	222	安山岩	A地区 d—2 II層	平面は円形。上下面中央はわずかにくぼみ。上下面側辺ともよく磨れている。第Ⅶ—5図—3
142	6.1	7.8	5.5	497	安山岩	A地区 d—2 II層	平面は楕円形。約半分が欠損。上下面はよく磨れている。側辺は敲打が著しい。
143	7.4	6.6	3.4	255	レキ岩	A地区 d—2 III層	平面は不正円形。断面はほぼ扁平。全面よく磨れている。
144	4.4	11.6	5.9	550	安山岩	A地区 d—2 III層	大部分欠損。断面は扁平。側辺は敲打が著しい。上下面はよく磨れている。
145	8.8	6.2	6.5	460	安山岩	A地区 d—2 III層	大部分欠損。長軸方向に大きな敲打が残る。
146	6.1	5.7	3.9	167	安山岩	A地区 d—2 III層	平面は不正円形。全面よく磨れている。
147	6.9	6.3	3.2	191	安山岩	A地区 a—4 III層	平面は不正円形。断面はほぼ扁平。上面にごく小さな浅いくぼみがある。側辺は敲打によりザラついている。
148	14.6	7.6	5.2	906	安山岩	A地区 a—4 表土層	平面は楕円形。棒状を呈す。上下面ともよく磨れ、側辺先端部はザラついている。第Ⅶ—6図—2
149	9.5	6.8	3.4	272	砂岩岩	A地区 a—4 表土層	平面は楕円形。断面は扁平。全面ザラついている。第Ⅶ—5図—12
150	11.6	8.8	4.9	752	安山岩	A地区 a—4 黒色層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。側辺にザラつきが残る。
151	6.3	6.3	3.4	174	安山岩溶岩	A地区 a—4 I層	平面は不正円形。上面はやや深くくぼんでいる。側辺は3方向から使用され、一部に敲打を残す。
152	5.6	6.0	2.6	132	安山岩	A地区 a—4 I層	平面は不正円形。断面は扁平。上下面はよく磨れている。側辺はザラつき、一部に敲打が残る。
153	9.0	7.8	5.3	512	安山岩	A地区 a—4 I層	平面は楕円形。断面はやや扁平で厚みを持つ。上下面は磨れているが、側辺はややザラついている。
154	18.7	6.5	4.7	959	流紋岩	A地区 a—4 I層	平面は長楕円形。棒状を呈す。上下面は磨れ側辺はザラついている。先端部の敲打が目立つ。第Ⅶ—6図—6 写図36—7
155	15.8	5.1	5.4	576	流紋岩	A地区 a—4 I層	平面は長楕円形。棒状を呈す。全面よく磨れている。第Ⅶ—6図—7
156	10.3	8.8	5.7	819	流紋岩	A地区 a—4 黒色層	平面は円形。断面はほぼ扁平。厚みがある。上下面はよく磨れているが、側辺部はややザラついている。
157	30.6	12.0	10.6	5200	流紋岩	A地区 a—4 II層	平面は長楕円形。大型で棒状を呈す。全面よく磨れている。側辺はややザラついている。側辺が一箇所打ちかかれている。
158	5.3	4.9	3.1	89	安山岩	A地区 a—4 テストピット	平面は不正円形。全面よく磨れている。
159	8.4	8.3	4.5	360	安山岩	A地区 a—4 テストピット	平面は楕円形。上下面ともごく浅いくぼみを持つ。約½が欠損。側辺はザラついている。
160	7.2	7.0	2.6	168	安山岩	C地区	平面は不正円形。上下面はよく磨れ、側辺はザラつい

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
						表採	ている。第Ⅶ—5図—4
161	6.4	5.7	2.3	143	安山岩	C地区ア、イ 包含層	平面は隅丸方形に近い。断面は扁平でうすい。上下面はよく磨れ、側辺はわずかに敲打。
162	6.1	5.9	4.9	220	安山岩	C地区ア、イ 包含岩	平面は円形。やや厚みがある。全面ともよく磨れている。第Ⅶ—5図—6
163	7.1	8.4	6.2	458	安山岩	C地区ア、イ 包含岩	約½が欠損。断面は楕円形をなし厚みがある。側辺に敲打によるザラつきを残す。
164	5.2	4.6	2.9	96	流紋岩	C地区　エ 不明	平面は不正円形。全面よく磨れ、敲打はみられない。
165	6.8	7.2	3.7	249	安山岩	C地区ォ—1 不明	平面は円形。断面はほぼ扁平。上下面よく磨れ、側辺はわずかに敲打。第Ⅶ—5図—5　写図35—11
166	5.9	6.1	3.6	176	流紋岩	C地区　カ 不明	平面は円形。上下面中央は浅いくぼみ、側辺はよく磨れている。第Ⅶ—5図—2　写図35—10
167	6.2	5.6	2.7	144	安山岩	C地区　カ 包含層	平面は方形に近い不正円形。断面は扁平。上下面ともよく磨れ、側辺はわずかに敲打。
168	7.9	8.5	6.2	543	安山岩	C地区　カ 包含層	平面は楕円形。約半分欠損。上面に浅いくぼみがある。側辺に敲打によるザラつきがある。
169	5.9	5.7	3.9	173	安山岩	C地区　カ 包含層	平面は円形。片面に小さなくぼみがある。上下面、側辺ともよく磨れている。第Ⅶ—3図—6
170	5.2	8.2	4.5	265	安山岩	C地区　カ 包含層	上下面はよく磨れているが、側辺はわずかな敲打によるザラつきがある。
171	8.7	7.6	4.0	424	安山岩	C地区　カ 包含層	平面は隅丸方形、断面は扁平。上下面に浅いくぼみがある。側辺に敲打を残す。第Ⅶ—4図—6
172	7.1	6.3	2.7	61	安山岩	C地区　カ 包含層	平面は円形。断面は扁平。上下面はよく磨れている。側辺は敲打によりザラついている。
173	7.6	6.8	3.8	257	流紋岩	C地区　カ 包含層	平面は不正円形。全面よく磨れている。
174	8.9	7.1	4.9	513	流紋岩	C地区 包含層	平面は楕円形。断面は扁平で厚みがある。上下面はよく磨れているが側辺はザラついている。 第Ⅶ—3図—18　写図35—12
175	11.3	6.1	3.7	475	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。棒状を呈す。上下面とも浅いくぼみがあり、先端部に敲打が残る。
176	6.5	6.8	3.8	247	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。断面は扁平。上下面とも浅いくぼみを持つ。側辺は敲打によりガラついている。
177	17.1	9.4	7.7	1562	安山岩	A地区 d—4 表土層	平面は楕円形。棒状を呈する。側辺はザラつき、先端部には敲打が残る。
178	9.9	8.9	4.7	573	安山岩	A地区 不明	平面は円に近い楕円形。上下面に小さなくぼみを持つ。側辺は敲打によりザラついている。第Ⅶ—4図—2
179	8.5	5.2	4.2	235	安山岩	A地区 b—2 Ⅱ層	欠損部分が多く形は不明。側辺に大きな敲打が残る。
180	8.3	8.8	5.3	447	流紋岩	A地区 b—2 Ⅱ層	約½を欠損。平面は楕円形。全面よく磨れている。先端部に敲打が残る。
181	10.2	7.0	5.3	580	流紋岩	A地区 b—2 Ⅱ層	平面は楕円形。やや厚みを持つ。上下面は磨れているが、側辺は多少ザラついている。
182	10.0	7.5	4.9	599	安山岩	A地区 c—2 Ⅱ層	平面は楕円形。上下面に大きなくぼみがあり、磨れている。側辺はザラついている。第Ⅶ—4図—9
183	9.9	8.1	4.7	490	安山岩	A地区 c—2 Ⅱ層	平面は楕円形。断面はほぼ扁平。上下面に小さなくぼみがある。側辺には敲打が残る。
184	7.6	6.7	4.5	357	安山岩	A地区 c—2 Ⅱ層	平面は楕円形。棒状を呈す。全面よく磨れ、先端部に敲打によるザラつきが残る。
185	10.3	8.0	5.4	633	流紋岩	A地区 c—2 Ⅱ層	約半分を欠損。棒状を呈す。先端部は敲打によりザラついている。

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点層位	形態的特徴及び備考
186	5.9	5.8	2.8	117	安山岩	A地区 b 不明	平面は不正円形。断面は扁平。上下面中央に浅いくぼみを持ち、上下面はよく磨れている。第Ⅶ—3図—3
187	7.4	7.4	4.7	235	安山岩	A地区 不明	平面は円形。厚みがあり、全面よく磨れている。第Ⅶ—3図—5
188	6.7	6.8	4.1	226	安山岩	A地区 表土採集	平面は円形。上下面はよく磨れている。側辺はわずかに敲打され、ザラついている。
189	9.2	7.4	4.5	383	安山岩	A地区 表土採集	平面は不正円形。自然石をそのまま利用。下部のみザラついている。
190	8.1	6.1	4.2	346	流紋岩	排土中	平面は楕円形。断面はやや扁平。全面よく磨れている。側辺に敲打が残る。第Ⅶ—5図—7
191	10.2	7.8	3.7	319	砂岩	不明	平面は楕円形。上面には大きく深い、下面には浅いくぼみを持つ。側辺及び上面にかけて敲打を残す。第Ⅶ—4図—1

第5表　石　　皿

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点点層位	形態的特徴及び備考
1	8.9	6.9	1.7	94	安山岩溶岩	A地区 b—5 I層	小破片。
2	10.0	12.2	5.3	517	凝灰岩	A地区 c—5 表土層	1類。破損している。縁が盛り上がり中央は広く平らになっている。側辺はやや丸い。
3	14.7	12.8	3.0	823	安山岩	A地区 c—5 表土層	5類。扁平な自然石を利用。上下面ともよく磨れている。
4	17.5	11.1	4.7	1229	安山岩	A地区 d—5 III層	5類。扁平な自然石を利用。表面中央に1個くぼみがある。表裏面ともよく磨れている。
5	9.1	6.4	4.0	230	安山岩	A地区 d—5 III層	小破片。
6	8.8	20.1	4.9	1812	安山岩	A地区 b—4 表土層	1類。砂損している。上面は中央部がなだらかに磨り減り、側辺は丸い。第Ⅶ—7図—5　写図36—9
7	10.3	9.6	5.2	433	安山岩	A地区 b—4 表土層	2類。破損している。上面は中央が磨り減り、側辺はやや直線的。下面には8個のくぼみがある。第Ⅶ—8図—6
8	13.2	14.7	10.2	1780	安山岩	A地区 b—4 表土層	3類。破損している。上面は中央が磨り減りくぼみが1個ある。下面は直線的で5個のくぼみがある。
9	11.8	11.5	2.6	539	片麻岩	A地区 b—4 I層	4類。断面は扁平。表面に1個くぼみがある。第Ⅶ—8図—8
10	18.3	16.8	4.6	2300	花崗岩	A地区 b—4 II層	4類。破損している。やや厚みがあり、表面に1個くぼみがある。第Ⅶ—8図—3
11	11.3	9.2	1.7	245	流紋岩	A地区 b—4 I層	5類。扁平な自然石を利用。表裏面ともよく磨れている。
12	8.1	6.7	8.4	324	安山岩	A地区 b—4 I層	小破片。側面にくぼみが5個かたまっている。
13	9.7	6.4	5.8	225	安山岩溶岩	A地区 b—4 I層	小破片。
14	8.2	4.5	5.1	211	凝灰岩	A地区 b—4 I層	小破片
15	7.9	3.9	2.8	49	安山岩	A地区 b—4 I層	小破片。
16	12.6	7.7	4.3	376	安山岩	A地区 b—4 II層	3類。破損している。中央部がやや磨り減り、2個のくぼみがある。下面には9個のくぼみがある。
17	15.1	10.1	4.7	769	安山岩	A地区 c—4	5類。破損している。表面に3つのくぼみがある。

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
							Ⅱ層
18	9.2	5.5	1.5	121	安山岩	A地区 b—4	5類。破損している。扁平な自然石を利用。
							Ⅱ層
19	5.3	5.2	2.6	3636	安山岩溶岩	A地区 b—4	小破片。
							Ⅱ層
20	11.6	8.1	4.9	303	安山岩	A地区 c—4	小破片。くぼみが1個ある。
							Ⅰ層
21	12.5	5.1	6.2	495	安山岩溶岩	A地区 c—4	小破片。
							Ⅰ層
22	16.5	16.1	2.5	815	片麻岩	A地区 c—4	1類。破損している。上面中央がやや磨り減っている。第Ⅶ—8図—4
							Ⅱ層
23	6.9	4.9	3.8	101	安山岩	A地区 c—4	小破片。
							Ⅱ層
24	5.5	3.0	1.3	12	安山岩	A地区 c—4	小破片。
							Ⅱ層
25	5.7	3.9	3.9	54	安山岩	A地区 d—4	小破片。
							Ⅰ層
26	10.8	11.3	7.8	701	凝灰岩	A地区 d—4	2類。破損している。上面はなだらかに磨り減り側辺は丸みをおびている。側面には12個のくぼみがある。第Ⅶ—7図—7
							Ⅱ層
27	20.3	24.3	3.2	2047	片麻岩	A地区 d—4	4類。破損している。表面に1個くぼみがある。第Ⅶ—8図—2
							Ⅱ層
28	14.9	9.1	7.9	849	安山岩	A地区 d—3	3類。破損している。上下面とも中央が磨り減り側面は丸い。上面に1個、下面に6個のくぼみがある。第Ⅶ—7図—6
							Ⅰ層
29	12.1	6.5	3.8	224	安山岩	A地区 d—3	小破片。
							Ⅰ層
30	11.8	5.7	6.4	346	凝灰岩	A地区 d—3	小破片。
							Ⅰ層
31	5.2	4.6	4.7	119	安山岩	A地区 d—3	小破片。
							Ⅱ層
32	5.4	3.4	1.3	18	安山岩溶岩	A地区 d—3	小破片。
							Ⅱ層
33	7.9	3.6	1.5	24	安山炭溶岩岩	A地区 c—2	小破片。
							Ⅱ層
34	14.4	11.6	7.0	1049	安山岩溶岩	A地区 b—2	2類。破損している。上面は中央部に向って磨り減り、側面は丸みをおびている。下面の8個のくぼみがある。
							Ⅱ層
35	15.2	11.2	8.2	1014	安山岩	A地区 c—2	3類。上下面とも中央部が磨り減り各1個ずつくぼみがある。側面は丸い。
							Ⅱ層
36	11.5	10.1	4.9	319	安山岩	A地区 c—2	小破片。上面はよく磨り減り。下面には1個くぼみがある。
							Ⅱ層
37	7.3	8.8	8.9	422	安山岩	A地区 b—2	小破片。上面はよく磨れている。下面に2個くぼみがある。
							Ⅱ層
38	5.3	4.0	3.0	36	安山岩	A地区 b—2	小破片。
							Ⅱ層
39	7.1	5.7	3.9	196	安山岩溶岩	A地区 b—2	小破片。
							Ⅲ層
40	9.9	5.8	3.7	144	安山岩溶岩	A地区 c—2	小破片。
							Ⅰ層
41	5.6	5.9	4.2	94	安山岩溶岩	A地区 c—2	小破片。
							Ⅰ層
42	7.6	3.8	2.1	34	安山岩溶	A地区 c—2	小破片。

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
					岩	I層	
43	10.3	14.3	3.7	732	安山岩	A地区 d—2 I層	5類。破損している。扁平な自然石を利用。
44	23.9	11.8	7.1	1625	安山岩溶岩	A地区 d—2 II層	3類。破損している。上下面とも中央部が磨り減り、側面は厚く丸い。上面に4個、下面に9個くぼみがある。第Ⅶ—7図—1
45	7.1	3.7	2.7	85	安山岩	A地区 d—2 II層	小破片。
46	9.4	8.1	4.2	491	安山岩	A地区 d—2 III層	2類。破損している。上面は中央部に向い磨れ、側辺は丸い。下面に1～2個くぼみがある。
47	9.2	7.8	4.2	245	安山岩	A地区 d—2 III層	2類。破損している。上面はよく磨れ、側辺は丸い。下面には3個のくぼみがある。
48	9.4	8.4	8.4	371	安山岩	A地区 d—2 III層	3類。破損している。上下面とも中央が磨り減っている。上面に1個、下面に1個のくぼみがある。
49	7.4	5.5	2.4	60	安山岩	A地区 d—2 III層	小破片。
50	18.2	10.0	7.2	919	安山岩	A地区 d—2 不明	2類。破損している。上下面とも中央がなだらかに磨り減り、側面は丸い。下面に8個のくぼみがある。第Ⅶ—8図—7
51	16.1	11.5	5.6	776	安山岩	A地区 d—2 不明	3類。破損している。上下面は中央部が磨り減り、うすくなっている。上面には小さなくぼみが4個、下面には3個のくぼみがある。第Ⅶ—7図—3
52	13.0	12.8	2.7	748	安山岩	A地区 a—4 I層	5類。破損している。全面よく磨れている。
53	14.6	13.0	5.2	1047	砂岩	A地区 a—4 II層	4類。破損している。上面に1個、断面が三角形となるくぼみがある。やや厚みがある。第Ⅶ—8図—5 写図36—11
54	9.2	9.1	3.6	354	安山岩	C地区 表土層	1類。破損している。上下面とも中央がなだらかに磨り減り、側辺は丸い。
55	28.3	19.7	7.5	5400	安山岩	C地区 表土層	4類。破損している。上面は磨り減りくぼみが1個ある。下面は中央が盛り上がり、よく磨れ2個のくぼみがある。第Ⅶ—8図—1
56	11.2	9.2	4.8	468	安山岩岩	C地区 ウ 表土層	小破片。
57	17.2	11.3	5.1	997	砂岩	A地区 表土層	2類。破損している。上面はなだらかに磨り減り、側面は丸い。下面は中央部がやや磨り減り9個のくぼみがある。第Ⅶ—7図—4 写図36—10
58	14.7	15.2	6.6	1116	安山岩	A地区 表土層	3類。破損している。上面は中央部が磨り減り18個のくぼみがあり、下面には29個のくぼみがある。第Ⅶ—7図—2 写図36—12

第6表 石錘

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	8.1	5.8	2.4	160	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は楕円形。長軸の上下と側辺の左右をわずかに打ち欠いている。第Ⅶ—10図—8
2	8.5	8.1	2.9	280	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は卵形。厚みのあるやや大きめの石を利用。長軸の上下と表裏から打ち欠いている。第Ⅶ—10図—7
3	7.2	4.5	1.1	45	安山岩	A地区 b—5 I層	平面は卵形。うすく扁平。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—19
4	7.9	6.6	1.1	83	流紋岩	A地区 b—5	平面は卵形。うすく扁平。やや大きめ。長軸の上下と

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点層位	形態的特徴及び備考
						Ⅰ層	側辺の1部を小さく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—20
5	7.7	5.8	1.5	93	凝灰岩	A地区 b—5 Ⅰ層	平面は楕円形。扁平でやや厚みがある。長軸の上下を大きく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—22
6	8.5	6.3	1.1	90	安山岩	A地区 b—5 Ⅰ層	平面は楕円形。やや大きめ。側辺の1部を小さく打ち欠いている。
7	8.2	5.2	1.5	68	流紋岩	A地区 b—5 Ⅱ層	平面は楕円形。長軸の上下を大きめに打ち欠いている。第Ⅶ—9図—28
8	6.2	6.0	1.3	66	安山岩	A地区 c—5 表土層	平面は卵形。扁平な小石。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—25
9	7.9	5.3	3.0	168	安山岩	A地区 c—5 Ⅱ層	平面は長方形に近い。やや厚みがある。長軸の上下を大きめに打ち欠いている。第Ⅶ—10図—15
10	9.0	8.2	1.2	205	凝灰岩	A地区 d—5 Ⅰ層	平面は卵形。扁平でやや大きめ。長軸の上下を小さく打ち欠いている。第Ⅶ—10図—6
11	5.2	4.1	0.9	33	砂岩	A地区 d—5 Ⅱ層	平面は卵形。扁平でうすい。長軸の上下を表裏から打ち欠いている。第Ⅶ—9図—5
12	7.2	4.9	1.6	71	安山岩	A地区 d—5 Ⅱ層	平面は長方形。長軸の上下を浅く打ち欠いている。第Ⅶ—10図—11
13	4.5	7.1	1.1	70	流紋岩	A地区 d—5 Ⅱ層	約½が欠損。やや大きめで扁平。長軸の上部を小さく打ち欠いている。
14	4.7	4.5	0.9	34	安山岩	A地区 d—5 Ⅲ層	平面は楕円形。扁平な小石。長軸の上下と側辺の1部を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—11
15	3.5	3.3	0.8	18	砂岩	A地区 b—4 Ⅰ層	平面は隅丸方形。うすく扁平な小石。長軸の上下を大きく打ち欠き、側辺を細かく敲打していゆ。 第Ⅶ—9図—4
16	6.5	4.8	1.3	54	流紋岩	A地区 b—4 Ⅰ層	平面は楕円形。長軸の上下を大きく打ち欠いている。写図37—6
17	7.0	5.3	0.9	46	流紋岩	A地区 b—4 Ⅰ層	平面は楕円形。長軸の上下を小さく打ち欠いている。第Ⅶ—10図—20
18	6.8	4.1	1.4	43	凝灰岩	A地区 b—4 Ⅱ層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—10
19	7.5	4.1	1.8	80	流紋岩	A地区 b—4 Ⅱ層	平面は楕円形。長軸の上下をやや大きめに打ち欠いている。第Ⅶ—10図—13
20	6.3	5.0	1.3	65	安山岩	A地区 b—4 Ⅱ層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—18
21	5.6	5.4	1.2	52	凝灰岩	A地区 b—4 Ⅱ層	平面は方形に近い。長軸の上下と側辺を打ち欠いている。第Ⅶ—19図—21
22	5.8	4.6	0.9	28	凝灰岩	A地区 b—4 Ⅱ層	平面は卵形。側辺の一部ご打ち欠いている。
23	3.4	3.4	0.7	16	流紋岩	A地区 c—4 表土層	平面は隅丸方形。扁平な小石。長軸の上下を表から打ち欠いている。第Ⅶ—9図—2
24	8.1	6.6	2.4	165	安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は卵形。扁平だが厚みがある。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—4　写図37—5
25	4.4	7.1	2.0	76	流紋岩	A地区 c—4 Ⅰ層	大部分欠損。長軸の上部を表裏から打ち欠いている。
26	5.6	4.2	1.7	66	石英安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は卵形。扁平でやや厚みがある。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—24
27	7.1	5.3	1.4	71	安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—10
28	3.6	2.5	0.9	14	片麻岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は長方形。長軸の下部を少し打ち欠いている。
29	5.4	5.6	0.6	22	砂岩	A地区 c—4 Ⅰ層	平面は三角形に近い。うすく扁平。長軸の下部をわずかに打ち欠いている。

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
30	7.3	3.6	1.6	56	流紋岩	A地区 c—4 I層	平面は長方形。長軸の上下を大きく打ち欠いている。第Ⅶ—10図—14
31	7.3	6.9	3.3	184	流紋岩	A地区 d—4 表土層	平面は円形。長軸の上下と側辺の一部を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—3
32	4.6	4.2	0.9	27	安山岩	A地区 d—4 I層	平面は卵形。長軸の上下をやや大きく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—14
33	5.3	3.1	1.1	28	凝灰岩	A地区 d—4 II層	平面は細長い楕円形。うすく扁平な小石。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—15
34	7.0	7.3	2.1	138	凝灰岩	A地区 d—4 II層	平面は円形。扁平で厚みがある。上下を大きく打ち欠いている。
35	10.3	9.3	1.5	234	安山岩	A地区 d—4 II層	平面は卵形に近い。長軸の上下を打ち欠いている。
36	6.7	5.0	0.9	51	流紋岩	A地区 d—4 II層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—18
37	9.3	5.7	1.4	90	凝灰岩	A地区 d—4 II層	欠損部分が多い。長軸の上下と側辺の一部を小さく打ち欠いている。
38	6.1	5.9	2.3	155	安山岩	A地区 d—3 表土層	平面は円形。厚みを持つ。長軸の上下を表裏から打ち欠いている。第Ⅶ—10図—17
39	7.3	6.8	2.4	162	流紋岩	A地区 d—3 表土層	平面は楕円形。やや厚みを持つ。長軸の上下を念入りに打ち欠いている。第Ⅶ—10図—2
40	3.9	2.7	0.9	16	硬砂岩	A地区 d—3 I層	平面は楕円形。長軸の表裏を溝が一周している。有溝石錘A種。第Ⅶ—9図—1　写図37—1
41	7.0	3.8	1.2	37	流紋岩	A地区 d—3 II層	平面は細長い楕円形。長軸の上下に表裏から刻み目が入っている。切目石錘A種。第Ⅶ—9図—8　写図37—3
42	3.9	3.2	0.8	15	砂岩	A地区 c—2 I層	平面は卵形。うすく扁平な小石。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—3　写図37—2
43	5.2	4.8	1.0	43	凝灰岩	A地区 c—2 I層	平面は卵形。うすく扁平な小石。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—12
44	7.3	5.7	1.4	66	凝灰岩	A地区 c—2 I層	平面は卵形に近い。扁平。長軸の上下を小さく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—23
45	4.7	3.7	0.9	25	砂岩	A地区 c—2 II層	平面は長方形ち近い。扁平。長軸の上下を大きく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—7
46	5.1	4.3	1.3	39	安山岩	A地区 b—2 II層	平面は卵形。扁平な小石。長軸の上下を表裏から打ち欠いている。第Ⅶ—9図—9
47	5.3	4.7	1.7	61	凝灰岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。やや厚みのある扁平な小石。長軸の上下を大きめに打ち欠いている。第Ⅶ—9図—16
48	6.8	4.9	2.3	95	安山岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。やや厚みを持つ。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—17
49	8.0	3.7	1.4	65	砂岩	A地区 b—2 II層	平面は細長い楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—1
50	9.4	7.8	1.7	165	流紋岩	A地区 b—2 II層	平面は楕円形。長軸の上下をわずかに打ち欠いている。
51	3.5	4.8	1.2	27	安山岩	A地区 b—2 III層	約½を欠損。平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いたと思われる。
52	5.8	5.3	0.9	41	凝灰岩	A地区 b—2 III層	側辺の一辺がややくびれている楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—27
53	7.6	5.3	2.5	120	安山岩	A地区 b—2 III層	平面は楕円形。やや厚みがある。長軸の上下を大きく打ち欠いている。第Ⅶ—10図—16
54	8.9	6.8	2.4	217	流紋岩	A地区 b—2 III層	平面は楕円形。やや厚みがある。側辺に敲打を残すが打ち欠きは顕著ではない。
55	10.1	8.0	1.9	201	安山岩	A地区 c—2	平面は楕円形。側辺一帯に細かな敲打が残る。長軸の

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
						Ⅲ層	上部を打ち欠いている。
56	7.0	5.9	1.2	71	安山岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—21
57	7.8	6.9	1.2	105	流紋岩	A地区 d—2 表土層	平面は楕円形。約½を欠損。
58	5.4	4.4	1.4	39	安山岩	A地区 d—2 Ⅲ層	平面は卵形。断面はでこぼこしている。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—13
59	6.6	6.1	1.5	84	花崗岩	A地区 d—2 Ⅲ層	平面は卵形。長軸の上下をやや雑に打ち欠いている。第Ⅶ—10図—12
60	9.8	9.1	1.4	145	安山岩	A地区 a—4 Ⅰ層	平面は卵形。長軸の上下を打ち欠いている。
61	6.2	5.3	1.4	76	安山岩	C地区ア、イ 包含層	平面は卵形に近い。長軸の上下を大きく打ち欠いている。第Ⅶ—9図—26
62	5.8	5.7	1.2	63	凝灰岩	C地区ア、イ 包含層	平面は不正円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—29
63	5.3	2.9	0.6	14	砂岩	C地区　エ 包含層	平面は楕円形。長軸の上下及び側辺の一部を打ち欠いている。第Ⅶ—9図—6
64	7.7	5.5	2.3	142	流紋岩	C地区　エ 包含層	平面は楕円形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—5
65	5.3	3.9	0.7	23	流紋岩	C地区　エ 包含層	平面は卵形。側辺を所々小さく打ち欠いている。
66	5.8	5.3	1.6	73	安山岩	C地区 表土層	平面は卵形。長軸の上下を打ち欠いている。第Ⅶ—10図—19　写図37—4
67	8.2	8.8	2.5	311	流紋岩	C地区 表土層	平面は隅丸方形。扁平で厚みを持つ。長軸の上下を大きく打ち欠いている。
68	1.9	2.8	1.2	9	砂岩	A地区 表土層	平面は卵形。約½を欠損。長軸の上部と側辺の上部を打ち欠いている。
69	6.9	5.4	1.3	66	凝灰岩	A地区 表土採集	平面は楕円形。長軸の上下と側辺の一部を打ち欠いている。
70	6.5	4.6	1.9	97	安山岩	A地区 排土中	平面は楕円形。やや厚みを持つ。長軸の上下をわずかに打ち欠いている。

第7表　石　　鏃

番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	2.5	1.2	0.5	0.75	チャート	A地区 a—4 Ⅰ層	茎部が突出する有茎石鏃。側縁はわずかにわん曲している。第Ⅶ—11図—2
2	2.2	1.4	0.5	1.05	チャート	A地区 b—4 Ⅰ層	基部にごく浅い抉りを持つ無茎石鏃。ほぼ直線的な側縁を持つ。第Ⅶ—11図—4　写図37—10
3	1.6	1.4	0.4	1.05	チャート	A地区 c—4 Ⅰ層	先端部を欠いている有茎石鏃。やや厚みがある。第Ⅶ—11図—3
4	2.6	1.2	0.4	0.35	チャート	A地区 d—3 不明	茎部のつくり出しが明らかでない菱形鏃。側縁はすべて直線的である。第Ⅶ—11図—1　写図37—7
5	2.6	1.5	0.5	1.20	チャート	A地区 b—2 Ⅲ層	基部に抉入のある有茎石鏃。身部は2と似ていて、側縁は直線的である。第Ⅶ—11図—5　写図37—11
6	1.4	1.1	0.3	0.80	チャート	A地区 c—2 不明	抉りのやや深い無茎石鏃。側辺はややわん曲している。先端部はとがっている。第Ⅶ—11図—6　写図37—9
7	1.5	0.9	0.3	0.30	チャート	A地区 不明	基部のつくり出しが明らかでない木の葉形。小型。側縁に細かな調整を加えている。晩期。第Ⅶ—11図—7　写図37—8

第8表　剝　　片

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	7.3	2.7	0.9	10.3	チャート	A地区 b—5 I層	自然面を残す。第Ⅶ—11図—2　写図37—13
2	1.7	1.5	0.6	1.6	チャート	A地区 b—4 I層	石鏃未製品なのか剝片と石鏃と利用したものかは不明。第Ⅶ—11図—6
3	2.9	1.5	0.3	1.4	黒耀石	A土区 b—4 I層	第Ⅶ—11図—5
4	2.7	1.8	0.6	1.9	チャート	A地区 c—4 表土層	2と同様に石鏃未製品か剝片と石鏃に利用したものかは不明。第Ⅶ—11図—7
5	4.6	3.5	0.5	9.7	チャート	A地区b・c-2 II層	自然面を残す。第Ⅶ—11図—4
6	4.1	2.0	0.6	4.0	安山岩	A地区b・c-2 III層	第Ⅶ—11図—1　写図37—12
7	4.6	1.9	1.1	12.1	頁　岩	C地区エ、オ	自然面を残す。第Ⅶ—11図—3

第9表　石　　匙

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	8.2	4.4	0.8	27.2	安山岩	A地区 b—5 I層	横型。全体的に入念な押圧剝離による調整を施す。裏面に自然剝離面を残す。第Ⅶ—11図—1
2	10.3	3.2	1.9	57.5	安山岩	C地区　ウ包含層	縦型。第Ⅶ—11図—2　写図37—14

第10表　石　　棒

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	8.8	4.1	3.0	173	片麻岩	A地区 b—4 I層	全面よく研磨されている。やや扁平な断面を示す。破損している。第Ⅶ—11図—5
2	11.5	4.7	2.9	176	結晶片岩	A地区 c—4 I層	破損している。全面よく研磨されている。第Ⅶ—11図—3　写図37—17
3	9.2	3.8	2.8	156	結晶片岩	A地区 d—4 I層	破損している。全面研磨されている。第Ⅶ—11図—4　写図37—15

第11表　石　　剣

番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	12.0	3.4	1.2	90	結晶片岩	A地区 a—4 I層	破損している。表面に長軸と平行に刻線が入っている。研磨良好。第Ⅶ—11図—6　写図37—18
2	5.3	2.9	1.4	39	結晶片岩	A地区 b—4 I層	破損している。裏面は剝離している。研磨良好。
3	11.8	4.8	0.9	60	砂　岩	A地区 c—4 II層	破損している。扁平。研磨良好。
4	4.6	4.1	1.8	47	凝灰岩	A地区b・c-2 II層	破損している。研磨良好。
5	9.3	2.7	1.0	51	結晶片岩	A地区b・c-2 III層	破損している。両側辺とも細かな刻みによりギザギザしている。研磨良好。第Ⅶ—11図—7　写図37—16
6	6.7	2.5	1.5	39	粘板岩	A地区 c—2 I層	破損している。表面中央に長軸と平行に幅8cmの平らな削りあとがある。

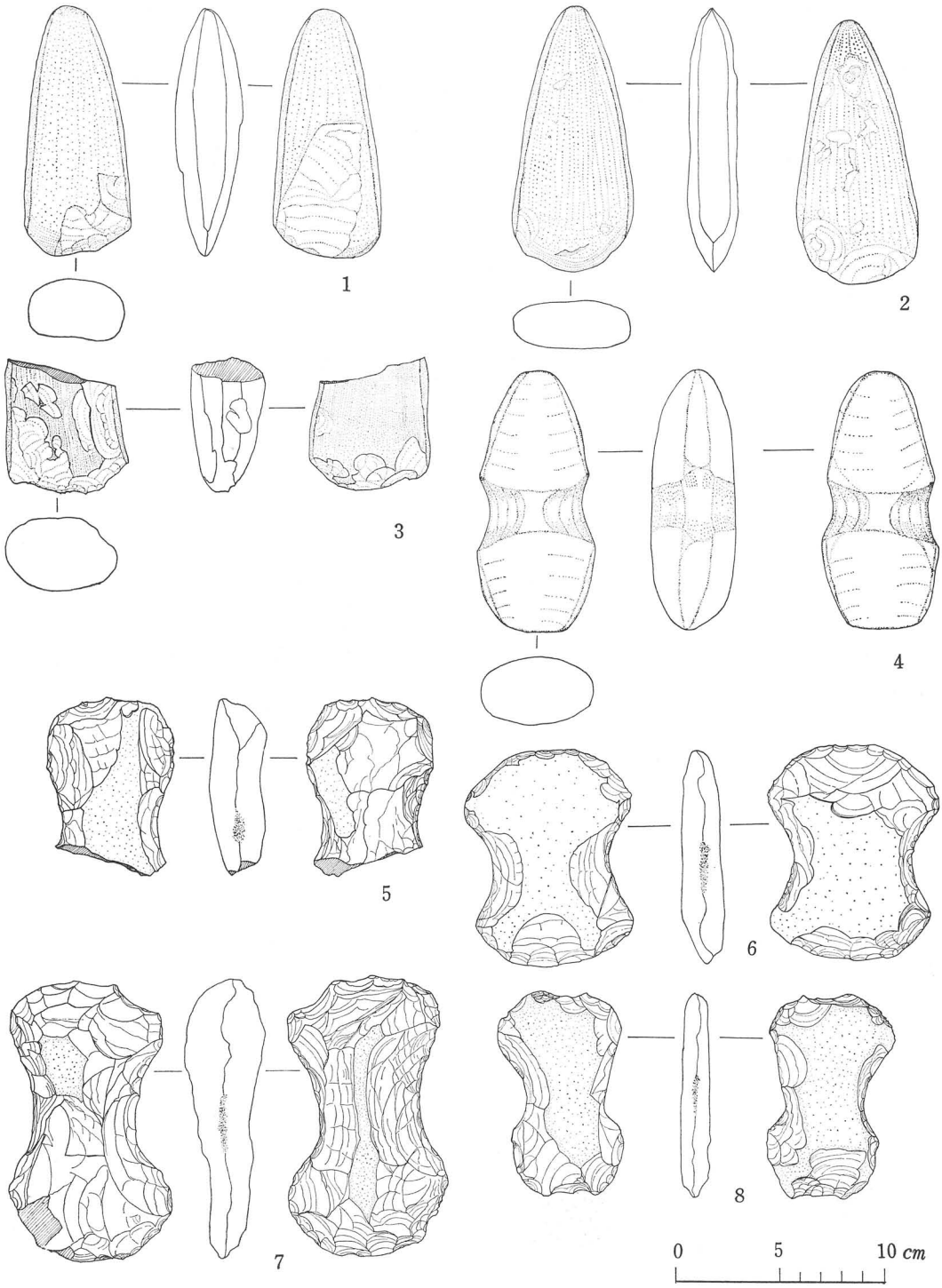
第12表　小　　玉

番号	外径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	1.0	0.6	0.6	0.65	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	濃い深緑色と白濁のところがある。透明感はあまりない。第Ⅶ—11図—1　写図37—19
2	0.9	0.6	0.7	0.65	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	やや明るい緑色。透明感も少しある。第Ⅶ—11図—2　写図37—20
3	0.8	0.6	0.6	0.55	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	うすい緑色と濃い緑色が混じっている。表面に傷がある。第Ⅶ—11図—3　写図37—21
4	0.7	0.5	0.5	0.35	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	3と同様。図版Ⅶ—11—4　写図37—22
5	0.7	0.4	0.6	0.30	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	ほとんどが白濁。第Ⅶ—11図—5　写図37—23
6	0.7	0.3	0.2	0.35	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	最も整った形。明るい透明感のある緑色。第Ⅶ—11図—6　写図37—24
7	0.9	0.5	0.8	0.35	ひすい	A地区 c—4 Ⅰ層	約3分の2が欠損。第Ⅶ—11図—7　写図37—25

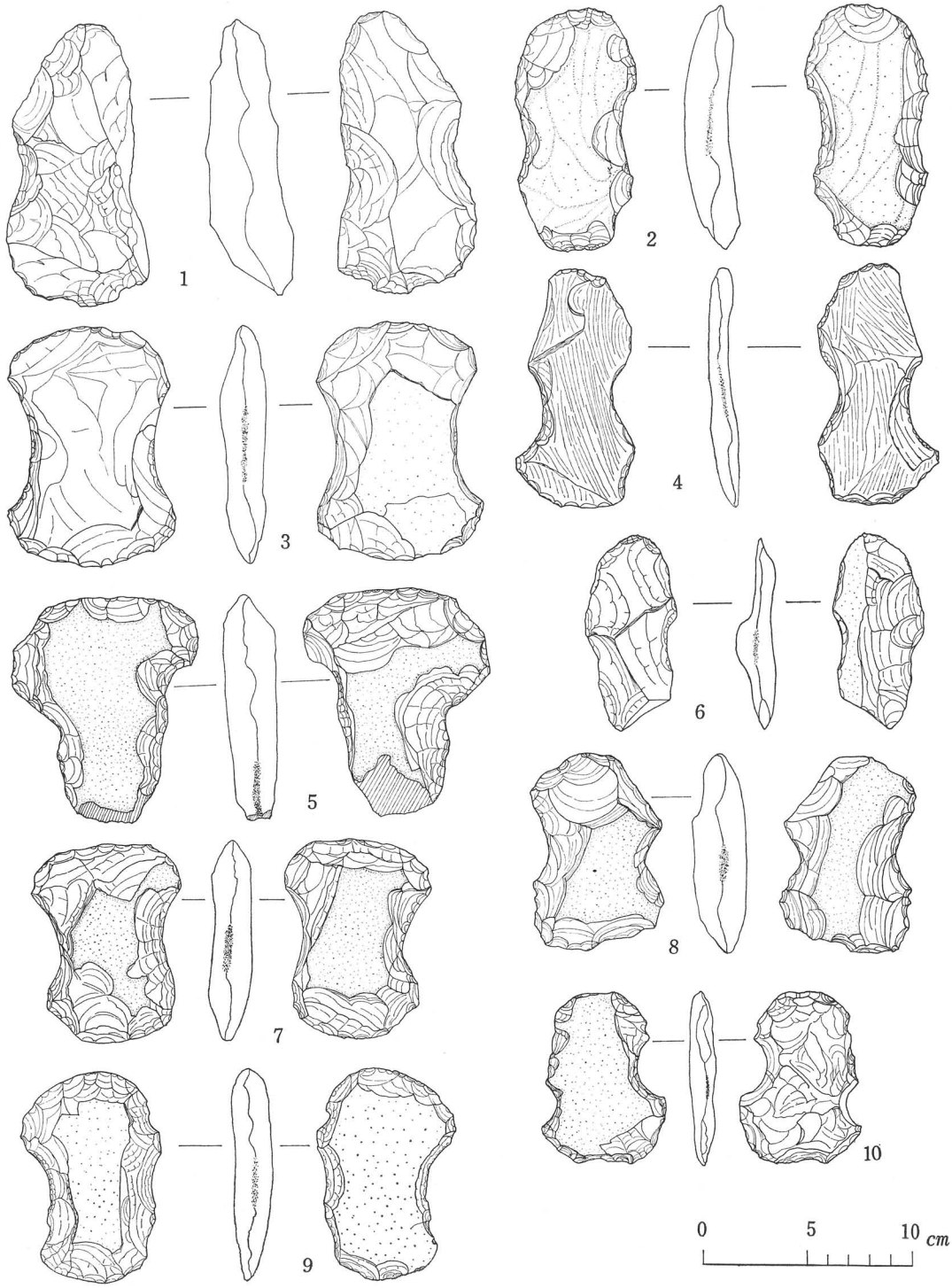
第13表　その他の石製品

番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
1	13.9	12.0	8.1	391	安山岩溶岩	A地区 b—5 表土層	上面にくぼみが7個。下面に6個ある。側面は丸い。
2	10.5	11.1	6.2	497	安山岩溶岩	A地区 b—5 Ⅰ層	全面よく磨れている。
3	6.6	4.9	1.2	46	流紋岩	A地区 b—4 Ⅰ層	平面は楕円形。一部欠損。扁平。表面に左右から刻線が浅く刻まれている。第Ⅶ—6図—1　写図36—4
4	7.2	6.6	2.6	174	粘板岩	A地区 b—4 Ⅰ層	全面よく研磨されている。第Ⅶ—6図—3
5	11.5	9.6	2.3	487	安山岩	A地区 b—4 Ⅰ層	扁平な板状。
6	9.7	7.7	1.9	204	安山岩	A地区 b—4 Ⅰ層	板状。
7	5.3	7.6	3.6	191	片麻岩	A地区 b—4 Ⅱ層	第Ⅶ—6図—2
8	4.7	3.9	1.5	39	粘板岩	A地区 c—4 Ⅰ層	全面よく磨れている。
9	9.7	8.2	1.6	167	砂岩	A地区 c—4 Ⅰ層	全面よく磨れている。
10	5.4	3.5	1.2	31	硬砂岩	A地区 c—4 Ⅰ層	小破片。
11	8.3	2.8	1.0	29	粘板岩	A地区 c—4 Ⅰ層	石棒の破片。研磨良好。
12	6.1	2.9	0.9	28	粘板岩	A地区 c—4 Ⅰ層	ユクと接合可能。
13	5.4	1.4	0.4	6	チャート	A地区 c—4 Ⅰ層	石棒か石剣の小破片。研磨良好。
14	8.8	4.7	0.8	60	安山岩	A地区 c—4 Ⅰ層	側辺が打ち欠かれている。
15	11.6	10.1	6.3	786	安山岩	A地区 d—4 Ⅱ層	上面にくぼみが2個ある。
16	4.9	3.1	0.8	18	粘板岩	A地区 c—2 表土層	石棒か石剣の破片。研磨良好。

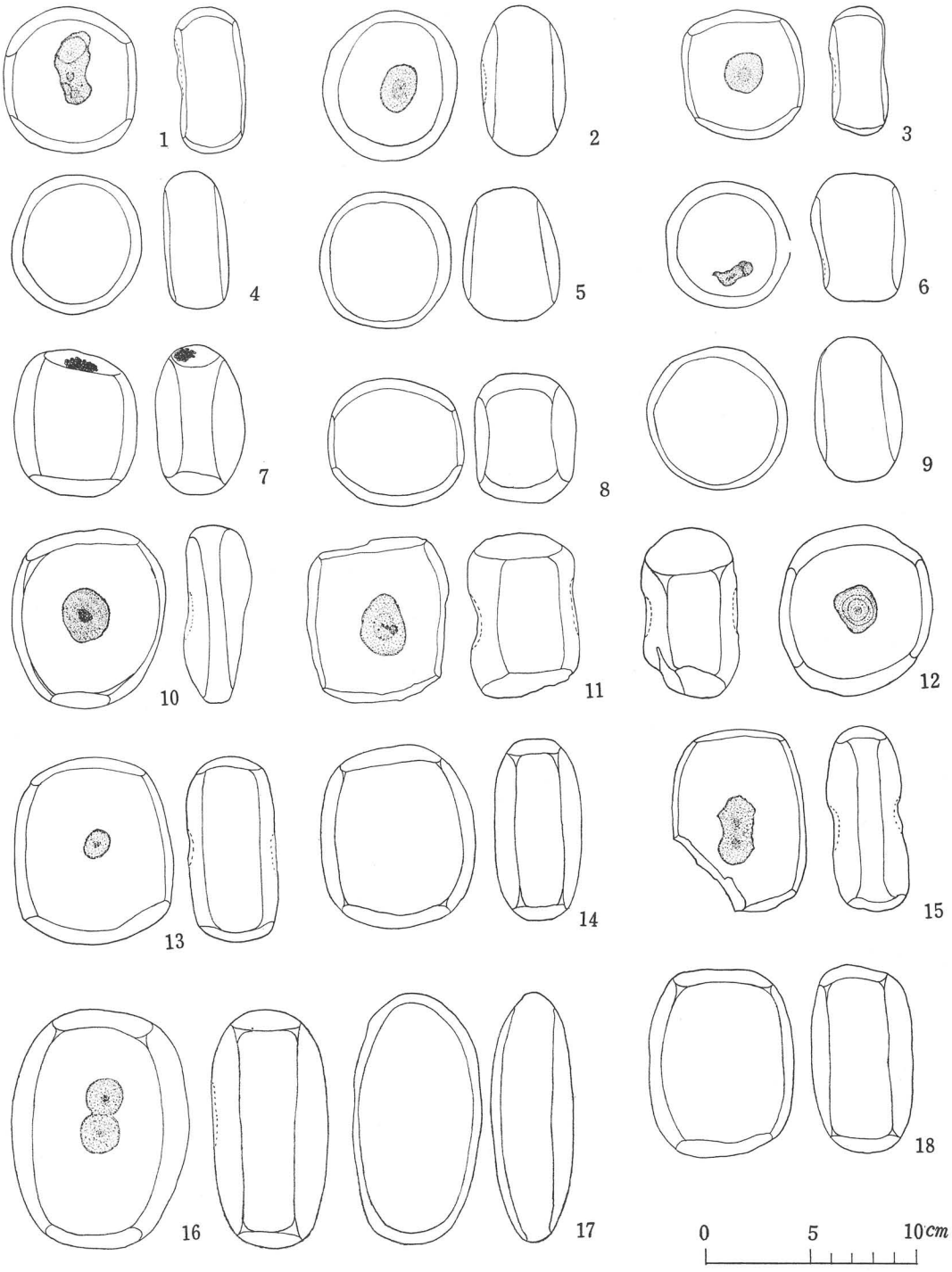
番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　質	出土地点 層位	形態的特徴及び備考
17	8.1	7.8	2.7	230	流紋岩	A地区b・c-2 II層	平面は円形に近い扁平。
18	6.0	3.7	2.5	56	安山岩	A地区b・c-2 不明	小破片。
19	15.2	10.3	9.5	19500	花崗岩	A地区 d—2 表土層	棒状を呈する。全面に多数のくぼみがある。
20	15.8	6.1	3.7	380	片麻岩	A地区 b—4 I層	細長い礫を素材とし、両端を鋭がらしてある。側面はわずかに抉りがある。第Ⅶ—6図—4　写図36—8



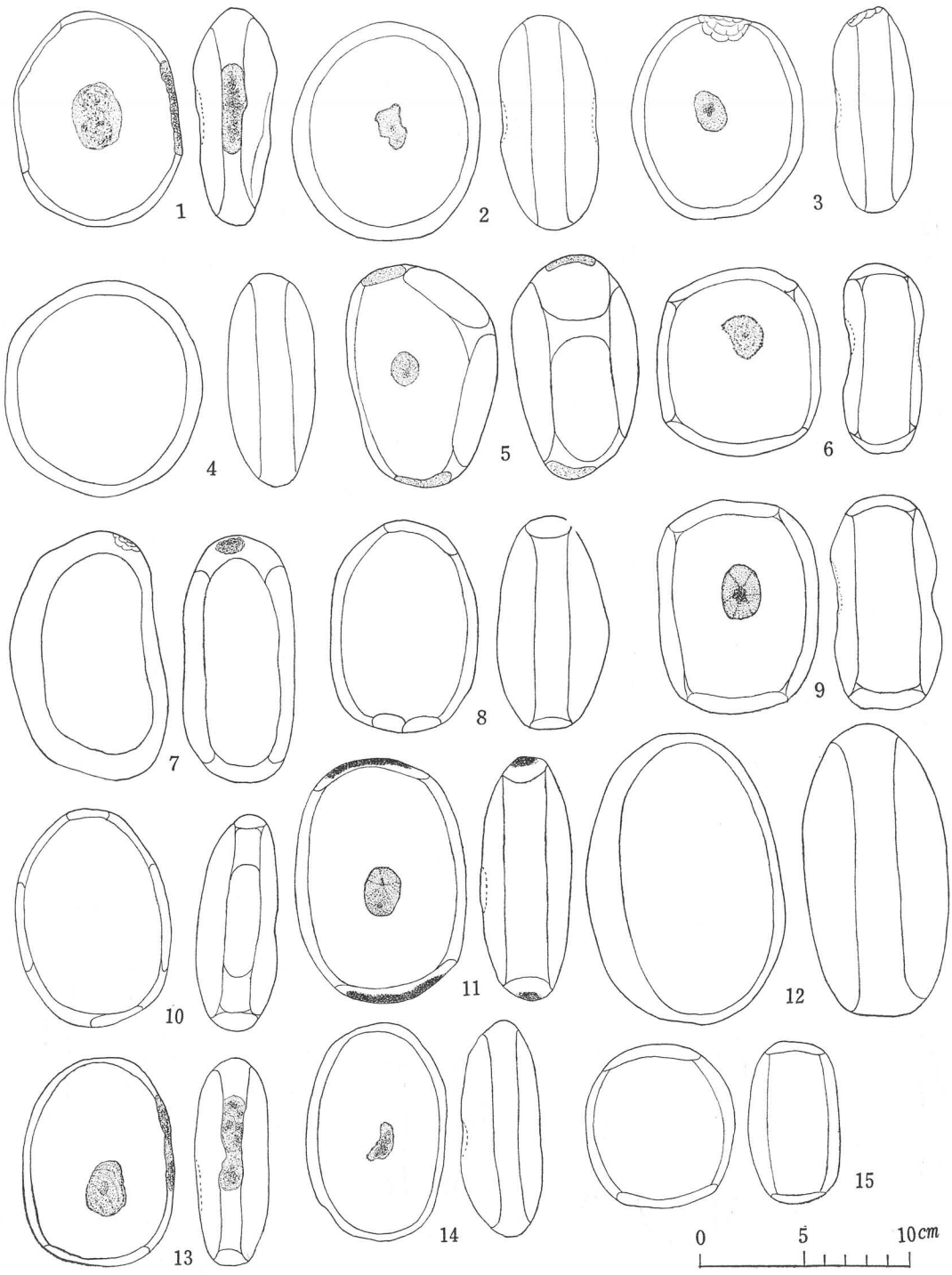
第 VII–1 図　磨製石斧・独鈷石・打製石斧



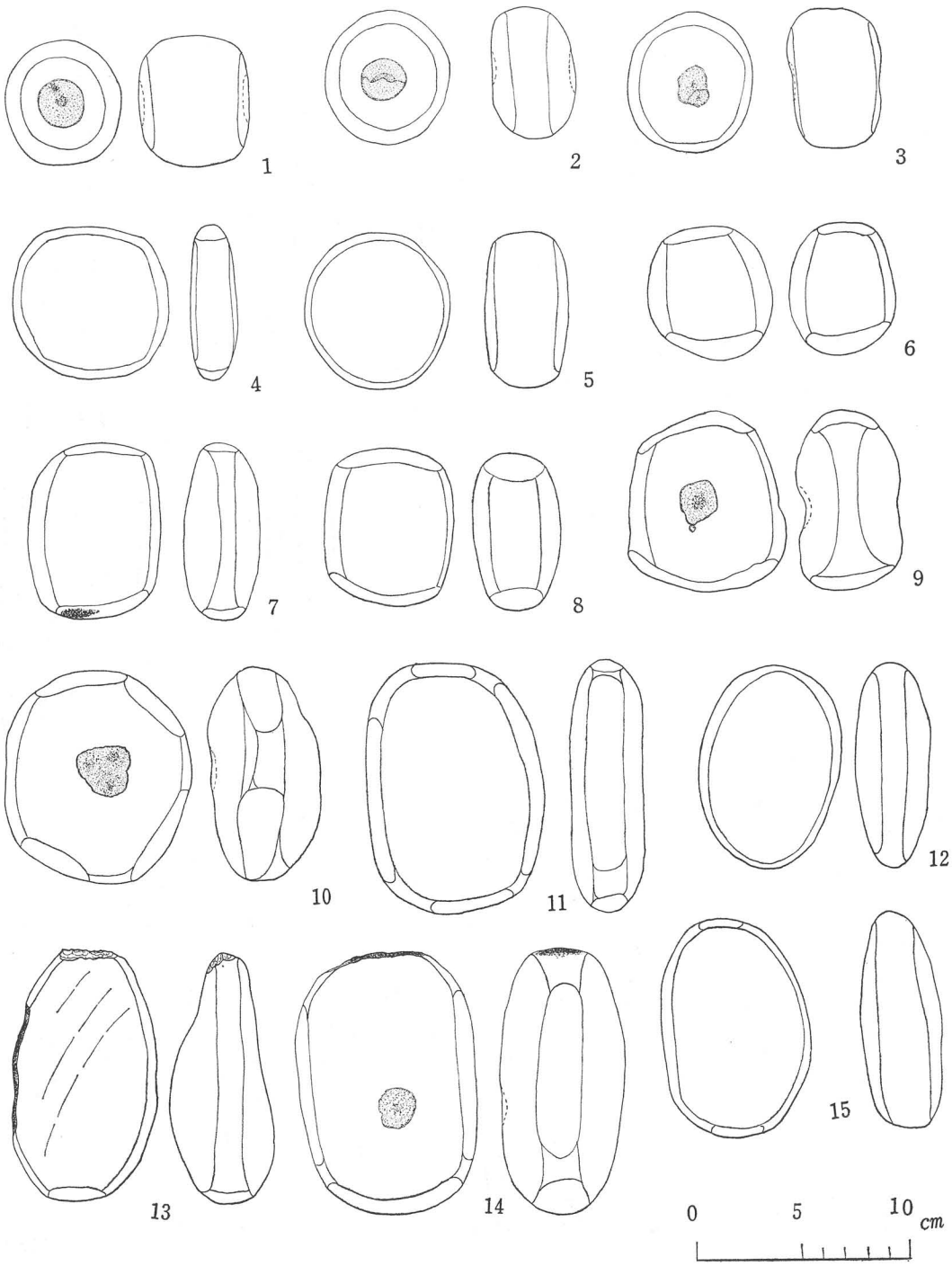
第 VII–2 図　打製石斧



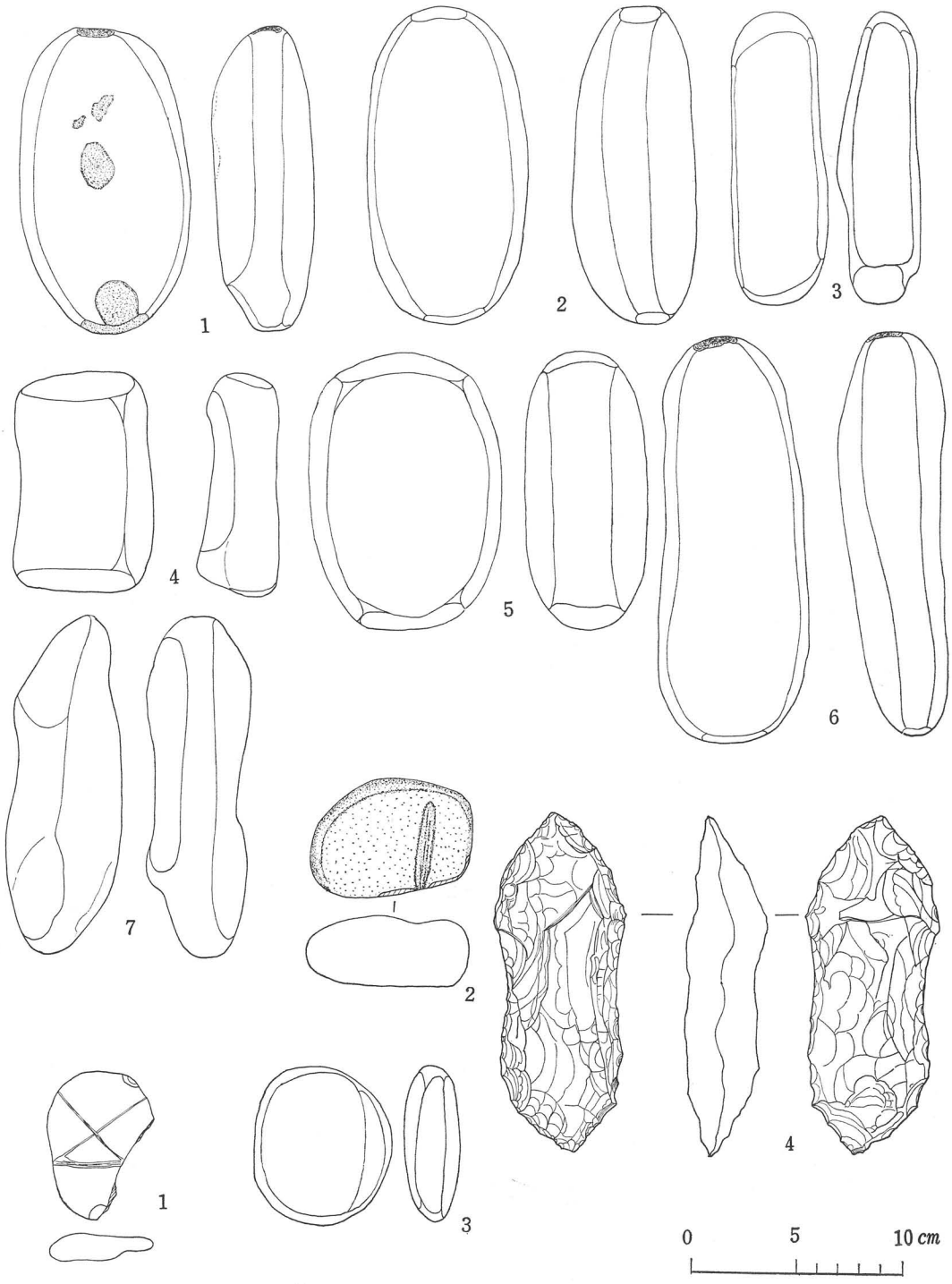
第 VII-3 図　磨石・敲石・凹石



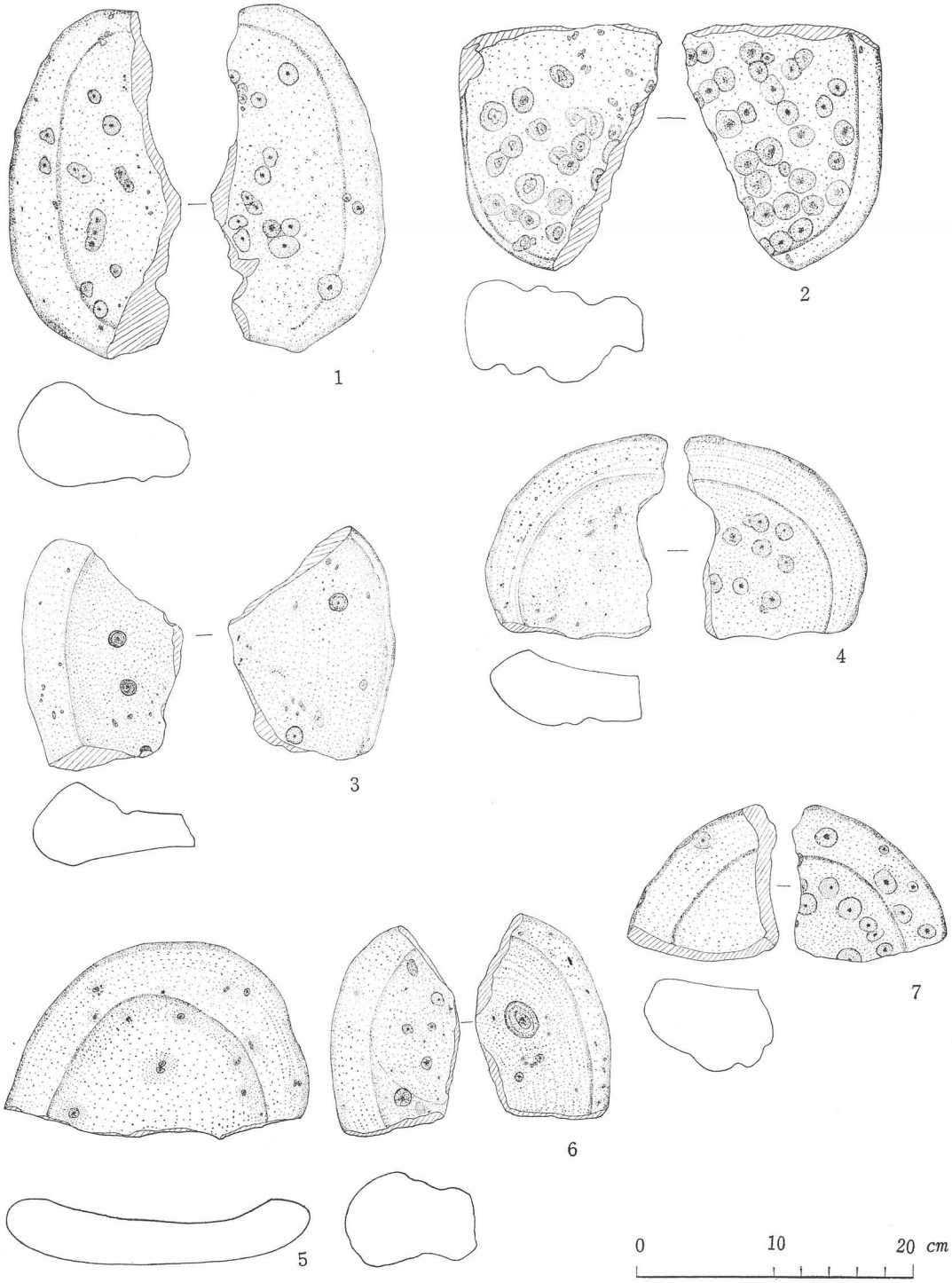
第 VII–4 図　磨石・敲石・凹石



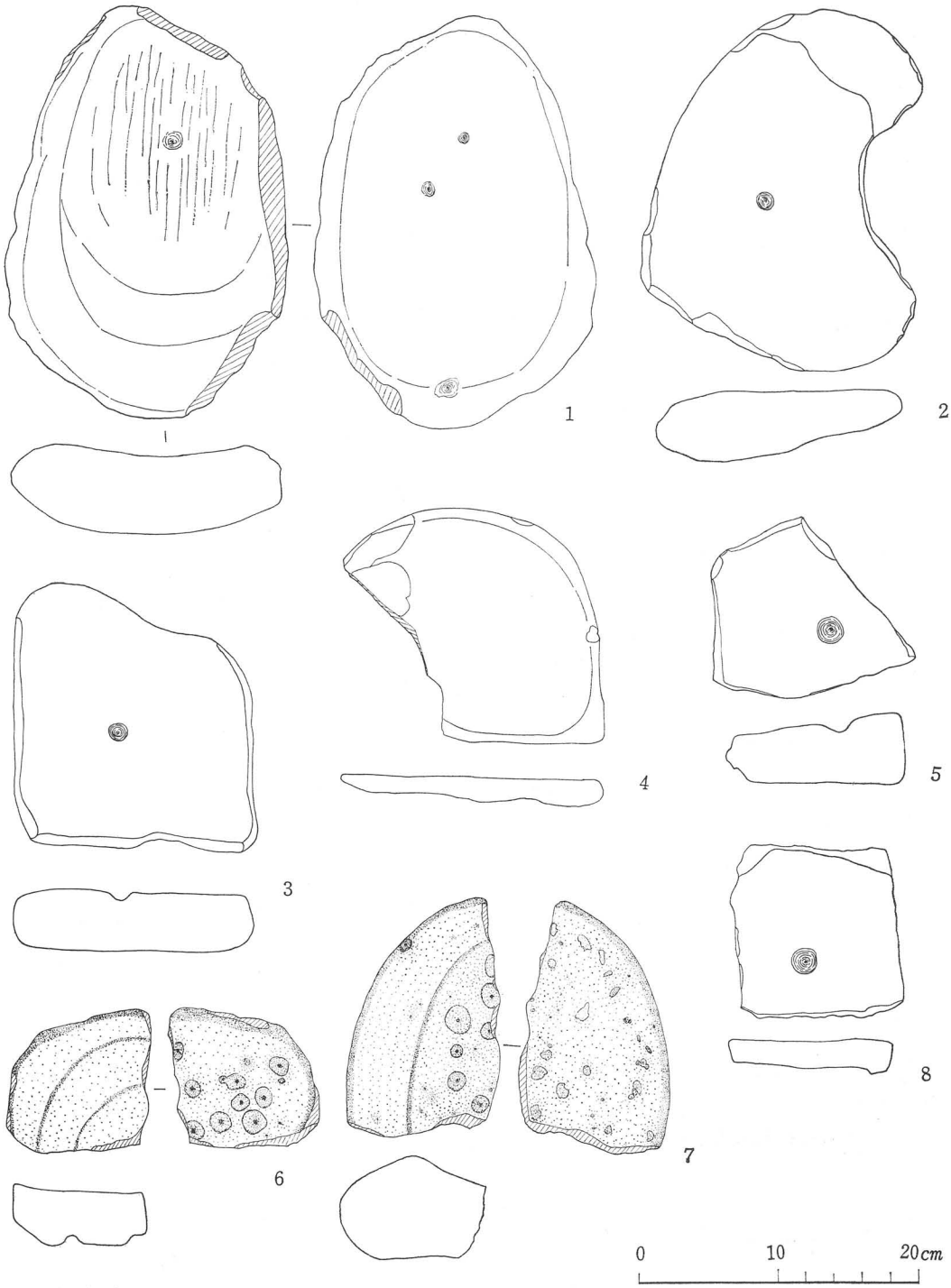
第 VII-5 図　磨石・敲石・凹石



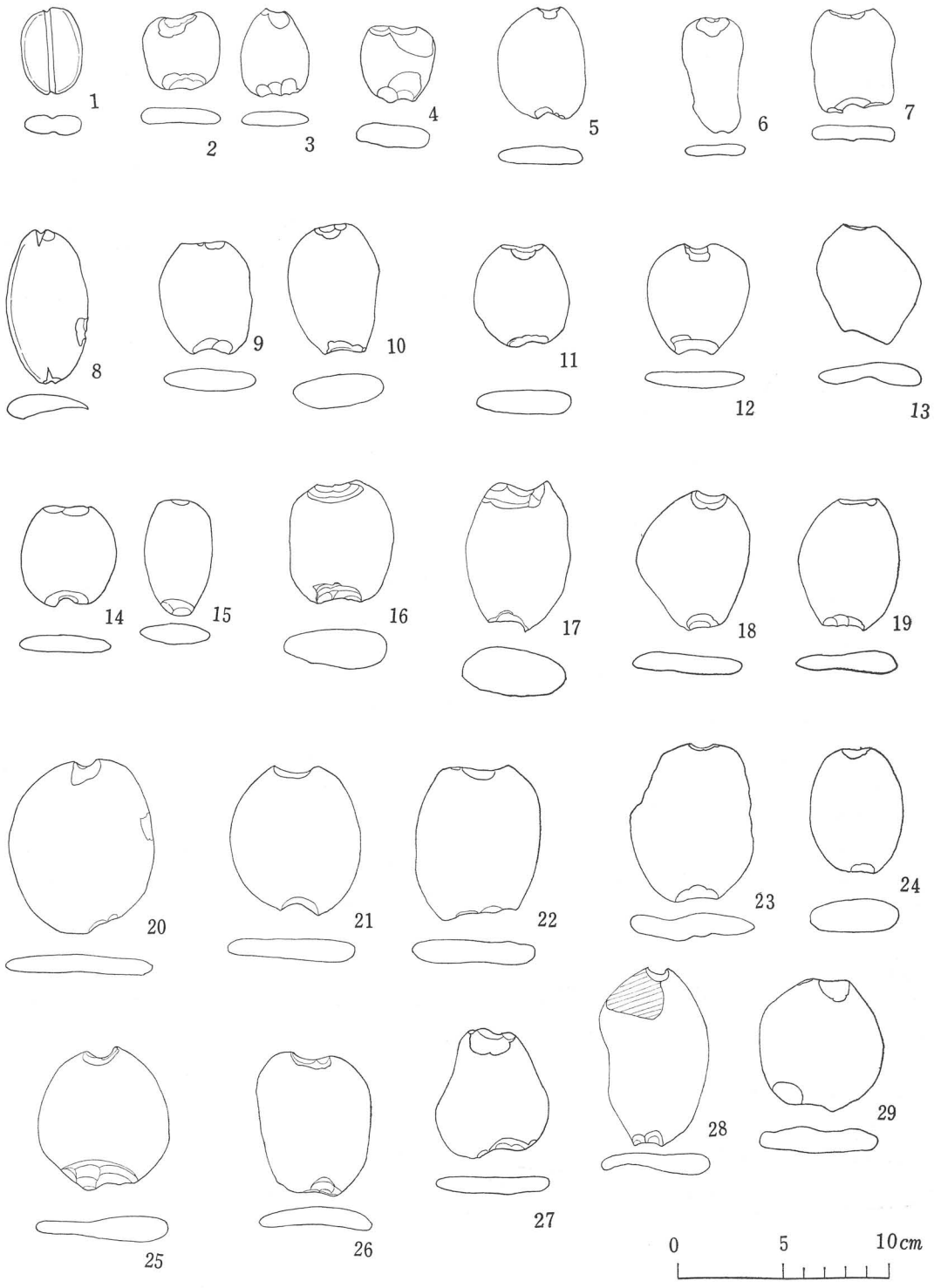
第 VII-6 図　磨石・敲石、その他の石製品



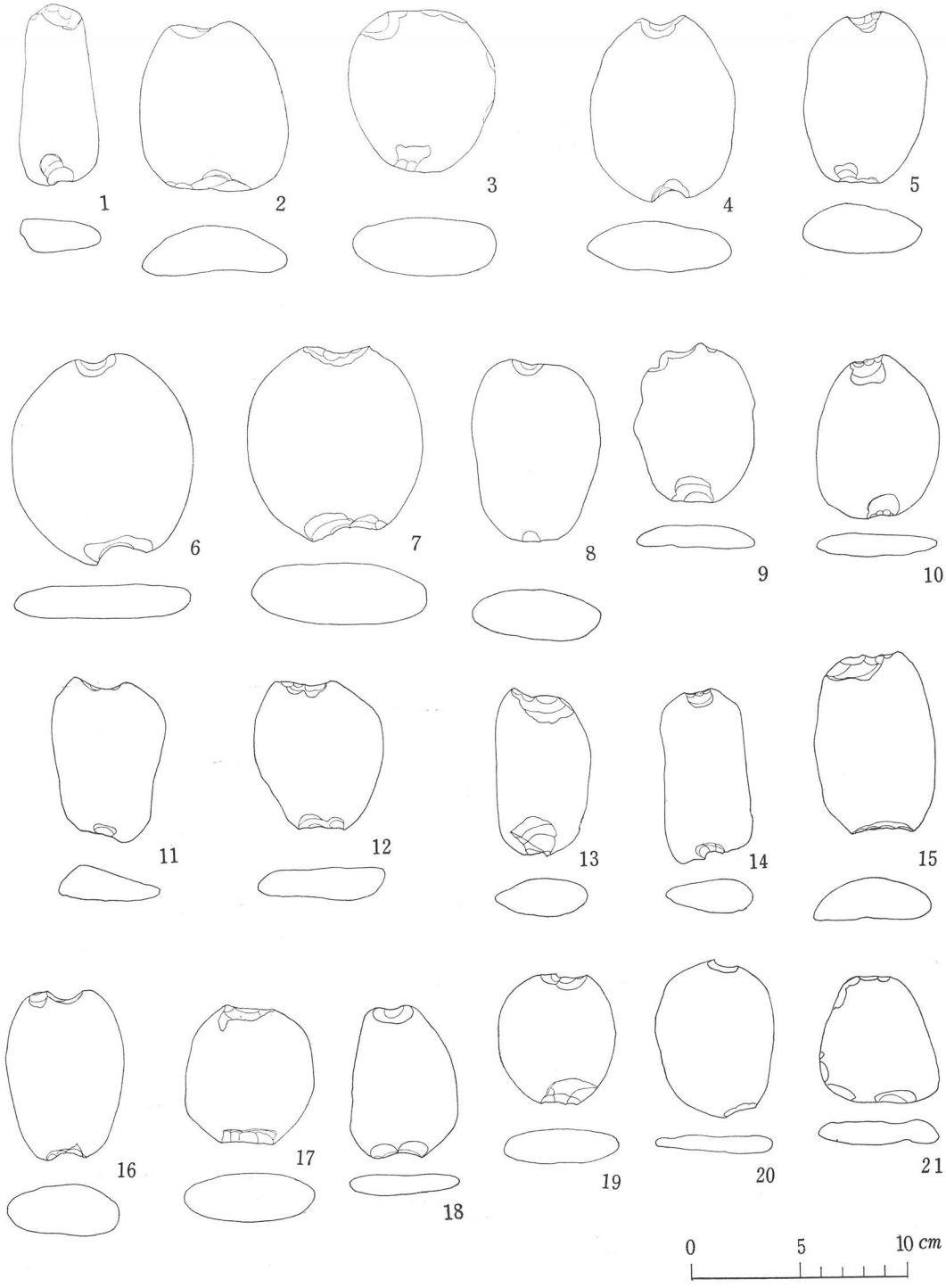
第 VII-7 図　石皿



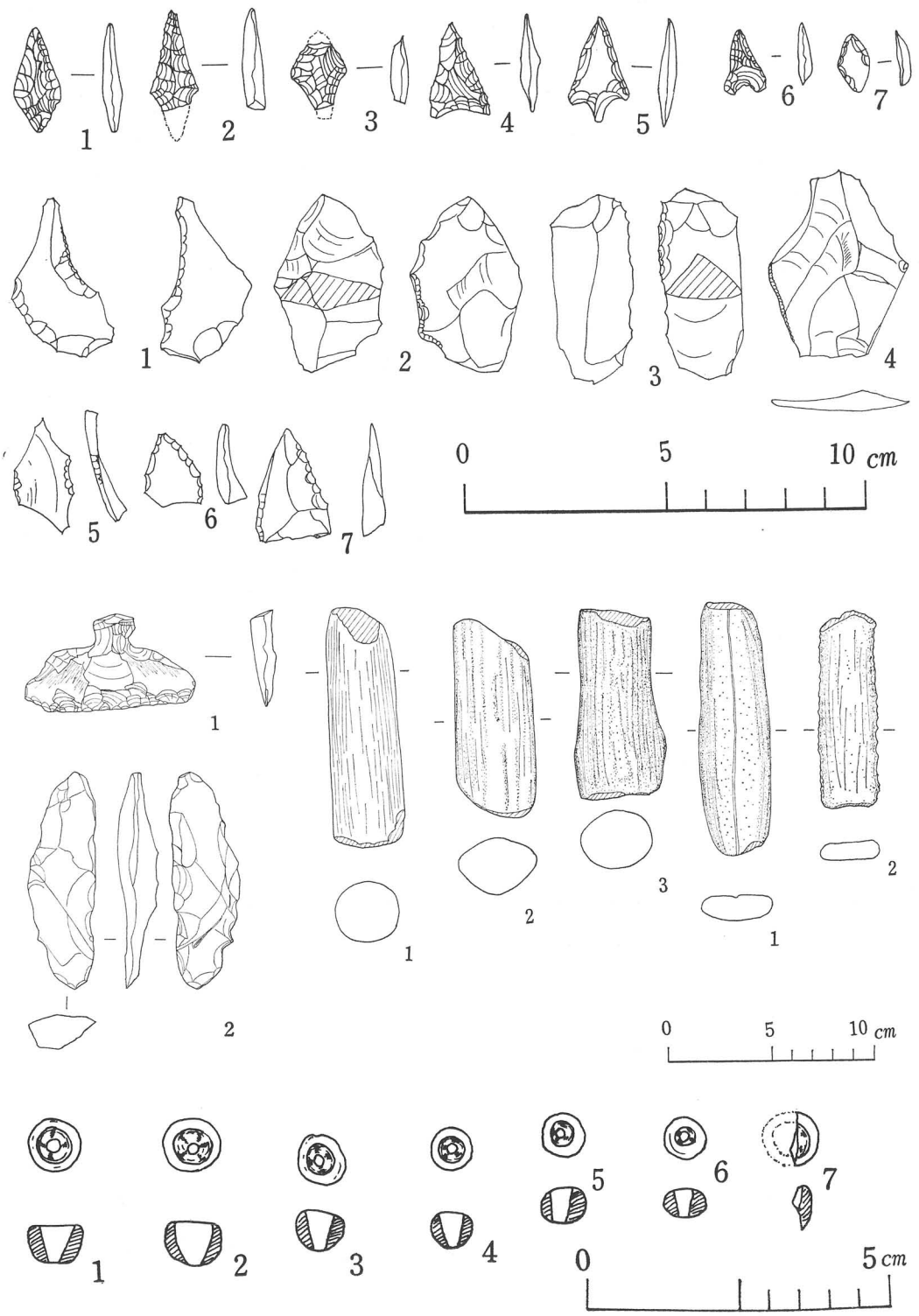
第 VII-8 図　石皿


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5
10cm

第 VII-9 図　石錘



第 VII–10 図　石錘



第 VII-11 図　石鏃・剝片・石匙・石棒・石剣・小玉

Ⅷ 総　括

結城並びに真壁・稲敷丘陵に挟まれた鬼怒川沖積地の東部最奥部には、小貝川、五行川、大谷川などによって形成された南北に細長い低地をみることができる。外塚遺跡は、大谷川東岸に営まれた縄文時代の遺跡である。

下館市が都市計画事業を進める中で、外塚神明神社周辺の工事中、昭和55年長岡芳氏によって発見され、翌56年8月実質2週間にわたる発掘調査が実施された。以後2年間にわたる整理期間を経て公にされることになったのである。

今回の調査で出土した土器を細分すると、縄文時代前期関山式から晩期まで約20数型式に及ぶ。これらのうち帰属する文化層が明らかなのは、縄文時代後期堀之内1式、加曾利B1式、安行1式、晩期安行3b式などである。出土した土器の時期には縄文人が居住していたと仮定するならば、現在流行のC^{14}測定法に基づく年代計算では、今から約5000年から2000年のもの長い期間、外塚地内に縄文人が生活し続けたことになる。ただし、長い期間一定の場所を占地し続けたのではない。その時々の地形・気象状況などの自然環境の変化に応じて、適当な場所を選択しながら生活していたと考えられる。

〈遺　構〉

明らかに人為的な働きかけによって作られたと言えるのは、C区で層序確認のための試掘溝断面に現われた土壙1基のみである。単に可能性で述べるならば、A区のb・c-4グリッドの安行1式、新地式、碧玉製玉の組合わせ、d-4グリッドの加曾利B1式の小形土器を伴う一括土器群、C区の安行3b式の土器群などもあげられよう。

問題は出土した膨大な土器、石器を作成し続けた縄文人はどこに居住・生活していたかということである。遺物の量から考えてかなり広い居住空間を必要としていたはずである。A区付近の標高が約32m、C区付近で32m前後であることを考慮すると、現在独立しているかに見える神明神社跡とC区付近は少々の高低差はあるものの居住空間としては、旧沼沢地を囲んで時間的には連続していたと予測される。時期に応じて居住、生活の場を変えながら、長期間にわたる遺跡が形成されたのであろう。

〈遺　物〉

今回の調査は、遺構が見当たらなかったため、遺物の発見、採集に力が注がれた。その中で縄文時代後期初頭から晩期に至る土器、土製品、石器が層位ごとに確認され、本地域の文化複合のようすをわずかながらも明らかにすることができた。また、分析は済んでいないが植物並びに動物の遺存体の破片も採集しており、外塚遺跡における縄文人の生存問題にかかわる食生活の一端を覗き見る資料を得たことも大きな収獲であった。

外塚遺跡に見る縄文人の食生活は、縄文時代の象徴ともいえる「狩猟と採集」のようである。周辺に生えている堅果植物の実や食用青菜を採集し、丘陵地帯に潜むシカ、イノシシの類を追い、五行川

や近辺の小河川、沼沢地の魚類、貝類、甲殻類を採っては腹を満たしていたと想像される。外塚遺跡の食生活の仮説が縄文時代を通して一般的であったと決定してしまうのは早計である。縄文時代数千年間の中には、縄文人の経済観念を転換させる機会が幾度もあったと予測される。従って外塚遺跡も状況に応じて拡大、縮小を繰返したことであろう。しかし、今回の整理ではそれを確認できるまで分析する余裕がなかった。残念である。

〈今回の調査の問題点と発展〉

水の浸透によって困難を極めた外塚遺跡C区の調査を体験して感じた問題点を幾つか上げて今後の調査の参考にしたい。

低地遺跡では、湧水の処理が最大の課題となる。今回は排水ポンプのみに依存していたが、トレンチの側壁から浸み出す水を排水しきれなかった。調査の精度を上げ、効果を高めるためには経済的負担は大きくともトレンチの壁に鉄板を打ち込み、湧水や土砂の崩壊を防がなければならないことを痛感させられた。また低地（泥炭地）遺跡を調査する場合には、一般的発掘技術者はもちろん土壌、花粉、種子、動物遺存体などの分析を担当するスタッフを待機させ、総合的な見地からの調査を試みなければ、発掘調査という名目による破壊行為は償えない。下館付近には、今後も数多くの低地遺跡が発見、確認されるはずである。是非とも発掘調査を実施しなければならなくなってしまった時は今回の反省を十分生かしてほしいものである。

昭和56年8月の調査は、外塚遺跡のほんの一部を発掘したにすぎない。従って2年間にわたる史的復元作業が層序並びに遺物等の情報に基づくものであるからといって遺跡全体を類推するには材料不足である。今回の調査は、かつての外塚縄文人の生活、それを包括する文化圏の文化解明のプロローグである。今後の下館市を中心とする茨城県西地区の文化財行政、考古学的研究の発展と充実を期待して止まない。

（今橋浩一）

〈委　託　研　究〉

外塚遺跡の地理的環境の復原

立命館大学大学院地理学専攻
大　西　智　文

外塚遺跡は茨城県下館市大字外塚字羽黒山に所在している。下館市は県西部にある城下町で、「下館商人」など商業の地としても知られている。市の西部には栃木県帝釈山地に源を持つ鬼怒川が流れ、東部には栃木県那須郡の丘陵地帯から発する小貝川が流れている。両河川の間には小貝川の支流である五行川と大谷川が段丘を切る形で流れている。これら四河川は共にほぼ北から南に流下する為、下館付近の地形は南北に伸びる狭長な地形面から構成されている（第１図）。

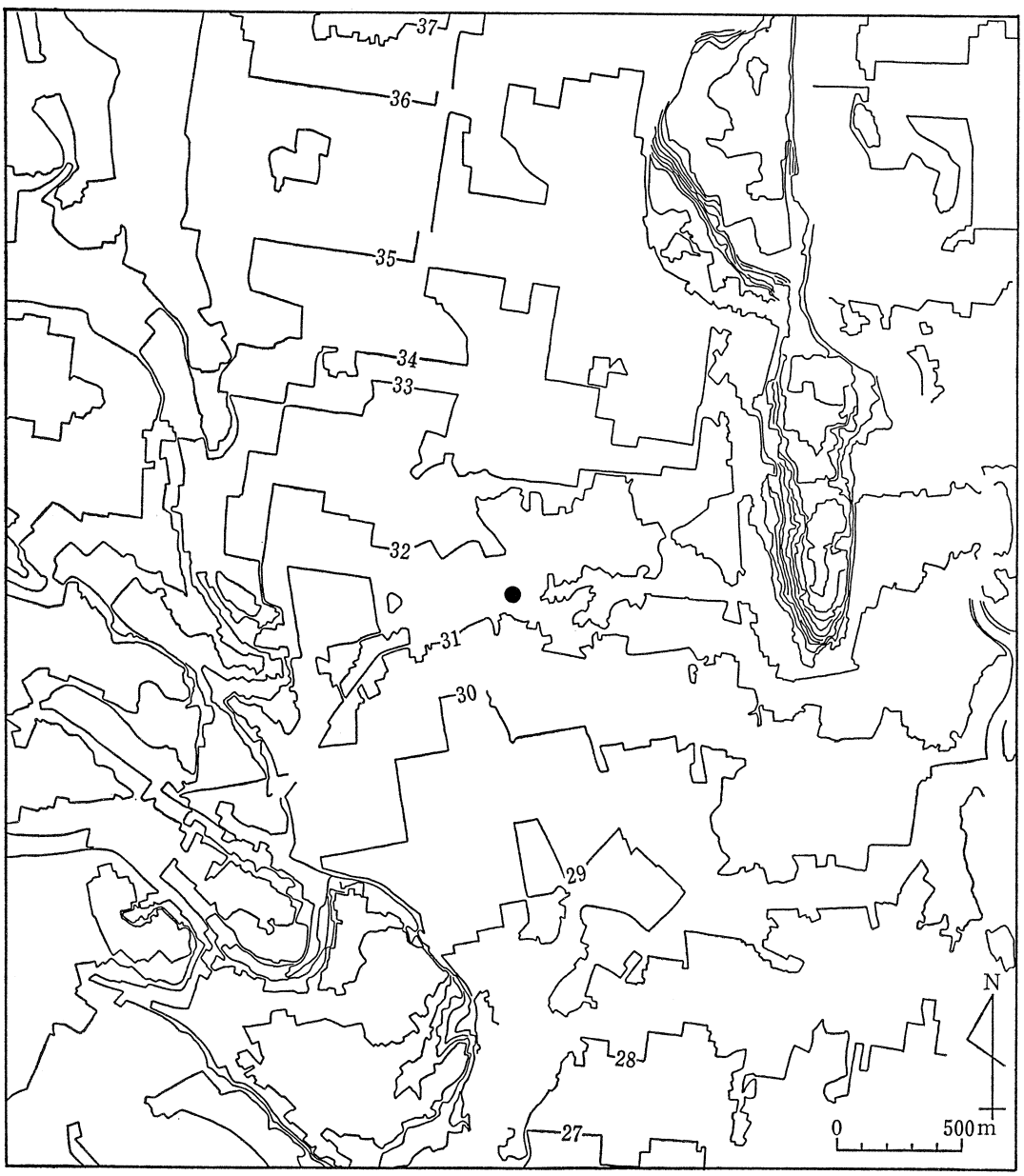
第１図　地域概念図

その中でも外塚遺跡は大谷川流域の低地に立地しており、小字名ともなっている羽黒神社を中心に展開している。土地区画整理以前、遺跡周辺は畑地あるいは水田として利用され集落は立地していなかった。遺跡の西約 150 m に外塚の中心集落となっている塚越があり、さらにその西方 150 m の位置に大谷川が流れている。大谷川は下館市最南部において、小貝川と合流する小河川である。ただし遺跡周辺の地形はこの大谷川によって形成されたと考えられる。そこで、大谷川流域を中心

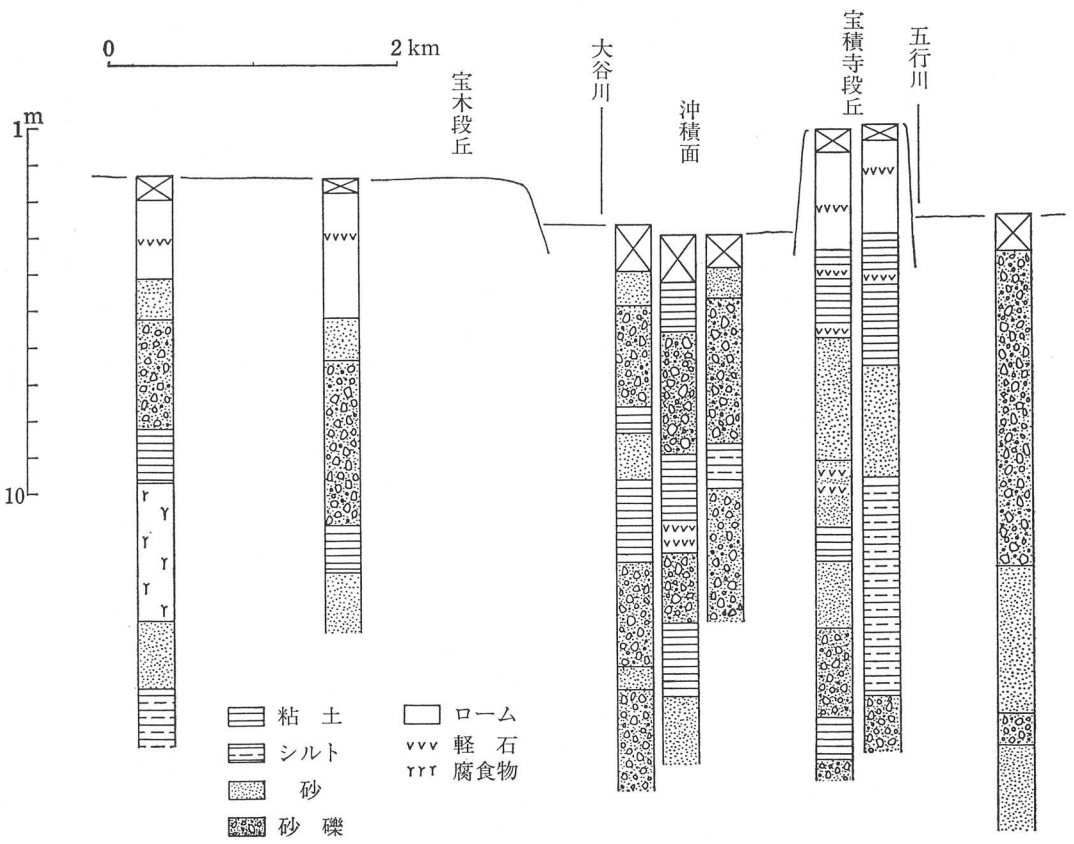
第２図　遺跡周辺の概念図

とした周辺の地形について、検討を加えてゆく事とする（第2図）。

まず、大谷川流域の地形を概観する為，下館市役所発行2500分の1都市計画図（昭和52年版）及び，同所発行500分の1土地区画整理事業に関する図（昭和53年）を利用して，等高線を抜き出し、1m等高線図を作成した（第3図）。さらに現地踏査によって、三つの地形面を確認した。すなわち、高度の高い面から順に、下館市街をのせるもの、次に西部の飯島周辺にあるもの、そして下館市街を取り囲むように分布するものである。前二者については段丘面、後者については氾濫原としての予察が可能である。ただ氾濫原については土地区画整理やミニ開発など人工改変を大幅に受けており、微



第3図 1m等高線図



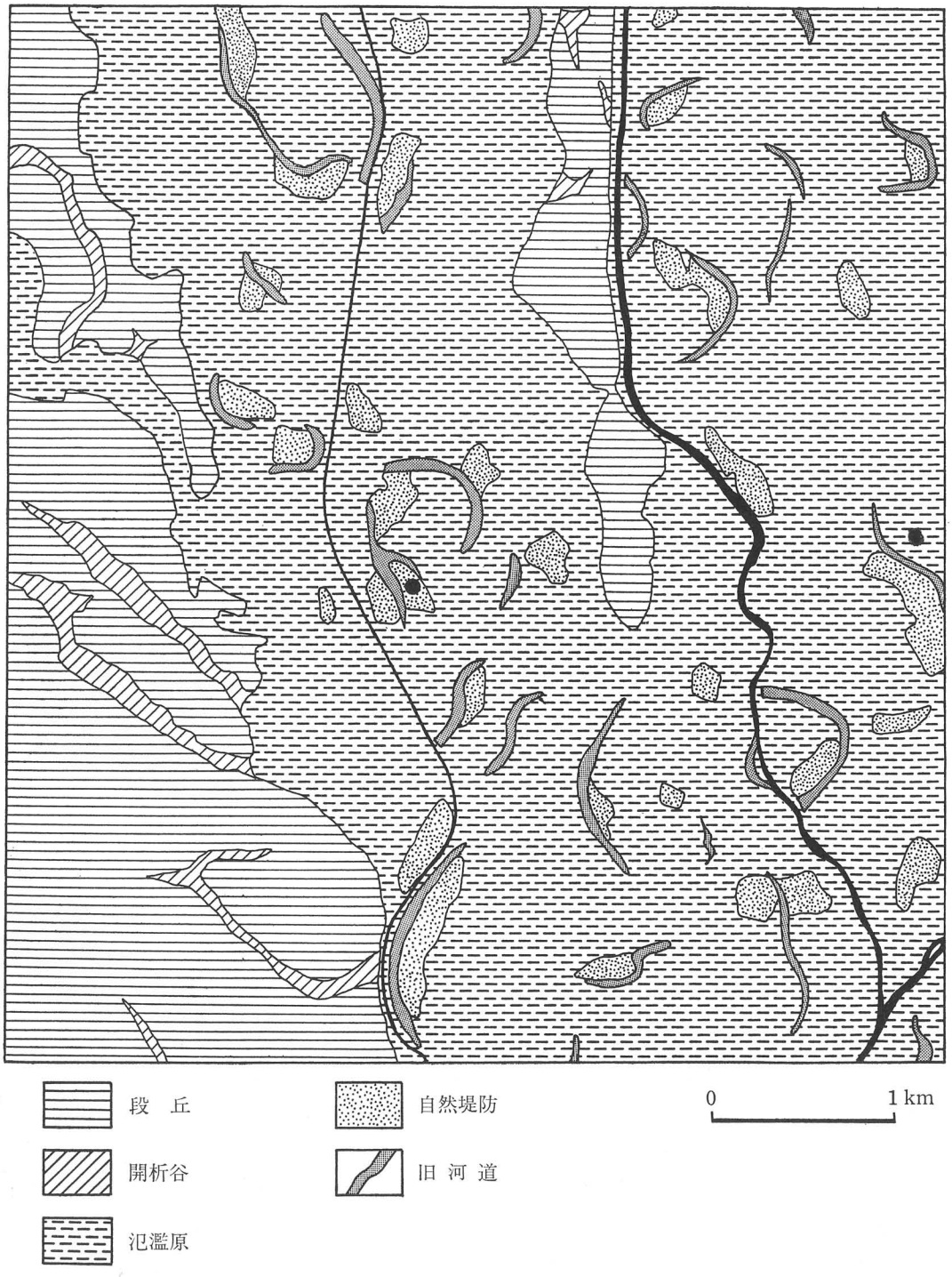
第4図　ボーリング柱状概念図

地形の観察について少なからず制約を受ける。この氾濫原のうち、大谷川流域について見ると、西から東に向かって緩やかに傾斜している様子が読み取れる。一方、五行川流域については、五行川が下館市街を乗せる段丘の東側に沿って比高 5～10 m で崖を形成しつつ、氾濫原も下刻している傾向がわかる。

次に、これら地形面の性格を明らかにする為、ボーリング柱状図（第4図）を集め、分析を行なった。その結果、下館市街が立地する段丘については宝積寺段丘と考える事ができる。まず上層から層厚 1 m 内外で黄褐色ローム層を持ち、次に鹿沼軽石層を挟み粘性の強い火山灰が存在し、層厚 8～9 m にわたって軽石を含みつつ砂～シルトが堆積している。これらは宝積寺段丘の特徴を示している。宝積寺面は南関東において下末吉面に対比する事ができる。

次に西部に分布する段丘については、宝木段丘と考えられる。すなわち表土 1m 下内外に黄褐色がかったローム層をのせ、鹿沼軽石層を挟んで粘性の強い茶褐色の火山灰を持ち小礫を含む砂層～砂礫層（段丘礫層）に移する。この宝木段丘では宝積寺段丘に見られた層厚 8～9 m にわたる砂～シルト層を持たない。したがって宝木段丘は宝積寺段丘より年代が新しく、南関東の武蔵野面にほぼ対比されている。

最後に氾濫原については、五行川、大谷川流域共にローム層を持たない事から沖積面であると言える。表土には小礫を含みながら、二次堆積の火山灰質粘土～シルトを持ち、層厚 1～1.5 m で細砂～



第5図 地形分類図

粘土、さらに3～4 m の砂礫層を堆積している。大きくわけてこの三層が沖積層であり、沖積層の深度は約6 m となる。ただし、五行川流域では約10 m となっている。沖積層基底礫層（BG）の深度については、水海道付近で約40 m、下妻付近では約 20 m であり、下館周辺では 6～10 m と高度を高めてゆく事となる。

結局、ボーリング柱状図を検討する事によって、1 m 等高線図で予察された三つの地形面はそれぞれ宝積寺面、宝木面、沖積面である事が明らかになった。そこで次に、外塚遺跡の立地する沖積面について詳細な分析を加える事とする。

沖積面を検討するにあたって、地形分類図を作成した（第5図）。その際、土地区画整理以前の景観を見る事のできる米軍撮影の空中写真を利用し、判読した。さらに表層地質の観察、小字名の検討や古絵図なども参考にした。小字については、たとえば「根古屋」ならば中世城館のあった場所を示し、微高地が推測できる。また「沼堀」「下河原」などは低湿地が予測できるのである。ただし、これらは傍証にしかならず、予察段階での利用にとどめた。

地形分類図についてまず、段丘に関して見る事とする。宝積寺段丘は平坦面を残し、連続性も良好である。開析は良く進んでおり、東西及び南端は沖積面によって削られている。開析谷についても広く浅いのが特徴である。一方、宝木段丘については比高があまり高くなく開析は進んでいる。段丘面は緩やかな起伏が多く見られる。土地利用としては共に畑地が主で集落も立地している。また一部水田化された地域がある。開析谷についてはすべて水田として利用されている。

次に氾濫原であるが、北部程乾燥しており、南部へゆくに従って湿地を呈する事が読みとれる。地表面には顕著な微起伏が少なく、極めて低平な地形面となっている。五行川の一部で下刻が認められるが、大谷川については殆んど読みとれない。地形分類図には土地区画整理後の流路を記入してあるが、整理以前の大谷川は曲流している事がわかる。なお大谷川流域については三角州性の谷底平野と言い換える事もできる。表層地質を見ると小礫～細砂～シルトが主体となっており、一見扇状地を思わせるが、大谷川は網状流しておらず、また流域の平均傾斜も 2.1‰ と緩やかであり三角州的性格を持っている。

旧河道については、氾濫原のほぼ全面にわたって認められるが、連続性は良くない。また同様に、旧河道は顕著なものが少ない。自然提防は氾濫原の中に島状に分布している。ほとんどは現・旧河道に沿って形成されており、その比高は約 0.5～1.5 m 位となっている。旧河道と同じく連続性はあまり良好ではない。自然堤防上は畑地として利用されている事が多く、その大部分は集落が立地している。外塚遺跡もこれら自然堤防上に存在する。外塚遺跡をのせる自然堤防については外塚在住古谷薫氏所蔵の明治6年作製の図面においても畑地と明記されており、周辺の水田とは対照的である。また周辺の水田では島畑が作られていたようで、極めて低湿だった事が推察できる。

この自然堤防は少なくとも縄文中期末までには形成され、遺物を包含した後、比較的静かな環境に置かれたようだ。それは包含層上にはあまり粗粒物質を乗せず、堆積量も多くないからだ。自然堤防の形成時期については諸説があるが、外塚遺跡の立地する自然堤防については縄文中期頃が考えられる。その後一部分浸蝕を受けながらも、微高地として現在まで受け継がれて来たようだ。ただ調査時すでに削平など現状改変が行なわれており、周辺の表層地質に関する資料が充分得られなかった。よって、遺跡をのせる自然堤防の拡がりや、他の微地形との関係はあまり明確にできなかった。

ここまで、外塚遺跡周辺の地形について検討を加えたが、明らかになった事をまとめてみよう。

(1) 遺跡は大谷川の形成する沖積面に立地する。

(2) 遺跡は沖積面上の自然堤防に立地するが、周辺の状況は大きな変化を受けず現在に至っている。

(3) 変化の少ない原因として、大谷川が小河川である事と、流域に大きな土砂供給地を持たない事があげられる。

以上、外塚遺跡の立地条件が明らかになった。

東日本では一般に縄文遺跡は丘陵、段丘上に立地し、沖積面に立地する事は少ない。その事実により、沖積面上の遺跡は軽視される傾向にあり、単なる上流からの流れ込みとして処理されたケースも少なくない。一方、西日本では丘陵、段丘上に立地するものの他、沖積面に立地する遺跡も数多く報告されている。有名なものとして、福井県鳥浜貝塚などのほか、今後の発掘が注目されている石川県真脇遺跡などがある。これら低地遺跡は縄文全期を通じて普遍的に存在していた事が明らかになっている。また、低地遺跡は丘陵、段丘上に立地する遺跡と違って、遺物の残存状態が非常に良好である。さらに自然遺物なども多く検出され、当時の生活を正確に把握する上で重要な資料を豊富に提供している。

外塚遺跡は東日本で現在確認されている数少ない低地遺跡の一つであり、重要性の高い遺跡と言える。このような低地遺跡を詳細に見て行く事により縄文時代の実像が正しく把握されるのではなかろうか。その意味でも、外塚遺跡について、その重要性を認識して今後の総合的調査あるいは保存にあたってゆくべきであろう。

後　記

外塚遺跡の発掘調査報告書刊行までに調査以来4年もの歳月を費した。責務を果した安堵感がある。ここに至るまでの過程を思い辿るうちに哀愁の感がせまる。発掘調査から報告書の執筆・編集まで陣頭で活動しておられた長岡芳氏を幽冥の地へ見送らねばならなかったからである。記録的な酷暑の続いた昭和59年6月末、外塚遺跡の原稿執筆中倒れた長岡氏は、朦朧とした意識の中で原稿を書かなくてはと言い続けたまま眠りにつき、御家族、同朋の祈りも空しく同年11月1日永逝された。

ここで長岡芳氏の考古学研究について述べておきたい。長岡氏が考古学に興味を持つようになったのは先土器時代の研究で著名な谷島静訓氏と出会ってからと聞いている。谷島氏と伴に先土器時代の遺跡を巡り遺物を収集するうちに考古学の世界に傾倒していったようである。長岡氏の研究上の転換期は、茨城県史編さんのために下館を訪れた佐藤達夫氏（東京大学助教授）、川上博義氏（茨城県歴史館）、川崎純徳氏（茨城県史編さん委員）等の薫陶を受けた昭和46年頃である。鬼怒川、小貝川流域の遺跡を案内しながら、佐藤達夫氏に考古学研究の基礎から教授され、方法論、土器論を学ばれたようである。佐藤達夫氏は県西地区の縄文中期、後期、晩期土器の新資料を発見する中で、長岡氏に安行1式の研究を勧められた。長岡氏は帰京された佐藤氏と通信を交わす中で、先土器文化、縄文文化について学ぶと共に独自の文化論を形成していったようである。佐藤達夫氏が急逝された後、川上氏の紹介で鈴木正博氏に会われ、曾谷、高井東、安行1式土器論を構築していかれた。長岡氏の考古学研究は、謙虚である。安易に報告書を貪る一般研究者と異なり、基本的な研究論文を読破することから出発している。この真摯な研究姿勢が、教職に就く前、そして就いてからの歴史的素養に拍車をかけ、県内屈指の考古学研究者になられた原因ではなかろうか。長岡氏は、縄文後期後葉曾谷式、安行式の研究では県内随一であり土器研究の先頭をきっておられた。長岡氏の研究成果として私達に遺されたものとして、

「茨城県西部における中妻系列微隆帯文土器の類例」『取手と先史文化（下巻）』1976

「茨城県西地方における安行Ⅰ式の分析――下館市大塚遺跡(1)の資料――」『常総台地12』1981

『真壁町史料　考古資料編Ⅱ』編著 1982

などが上げられる。長い間蓄積されていた研究成果を公表し始めたばかりである。長岡氏の研究の深さを知る県内外の考古学研究者の間で、長岡氏の逝去を悼む声が聞こえる。あまりにも早すぎる別れであった。

長岡氏は外塚遺跡のことで終始心を痛めておられた。川崎純徳氏に連れられて発掘調査の打合わせに長岡氏を訪れた時、外塚遺跡発見の経緯や茨城県西部の考古学研究について熱っぽい口調で語られたのがつい昨日のように思える。発掘中はもちろん原稿の執筆に至るまで，私達がやりやすいようにと気を配り、下館在住の編集責任者としての長岡氏の心労は図り知れない。今となっては謝罪するにもしきれない寂寥感と悔悟の念ばかりである。長岡氏が存命であれば、この報告書もより研究的なものとなったはずである。長岡氏の生前採集された遺物は、春子夫人によって下館市に寄贈された。

最後に、本報告書作成にあたっていろいろ御迷惑をおかけした下館市教育委員会並びに印刷を引き受けて下さった精興社に深謝する次第である。

（今橋浩一）

調査会の組織

会長	大和田　政明	（下館市教育長）　S57. 6. 30　退任
	塚越　喜一郎	（下館市教育長）　S57. 7. 1　就任
副会長	中村兵左衛門	（下館市文化財保護審議会長）
	宮本　朔夫	（下館市都市計画部長）　S57. 4. 1　退任
	寺門　弘道	（下館市都市計画部長）　S57. 4. 30　理事退任 S57. 5. 1　就任
理事	小室　雅	（下館市教育委員会参事）　S58. 2. 28　退任
	松井　富三	（下館市教育次長）　S57. 5. 1　就任 S57. 4. 30　退任
	上野　彰	（下館市教育委員会参事）　S59. 5. 1　就任
	大武　康二	（下館市区画整理課長）　S57. 5. 1　就任
	長岡　芳	（学識経験者）　S59. 11. 1　逝去
監事	藤田　洋	（下館市社会教育課長）　S58. 4. 30　退任
	沼尻　明	（下館市社会教育課主査）　S58. 5. 1　就任
	高橋　幾夫	（下館市区画整理課区画整理係長）
事務局	佐竹　富雄	S57. 4. 30　退任
	大和田　文夫	S57. 5. 1　就任
	飯野　隆	S57. 5. 1　就任
	野口　博子	S59. 3. 31　退任
	斉藤　芳枝	S59. 4. 1　就任

調査団の組織

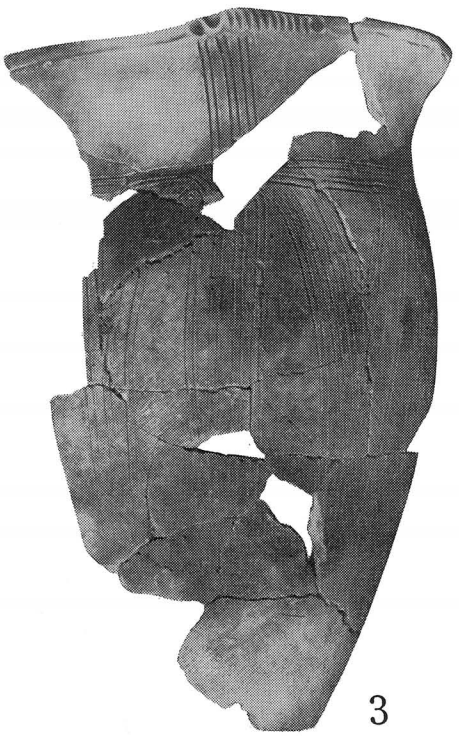
主任調査員	長岡　芳	（真壁町史編さん専門委員）　S59. 11. 1　逝去
調査員	今橋　浩一	（日本考古学協会員・貝塚文化研究会幹事）
	川崎　純徳	（日本考古学協会員・茨城県史編さん専門委員）
	宮内　良隆	（日本考古学協会員・常総台地研究会会員）
	鈴木　加津子	（日本考古学協会員・貝塚文化研究会理事）
	高橋　伸子	（立正大学文学部史学科考古学専攻）
委託研究	大西　智文	（立命館大学大学院地理学修士課程）
石質鑑定	蜂須　紀夫	（教育研修センター研究主事）
写真撮影	大関　浤	（真壁町立樺穂小学校教諭）
調査協力者		
（発掘）	今橋　亮（明治大学）・小森　正明・鈴木　達二（筑波大学）・高松　基子（茨城キリスト教大学）・佐藤　敬信・張替　秀夫（以上下館一高地歴部顧門）・阿久津辰則・海老沢繁元・大岡　俊行・川田　勲・佐藤　理洋・下条　威之	

雫　　勉・雫　　淳一・田崎　愛子・滝田　栄司・手塚　彰一・藤郷ふみ子
塙　　正人・張替　　徹・樋口　綾子・堀川　昌已・山崎圭一郎・若林　裕之
（以上下館一高地歴部）
飯泉　利明・飯泉みよ子・飯泉　和已・飯泉　武久・小島　栄二・高橋　末男
（以上川澄考古学研究会）
市村　雅信・大塚　　昇・杉山　貞雄・添野　正人・戸村　真明・中村　吉和
野沢　良房・星野　真樹（以上下館市都市計画部）
市村　　進・稲葉　助重・上野　正明・木城美名雄・草野　幸良・小林　　清
塩野　隆司・時野谷信夫・中島　靖夫・根本　俊一・福田　博明・谷島　英子
（以上下館市教育委員会）
（土器洗浄）　板橋　うめ・上野　泰子・大島千代治・大島　　芳・岡田為之助・落合正次郎
落合　澄子・小林　　衛・近藤　保平・坂入　春枝・篠崎　正助・篠崎　富佐
篠崎　はる・直井　覚市・中沢　よね・生井　房治・藤間　悌子・谷島　志津
山口　憲一・渡辺　ハナ・渡辺　素好（以上下館市健康大学郷土史クラブ）
（注記および拓本）　飯泉みよ子・飯泉ふさ子・大川喜美子・林　紀美子・渡辺　洋子（以上市民）
中島　雄治・藤田実・若林　健一（以上真壁高校歴史クラブ）

写真図版

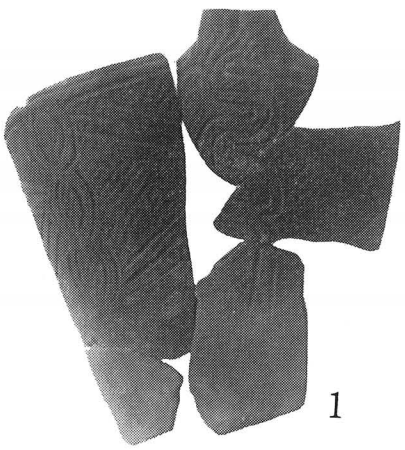
1

2

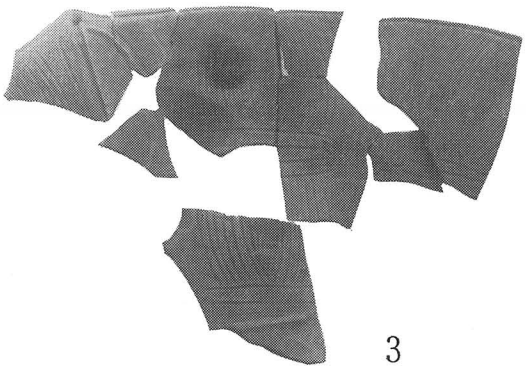

3

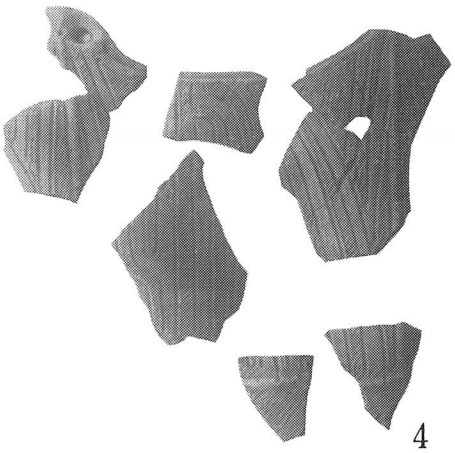
4

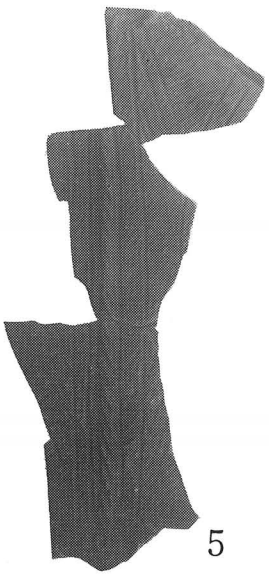
縄文時代後期前葉の土器（1）


1

2

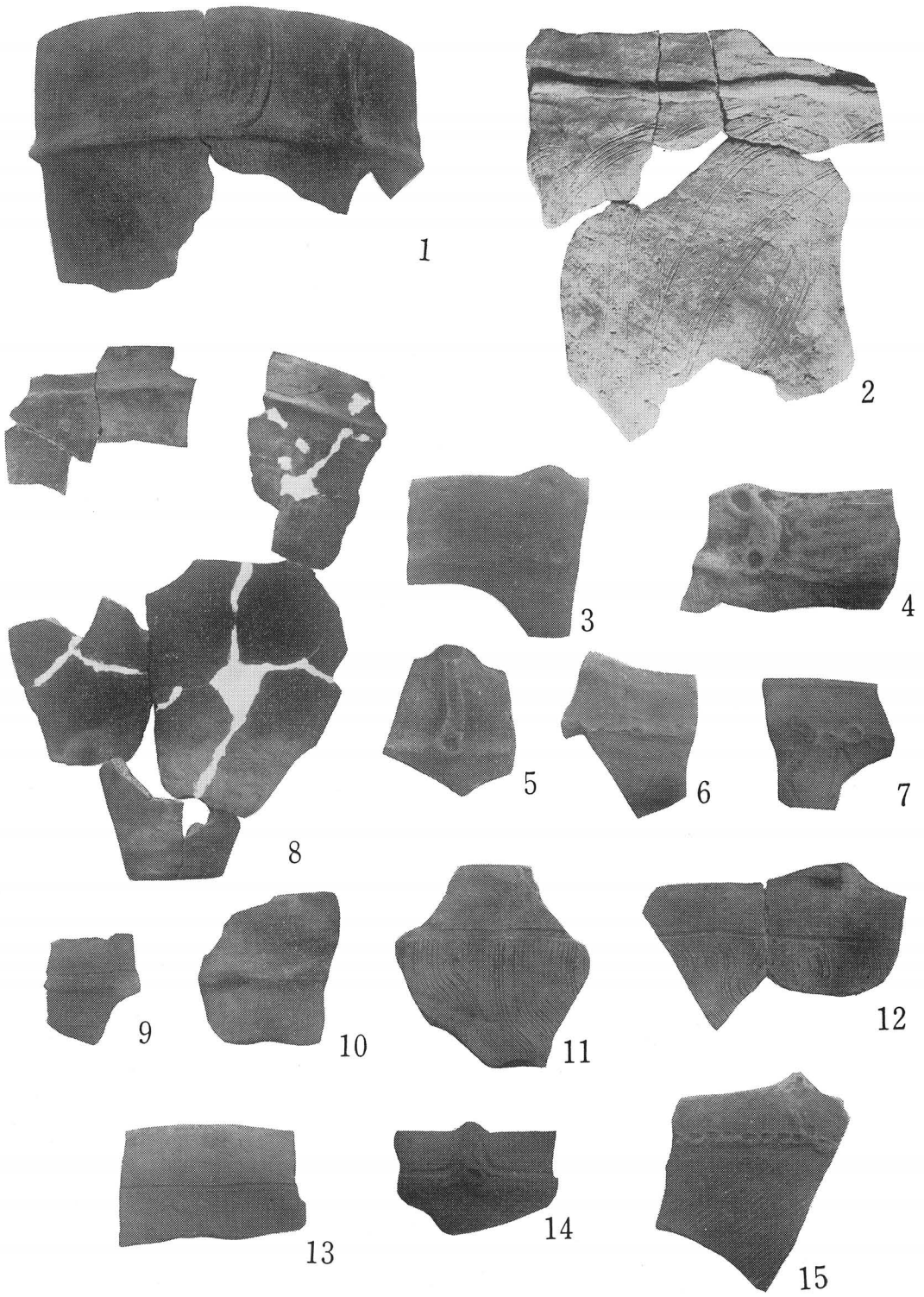

3


4


5

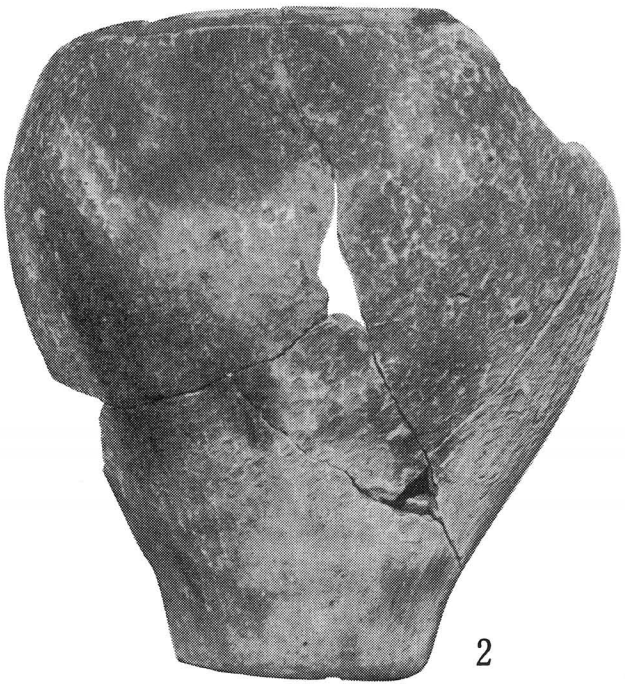
6

縄文時代後期前葉の土器（2）



縄文時代後期前葉の土器（3）

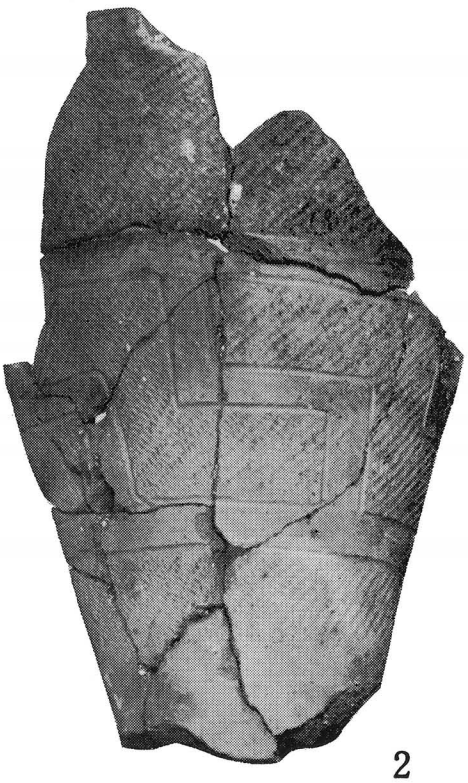
1



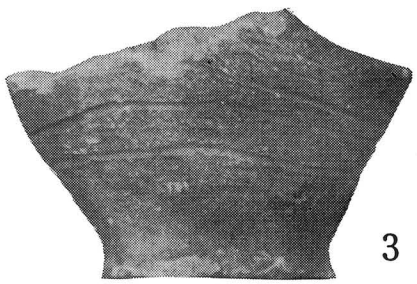
2

縄文時代後期中葉の土器（1）

1



2

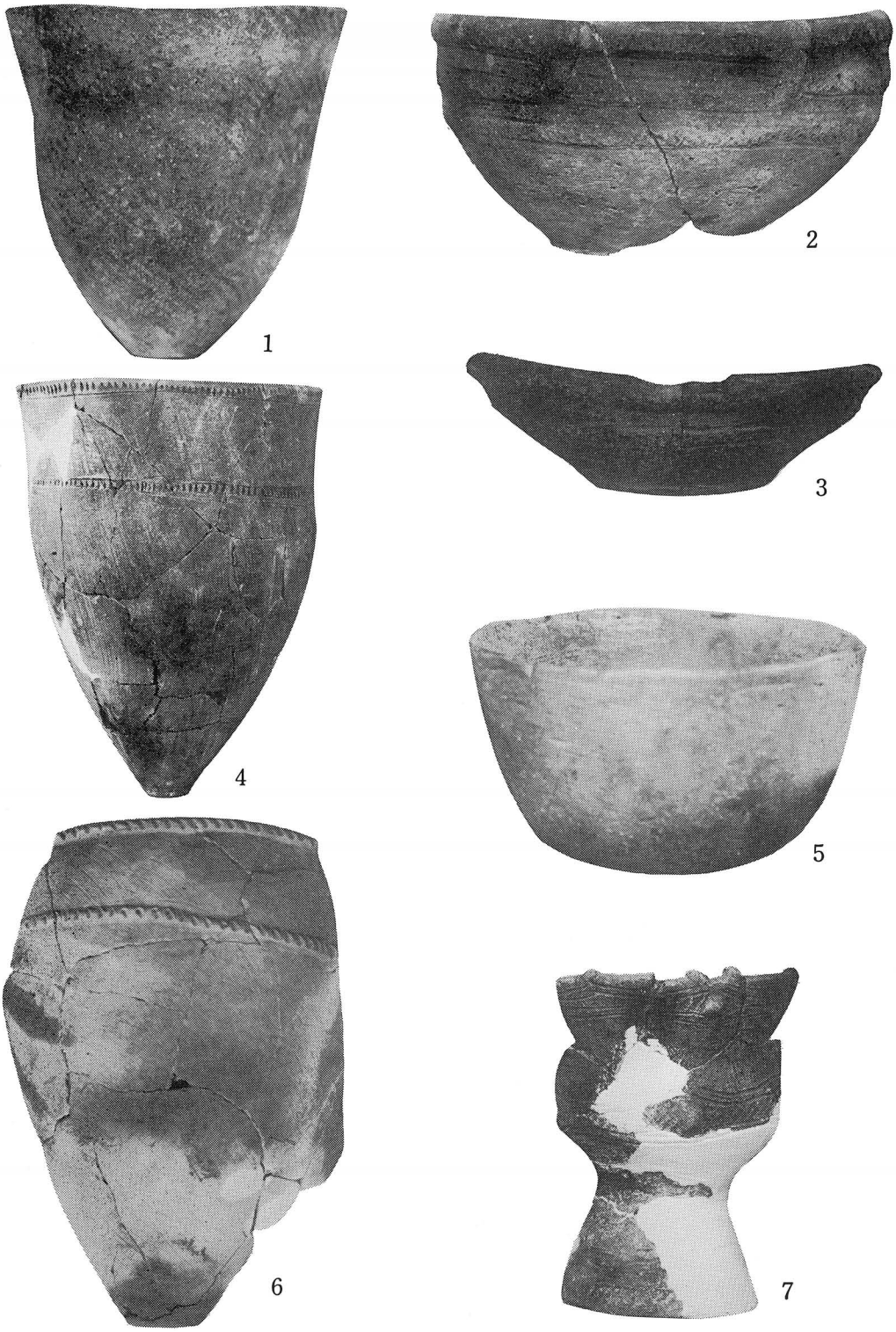


3

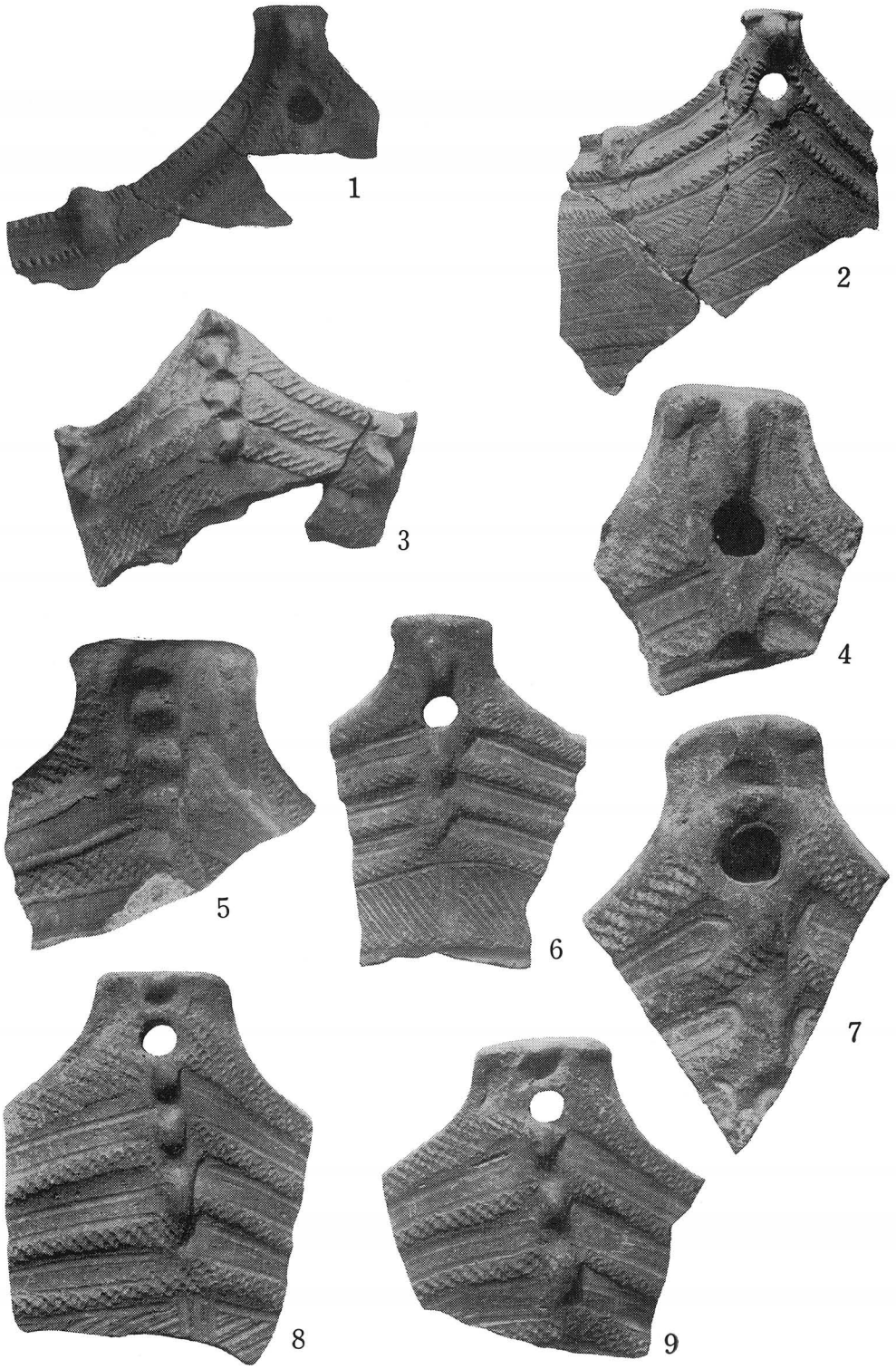
縄文時代後期中葉の土器（2）

縄文時代後期後葉の土器（1）

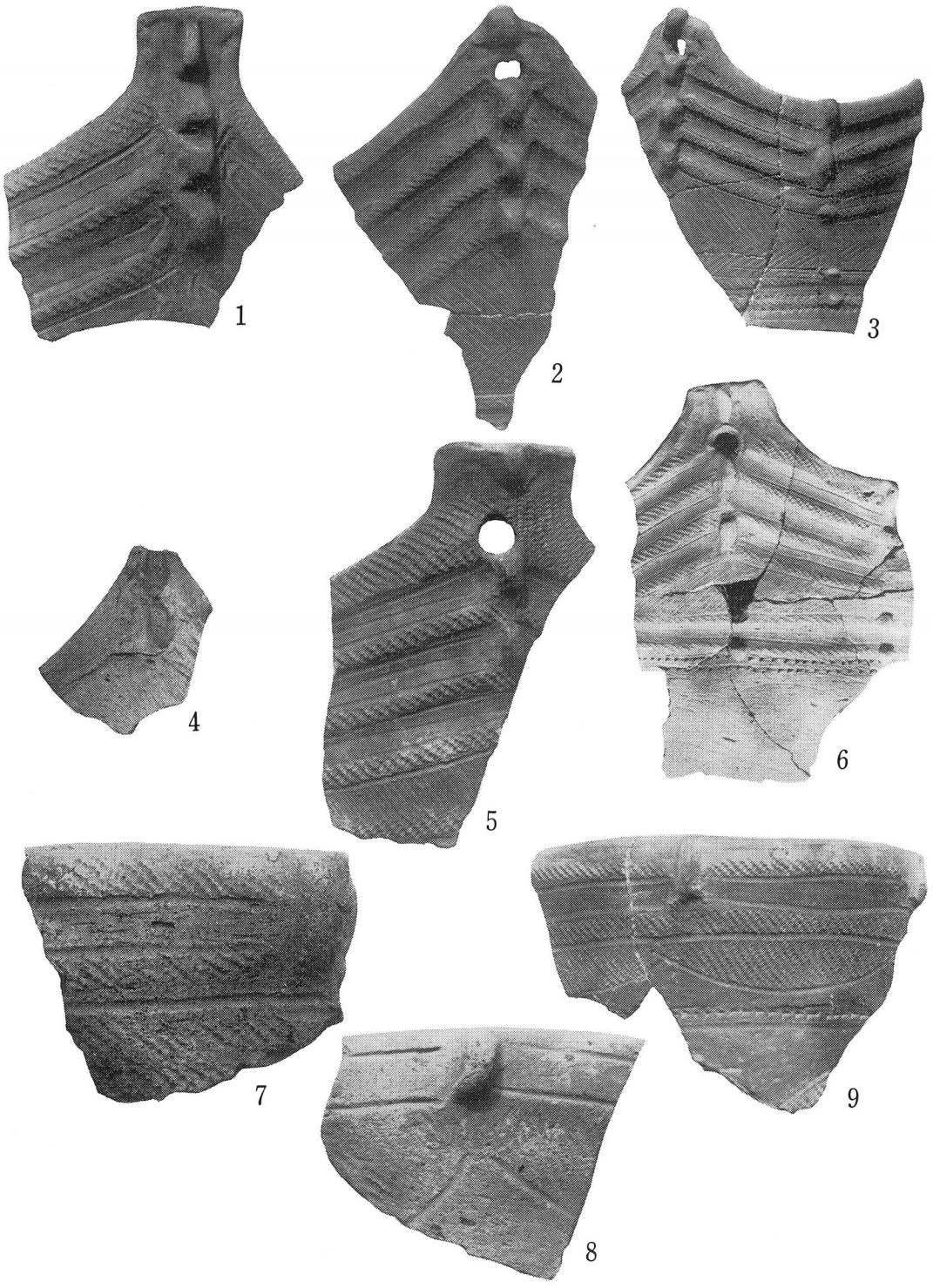
縄文時代後期後葉の土器（2）



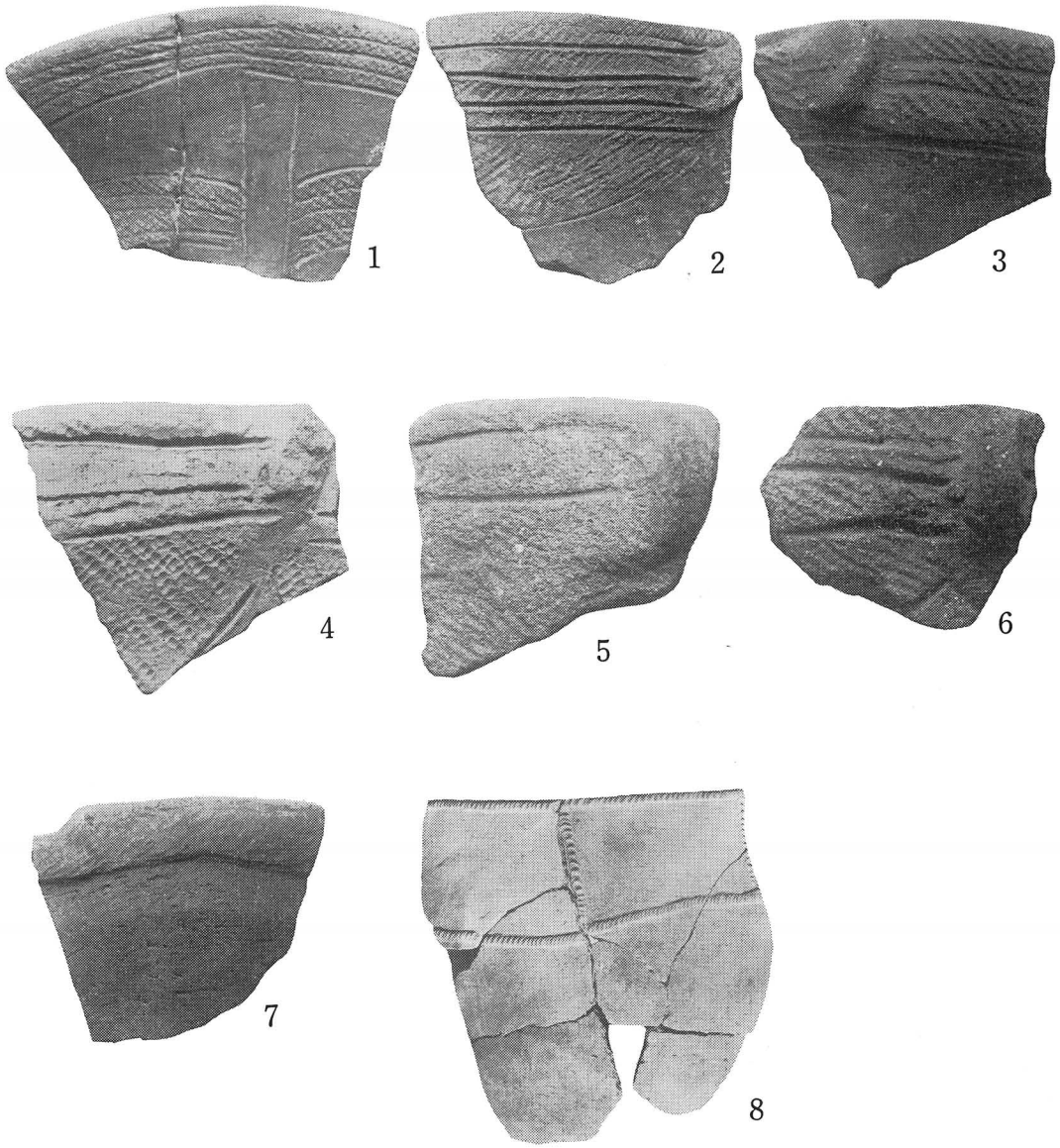
縄文時代後期後葉の土器（3）



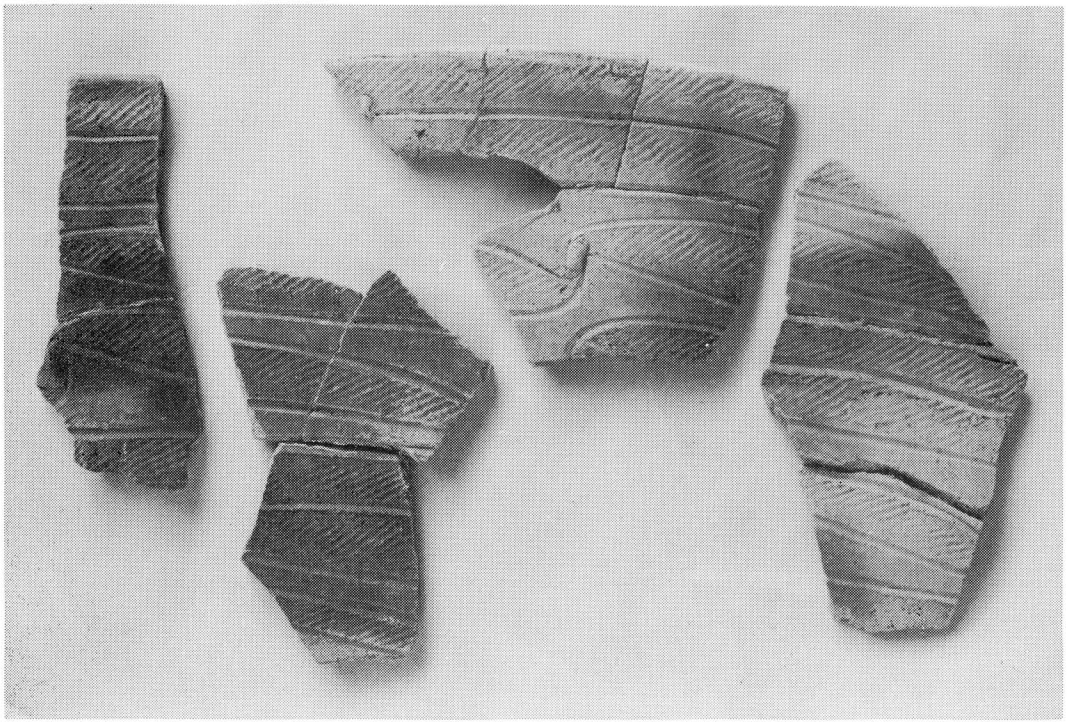
縄文時代後期後葉の土器（4）



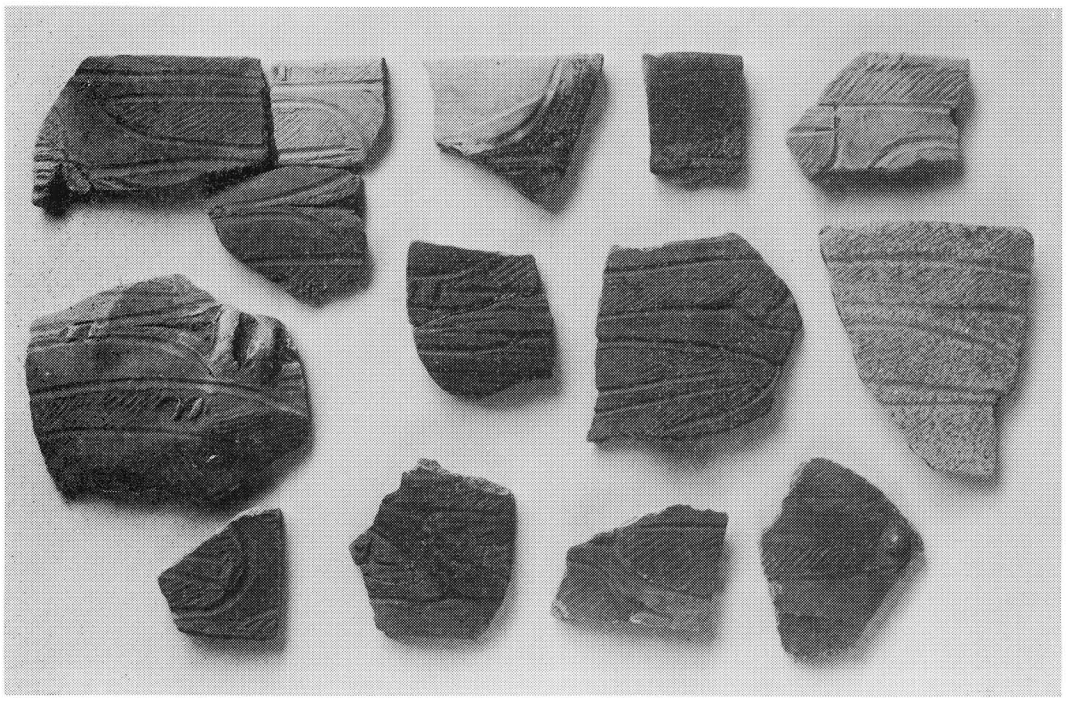
縄文時代後期後葉の土器（5）



縄文時代後期後葉の土器（6）



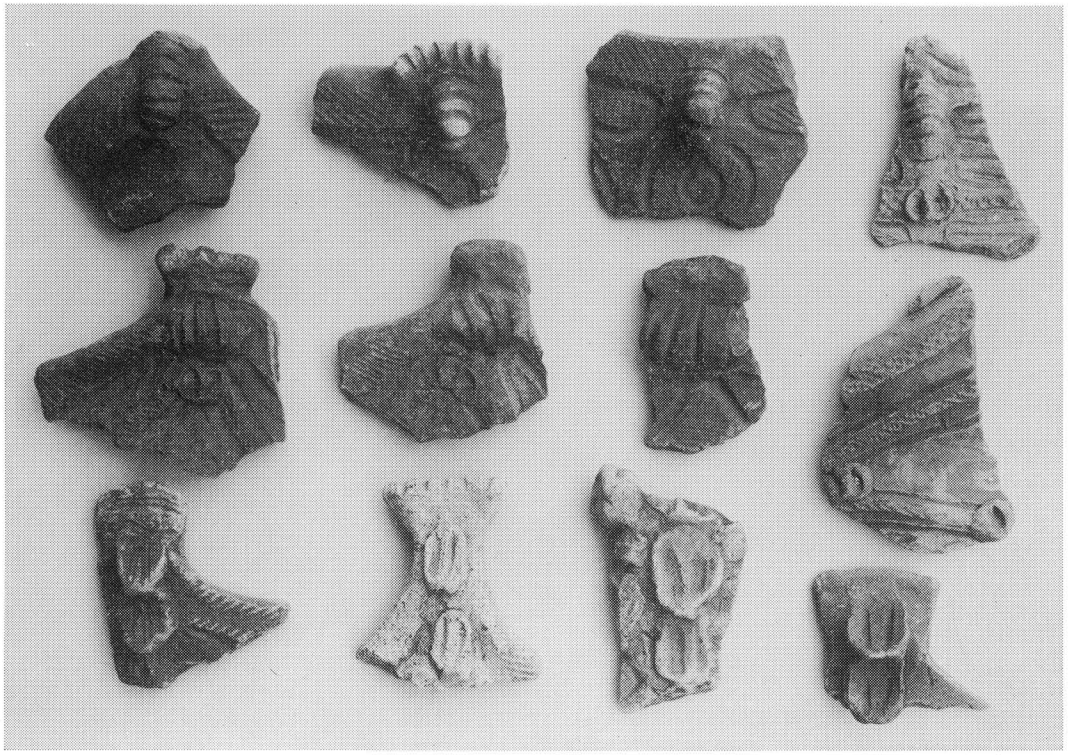
A 区出土寺脇系土器



A 区出土晩期寺脇系土器

A 区出土晩期寺脇系土器

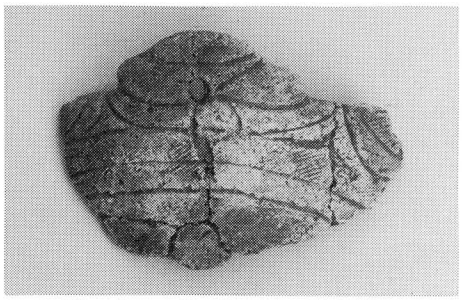
A 区出土晩期寺脇系土器



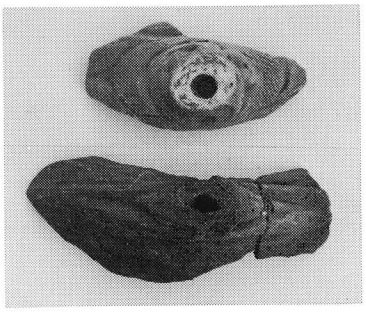
A 区出土晩期安行系土器

A 区出土晩期安行系土器

A区d-2グリッド出土晩期寺脇系土器



A区d-2グリッド出土晩期安行系土器



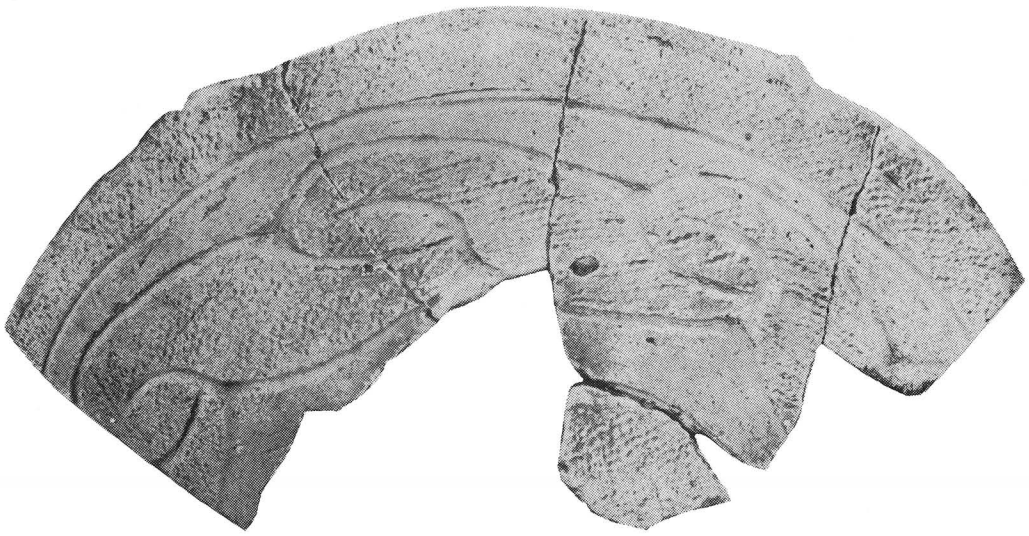
A区出土大洞系土器

A区出土晩期安行系土器

A 区出土晩期安行系土器

A 区出土晩期安行系土器

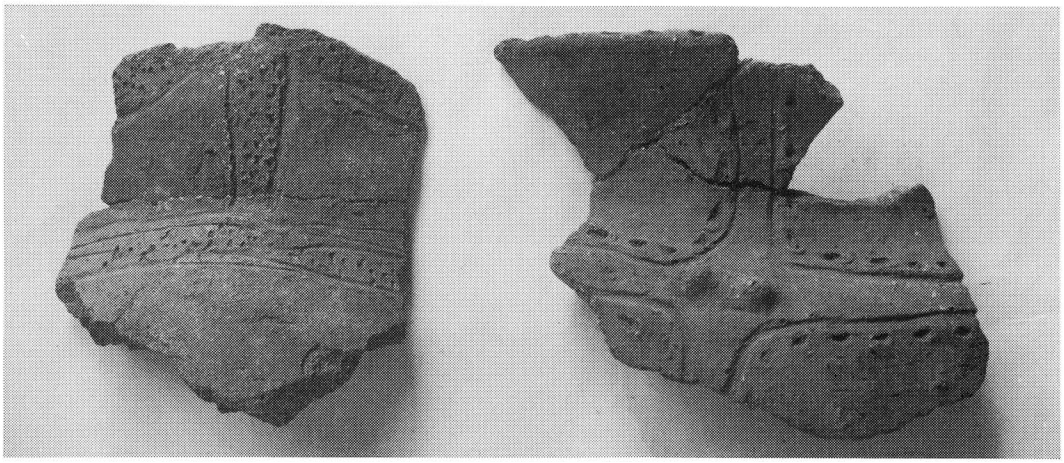
A区a–4グリッド出土晩期安行系土器



A区a–4グリッド出土晩期安行系土器

A区出土晩期安行系土器

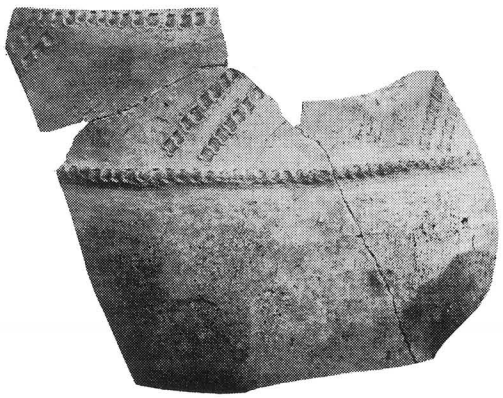
A区出土晩期安行系土器



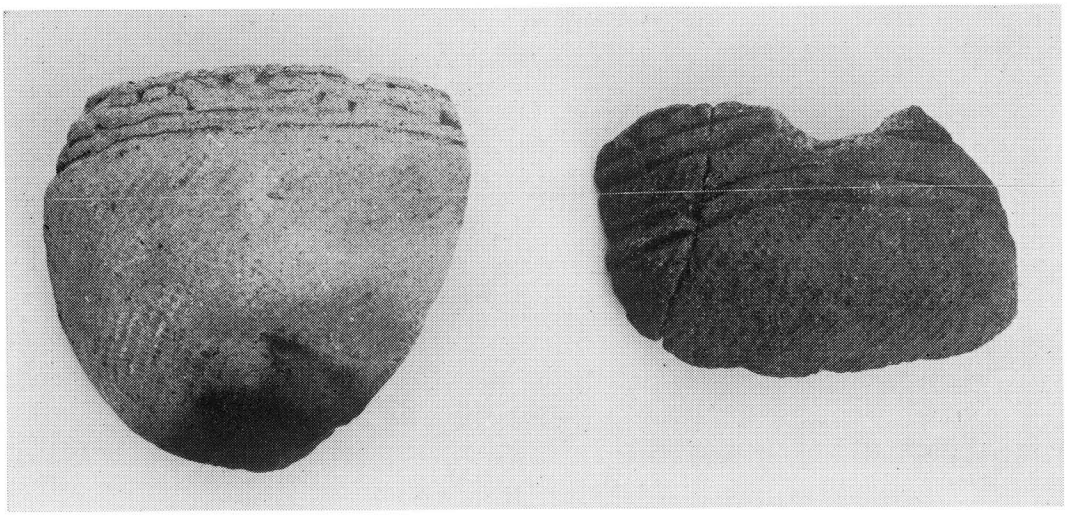
A 区出土晩期安行系土器

A 区出土晩期安行系土器

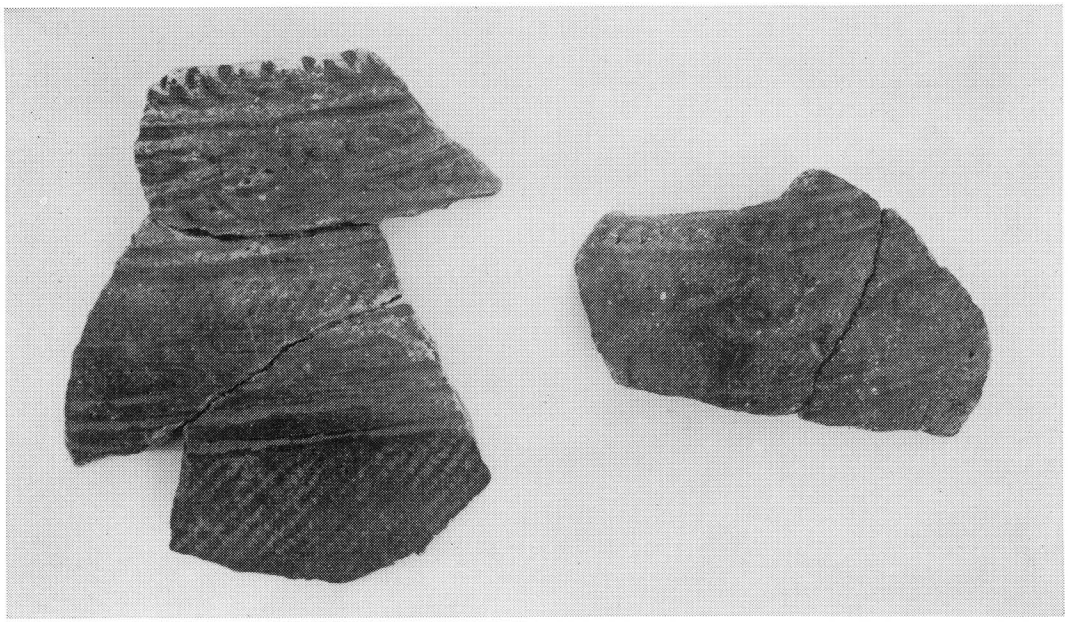
A 区出土晩期安行系土器



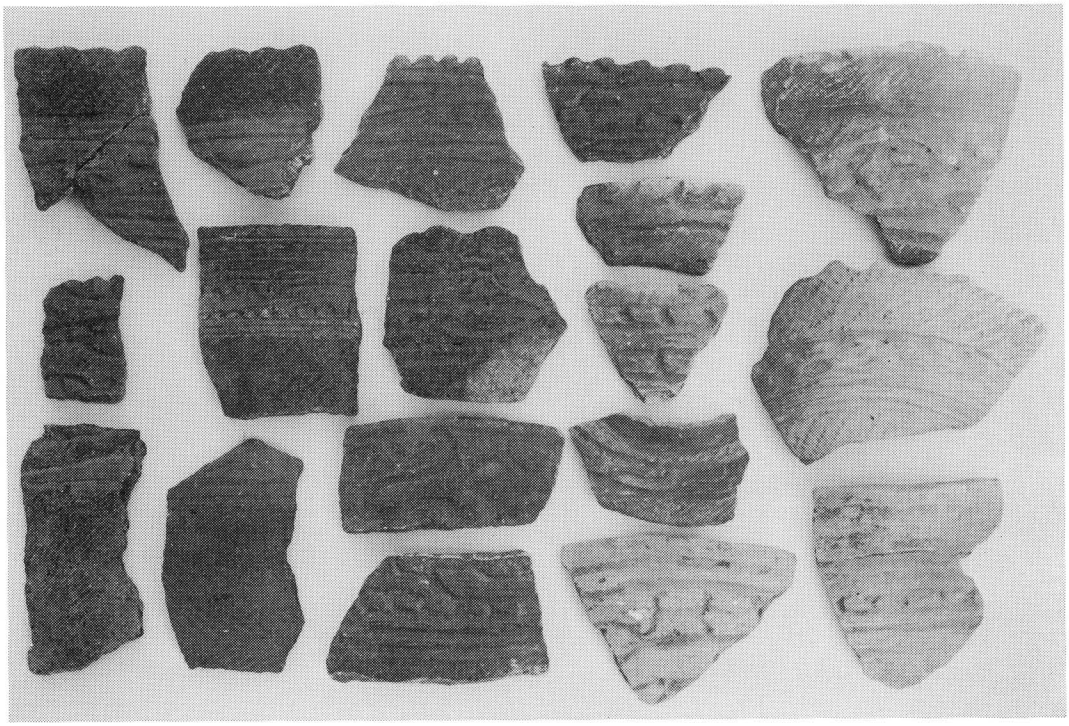
A 区出土晩期安行系土器



A区出土大洞系土器

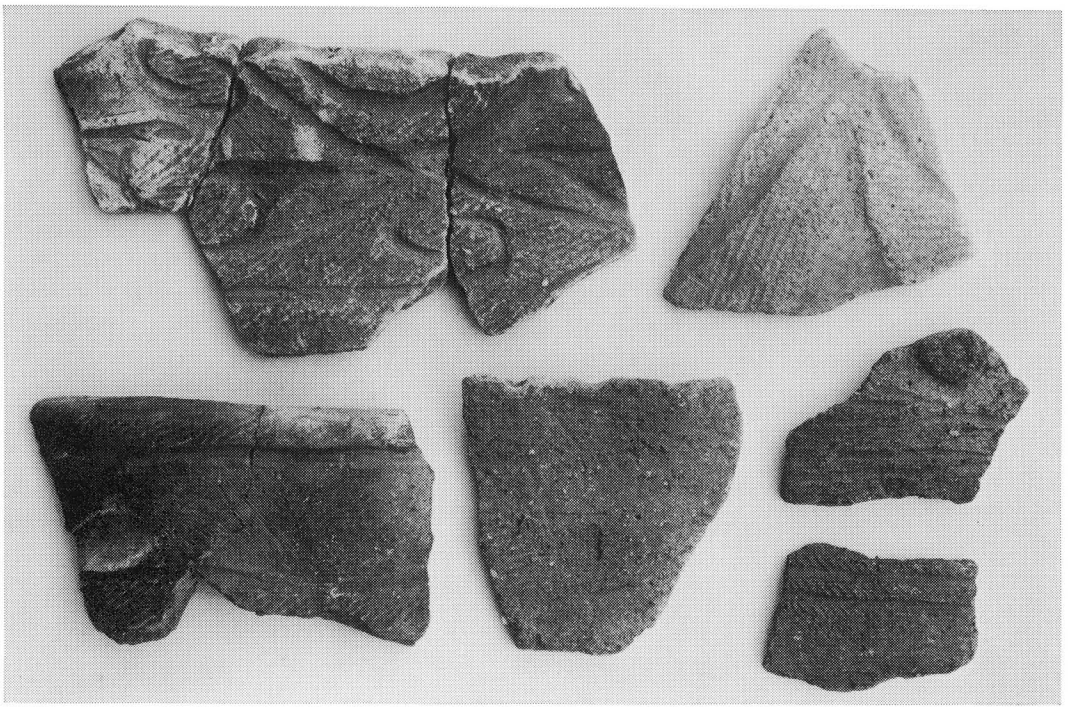


A区出土大洞系土器

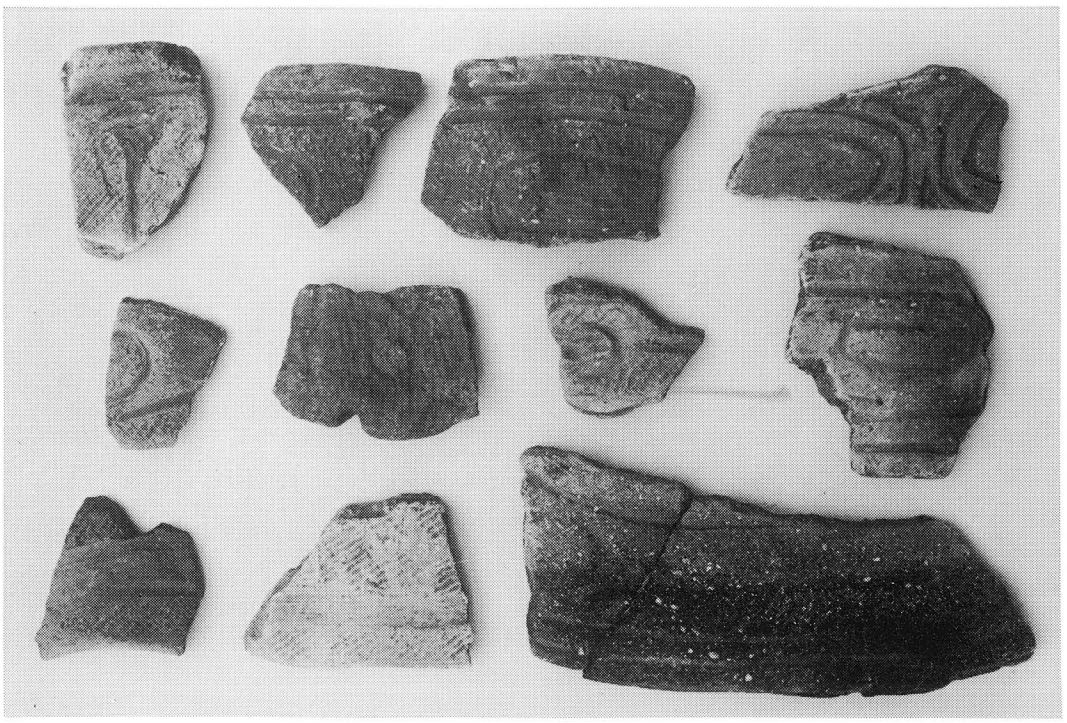


A 区出土大洞系土器

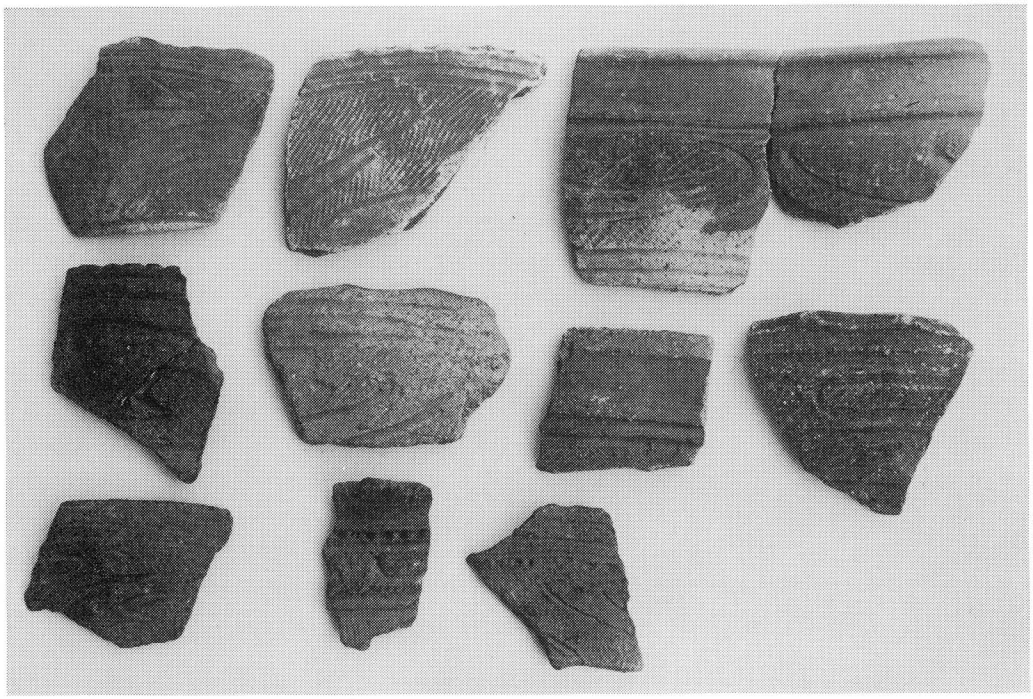
A 区出土大洞系土器



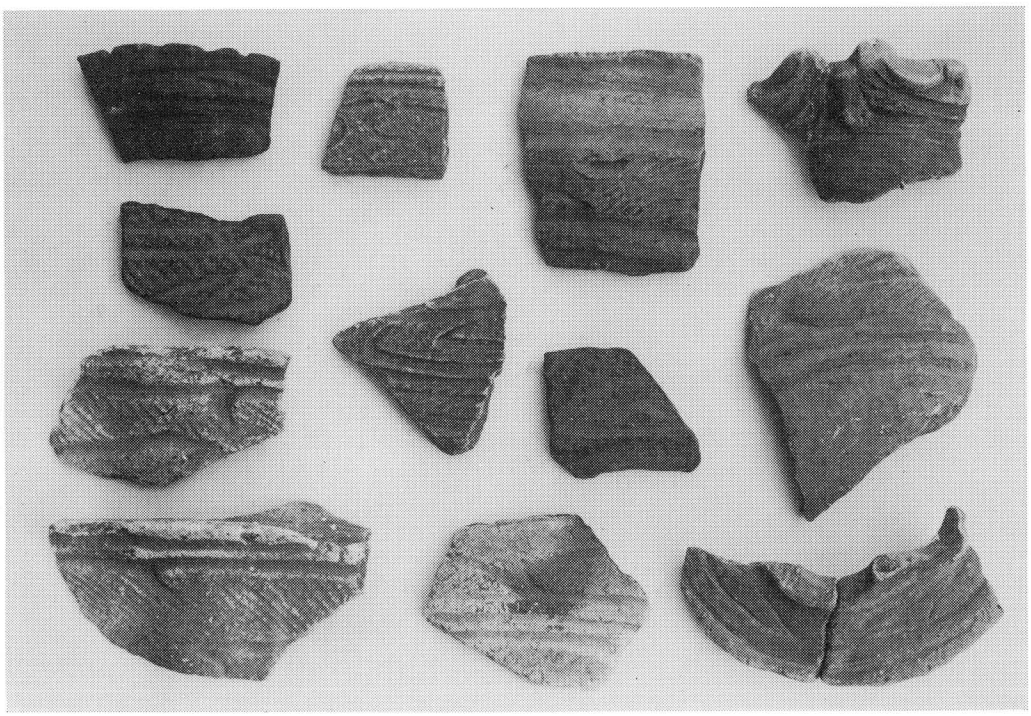
A区出土晩期安行系土器



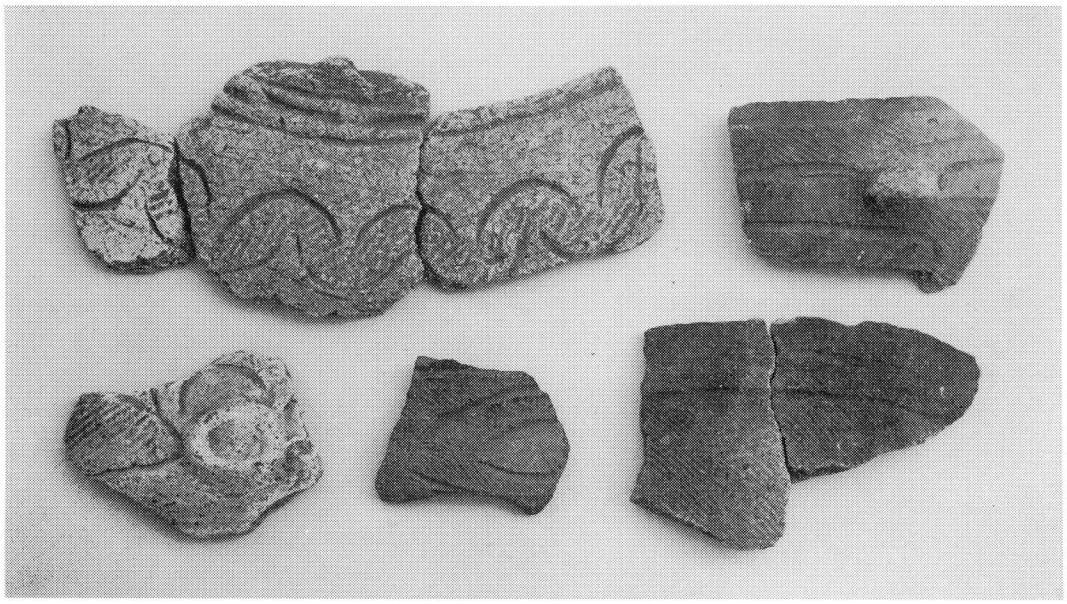
A区出土晩期安行系土器



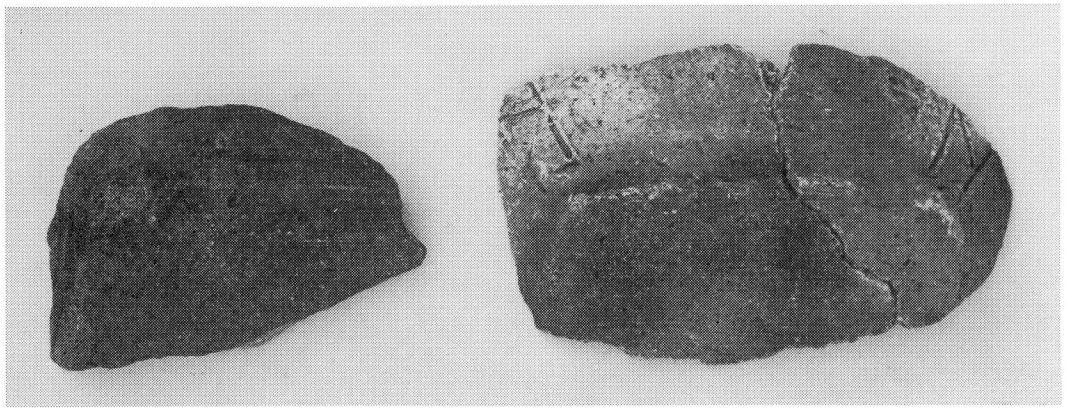
A 区出土大洞系土器



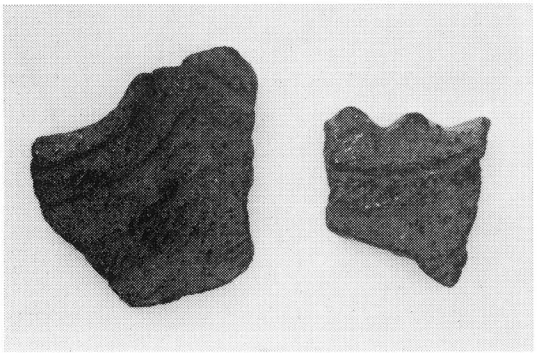
A 区出土大洞系土器



A 区出土晩期安行系土器

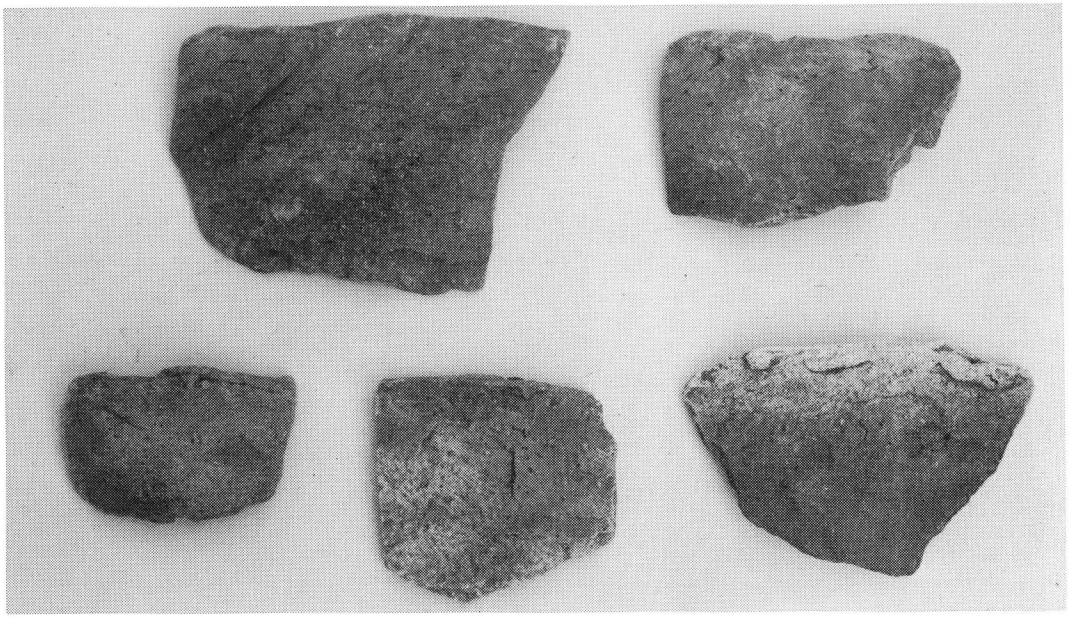


A 区出土晩期安行系土器

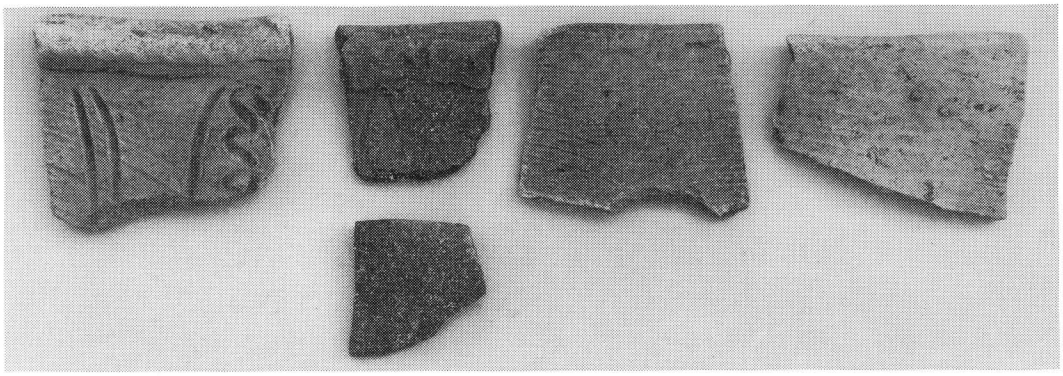


A 区出土晩期安行系土器

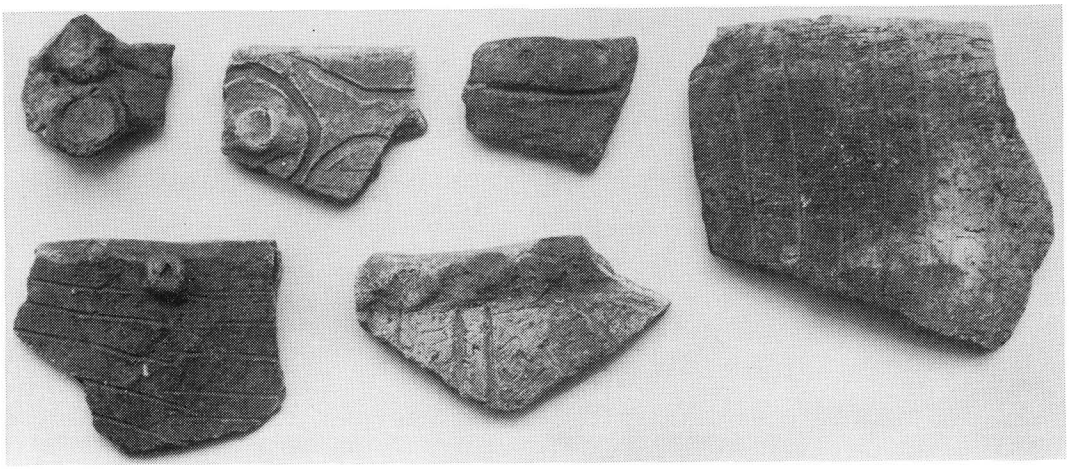
A 区出土晩期安行系土器



A区C-4グリッド出土製塩土器

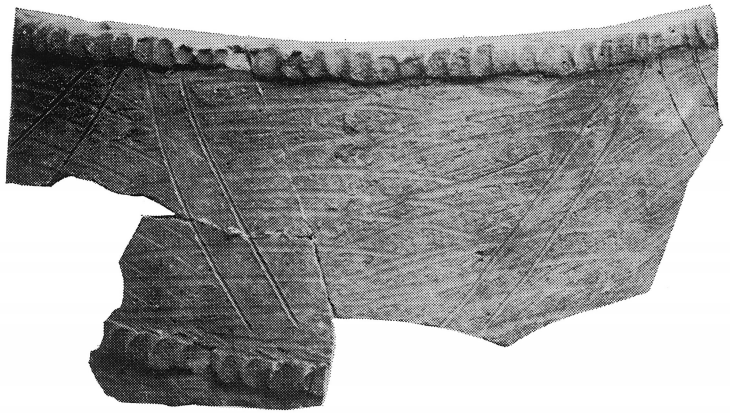


A区出土晩期粗製土器



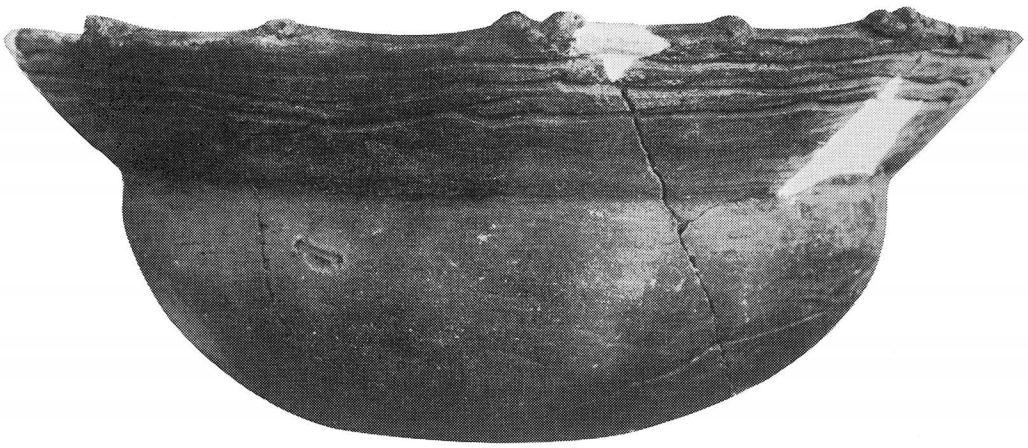
A区出土晩期安行系土器

C 区出土晩期無文粗製土器



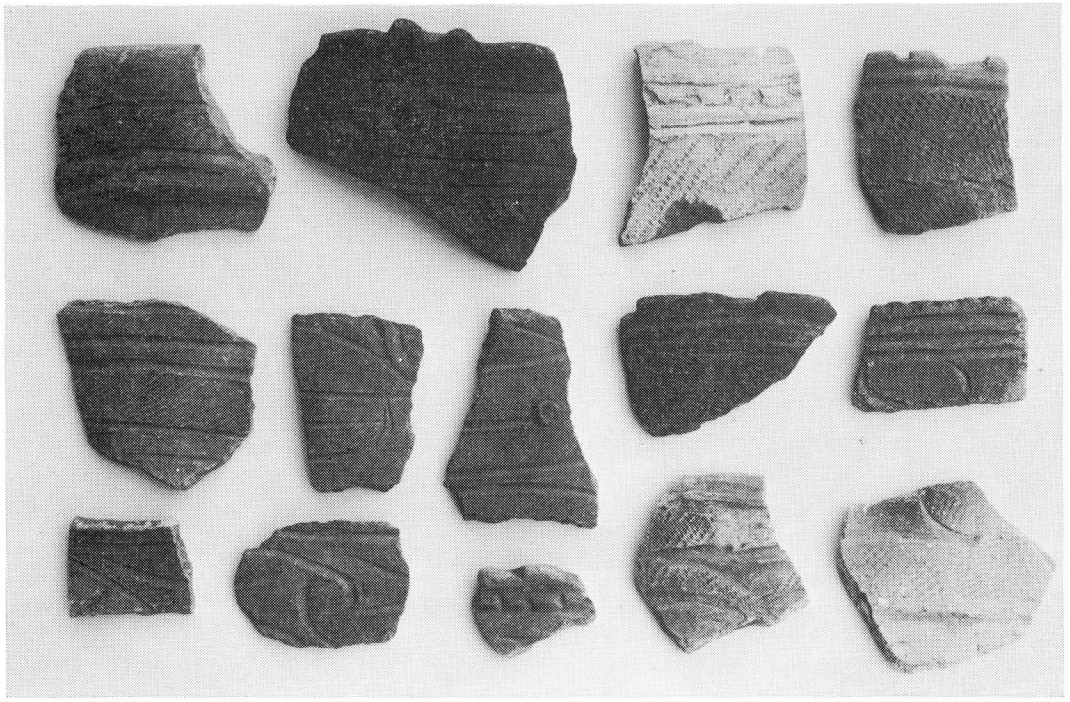
A 区出土晩期安行系粗製土器

A 区出土晩期安行系粗製土器

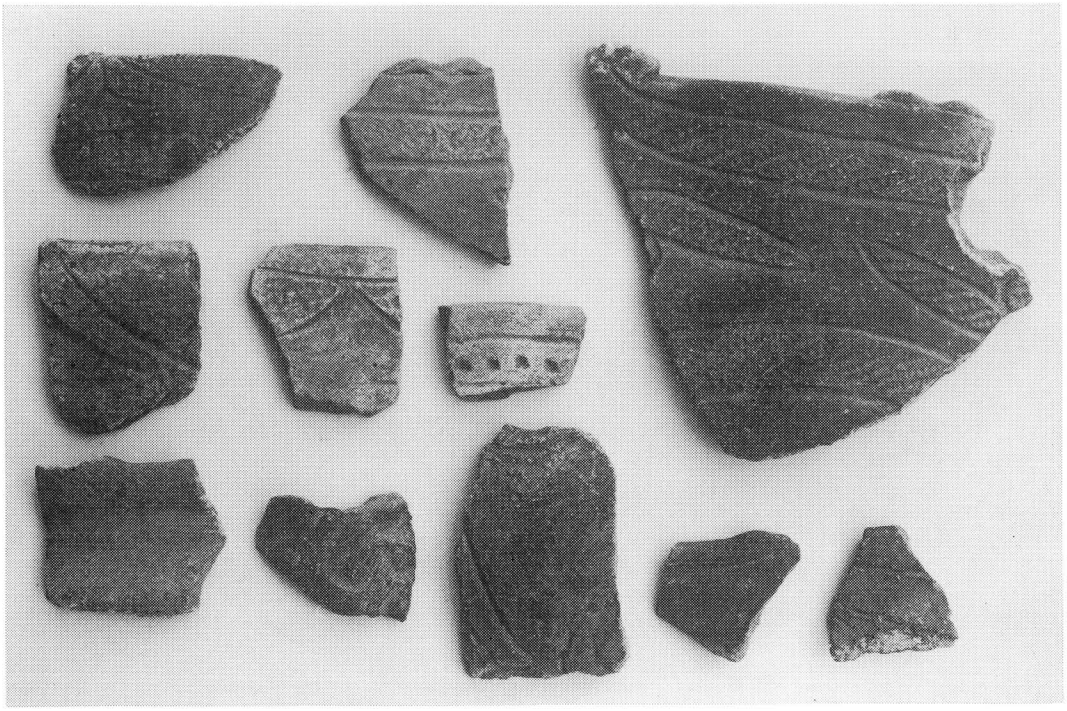


C 区出土晩期安行系土器

C 区出土晩期安行系土器



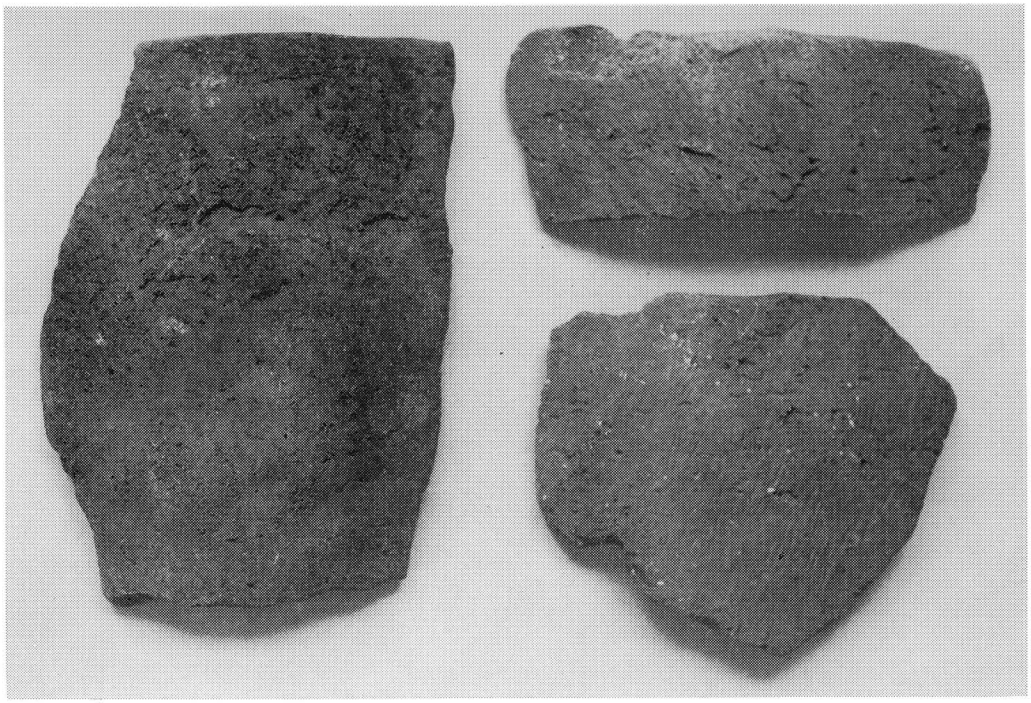
C区出土晩期土器



C区出土晩期土器

A 区出土晩期安行系土器

A 区出土晩期安行系土器



A区出土晩期無文粗製土器

A区出土晩期無文粗製土器

A 区出土晩期無文土器および粗製土器

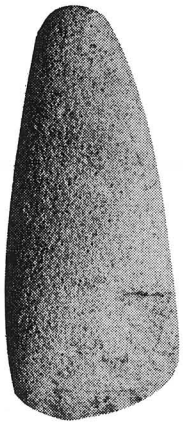
C 区出土晩期粗製土器

写真図版 32

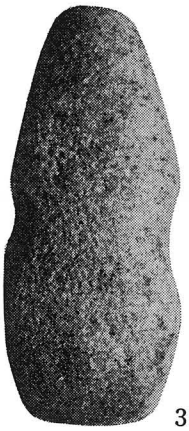
土版・土偶・その他の土製品

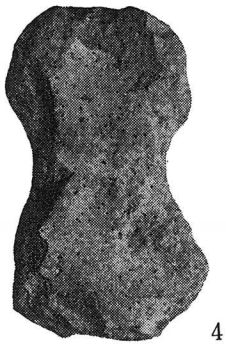
耳栓と腕輪

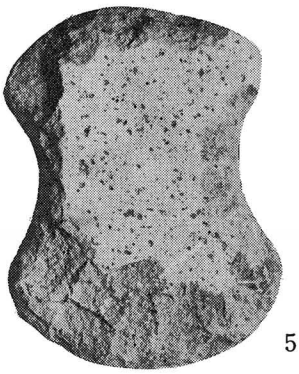
石錘と土製品

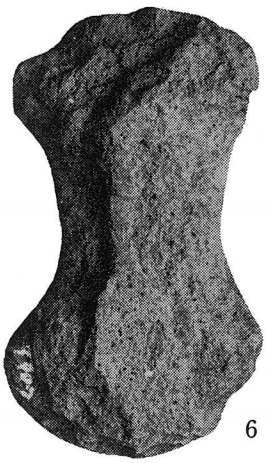

1

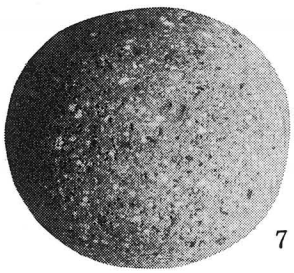
2


3

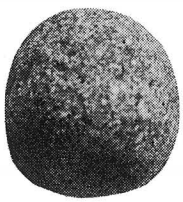

4

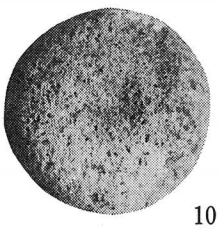

5


6

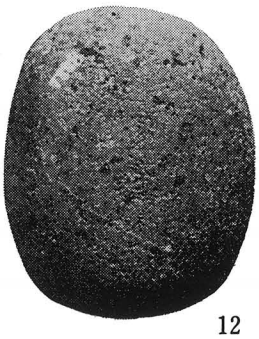

7

8

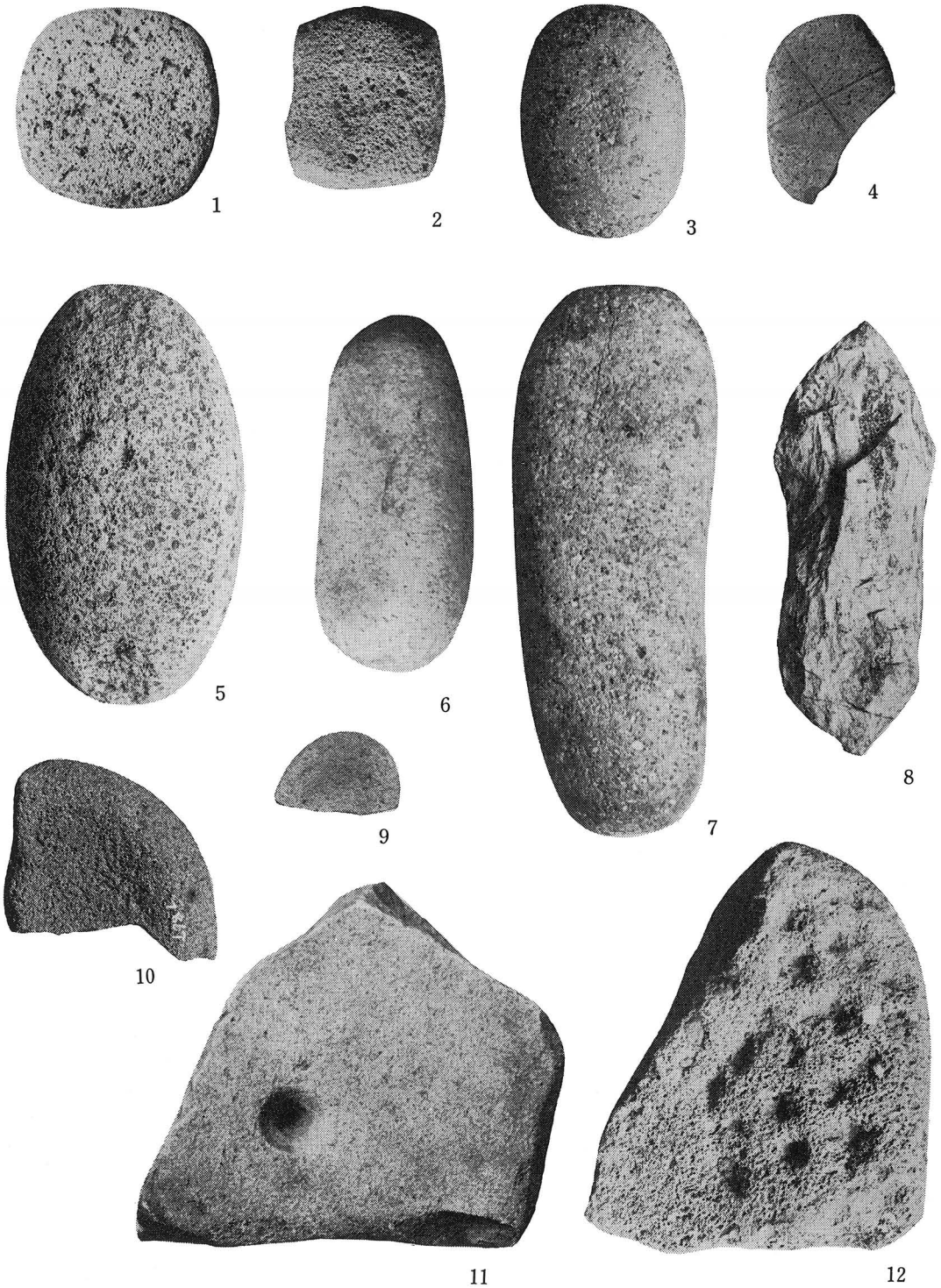

9


10

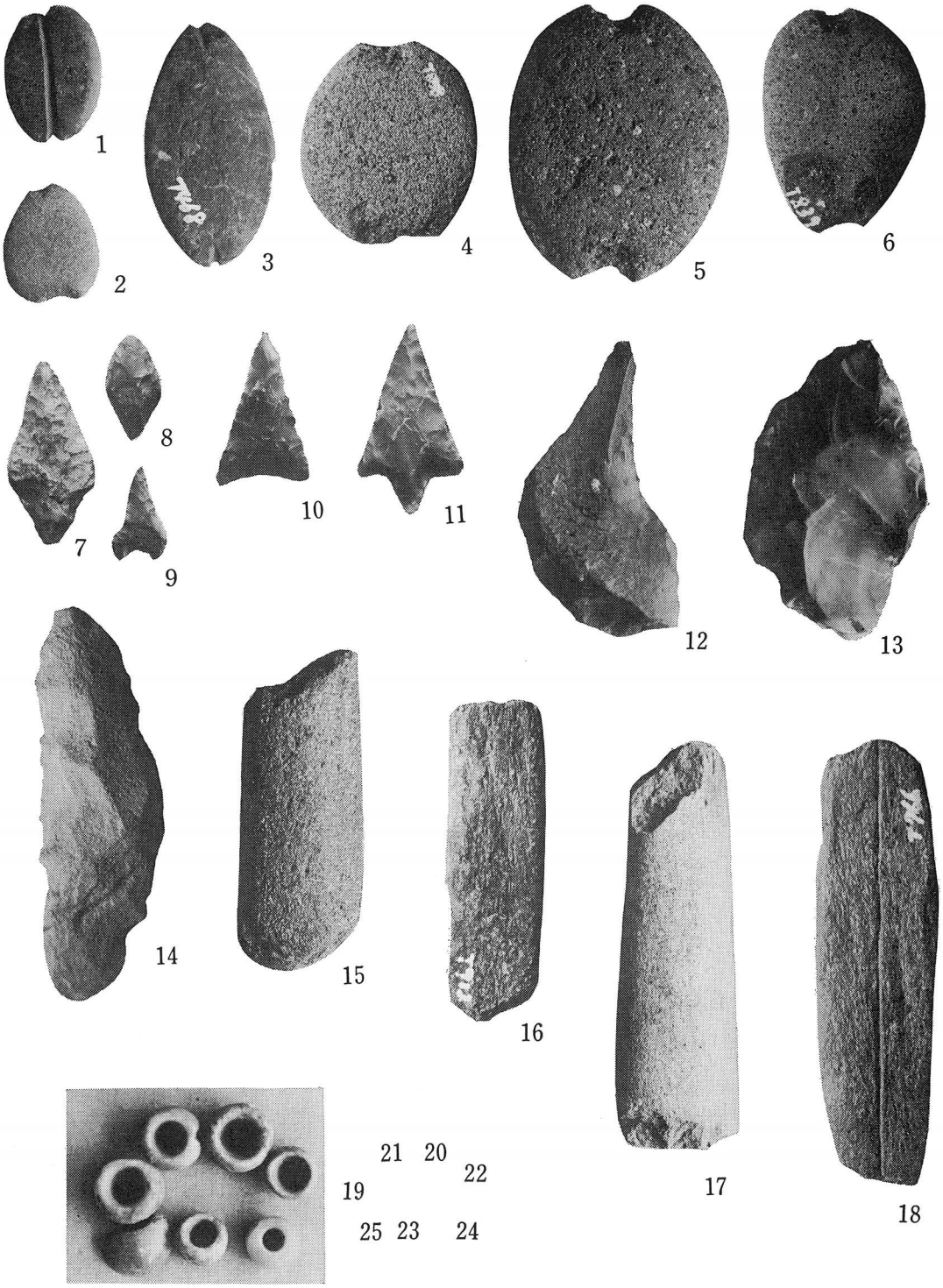
11


12

磨製石斧・独鈷石・打製石斧・磨石・敲石・凹石



磨石・敲石・凹石・石皿・石製品



石錘・石鏃・剝片・石匙・石棒・石剣・小玉

外 塚 遺 跡

昭和60年3月 1 日　印刷
昭和60年3月31日　発行

編　集　　外塚遺跡調査会
発　行　　下館市教育委員会
　　茨城県下館市田中町丙192の1
印　刷　　株式会社　精　興　社
　　東京都千代田区神田錦町 3-9